大仁町埋蔵文化財調査報告 第9集

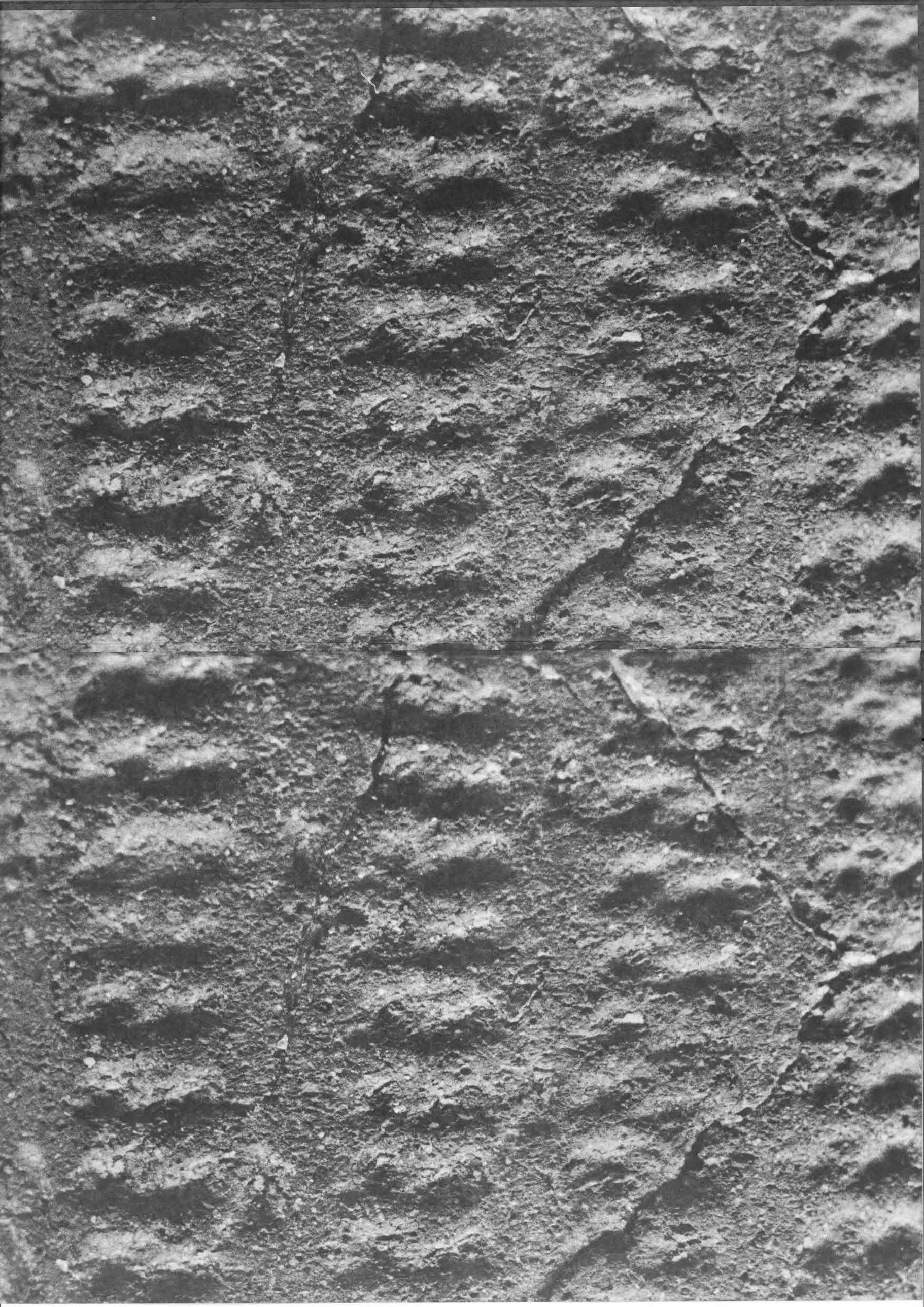
仲道A遺跡

昭和54年度（第Ⅰ次調査）　昭和58年度（第Ⅱ次調査）

―伊豆における縄文時代草創期後半・多縄文系土器群出土の遺跡―

1986

静岡県大仁町教育委員会



仲道A遺跡

1986

静岡県大仁町教育委員会

巻首図版 1

半置半転文土器　　復元者　可児通宏氏

巻首図版 2

側面圧痕文土器　　復元者　可児通宏氏

巻首図版 3

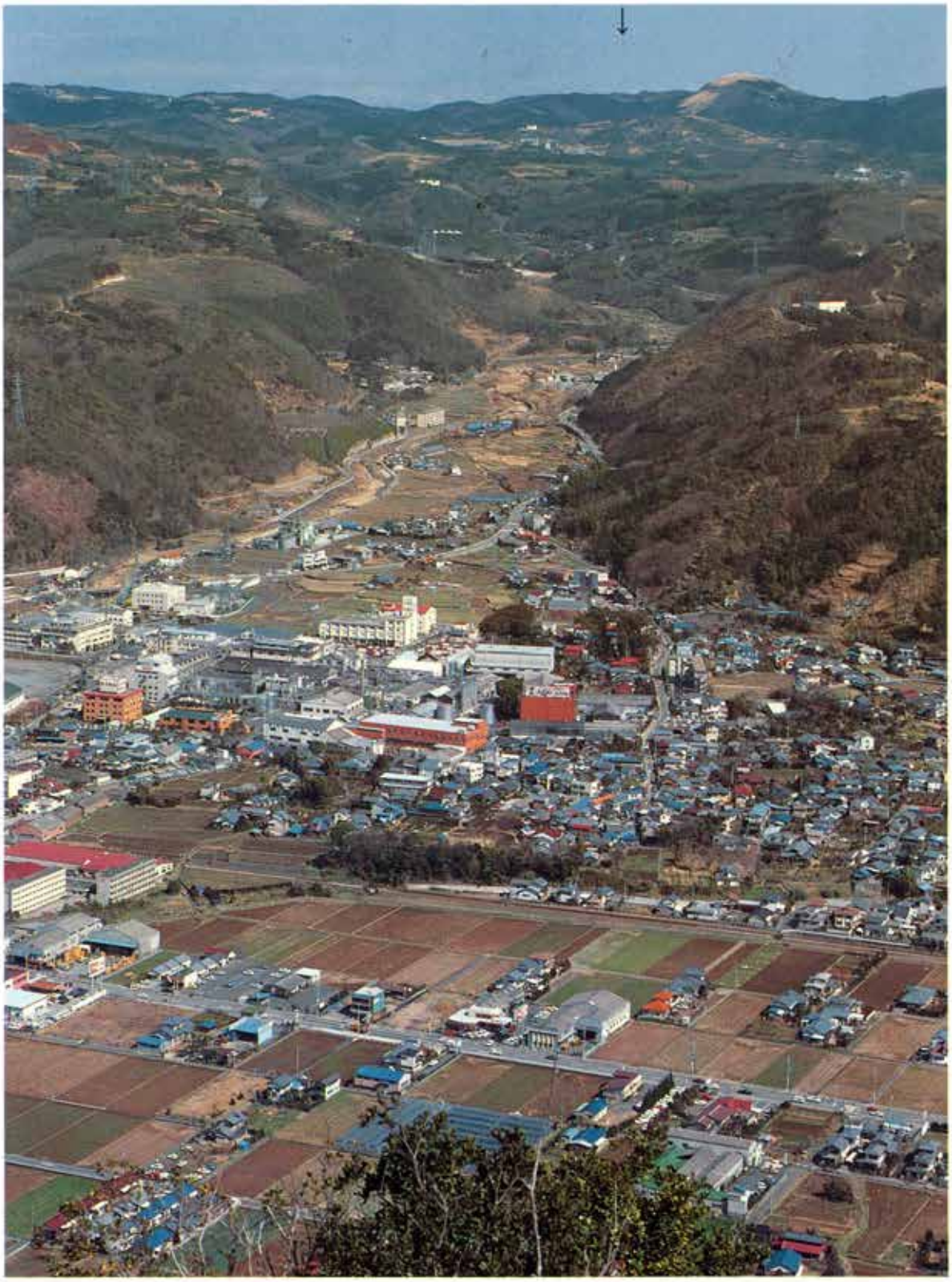
Ⅰ群・Ⅱ群1・2・4・6類

巻首図版 4

釣手形土器

深鉢形土器

巻首図版 5



仲道Ａ遺跡の遠景・中央の森 ― 城山々頂(西方)より

巻首図版 6

仲道Ａ遺跡の近景・手前 ― 龍源院（南東方）より

序　　文

大仁町仲道A遺跡は、明治・大正・昭和の三代にわたり考古学界の大先達によって調査研究が行われ、各誌に広く紹介されてきた遺跡であります。本遺跡は、狩野川の一支流をなしている深沢川の段丘上に位置し、その面積は約16,000㎡におよぶもので、当町に数多く存在する遺跡の中にあっては、その規模の上からあるいは遺物量の豊富さなどから見ても屈指の大遺跡であります。

昭和58年6月末から3ヶ月を要した発掘調査は、当町の埋蔵文化財調査としては長者ヶ原の大平遺跡群に次ぐ大事業でありました。昭和54年に続く本格的な調査となり、凡そ1,000㎡が対象となりました。その結果、実に多くの貴重な資料が得られました。

先土器時代～近世にかけての多種多様な遺物が発見されましたが、特筆すべきは何んと言っても縄文時代草創期後半の多縄文系土器が1,300点余り見つかった事でありましょう。これは、現在の所県内最古と言われ、我が国縄文文化研究に寄与する事大と信じます。とりわけ、可児通宏先生によって復元された半置半転文土器と側面圧痕文土器は前例のない資料として注目されております。

この他、縄文時代中期中葉～終末の住居跡（第6号住居跡と呼んでいる敷石住居跡は当町では初の発見）や土坑、平安時代末期～鎌倉時代初頭と推定される方形竪穴住居跡や土坑、同時期の河川跡、須恵器やかわらけ、陶磁器類、鉄製品など多くの遺構・遺物が見つかりました。中世の遺物について言えば、三島大社文書等に見られる「狩野庄三福郷」の所在地解明への糸口として、一石を投ずるものになるかも知れません。

最後に、縄文時代草創期の遺物について御多忙の中終始暖かい御指導を頂いた諸先生方を始め、発掘調査・遺物整理・報告書作成にあたられた方々に深く感謝を申し上げて序文と致します。

昭和61年3月1日

大仁町教育委員会

教育長　高　橋　利　男

例　　言

1．本書は、静岡県田方郡大仁町三福字仲道674～677、680～685－1番地に所在する「仲道A遺跡」の昭和54年度（第Ⅰ次調査）、昭和58年度（第Ⅱ次調査）の発掘調査についての報告書である。

2．発掘調査は、大仁町教育委員会が主体となりこれを実施した。調査は秋本真澄の助言のもとに漆畑　稔が担当し、鍵山一郎の協力を得た。

3．第Ⅰ次調査は三福区より、また第Ⅱ次調査は東洋醸造よりそれぞれ埋蔵文化財に対する深い理解と多大な協力を頂いた。

4．調査期間　予備調査　（昭和54年2月11日～13日）
　　第Ⅰ次調査　（昭和54年6月5日～7月15日）
　　第Ⅱ次調査　（昭和58年6月28日～9月30日）

5．本書の執筆分担は次のとおりである。

漆畑　稔　第Ⅰ章第1節・第2節、第Ⅱ章第1節～第3節、第Ⅲ章1の項、第Ⅳ章第1節1～3の項、第2節1～3の項、第3節1～3の項、4の項a、5の項、第Ⅴ章、第Ⅶ章

鍵山一郎　第Ⅲ章2・3の項、第Ⅳ章第1節1の項、第2節1の項、第3節1の項

渋谷昌彦　第Ⅳ章第2節2の項b－イ、第3節3の項b－イ、第Ⅴ章

鳥海嘉奈子　第Ⅳ章第2節2の項a－イロ、第3節3の項a－イロ、b－ロ、4の項a－イロ

秋本真澄　第Ⅳ章第3節4の項b－イロハニホ

原川雄二　第Ⅳ章第3節2、3の項b－ロ

渡辺康弘　第Ⅳ章第3節4の項b－ヘ

勝又裕代・碓井恵美子　第Ⅳ章第2節2の項b－ロ、第3節3の項b－ロ

＊　第Ⅵ章・特論　1．小野真一　大仁町仲道A遺跡出土土器をめぐって
　　2．可児通宏　2個体の復元土器について
　　3．増島　淳　鉱物組成から見た仲道A遺跡出土土器について
　　4．瀬川裕市郎　仲道A遺跡の土器の作製地をめぐって

6．文体の統一および総括的編集・校正は漆畑が行い、秋本・鍵山がこれを補佐した。

7．遺物の整理・各実測図のトレース・拓本等の作業は、秋本の指導のもとに漆畑、鍵山の他鳥海嘉奈子、勝又裕代、山下静子、碓井恵美子、木崎貞子が行った。また、写真撮影については漆畑が行った。

8．縄文時代草創期の半置半転文土器、側面圧痕文土器の復元は可児通宏氏にお願いした。

9．先土器時代および縄文時代草創期・早期の石器については、舘野　孝氏、原川雄二氏を主として橋本勝雄氏、松井一明氏の協力を頂いた。

10．縄文原体の分析については渋谷昌彦氏の協力を頂いた。

11．草創期土器の胎土分析は増島淳氏にお願いした。

12．鉄製品については渡辺康弘氏の協力を頂いた。

13．本書に係る出土品、図面等はすべて大仁町教育委員会で保管している。

＊　調査体制は次のとおりである。

予備調査・第Ⅰ次調査

調査主体者	大仁町教育委員会　教育長　堀江三郎　社会教育課長　土屋長一 野沢俊英、上野泰英、内田英夫、矢田正仁、佐藤智恵美、塩谷由美子
調　査　員	漆畑　稔　日本考古学協会会員・大仁町文化財保護審議会委員
調　査　員	鍵山一郎　静岡県文化財巡回調査員・土肥町文化財保護審議会委員
調査指導者	秋本真澄　日本考古学協会会員・加藤学園考古学研究所所員
参　加　者	梅原邦一、立田伸子、渡辺まさ子、高橋よし子、泉　輝子、中原圭子、若城くみ子、井上秀子、石井まさ江、三田テル子、三田カヨ子、小原はるえ、沢木三之、松川ヒデ、菊田花子、近田つじ、西島みつえ、漆畑裕江、山口弘美、小坂義雄、石井　巧

第Ⅱ次調査

調査主体者	大仁町教育委員会　教育長　土屋憲次　社会教育課長　土屋長一 野沢俊英、内田英夫、牧野　博、浅野正観、菅沼昇志子、鈴木一郎、上野泰英、相原隆美、塩谷由美子
調　査　員	漆畑　稔　日本考古学協会会員・大仁町文化財保護審議会委員
調　査　員	鍵山一郎　静岡県文化財巡回調査員・土肥町文化財保護審議会委員
調査員補佐	鳥海嘉奈子　駿豆考古学会会員
調査補助員	勝又裕代、美崎陽子、山下静子、碓井恵美子
調査指導者	秋本真澄　日本考古学協会会員・加藤学園考古学研究所所員
参　加　者	梅原邦一、菊田要次郎、山谷周助、荻野正行、小坂義雄、菊田花子、松川ヒデ、相川はな、相川よし江、中川原トシ、遠藤幸子、中田よし子、高田徳代、若城くみ子、三田和枝、永田さだ子、遠藤月子、木崎貞子、橋本幸子、杉山きく代、溝口トシ子、高井花実、城所永子、鈴木よし子、池田まゆみ、佐々木静子、土屋美由紀、三枝達弥、杉山智英、鈴木弘二、三栖修、漆畑和男、土屋雅義、相原知郎、三島浩一、加藤裕之、長島安男、佐々木直

※　昭和60年度　　大仁町教育委員会　教育長　土屋憲次（昭和60年９月30日まで）
高橋利男（昭和60年10月１日より）
社会教育課　　課　長　梅原　克
鈴木一郎、杉山和良、牧野　博、浅野正観、
望月紀美加、塩谷由美子

※　発掘調査ならびに出土品の整理にあたっては、次の方々から御指導・御協力を頂いた。

（順不同・敬称略）

小林達雄（国学院大学教授）、佐原　真（奈良国立文化財研究所）、江坂輝弥（慶応大学名誉教授）、芹沢長介（東北大学名誉教授）、向坂鋼二（浜松市博物館）、小野真一（加藤学園考古学研究所）、尾形礼正（修善寺町）、瀬川裕市郎（沼津市歴史民俗資料館）、可児通宏（東京都埋蔵文化財センター）、岡本東三（文化庁・文化財調査官）、鈴木保彦（日本大学専任講師）、増島　淳（伊豆中央高校）、舘野　孝（東京都埋蔵文化財センター）、原川雄二（同）、土肥　孝（奈良国立文化財研究所）、戸田哲也（玉川文化財研究所）、金子直行（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、宮井英一（同）、橋本勝雄（千葉県文化財センター）、関野哲夫（沼津北部高校）、網谷克彦（若狭歴史民俗資料館）、篠原　正（千葉県）、田村　隆（同）、谷口康浩（国学院大学）、西脇対名夫（京都大学）、渋谷昌彦（島田市教育委員会）、坂巻隆一（同）、松井一明（袋井市教育委員会）、渡辺康弘（早稲田大学考古学資料室）、太田直樹（立正大学）、友野直亮（日本大学）、宮石宗弘（瀬戸市立歴史民俗資料館）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、鈴木敏中（三島市教育委員会）

※　この他、多くの方が来町されており、遺物を実見されそれぞれコメントを頂いている。

※　草創期の土器については、拓本・図版および別図１、２のいずれも共通番号を用いている

目　　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　発掘調査に至る経過……1

第1節　これまでの調査……1

第2節　調査に至る経過……2

第Ⅱ章　遺跡の地理的、歴史的環境……3

第1節　遺跡の地理的環境……3

第2節　歴史的環境(三福郷と脇田氏)…5

第3節　周辺の遺跡……8

第Ⅲ章　発掘調査の経過……14

日誌抄1　54年2月予備調査……14

2　54年度発掘調査(第Ⅰ次)……14

3　58年度発掘調査(第Ⅱ次)……14

第Ⅳ章　発掘調査報告……19

第1節　予備調査……19

1　層序……19

2　遺構と遺物……19

3　小結……20

第2節　第Ⅰ次調査……25

1　層序……25

2　縄文時代の遺構と遺物……25

a　遺構……25

イ住居跡……25

ロ土坑……39

b　遺物……52

イ土器……52

ロ石器……70

3　小結……84

第3節　第Ⅱ次調査……85

1　層序……85

2　先土器時代、縄文時代草創期前半の遺物……90

3　縄文時代の遺構と遺物……92

a　遺構……92

イ住居跡……92

ロ土坑……106

b　遺物……108

イ土器……108

ロ石器……234

4　歴史時代の遺構と遺物……265

a　遺構……265

イ住居跡……265

ロ土坑……265

ハ河川跡……266

b　遺物……271

イ須恵器……271

ロ山茶碗類……272

ハ国産陶器……272

ニ舶載磁器……276

ホ木製品……277

ヘ鉄製品と砥石・植物の遺存体……282

5　小結……285

第Ⅴ章　縄文時代草創期の土器について286

第Ⅵ章　特論……291

特論1　小野　真一……291

2　可児　通宏……294

3　増島　淳……298

4　瀬川裕市郎……302

第Ⅶ章　総括……304

あとがき

挿　図　目　次

第１図 深沢川左岸段丘上に位置する仲道Ａ遺跡…… 3
第２図 仲道Ａ遺跡の位置及び周辺遺跡分布図 4
第３図 仲道Ａ遺跡と周辺主要遺跡…… 11
第４図 周辺地形図…… 12
第５図 第Ⅰ次・Ⅱ次調査グリッド設定図 … 13
第６図 予備調査・第１号住居跡実測図…… 21
第７図 〃 出土土器拓影（１）…… 22
第８図 〃 ・第Ⅰ次調査遺構関連実測図 23
第９図 第Ⅰ次調査・第２号住居跡（炉内）出土土器拓影（２）…… 26
第10図 〃 第２号住居跡実測図…… 27
第11図 〃 第３号住居跡実測図…… 31
第12図 〃 第３号住居跡（炉内）出土土器拓影（３）…… 33
第13図 〃 第３号住居跡（炉内）出土土器拓影（４）…… 34
第14図 炉跡内に残存する炭化材…… 36
第15図 第Ⅰ次調査・第４号住居跡，第３号配石土坑実測図…… 37
第16図 〃 第４号住居跡及び炉内出土土器拓影（５）…… 38
第17図 〃 土坑全体図…… 40
第18図 〃 土坑実測図（１）…… 41
第19図 〃 〃 （２）…… 42
第20図 〃 〃 （３）…… 43
第21図 〃 土坑出土土器拓影（６）… 45
第22図 〃 〃 （７）… 46
第23図 〃 〃 （８）…… 47
第24図 〃 〃 （９）…… 48
第25図 〃 〃 (10) …… 49
第26図 第Ⅰ次調査・出土土器拓影 (11) … 50
第27図 〃 〃 (12) …… 51
第28図 〃 〃 (13) …… 58
第29図 〃 〃 (14) …… 59
第30図 〃 〃 (15) …… 60
第31図 〃 〃 (16) …… 61
第32図 〃 〃 (17) …… 62
第33図 〃 〃 (18) …… 63
第34図 〃 〃 (19) …… 64
第35図 〃 〃 (20) …… 65
第36図 〃 〃 (21) …… 66
第37図 〃 〃 (22) …… 67
第38図 〃 〃 (23) …… 68
第39図 〃 〃 (24) …… 69
第40図 〃 〃 (25) …… 70
第41図 〃 出土石器実測図（１）… 71
第42図 〃 〃 （２）…… 72
第43図 〃 〃 （３）…… 73
第44図 〃 〃 （４）…… 74
第45図 〃 〃 （５）…… 75
第46図 〃 〃 （６）…… 76
第47図 〃 〃 （７）…… 77
第48図 〃 〃 （８）…… 78
第49図 〃 〃 （９）…… 79
第50図 〃 〃 (10) …… 81
第51図 仲道Ａ遺跡層序模式図…… 86
第52図 第Ⅱ次調査・土層断面図…… 87
第53図 〃 Ｈ－１北壁土層写真…… 89
第54図 第Ⅱ次調査・発掘風景…… 89
第55図 〃 出土石器実測図（１）… 91
第56図 〃 遺構関連実測図…… 93
第57図 〃 第１号，第７号住居跡，第３号，第４号土坑実測図…… 95

第58図 第II次調査・第２号，第３号住居跡実測図…… 97
第59図 〃 第４号住居跡実測図…… 99
第60図 〃 第５号住居跡，第１号，第２号土坑実測図…… 101
第61図 〃 第６号住居跡実測図…… 105
第62図 〃 第１号配石土坑実測図… 106
第63図 〃 第２号配石土坑，第３号円形土坑実測図…… 107
第64図 〃 出土土器拓影（１）…… 109
第65図 〃 〃 （２）…… 110
第66図 〃 〃 （３）…… 111
第67図 〃 〃 （４）…… 112
第68図 〃 〃 （５）…… 113
第69図 〃 〃 （６）…… 114
第70図 〃 〃 （７）…… 115
第71図 〃 〃 （８）…… 116
第72図 〃 〃 （９）…… 117
第73図 〃 〃 (10)…… 118
第74図 〃 〃 (11)…… 119
第75図 〃 〃 (12)…… 120
第76図 〃 〃 (13)…… 121
第77図 〃 〃 (14)…… 122
第78図 〃 〃 (15)…… 123
第79図 〃 〃 (16)…… 124
第80図 〃 H－１・２グリッドにおける草創期土器の出土状況…… 125
第81図 〃 G－２グリッドにおける草創期土器の出土状況…… 127
第82図 第II次調査・出土土器拓影 (17) … 128
第83図 〃 〃 (18)…… 129
第84図 〃 〃 (19)…… 130
第85図 〃 〃 (20)…… 131
第86図 〃 〃 (21)…… 132
第87図 〃 〃 (22)…… 133
第88図 〃 〃 (23)…… 134
第89図 〃 〃 (24)…… 135
第90図 〃 〃 (25)…… 136
第91図 〃 〃 (26)…… 137
第92図 〃 〃 (27)…… 138
第93図 〃 〃 (28)…… 139
第94図 〃 〃 (29)…… 140
第95図 〃 〃 (30)…… 141
第96図 〃 〃 (31)…… 142
第97図 〃 〃 (32)…… 143
第98図 〃 〃 (33)…… 144
第99図 〃 〃 (34)…… 145
第100図 〃 〃 (35)…… 146
第101図 〃 〃 (36)…… 147
第102図 〃 〃 (37)…… 148
第103図 〃 〃 (38)…… 149
第104図 〃 〃 (39)…… 150
第105図 〃 〃 (40)…… 151
第106図 〃 〃 (41)…… 152
第107図 〃 〃 (42)…… 153
第108図 〃 〃 (43)…… 154
第109図 〃 〃 (44)…… 155
第110図 〃 〃 (45)…… 156
第111図 〃 〃 (46)…… 157
第112図 〃 〃 (47)…… 158
第113図 〃 〃 (48)…… 159
第114図 〃 〃 (49)…… 160
第115図 〃 〃 (50)…… 161
第116図 〃 〃 (51)…… 162
第117図 〃 〃 (52)…… 163
第118図 〃 〃 (53)…… 164
第119図 〃 〃 (54)…… 165
第120図 〃 〃 (55)…… 166
第121図 〃 〃 (56)…… 167
第122図 〃 〃 (57)…… 168

第123図 第II次調査・出土土器拓影（58）… 169
第124図 〃 〃 （59） …… 170
第125図 〃 〃 （60） …… 171
第126図 〃 〃 （61） …… 172
第127図 〃 〃 （62） …… 173
第128図 〃 〃 （63） …… 174
第129図 〃 〃 （64） …… 175
第130図 〃 〃 （65） …… 176
第131図 〃 〃 （66） …… 177
第132図 〃 〃 （67） …… 178
第133図 〃 〃 （68） …… 179
第134図 〃 〃 （69） …… 180
第135図 〃 〃 （70） …… 181
第136図 〃 〃 （71） …… 182
第137図 〃 〃 （72） …… 183
第138図 〃 〃 （73） …… 184
第139図 〃 〃 （74） …… 185
第140図 〃 〃 （75） …… 186
第141図 〃 〃 （76） …… 187
第142図 〃 〃 （77） …… 188
第143図 〃 〃 （78） …… 189
第144図 〃 〃 （79） …… 190
第145図 〃 〃 （80） …… 191
第146図 〃 出土土器写真及び拓影 （81）
…… 193
第147図 第II次調査・各グリッド内出土土器実測図 …… 196
第148図 第II次調査・出土土器拓影 （82） 199
第149図 〃 〃 （83） …… 200
第150図 〃 〃 （84） …… 201
第151図 〃 〃 （85） …… 202
第152図 〃 〃 （86） …… 203
第153図 〃 〃 （87） …… 204
第154図 〃 〃 （88） …… 205
第155図 〃 〃 （89） …… 206
第156図 〃 〃 （90） …… 207
第157図 〃 〃 （91） …… 208
第158図 〃 〃 （92） …… 208
第159図 〃 〃 （93） …… 209
第160図 〃 〃 （94） …… 210
第161図 〃 〃 （95） …… 211
第162図 〃 〃 （96） …… 212
第163図 〃 〃 （97） …… 213
第164図 〃 〃 （98） …… 214
第165図 〃 〃 （99） …… 215
第166図 〃 〃 （100） …… 216
第167図 〃 〃 （101） …… 217
第168図 〃 〃 （102） …… 218
第169図 〃 〃 （103） …… 219
第170図 〃 〃 （104） …… 220
第171図 〃 〃 （105） …… 221
第172図 〃 〃 （106） …… 222
第173図 〃 〃 （107） …… 223
第174図 〃 〃 （108） …… 224
第175図 〃 〃 （109） …… 225
第176図 〃 〃 （110） …… 226
第177図 〃 〃 （111） …… 227
第178図 〃 〃 （112） …… 228
第179図 〃 〃 （113） …… 229
第180図 〃 〃 （114） …… 230
第181図 〃 〃 （115） …… 231
第182図 〃 〃 （116） …… 232
第183図 〃 〃 （117） …… 233
第184図 〃 石鏃形態模式図 …… 234
第185図 第II次調査・出土石器実測図（2） 235
第186図 〃 〃 （3） …… 237
第187図 〃 〃 （4） …… 240
第188図 〃 〃 （5） …… 250
第189図 〃 〃 （6） …… 251
第190図 〃 〃 （7） …… 252

図表目次

第191図 第II次調査・出土石器実測図（８） 253
第192図 〃 〃 （９） …… 254
第193図 〃 〃 (10) …… 255
第194図 〃 〃 (11) …… 256
第195図 〃 〃 (12) …… 257
第196図 〃 〃 (13) …… 258
第197図 〃 〃 (14) …… 259
第198図 〃 〃 (15) …… 260
第199図 〃 〃 (16) …… 261
第200図 〃 〃 (17) …… 262
第201図 〃 〃 (18) …… 263
第202図 〃 〃 (19) …… 264
第203図 〃 方形竪穴住居跡実測図…… 267
第204図 〃 方形土坑実測図…… 269
第205図 〃 第１号，第２号円形土坑実測図…… 269
第206図 〃 第３号円形土坑実測図…… 270
第207図 〃 第４号 〃 … 270
第208図 〃 第５号 〃 … 270
第209図 〃 第６号 〃 … 270
第210図 〃 H―２・３グリッド東壁セクション図（河川跡）…… 271
第211図 〃 出土土器実測図…… 271
第212図 〃 出土土器拓影 (118) 278
第213図 〃 〃 (119) …… 279
第214図 〃 〃 (120) …… 280
第215図 〃 出土木製品実測図…… 281
第216図 〃 鉄製品実測図…… 283
第217図 〃 砥石実測図…… 284
第218図 半置半転文土器実測図…… 296
第219図 側面圧痕文土器実測図…… 297

第１表 仲道Ａ遺跡周辺遺跡一覧表…… 11
第２表 第Ｉ次調査・土坑一覧表…… 44
第３表 第Ｉ次調査・石器計測一覧表 （１）…… 82
第４表 〃 〃 （２） …… 83
第５表 草創期土器出土表…… 192
第６表 縄文中期･後期土器文様一覧表 …… 198
第７表 第II次調査・石器計測一覧表（１） 236
第８表 〃 〃 （２） …… 243
第９表 〃 〃 （３） …… 244
第10表 〃 〃 （４） …… 245
第11表 〃 〃 （５） …… 246
第12表 〃 〃 （６） …… 247
第13表 〃 〃 （７） …… 248
第14表 〃 〃 （８） …… 249
第15表 鉄釘計測表…… 282
第16表 各試料の検鏡結果…… 299
第17表 各試料ダイヤグラム…… 300
第18表 火山灰層と土器類型の比較…… 300

図　版　目　次

図版１　仲道Ａ遺跡の遠景（城山々頂・西方より）
図版２　仲道Ａ遺跡の遠景（田中山南・東方より）
仲道Ａ遺跡の遠景（北東方より・昭和54年）
図版３　仲道Ａ遺跡の近景（北方より・昭和54年）
第Ｉ次調査区近景（西側より）
図版４　第Ｉ次調査区近景（北側より）
調査風景（北側より）
図版５　第２号住居跡検出状況(南側より)－１
第２号住居跡検出状況（西上方より）－２
図版６　第２号住居跡（石棒と磨石･石皿）
第２号住居跡（石囲い炉と釣手形土器）
図版７　第２号住居跡（釣手形土器）
第２号住居跡（深鉢形土器）
図版８　第２号住居跡(深鉢形土器と石皿)
第２号住居跡（伏甕の検出状況・南側より）
図版９　第２号住居跡（伏甕と石囲い炉・東側より）
第２号住居跡（伏甕と掘り方・南側より）
図版10　第２号住居跡（石囲い炉）
第２号住居跡（完掘した状態・西上方より）
図版11　第３号住居跡（確認状況・東側より）
第３号住居跡（調査風景・北側より）
図版12　第３号住居跡（調査風景・西上方より）
第３号住居跡（遺物の検出状況・西上方より）
図版13　第３号住居跡（遺物の検出状況・北側より）
第３号住居跡（深鉢形土器）
図版14　第３号住居跡（埋甕）
第３号住居跡（第２号炉）
図版15　第３号住居跡（完掘した状態・南側より）－１
第３号住居跡（完掘した状態・西上方より）－２
図版16　第４号住居跡（検出状況・南東側より）
第４号住居跡（石囲い炉の状況）
図版17　第４号住居跡（石囲い炉に残された炭化材）
第４号住居跡（完掘した状態・北上方より）
図版18　土坑（Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆ群・東側より）
土坑（Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ群・南側より）
図版19　土坑（Ｂ，Ｄ，Ｆ，Ｇ群・南側より）
土坑（Ｆ群・南側より）
図版20　土坑（Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｆ，Ｇ群・南

側より）
土坑（G群・南側より）
図版21　遺構全景（南側より）
図版22　予備調査・第Ⅰ次調査出土の縄文時代草創期土器
図版23　第Ⅰ次調査出土の縄文時代草創期・早期土器
図版24　第Ⅰ次調査出土の縄文時代早期・前期土器
図版25　第Ⅰ次調査出土の縄文時代中期土器（1）
図版26　第Ⅰ次調査出土の縄文時代中期土器（2）
図版27　第Ⅰ次調査出土の石器（1）
図版28　第Ⅰ次調査出土の石器（2）
図版29　第Ⅰ次調査出土の石器（3）
図版30　第Ⅰ次調査出土の石器（4）
図版31　第Ⅰ次調査出土の石器（5）
図版32　第Ⅰ次調査出土の石器（6）
図版33　仲道A遺跡の遠景（北方より）
第II次調査区の近景（西側より）
図版34　グリッドの設定（西側より）―1
グリッドの設定（東側より）―2
図版35　第1号住居跡（確認状況・東側より）―1
第1号住居跡（確認状況・北側より）―2
図版36　第1号住居跡（遺物の検出状況）―1
第1号住居跡（遺物の検出状況）―2
図版37　第1号住居跡（完掘した状態・西側より）―1
第1号住居跡（完掘した状態・西側より）―2
図版38　第1号住居跡（埋甕の検出状況）―1
第1号住居跡(埋甕と掘り方)―2
図版39　第2号･第3号住居跡（確認状況・南側より）
第3号住居跡（確認状況・西側より）
図版40　第3号住居跡（埋甕の検出状況）
第3号住居跡（埋甕と掘り方）
図版41　第1号，第2号，第3号住居跡(完掘した状態・西側より）
第1号，第2号，第3号住居跡(完掘した状態・東側より）
図版42　第4号住居跡（完掘した状態・西側より）
第4号住居跡（埋甕の検出状況）
図版43　第4号住居跡（完掘した状態・東側より）
第5号住居跡（完掘した状態・東側より）
図版44　第6号住居跡（確認状況・西側より）
第6号住居跡（東側より）
図版45　第6号住居跡（実測風景）
第6号住居跡（完掘した状態・北西側より）
図版46　第6号住居跡（炉の状態・南側より）
第6号住居跡（完掘した状態・東側より）
図版47　第7号住居跡の一部（西側より）
第7号住居跡の一部（南側より）
図版48　第1号配石土坑（確認状況・東側より）
第1号配石土坑（確認状況・東上

側より）
図版49　第１号配石土坑(遺物の検出状況)－１
第１号配石土坑（遺物の検出状況・東側より）－２
図版50　第２号配石土坑（遺物の検出状況・南側より）
第２号配石土坑（完掘した状態・東南側より）
図版51　第１号・第２号土坑（遺物の検出状況・南側より）
第１号・第２号土坑（完掘した状態・西側より）
図版52　第II次調査出土の石器（１）
図版53　G－２グリッド内トレンチにおける縄文時代草創期土器の出土状況
H－１グリッド内トレンチにおける層序－Ⅴａ・Ⅴｂ・Ⅵａ・Ⅵｂ層
図版54　第II次調査出土の縄文時代草創期土器(1) I 群・II群１類ａ種①～②
図版55　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（２）II群１類ａ種③
図版56　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（３）II群１類ａ種③～④
図版57　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（４）II群１類ａ種④～⑥
図版58　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（５）II群１類ａ種④
図版59　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（６）II群１類ａ種④
図版60　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（７）II群１類ａ種，ｂ種
図版61　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（８）II群１類ａ種⑦
図版62　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（９）II群１類ｂ種
図版63　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（10）II群１類ｂ種，ｆ種
図版64　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（11）II群１類ｂ種～ｆ種
図版65　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（12）II群１類ｂ種－表
図版66　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（13）II群１類ｂ種－裏
図版67　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（14）II群２類ａ種①～③
図版68　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（15）II群２類ａ種⑤～⑦，ｂ種①～⑤，Ｃ種①
図版69　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（16）II群２類ｃ種①・③・⑤
図版70　第II次調査出土の縄文時代草創期土器(17) II群２類ｃ種①・③～⑦，ｅ種①
図版71　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（18）II群２類ｄ種①・ｅ種①
図版72　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（19）II群２類ｆ種①～②，ｇ種①～②，ｈ種①，３類ａ種①～②
図版73　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（20）II群２類ｆ種②
図版74　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（21）II群２類ｆ種②，３類ｂ種①
図版75　第II次調査出土の縄文時代草創期土器(22) II群３類ａ種①・③・④，

b種①
図版76　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（23）II群3類b種④
図版77　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（24）II群3類b種⑤，c種①，4類a種①，b種①，c種①，d種①，5類b種①，c種①
図版78　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（25）復元前の側面圧痕文土表一表
図版79　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（26）復元前の側面圧痕文土器一裏
図版80　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（27）復元前の側面圧痕文土器
図版81　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（28）復元された側面圧痕文土器
図版82　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（29）復元前の半置半転文土器一表
図版83　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（30）復元前の半置半転文土器一裏
図版84　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（31）復元前の半置半転文土器一表
図版85　第II次調査出土の縄文時代造創期土器（32）復元前の半置半転文土器一裏
図版86　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（33）復元された半置半転文土器
図版87　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（34）
図版88　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（35）
図版89　第II次調査出土の縄文時代草創期土器（36）
図版90　第II次調査出土の石器（2）縄文時代草創期後半
同上
図版91　第II次調査出土の石器（3）縄文時代早期～中期
同上
図版92　第II次調査出土の石器（4）縄文時代早期
礫器　同左
局部磨製石斧　同左
図版93　第II次調査出土の石器（5）
図版94　第II次調査出土の石器（6）
図版95　第II次調査出土の石器（7）
図版96　第II次調査出土の石器（8）
図版97　第II次調査出土の石器（9）
図版98　第II次調査出土の石器（10）
図版99　第II次調査出土の石器（11）
図版100　第II次調査出土の石器（12）
図版101　第II次調査出土の縄文時代中期土器（37）
図版102　第II次調査出土の縄文時代中期土器（38）
図版103　平安時代末期竪穴式住居跡（完掘した状態・西側より）－1
同上－2
図版104　方形土坑（完掘した状態・南側より）－1
同上（東側より）－2
図版105　第5号円形土坑（半截した状態・南側より）－1

第５号円形土坑（完掘した状態・南側より）－２
図版106　平安時代末期河川跡（北西側より）－１
同上（西側より）－２
図版107　平安時代末期河川跡から検出された木製品（漆塗木椀）
同上（木皿）
図版108　第II次調査出土の鉄製品・砥石・桃の種子
図版109　古瀬戸系陶器
図版110　古瀬戸系陶器、美濃・瀬戸系陶器
図版111　美濃・瀬戸系陶器、常滑系陶器
図版112　常滑系陶器
図版113　渥美系陶器
図版114　渥美系陶器、青・白磁器類
図版115　山茶碗類、青磁器類
図版116　漆 塗 木 椀
図版117　木　　皿
図版118　加工のある木片および箸
図版119　第II次調査精査風景（北側より）－１
同上（東側より）－２
図版120　第１号・第２号・第３号住居跡および平安時代末期方形竪穴式住居跡（西上方より）－１
同上（西上方より）－２
図版121　調査区の遺構全景（東上方より）

第Ⅰ章　発掘調査に至る経過

第１節　これまでの調査

仲道Ａ遺跡は、以前「三福遺跡」の名で紹介されており、古くから知られた所である。明治28年１月、八木奨三郎氏（註１）は東京人類学会雑誌第10巻106号の中に「伊豆地方の遺跡遺物」を発表され、その記述中熊野神社の遺物紹介をしている。また、大正元年には田方郡誌に「田方郡石器時代分布表」が掲載され三福の名がある。

昭和になると、谷川磐雄氏（後の大場磐雄氏・註２）が史跡名勝天然記念物２の12「伊豆半島の遺跡遺物」に八木氏と同様の発表をされている。さらに、同10年井出太一郎氏（註３）は、静岡県郷土研究第８号「北伊豆における先史原史時代の遺物」の中に熊野神社出土の遺物を発表されている。

こうした学会誌等への報告に続いて、踏査活動もまた盛んに行われている。ことに、芹沢長介・加藤明秀両氏（註４）は当地とのかかわりが深く、何度か足を運ばれている。これと時を同じくして鈴木柳氏もたんねんな調査をされている。

戦後は、小野真一氏が「静岡県東部地方における縄文文化」を沼津女子商業高等学校郷土研究部誌うぶすなへ発表され、翌26年には長田実氏が、「伊豆半島の古代文化」―静岡県刊・伊豆半島所載―を発表されている。そして、33年になると、小野真一氏努力の成果ともいえる「静岡県東部古代文化総覧」が出版されている。この、長田・小野両氏による研究報告が、36年に刊行された「静岡県遺跡地名表」―静岡県教育委員会刊―を始め、その後の分布調査などに果たした役割は大きく基礎的な資料となっている。

また、36年以降は筆者による町内の遺跡分布調査が始まり、従来の縄文遺跡と古墳に加えて先土器・土師遺跡が極めて多く確認されている。その代表遺跡をあげると、先土器では八丁平・茅野Ｂ遺跡（礫器・ナイフ形石器＝浮橋）、茅野Ａ遺跡（刃器・ナイフ形石器＝下畑）、向原遺跡Ｂ地点（尖頭器・細石核・細石刃＝三福・第２図３、第１表３）などがあり、土師は、京塚遺跡（三福）、山畑遺跡（田京）、笠石山洞窟（神島）などがある。（第２図６・21、第１表６・21）

42年暮れから翌年の春にかけては、吉田橋際より中学への道路が通学路として拡張整備される事になったため、南原台地もその一部について削土せざるを得ない状態にあった。そのため筆者は、工事開始直後より観察を続けていた所、表土下約１ｍ付近において焼土と礫群、それに縄文後期の土器片を確認した。そこで３月、確認調査が実施され焼土と柱穴など住居跡存在を裏づける資料を得ている。（第Ⅱ章第３節２の項）

また、この年の８月には小野真一氏の指導で向原遺跡の発掘調査が行われている。（第Ⅱ章第３節１の項）

そして、46年筆者等が行った分布調査（県教育委員会主催）では、さらに詳細な状況が把握され現在に至っている。

このように、明治以来数多くの遺跡が発見され調査されているが、同時に消滅した遺跡も多い。宅地化に伴って造成・開発等により、その保存は年々難しくなっている昨今であるが、我々の祖先のかけがえのない文化遺産をよりよいかたちで後世に残したいものである。

第２節　調査に至る経過

昭和54年２月、三福公民館増築の工事が開始された。その際、多くの遺物が検出されたため、教育委員会は三福区と話し合いを行った。その結果、工事の一時中断と発掘調査の実施が決定されたためすでに削平されている部分、とりわけ東壁と南壁のセクションを取り、工事区中央に4.7m×2.4mの島状に残された場所について調査を実施した。工事人の沢木次男氏によれば、削土中約20cm～30cmほどの石数個が出土したとの事であり、石囲い炉の存在を想像させるものであった。調査の結果、案の定第６図に見るような住居跡（第１号住居跡）が発見されたのである。また、東壁には住居跡の断面および土坑の断面が確認された。

同年４月、三福区では公民館東側の広場に遊具を設置する計画を示した。そこで、教育委員会では予定地の踏査を行い、２月の調査地点の続きである事を確認したため、三福区と事前調査の必要性について話し合いを行った。そして、三福区より快い返事が得られ、同６月より約１ケ月間の予定で発掘調査を行う事となった。調査対象面積はおよそ200㎡であったが、前述のように２月の調査によって住居跡や土坑の存在が明らかとなっていたため、これらの解明と遺構の広がりを把握できるであろうと期待されていた。第Ⅳ章第２節で見るように、住居跡３基、これと同時期と思われる土坑41基が発見されている。

昭和57年12月、東洋醸造社員住宅（仲道Ａ遺跡の一角であり公民館の東南方にあたる）改築計画が起こり、翌58年３月、具体的なものが教育委員会に示されてきた。そこで、教育委員会と東洋醸造との間で再三にわたって打合せを行った。その結果、会社側より埋蔵文化財に対する理解が得られ、同６月28日より３ケ月間の予定で発掘調査を行う事になった。調査対象面積は約1,000㎡であり、社員住宅の取り壊しの後直ちにこれを実施した。調査区は当初、地元の相川忠男氏などの話から住宅が建てられる以前は水田であった事や、東南に向かってやや傾斜した地形であった事が指摘されていた。

調査は、東西70m南北15mの範囲に一区画５m四方のグリッドを設定しこれを順次掘り下げていった。そして、第Ⅳ章第３節の通り多くの遺構や遺物が発見された。

ここでは、昭和54年２月の緊急調査および同６月～７月までの調査を第Ⅰ次調査とし、58年６月～９月までの調査を第Ⅱ次調査として呼んでいる。

第II章　遺跡の地理的・歴史的環境

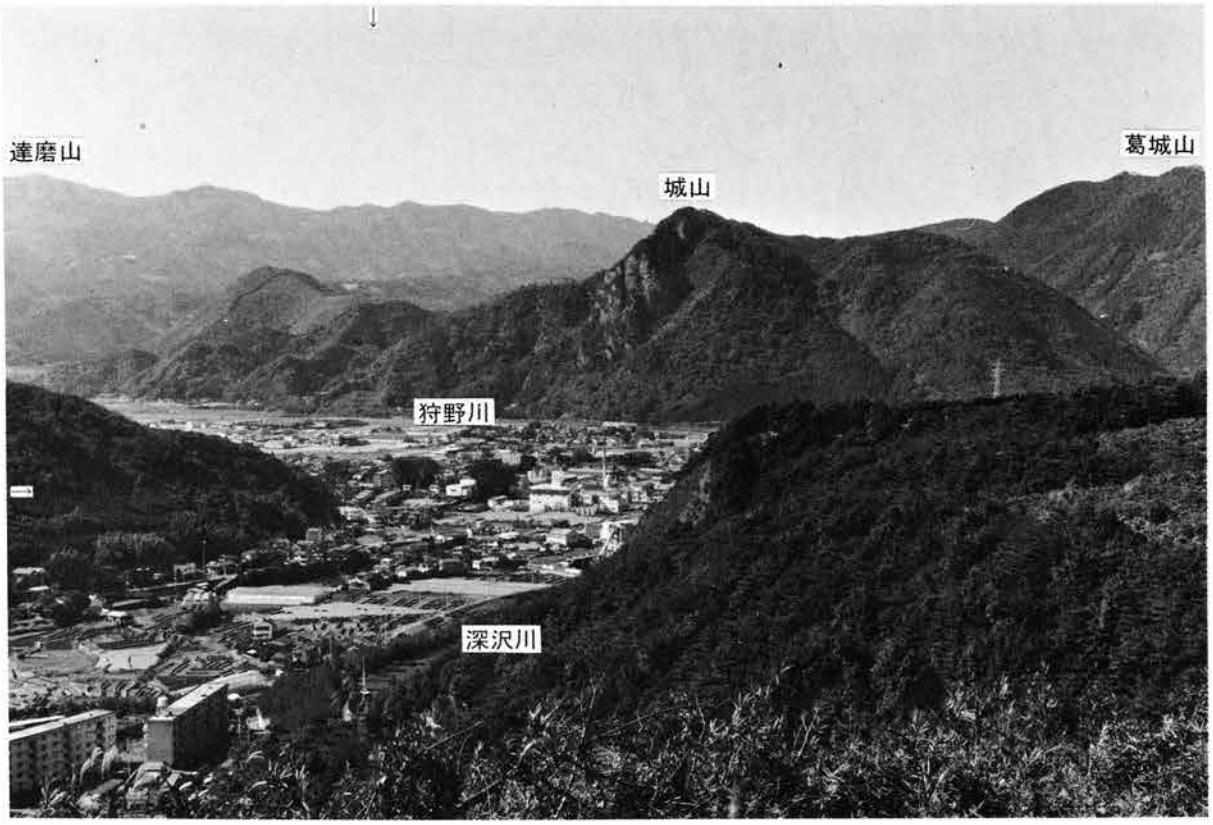
第1節　地理的環境

仲道A遺跡は、静岡県田方郡大仁町三福字仲道674～677、680～685－1番地に所在する。熊野神社を中心として三福公民館および東南側の水田・住宅地一帯（約16,000㎡）が対象となっており、当地方屈指の遺跡である。

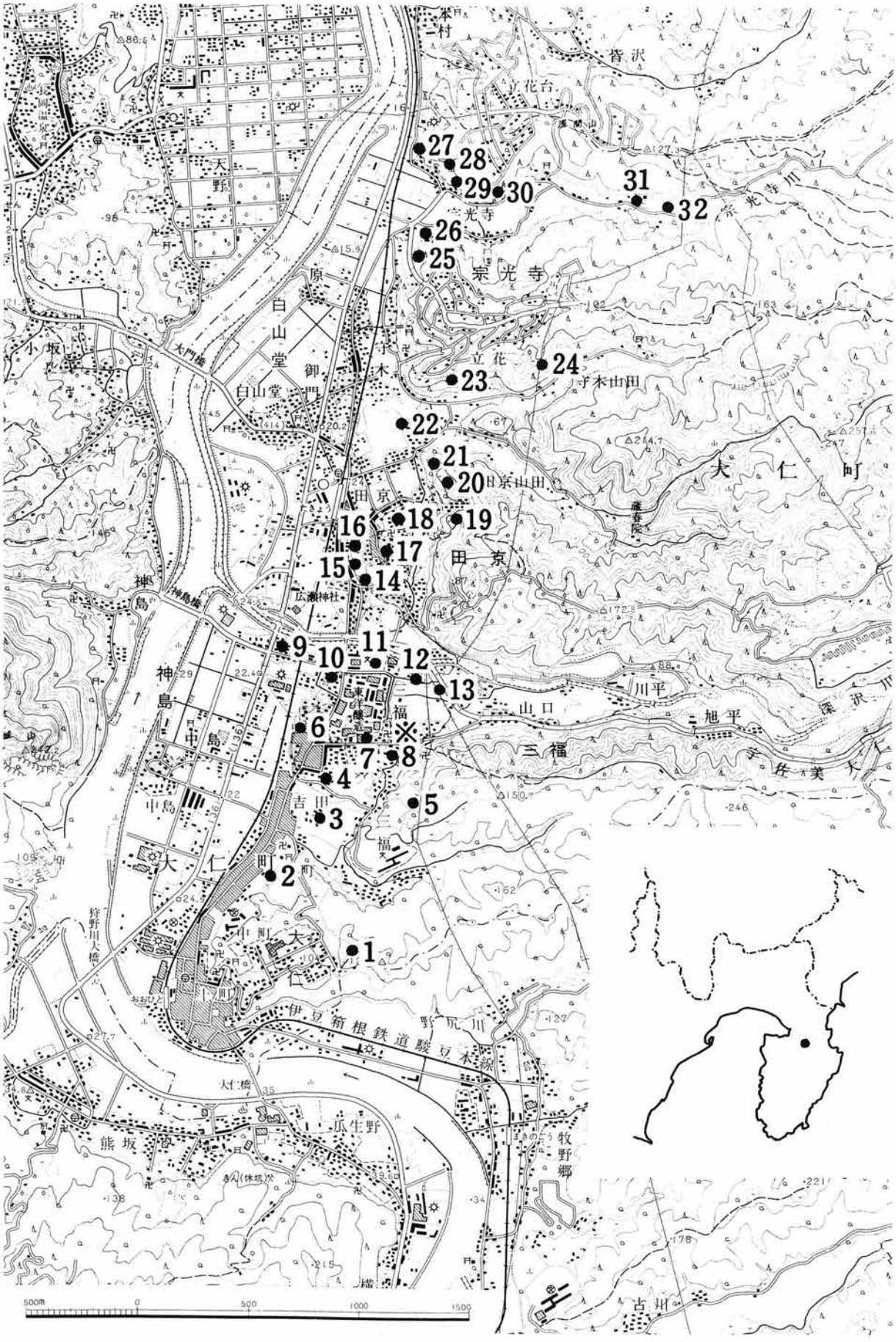
遺跡は、狩野川の一支流をなす深沢川左岸の段丘最上部に位置している。玄岳（くろたけ・標高799m）の南西方下にある大沢池に源を発する深沢川は、下流域の下畑西側より開析部の三福・田京付近においていくつもの段丘が形成されており、ここに縄文時代～古墳時代の遺跡が数多く存在している。（第1表）仲道A遺跡はこれらの最高位にあり、標高はおよそ45mである。

本遺跡のすぐ南側には旧宇佐美街道が通っており、往時においては重要な道路であった。また、古くからこの道路の両側には人家が立ちならび、旧下田街道と交叉するメインストリートでもあった。「仲道」…なかみちの地名の由来はここにあると言われる。

本遺跡の南西方約500mには向原遺跡がある。ここは、昭和43年8月に発掘調査が行われており、縄文時代中期前半～中葉の住居跡3基が発見されている。特に、第2号住居跡より出土した深鉢形土器は、阿玉台Ia式に比定されるものと言われ好資料である。（註5）



第1図　深沢川左岸段丘上に位置する仲道A遺跡



第２図 仲道Ａ遺跡の位置および周辺遺跡分布図

第２節　歴史的環境（三福郷と脇田氏）

延喜式あるいは和名抄によれば、伊豆の国は田方郡・那賀郡・賀茂郡の三郡であり、田方郡（多加太）は郷13、村69があった。郷は新居・直美、佐婆、茨城、依馬、八邦、狩野、天野、吉妾、有辮、久寝、鏡作、小河の13があったといわれる。この中で、鏡作郷の所在地については今なお判然としないが、小野真一氏によれば三福付近にあったものと推定されており、同時に田方の郡衙を田京付近に考えておられる。（註６）天平期の建立といわれる宗光寺廃寺跡（註７）の存在や、奈良時代と推定される瓦が出土した山崎遺跡の発見によって、この説を一層有力なものとする好材料が少しずつではあるが現れ、古代における当地をおぼろげながら窺い知ることができよう。

三島大社文書の中に、僧祐禅による打渡状があり、「伊豆国狩野庄三福郷内田五町在家壱宇事。任下被二仰下一之旨上。為二三島宮御神領一奉レ打渡一之処状如レ件。建武元年（1334）９月23日」と記されている。また、同神社には足利尊氏による寄進状もありこれによれば「寄進三島社伊豆国三福郷事。右。為二当社領一守二先例一可レ致二沙汰一。者奉レ寄之状如レ件。建武二年（1335）９月24日」とある。

田中氏について　「伊豆国府考」―萩原正夫著―によれば、「三島大社の神職家、矢田部氏は、伊豆国造の末裔なる事、系譜にも見えて、古来連綿として大社に奉仕し、今にいたれる名族なるが、広瀬神社神職西島氏は、もと、矢田部と同家なりしよし伝へて、ともに、五七の桐の紋章（西島氏は文政度より五三の桐に更めたれど其以前は五七の桐を用いたり）を用い来れるを思うに、矢田部氏の祖先は、往古是地にて、三島神に奉仕し、後大社を遷するに及びて、三島に転住せしも、其族は、なほ、此の地に留まりて、広瀬神社に奉仕して、今に至れるならむ。西島氏は、もと、田中氏とせしよし伝へたれば、矢田部氏も、この地にては、田中たりしならむ」とある。また、増訂豆州志稿田京村の条に、「北条五代記所載田中五郎左衛門ハ此地ノ人力」とあり、又同書巻之十三、人物の項に「〇田中五郎左衛門〇北条五代記ニ云天正十年甲州御坂山合戦ニ伊豆国住人田中五郎左衛門内藤大和守ニ属シ敵中ニ一文字ニ突入リ討死ス田中氏ハ田方郡田中ノ人ナリ其墓ハ三坂嶺ノ古道ニアリ」と出ており、事蹟考には「伊豆に来り三福田中氏に頼る」と記されている。この事からも、三福には田中氏という土着の豪族がいたようである。

脇田氏について　脇田氏の先祖は遠く清和天皇（第56代）に始まり、新田義貞の弟義助（脇屋義助）の長男義治は正平23年以後出羽から武蔵、上野、信濃、遠江、駿河、を経て伊豆に入り、三福の田中氏を頼った事になっている。そして、諸般の事情を考慮すれば義治が三福に来たのは翌年の正平24年(1369)47才の時の事と思われる。また、姓は脇屋の脇と田中の田をとって脇田とあらため左近と号して当地において老後を送ったとされている。ここでは、義治を中心として新田一族とこれにかかわる事件、あるいは時代背景について若干触れてみたい。

脇屋義治の事蹟

元亨３年６月10日（1323）　脇屋義助の長男として、上野国新田庄に生まれる。

元弘３年５月（1333）　六波羅陥る。新田義貞上野で挙兵し、鎌倉を陥す。北条高時以下自殺し北条氏滅ぶ。

建武２年12月（1335）　父義助に従い竹の下の合戦に出る。13才の初陣であった。

延元元年４月（1336）　義治武者頭人に任げられる。武者所は武士階級の統率機関で、これには三浦・千葉・小山・小笠原・大友・島津など旧幕府の有力な御家人のうえに楠木・名和などを含めて、一番11人ずつで、六番に編成された。この六番中の四番までの頭人が新田義興ら新田氏の一族によって占められていた。

武者所結番事

一番　子午　新田越後守義（以下略）　　二番　丑未　新田左馬　頭貞義（以下略）

三番　寅申　新田兵部少輔行義（以下略）　　四番　卯酉　長井大膳大夫広秀（以下略）

五番　辰戌　新田式部大輔義治　、河内大夫判官正成、隼人正光貞（以下略）

六番　　亥　武田大膳大夫信貞（以下略）　―建武年間記―

新田一族が武者所頭人に任ぜられているのは、天皇の信任が厚かった事と、新田氏が当時武家の名族であった事が分かる。義治はこの時14才でその部下には楠正成がいた。

興国４年４月（1343）父義助四国の宮方に招かれ、四国・西国の大将として下向、伊予の国府に赴くも病んで５月11日没す。―太平記・大日本史料―

正平７年（1352）　２月新田義宗・義興・義治上野に挙兵し鎌倉を衝く。尊氏、子基氏を鎌倉に止め500騎を率い、２月17日武蔵国狩野川（今の神奈川）に陣す、催促に応じ房総の将士馳せ集まり大軍となり、19日出発し矢ノ口に至る。新田軍は、府中にて二手に分かれ、義宗は狩野川口へ向い、義治・義興は別路鎌倉を突かんとす。義宗軍は狩野川に向かうつもりが、尊氏が矢の口に移ったので、是に向い期せずして20日両軍は金井原にて大合戦になったが、新田軍利あらずして退いて入間川に陣す。一方義治・義興軍は、府中より多摩川を渡り19日夜関戸に陣す。かねて新田氏に心を寄せていた石塔義房・三浦高通や小俣・葦名・二階堂ら尊氏の部下を脱し20日鎌倉を衝く。基氏不意をつかれ、一戦して逃げさる。義治・義興鎌倉に入り暫くのあいだ関東に号令する。…以下略

正平13年（1358）　武蔵・上野辺の豪族遥かに書を寄せ、将たらん事を促すも義治・義興は疑って応ぜざりしも、義興は猪突の勇あり奇功を好みしため、正平13年春武蔵に潜行す、来付する者多く漸く勢を得たが、畠山国清に攻められ敗れた。しかし、其の後神出鬼没敵を悩まし続けたが、国清の臣竹沢左京に謀られ、10月10日武蔵国矢ノ口渡しにおいて戦死した。

正平24年（1369）　義治再び武蔵・上野の辺りに出で来り、捲土重來の観ありしが、２月上杉朝房・畠山基国と戦いて敗れる。信濃に入り大河原の宗良親王軍と合し更に戦わんとしたけれども、上杉・畠山の追撃急にして志を果たすこと能わざりき。―諸家系図纂喜連川系図―

以上、義治を中心として新田氏・脇屋氏にかかわる事蹟を抜粋したが、大正５年５月１日書

かれた「贈正四位脇屋義治郷事蹟考」および日本史年表（歴史学研究会編）を基にしたものである。前述のように、正平24年７月の戦で敗れた後田中氏を頼り三福に来たものである。

荘園について

荘園の起源は、功田・賜田・墾田の制にあった。中でも墾田が主なものであり、養老田令によれば私田開墾者には３年、公田開墾者には６年、国郡司の所属部内における空間地の開墾者にはその在任中の佃食を許されたのであるが、其後養老７年には墾田三世一身法、更に天平15年には墾田永世私有法が発布され、その為互いに墾田の獲得に狂する結果となった。そしていつしか口分田、位田、職田などを荘園に転化するものもあった。

すなわち、荘園の成立は平安時代の初期において、国司の政治的あるいは経済的支配下から離れて権門・寺社・豪族の私有地として不輸租となり、さらに検田使の立ち入りを拒む不入の特権を得て、反律令的土地制度へと転換し、その結果、律令政治とその基盤に立つ古代国家を遂に崩壊に導き、やがて封建社会進展へ続く過渡的な役割を果たす事となった。

荘園の発展は国家財政を衰退させ、国家の権力範囲を制限させるものであった。そこで、延喜２年（902）以来荘園整理令が発せられたが、時勢の動向のなかではあまり効果がなかった。平安時代から鎌倉時代にかけては伊豆国にも多くの荘園が存在した事が知られている。

伊豆国荘園所在地一覧

荘園名	現在地	所有者	出典
土倉郷	三島市・徳倉	箱根社領	箱根山縁起
佐野郷	同・伊豆佐野	同	同
河原谷郷	同・川原ケ谷	三島社領	矢田部文書治承四十廿一、吾妻鏡文治元四廿
安久郷	同・安久	三島社領	三島大社文書延元三正七
郡宅郷内	三島？	三島社領	三島大社文書観応元十二十五
三園郷	三島市・御園	三島社領	矢田部文書治承四十廿一
同上	同	同	吾妻鏡文治元四廿
玉河郷	同・玉川	同	三島大社文書安貞二三
馬宮庄	函南町・間宮	走湯山所領	走湯山所領目録
長前郷	韮山町長崎	三島社領	吾妻鏡文治元四廿
糠田郷	同・原木	同	同
寺宮庄	同・寺家	北条時政領	吾妻鏡建久元九廿一
蛭島郷	同・四日町	走湯山領	吾妻鏡治承四七五
同	同	同	走湯山領目録

山木郷	同・山木	箱根山領	箱根山縁起
狩野庄・三福郷	大仁町・三福	三島社領	三島大社文書建武元九廿三
狩野庄	天城湯ケ島町	連華王院領	吾妻鏡文治四六四
狩野庄・牧郷	修善寺町・牧之郷		吾妻鏡嘉禎元八廿一
天野庄	伊豆長岡町・天野		萩藩閥閲録天野求馬系図
三津御厨	沼津市・三津		建長二年道家　分帳
井田庄	戸田村・井田		東福寺文書建長二十一
阿多美郷	熱海市	走湯山領	吾妻鏡保元十二十八
伊東庄	伊東市		波木井殿御書弘安五十七

参考文献

1、『三島市誌』（上巻）第二章第三節十二・荘園の盛衰と武家の勃興、第五節三のⅠ・土地制度—三島市・昭和33

2、『静岡県の歴史』（県史シリーズ22）中世4・荘園と下地中分—山川出版社・昭45

3、『静岡県史』（第三巻）第一章第一節二・倭名類聚抄の郷名、第四章第一節・庄園の盛衰、二・遠駿豆庄園目録—名著出版・昭47

4、『三福村史』（集落シリーズ其ノ三）第二章第一節・古文書一〜八、第二節一〜七—大仁町教育委員会・昭和53

第3節　周辺の遺跡

本遺跡は、天城山に源を持つ狩野川の東側に位置している。深沢川によって形成された河岸段丘が、大きく扇状地となって開析する所にあり、丁度その南側の付け根部付近に存在する。

狩野川の中・下流域にあたる田方平野は、大仁町より北側に向かって開けており、良好な穀倉地帯となっている。古来、しばしば洪水等（註8）の洗礼を受けながら、結果的には肥沃な土壌が残され、弥生時代から今日に至るまで稲作等の農作業を行うには適した所であったと考えられる。（註9）

大仁・韮山・函南の各町においては、東側の後背地より幾つもの小河川が狩野川へ流れこんでおり、それぞれその支流をなしている。これらは、その合流点近くで浅い浸食谷となっており、この谷をはさんで形成された丘陵や台地には、数多くの遺跡が残されている。

大仁町では、現在98ケ所の遺跡が確認・登録されているが、このうち約3分の1にあたる33ケ所が、こうした地形を基盤として存在している。（表1）特に、三福と田京は当町においては一番の密集地となっている。とりわけ、縄文時代中期を代表する主要遺跡が多い。そして、これらは標高30m〜50mの所に立地している事が分かる。図示した遺跡のうち、縄文時代の遺跡20、弥生時代の遺跡3、古墳時代の遺跡23、奈良・平安・鎌倉時代の遺跡5、各時期が複合する遺跡14となっている。分布図は、「静岡県遺跡地名表」—静岡県教育委員会編（註10）を基に作成してあるが、その後消滅したものや、新発見のものなど若干の入れかえがある。

主要縄文遺跡

1、向原遺跡（むこうばら）　三福・向原（第2図3、第1表3）

大仁中学校下の西裾に長く張り出した舌状台地上一帯が遺跡である。標高はおよそ40mであり、南側を流れる鍋沢川との比高は約20m。台地の西側をA地点、中央部をB地点、東側をC地点としている。前述のように、昭和43年8月21日～9月1日まで発掘調査が行われている。主体は、縄文時代中期前半の阿玉台Ia式期と中葉の曾利I式期であるが、この他表採品の中には、先土器時代のものと思われる尖頭器・石核などがあり、縄文時代早期末～前期初頭と言われる木島式によく似た土器が見られるが資料が乏しい。

2、南原遺跡（みなみばら）　三福・南原（第2図4、第1表4）

向原遺跡の北方約100mに位置している。前者と同様に明治年間から遺物の発見報告がなされている。主体部は台地の南側と思われるが、住宅が密集しており確認するのは難しい。縄文時代中期中葉と後期および古墳時代の遺跡である。昭和43年3月21日から3日間、緊急調査が行われている。

遺物　石器＝第II層（茶褐色・表土下約1m）から石鏃と磨石が出土している。また、第IV層（黄褐色ローム？・表土下1.65m）からは、尖頭器片？と磨石が出土しており、先土器時代の所産ではないかと考えられる。土器＝表面採集では、曾利II・III式土器が確認されている。この時の調査では、第II層より粗い縄文を地文とし、斜めの条痕が施された加曾利B式土器が出土している。

3、公蔵免遺跡（こうぞうめん）　田京・公蔵免（第2図16、第1表16）

伊豆箱根鉄道田京駅の南東約200mの台地一帯が遺跡である。（旧役場跡地・現在の田京幼稚園および南側）昭和51年・52年度の二回発掘調査が行われている。調査地点は、台地北西端の凹地であったため、住居跡等の遺構は少なかった。しかし、投棄されたと思われる莫大な量の遺物に注目したい。

まず、石器については打製石斧と磨製石斧を見ると数百点以上あり、石鏃、石匙、磨石、石皿、石棒、石錘などは1,000点を越えるものと考えられる。この他、硬玉製の有孔大珠とその原石、蛇文岩製の玦状耳飾りがある。また、中期の象徴ともいえる雄渾豪華な勝坂I～III式土器から、曾利I～III式土器などを中心に、多種多様な文様・器形の土器が数万点出土している。さらに、勝坂式土器に伴うものと思われる板状土偶や、土製円板200点以上が見つかっている。なお、同時に発見された多くの骨片は、金子浩昌氏が詳細な分類をされている。それによれば、10才以下の子供の頭頂部骨片、イノシシ、シカ、イルカ、カメなどがあり、興味深い結果が出ている。また、注意すべき点は動物の骨だけでなく人骨も焼けている点が指摘されている事であり、当時の人々の食生活や儀礼・習慣をさぐる重要な証拠となるであろう。（公蔵免遺跡の資料は未報告である。）

4、山畑遺跡（やんばた）　田京・山畑（第2図21、第1表21）

田京駅の東方約400mの所にある舌状台地先端部が遺跡である。標高はおよそ45m。昭和38年

8月10日～16日まで、大仁高校郷土研究部によって発掘調査が行われた。これには小野真一氏、尾形礼正氏、奇二浩児氏、岡田恭順氏などが参画されている。縄文遺跡としては、当町で初めての発掘調査であった。当初の目的は縄文時代中期の遺構検出にあったが、わずかに住居跡の一角を知り得たにとどまった。とはいえ、上層より古墳時代中期の隅丸方形住居跡1基が確認されている。

調査の詳しい報告は、「大仁町の古墳文化」の中に発表されているので、ここでは要点を述べておこう。地層は、上部より第Ⅰ層が表土、第II層が褐色土、第III層が砂礫層（火山噴出物のパーミスの誤認か？）、第IV層が茶褐色土層であった。古墳時代の住居跡は第III層を掘りこんでつくられており、また、縄文時代の遺物はもっぱら第IV層中より出土している。この地層は、愛鷹山南麓に見られる栗色土層に対比される地層である事が確認されている。

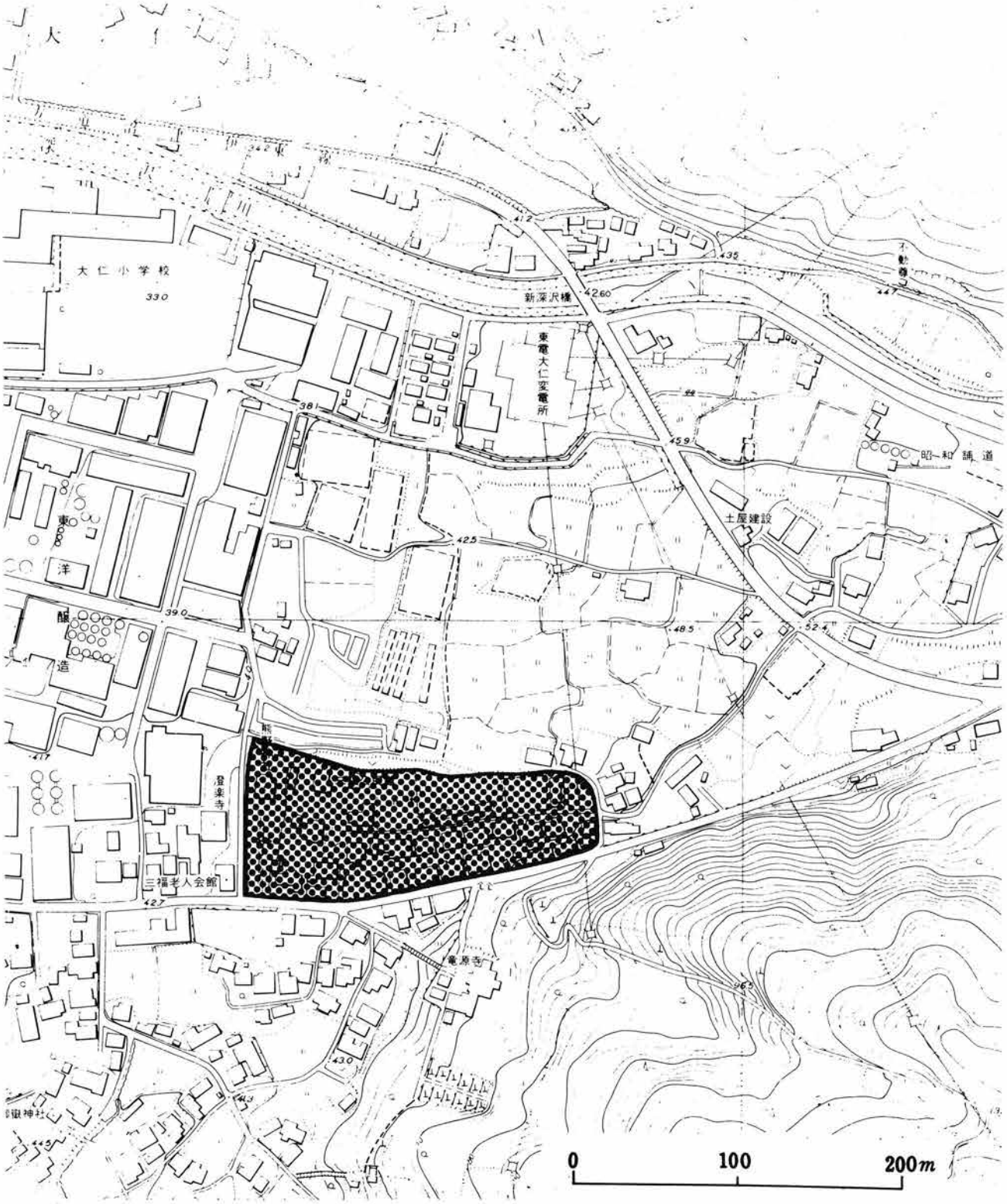
確認された古墳時代の住居跡は、隅丸方形の竪穴である。西辺および北辺の壁線を明確にする事は出来なかったが、東・南両辺が検出されており、おおよその規模を把握する事が出来た。それによると、南北約3.6m、東西約3.5m、深さ15cmほどであり、小さいものである。柱穴は、住居跡内西北部より確認されたものが唯一確実なもので、上径20cm、深さ56cmであった。隅丸方形住居跡という形態から推して、おそらく4本の柱を使っていたであろうが、他の3本の位置はいずれも後世の芋穴か貯蔵穴らしい攪乱のあった地域や、当時の大形ピットの位置と一致するようであり、従って明確につかむ事は出来なかった。出土した高杯、壺、坩などによれば和泉式併行期の住居跡と思われる。

註1、東京都生まれ、東京帝国大学理学部人類学教室で坪井正五郎氏に師事、台湾総督府・李王職博物館・満鉄に勤務。神籠石山城説。
註2、東京都生まれ、国学院大学史学科卒、同大学教授。内務省神社局（神祇院）に在学中神道考古学提唱。
註3、静岡県生まれ、北伊豆地方における縄文・弥生遺跡の調査に活躍。
註4、静岡県生まれ、静岡中学校中退、米子航空操縦訓練所卒、満州航空株式会社勤務。芹沢長介氏と共に静岡県中・東部の縄文遺跡を調査。
註5、小野真一・漆畑稔　1971「三福向原」—静岡県における縄文時代住居址の調査—大仁町教育委員会
註6、小野真一　1965「長泉町の歴史」長泉郷土誌等での記述がある。
註7、軽部慈恩　1958「三島市誌・上巻」第二章・第三節の三　伊豆国に於ける仏寺創建—田京附近に於ける廃寺の調査（P302）、宗光寺廃寺の発掘調査概況（P305）三島市教育委員会
註8、狩野川は古くから暴れ川として知られ、幾多の洪水を引き起こしている。山崎遺跡は、おそらくこうした洪水によって埋没したものであろう。
註9、韮山町には、弥生時代後期～古墳時代にかけての水田址として著名な山木遺跡を始め、舟口川、宮下、台、水深、内中などの遺跡がある。
註10、静岡県教育委員会　1979「静岡県遺跡地名表」—田方郡大仁町No.1～No.5

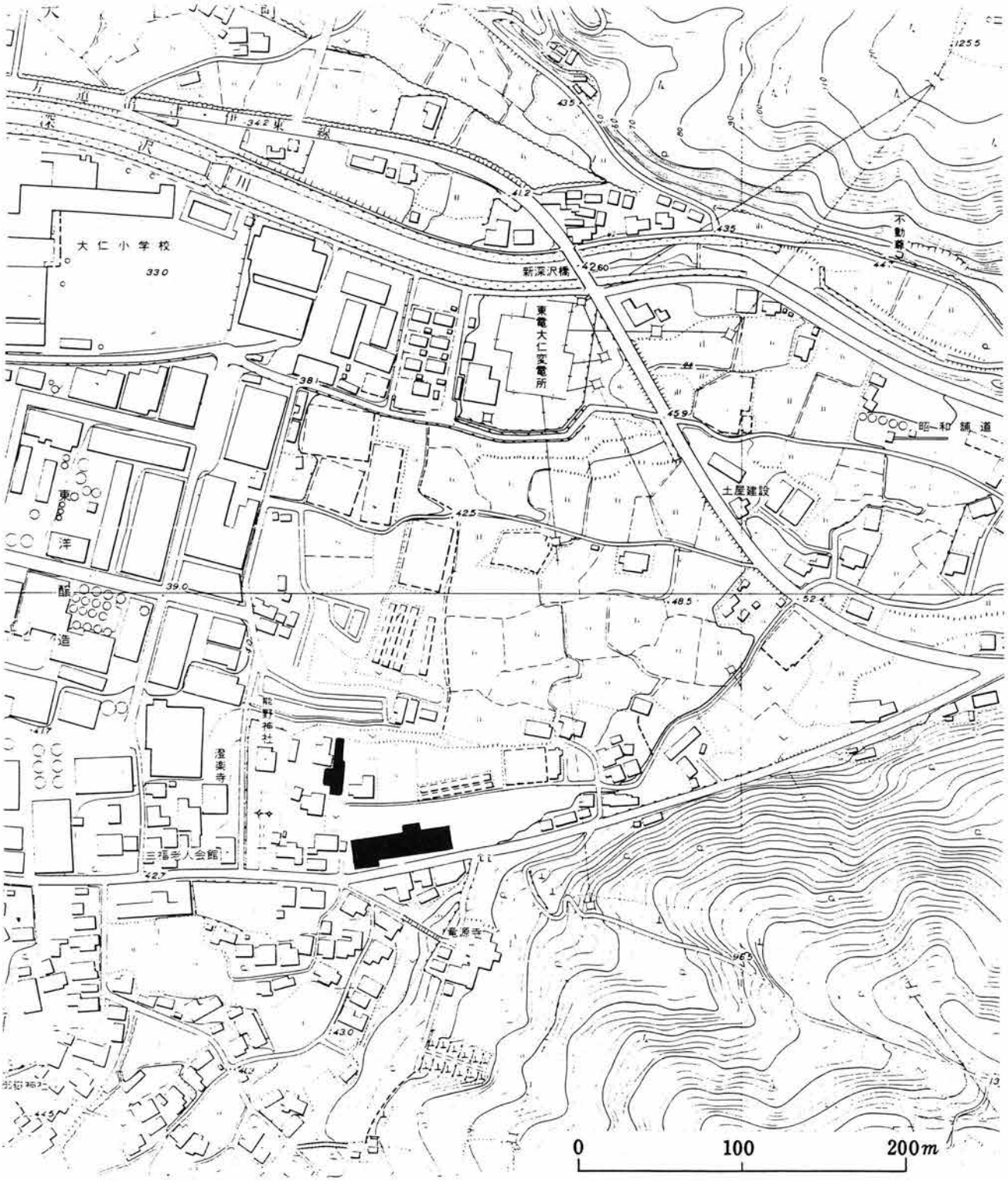
第3図　仲道A遺跡と周辺主要遺跡

	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	備考
※	仲道A	三福	先土器・縄文・古墳 平安・鎌倉	竪穴住居跡・敷石住居跡・土坑 先土器時代～近世の遺物	昭和54年・58年発掘調査、本報告書
1	御社	吉田	縄文・古墳	縄文土器(早・中期)・土師器・石鏃	
2	城内	〃	縄文・古墳	縄文土器(早・中期)・土師器・磨石・石鏃	
3	向原	三福	先土器・縄文 古墳	竪穴住居跡・ポイント？・縄文土器 (早・中期)・土師器・石器多数	昭和43年発掘調査 小野・漆畑 1971「三福向原」
4	南原	〃	縄文・古墳	縄文土器（中・後期）・土師器・石器多数	昭和43年発掘調査 漆畑1978「三福村史」
5	平林	〃	縄文・平安	縄文土器（早・中期）・土師器・須恵器・磨石	
6	京塚	〃	古墳	土師器	
7	仲道B	〃	縄文・古墳	縄文土器(中期)・土師器・磨製石斧	
8	寺ノ下	〃	縄文	縄文土器（中期）・磨石	
9	金山	〃	縄文	石鏃	
10	横落	〃	縄文	磨製石斧・石鏃	
11	溝越	〃	縄文・弥生・古墳	縄文土器（晩期）・弥生土器・土師器	
12	釜田	〃	古墳	須恵器	
13	番小屋	〃	縄文	打製石斧	
14	台	田京	縄文・弥生・古墳	縄文土器（中期）・弥生土器・土師器・須恵器	
15	殿坂	〃	縄文	縄文土器（中期）・土師器	
16	公蔵免	〃	縄文・弥生・古墳	竪穴住居跡・配石・縄文土器（早・中期）多数・石器多数・弥生土器・土師器	昭和51・52年発掘調査（未発表）
17	大庭	〃	縄文・古墳	縄文土器（中期）・土師器	
18	城	〃	縄文・古墳	縄文土器（中期）・土師器	
19	向山	〃	縄文	縄文土器（中期）	
20	踊原	〃	縄文・古墳	縄文土器（中期）・土師器・石製有孔円板	
21	山畑	〃	縄文・古墳	竪穴住居跡・縄文土器（中期）・土師器	昭和38年発掘調査 大仁高校郷土研究部1966「たつき」 小野・尾形・漆畑1973「大仁町の古墳文化」 昭和58年発掘調査（未発表）
22	山崎	〃	古墳・奈良 平安・鎌倉	竪穴住居跡・土師器・須恵器・陶磁器・玉類・鉄製品・瓦・木製品	
23	平石古墳群	守木	古墳	須恵器・直刀・刀子	昭和47年発掘調査 小野・薮下1973「大仁町の古墳文化」
24	北山横穴群	〃	古墳	須恵器	昭和60年発掘調査(県教委)
25	神明塚古墳	宗光寺	古墳	鏡？	静岡県1930「静岡県史」第1巻
26	宗光寺廃寺	〃	白鳳	基壇・瓦	昭和30年発掘調査 軽部1958「三島市誌」上
27	横山段	〃	古墳	土師器	
28	横山段4号墳	〃	古墳	不明	
29	横山段5号墳	〃	古墳	須恵器	
30	宗光寺横穴群	〃	古墳	須恵器・直刀・玉類・金環・石櫃	昭和25年発掘調査　長田1951 中川・岡本1966「伊豆宗光寺横穴群の調査」
31	旧相光寺	〃	白鳳	瓦	
32	門下	〃	古墳	土師器	

第1表　仲道A遺跡周辺遺跡一覧表


大仁小学校
330
新深沢橋
東電大仁変電所
昭和舗道
土屋建設
東洋醸造
三福老人会館
登楽寺
竜原寺
0
100
200m

第4図 周辺地形図



第5図 第Ⅰ次・第Ⅱ次調査グリッド設定図

第III章　発掘調査の経過

日　誌　抄

1　54年２月予備調査

２月11日

工事により削土された東壁南半および南壁の精査を行う。東壁において住居跡と土坑と思われる落ち込みを確認する。前者には焼土を多量に含んだ落ち込み２ケ所が認められ、炉跡と推定された。土器片９点、黒曜石１点が出土。また、径約30cmの土器口縁部が単独出土。第Ⅰ層～第Ⅴ層を確認、遺構は第III層から第IV層を切り込んで構築しており、一部は第Ⅴ層に達している。また、南壁は東端部で土坑状の落ち込みを確認する。東壁・南壁のセクション図を取り、写真撮影を行う。

２月12日

東壁北半と南壁および北壁を精査する。東壁北半で住居跡と見られる深い落ち込みを確認する。土器片20点が出土。南壁では住居もしくは土坑状の落ち込みを確認する。土器片２点と10cm～30cmの石２個が出土。また、北壁においては石棒１点が出土したにすぎなかった。東壁・南壁・北壁のセクション図を取り、写真撮影を行う。さらに、工事区中央の島状の部分（4.7m×2.4m）について精査を行う。この結果、石囲い炉を持った住居跡が検出された。また、住居跡外に集石炉１ケ所、土坑３ケ所が検出された。土器片多数出土。

２月13日

前日に検出された住居跡を精査し、これを完掘する。石囲い炉内には焼土・炭化物が充填していた。遺構全体の平板測量とエレベーション図の作成を行い、写真撮影をした。出土した遺物すべてのレベルを実測し収納した。さらに、調査区全体の測量を行い調査を終了した。

2　54年度発掘調査（第Ⅰ次調査）

６月５日～９日

第４区のグリッドを設定・調査に入った。第１区、第２区、第３区、第５区のグリッドの設定を計画する。第II層まで削土、石塊及び集石検出、石器片が若干出土。

６月10日～13日

第３区、第５区のグリッド設定、第４区、遺構確認の作業を始める、第19号、20号、21号、７号、28号土坑の上面確認、焼土を検出、土器片多数出土。第３区、第II層を削土、石鏃、石皿の断片、土器片出土。

６月15日、16日

第３区、第III層まで掘り進む、多量の土器片出土、復元可能と思われる。鉄分の浸透面なので固く作業困難。第４区、土坑14、配石土坑３、柱穴状ピット13を確認。
遺物の収納作業を行う。第２区のグリッドを設定し、第Ⅰ層、第II層削土。

６月17日～19日

第３区で第３号住居跡検出、埋甕、炉、石器、土器片が多数出土。第４区、土坑を掘削、第19号、20号、21号、28号、29号、31号、32号、33号、34号、35号の半截、実測作業、写真撮影を行う。

６月20日、21日

第３号住居跡の検出を続ける。第３区において土坑の確認を始める、石鏃、磨石、土器出土。第４区内、土坑の全掘作業を行う。

６月22日～28日

第２区、第III層を下げ第２号住居跡を確認し、検出作業に入る。第３区、土坑の半截、実測をする。第５区、第III層で焼土及び土器片が多数出土、第４号住居跡と確認する。グリッドを拡張し調査を続ける。石囲炉を検出。写真撮影、実測をする。

７月２日～４日

第２号、第３号、第４号住居跡の検出と精査を続ける。柱穴、土坑、炉を全掘、写真撮影、実測作業を行う。

７月５日、６日

第２号住居跡、周溝を確認、検出する。出土遺物が多く復元可能。土坑及び住居跡の精査、実測、写真撮影が続く。

７月７日～10日

第２号住居跡より、釣手形土器出土、周溝壁、遺物の検出を続ける。第２区～第５区において、実測と写真撮影、遺物の収納をする、遺構全体図の作成をした。

７月11日～15日

第２号住居跡の伏甕を半截及び完掘して、写真撮影、収納作業をする。第３号住居跡、炉跡の完掘、実測を行う。全体写真の撮影を行い、全作業完了。埋戻し作業を行う。

3　58年度発掘調査（第II次調査）

６月28日（火）晴れ

資材および発掘用具の運搬を行いテントを設置する。発掘場所は、住宅を取壊した所であり、木材、石、土管等が散乱しているので、作業はそれらの片付から始めた。

６月29日（水）曇りのち時々晴れ

重機により客土部分を削土(30cm程度)して、その後グリッドを組む。グリッドは、５m四方で西よりA～L、北より１～３とした。各グリッドとも東と南に50cmベルトを残して掘り下げることにした。早速C－３グリッドの瓦礫をとり除いた。

6月30日（木）曇り

B、G、L－1グリッドの北西の角に、2m×2mのテストピットを設け西側よりNo－1・2・3とした。各ピットともローム層下60cmほど掘り下げた。テストピットNo.3から石斧が出土した。A、C－3グリッドは、I～III層、B－3グリッドは、I・II層を削土した。

7月1日（金）晴れ

A－3グリッドのIII層とB－3グリッドのIII層を削土した。B－3グリッドより石斧、磨石、石鏃が出土した。又、土器片、黒曜石片も多数出土した。B－2グリッドで住居跡らしき遺構を検出した。

7月2日（土）晴れ

B、C－3グリッドのIII・IV層、D－3グリッドのII層を削土した。B－3グリッドの遺物は、平板およびレベルの実測を済ませ収納した。B－2グリッドより、石鏃、磨石が出土した。

7月3日（日）

作業休み。

7月4日（月）晴れ

C－3グリッド、III・IV層削土中、磨石3点、埋甕2個が出土した。D－3グリッドは、I～II層までを削土した。

7月5日（火）

雨天のため作業休み。

7月6日（水）曇りのち雨

D－3グリッドのII層～III層、E－3グリッドのI・II層を削土する。削土中、E－3グリッドの攪乱部より磨製石斧が出土した。B－3グリッドの遺物は、平板・レベル測量して収納した。

7月7日（木）晴れ

B－3グリッドのIV層を削土中、住居跡を検出する。第1号住居跡とし、覆土を除去した。除去中に、埋甕、石斧、スクレパーと石鏃4点、土器片多数が出土した。又D－3グリッドより、土坑が検出され深鉢も出土した。E、F－3グリッドは、I・II層を削土した。

7月8日（金）曇りのち雨

A、C、D－2グリッドは、II層、B－2、E－3グリッドは、III層を削土した。B－2グリッド攪乱部より、石斧が出土し、C－2グリッドでは、石鏃が出土した。第1号住居跡の清掃を行い写真撮影をする。C－3グリッドの、西壁土層断面の実測図を作成した。

7月9日（土）晴れ

B－2グリッドのIV層とD－2、F－3グリッドのII層を削土する。第1号住居跡より磨製石斧と磨石、C－3グリッドより石鏃が出土した。

7月10日（日）

作業休み。

7月11日（月）曇り時々雨

A－2・3、C、D－2・3グリッドのIV層、F－3グリッドのIII層を削土する。その後A、B、C、D－2・3グリッドのIV層を精査した。精査することによりA－2グリッドから焼土と柱穴3ヶ所、A－3グリッドより柱穴5ヶ所B、C－2・3グリッドより周溝、D－2グリッドより柱穴が検出された。又、F－3グリッドIII層からは、打製石斧と石鏃3点が出土した。

7月12日（火）晴れ

F－3グリッドのIII層を削土。A－2・3、B－2グリッドの北壁、西壁、B－3グリッドは、北壁の土層断面図を作成した。A、B－2グリッドは、平板・レベルの実測を行い遺物を収納した。

7月13日（水）曇り

B、C－1グリッドのI・IV層、F－3グリッドのIII層、G－3グリッドのII・III層を削土する。C－2グリッドの北壁、西壁、D－2グリッドの北壁、B－3グリッドの西壁の土層断面図を作成する。C、D－2・3グリッドは、遺構・遺物の平板・レベルを実測して遺物を収納した。

7月14日（木）晴れ

C－2、D－1グリッドのIII・IV層、F－3グリッドのIII層、G－3グリッドのII・III層の削土を行う。B－2、E、F－3グリッドIII層を精査する。C、D－3グリッドは、北壁の土層断面図を作成し、E－3グリッドは、遺物の出土状況の写真撮影を行い、平板・レベルを実測して遺物を収納した。

7月15日（金）16日（土）

雨天の為作業休み。

7月17日（日）曇り

B－3グリッドのIV層、E－3グリッドのIII層、G、H－3グリッドは、東側2mをテスト掘することになり、トレンチを入れI・II・III層まで掘り下げた。A、B－2、C－1・2グリッドの南壁とA、B－2・3東壁のベルトを外した。第1号住居跡は、周構および床面が検出され、周構より石鏃が出土した。B、C－2・3グリッドも精査することにより縄文時代の住居跡2戸（第2号住居跡、第3号住居跡）と平安末～鎌倉初頭の住居跡1戸が検出された。平安末～鎌倉初頭の住居跡に伴う柱穴も検出され完掘した。遺物は、常滑焼の破片が3片出土した。

7月18日（月）曇り

D－1グリッドのII・IV層、A、BとE－2グリッドのI層を削土する。B－1グリッドの東、南壁のベルトを外す。A、B、C－2・3グリッド内にある平安末～鎌倉初頭の柱穴を検出して完掘した。D－2・3グリッドの西壁土層断面図を作成する。D－1グリッドより伏甕が出土した。

7月19日（火）晴れ

D－1グリッドIV層、E－2グリッドは、I・II・III層、F－2グリッドは、I・II層、G－3グリッドは、III層を削土した。C、D－1・2グリッドを精査して、平安末～鎌倉初頭の柱穴を検出し完掘した。実測は、B－1グリッドの西壁と第1号住居跡南壁土層断面図、平安末～鎌倉初頭の住居跡のエレベーション4本と平板測量をした。平安末～鎌倉初頭の住居跡は、清掃を行い写真撮影をした。

7月20日（水）曇りのち晴れ

E－2、G－3グリッドのII層とF－2グリッドのII層、A、G－2グリッドI層の削土をする。B、C、D－1グリッドの北壁土層断面図の作成、第1号住居跡のエレベーション4本、第1号、第2号、第3号住居跡、平安末～鎌倉初頭の住居跡の平板・レベルの実測を行った。レベル読みの済んだ遺物は、収納した。第1号住居跡と第1号土坑の写真撮影をした。

7月21日（木）曇り

E－2グリッドのIV層、F－2、H－3グリッドのIII層b、C、およびG－2グリッドのI・II・III層を削土する。C－1・2・3グリッドの東壁、D－1・2グリッドの南壁のベルトを外す。C－1・2・3、D－1・2グリッドの精査を行う。C－3グリッドで遺構を検出した。

7月22日（金）晴れ

G－2グリッドのIII層b、C、H－2、J－3グリッドのI・II層、H－3グリッドのIII層Cを掘り下げる。C－3グリッドは、昨日の続きで検出作業を行い第4号住居跡が確認された。C、D－1グリッドより検出した柱穴および遺物は、平板・レベルの実測をして収納した。又、平安末～鎌倉初頭の住居跡と第1号土坑の微細図のための方眼区画の設定作業を行った。

7月23日（土）

作業休み。

7月24日（日）晴れ

平安末～鎌倉初頭の住居跡と第1号土坑は、22日に引き続き、方眼区画の設定作業を行う。削土は、B－2グリッドがIII・IV層、H－2グリッドは、I・II・III層、A、B、I、J、K、L－3グリッドは、テスト掘りでグリッド南側に2本のトレンチを入れた。

7月25日（月）晴れ

平安末～鎌倉初頭の住居跡と第1号土坑の平面微細図の作成に入る。第3号住居跡より炭化物と焼土を検出した。E－2、F－2・3グリッドを精査して、F－3グリッドの写真撮影を行った。H－2、K－3グリッドのトレンチは、I・II層H、I、J－3グリッドは、III層を削土した。

7月26日（火）晴れ

第1号土坑の平面微細図とエレベーション図が完了した。E－2・3、F－3グリッドの北壁と西壁、F－2グリッドの北壁土層断面図を作成する。E－3グリッドより第2号土坑を検出する。K－2・3グリッドは、I・II・III層a、bを削土した。

7月27日（水）晴れ

第1号土坑の平面微細第1図及びセクション図が完了した。E－2・3、F－3グリッドの北壁、西壁、F－2グリッドの北壁土層断面図の作成をする。E－3グリッドより土坑を検出する。K－2・3トレンチは、I・II・III層a、bを削土した。

7月28日（木）晴れ

第1号土坑の平面微細第2図の実測を行う。F－2グリッドの西壁土層断面図と平板実測を行う。G－2グリッドのIII層Cを掘下げたところで精査する。土器片が多数出土した。E－2グリッドの南壁とD－2・3グリッド東壁のベルトを外した。J－2グリッドは、I層、K－1・2・3グリッドのトレンチは、I・III層a、b、Cを削土した。

7月29日（金）晴れ

I－2グリッドのI層、K、L－3グリッドのIII層b、Cの削土を行う。K－2・3グリッドIII層より木片および土器が多数出土した。第1号土坑は、昨日に続き平面微細第2図を実測する。D－3、E－2・3、G－2グリッドは、遺構・遺物の平板・レベルの実測、H－2グリッドのレベルを実測して遺物を収納した。

7月30日（土）晴れ

E－2・3グリッドの南壁とF－2・3グリッド東壁のベルト外しを行う。K、L－3グリッドは、北壁、西壁の土層断面図を作成した。I－2グリッドは、I・II層J－2、K－1のトレンチは、III層a、bを掘りさげる。第1号土坑は、平面微細第3図の実測を行った。遺物は、E－3グリッドより埋甕の下部、F－2グリッドより、F－2、G、H－2・3グリッドは、遺物の平板とレベルの実測をして遺物は収納した。

7月31日～8月4日

盆休み。

8月5日（金）晴れ

E、F－1グリッドでI・II層、G－3グリッドでIII層aを削土する。第1号土坑の平面微細第3図が完了したのでエレベーション図の実測をする。第1号住居跡は、柱穴を検出し完掘する。平板・レベルを実測して、遺物を収納した。第2号、3号住居跡は、柱穴を掘り清掃をして写真撮影する。

8月6日（土）晴れ

E、F－1グリッドのI・II層、G－3グリッドのIII層a、bを削土する。A、B－2・3、C－3、D－1グリッドを精査して、柱穴を検出し完掘する。第3号住居跡内の貯蔵穴より、磨製石斧、磨石が出土した。G－3グリッドからもたくさんの土器が出土した。

8月7日（日）晴れ

G－1グリッドのI・II層、G－3グリッドのIII層a、bを削土する。B－2・3グリッドを精査して、柱穴を検出し、完掘した。

8月8日（月）晴れ

A－1グリッドのI層、G－1グリッドのI・II層、G－3グリッドのIII層Cを削土し、D－1グリッドは、東壁のベルトを外した。第2号住居跡内の土坑、柱穴の検出をし、完掘する。第3号住居跡の貯蔵穴より出土した石斧、磨石の写真撮影を行う。実測は、A、B、C－2・3グリッドの平板およびE、F－1グリッドの北壁土層断面図を取る。遺物は、G－3グリッドで石斧と多量の土器片が出土した。

8月9日（火）晴れ

A、G－1グリッドのI・III層、E、G－3グリッドのIII層Cの削土、E、F、G－1・2グリッドの東壁、E、G－1、F、G－3グリッド南壁のベルトを外す。C－2、D－1・2・3グリッドを精査した。D－3グリッドの柱穴を検出して、完掘した。平安末～鎌倉初頭の住居跡の土坑のエレベーション図を作成した。第3号住居跡内の埋甕2ケと第4号住居跡の伏甕を完掘した。又、遺物は第4号住居跡より打製石斧が出土した。

8月10日（水）

H－1、3グリッドは、I・II層、H－2、G－3グリッドは、III層b、Cを削土する。D－1グリッドは、精査をして、柱穴を検出し完掘する。第4号住居跡の柱穴およびピットを検出して完掘する。第1号住居跡内の埋甕のエレベーション図と第1号、2号、3号住居跡の平板測量を行う。

8月11日（木）晴れ

E－3グリッドのIII層、H－1グリッドのI層、H－2グリッドIII層b、C、H－3トレンチのI・II・III層a、bの削土をする。D、E－2・3グリッドは、精査を行い柱穴を検出して完掘した。第3号住居跡の炉及び埋甕のエレベー

ション図の作成をした。第1号住居跡の埋甕を収納した。

8月12日（金）晴れ

E－3グリッドのIII層とH－1、2、3グリッドIII層a、b、I－2グリッドのII・III層a、bの削土をして、E－2グリッドの精査をした。又、柱穴の検出をして完掘をする。G－1グリッドの北壁、西壁、G－2・3グリッドの西壁土層断面図の作成をした。第3号、4号住居跡は、エレベーション図を取り第4号住居跡の伏甕は、半截をして、平板・レベルの実測をする。E－2・3グリッドで柱穴を検出した。

8月13日～8月15日

作業休み。

8月16日～18日

台風の為作業休み。

8月19日（金）晴れ

台風でF、Gグリッドのトレンチの大部分が水没してしまったので、消防ポンプを借りて排水した。H－1グリッドのIII層a、I、J－1グリッドのI層を削土して、C、D－1、D、E－2グリッドの精査を行う。C、D－2・3グリッドの柱穴を検出して完掘する。第4号住居跡の炉の半截とエレベーション図の作成をした。

8月20日（土）晴れのち曇り

I－1グリッドのI・II層とI－2グリッドのII・III層a、bの削土及びF－1グリッド東壁のベルトを外す。実測は、G、H－2グリッドの北壁土層断面図とH－1、2、G－1・2、F－1グリッドの遺物出土状況の平板測量を行った。

8月21日（日）

作業休み。

8月22日（月）曇りのち晴れ

H－2・3、I－1グリッドは、III・IV層、J－1グリッドは、II・III層a、bの削土をし、G－1、F、G－3グリッドは、東壁、G－1・2グリッドは、南壁のベルトを外す。F－2・3グリッドは精査を行う。E－2グリッドでピットが検出されたので完掘した。又、D、E－3グリッドでも土坑が検出され半截をしてエレベーション図を取り後に全掘した。

8月23日（火）曇り

F、G－2・3グリッドの精査を行う。トレンチの部分を更に掘り下げた。実測は、H－3、I－1グリッドの北壁土層断面図と第2号土坑の平面微細図、エレベーション図を2本取った。土坑内より出土した遺物は、レベルを測り収納した。

8月24日（水）曇り

F－1グリッドのIII・IV層の削土とG－2・3グリッドのベルトを外す。H－3グリッドは、西壁の土層断面図、第2号土坑、ピットは、エレベーション図を作成する。E－3、F、G－2・3グリッドの遺物を平板実測する。D－1グリッドの北壁で、ピットが検出されたので、E－1グリッドより検出したピットを第1号、本日検出したピットを第2号ピットとした。

8月25日（木）曇りのち晴れ

H－1・2グリッドの南壁ベルトを外す。E、F－1グリッドで柱穴の検出をしていると遺構が検出された。調査をしていくうちに、円形土坑が、達磨状に2基ある事が判明した。実測は、F、G－3、G－1・2、H－1グリッドの西壁土層断面図と第2号ピットの平面微細図及び、エレベーション図の作成をした。遺物は、F、G－2・3のトレンチより石斧、石鏃3点と多数の土器片が出土した。

8月26日（金）曇り時々晴れ

E、F、G－Iグリッドを精査して、F－1グリッドで遺構の検出をする。第1号、2号の円形土坑の土層断面図を作成し、F－2グリッドの土器群に方形区画の設定をして、微細図を取る。E、F－1グリッドの遺物の出土状況を平板実測する。

8月27日、28日

作業休み。

8月29日（月）晴れ

G－1、F－1・2グリッドのIV・V層を精査する。F－1グリッドで遺構を検出する。周囲の柱穴の検出状況から第5号住居跡とする。住居内には、炉及び土坑が検出され炉を半截する。F－1グリッドで検出した方形遺構の平面微細図とF－2グリッドの土器群の微細図は実測をして遺物を収納した。

8月30日（火）晴れ

G－1グリッドのIII・IV層を精査する。F－2グリッドも精査して、柱穴を検出し完掘する。実測は、方形土坑のエレベーションを取り第2号ピットは平面微細図とエレベーション図を作成して土器のレベルを測り収納した。

8月31日（水）晴れ

G－1グリッドを精査して、第6号住居跡を検出する。第5号住居跡に、方形区画の設定をして平面図とエレベーション図を作成した。

9月1日（木）晴れのち雨

H－2グリッドの南壁を外し、G－1・2グリッドのIV、V層を精査する。第5住居跡は、昨日に続きエレベーション図をとる。G－1・3、H－3グリッドの北壁の土層断面を実測する。

9月2日（金）曇りのち晴れ

I－2グリッドのII・III層を削土する。H－2グリッドは、南壁のベルトを外して、IV層まで削土する。E、I－1、H－2、E、F、G－3グリッドの北壁直下に20～30cmのサブトレンチを入れ遺物と土層の出土状況をみる。第6号住居跡より敷石が確認された。

9月3日（土）晴れ

G、H－1・2グリッドの精査をする。I－1グリッド西壁土層断面を実測する。第5号住居跡は、土坑を半截し、エレベーション図を取ったあと完掘する。第6号住居跡に伴う柱穴を検出して完掘する。F、G－2グリッドより土器片が多数出土した。又、深鉢のほぼ1個体になった物も出土した。

9月4日（日）晴れ

I－2、F－3グリッドのIII層a、Cの削土と、H－1グリッドの東壁ベルトを外す。G－2グリッドは、V層の精査を行う。G－3グリッドの谷頭を掘る。第5号住居跡の土坑は、2基ある事が判明した。

9月5日（月）晴れ

H、F－3グリッドのIII層C、IV層を削土して、G－2グリッドの精査を行った。G－3グリッドは、谷頭を掘り、F、G－2・3、H－2グリッドは、遺物の平板・レベルを測量して収納した。F－2グリッドは、土器群の平面微細第2図

を作成した。遺物は、F－3、G－2グリッドより石斧が出土した。

9月6日（火）晴れ

F、G、H－2・3グリッドV層上部の精査を行う。第5号住居跡の平面微細図及び、エレベーション図7本を実測する。

9月7日（水）晴れのち曇り

G－1・2・3、F、H－2・3グリッドのVI層下部を精査する。G－3グリッドの南壁に平行して、トレンチを入れ谷頭を掘る。(黒色土層)第5号住居跡の平面実測図が完了した。

9月8日（木）曇りのち晴れ

F、G－2・3、H－1・2・3グリッドのV層の精査を行う。G－2・3、H－1・2グリッドの遺物の平板及びレベルの実測をして収納した。

9月9日（金）晴れ

F－3、G、H－2・3トレンチのVI層の精査掘削をする。F－3グリッドは、南壁と平行に、1.5m巾のトレンチを入れる。G、H－2・3グリッドの遺物は、平板とレベルの実測をすませ収納した。

9月10日（土）曇りのち晴れ

F、G－3、H－2トレンチのVI層を精査をする。実測は、D－1・2・3、E、F－1・2・3グリッドの平板実測を行い土層断面図は、G－1・2・3 F－2・3トレンチの西壁土層断面を実測した。

9月11日（日）

作業休み。

9月12日（月）曇りのち晴れ

H－1・2・3グリッドのV層を精査する。F－1グリッドで確認された方形土坑跡は、全面検出をする為に北側を拡張することにした。H－1・2グリッドは、平板・レベルの実測を行い遺物を収納した。

9月13日（火）晴れ

H－2・3グリッドV層の精査とF－1グリッドの拡張部を削土した。H－2グリッドは、北壁、西壁の土層断面図と平板及びレベルの実測をして、遺物を収納した。

F－1グリッドの拡張部を掘り下げ平安末～鎌倉初頭の方形土坑を全面検出した。又G－1グリッドの第6号住居跡も全面検出するため拡張することにした。拡張部は、石や土が積みあげてあるので、重機を使って除去する事にした。

9月14日（水）晴れ

G、H－1グリッド北側を（10m×5m）重機で掘削をする。H－3グリッドの谷頭及び河床は精査検出をする。H－1・2・3トレンチは、西壁土層断面の実測をした。本日より作業は現在検出されている遺構の完掘のみにしぼる。

9月15日（木）

作業休み。

9月16日（金）晴れ時々曇り

G－1グリッドの拡張部を削土する。方形土坑は、平面微細図とエレベーション図の作成及びレベルの測量をした。

9月17日（土）晴れ

G、H－1グリッド拡張部のIV・V層を削土する。第6号住居跡の床面廻石の検出を始める。第1号住居跡も全面検出する為A－3グリッド南側を拡張する。

9月18日（日）

作業休み。

9月19日（月）曇り

H－3トレンチの谷頭を削土し川底を検出した。精査していると桃の果核多数と木椀、木片が出土した。第1号住居跡は、南側拡張部で床面を検出した。検出中石斧、石鏃、多数の土器片が出土した。第6号住居跡は、平面微細図をとるため方眼区画を設定した。

9月20日（火）曇り午後雨

第6号住居跡の平面微細図を作成する。B－3グリッド拡張部より第7号住居跡の周溝と方形土坑が検出された。H－3トレンチは、精査すると谷頭より木椀などの木製品、須恵器、土師器、桃の果核が出土した。午後は、雨のため作業を打ち切った。

9月21日（水）曇り

H－3トレンチ谷頭の河川を精査する。木製品が出土した。B－3グリッドの拡張部で第1号住居跡の床面、周溝の検出作業をする。第6号住居跡の平面微細図の作成を完了した。

9月22日（木）り

H－3トレンチ平安末～鎌倉初頭の谷頭の確認作業を行う。第6号住居跡の炉を半截し、微細図及び断面図の作成をし、写真撮影を行う。B－3グリッド拡張部の第1号住居跡の床面および柱穴を確認して、住居南側の平安末～鎌倉初頭の遺構を平板実測した。

9月23日（金）晴れのち曇り

第2号住居跡と第6号住居跡の炉と埋甕の堀り方を、完掘する。その後、清掃をして写真撮影をする。

9月24日（土）

雨天のため作業休み。

9月25日（日）曇り夕方雨

第4号住居跡の炉の掘り方を完掘する。第1号住居跡の炉とD－2グリッドで検出された焼土2ケ所を半截する。C、D、E、Fグリッド全体を清掃して遺構の写真撮影をした。又、遺跡の遠景写真を撮った。

9月26、27、28日

雨天のため作業休み。

9月29日（木）曇り

長雨の後なので全グリッドを精査する。第1号住居跡の炉の半截および掘り方を全掘した。仲道A遺跡の発掘も本日が終了予定となっており、図面の取残しや作業の残りの有無等を確認しながら仕事を進めた。

9月30日、10月1日

第1号住居跡の炉、その南側にある第3号土坑、第7号住居跡を完掘する。第7号住居跡の周溝検出中、土坑が(第4号土坑)が確認された。猛暑の中汗を拭き拭き頑張った発掘調査の全課程を終了した。

第Ⅳ章　発掘調査報告

第1節　予　備　調　査

1．層　序

予備調査によって確認された層序は、表土層から削土部下辺までの第Ⅰ層～第Ⅶ層であったが、住居跡や土坑のプランが確認された、調査区の東壁を以て基本層序とした。

第Ⅰ層　表土層。昭和34年に公民館を建てる時の盛土であり、砂利を含んでいる。層厚は30～40cmである。

第Ⅱ層　灰褐色土層。旧耕作土、調査区全体に検出されている。層厚は約20cmであった。

第Ⅲ層　黄褐色土層。水田の床土（鉄分を含んだ層）であり、層厚は７～８cmであった。

第Ⅳ層　黒色土層。調査区の北側（傾斜地）へ行く程顕著に認められた。パーミスおよび若干の焼土を含んでいる。腐食性の有機質土である。層厚は10～20cmである。

第Ⅴ層　暗褐色土層。縄文中期の包含層である。第２号住居跡としたもののプランは、本層を切り込み、住居内に見られる土坑２基は第Ⅵ層の上面を切り込んでいる。

第Ⅵ層　茶褐色土層。ソフトローム漸移層である。赤色スコリアを含んでいる。層厚は30～50cmである。

第Ⅶ層　黄茶褐色土層。ソフトローム層である。本層は、今回の調査地区において確認された最下層である。

2．遺構と遺物

第１号住居跡（第６図）

工事区の中央に残された4.7m×2.4mの島状の部分より検出された住居跡。東南側のプランが確認されているが、他はすでに削土されており不明。壁高は、確認面より僅かに５cmと低い。柱穴状のピットはプラン内および壁際より６個検出されている。ピットの径は18～42cm、深さは24～52cmを測る。床面はわりあい良く固められている。住居跡の中央やや右側に70×65cm（推定）の方形を呈する石囲い炉が検出されている。北西側の炉石は残存しないが、工事中（削土）数個の石が確かに検出されたと言う事である。住居内からは3つの土坑が検出されているが、この内第１・２号土坑としたものは覆土が黒褐色を呈しており、当地方で普遍的に見られるもので、歴史時代のものと考えられる。１は西側が削土されているため不明である。２は長径88cm、短径82cmのほぼ円形を呈する土坑である。最深部での深さは13cm前後であり浅い。該期の遺物はなく、縄文中期の土器１片が混入していただけである。3は長径148cm、短径106cmの楕円形を呈するもので縄文中期末葉と考えられる。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは北西側がゆるやかで、南東側（住居壁際）では急である。切り合いの状態から本土坑は住居跡より新しい。遺物は土器３点が出土している。また遺構外からは、いわゆる集石土坑が検出されている。94×

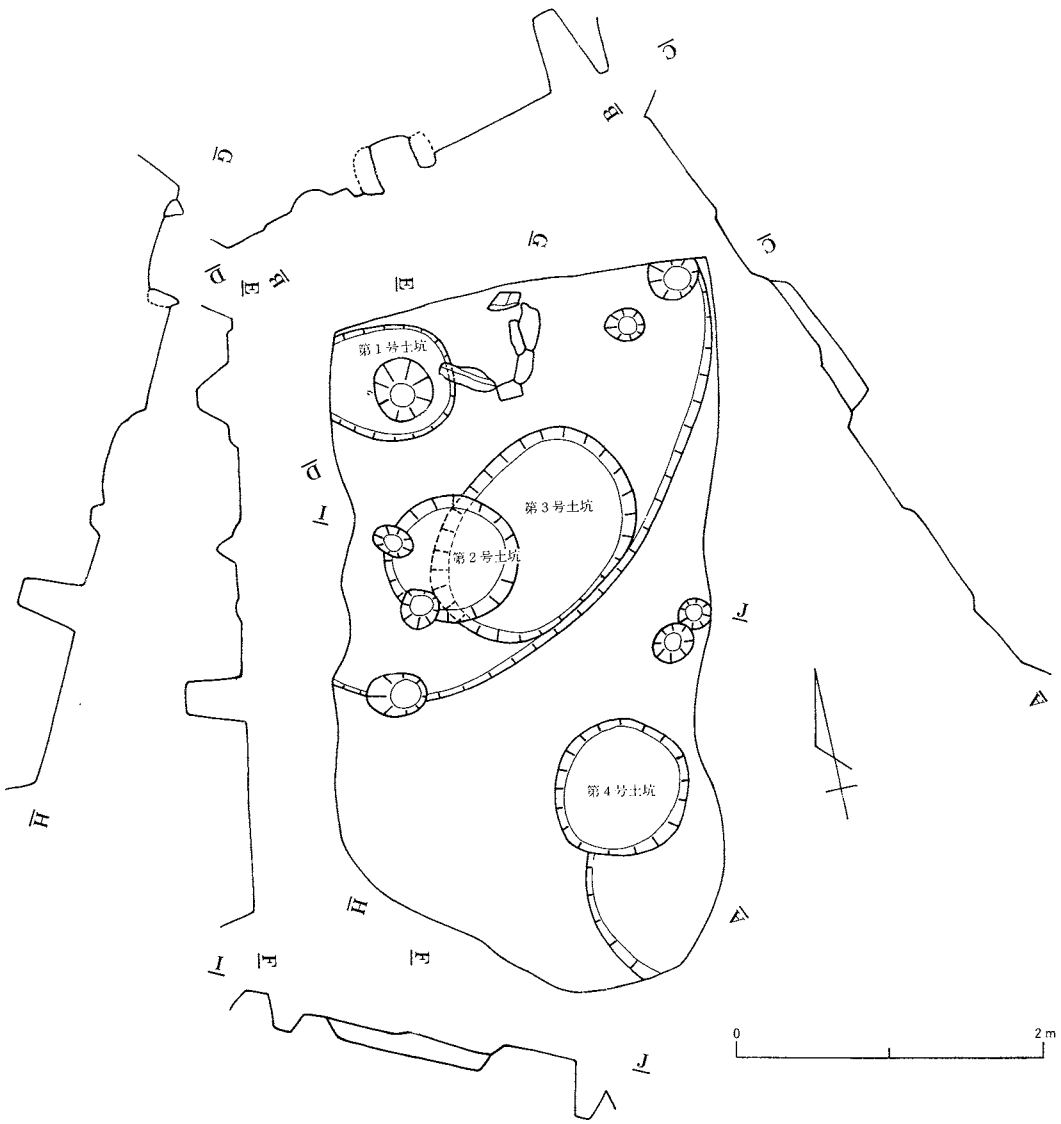
90cmのほぼ円形を呈するものである。底面は平坦であり、最深部での深さは8cmしかない。遺物は土器口縁部が2点出土している。さらに、本土坑の下部より別の土坑のプランが一部検出されたが、東側が削土されており全容は確認出来なかった。

遺物は、土器のみであるが炉内および床面上より検出され、前述のようにそれぞれ土坑より出土している。(第7図)これらの土器のほとんどはほぼ同一時期のものであり、おそらく曾利III式～IV式および加曾利E3式期の範疇に収まるものであろう。1は口縁に波状隆起を持ち、斜めあるいは弧状の沈線を有し、細い条線が描出されている。5は隆起帯(隆線)による懸垂文が施され、この区画の中を斜行する縄文で充填させている。また、この縄文の中に大きく蛇行する沈線が見られる。13は口縁を沈線によって渦巻状あるいは逆U字状に区画しており、幅広い隆起帯を懸垂させている。沈線の区画の中には、縦の条線が施され、さらに蛇行する沈線が2条見られる。

3．小　結

予備調査によって検出された住居跡は、その石囲い炉の形態(八ケ岳南麓におけるVII期)からすれば、おそらく曾利III式期の構築であろう。当町茅野B遺跡に見られる石囲い炉に近い様相を示している。炉跡はその残存する大石の部分が焚き口であろうと思われる。炉の深さは40cmである。本住居跡と第2号土坑はその切り合いや遺物などから前者の方が古いものであると既に指摘したが、時間的な幅はそれほどあるとは考えられない。また、第1号土坑は焼石が充填しており、おびただしい焼土が検出されている。さらに、削土された周囲の壁を精査した結果、東壁より2つの住居跡のセクション(第I次調査によって検出された第2号・第3号住居跡)と2つの炉跡(第3号住居跡内の第3号・第4号炉跡)が確認された。

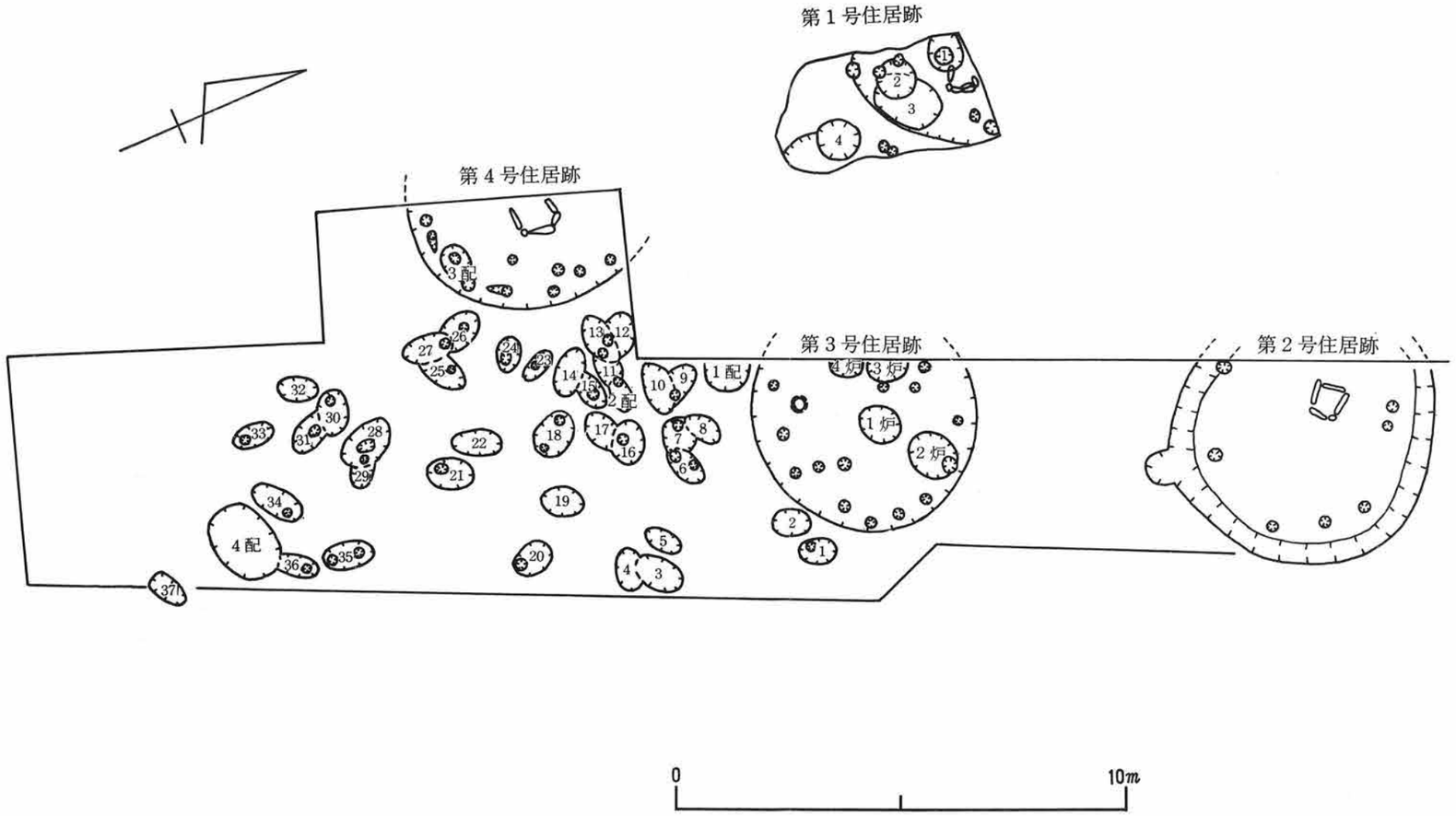
昭和43年に公民館を建設する際工事人と立ち合ったが、黒色土が厚く堆積しており、また場所によっては包含層までかなり攪乱されている状態であった。このため若干の土器片が出土したものの、遺構等は確認出来なかった。しかし、何等かの遺構は存在したものと考えられる。今回の調査区はその当時の続き(東側)であり、当初より遺構の存在は予測していた所であった。検出された第1号住居跡はその石囲い炉や出土した土器などから、それまで言われて来た時期(縄文中期中葉)よりやや新しいものであった。また、これと重複、あるいは切り合って検出された4つの土坑の内、第1号・2号円形土坑は歴史時代の所産である。この事は、本遺跡の持つ時代の幅を窺わせるものであり、今後の調査による類例の増加と該期に属する遺物の検出が望まれる所である。



第6図 予備調査第1号住居跡実測図

1～5　第1号住居跡　6～9　炉　10　第1号土坑　11　第2号土坑
12.13　第3号土坑　14～16　第4号土坑

第7図　予備調査第1号住居跡出土土器拓影(1)



第8図 予備調査・第Ⅰ次調査遺構関連実測図

第2節　第Ⅰ次調査

1．層　序

第Ⅰ次調査によって確認された層序は、表土層から遺構検出面までの第Ⅰ層～第VI層までであった。基本的な層序は、遺構の切り込み状況の良く分かる第3区と第4区を頼った。

第Ⅰ層　表土層。公民館を建てる時に入れられた盛土である。砂利を多く含んでいる。層厚は約10cmであった。

第II層　灰褐色土層。旧耕作土、調査区全体より検出されている。層厚は約20cmであった。

第III層　黄褐色土層。水田の床土（鉄分を含んだ層）であり、層厚約7cmであった。

第IV層　黒色土層。調査区の所々で検出されたが、層としてはっきり捕らえられず、むしろ第III層に混入しているように観察された。(第4区東壁)パーミスおよび焼土を若干含んだ腐食性の有機質土である。

第Ⅴ層　暗褐色土層。縄文中期の包含層であり、検出された遺構は本層下部より第VI層を切り込んでいる。層厚は約20cmであった。

第VI層　茶褐色土層。ソフトローム漸移層である。赤色スコリアを含んでいる。本層は、菖蒲ケ池A遺跡では第III層にあたり、撚糸文および沈線文土器の包含層である。また、大平A・C遺跡では第IV層に対比され、押型文土器や撚糸文土器が検出されている。

2．縄文時代の遺構と遺物

a．遺　構

調査区は極めて狭い範囲であったにもかかわらず、北側に住居跡、南側に土坑群が全面的に検出されている。予備調査と今回の調査によって、台地端際にまで住居が作られている事が分った。また、それらの保存状態はわりあいに良かったといえる。調査区は、以前水田であったが幸いにも耕作が浅く、遺物包含層は上部面において若干削られてはいるものの、わりあいに良く残されていた。

縄文時代の遺構として、円形竪穴住居跡3基、土坑41基が検出されている。

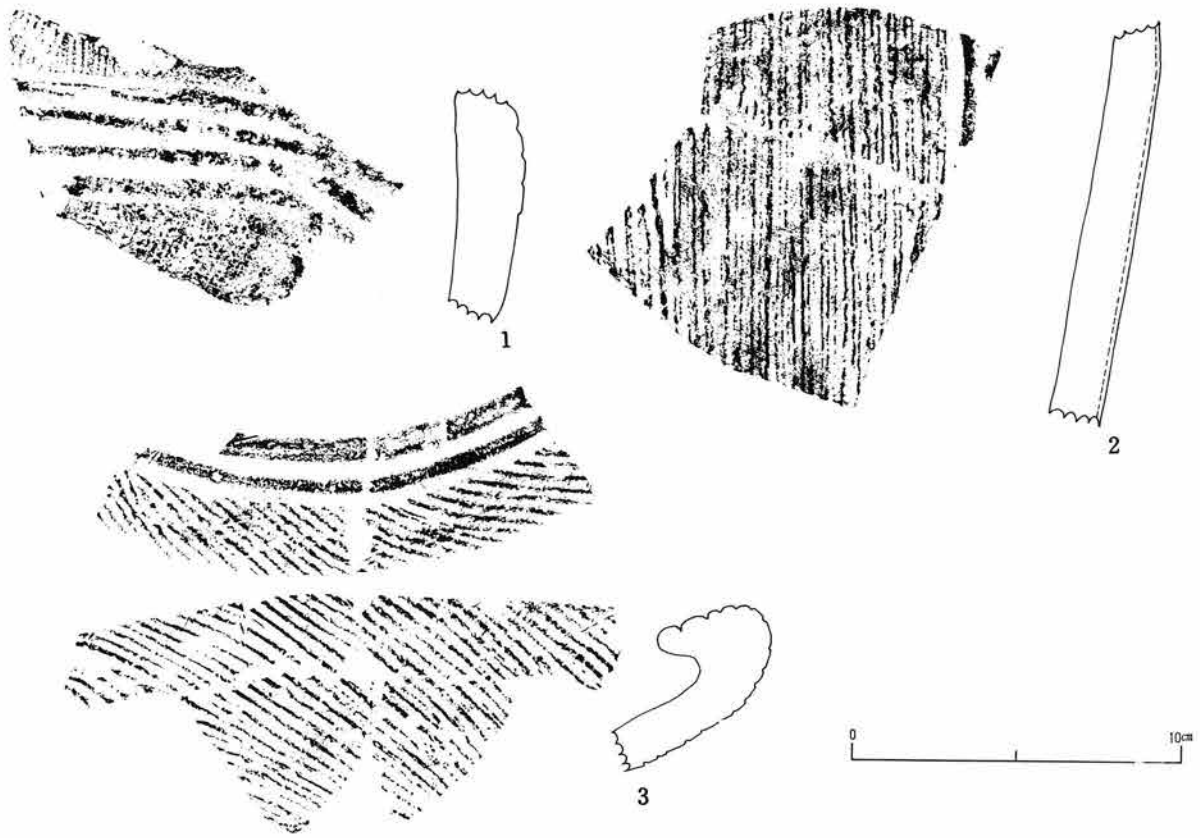
イ．住居跡

第2号住居跡（第10図・図版5～10）

調査区の北端部、第2区内で検出された住居跡。南北の径約6mを測りほぼ円形のプランを呈するものと思われるが、西側は未調査区であり不明となっている。壁高は確認面より40～54cmを測る。床面と壁の間には幅26～70cm、深さ10～30cmの周溝がめぐっている。南側中央には入口と見られる突出部がある。柱穴は8本検出されているが、西側については未調査であり不明。また、周溝内にも柱穴と見られるピットが検出された。柱穴の径は20～35cm、深さは30～75cmであった。床面は非常によく踏み固められている。住居跡の中央よりやや北西側に、90×65cmのやや長方形を呈する石囲い炉が検出されている。石材は、当町小室の棒石山より産出する六方石を用いている。炉跡内には、およそ20cmの焼土が堆積していた。炉内の覆土は4層に分

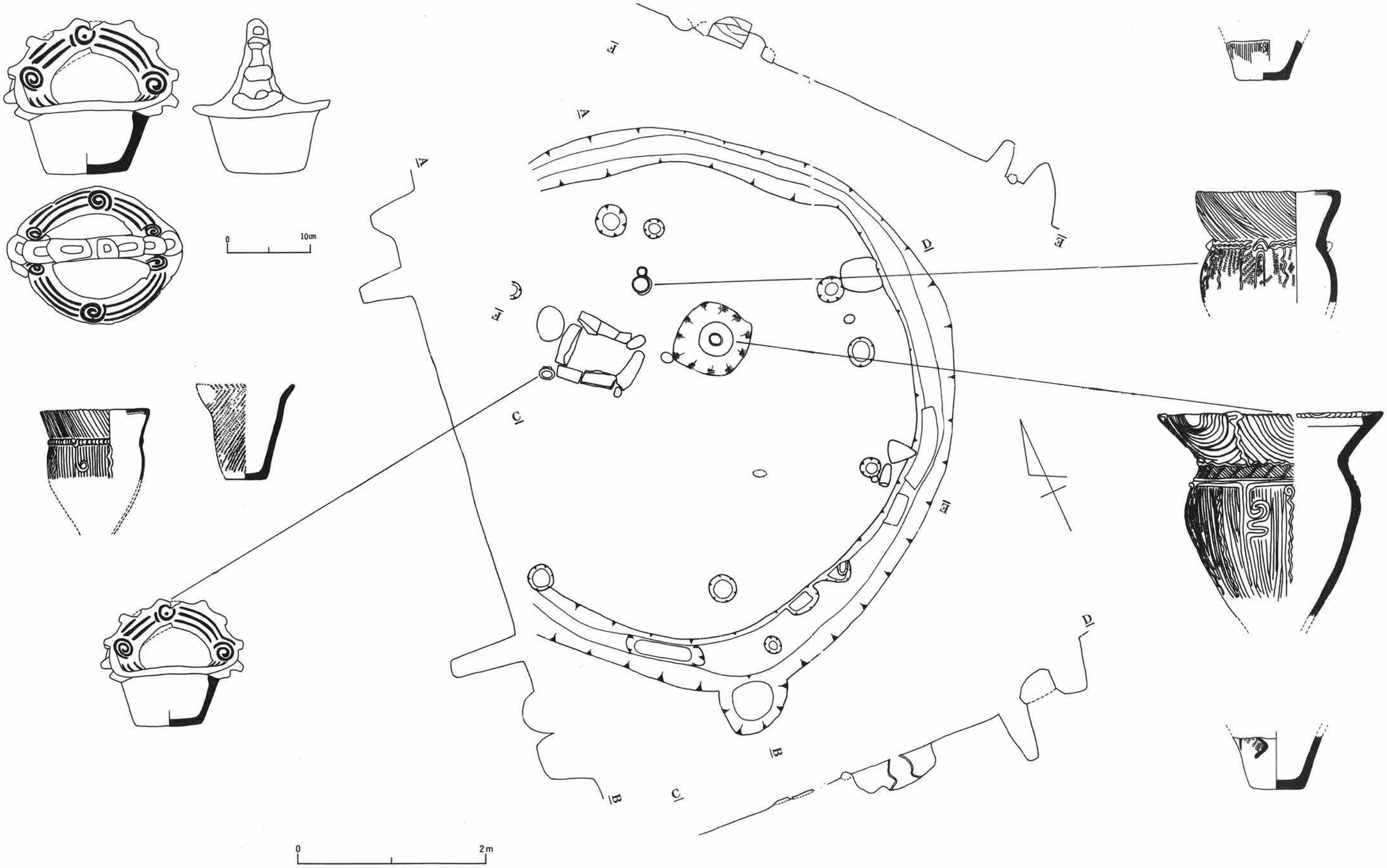
けられ、1・2層は焼土炭化物をそれぞれ少しずつ含んでおり、3層は全く焼土だけで充塡している。さらに4層は骨紛混じりの炭化物粒となっている。

遺物は、炉跡のすぐ西側において釣手形土器（第10図・図版6・7）が、また炉跡の東側からは伏せ甕（第10図・図版8・9）が出土し、この他第9図で示したように、いずれも曾利II式に比定される土器が、床面全体より検出されている。釣手形土器は、浅鉢状の本体にアーチ状の釣手を付けたものである。装飾としては、この釣手に把手状のコブが6つ（現存）付けられている。さらに、釣手の両側面と口縁上には竹管状工具による渦巻および平行沈線が施されている。また、土器の内外面には煤が付着しており、何んらかの使用を窺わせるものである。伏せ甕は、土器の大きさの割に掘り方を広く取って埋設されていた。器内には、僅かながら骨粉とおぼしきものが残されていたが、人骨・獣骨のいずれであるかは不明。文様は、口縁部・頸部・胴部の3つの文様帯を示しており、口縁は、力強い半円の沈線が同心円状に重ねられているもので、いわゆる直弧文である。単位毎に蛇行させた粘土紐を縦に貼り付け、さらに頸部との仕切に波状に粘土紐を付けている。頸部は、斜めの条線上に粘土紐を交叉させ、籠目状になっている。胴部は、縦の条線を基調とした中に粘土紐を直線と渦巻、あるいは波状に垂下させている。石器は、打製石斧16点、磨製石斧1点、石鏃8点、スクレーパー1点、磨石3点、凹石1点、敲石1点、石皿6点、石棒2点が床面全体より出土している。（第41・42・44～50図・図版27～32）



1～3　第2号住居跡内炉跡

第9図　第Ⅰ次調査第2号住居跡（炉内）出土土器拓影(2)



第10図 第Ⅰ次調査第2号住居跡実測図

＊第２号住居跡の遺物出土状態と住居の性格

第２号住居跡の構築時期は、出土した土器等によって曾利II式期と推定されるが、遺物の出土状態や住居の構造から、その機能・性格について若干の所見を提示してみたい。

まず、住居の位置と構造についてはその構築場所が台地の端部にある事と、直径約６mのやや大型の規模を有し、南側に階段状の入口を持つしっかりとした構造の住居である事が分かる。また、幅広でかなり深い周溝が巡っている。

石囲い炉は、前述の通り小室の棒石山（標高121m）産出の玄武岩の柱状節理（通称・六方石）を使用している。これは、向原遺跡の第３号住居跡内に設けられた炉と非常に良く似ている。この炉は、住居の西隅寄りに位置しておりやや特異な感じを受けるが、本住居跡の炉の配置と近似した様相を呈している。ただ、向原の第３号住居跡については、住居内中央にある焼土の堆積部（若干の凹みを持つ）とこれに近接した床面上より倒置状態で検出された深鉢形土器（曾利Ｉ式併行）の状況などから、構築時期にいささかの懸念を持つ所であるが、向原に見られる石囲い炉は曾利II式期以降の特徴を示すものである。調査者によれば、「……発見された土器は入谷平II式（加曾利ＥⅠ式）土器であるので、やや先行する例といえよう」とし、また、住居が重複している疑いのある事を指摘している。（小野1971）いずれにしても、本住居跡の炉は３辺に角ばった長い石を埋め込み、焚き口と思われる一辺にやや丸みを帯びた石３個を配置している。これは、八ケ岳南麓における炉形態の変遷によるVI期にあたる。

床面直下に残された土器は、床面下に埋設されていた伏せ甕と共に曾利II式であり、石囲い炉の時期に一致している。従って、炉跡と遺物は本住居跡に伴うものである事は信用できるであろう。そこで、遺物の出土状態を観察してみよう。北西側の炉縁に接して釣手形土器が長軸を炉石と平行にして、前のめりに底部が床面中に僅かに埋まった状態で検出されている。そして、その北隣には石棒と石皿が並んでいた。さらに、住居内東南隅の柱穴際には、これを取り囲む様に、磨石・石棒・石皿が検出されている。この内、石皿は床面に斜めに突き刺さっており石棒はこれに直角に対応している。また、磨石は石棒の左脇に並んでいた。この他に、炉跡周辺からは少くとも５個体以上の深鉢形土器が天地を逆にして、あるいは倒置若しくは押し潰された状態で見つかっている。

こうした一連の出土状況をどの様に解釈したら良いであろうか。例えば、釣手形土器の遺存状態を藤森栄一氏は『井戸尻』の中で、「……今まで、吊手形土器は竪穴住居跡上層の黒い堆積中で発見されるのが多かったが、例えば、曾利５号のように、竪穴が腐朽倒壊する場合、最後に梁と共に落下して埋没した、そのランプとしての所在位置を、意味するのかもしれないと思われる。」と言っている。（藤森1965）また、岩崎孝治氏は『穴場Ⅰ』に、釣手土器が石棒に凭れ掛かるように検出された事を紹介、「……単に転んだと解するには無理がある。ましてや開口部が石棒に密着しているさまは、とうてい偶然の成せる業とは考えられない。」と指摘している。（岩崎1983）それでは、仲道の場合はどうであろうか。本住居跡の釣手形土器は、穴場Ⅰに見られる―ある意味をもって、その様な状態に置いた（セットした）、その姿そのままに、―と言

う様な在り方に良く似ている。器内および口縁と胴部、さらには釣手部側面に煤状の付着が見られランプとしての機能を持つものであった事の証明になるであろう。しかし、使用回数はそれほど多くないものと思われる。

釣手形土器の横にある石棒（下部欠損品）と石皿（表面を上にして）は両者がセットで何等かの作業を行った状況を想像させるものである。また、これらの延長線上（東南）の柱穴際にある磨石・石棒（下端部欠損品）・石皿の3点セットの在り方は、まさに何かを意識した状態を物語っている。床面中に斜めに刺さった（当時はおそらく直立していたものであろう）石皿の裏面に石棒の先端が喰い込まんばかりに置かれている様は、なんとも異様な光景である。これは、穴場の場合とは逆の関係に配置されている。しかし、そこに見られるある種の意識には、明らかに共通性が感じられる。石棒は、片面に火を受けたらしい痕跡が残り、煤の付着が見られる。（加熱によるものか、意識してか抉られた様に割れている）この他、床面上に磨石と石皿が各4点ずつ残されていた。

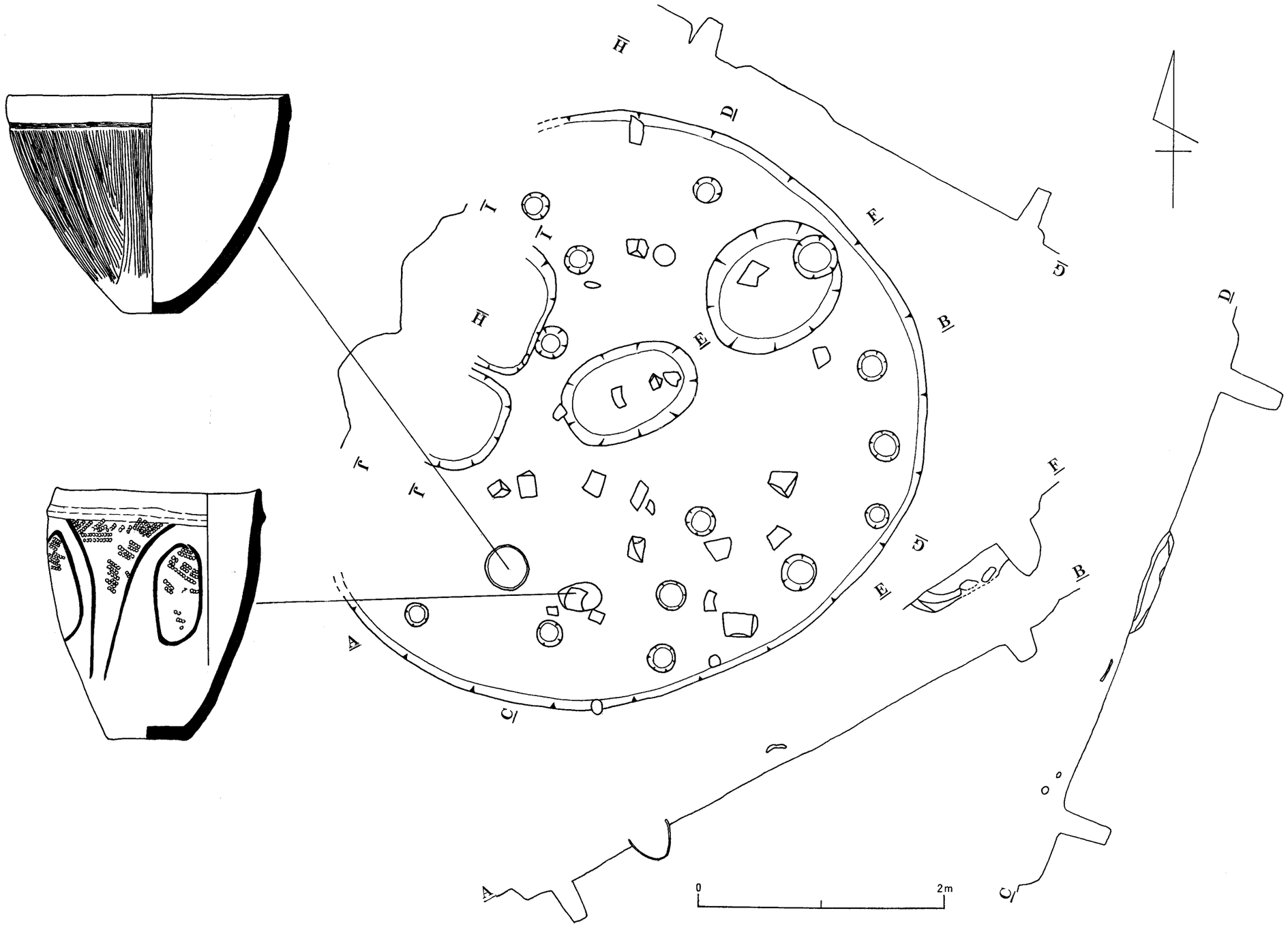
穴場の例とはっきり違う点は、火災等の事件や火入れ行為の痕跡は認められない事である。加えて、石棒の位置が穴場の様に住居跡内の北壁中心に置かれているのに対して本住居跡では東南側に見られる事である。（向原の第3号住居跡では、住居跡内北西壁際に立てられており、穴場の例に近い）

いずれにしても、本住居跡は宗教的遺物とされている釣手形土器や、床面下に埋納された深鉢形土器（伏せ甕）や石棒・石皿など、特殊な遺物が目立っている事と、また、一住居が保有し得る生活用具は一応備えている事である。さらに、仲道A遺跡全体から見れば台地の北端部にあり、他の住居とはやや一線を画した場所に位置しているようである。おそらく、集落の中では重要な役割を担った家であったものと考えられる。この様な特殊な住居が、いかなる理由によって廃棄され埋没したものであろうか。炉を中心とした多くの遺物や、壁際にセットされた石棒・石皿などの状況を見ると、祭祀的行事が行われたまま、あるいは直後の状態を彷彿と感じさせるものがある。すなわち、本住居跡はある時その使命を終えてやむなく廃棄される事になった。しかし、火入れは行われる事はなく、そのままの状態を土で埋め戻されたと推測するのがより自然の様な感じがしてならない。それは、床面下の伏せ甕内に埋葬されたであろう「なかま」への思いやりと解釈できないであろうか。

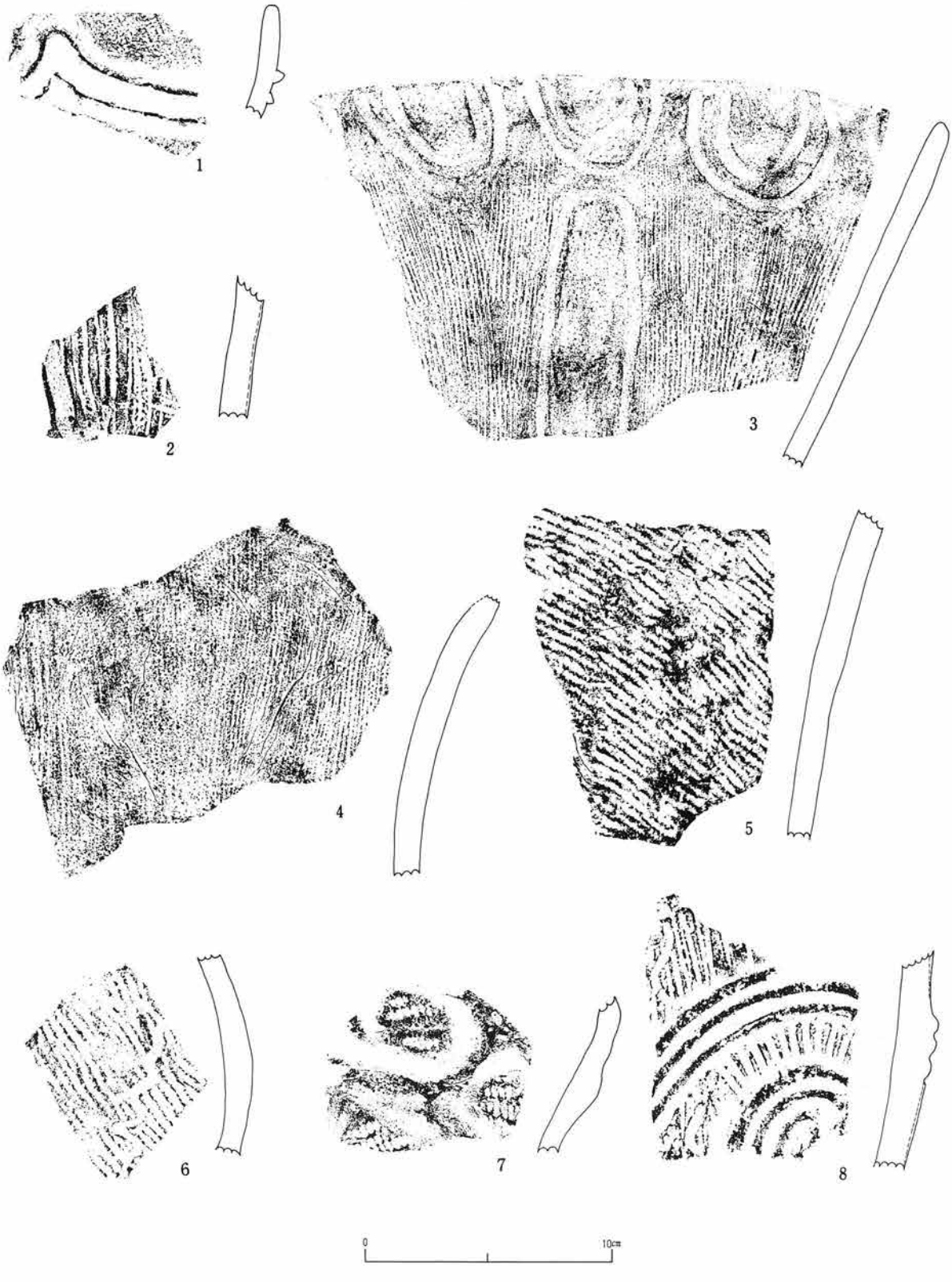
釣手形土器という、特殊な形態の宗教的遺物は、当町では勿論初めての出土であり、筆者の知見では県内ではこの他、裾野市富沢の細山遺跡から仲道のものに酷似した釣手形土器が出土しているだけと記憶している。本住居跡は、縄文仲道人の生活の一断面を、まさにそのまま再現してくれている様である。

折井　敦　1977「八ヶ岳南麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察」長野県考古学会誌28　縄文中期試論特集　長野県考古学会

岩崎孝治他　1983「穴場Ⅰ」　長野県諏訪市穴場遺跡第5次発掘調査報告書　諏訪市教育委員会・穴場遺跡調査団

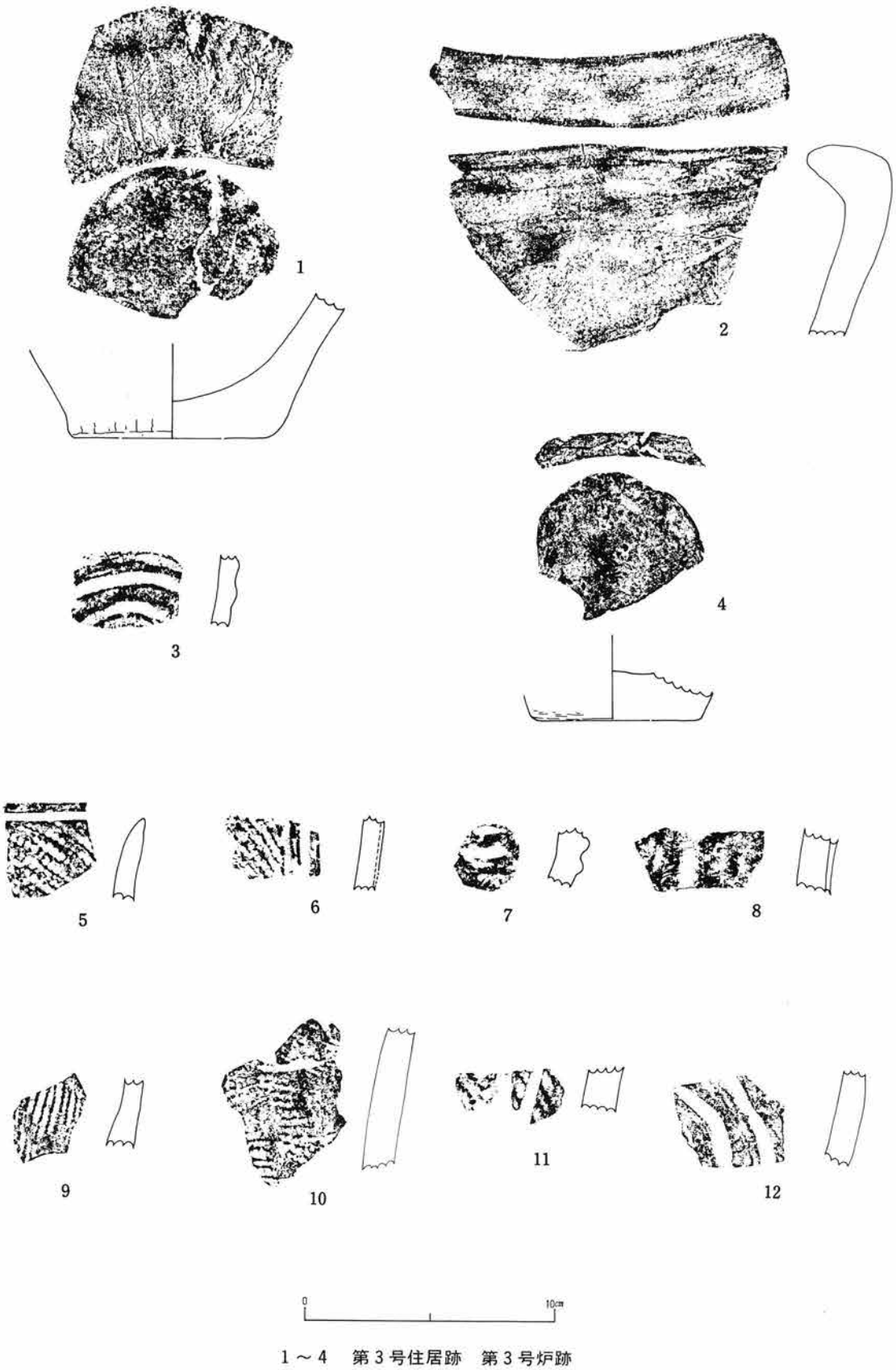


第11図　第Ⅰ次調査第３号住居跡実測図



1．2　第3号住居跡　第2号炉跡　3～8　第3号住居跡　第3号炉跡

第12図 第Ⅰ次調査 第3号住居跡（炉内）出土土器拓影(3)



1～4　第3号住居跡　第3号炉跡
5～12　第3号住居跡　第4号炉跡

第13図 第Ⅰ次調査 第3号住居跡（炉内）出土土器拓影(4)

第３号住居跡（第11図・図版11～15）

第２号住居跡の南側、第３区内で検出された住居跡。南北の径4.9mほどであり、ほぼ円形を呈するものと推定される。しかし、第２号と同様に西側は未調査であり不明である。壁高は、確認面より10～18cmを測る。柱穴は14本検出されたが、西側は不明。柱穴の径は20～38cm、深さは20～50cmであった。床面はわりあいに良く固められている。住居跡の中央・北西隅・西隅に４つの炉跡が検出されている。このうち、第２号炉としたものは120×95cmの楕円形を呈するものであり、おびただしい焼土とともに大小の焼礫・土器片等が検出されている。いわば、集石炉としての様相を示すものである。しかし、この炉が本住居跡に伴うものとするにはあまりに不適当な場所に位置しており、やはり第１号炉を以て本住居跡の炉とするのが妥当であろう。そこで、調査者間においては本住居跡と切り合う別の住居跡が東側に存在するものと予想したが、予定区域外である事と調査日数の関係から、本住居跡を完掘するに留めた。第３号・第４号炉としたものは、底面に焼土や土器片が残存するものの「炉跡」と言える積極的な根拠は持たない。第１号炉内の覆土は３層に分けられる。１層は焼土を含む暗褐色土層、２層は焼土のみの層、３層は焼土を含む黄褐色土層となっている。

遺物は、床面全体よりおびただしく検出されている。第11図・図版26―３の深鉢は、口縁を隆起帯が一巡しており、胴部は沈線によって長円形ないし弧状に区画した中に縄文が施されたものである。加曽利Ｅ４式に比定される土器であろう。また、第11図・図版26―４の土器は、口縁にやや幅広の沈線が巡り、胴部全体に細い条線が縦位に施されている。やはり、加曽利Ｅ４式に比定されるものであろう。いずれも、床面南側で検出されているが、前者は倒置状態での出土であった。また、後者は埋設されたものであるが、器内には何等収納物は見られなかった。

石器は、打製石斧１点、磨製石斧１点、石鏃７点、楔形石器１点、磨石１点、敲石１点、石皿１点などが出土している。（第41、42、45、47、48、50図・図版27～28・30・32）

第４号住居跡（第15図・図版16・17）

調査区の西南隅、第５区内（拡張部）で検出された住居跡。第２号・第３号と同様に西側は未調査であり不明。南北の径５ｍ余のほぼ円形を呈するものと推定される。壁高は、確認面より12～14cmを計る。柱穴は11本検出されているが、西側については不明。柱穴の径は20～33cm。深さは16～32cmであった。床面は良く踏み固められている。住居跡のほぼ中央に、115×100cm（推定）の楕円形を呈する大形の石囲い炉が検出されている。石材は大小の扁平な河原石を使用している。炉跡内中央には南北に長軸を置いた炭化材（材質は長さ62cm、幅12cm、厚さ5cm）が残されていた。焼土は32cmほど堆積しており、覆土は８層に分けられる。（第15図）

１　層　暗褐色土、焼土・炭化物を微量に含む。軟質でしまりがある。

２　層　１層よりかなり暗い色調を呈する。焼土・炭化物を含む。やや軟質である。

３　層　黒褐色土、焼土・炭化物を含む。

４　層　黒色土、焼土が若干と炭化物の塊が多く見られる。

5　層　黒色土、焼土・炭化物を多く含む。

6　層　黄褐色土、ロームブロックを含んでいる。焼土・炭化物を含む。

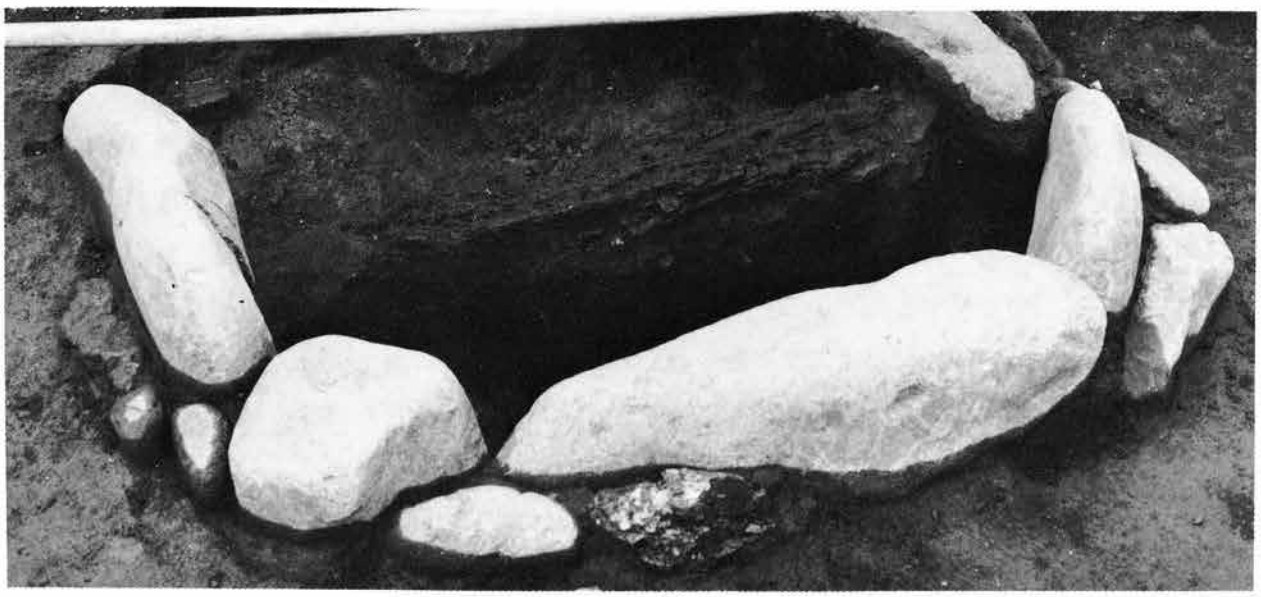
7　層　赤褐色土、焼土・炭化物を含む。

8　層　赤褐色土、ロームブロックを含んでいる。焼土のみ。

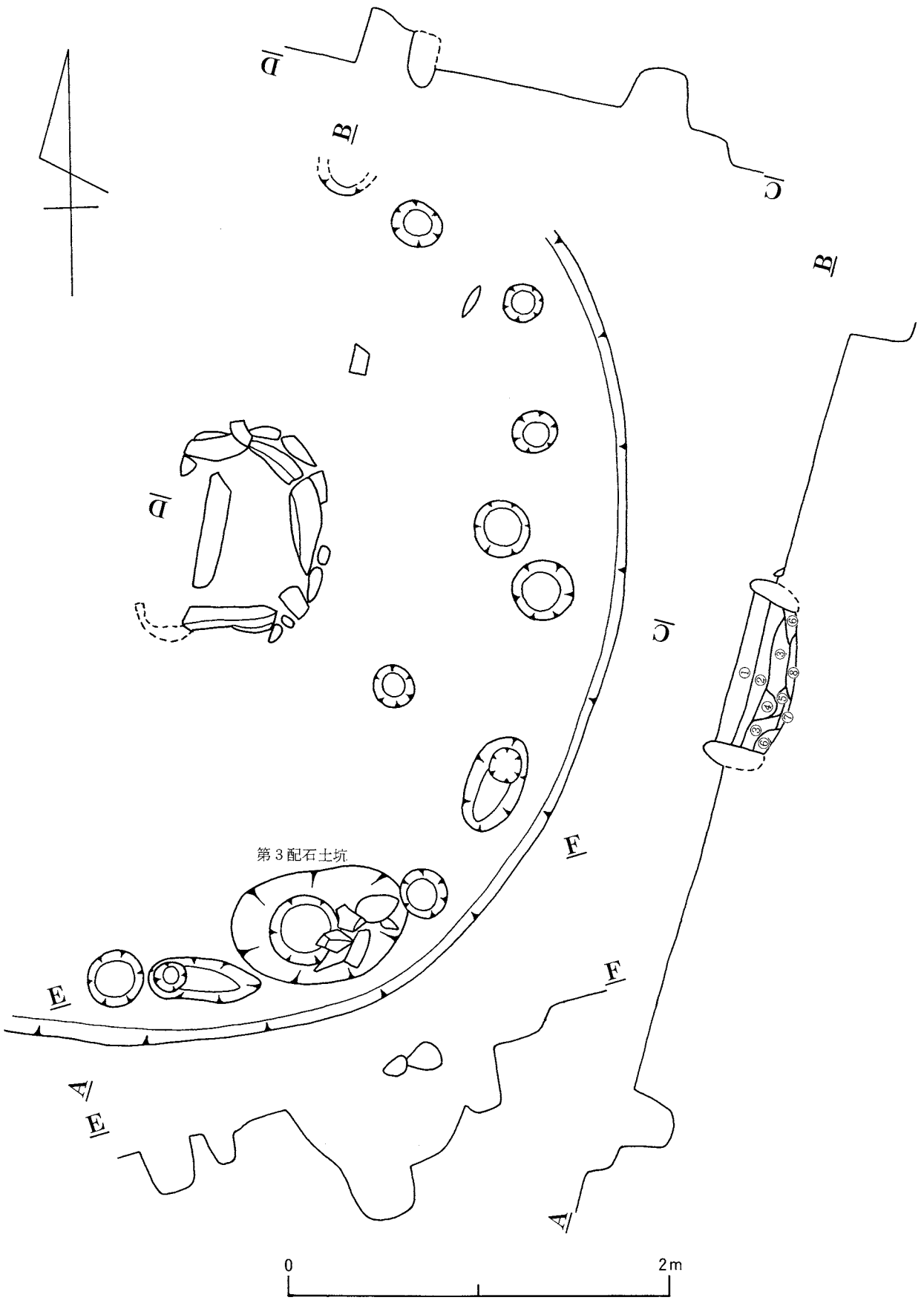
本住居跡は床面全体にわたって、炭化物や焼土が散乱していた。おそらく火災により焼失したものと考えられる。炭化材は、ところどころで床面直上十数cmの厚さに堆積していた。それはまさに「炭」であり、非常に良く焼けている状態であった。当初は、炉内の炭化材・焼土を掻き出したものであろうと考えたが、精査の結果、1—床面がかなり焼けていること。2—炭化物は、床面全体に分布している事。とりわけ、柱穴の中にまで炭化物が見られる事。などの状況から、やはり焼失家屋であると判断した。

遺物は、炉内および床面上より土器片（第16図）が出土しているが、他の住居跡に比べると極めて少ない。第16図1～3、9、12はおそらく同一個体であろうが、口縁に斜めの条線を施したものや、頸部・胴部に横位あるいは縦位の隆起帯を一条～二条施し、それぞれの条間に斜位・縦位を施すなど、曾利II式的な要素を残すものと、4・6のように、口縁に波状突起を持ち、渦巻状の隆起帯の区画の中に縄文や丸棒状工具による雨垂状の押し引き文など、曾利III式のものも見られる。石器は、全く検出されなかった。

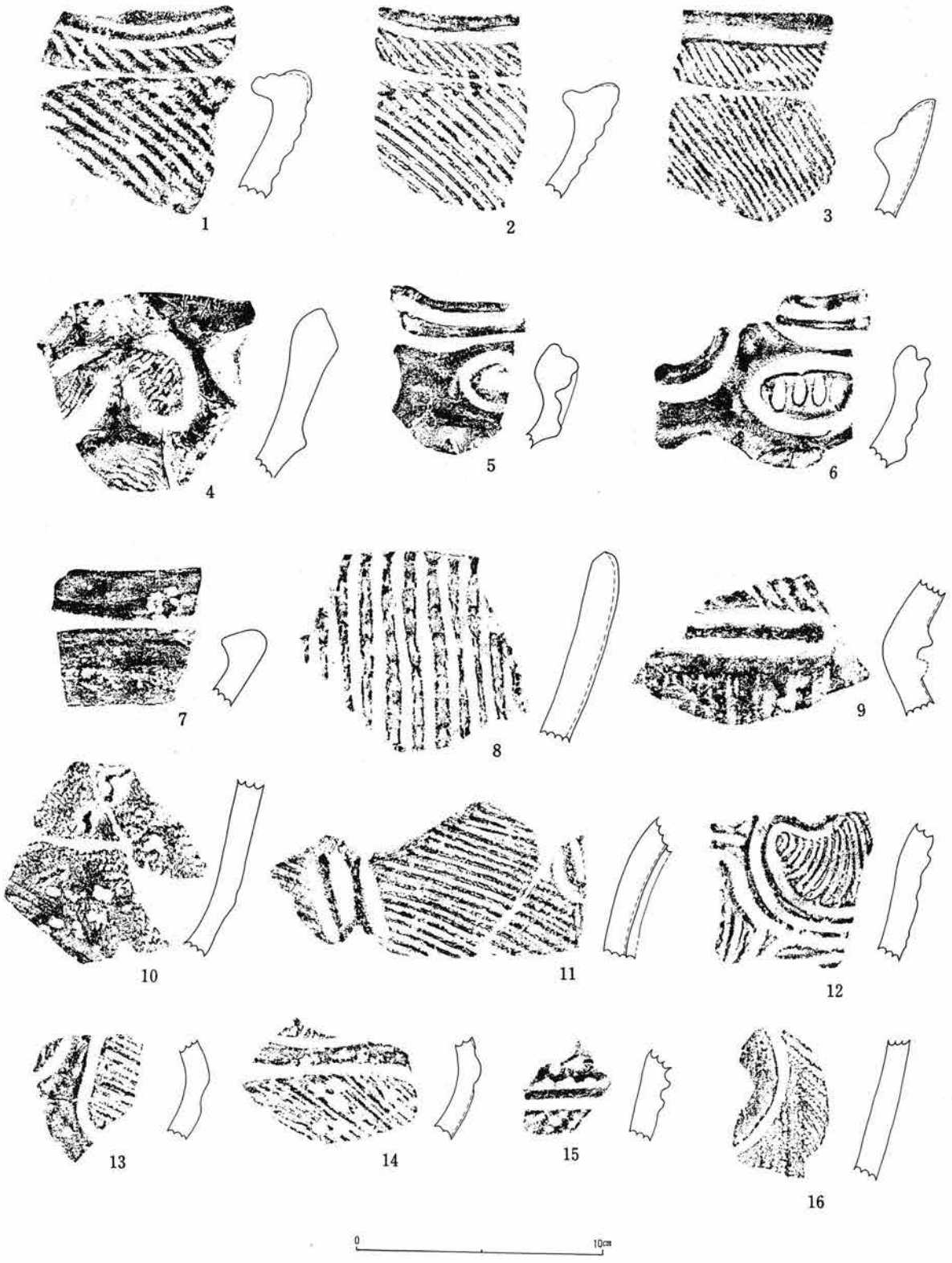
本住居跡の大型炉は、調査以前の水道管埋設工事の際に西側の炉石二個が抜き取られているが、その痕跡からほぼ楕円形であったと思われる。3辺に板状の石を埋め込み、焚き口に枕状の石を据えている。おそらく、この形態・規模からすれば、第2号住居跡とほぼ同時期か、若しくはやや後出のものであろうか。本住居跡の主体となる遺物は、曾利II式～III式期のものである。しかし、埋甕や完形土器が全くなく、いささか決めてを欠くが、おそらく本住居跡が何等かの事由によって火を受けた時には、主だった生活用具はほとんど持ち出されていたものと考えられる。



第14図　第4号住居跡内の炭化材



第15図 第Ⅰ次調査 第４号住居跡・第３号配石土坑実測図



1．2．4．6～8．10．12．14 第4号住居跡，
3．5．9．11．13．15．16 炉

第16図　第Ⅰ次調査第4号住居跡及び炉内出土土器拓影(5)

ロ、土坑（第17～20図・図版18～21）

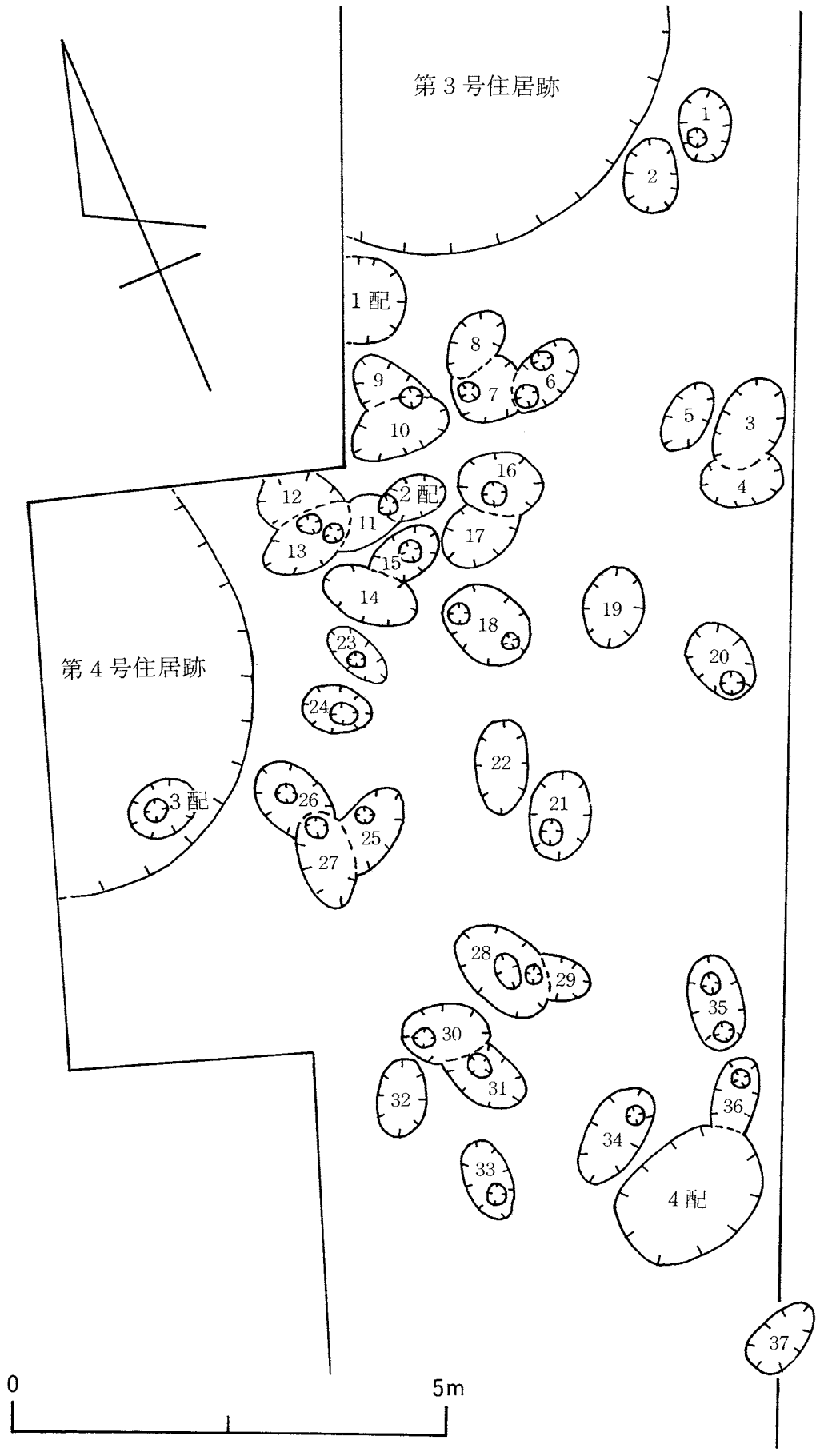
土坑は総数41基が検出された。いずれも第３号住居跡の南側および第４号住居跡の南東側に分布している。つまり、住居跡の配置から見ればその「内側」に位置している事が分かる。大きくは、第21号や第28号土坑を境に北群と南群の二群に分けて考える事も出来るが、尚良く見ると第３号配石土坑と第37号土坑以外は、１群２基以上14基程の単位により構成されている事が分かる。そこで、北側からA・B・C・D・E・F・G・Hの８群に分けてみた。この内、C・F・G群については渡辺康弘氏が『上白岩遺跡』第III次・第IV次・第Ⅴ次発掘調査報告書で提示している、「円環状配置」による単位群としているものに共通しているように思う。調査の段階で、第２号住居跡に重複して東側に別の住居跡の存在を予測した事は前述の通であるが、そうだとすると、本遺跡の縄文中期後葉の住居跡は、環状あるいは弧状に配置していた訳で、土坑群もこれに添うように配置されている。

規模・形態　長径78～166cm、短径50～134cm、深さ14～46cmを測る。大部分の土坑はIII層下部からIV層を掘り込んでいるが、その深度は比較的浅い。平面は、長円形を主体としており略長円形が見られる。底面は、ほぼ平垣になっている。また、底面に柱穴状のピットを有するものが、全体の半数以上ある。このうち、一つのもの22基、二つのもの３基となっている。いわゆる、配石土坑は４基検出されているが、なかでも第４号配石土坑は42～50cmの大石３個を置いている。渡辺氏の言われる「上面標石」である。一番南側の石は石皿を用いている。

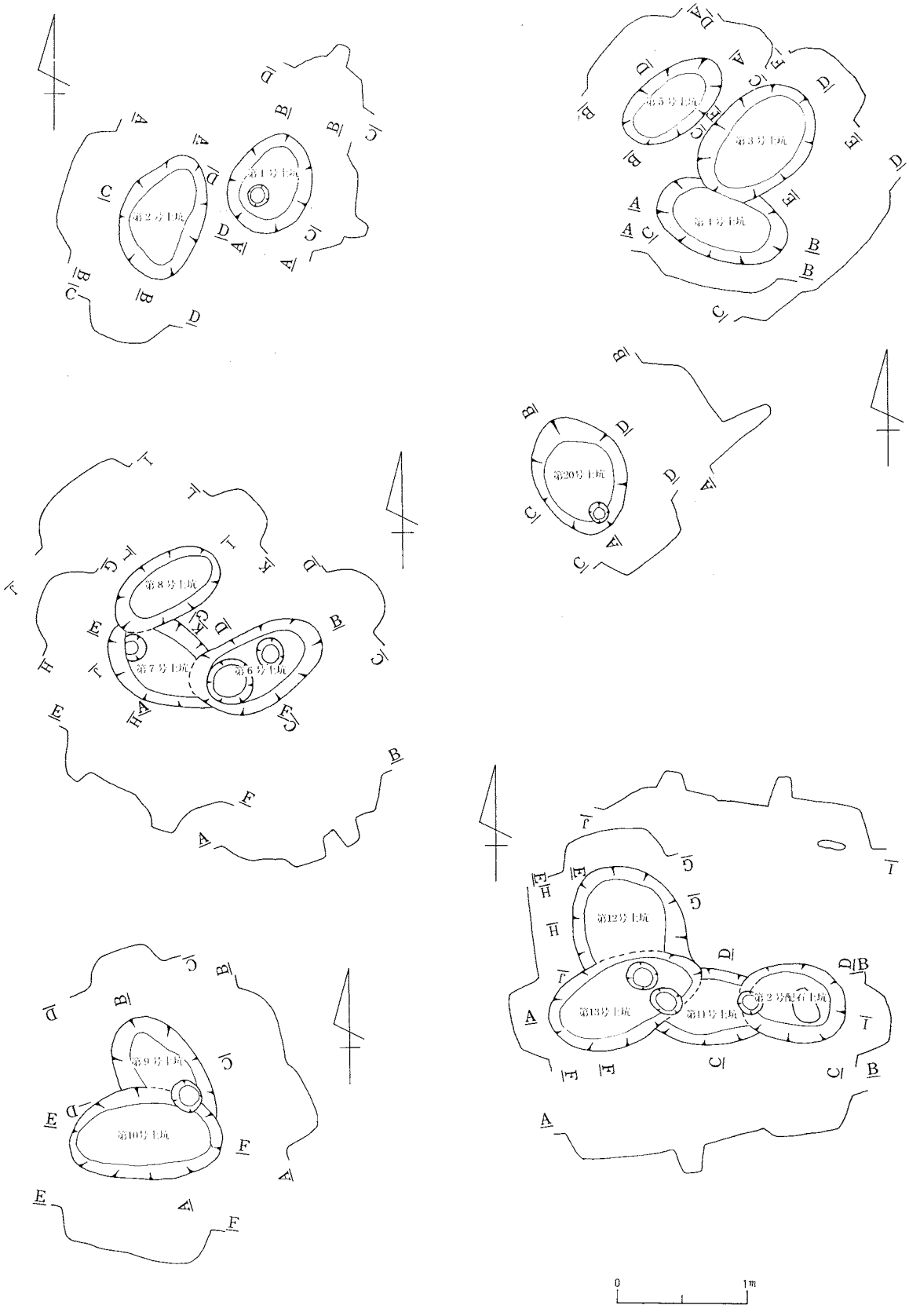
長軸・方位　長軸方位には若干の規則性が認められる。真北を示すものは３基であるが、北北東⇨北東のものが16基、北北西⇨北西のものが14基と「北」を意識しているものが圧倒的な数を占めている。この他、東⇨東北東のものが６基ある。しかし、「西」を意識したものは僅かに１基となっている。

遺物・時期　41基中約半数の24基より検出されている。第22号土坑に打製石斧が伴う他は、土器のみの出土である。これらの土坑群は、その配置や切り合いなどからすれば、無論一時期に構築されたものでない事は明白であるし、また、土坑覆土中の土器は必ずしもその構築時期を決定するものとは限らないであろう。さらにこれら土坑は構築する際の土層攪乱等により当然遺物の混入はあったろうし、その意味からも時期判断の決め手とはなり得ない。

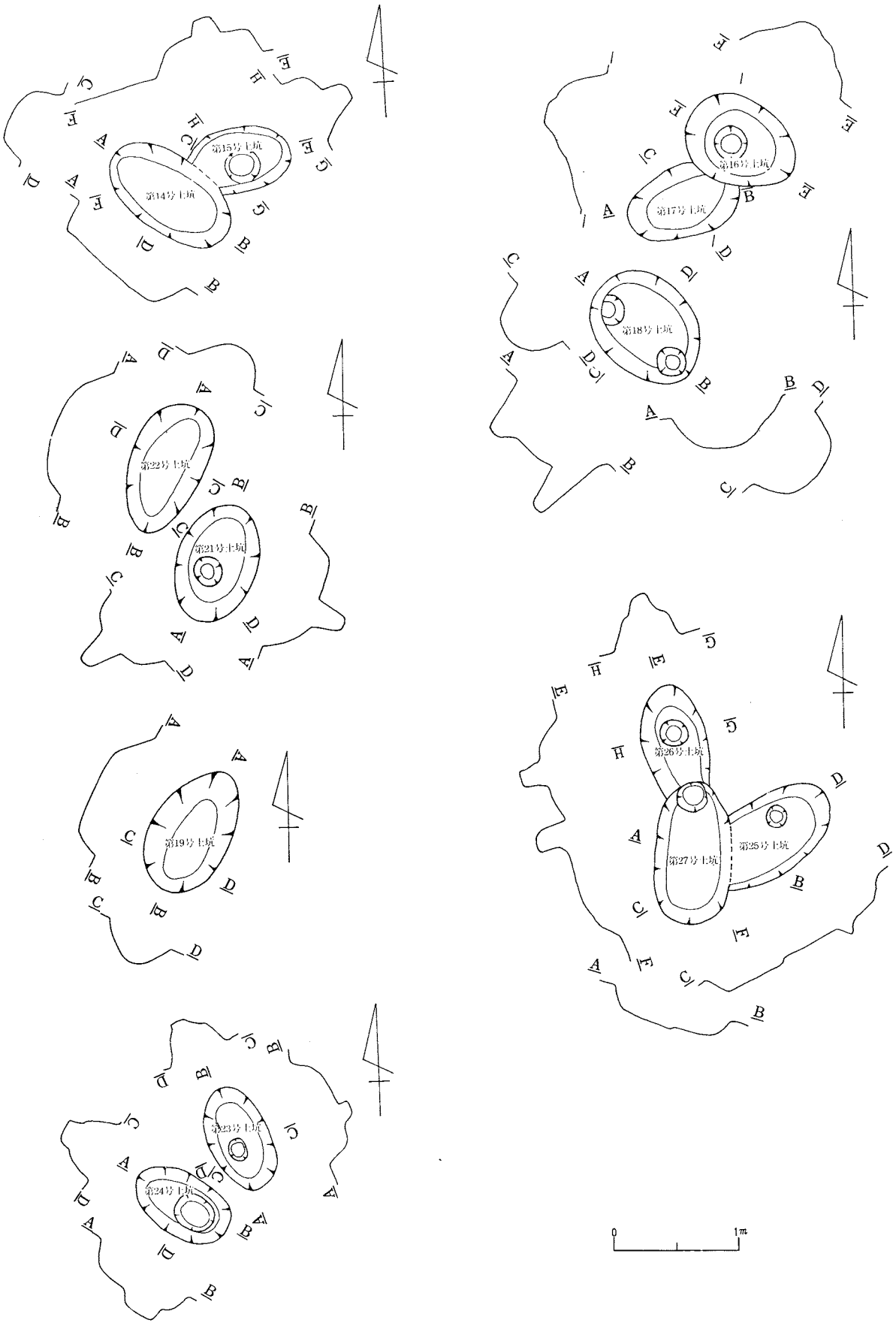
しかし、おおかたの土器片については、少なくとも第２号・第３号・第４号住居跡のものに近似しており、おそらく各住居跡の構築・使用の過程で、あるいは廃棄後断続的に形成されていったものと推測できよう。やはり曾利III～IV式期のものと、加曾利Ｅ３・４式期が主体を占めており、この事を裏付けている。



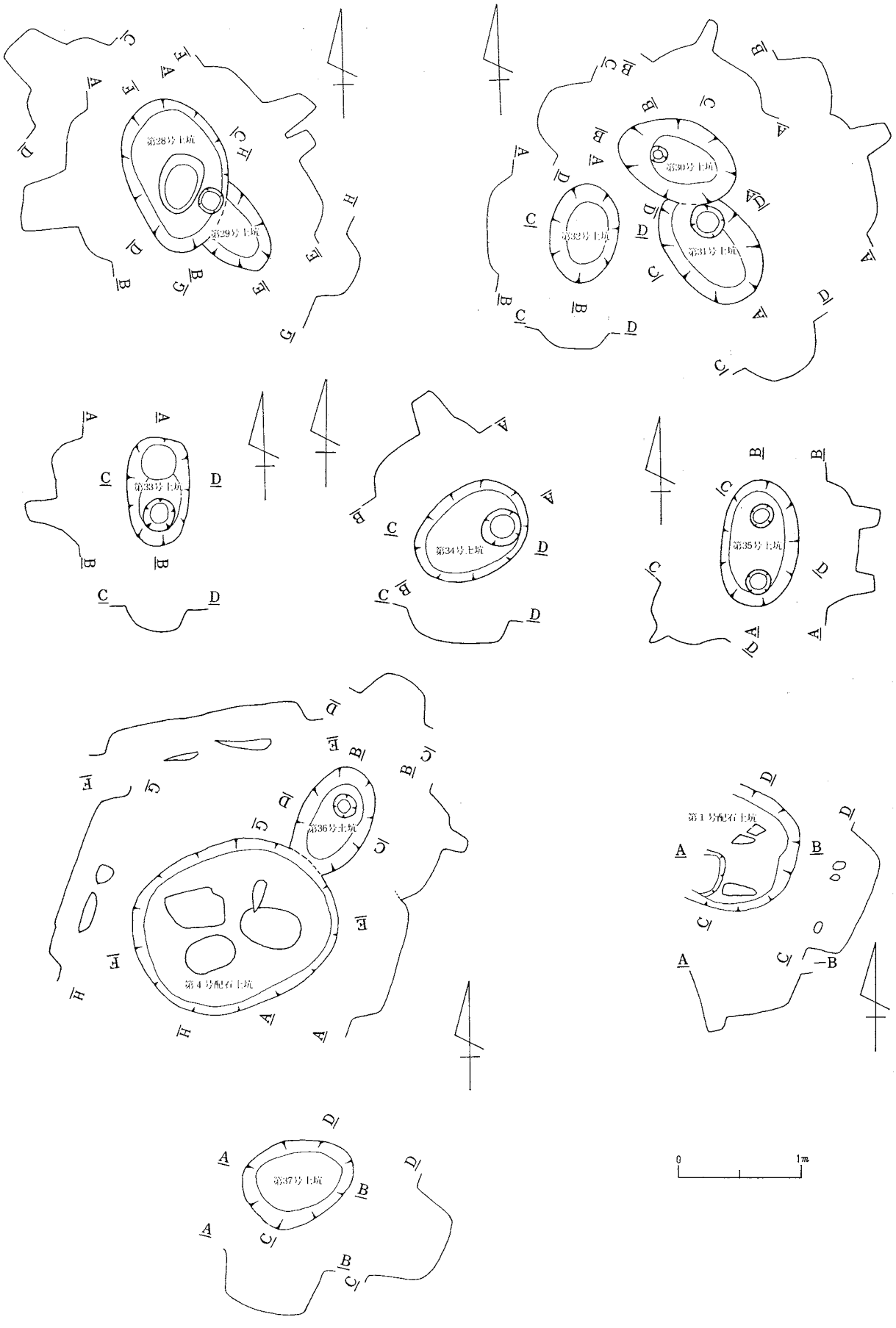
第17図 第Ⅰ次調査土坑全体図



第18図 第Ⅰ次調査 土坑実測図(1)



第19図 第Ⅰ次調査 土坑実測図(2)

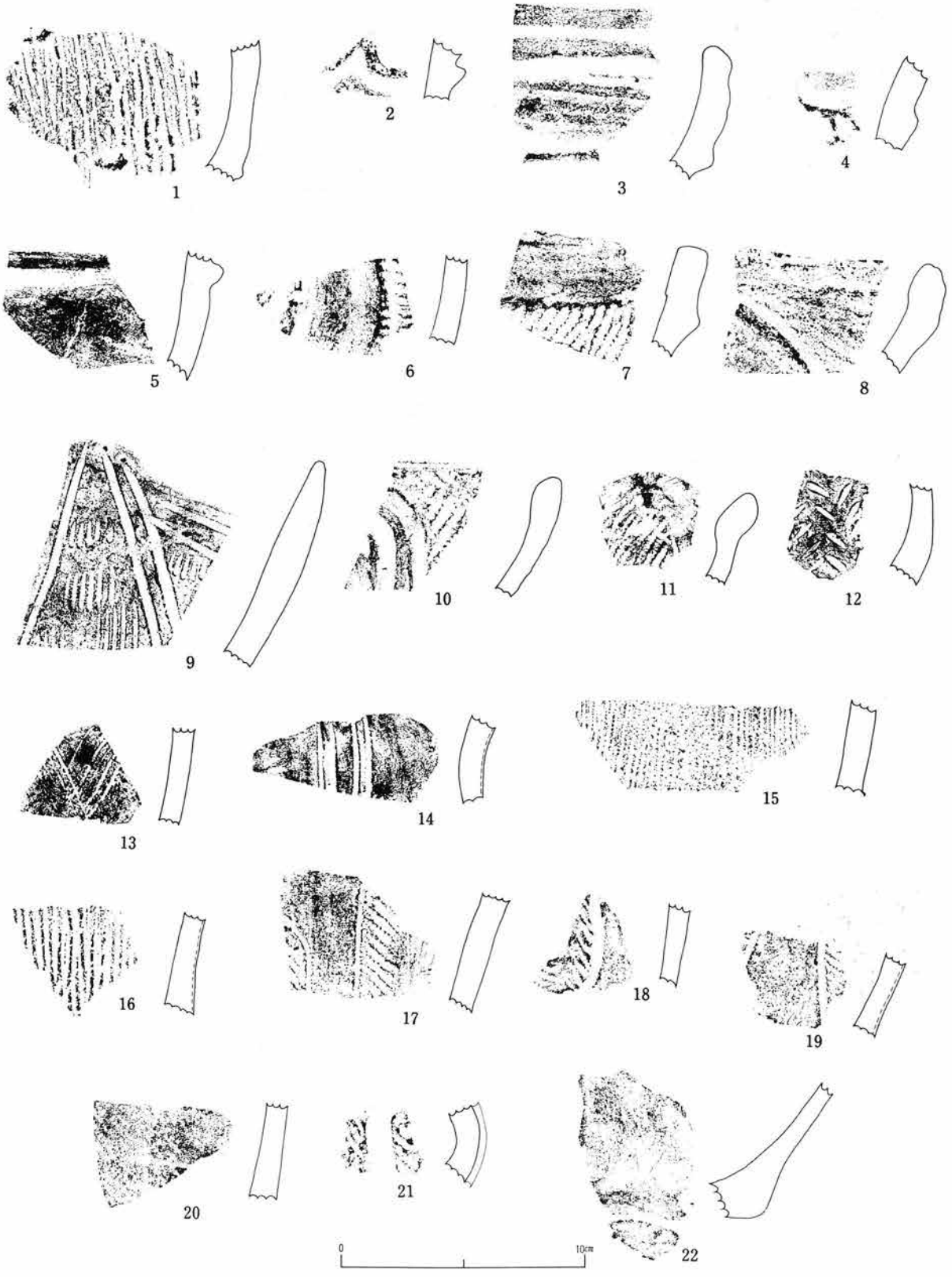


第20図 第Ⅰ次調査 土坑実測図(3)

土坑No.	形　　態	長軸の方向	複合関係	出　土　遺　物	備　　考
1	楕円形 78×(62)×34	N－19°－E	第2号住居跡の北側に2と隣接して存在	曾利Ⅲ式土器1片、他2片	
2	不整な楕円形 98×62×23	N－19°－E	第2号住居跡の北側に存在	加曾利E式土器4片、曾利Ⅲ式土器1片、他3片	
3	楕円形 (104)×63×23	N－44°－E		加曾利E式土器4片、曾利Ⅲ式土器1片、他3片	
4	楕円形 103×(58)×17	N－110°－E	3、4は切合関係にある		
5	楕円形 87×48×16	N－54°－E	3の西側に隣接して存在		
6	楕円形 (106)×58×25	N－64°－E	西壁右7によって切られている		ヒット1　1基
7	西洋梨形 (96)×(64)×28	N－63°－W	東壁を6で北壁を7で切られている	加曾利E式土器3片、曾利式土器3片、他7片	7 → 8 7 → 6
8	楕円形 (87)×(50)×25	N－65°－E	7によって北西壁を切られている		
9	楕円形 (103)×64×20	N－88°－W	北壁の部分で10と切り合っている		
10	楕円形 115×(71)×28	N－24°－W	南側の多くが9により切られている	曾利Ⅱ式土器2片、Ⅲ式土器1片、Ⅴ式1片、他不明9	ヒット1　1基
11	楕円形 (100)×59×21	N－90°－E	東西両端を配石4と13によって切られている		
12	方　形 (115)×86×26	N－21°－W	北側の半分を13によって切られている	曾利Ⅳ式5片、他に時期不明土器9片	底面2個のヒットは13と共有している
13	楕円形 123×(67)×25	N－110°－W	北壁で12、東壁で11を切っている	曾利Ⅲ式1片	底面にヒット2
14	楕円形 110×(61)×28	N－53°－W	東壁の一部が15と切り合っている	加曾利E系土器1片	
15	楕円形 (85)×53×21	N－75°－E	西壁が14と切り合っている	曾利系土器1片、その他の土器4片	底面にヒット
16	不整な楕円形 93×70×34	N－52°－W	南西壁が17と切り合っている	曾利Ⅲ式土器1片、加曾利EⅣ式1片	
17	楕円形 81×58×34	N－12°－W	北東壁が16と切り合っている		
18	方形状の楕円形 98×75×34	N－31°－W	単独で存在	時期不明な土器11片	底面にヒット
19	不整な楕円形 105×63×25	N－29°－E	単独で存在	条痕文土器の胴部破片2、加曾利E3の口縁部破片1 早期田形文土器片1	
20	楕円形 94×69×25	N－24°－W	19の南東側に単独で存在	加曾利E4式2片、他4片	
21	楕円形 97×64×26	N－23°－E	単独で存在	曾利Ⅱ式と思われる土器1片、時期不明1片	
22	楕円形 108×60×26	N－20°－E	単独で存在	曾利Ⅴ式の口縁部破片1、加曾利E式破片1	底面に柱穴状のヒット
23	楕円形 86×48×21	N－20°－W	単独で存在		
24	楕円形 83×49×23	N－57°－W	単独で存在		底面にヒット
25	楕円形 (119)×63×20	N－60°－E	西壁を27によって切られている		底面にヒット
26	楕円形 (105)×52×22	N－13°－W	南壁を27によって切られている		底面にヒット
27	楕円形 (114)×(61)×21	N－0°－N	北側壁で26を東壁で25を切っている	加曾利E4式1片、無文の底部破片1片	26 → 27 25 → 27
28	方形状の楕円形 128×83×22	N－35°－W	南東側の壁で29を切っている	加曾利	
29	楕円形 (93)×(51)×22	N－55°－W	28によって北東壁を切られている	曾利Ⅴ式土器1片	
30	楕円形 99×67×28	N－72°－W	南側の1部が31と切り合っている	曾利Ⅲ式2片、曾利系無文破片3片、他の無文土器8片、加曾利E系3片、撚糸文土器1片	
31	方形状の楕円形 (102)×67×28	N－46°－W	30と切り合関係にある	加曾利EⅢ～Ⅳ式1片、他時期不明2片	大石1個、他に2個の石が存在
32	楕円形 82×55×15	N－10°－E	単独で存在		
33	方形状の楕円形 90×51×20	N－0°－N	単独で存在	加曾利EⅣ式土器2片	
34	楕円形 100×73×25	N－40°－E	単独で存在	曾利Ⅳ～Ⅴ式5片、加曾利E系縄文土器3片 その他の土器7片	
35	楕円形 105×62×26	N－7°－E	単独で存在	曾利Ⅱ式1片、加曾利E式5片、他に時期不明9片	石が2個存在
36	西洋梨形 (98)×57×27	N－32°－E	南西壁を配石4によって切られている		柱穴状ヒット1
37	楕円形 90×69×44	N－58°－E	単独で存在	曾利Ⅱ～Ⅲ式1片、加曾利EⅣ式8片、Ⅲ式1片 他に縄文施文土器2片、不明3片	
配石1	(？)×102×32			土器は54片出土し、その内曾利Ⅱ式が多く、Ⅲ式、Ⅳ式と続くさらに縄文を施文した加曾利E式の土器も含まれる	
2	円形に近い楕円形 (81)×61×26	N－94°－E	西壁は11と切り合っている	網代文様の底部1片	11と切り合っているところにヒット1
3	(68)×73×57			型式不明な土器4片	
4	方　形 165×134×19	N－64°－E	北東壁で36の一部を切っている	加曾利E式系土器2片、他9片	大石が3個、他に1個の石検出

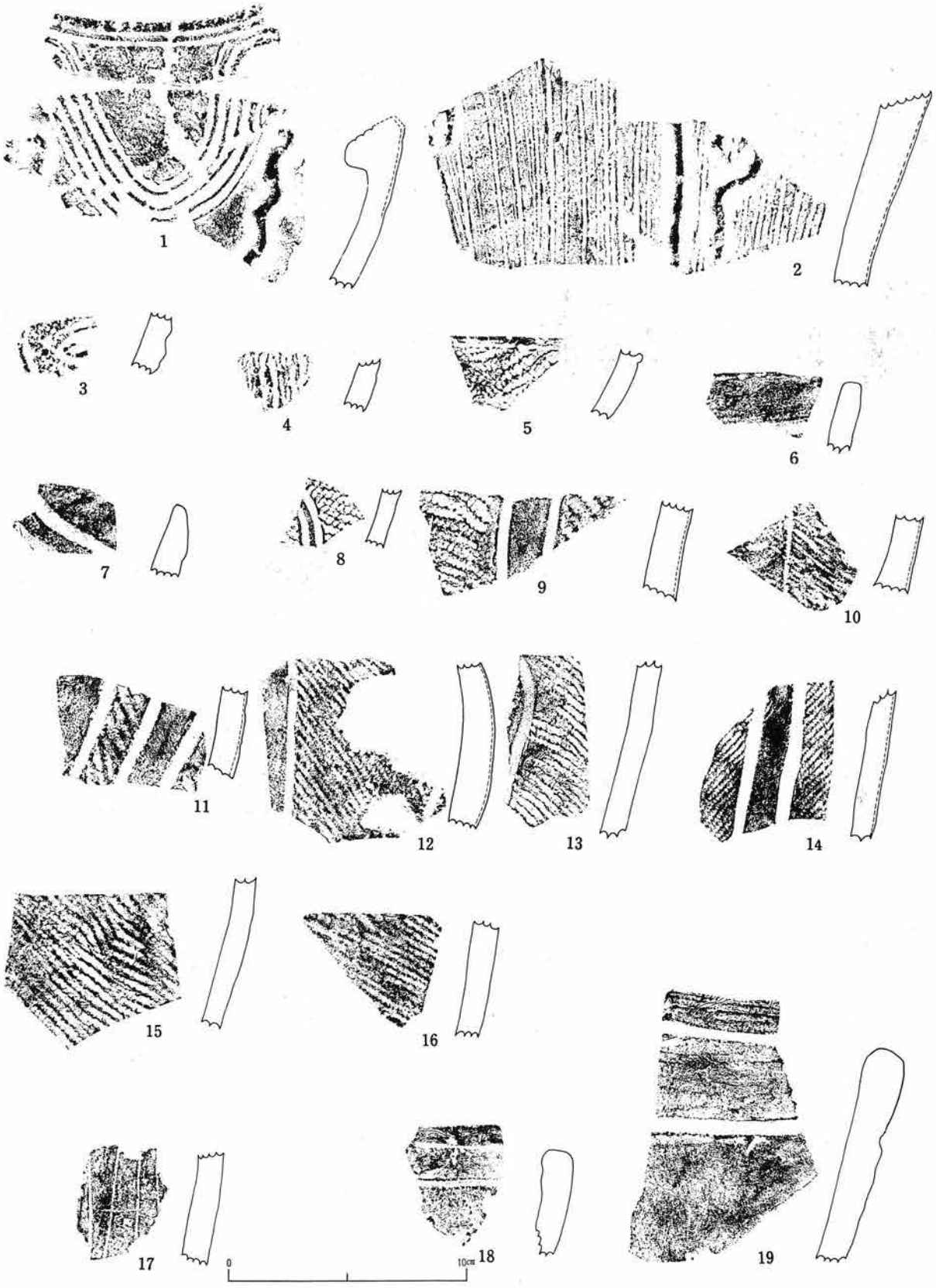
（　）内は推定

第2表　　第Ⅰ次調査 土坑一覧表



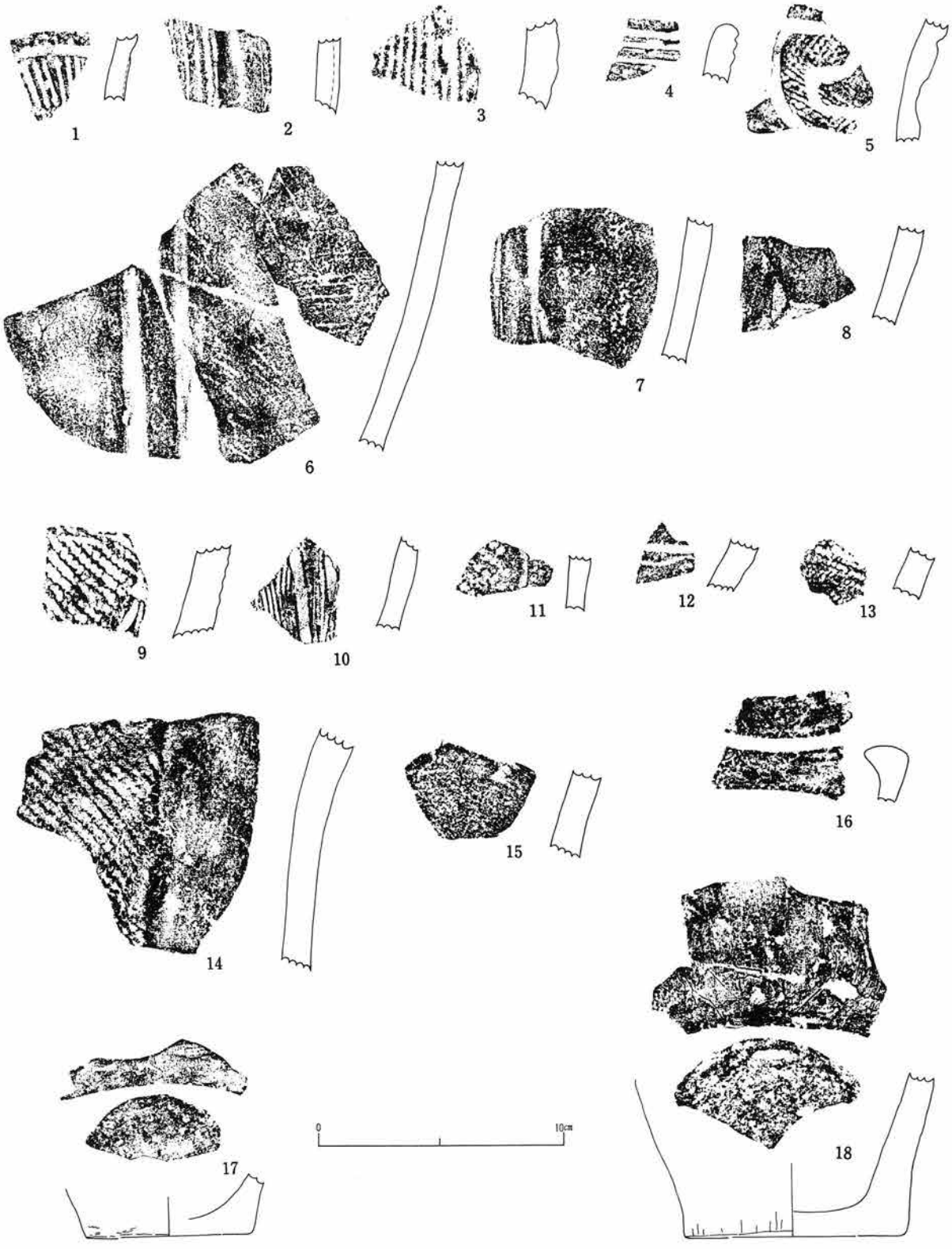
1 第8号土坑，2 第3号土坑，3 第1号土坑，4 第3号土坑，5 第8号土坑，6 第6号土坑
7 第6号土坑，8 第6号土坑，9 第5号土坑，10 第2号土坑，11 第6号土坑，12 第7号土坑
13 第6号土坑，14 第6号土坑，15 第1号土坑，16 第6号土坑，17 第6号土坑，18 第2号土坑
19 第4号土坑，20 第8号土坑 21 第8号土坑，22 第4号土坑

第21図 第Ⅰ次調査 土坑出土土器拓影(6)



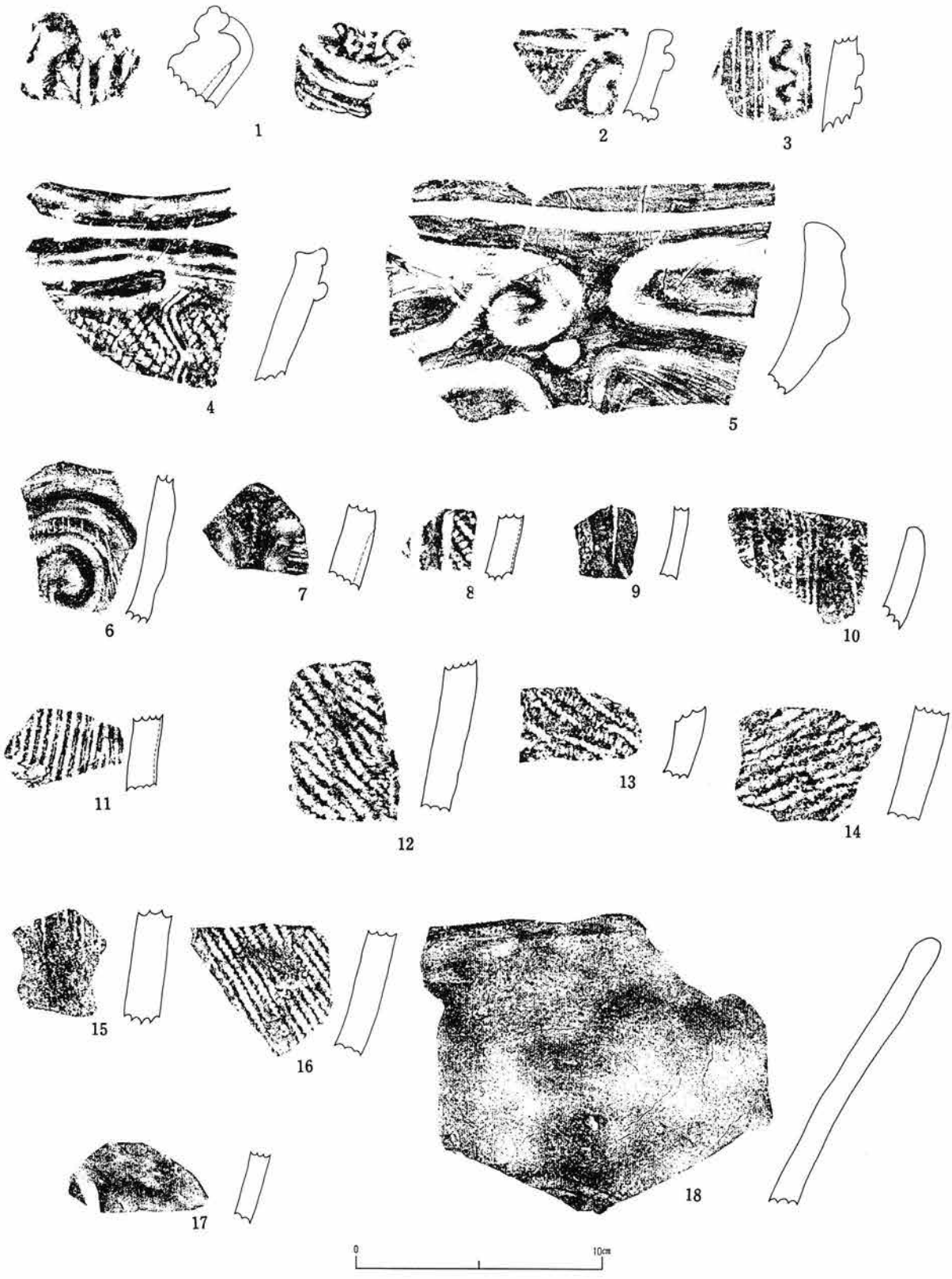
1．5．6．8　第9号土坑　10. 16. 17. 18　第11号土坑　9　第12号土坑　11. 19　第13号土坑
2．12. 13. 14. 15　第14号土坑　3．4　所属不明

第22図 第Ⅰ次調査 土坑出土土器拓影(7)



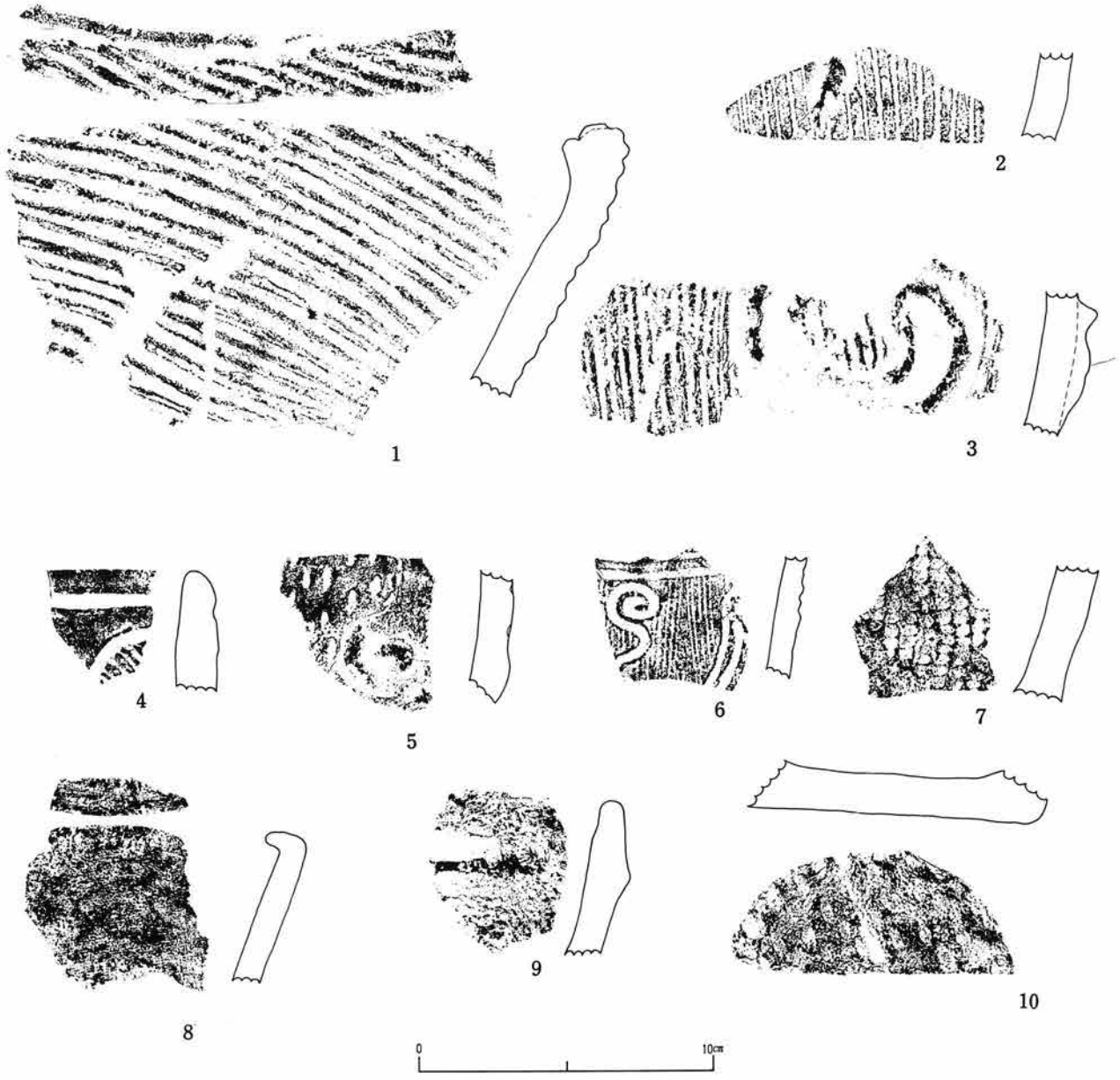
1 第23号土坑，2 第24号土坑，3 第19号土坑，4 第23号土坑，5 第14号土坑
6～8 第23号土坑，9 第18号土坑，10 第21号土坑，11 第24号土坑，12 第26号土坑
13 第19号土坑，14 第14号土坑，15～17 第26号土坑，18 第14号土坑

第23図 第Ⅰ次調査 土坑出土土器拓影(8)



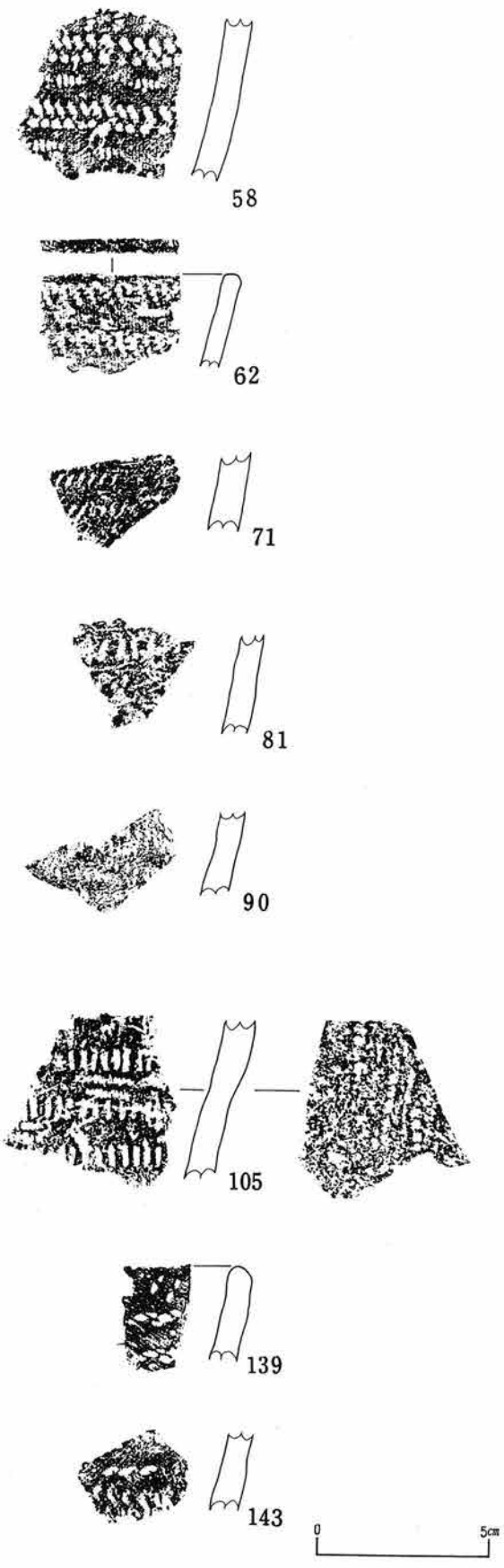
5．8．13　第28号土坑　3．10　第32号土坑　6．9　第35号土坑　2．7．11．12．15．17　第38号土坑
14．16　第４号配石土坑　1．4．18　所属不明

第24図 第Ⅰ次調査 土坑出土土器拓影（９）



1．2．3．4．5．6．8　第1号配石土坑　10　第2号配石土坑　7．9　所属不明

第25図 第Ⅰ次調査 土坑出土土器拓影(10)



（58） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は自縄自巻を器面に対して、縦位に圧痕し、絡条体圧痕を絡条体の部位をかえて施している。モチーフとしては＞状を作っている。絡条体の条の太さは1の条で、太さ2mmである。器厚は9mm。内面は入念に研摩している。

（62） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの端部を半置半転しており|→方向に回転している。口唇部とＲＬの原体の縄を回転している。裏面は入念に研摩している。器厚は5.5mmである。

（71） 焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は1の条の絡条体を施している。時計回りと逆に巻き2段施している。幅3mm施している。器厚は8mmである。

（81） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。表面は繊維が混入しているためガサガサしている。文様はＬの絡条体を圧痕していると思われる。絡条体の幅6mmである。器厚は7mmである。

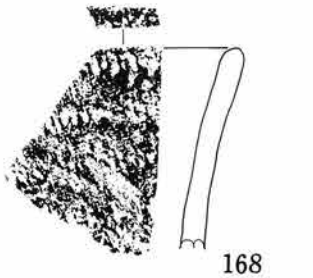
（90） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様は絡条体圧痕か自縄自巻を施しているが、風化しており原体と文様のモチーフは不明。器厚は7～8mmである。

（105） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はｒの絡条体を横位に圧痕しており、絡条体と絡条体との間にｒの条の自縄自巻を施している。裏面は風化しているがＬ＜$\frac{R}{L}$の縄文を↗方向に回転している。

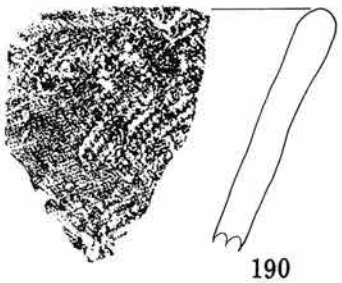
（139） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬの原体を斜位に側面圧痕し、ＲＬの縄文原体を器面に対して横位に側面圧痕を施している。ＲＬの原体の太さは約4mmと思われる。器厚は約8mmである。

（143） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様はＲＬの原体を器面に対し横位に側面圧痕し、上下にＲＬの原体を縦位に回転している。器厚は7～8mmである。（第1号住居跡）

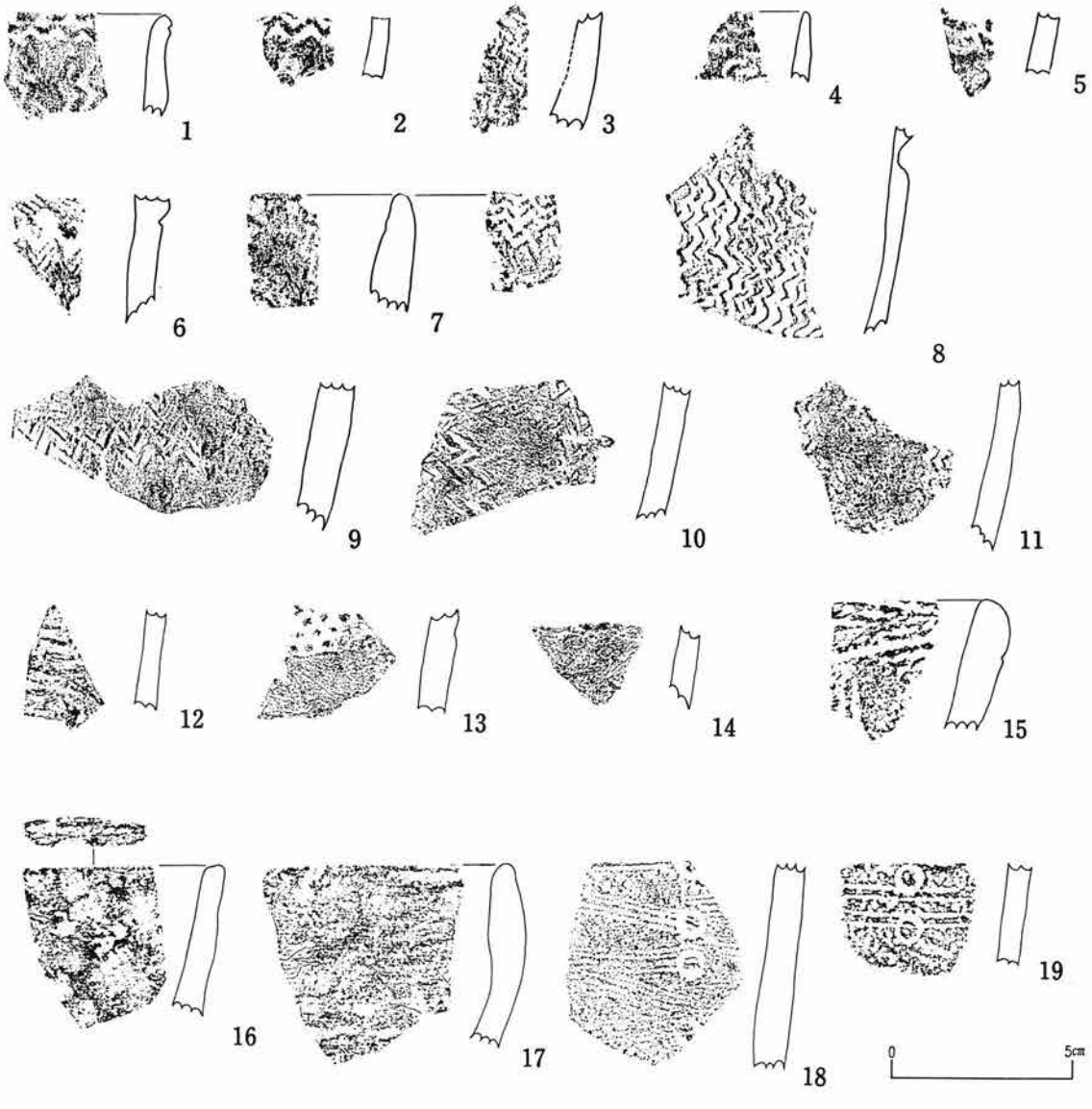
第26図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影(11)



（168） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様は器表面が風化しており不明な点もあるが、口唇部に ＬＲ の縄文原体を←方向に施し、口唇直から ＬＲ の縄文原体を横位に３条圧痕を施している。半置半転とも考えられる。



（190） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様は ＬＲ の縄文原体を←方向に回転している。器内面は削られている。器厚は８～９mmである。



第27図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影（12）

b、遺　物

イ、土　器

第Ⅰ群土器（草創期の土器）第26図・第27図

第Ⅰ次調査では、縄文時代草創期後半に属すると思われる多縄文系土器が10点ほど確認されている。290頁の分類に従えば、Ⅱ群1類の自縄自巻d種1点、f種1点、2類の絡条体圧痕a種3点、c種1点、3類の原体側面圧痕（縄文）a種1点、b種1点、5類の半置半転a種1点、6類の縄文d種1点に分けられる。

第26図58は、自縄自巻を器面に対して縦位に圧痕し、絡条体圧痕をその部位をかえて施している。62は、RLの端部を半置半転しており↦方向に回転している。また、半置半転と半置半転との間に自縄自巻を施している。71は、1の条の絡条体を時計回りと逆に巻いて2段施している。81は、Lの条の絡条体を施している。90は、絡条体圧痕若しくは自縄自巻を施しているものと思われる。105は、rの条の絡条体を横位に圧痕し、絡条体と絡条体との間に自縄自巻を施している。139は、Lの原体を斜位に側面圧痕し、RLの縄文原体を器面に対して横位に側面圧痕を施している。143は、RLの原体を器面に対して横位に側面圧痕し、上下にRLの原体を縦位に回転している。第27図 168は、口唇部にLRの縄文原体を↦方向に施し、口唇直からLRの縄文原体を横位に3条圧痕を施している。190は、LRの縄文原体を↦方向に回転している。

個々の詳細な所見は、第26図・第27図に示してあり、第64図～第145図の中にも組み入れてあるので併せて参照されたい。

以上、草創期の土器は第Ⅰ次調査当時においては、正直な所あまり注意していた資料ではなかった。それはこれまで、当地方において草創期土器の出土報告がなく、我々も実見する機会がなかった訳であり、加えてこれに対する認識の甘さがあった点も認めざるを得ない。そうした中第Ⅱ次調査において、後述の通り大量の出土を見るに及んで、改めて上記の土器も草創期のものであることが判明した次第である。

予備調査・第Ⅰ次調査において出土した草創期土器は、層位を十分に把握する事は出来なかったが、予備調査時のⅥ層下部および第Ⅰ次調査時の第2号住居床面からの出土が確認されており、層位としては第Ⅱ次調査時のⅥa層～Ⅵb層に対比されるものと思われる。

第II群土器（早期の土器）第26図13～22、第27図１～８

縄文時代早期の土器は、押型文土器（山形文13点、楕円文２点）と撚糸文土器１点、無文土器２点が出土している。第26図13は口縁がかなり外反し、直下に山形文が横位に二列、またその下に縦位の山形文が帯状に施文される。また口唇にも施文の跡が見られる。裏面には調整時の指痕が残されている。焼成は良く堅くしまっている。胎土中には多量の雲母と細砂が含まれている。色調は燻黒色を呈する。器厚は極めて薄く、口唇部で4.5㎜、下部で５㎜である。第26図20は口縁直下より縦位の山形文が、また裏面には横位の山形文がそれぞれ施文されている。口縁は直行している。焼成はわりあい良く堅い。胎土中には砂粒と白色粒が多量に含まれている。色調は黄褐色を呈する。第26図21は縦位の山形文が密接施文されている。上部に補修孔が認められる。焼成は良く胎土は緻密である。多量の雲母が含まれる。器量は薄く５～６㎜である。第26図22、第27図１は山形文が縦位と横位に帯状に組み合わされて施文された胴部破片であり、文様間はあたかも磨り消したかのような無文帯で構成される。山形の条間は広く粗い。焼成はあまり良くない。胎土中には多量の繊維と淡黄色粒それに細砂が含まれている。色調は灰褐色を呈する。器厚は８～10㎜である。第27図４は、正円に近い小さい楕円文が帯状に施文されている。焼成は良く堅い。胎土中には多量の雲母が含まれている。器厚は７～８㎜である。第27図６は、原体Ｒの撚糸文を口唇上および口縁上部に斜位あるいは横位に施文している。また、下部にはこれを縦位に施文している。口縁は肥厚しやや外反している。焼成はあまり良くない。胎土中には細砂が含まれている。

この他無文土器の口縁がある。第27図７は口縁が軽く内彎しており篦などによって調整が行われている。口縁直下で若干肥厚している。焼成はわりあい良い。胎土中には多量の砂粒と淡黄白色粒・赤色粒が含まれている。色調は黒褐色を呈する。器厚は口唇で７㎜、下部で7.5㎜である。第27図８は口縁が直行する薄手の土器である。焼成はあまり良くない。胎土中には繊維が多く含まれる。色調は黄褐色を呈し、器厚は口唇で６㎜、下部で7.5㎜である。７、８ともその焼成・胎土などから、おそらく第II群土器に属するものと考えられる。

第III群土器（前期の土器）第27図９・10

縄文を地文とする器面に、櫛歯状工具によって斜位または横位に条線を施文している。さらに、竹管状工具の先端部を使って刺突文が付けられている。焼成は良く、胎土には雲母・白色粒・砂粒が含まれる。器厚は7.5～８㎜である。両者とも関山式併行期の土器であろう。

第IV群土器（中期後半～末葉の土器）第28図～第31図

本遺跡出土土器の主体をなしている縄文時代中期後半～末葉の土器を本群とする。文様により２類に分類して説明する。

第１類（第28図～第30図）竹管状工具によって太い条線文が施されるもので、これに、粘土紐の貼り付けによって文様が描出されるものを本類とした。さらに、施文法により次の３種に細分する。

a　種：第28図～第29図

頸部のくびれの強いキャリパー形深鉢の口縁部破片である。第28図と第29図１は、口唇部から頸部にかけて斜位に太い条線が全面に施されている。第28図１は、斜位の条線とは逆方向に粘土紐を貼付けて籠目文様で飾っている。また、第29図１は、頸部に波状隆線文を横位にめぐらし胴部地文として縄文が施文されている。第29図２～７は、キャリパー形の口縁部に同心円状の力強い条線が描出される。さらに、それを施文として粘土紐による蛇行懸垂文が垂下する第29図４・７、逆Ｕ字の隆帯を垂下させる第29図５、竹管状工具で押し引きした粘土紐を二本貼り付ける第29図６がある。

b　種：第30図１～６・16

頸部文様帯として、浮彫り手法による横位隆帯と波状隆線が施文されるもの、粘土紐による波状横帯文、押し引きした粘土紐を貼り付けたものなどがある。また、第30図１～３の場合口縁は無文であり直行している。

c　種：第30図７～15

太く深い条線、細く浅い条線を地文として、貼り付け粘土紐によるバラエティーに富んだ文様が自由奔放に描出されている。第30図７・11～15は粘土紐による蛇行懸垂文が見られる。

以上、第１類を３種に分類したがａ種、ｃ種は曾利II式に比定されるものであり、ｂ種はむしろこれらに先行する曾利Ｉ式に近い様相を示している。

第２類（第31図）条線を地文とするものを本類とし、さらに施文による３種に細分する。

a　種：第31図１・２

細く浅い斜めの条線を地文とし、３本の隆帯が渦巻状に施文される。また、隆帯の両側は凹状になぞり整形されている。焼成は良好、胎土中には細砂を含み色調は赤褐色を呈する。

b　種：第31図３～８

矢羽状条線文と沈線文との組み合わせによる文様構成である。口縁に１～３本の沈線をめぐらして、胴部は逆Ｕ字の沈線で区画する。また、その内外は櫛歯状工具による矢羽状条線文が施文されている。第31図３・６は１単位２本、4･8は３本以上、５は10本以上の櫛歯状工具が使用されている。口縁部の文様は退化し沈線のみである。焼成は極めて良く堅い。色調は、暗褐色・赤褐色を呈する。

c　種：第31図10～14

器面全体に細い条線文が施されている。第31図14は口縁部文様帯がなく、直接縦位の条線が施文される。口縁部は軽く内彎し直下で弱いふくらみを持つ。第31図９は口唇が角頭状をなし直下に二条の刺突の列を配し、さらに２本の沈線が垂下しその左右より弧状の半円が描出される。胎土中に細砂・雲母を含むものが多い。色調は黒褐色・褐色を呈する。

以上、第２類土器は施文法により３種に細分したが、その内ａ種は曾利II式～III式比定のものであり、ｃ種は曾利Ｖ式比定と考えられる。

第Ⅴ群土器（中期末葉～終末の土器）第32図～第39図

縄文時代中期末葉～終末の土器を本群とする。文様により4類に分類して説明する。

第1類（第34図）沈線による胴部文様が描出される土器である。第34図・5は口縁に2本の平行沈線を巡らし、胴部には2本の沈線による渦巻文が描かれている。器形は口縁下部で弱くくびれ、胴部が若干張る深鉢形土器である。器肉は薄く裏面は良く整形されている。第34図3は3本の沈線によって渦巻文が描かれる。第34図7は若干内彎する口縁に2本の平行沈線を配し、その下に横位の撚糸文を帯状に施文している。胴部は縦位の撚糸文が地文となり、2本の沈線による波状文が横位に施文される。器形は頸部で僅かにくびれる小形の鉢型土器で、裏面は整形され光沢がある。第34図6・8は2本の平行沈線および波状文が地文である撚糸文の上を縦位に力強く垂下する。器内は比較的厚手であり、焼成は良く胎土は堅い。

第2類（第35図～第36図）縄文を地文とする土器を本類とした。さらに施文法により6種に細文する。

a　種：第35図1～5

器面に貼付粘土紐を有する土器である。第35図1～4は蛇行懸垂文、第35図5は細い帯状の粘土紐が貼付けられている。全体に胎土は堅く、細砂や雲母を含んでいる。色調は赤褐色を呈するものが多い。

b　種：第35図6～12

隆帯による渦巻文が施文される土器である。第33図6・7・9は口縁が僅かに内彎し、連続渦巻文が施文されている。焼成は極めて良く、裏面は整形されている。第33図10～12は同一個体であり、口縁直下および胴部に隆帯による渦巻文が施文される。焼成は良く、胎土には細砂が含まれている。

c　種：第35図13～16、第36図1～15

沈線により波状文・連弧文・蛇行懸垂文・平行沈線文が描出される土器である。同一個体である第35図13・14は、口縁に粘土紐が2本貼付けられ頸部が若干くびれる。深鉢形土器である。胴部には蛇行沈線文が施文される。また口縁上端に特徴を持つ第36図1～6のような土器もある。第36図1～3は口縁にめぐらした2本の平行沈線の中を押引し、第36図4～6は2列の刺突文を配する。胴部には波状、斜位および直線的な沈線文が見られる。第36図7～14の土器も同様に口縁上端に2本の平行線で横位文様帯をつくり、胴部には2本の沈線で波状文（第36図7・9・14）、また3本の沈線による半円状の連続文（第36図12）、蛇行沈線文（第36図10・13・15）等が施文される。第36図3は区画された口縁文様帯を持ち、胴部に2本の平行沈線による磨消縄文帯を持っている。総じて焼成は良好である。

d　種：第37図1～6・8

細く粗雑な沈線が施文される土器である。第37図1・2は口縁部文様帯を失い、無文帯が口縁部を巡り、その下部に浅く細い沈線が横位に施文される。第37図1・2・3は同一個体である。

4は沈線と磨消縄文帯を持つ。第37図5・6は細沈線が施され、第37図8は口縁部に幅の狭い無文帯を持ち、胴部に蛇行沈線が施される。

e　種：第37図7・9・11・12

縄文のみ施文される土器である。口縁部はやや内彎するもの、直行するもの、波状を呈するものなどバラエティーに富んでいる。施文法としては、大部分が口縁より胴部にかけて同一方向に施文されるが、第37図9のように口縁直下では横位に、胴部では斜位に施文されている。また、第37図12は口縁で羽状をなしている。全体に焼成は良好であり、裏面はていねいに整形されている。

f　種：第38図

口縁は波状をなし、微隆起線により口縁部および胴部を区画する。さらに胴部は磨消縄文手法により文様が描出される。器形は大型の深鉢形土器で、焼成は極めて良好である。

以上、第2類土器を6種に細分した。a種は第1類と同様曾利II式に対比される土器である。b種は口縁部文様帯により加曾利E2式（第33図6）、加曾利E3式（第33図9）にそれぞれ対比され、他も同様に思われる。C種は第4類c種と同様の加曾利E3式比定の土器であり、d種は口縁部上端に無文帯を持ち、その下に沈線、微隆起帯を巡らすなどの特徴を示しており、加曾利E4式に比定される。また縄文のみ施文されるe種は、c、d種に伴う土器と思われる。

第3類（第32・33図）地文にハの字状沈線文が施されているものを本類とする。施文具の相違により2種に細分する。

a　種：第32図

ハの字状沈線文が、篦状工具により引き掻いたように施文されるもの。a種の中でも比較的古期のものは、第32図1・3・5・7・8・10に見るようにハの字状沈線文が整然と施文される。また、新期のものはハの字文の多くが粗雑な施文となり、雨垂状に変化するものも現れる。第32図2・6・9・11～15。前者は主に隆帯によって胴部を区画している。第32図1は口縁部に一条の沈線をめぐらし、胴部を逆U文字で区画し、それら沈線との間を隆帯として浮き上がらせている。後者は細く浅い沈線によって胴部の文様が描出される。第32図12は口縁部文様帯を全く失い、口縁直下より雨垂状のハの字沈線文が施文されている。全体的に焼成は良く胎土は堅い。色調は明るい褐色から黒褐色となっている。

b　種：第33図

施文具がa種と異なり櫛歯状工具を用いてハの字状櫛目短線文が施される。しかし、それらハの字文も短線というより刺突したように極端に短いものや、やや長めの櫛目文とがあり、さらにハの字文が整然と施文されるもの、崩れて任意に施文されるものなどがある。次に、胴部文様の特徴としては2つに大別できる。1つは隆帯を伴うものであり、第33図12は渦巻文、第33図2は直線的な隆帯が施される。他は沈線を伴う土器である。第33図4・5は渦巻文、第33図3は曲線文、第33図1・6・13・14は口縁下に1～2本の平行沈線を持った土器である。また、第33図8・11は2本の沈線が器面を縦位に走り、その条間は磨り消されている。第33図6

のようにＳ字状沈線が垂下するものもある。胎土・焼成ともａ種と同様であるが、色調は明るい赤褐色のものが多くなる。

以上、第３類土器は地文における施文具の違いによりａ種・ｂ種に分けたが、双方ともに曾利Ⅳ式期後半から曾利Ⅴ式にかけての土器である。また、器面に隆帯および隆帯による渦巻文が施文される土器は、沈線による種々の文様が施される土器より時期が先行するものと思われる。

第４類（第39図）無文の口縁部破片と底部を一括して４類とした。第39図１・２は口縁が外反し口唇部が内面に厚く内彎する。第39図４は口縁部上端で一度くびれまた頸部でくびれを持っている。第39図５は内彎せずストレートに立ち上がる深鉢形土器の口縁部であり、胴部も無文と思われる。

土製品（第40図）

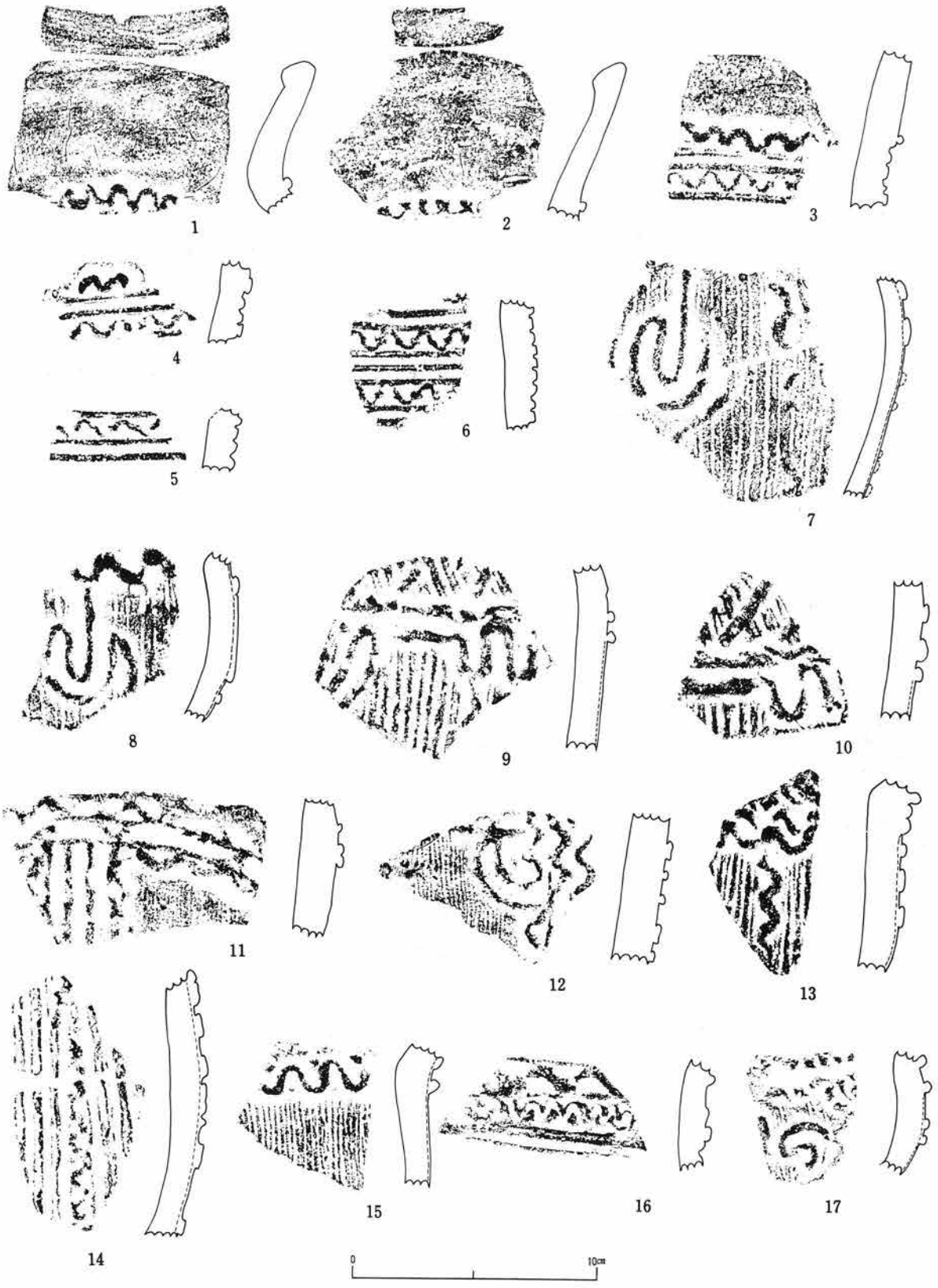
土製品は13点出土している。13が土錘の他は総べて土製円板である。土器片を利用しており、円板はほとんどが円形またはそれに近いものであるが、２・６のように隅丸方形を呈するものがある。これらの文様の内訳は、竹管状工具による条線を施したもの（１・２・４・５・７）、隆起帯を施したもの（３・６）、縄文のもの（９・10）、無文のもの（６・８・11・12）などがある。この内、住居跡から出土したもの９点、配石土坑より出土したもの１点で、他はグリッドより出土している。土器片の周囲は丹念に調整され磨かれている。土錘は、左上部を欠損しており、長軸の両端に深い切込が行われている。

1～7　第1区

第28図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影(13)

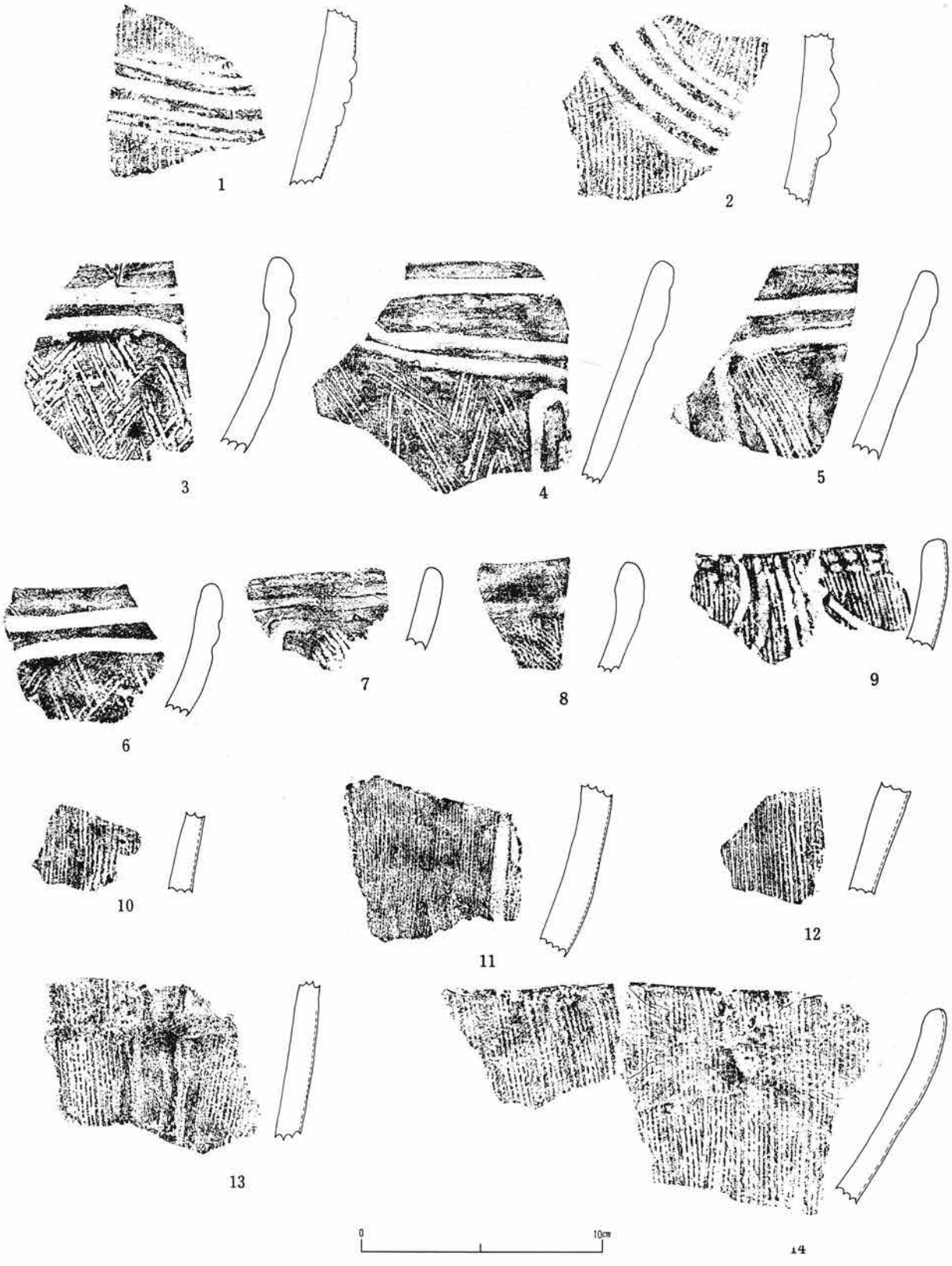
1～7　第2区

第29図　第Ⅰ次調査 出土土器拓影（14）



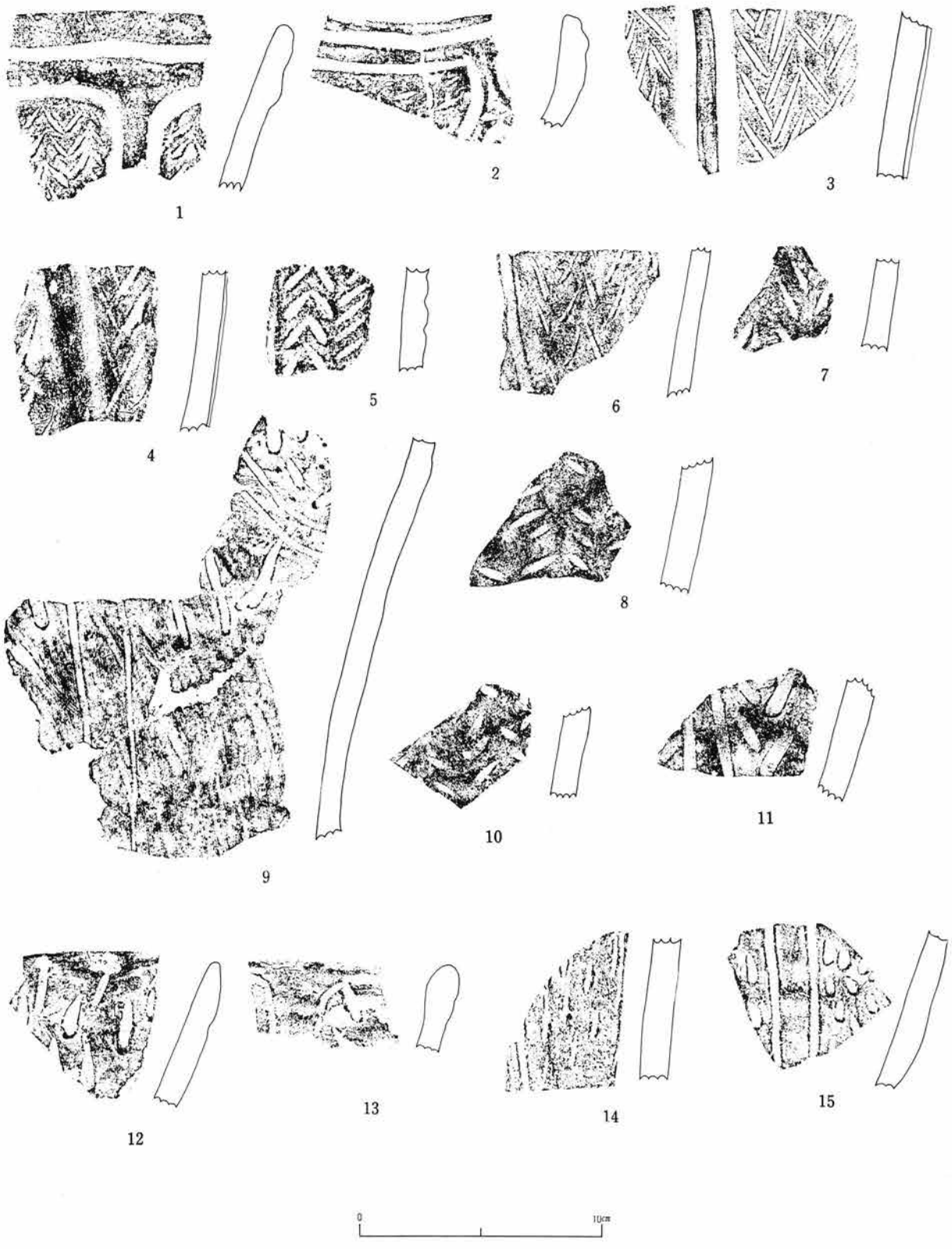
1～17　第2区

第30図　第Ⅰ次調査出土土器拓影(15)



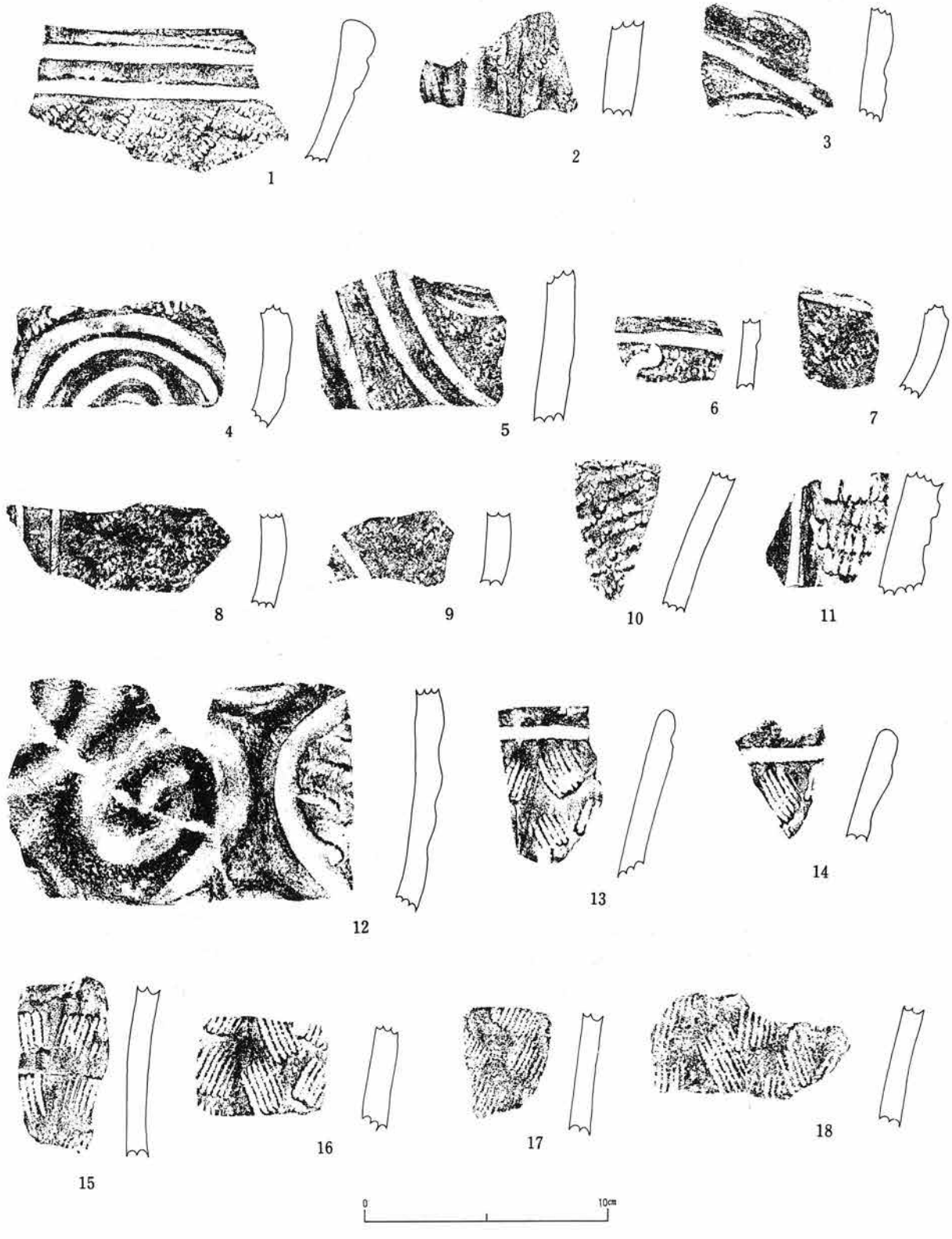
1．2．5．7～12　第2区
3．4．6．13．14　第3区

第31図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影（16）



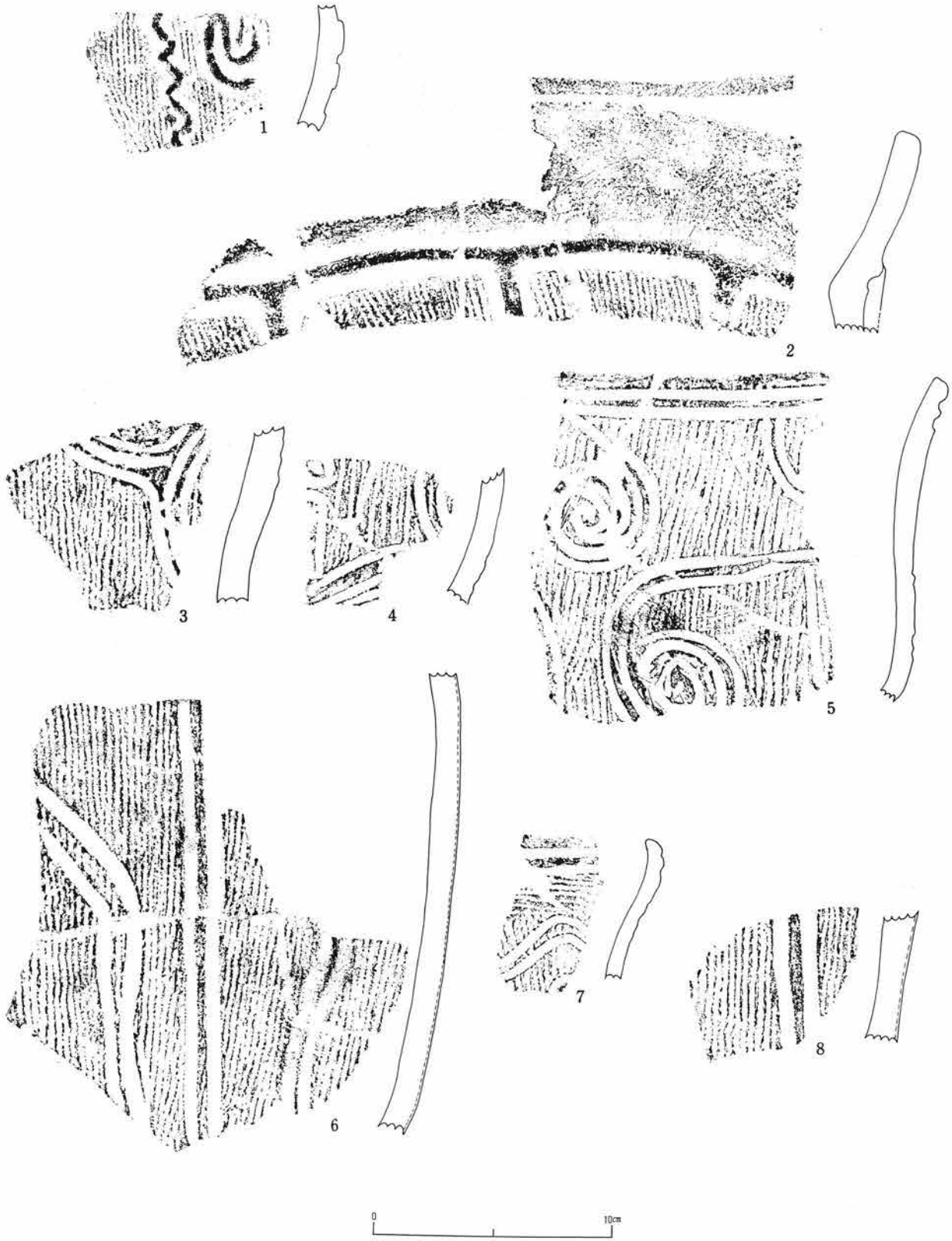
4．6．9～11．13～15　　第2区
1～3．5．7．8．12　　第3区

第32図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影(17)



2～6．8．9．11．13～18　第2区
1．7．10．12　第3区

第33図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影（18）

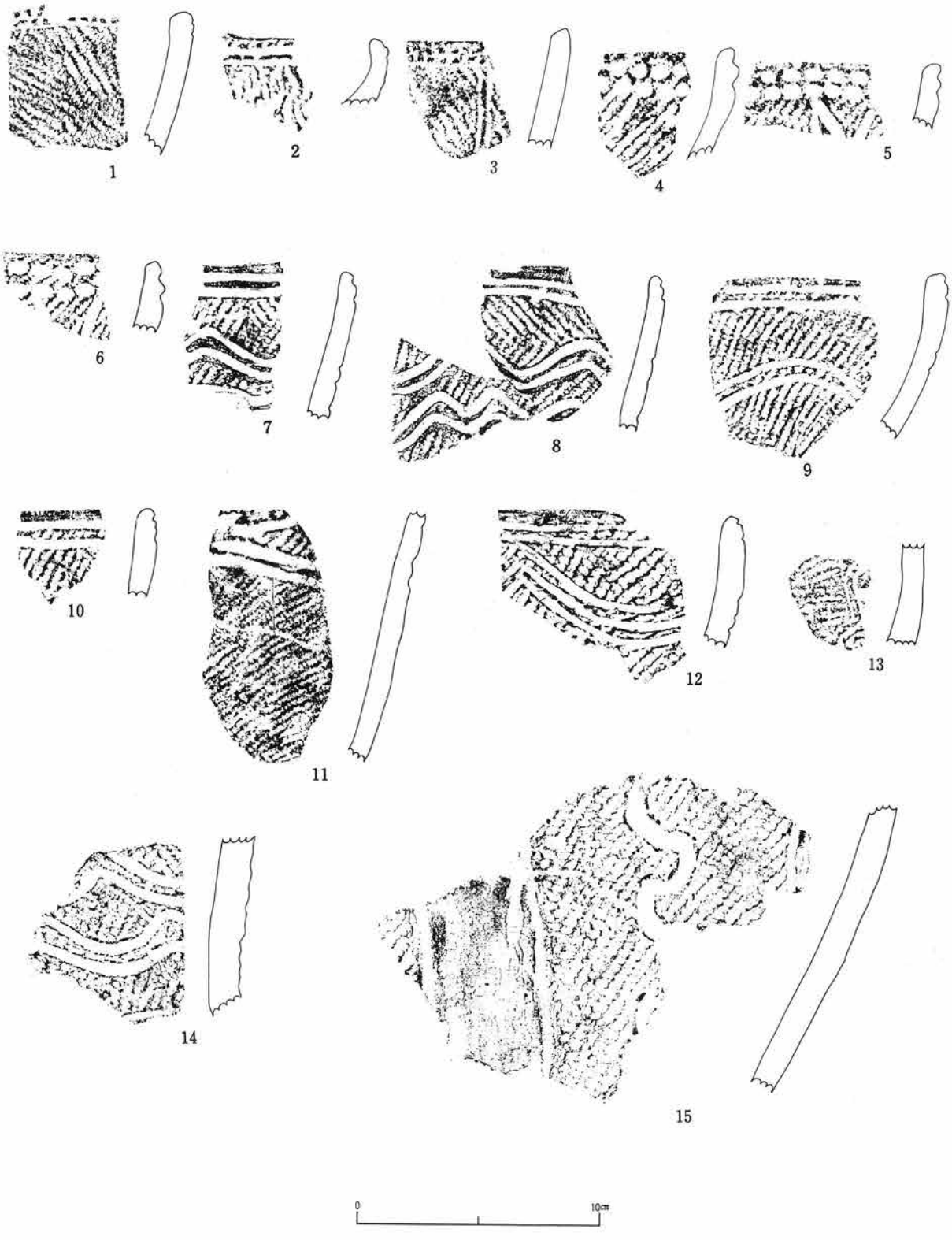


1～8　第2区

第34図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影(19)

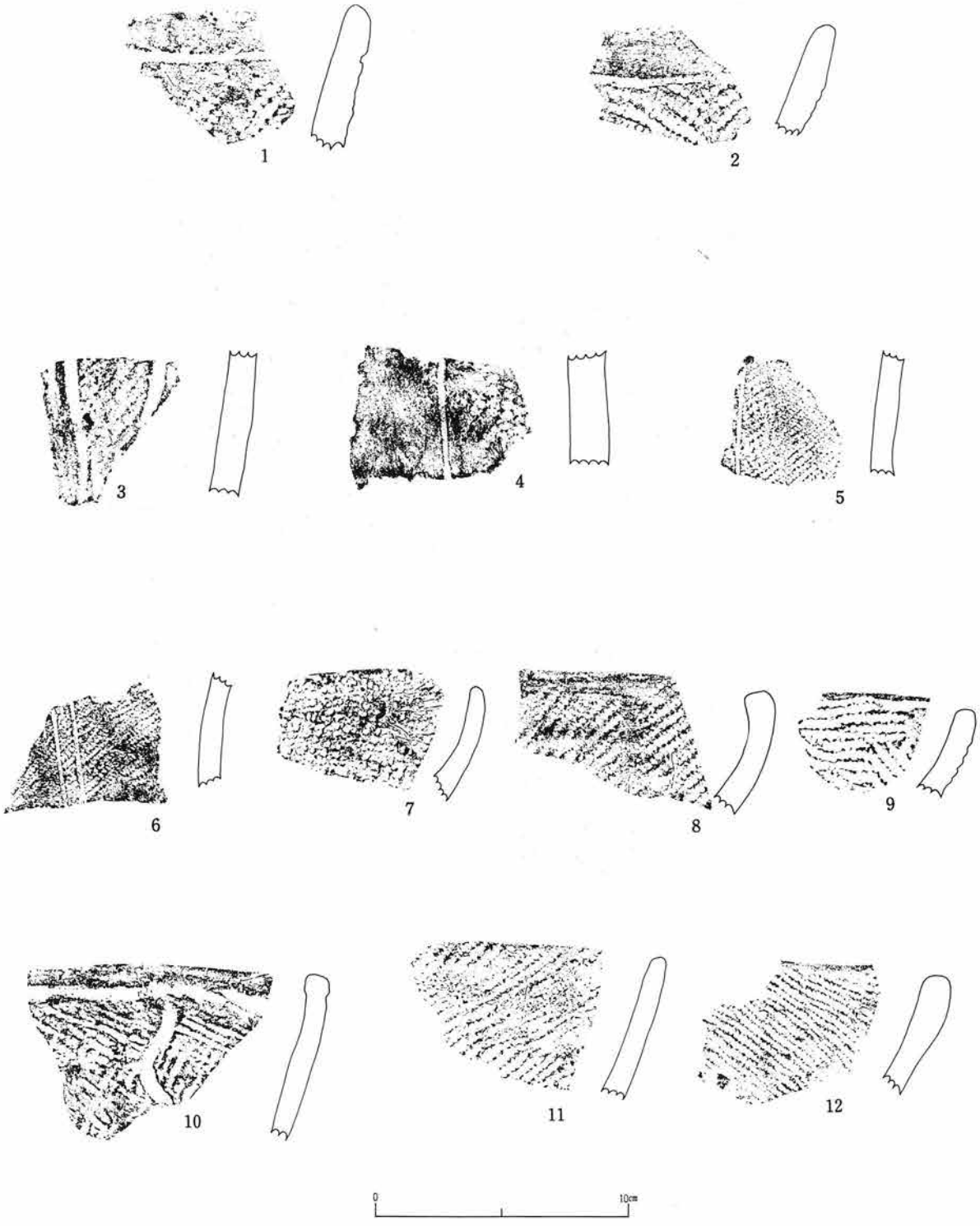
1～8．10～13．15．16　第2区
9．14　第3区

第35図　第Ⅰ次調査出土土器拓影（20）



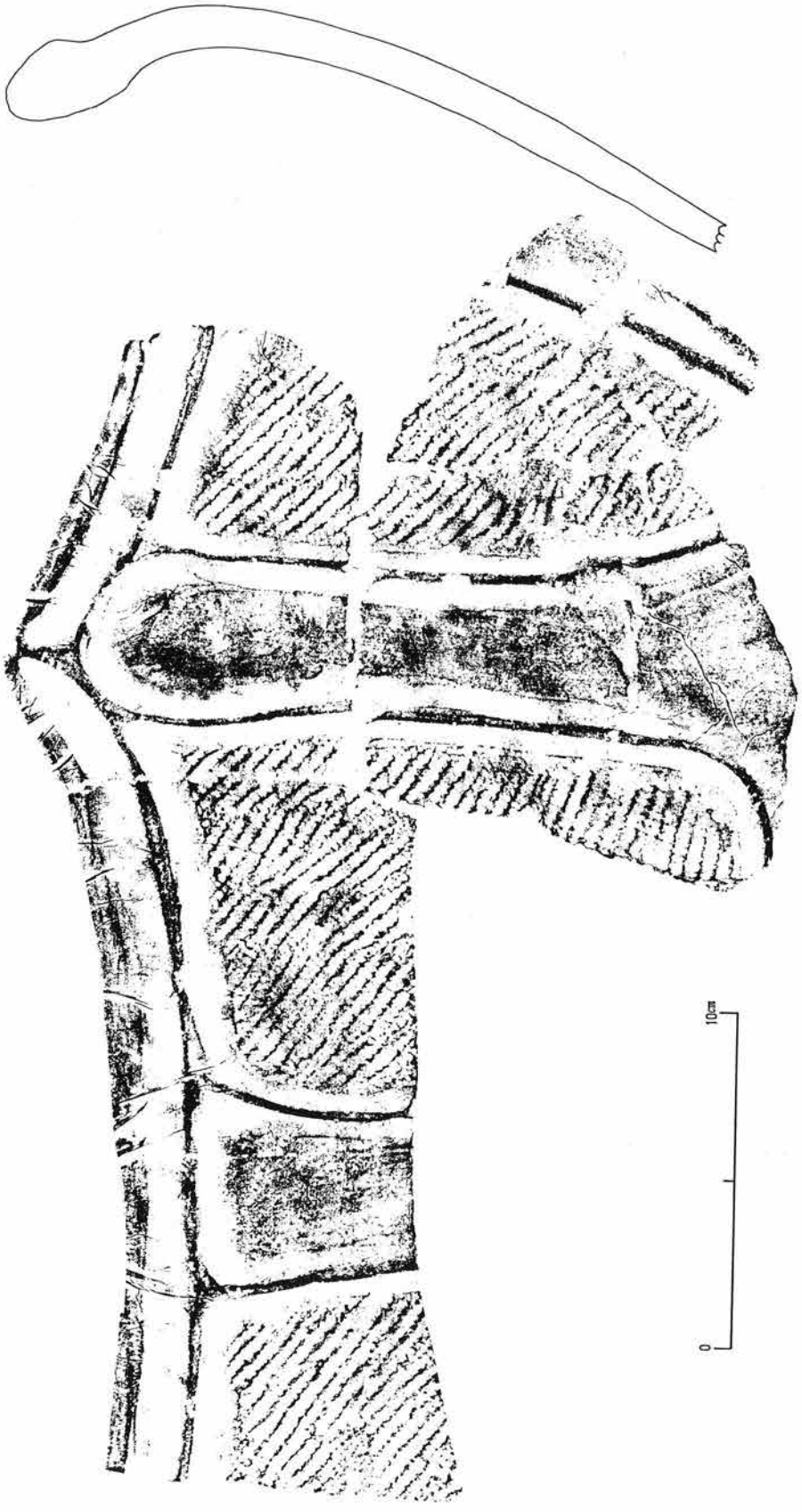
1～14　第2区
15　　第3区

第36図　第Ⅰ次調査出土土器拓影(21)



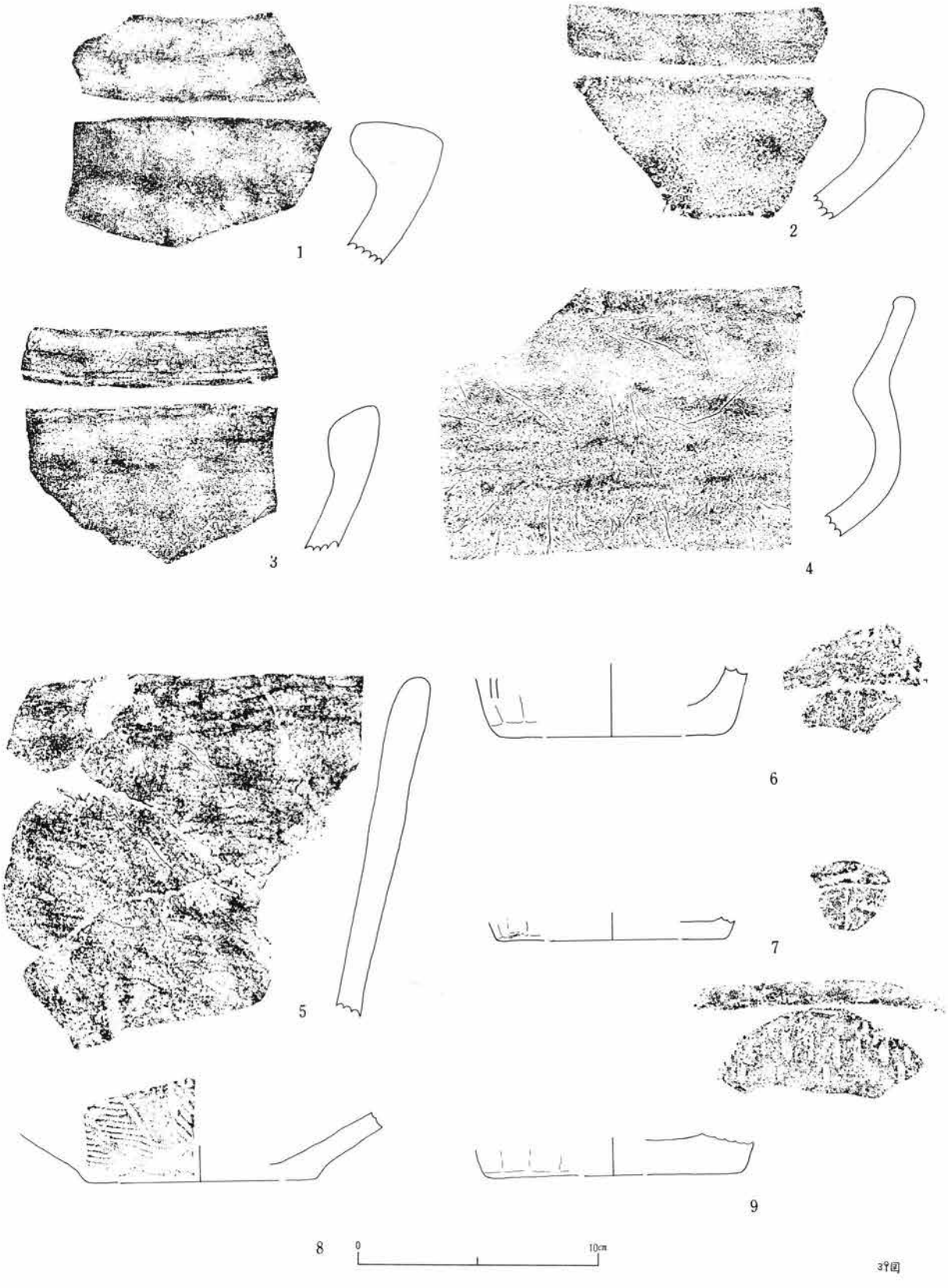
1．3．4．6～12　第2区
2．5　第3区

第37図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影（22）



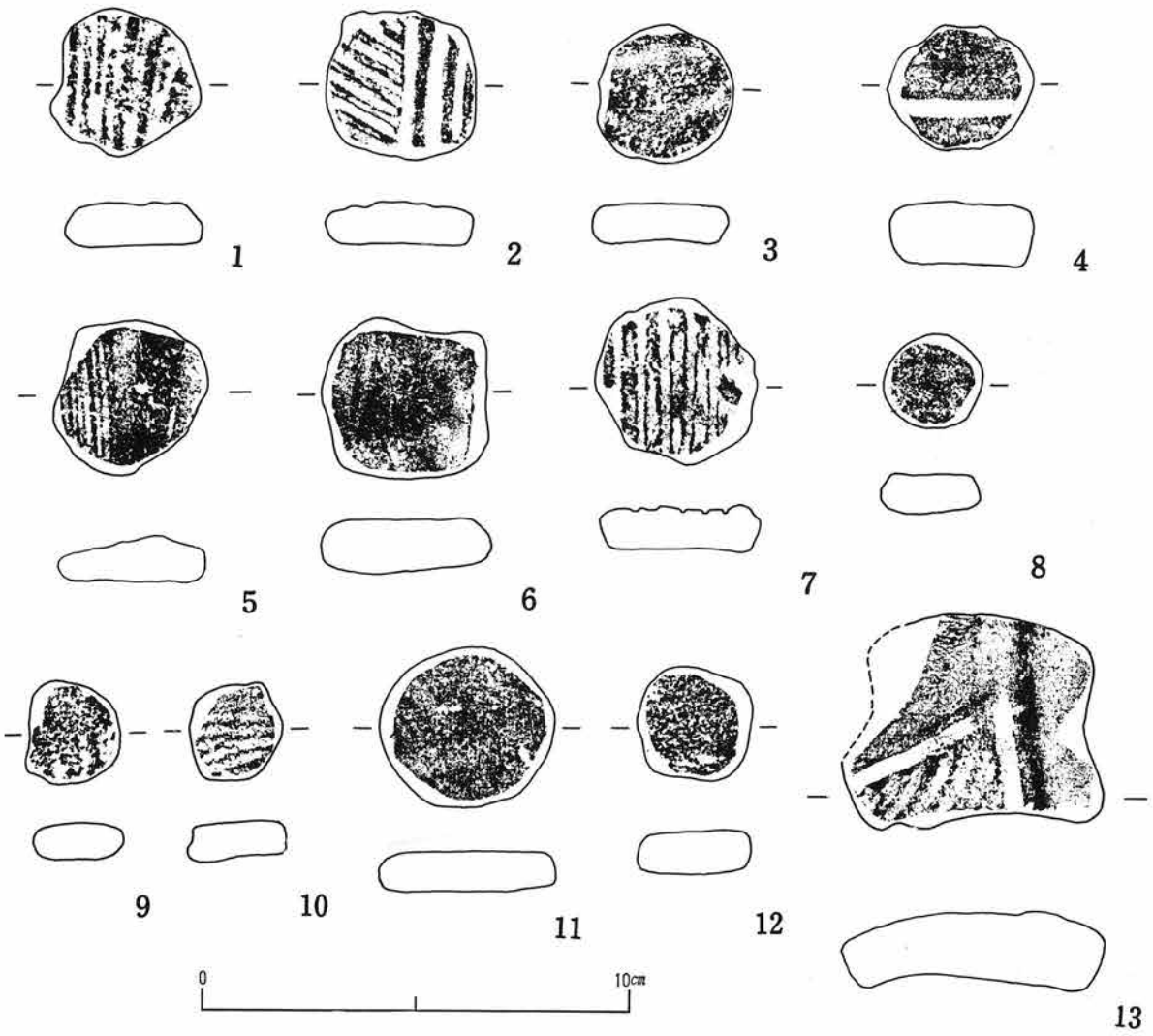
第1区

第38図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影(23)



1～4．6～9　第2区
5　第3区

第39図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影（24）



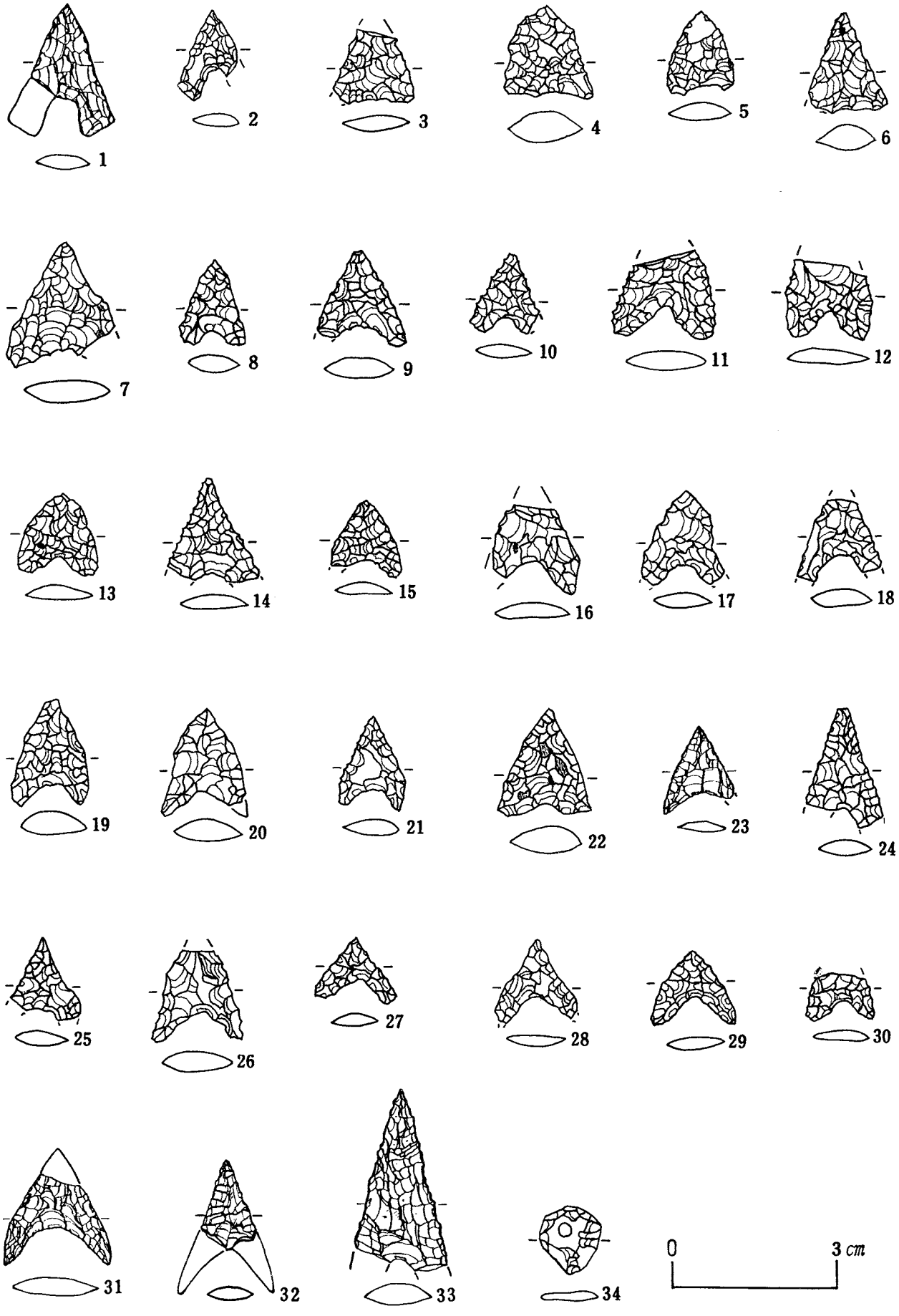
第40図 第Ⅰ次調査 出土土器拓影(25)

ロ、石器

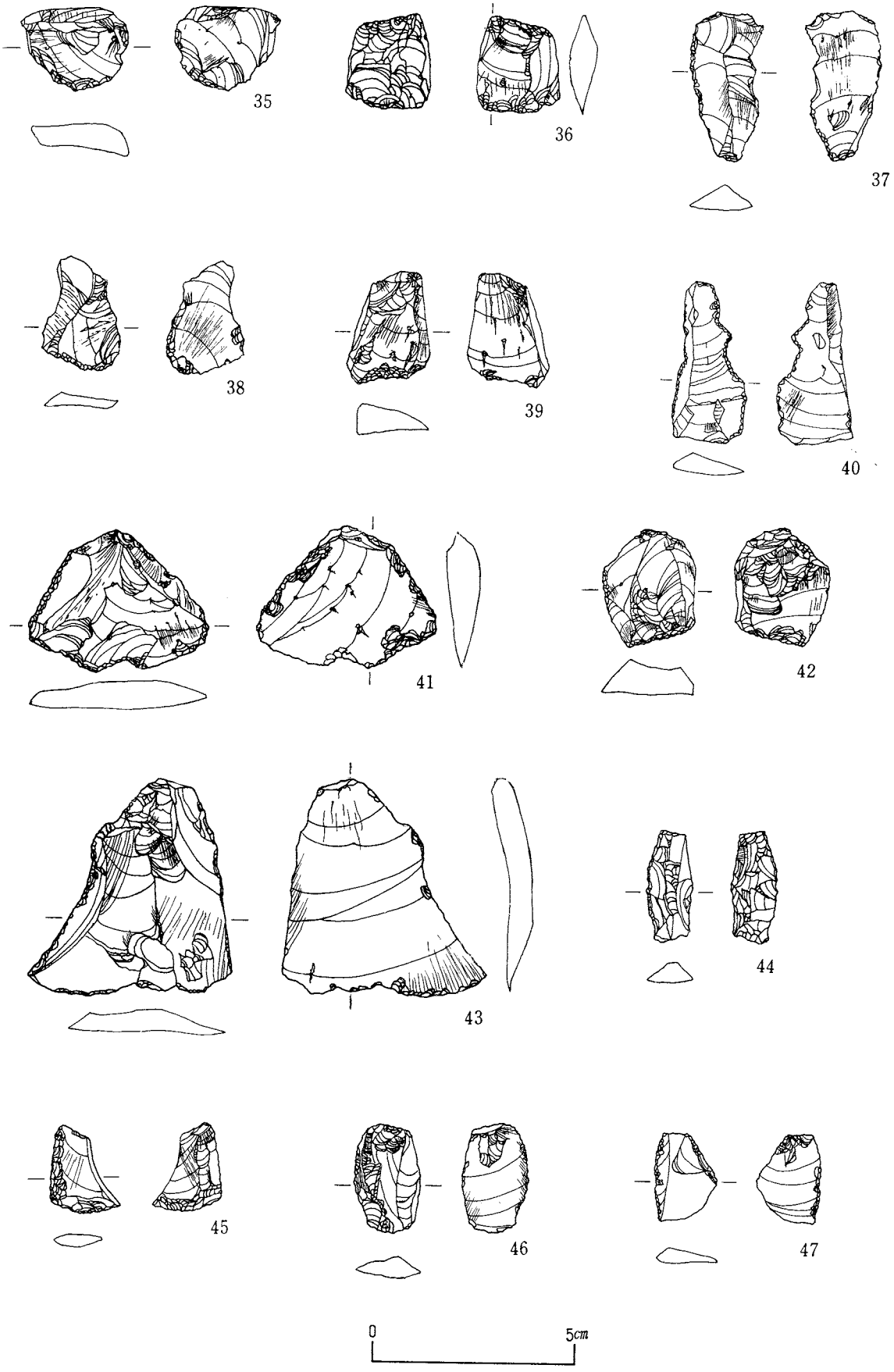
第Ⅰ次調査出土の石器は遺跡の性格上、縄文時代中期のものがその主体となる。しかし遺物の中には縄文時代草創期～早期の土器が検出されており、該期の所産であろうと思われる石器も若干含まれる。石器の種類としては、打製石斧16点、磨製石斧２点、磨石５点、凹石２点、敲石２点、石皿10点、石棒１点、礫器１点、石鏃33点、石匙１点、有孔石製品１点、スクレーパー２点、楔形石器２点、抉入石器１点、細部加工剝片８点に分けられる。

石鏃（第41図・図版27）

実測した石鏃の３割程が完形品である。石材は26を除き総て黒曜石である。石鏃の形態は、凹基無茎鏃（１類）と平基無茎鏃（２類）に大別でき１類が圧倒的に多い。１類には１・２の様に鍬形のもの、４～７の様に抉入が浅くずんぐりとしているものや、33の様に頭部だけで32㎜ある大きなものが出土している。11・14・33は両縁部が鋸歯状をなしており、14・23・33は先端部が鋭利に尖っている。２類は頭部が欠損をしている３のみである。１・２の鍬形鏃は押



第41図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図(1)



第42図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図(2)

型文土器に伴う石鏃と考えている。

細部加工剥片（第42図）

総て材質は黒曜石である。37・46・46は小型の縦長剥片を素材とし、側縁部に調整が行われている。41は扇状の剥片の側縁と底縁に両面より加工が行われている。43は打面をもつ縦長剥片の両側縁及び端部にも調整が行われている。38・45・47は小型の剥片であるが、縁辺に細かい調整がみられる。

スクレーパー（第42図）

35はラウンドスクレーパーを半載したような形状を呈する。刃部は半円部に作られ、片面より急角度に調整されている。39は小形の縦長剥片を素材としている。端部が角度をもって調整されており、エンドスクレーパーに属すると思われる。２点とも材質は黒曜石である。

抉入石器（第42図）

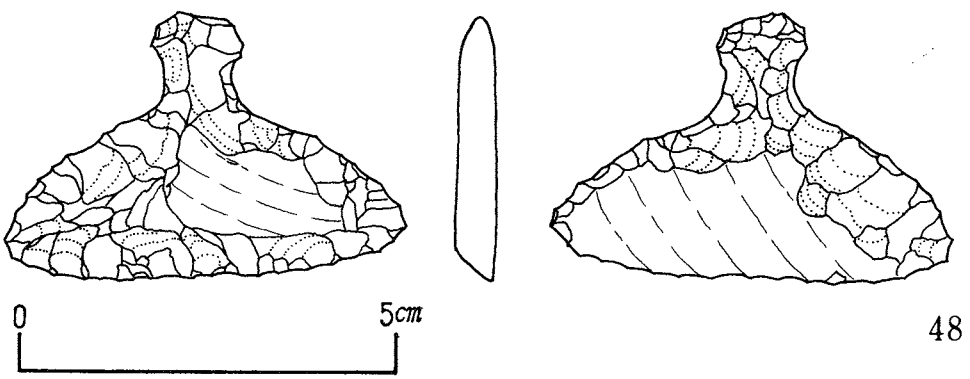
40は縦長剥片を素材とし、その片側の縁辺に抉入部を作り出している。抉入部には細かい調整が行われており、さらに調整は抉入部以外にも及んでいる。黒曜石製である。

楔形石器（第42図）

36・42は比較的厚みのある黒曜石を使用している。相対する二辺の打撃部には、階段状の剥離痕が存在する。残核とも思われるが、ここでは楔形石器とした。

石匙（第43図・図版27）

三角形を呈する横型の石匙で、つまみをもつものである。横長の剥片を素材とし、その周縁部に細部加工を施し整形している。刃部は、片面から押圧状の剥離を施してある。材質は硅質頁岩である。



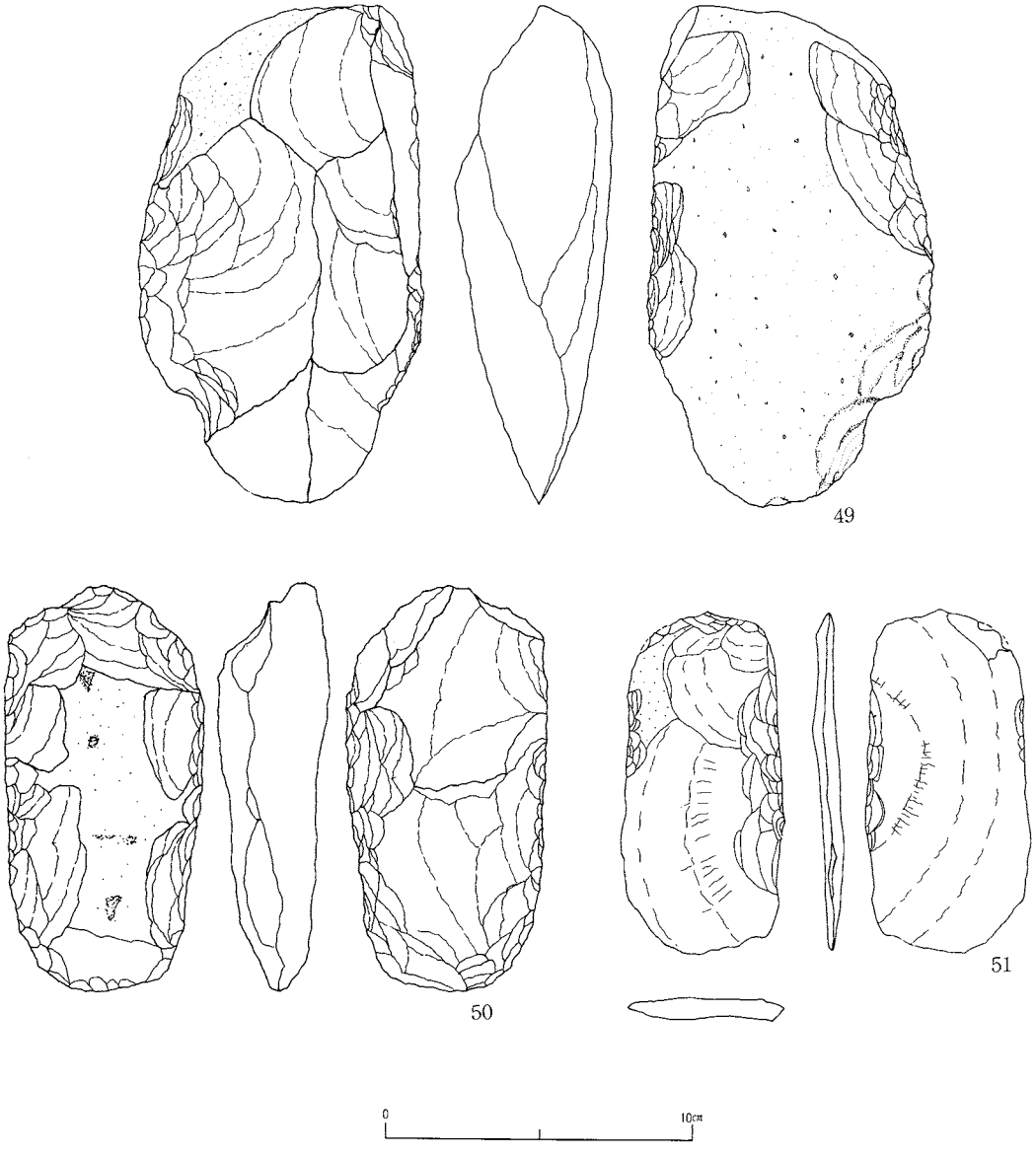
第43図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図(3)

有孔石製品（第41図・図版27）

２区のII層で出土した。裏面部には加工は施されていない。用途は不明である。

礫器（第44図・図版28）

裏面は大部分自然面が残る大形の礫器である。全体に粗い作りであり、刃部にも細かな調整は行われていない。材質は安山岩系である。



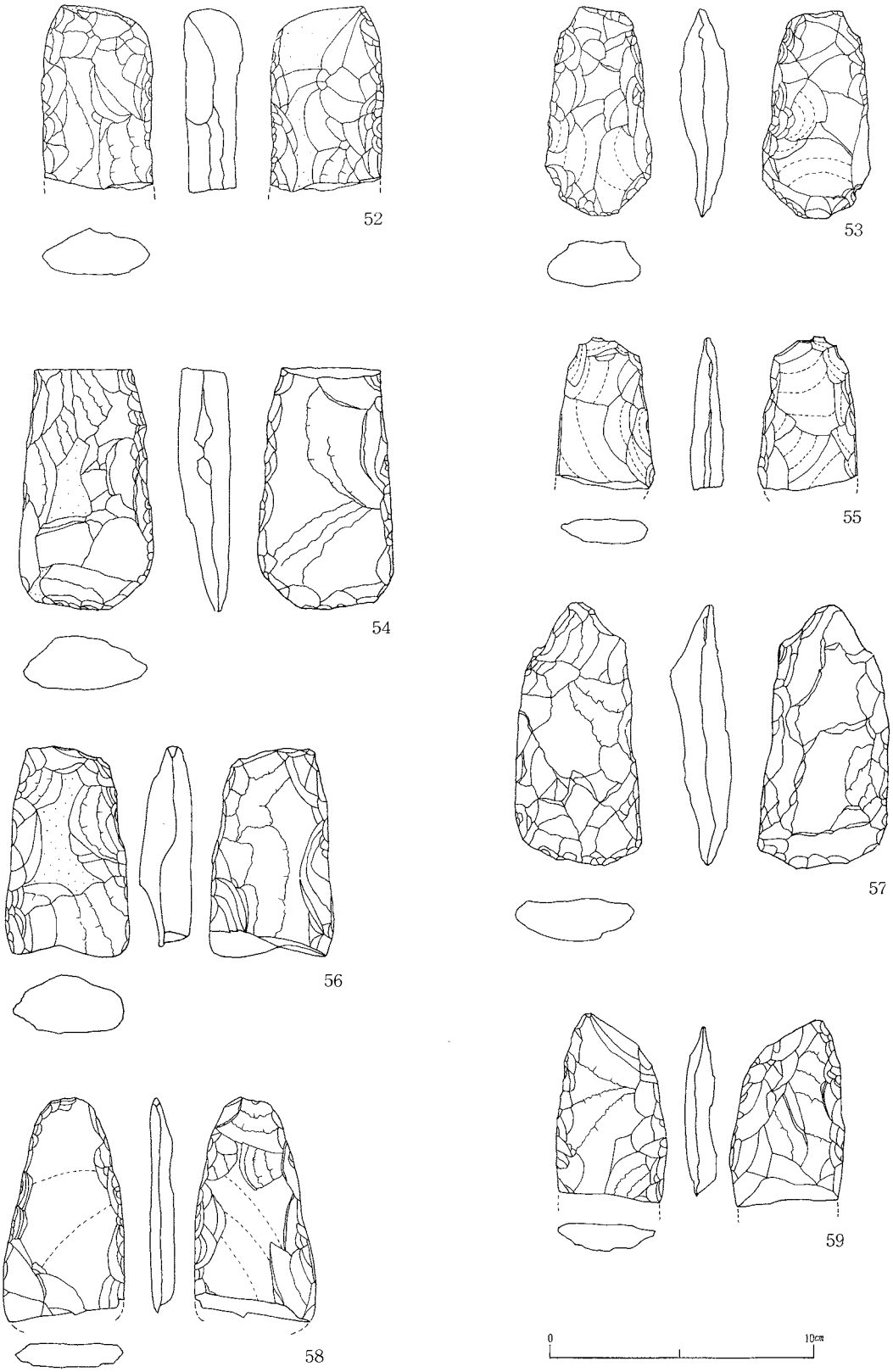
第44図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(4)

打製石斧（第44図～46図・図版28・29）

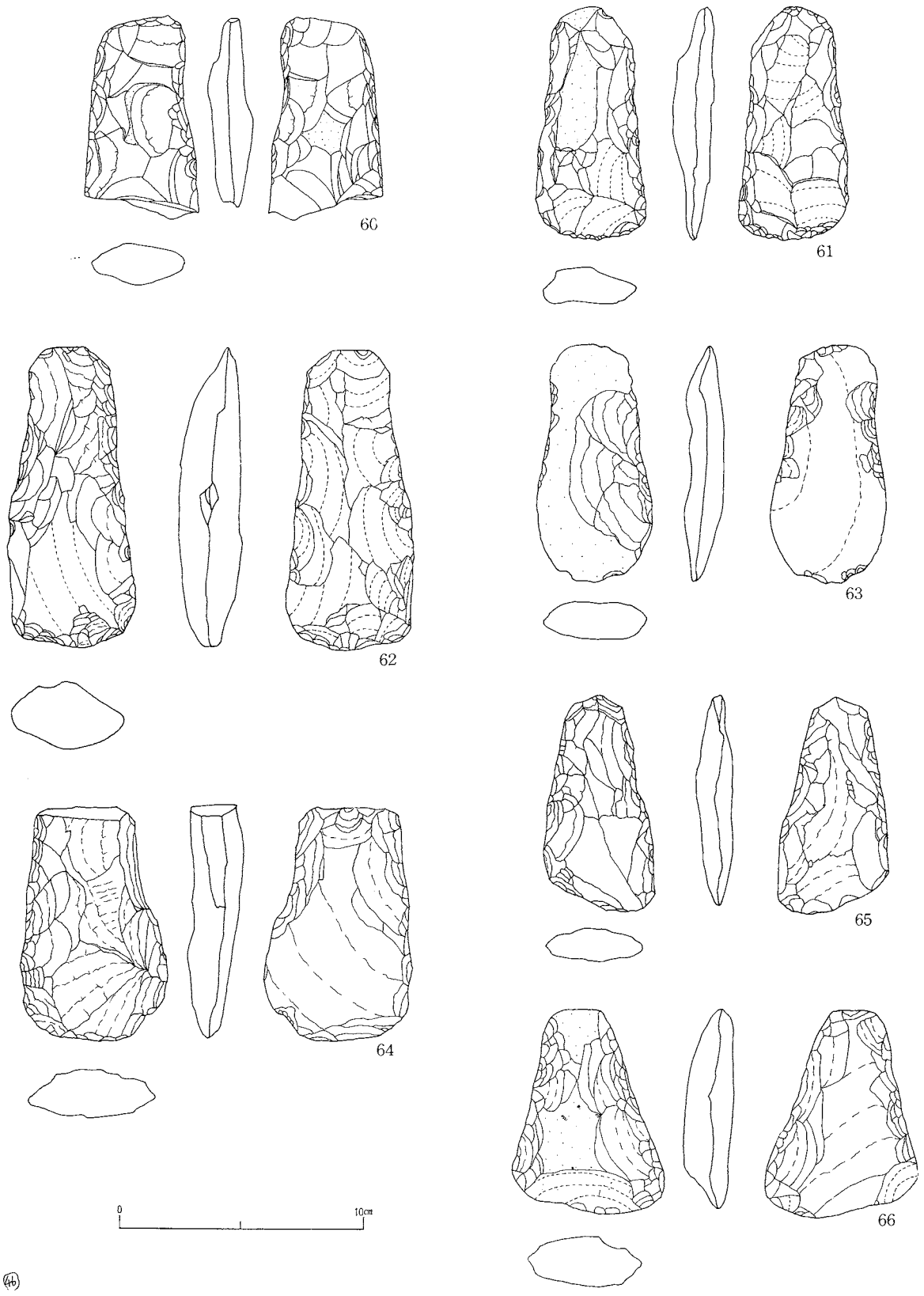
打製石斧は遺構及びグリッドより完形・破損品合わせて15点出土した。材質はそのほとんどが安山岩系のものである。石質によるものと思われるが、作りが全体に粗い感じを受ける。形態的に短冊形・撥形に大別したが、その中間形態のものも何点か含まれる。

1類（44図50・51、45図52～57・59）

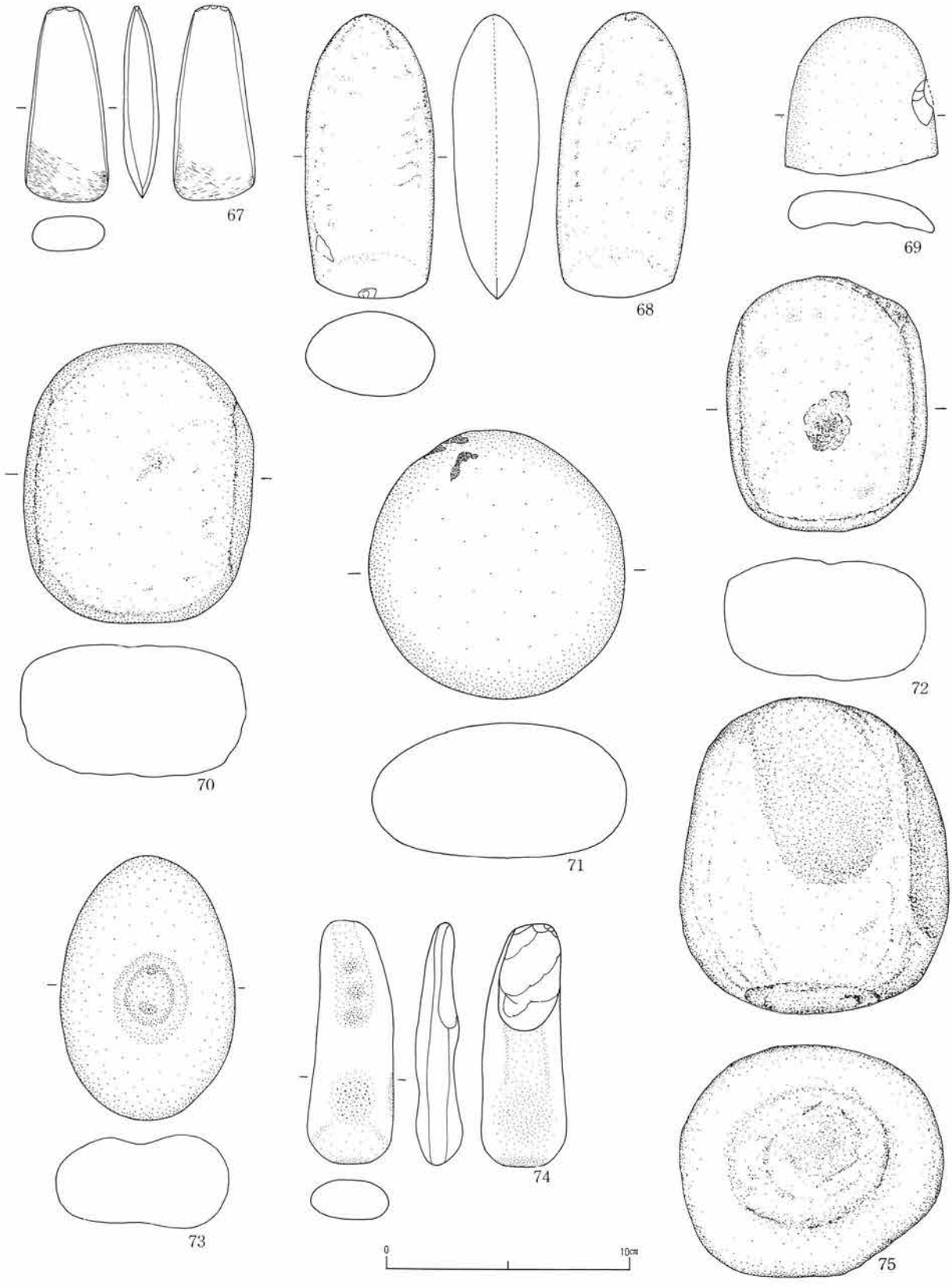
短冊形、及びこれに近い形態のものを本類とした。52・54・56は基部に厚みを持ち、重量感のある石斧である。これらは全体に粗い加工が施され、刃部、両側縁の調整もち密さに欠ける。52・54の表面一部には礫面が残されている。これは小形で基部が肥厚する石斧であり、器面全体に調整が施される。打製石斧というより石篦とすべきかもしれない。55は刃部が欠損するが細身の石斧である。59は片側の縁辺があたかも刃部を作り出したように調整されており、スクレーパー等に使用された可能性も考えられる。51は石斧として図示したが、きわめて薄手であ



第45図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(5)



第46図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図(6)

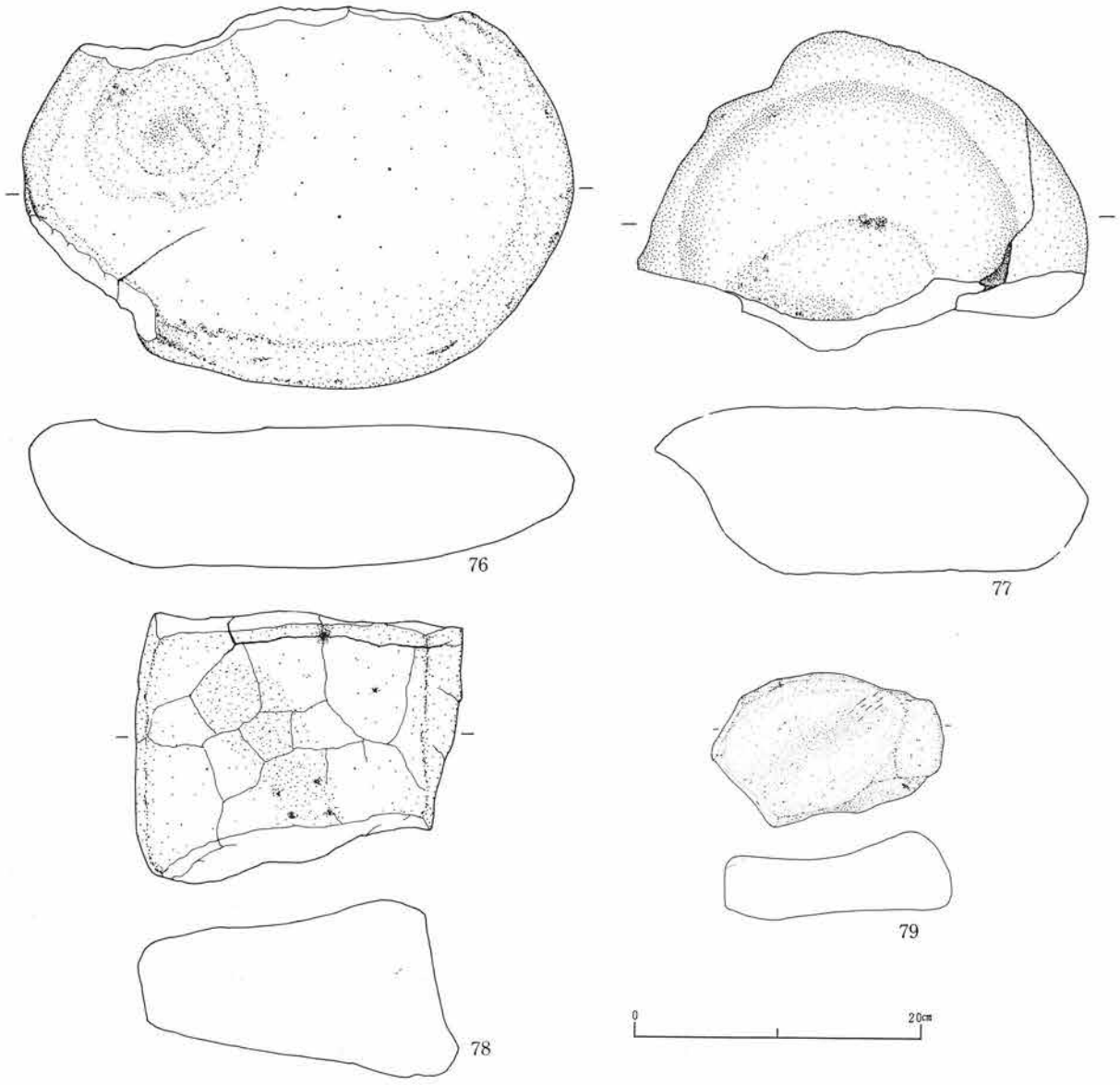


第47図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図(7)

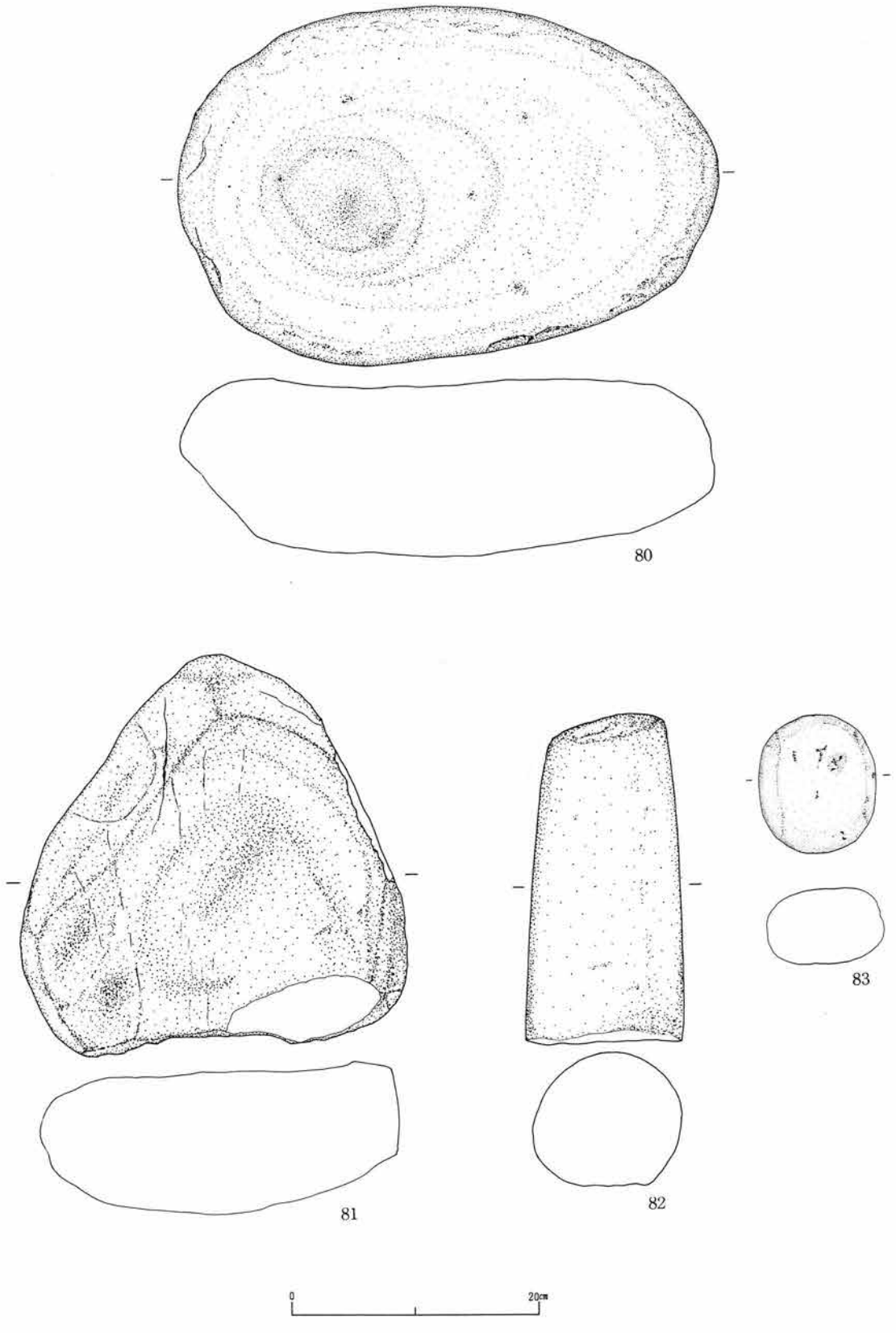
り、かつ側縁に調整加工が行われる。所謂サイドスクレーパーとすべきかもしれない。

2類（第45図58、46図60～66）

撥形とそれに近い形態の打製石斧を本類とした。58は刃部の欠損した薄手の石斧である。両側縁は両面より調整加工が行われる。61・63は表面に礫面を残している。63は基部上部に弱い抉りがみられ、刃部は円刃となる。62はきわめて特徴的な石斧である。主要剝離面である裏面は比較的平坦で、表面は甲高となり、所謂円鑿（まるのみ）状を呈する。刃部は両刃となる。65は刃部が偏刃となる石斧で、一側縁に弱い抉りがみられる。66は急角度に剝離された片刃の刃部をもつ石斧である。表面には礫面を残し、頭部の礫面には磨った跡がみられる。



第48図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図(8)



第49図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(9)

磨製石斧（第47図・図版30）

2点出土。67は定角状で側縁の角にやや丸みがあり、刃部は両刃で鋭利に研磨されている。68は乳棒状で器面を調整した敲打痕が全体に及び、刃部は両刃で研磨されており、歯こぼれが見られる。材質は2点とも砂岩である。

磨石（第47図、49～50図、図版31・32）

各種あわせて6点出土。材質は総て安山岩系である。69は棒状磨石の破片である。比較的薄手なものであり、第II次調査で出土した遺物の中に同型のものが4点含まれている。70は箱形に近く、各面が平滑であり、特に側面が平らに摩滅している。83は第2号住居跡の東南隅の柱穴際より石棒・石皿に並んでいた。85は楕円形であり、縁部に稜はなく、側面と表面の全てに磨痕を有している。表面に浅い凹みがある。第3号住居跡において、石皿(84)と共に出土した。71は円形で、全体がきれいに整形されており、周縁には打痕が残存する。

石皿（第48図～第50図、図版31・32）

完形品4点、一部欠損2点、欠損品3点の9点が出土した。第2号住居跡内からの出土が多く、大型が4点出土、第3号住居跡内から1点、他3点の出土であった。磨面が平坦(a)、若干凹むもの(b)、大きく緩やかに凹むもの(c)に分けた。材質は全んどが安山岩系である。

a類（第50図・84・86）

84は小型で扁平な自然礫の側縁を調整して表裏共に平盤状に磨面があり、磨石と一緒に出土した。86は大型の楕円形を呈し側縁には敲打調整がみられる。第2号住居跡内において釣手形土器の隣りに石棒と並び表面を上に出土した。

b類（第48図、76・77・78、第49図、80・81）

76・80は大型の楕円形で凹みは中央になく、縁辺近くに浅い凹みを持つ。76は敲打痕のある凹みであり、80は摩滅された緩かな凹みである。裏面に磨面はなく、打痕が円を描くように回っている。77は欠損しているが、磨面の中央部と思われる所に敲打痕を有し凹んでいる。78は欠損している為形状は不明である。磨面は中央部が若干凹み、煤が付着し使用痕とおもわれる小さな穴が数個あいている。又裏面にも同じく小さな穴があり、その内の1つは、熱を加えられたように煤が黒く付着し、周囲に広がっている。風化が激しくひび割れがしている。81は第2号住居跡内において磨石・石棒に伴出している。床面に斜めに刺さり、その裏面に石棒が置かれていた。形状は三角を呈し、中央がわずかに凹んでおり、実用以外に祭祀具としての用途も想定される。

c類（第48図・79）

粒子の粗い石材であり、不定形ではあるがほぼ完成品と思われる。手のひらで持てる位の大きさであり、緩かに凹んでおり砥石として使用したのかもしれない。

凹石（第47図・図版30）

73は長円形で磨面と凹みを有する。凹みは表裏にあり、表面の凹みは深く、敲打し形成され全体を磨って整形してある。裏面は平滑に磨痕があり、中央が緩やかに凹んでいる。72は箱形

で磨面と凹みを有する。凹みは表面は深く、敲打し形成され、裏面は浅い凹みである。磨面が器面全体におよび、特に側面を強く磨ってある。

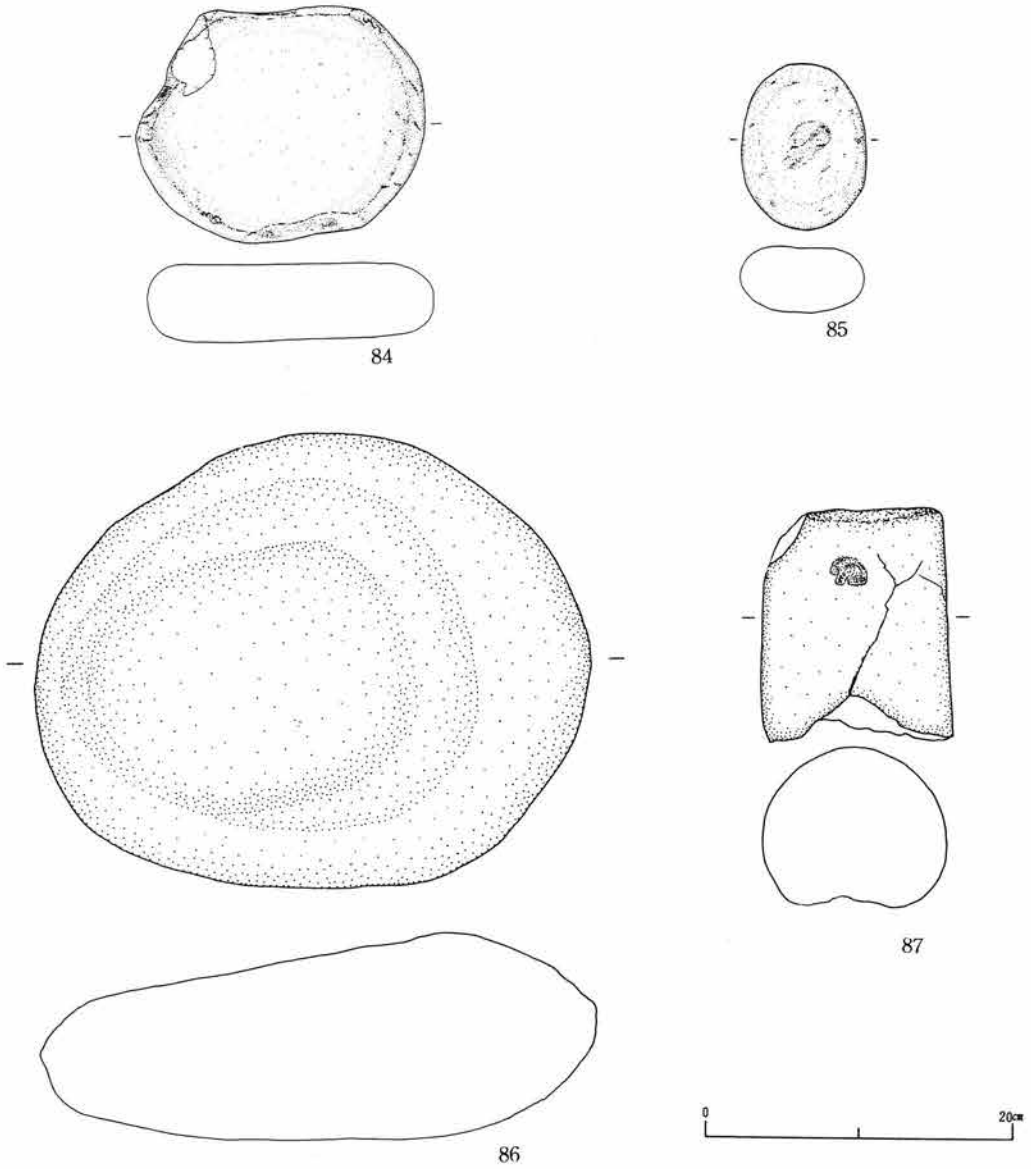
敲石（第47図・図版30）

74は細長い小型の河原石を利用しており、上部は片面を剝離し、下部は敲打して形成され全体を磨って整形してある。

75は多面に磨面を有し、底部を平坦に整形して使用したと思われる。重量感のある石である。

石棒（第49図・第50図・図版31）

第2号住居跡内より2点出土している。2点とも無頭であり、頭頂部は平端であり、敲打し整形している。87は一部欠損し、全面に煤の付着がみられる。82は片側に意図的に削られたような一面を残している。しかもその面は整形されており周囲には煤が付着している。又この石棒は釣手形土器及び先に述べた三角形状を呈する石皿と共伴して出土しており、祭祀的なセットの一用具と想定される。



第50図 第Ⅰ次調査 出土石器実測図（10）

（単位mmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備号
石鏃	2区(2号住)	H－1	41－1	27	24.3	12.5	3.35	0.85	黒曜石	左脚部欠損
〃	表採	H－1	41－2		16.3	8.6	2.4	0.25	〃	右脚欠損
〃	3区(3号住)	H－2	41－3		13.9	13.1	3.2	0.6	〃	頭部左脚欠損
〃	3区	H－1	41－4		17.1	16.2	6.1	1.45	〃	完形品
〃	3区	H－1	41－5		14.9	12.0	4.0	0.6	〃	完形品
〃	表採	H－1	41－6		13.6	14.0	5.3	0.95	〃	左脚部欠損
〃	表採	H－1	41－7		22.5	18.4	4.3	1.45	〃	右脚欠損
〃	2区(2号住)	H－1	41－8		16.0	12.0	3.4	0.5	〃	完形品
〃	2区(2号住)	H－1	41－9		17.9	14.9	4.1	0.9	〃	左脚欠損
〃	2区(2号住)	H－1	41－10		14.9	11.8	2.6	0.35	〃	右脚部欠損
〃	2区(2号住)	H－1	41－11		16.0	17.9	3.9	0.95	〃	頭部欠損
〃	2区(2号住)	H－1	41－12		14.8	15.7	3.3	0.8	〃	頭部欠損
〃	2区(2号住)	H－1	41－13		15.0	14.2	3.1	0.55	〃	完形品
〃	3区(3号住)	H－1	41－14		19.9	15.8	3.0	0.7	〃	両脚部欠損
〃	2区	H－1	41－15		14.3	12.8	2.9	0.4	〃	左脚欠損
〃	2区	H－1	41－16		15.8	15.9	3.0	0.65	〃	頭左脚部欠損
〃	3区	H－1	41－17		17.1	15.0	3.2	0.6	〃	両脚部欠損
〃	3区	H－1	41－18		14.9	15.5	4.0	0.65	〃	頭両脚部欠損
〃	表採	H－1	41－19		19.9	13.7	4.6	1.15	〃	完形品
〃	3区	H－1	41－20		19.9	15.8	4.5	1.05	〃	右脚部欠損
〃	表採	H－1	41－21		17.8	12.0	3.6	0.5	〃	完形品
〃	表採	H－1	41－22		19.9	15.1	5.2	1.35	〃	完形品
〃	2区(2号住)	H－1	41－23		15.5	12.1	2.3	0.35	〃	右脚部欠損
〃	3区(3号住)	H－1	41－24		22.0	13.2	3.4	0.65	〃	両脚部欠損
〃	2区	H－1	41－25		16.0	13.2	2.9	0.35	〃	両脚部欠損
〃	3区(3号住)	H－1	41－26		17.0	16.0	4.1	1.15	硅質頁岩	頭部欠損
〃	3区(3号住)	H－1	41－27		12.6	12.0	3.1	0.3	黒曜石	完形品
〃	3区(3号住)	H－1	41－28		15.1	13.0	2.4	0.35	〃	両脚部欠損
〃	3区(3号住)	H－1	41－29		13.2	13.1	3.1	0.36	〃	完形品
〃	表採	H－1	41－30		8.8	11.1	2.15	0.2	〃	頭部欠損
〃	表採	H－1	41－31		17.1	17.9	3.75	0.7	〃	頭部欠損
〃	2区	H－1	41－32		16.9	10.2	2.3	0.35	〃	両脚部欠損
〃	表採	H－1	41－33		33.9	16.0	4.6	1.75	〃	両脚部欠損
石製品	2区		41－34	27	12.8	11.8	2.2	0.25	〃	有孔
スクレパー	2区(2号住)	D	42－35		20.1	23.2	6.5	3.9	〃	
楔形石器	3区(3号住)	E	42－36		23.0	20.0	8.8	4.0	〃	
細部加工剝片	3区(3号住)	G	42－37		36.1	16.6	5.9	3.1	〃	
〃	3区(3号住)	G	42－38		27.1	27.1	2.9	1.3	〃	
スクレーパー	5区(4号住)	D	42－39		29.5	20.2	7.0	3.5	〃	
抉入石器	2区	V	42－40		38.5	17.6	5.0	3.0	〃	
細部加工剝片	1区	G	42－41		34.0	44.1	9.8	12.2	〃	
楔形石器		E	42－42		29.0	22.5	8.2	6.2	〃	
細部加工剝片		G	42－43		51.5	50.1	7.0	14.2	〃	
〃		G	42－44		27.2	10.5	5.9	1.6	〃	

第3表 第Ⅰ次調査 石器計測一覧表(1)

（単位mmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
細部加工剝片		G	42－45		20.5	16.2	4.1	1.2	黒曜石	
〃		G	42－46		26.5	15.2	4.1	2.1	〃	
〃		G	42－47		21.0	14.2	4.5	1.2	〃	
石匙		T	43－48	27	34.6	52.1	7.2	11.2	硅質頁岩	
礫器	2区	K	44－49	28	163.0	92.1	49.5	844.0	安山岩	
打製石斧	2区(2号住)	M－1	44－50	28・29	133.2	64.1	35.0	380	安山岩	
〃	2区(2号住)	M－1	44－51		111.1	521.0	81.0	60.0	安山岩	
打製石斧	4区(22号土坑)	M－1	45－52		68.0	40.0	21.0	87.0	安山岩	
〃	3区	M－1	45－53		80.0	36.0	18.0	66.0	安山岩	
〃	2区(2号住)	M－1	45－54		93.0	47.0	20.0	136.0	安山岩	
〃	3区(3号住)	M－1	45－55		55.0	33.0	13.0	35.0	安山岩	
〃	2区(2号住)	M－1	45－56		77.0	45.0	25.0	120.0	安山岩	
〃	〃	M－1	45－57		98.0	43.0	18.0	11.3	頁岩	
〃	〃	M－2	45－58		81.0	39.0	10.0	51.0	安山岩	
〃	〃	M－1	45－59		63.0	41.0	11.0	44.0	頁岩	
〃	〃	M－2	46－60		72.0	40.0	17.0	82.0	砂岩	
〃	〃	M－2	46－61		96.0	39.0	15.0	73.0	安山岩	
〃	〃	M－2	46－62		124.0	45.0	26.0	194.0	安山岩	
〃	〃	M－2	46－63		97.0	40.0	17.0	900	安山岩	
〃	〃	M－2	46－64		95.0	54.0	19.0	167	安山岩	
〃	〃	M－2	46－65		85.0	40.0	15.0	70	安山岩	
〃	〃	M－2	46－66		81.0	45.0	20.0	120	砂岩	
磨製石斧	2区(2号住)	N	47－67	30	80.0	30.0	14.0	64.0	砂岩	
〃	4区	N	47－68		118.0	52.0	35.0	336	砂岩	
磨石	2区(2号住)	O－1	47－69	31	(65.0)	61.0	19.0	76	安山岩	
〃	〃	O－2	47－70		116.0	91.0	56.0	900	安山岩	
〃	〃	O－2	49－83		113.0	94.0	60.0	976	安山岩	
〃	3区(3号住)	O－3	50－85	32	108.0	79.0	45.0	523	安山岩	
〃	3区(1号土坑)	O－4	47－71		111.0	102.0	56.0	1050	安山岩	
凹石	2区(2号住)	P	47－72	30	105.0	81.0	50.0	695	安山岩	片面に凹み
〃	3区	P	47－73		109.0	71.0	39.0	420	安山岩	両面に凹み
敲石	2区(2号住)	R	47－74	30	125.0	109.0	101.0	2100	安山岩	1号住居
〃	3区(3号住)	R	47－75		101.0	32.0	17.0	100	砂岩	
石皿	2区(2号住)	S	48－76		378.0	273.0	92.0	15500	安山岩	
〃	〃	S	48－77		318.0	229.0	118.0	8800	安山岩	
〃	〃	S	48－78		248.0	185.0	124.0	7100	安山岩	
〃	〃	S	48－79	32	(159.0)	101.0	39.0	847	浮岩	
〃	4区(4号配石)	S	49－80		439.0	274.0	145.0	24500	安山岩	
〃	2区(2号住)	S	49－81	31	309.0	318.0	123.0	16000	安山岩	
〃	3区(3号住)	S	50－84		183.0	150.0	56.0	2900	安山岩	
〃	2区(2号住)	S	50－86		364.0	296.0	127.0	21000	安山岩	
〃	2区	S	図化せず		176.0	97.0	134.0	3500	安山岩	破片
石棒	2区(2号住)	T	50－87		148.0	119.0	121.0	3500	安山岩	
〃	2区(2号住)	T	49－82	31	272.0	135.0	115.0	6900	安山岩	

第4表 第Ⅰ次調査 石器計測一覧表(2)

3．小　結

第Ⅰ次調査によって検出された遺構は、縄文中期中葉～末葉の住居跡３基、同時期の土坑41基（この内配石土坑４基）であった。当町では既に、昭和53年茅野Ｂ遺跡の発掘調査によって、本遺跡にやや近い時期の住居跡７基・土坑15基が検出されている。

第２号住居跡の出現は、我々にとって大きな驚きであり、神秘的なものであった。第Ⅳ章第２節で触れた通り、本住居跡は釣手形土器や石棒・石皿・磨石の在り方などから、極めて宗教色の濃いものである。石囲い炉の脇に置かれた釣手形土器の出土状況は、これから行われるであろう呪術的行事の為の準備段階を物語っているのかも知れない。炉で焚かれた「神聖な火」を今まさに灯火具である釣手形土器へ移す所であったろうか。あるいは、すべての行事を終えその使命を全うした「家」は何等かの事情によって廃棄せざるを得ない状態に置かれた為、呪術に使われたそれぞれの道具は「家」と共に埋納する事になったのであろうか。また、釣手形土器の横にある石棒と石皿は炉端での憩いの作業を想起させるものである。さらに、石皿の裏面に直角に対応している石棒の組み合わせは明らかに生殖的な行為を意識し象徴したものであろう。

第４号住居跡の大型炉内に残された炭化材は栗又は椎であった。おそらく大きな火が焚かれていたものであろう。本住居跡が焼失家屋である事は前述の通りであるが、使用を停止した後故意に火入れを行い焼失させたか、アクシデントによる焼失かは想像する以外術はない。しかし、主要な生活用具はほとんど残されていなかった事を見れば、予めの準備が済んだ後火を放たれたものかも知れない。

土坑は、その規模・形状などを見ると茅野Ｂ遺跡のものに良く似ている事が分かる。またその配置状況は、弧状に並んだ住居跡の内側に存在しているなど、茅野Ｂ遺跡第１土坑群に共通している。本遺跡の土坑群は狭い範囲に密集して検出された。それらは単独に構築または並んで存在し、あるいはそれぞれ切り合っている。41基の土坑が構築時期にそれほどの時間幅があるとは考えられない。伴出した遺物の時期からすれば、中期末葉にそのほとんどが構築されたものと考えられる。

今回の調査によって検出された土器の中で、第２号住居跡に伴出したものはいわゆる曾利式土器の系統のものであるが、第３号や第４号住居跡から伴出したものは、加曾利Ｅ式系と曾利系のものが混在し、むしろ加曾利Ｅ式系色が強く感じられる。大平Ｃ遺跡の例を挙げれば、検出された中期末葉の住居跡２基からは、曾利Ⅱ式～Ⅲ式への過渡期の土器が伴出している。これには加曾利Ｅ式系のものはほとんど見られない。中期に限って言えば、大平Ｃ遺跡に続くと考えられる仲道Ａ遺跡や茅野Ｂ遺跡の頃には加曾利Ｅ式系がより多く浸透してくるようである。

第3節　第 II 次 調 査

1．層　序

第II次調査によって確認された層序は、表土層から遺跡の基盤となっているハードローム層まで第Ⅰ層～第Ⅶ層に分ける事ができる。調査地区は、北西側（A－1・2、B－1・2、C－1・2区等）においては既に第IVbから第Va層の上面が削土されており、また、東南側（H－1・2、Ⅰ－1・2区）は盛土が厚くさらに平安時代末期の河川跡が検出された為、基本的な層序は、第1号住居跡付近のB・C－3区とG－2・3区およびH－1・2区にこれを求めた。

調査区はかって水田であり、その造成の際に少なくとも縄文時代中期から早期の包含層あるいは該期の遺構が、かなりの部分において破壊されたものと思われる。

第Ⅰ層　表土層。昭和11年に社宅を建てる時の盛土である。大小の石や瓦などを含んでいる。層厚は30cm前後である。従って、東南側の傾斜地では1m以上の堆積が見られる。

第II層　灰褐色土層。旧耕作土、調査区の東側を中心に検出されている。層厚は約20cmである。

第IIIa層　黄褐色土層。水田の床土（鉄分を含んだ層）であり、層厚は約7cmであった（B－3区）。

第IIIb層　暗褐色土層。流入による砂層であり層厚は約10cm。パーミスを含んでいる。

第IIIc層　暗赤褐色土層。IIIb層と同様の流入砂層。層厚は約15cm。多量のパーミスを含んでいる。IIIb層・IIIc層共、E－2・3、F－2・3区における堆積例であるが、これがそのまま調査区のIII層を物語るものではなく、H－3区では黒色土層となっており、平安時代以降の包含層として捕らえる事が出来る。これは予備調査および第Ⅰ次調査の地点で見られた黒色土層と同じである。つまり、IIIb、c層は山崩れや洪水等によってもたらされた堆積層であると思われる。

第IVa層　明黄褐色土層。水田の床土（鉄分を含んだ層）であり、層厚は約10cmである。

第IVb層　暗褐色土層。当町では普遍的に検出される縄文中期の包含層となるものであって、若干のパーミスを含んでいる。層厚は10～15cmである。

第Va層　暗茶褐色土層。基本的には第IVb層と同じであるが、遺物量は少くなる。本層の下部から第Vb層の上面にかけては縄文早期の遺物が含まれている。層厚は30～35cmである。

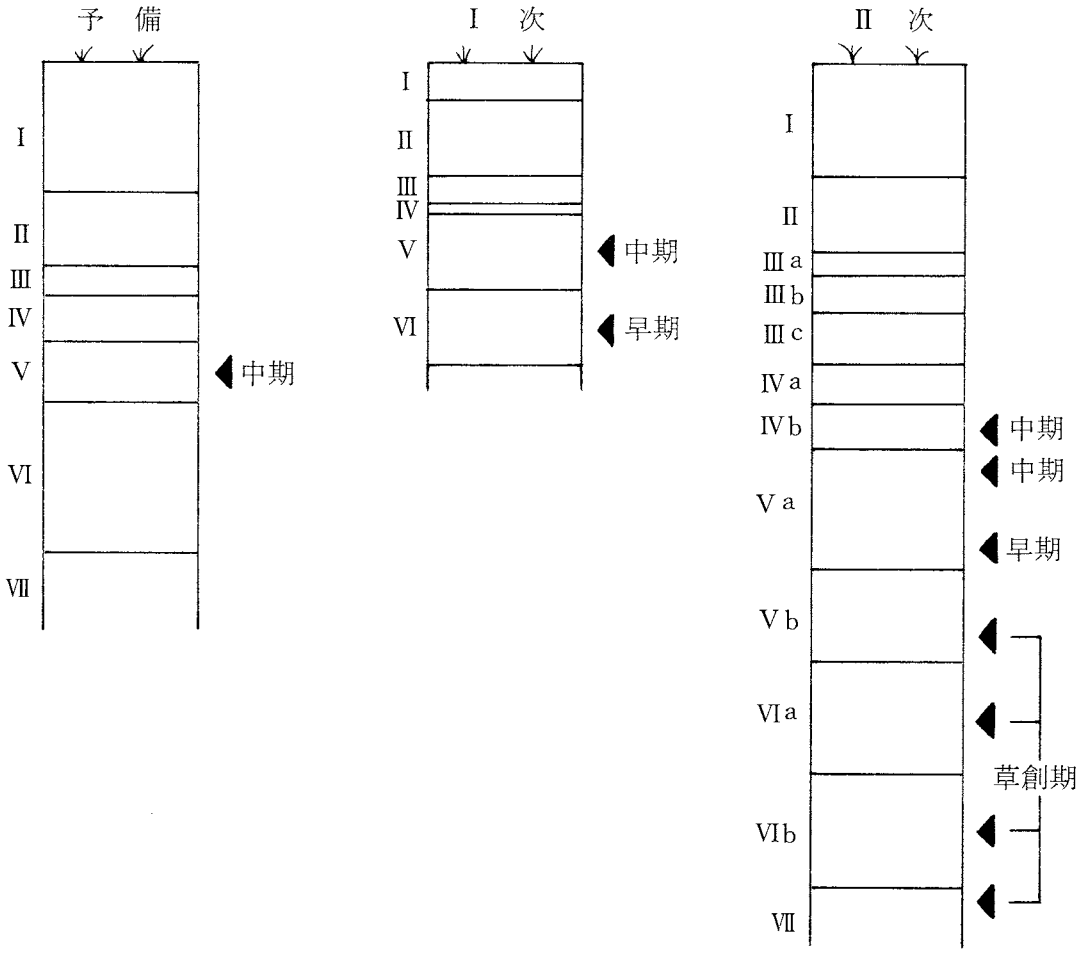
第Vb層　茶褐色土層。ソフトローム漸移層である。赤色スコリアを若干含んでいる。本層の中位および下部には縄文草創期の遺物が見られる。層厚は20～30cmである。

第VIa層　黄茶褐色土層。ソフトローム層である。本層が縄文草創期の遺物包含層となっている。これは、G－2区内とH－1区内のトレンチにおいて顕著であり、確実な層と言える。粘性がありしまっている。層厚は25～30cmである。

第VIb層　暗灰褐色土層。鉄分を含んだ層によって寸断されている（H－1トレンチ）が、本来はVIa層と同一層であろう。色調により分類した。粘性がありしまっている。縄文草創期の遺物包含層である。層厚は25～30cmである。

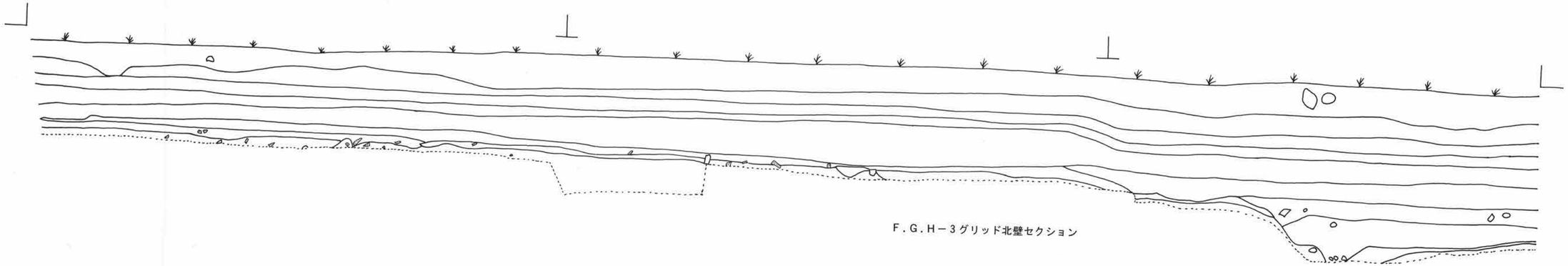
第Ⅶ層　黄褐色土層。硬質のローム層である。本遺跡の地山となっているものである。H－1区内トレンチではこれを25～30cmほど堀り下げたが、湧水がひどく礫層にかかった為観察にとどめた。

以上が本遺跡の基本的な層序である。G－2区内のⅢc層とⅣa層付近から出土した草創期の土器は、おそらく遊離浮上したか、あるいは水田造成時代の天地返しにより混入したものであろう。

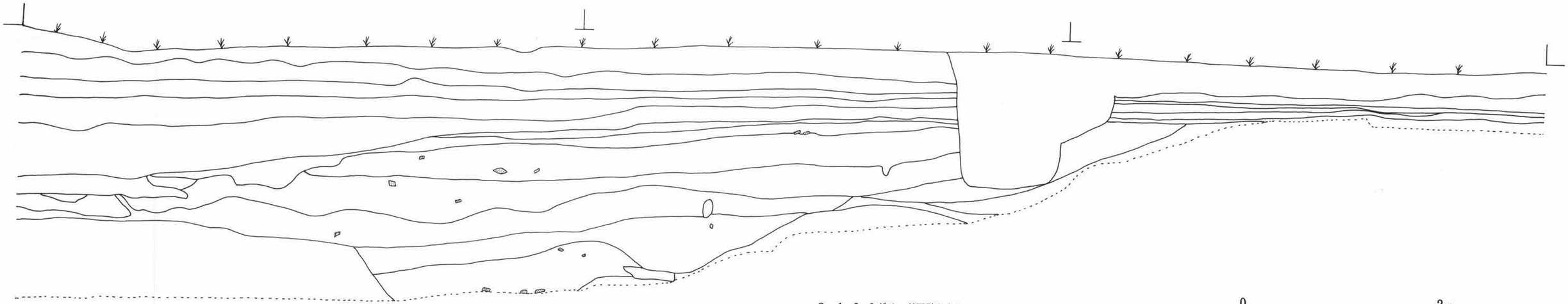


第51図　仲道A遺跡層序模式図

※　予備調査および第Ⅰ次調査においては確認できなかったが、第Ⅱ次調査（とりわけF・G・Hグリッド内のトレンチ）によって、縄文時代中期→早期→草創期の遺物包含層を、それぞれⅣb層→Va層→Ⅵa層→Ⅵb層中に確認する事ができた。特に、第Ⅱ次調査で検出されたⅥa・Ⅵb層は、まぎれもなくソフトローム層である。



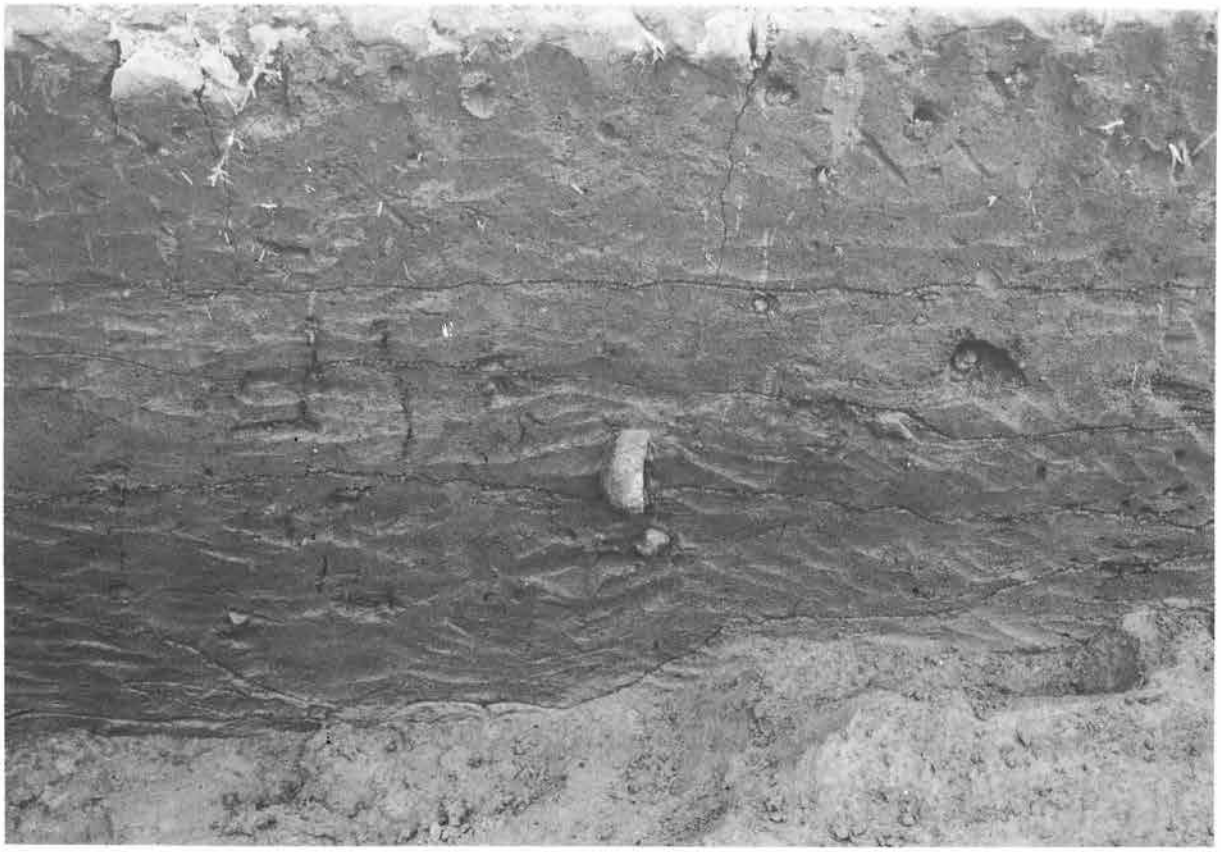
F．G．H－3グリッド北壁セクション



G－1．2．3グリッド西壁セクション

0 2m

第52図　第II次調査 土層断面図



第53図　第Ⅱ次調査　Ｈ－１西壁土層写真

第54図　第Ⅱ次調査 発掘調査風景

2、先土器時代・縄文時代草創期前半の遺物

本遺跡の遺物中、先土器時代および縄文時代草創期前半に属すると思われる石器が8点確認されている。このうち、第55図・図版52にある1～4のナイフ形石器と5の彫器については、残念ながら出土層位は不明である。また、8の有舌尖頭器は表採品であるが、いずれも該期の所産である事はまちがいないであろう。6は、G－3グリッド内トレンチで検出、7はD－3グリッドから検出されているが、層位を確認するまでには至っていない。図示しなかったものの中にも該期の石器が見られるが、やはり層位的な把握が出来なかった為省いた。

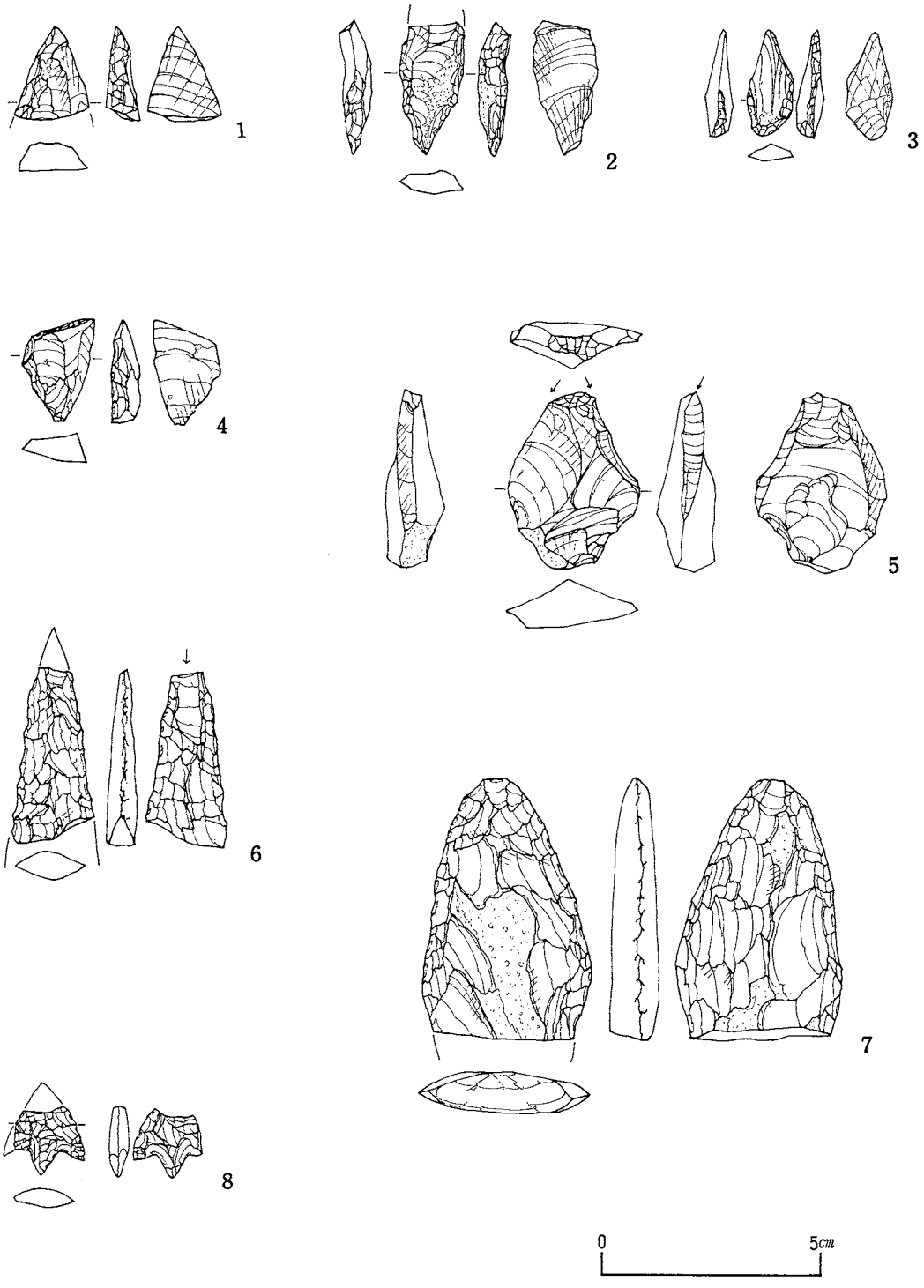
ナイフ形石器（第55図・図版52） 4点が出土している。いずれも黒曜石を使用している。1は厚い縦長剝片を素材としている。右側縁に剝離面側から刃潰しを加えている。下半部を欠損している。2もやはり縦長の剝片を使用している。左側縁と右側縁下部に剝離面側から刃潰しを加えている。素材の打点は既に取り除かれ、先端部を欠損している。3は横長の剝片を素材としている。左全側縁と右側縁下部に剝離面側から刃潰しを加えている。なお、刃部は素材の右下端に設定され、打点は既に取り除かれている。4は厚い縦長の剝片を使用している。左全側縁に剝離面側から刃潰しを加えている。刃部は素材の下端に設定され、打点は既に取り除かれている。刃部には細かな剝離が認められる。

彫　器（第55図・図版52） 1点出土している。黒曜石を使用している。縦長の厚い剝片を素材としており、先端に剝離面側から6回の細かな剝離を加え打面を設定している。この打面に対して先端に左・右からそれぞれ1回の打撃を加え、両側に2条の樋状剝離を施し彫器の刃部を作り出している。この両側の剝離は下端部にまで及んでいる。なお、剝離面側には打瘤が残存し、左側縁の下端には原石面が残る。

石　槍（第55図・図版52） 2点出土している。いずれも使用石材は安山岩。1は両側縁が平行に延びる形態をとり、両面に並列した剝離が見られる。中央部・下半部とも欠損し、先端には上方から剝離が両面に入る。有舌尖頭器の可能性がある。2は木葉形を呈すると思われるが下半部を欠損する。最大幅が下半部に存在し左右が非対称形になる。剝離は両面に及び、両面共一部原石面を残す。

有舌尖頭器（第55図・図版52）使用石材は頁岩。極めて小形で先端部及び返しの一部が欠損している。

上記のうち石槍及び有舌尖頭器は草創期に属すると思われるが、本遺跡から出土した草創期の石器組成に含まれるか否かは判然としない。押圧・回転縄文系土器群に石槍・有舌尖頭器が伴出した例は少く、今後の資料増加を待って再度検討したい。



第55図　第II次調査 出土石器実測図（1）

3、縄文時代の遺構と遺物

a、遺　構

今回の発掘調査では、調査区の西側半分に遺構の大部分が集中して検出された。しかし、それら遺構の保存状態は決して良好とはいえなかった。すなわち、調査区はかって台地を数段に削平してつくった水田であったといわれ、広範囲にわたり包含層が削られてしまったようである。また、昭和11年に社宅を建てる際にも一部において攪乱を受けている。そのため、竪穴住居跡についても往時の床面、壁高の全容を明確にする事はできなかった。

縄文時代の遺構としては、円形竪穴住居跡7基、土坑6基が検出されている。又、焼土と多数の柱穴状ピットが広範囲にわたって検出されたが、プランを確認するまでには至らなかった。

イ、住居跡

第1号住居跡（第57図・図版35～38・41）

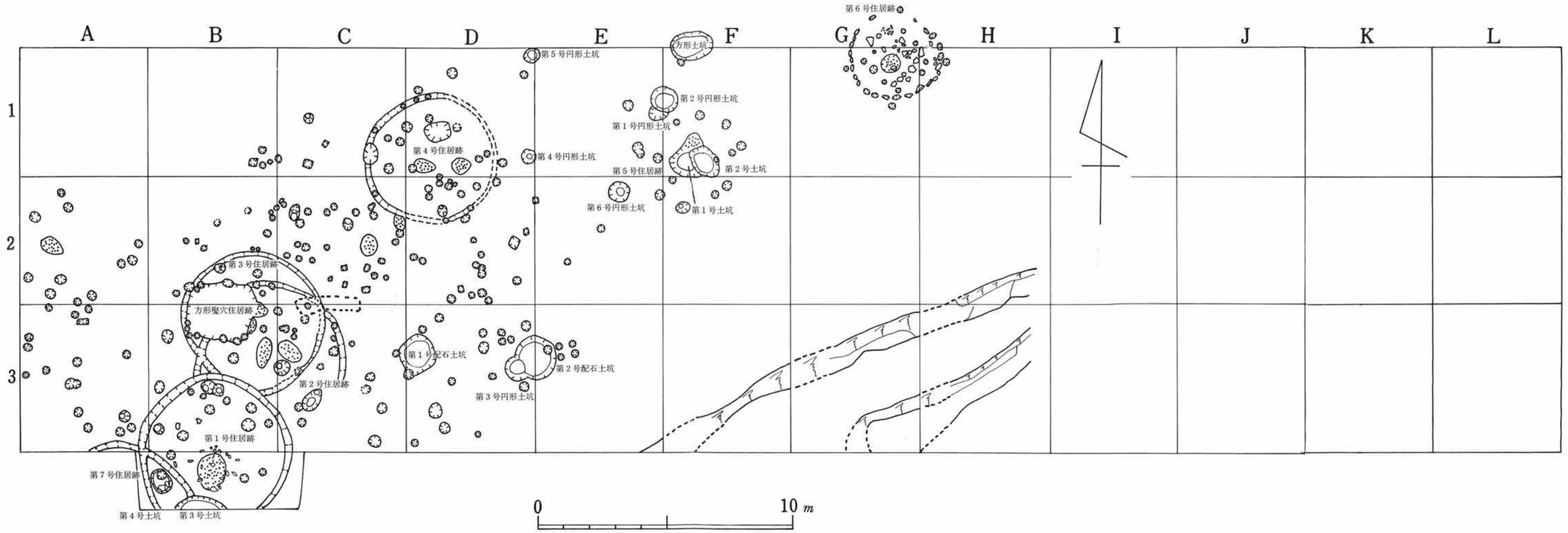
調査区の南西部、　B—3グリッド 内で検出された住居跡である。東西の径5.8m前後のほぼ円形プランを呈するものと思われるが、南側半分は調査区外であり不明である。床面と壁の間には幅20～35cm、深さ6～15cmの周溝がめぐっている。壁は確認面より最も高い所で28cmを測る。柱穴は14本検出されたが、南側プランが不明であるためこれがすべてではない。柱穴の径は18～47cm、深さは28～50cmであった。床面は全体によく踏み固められている。住居跡の中央よりやや南側に160×110cmの楕円形を呈する大型の炉跡が確認されている。炉跡内には、長時間にわたって熱を受けたと思われる赤くしまった焼土が約50cm堆積しており、大小の礫が混在していた。さらに加曽利E3式ないしE4式期の土器片が出土している。なお、本住居跡の北側床面で周溝に接して、口径29cm、器高およそ30cmの底部を欠いた埋甕が発見された。

この土器は、口縁部より胴部にかけて全器面を隆起帯による逆U字文で区画し、内に2つの渦巻文が描出されている。また、地文として1～6cmの浅い条線が全面に施文される。曾利IV式土器と思われる。しかし、この埋甕としての性格、用途等については遺物の伴出もなく不明である。その他、本住居跡の覆土およびその周辺からは加曽利E2式～E4式土器、曾利II式～V式土器など多量の土器が出土しているが、主体となるものは埋甕からも窺えるように縄文中期後葉と思われる。

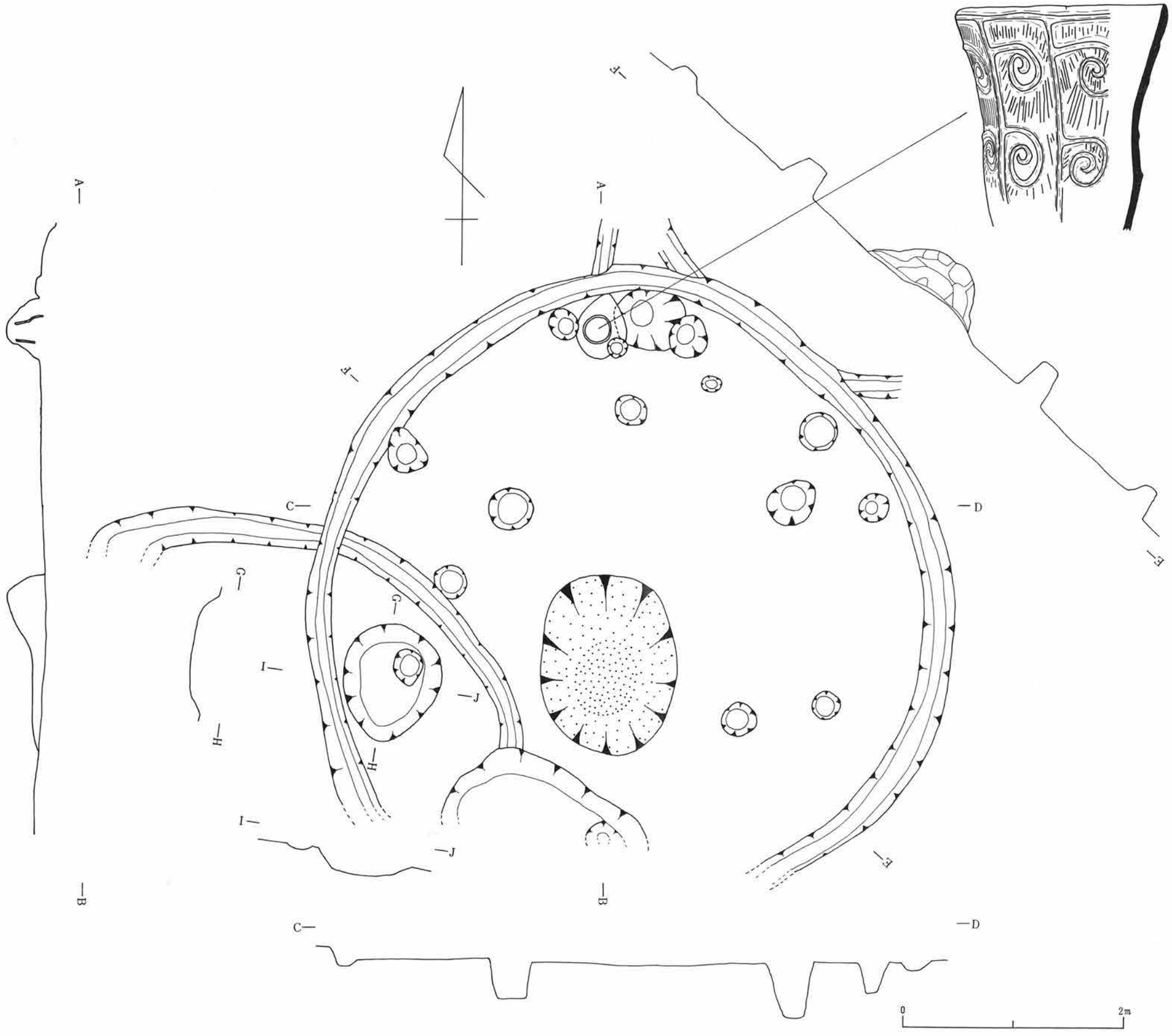
石器は、打製石斧1点、磨製石斧2点、石鏃2点、スクレーパー1点、磨石1点がそれぞれ床面より出土した他、拡張の際覆土中より打製石斧6点、凹石1点、石鏃1点が出土した。

第2号住居跡・第3号住居跡（第58図・図版39～41）

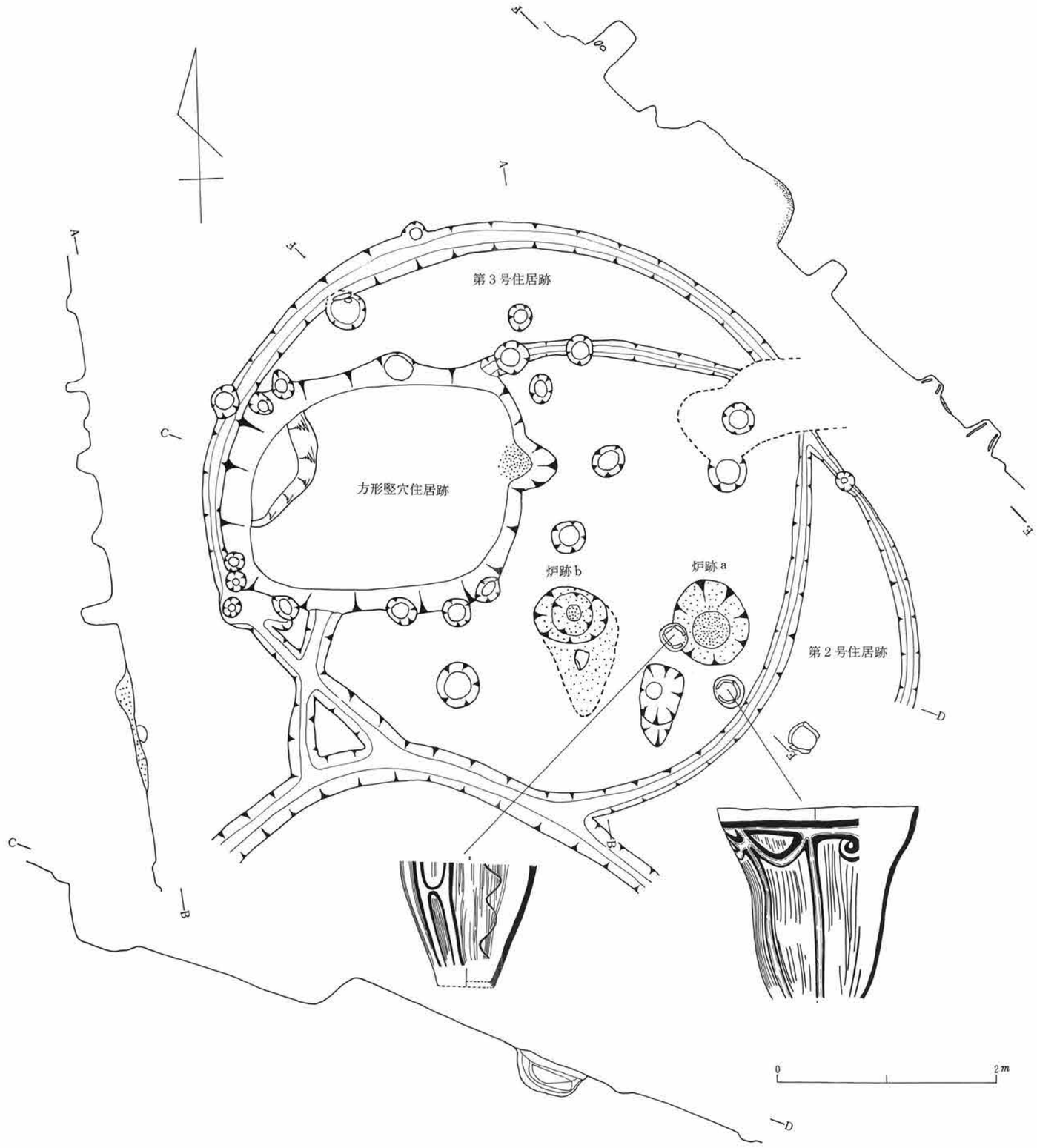
第1号住居跡の北側に径5～6m前後の円形プランを呈すると思われる2基の重複した住居跡が検出されたが、南側を第1号住居跡によって切られており、また第3号住居跡内には中世初頭と思われる竪穴住居跡が掘り込まれている。第2号・第3号とも幅12～35cm、深さ3～6cmの周溝を持っている。柱穴は合計12本検出され、径20～40cm、深さ20～50cm前後である。炉跡は2ケ所確認され、焼土が検出された。焼土の状況から推して、住居跡の床面はすでにかなり削られている事が分かった。第2号住居跡のものと思われる炉跡aは、住居跡の中央からやや



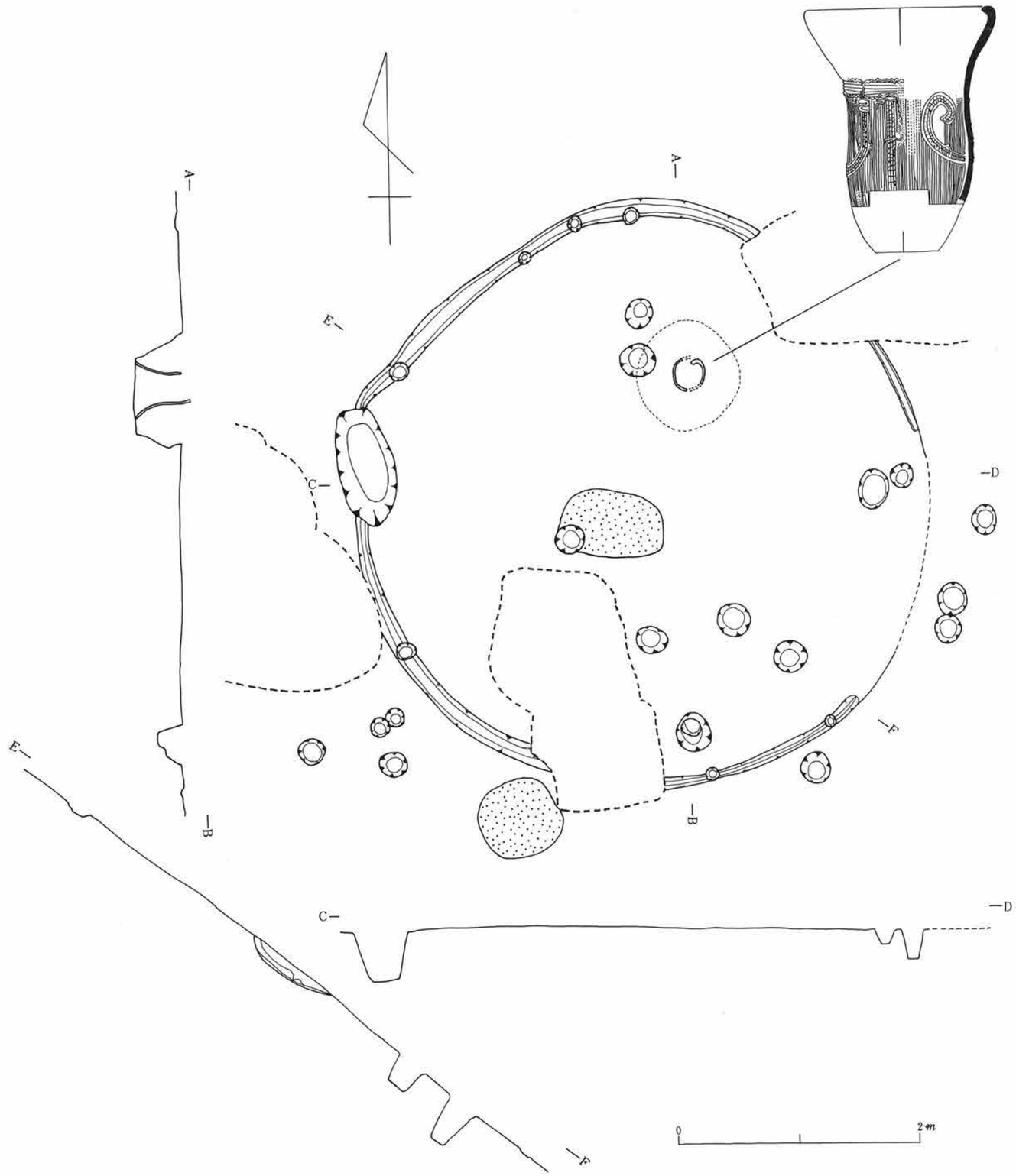
第56図　第Ⅱ次調査 遺構関連実測図



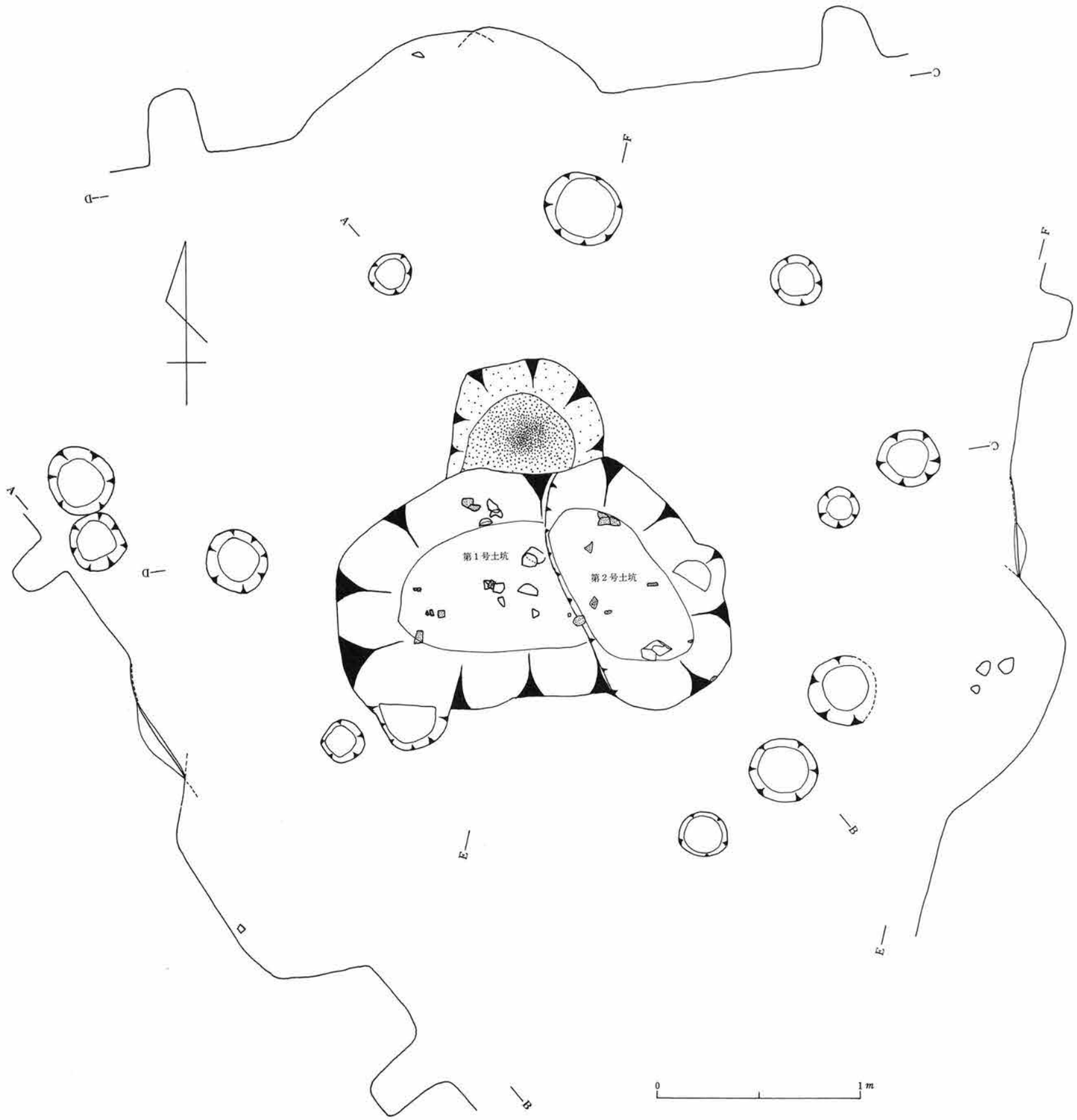
第57図　第Ⅱ次調査 第１号，第７号住居跡，第４号土坑実測図



第58図　第II次調査 第2号住居跡，第3号住居跡実測図



第59図　第Ⅱ次調査 第4号住居跡実測図



第60図　第Ⅱ次調査 第5号住居跡，第1号，第2号土坑実測図

東寄りの、つまり第3号住居跡の壁際に位置している。炉内には、中央部で34cmに達する焼土が堆積していた。また、第3号住居跡に伴うものと思われる炉跡bは住居跡の中央より南側に存在し、西洋梨形のプランを呈する。焼土の堆積は中央部で24cm前後である。

さらに、本住居跡のものと思われる埋甕が南東側の周溝際と炉跡b東側に埋設されていた。前者は、口縁部に隆線による円弧文と渦巻文を交互に施し、胴部にもやはり隆線による懸垂文が施文されている。また、それら隆線による各文様帯の両側を凹線でなぞる事によって浮き彫りの効果を表現している。地文としては、細い沈線による粗雑な条線を施してある。器形は深鉢形で口径27cm前後、器高は底部を欠いているがおよそ26cmと推定されるもので曾利IV式土器と思われる。後者は、やはり粗雑な条線を地文とし、その上に隆線によるH状懸垂文が施されている。また、その隆線の両側を凹線でなぞる手法は前者と同様であり、曾利IV式期のものと思われる。器形は口縁部を欠損しているが比較的小型の深鉢である。これら2つの埋甕を結んだ線上の、第3号住居跡北側周溝際に径35cm、深さ50cmほどの円形ピットが検出され、中に磨製石斧1点と磨石1点が納められていた。なお、第2号住居跡に伴うものと考えられる土器片が住居跡東側で検出されたが、保存状態が悪く型式・器形等を知る事は出来なかった。

第4号住居跡（第59図・図版42・43）

C—1・2、D—1・2グリッド内で検出された。調査区中央よりやや北西側に位置している。保存状態が悪く、床面がかなり削られているためプランの確認が東側においては困難を極めた。しかし規模としては、径がおよそ5m前後の円形を呈するものであろうと推定された。なお、わずかに幅10～18cmの周溝が確認され、また周溝内には径10～15cm、深さ3～7cmの柱穴と思われる小ピットが7つ、住居跡内に径20～30cm、深さ40～130cmの柱穴が8本検出された。さらに、西側周溝際に短径46cm、深さ42cmのピットが存在するが、本住居跡に伴うものかどうかは明らかでない。

炉跡は、住居跡のほぼ中央付近で確認され、85×55cmの楕円形のプランを呈し、焼土は16cmほど残存していた。なお、炉跡の中心より北へおよそ1mの所に伏甕が埋設されていた。この土器は、キャリパー状の無文口縁が直に立ち上がり、くびれのない頸部には数条の隆線による横帯文と波状文が施されている。胴部には篦あるいは竹管状工具によると見られる縦位の力強い平行沈線が地文として施され、その上を数条の隆線による渦巻文・懸垂文、粘土紐による波状文が施されている。また、その隆線上には刻み目がつけられている。大型で胴部に張りのない深鉢形を呈する。以上のような特徴から、この土器は曾利II式に比定されるものであり、本住居跡は該期の所産であろうと思われる。石器等は検出されなかった。

第5号住居跡（第60図・図版43）

調査区のほぼ中央北側、F—1、G—1グリッド内において検出された。焼土がおよそ13cm程残存している炉跡を中心に13本の柱穴と思われるピットが検出された。プランは本住居跡の構築面と思われる第V層はすでに削られていたため、確認する事が出来なかった。柱穴の径20～37cm、深さ17～36cmであった。炉跡は、本住居跡とは構築時期の異なる2基の土坑によって南側

半分を切断されていた。出土遺物は、構築時期を決定出来るものはなく、炉跡内より混入と見られる草創期の土器片10点が検出されたにすぎない。

第6号住居跡（第61図・図版44～46）

今回の調査で検出された住居跡の中では唯一の敷石住居跡である。調査区の北東側G－1グリッドにおいて第IV層を削土していると、敷石と思われる板状の石が出現した。そこで、板石の追及と周辺の精査を行った。その結果、住居跡の壁際と見られる所に数個の縁石およびそれらが抜かれたと思われる痕跡が次々に検出された。

規模は、長径3.5m、短径3.3mの円形プランを呈する。柱穴は、屋内に10本、縁石外の東西南北にそれぞれ1本づつ計4本が検出されている。柱穴の径は14～28cm、深さは8～16cmであった。住居跡の中央よりやや南側に110×80cmの楕円形のプランを持つ炉跡が認められ、炉内には28cmほど焼土が堆積していた。また、この炉跡を囲むように厚さ4cm前後の板石が敷かれていた。さらに、住居跡中央より北西側に埋甕が埋設されていた。器形は、深鉢形を呈しており完形品である。口径25.5cm、高さ27cm、底部の径9cmを測る。

文様は、器面全体に波状および逆U字の細い沈線が描出され、これによって区画された中に粗い縄文が施されている。加曽利E4式土器に比定されるものであろう。また、本住居跡の覆土や炉の内外から検出された土器片(第159図・第160図)もやはり、加曽利E4式ないし曾利V式期のものであると思われ、本住居跡が中期末葉に構築されたものである事が推定される。他は磨石2点、石鏃2点のみであった。

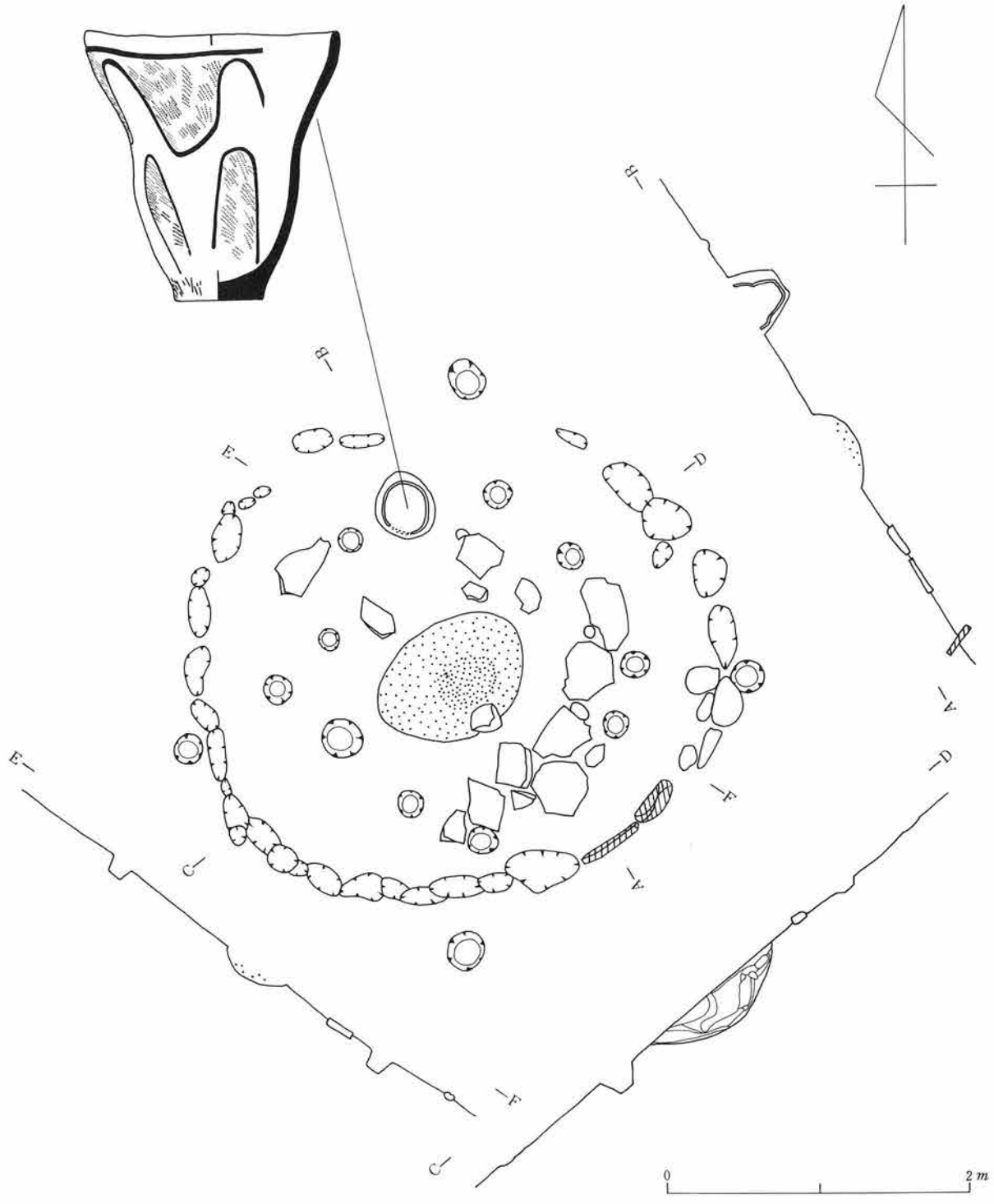
第7号住居跡（第57図・図版47）

調査終了間際、第1号住居跡の南西側床面下に、新たに住居跡の周溝が半円状にひろがっているのが確認された。柱穴・炉跡は検出されなかった。また、本住居跡と第1号住居跡の周溝の間に110×90×20cmのピットが認められた。（第4号土坑）出土遺物は、覆土中より中期と思われる土器片数点が検出されただけである。

※第6号住居跡（敷石住居跡）について

敷石住居跡がはっきりと確認されたのは、当町ではこれが初めてである。小型住居であるが極めて整った偏円形を呈する。壁際に30cm前後の扁平な河原石を連続して立てて埋め込んであり、(現存4個)これを縁石としている。それらは僅かに外側に傾斜して立っていた。他の縁石は、水田を作る際に引き抜かれたものと思われる。縁石と縁石の間には小石が詰められていた。北壁付近では約1.1mほど縁石がとぎれており、おそらく出入口と思われる。炉跡と柱穴の間には10枚のヘギ石が敷かれている。とりわけ、東南側にはこれが並んで敷かれ「団欒の場所」を想像する事ができよう。炉跡は、若干の小礫を伴う地床炉である。南側の炉縁が焚き口であろう。北側の柱と柱の間(出入口に近い床面下)には加曽利E4式比定の深鉢形土器が埋設されていた。

当地方では、敷石住居跡の顕著なものとして、修善寺町の大塚遺跡が挙げられる。本住居跡は大塚における4号住居跡(柄鏡形)とはその形態を異にするが、床面にヘギ石を敷詰めて壁際に縁石を設けるなど、中期終末の敷石住居跡の様相をよく示している。また、敷石の配置に見られる規則性には共通したものが感じられる。



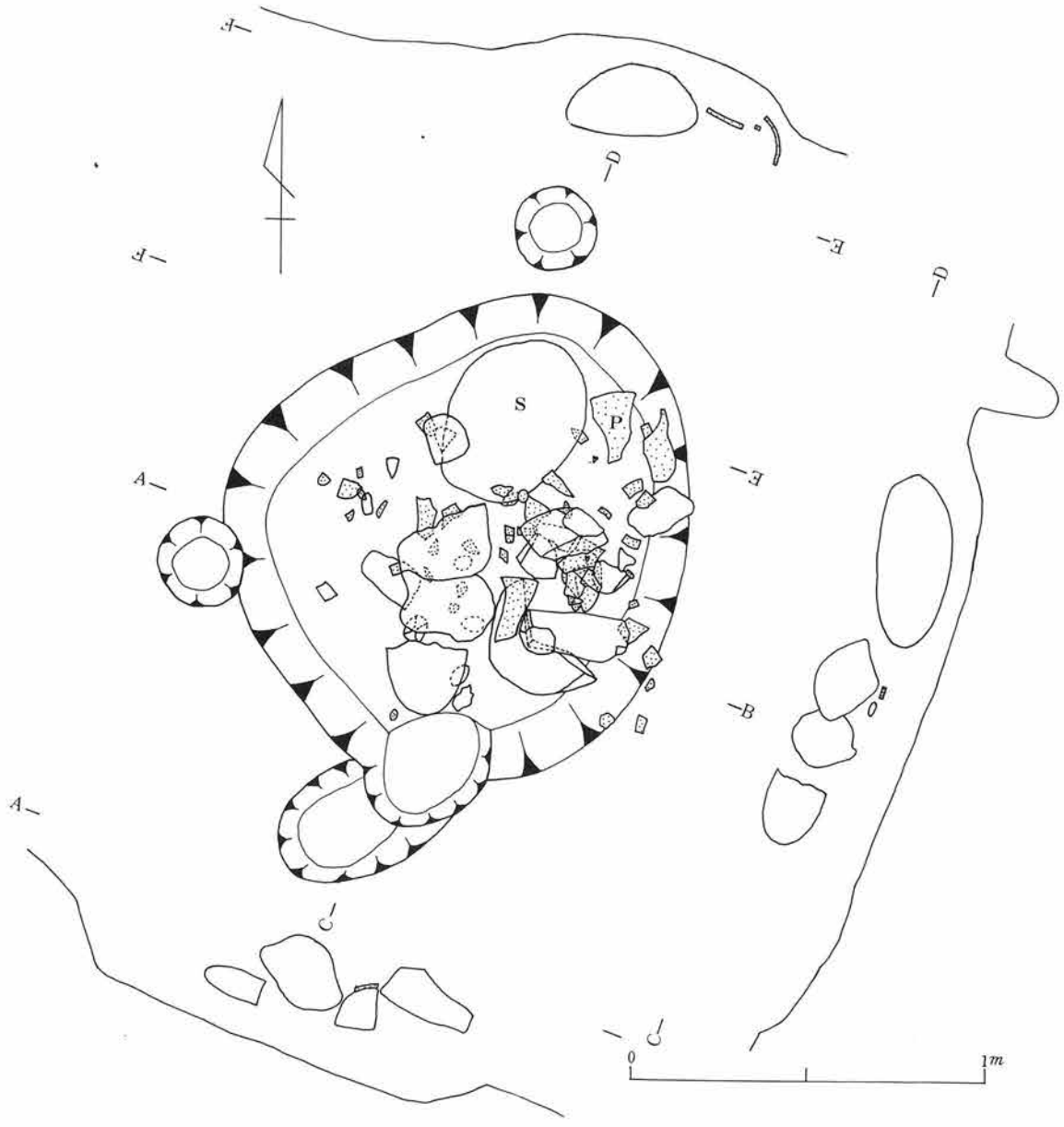
第61図　第II次調査 第6号住居跡実測図

ロ、土　坑

第１号配石土坑（第62図・図版48・49）

調査区の中央南側D―３グリッド内で検出された土坑。南側の壁が２個の柱穴状ピットによって切られている。長径はおよそ1.5m、短径1.3mの不整楕円形を呈し、最深部での深さは約30cmである。主軸の方向はほぼ北東を示し底面は平坦である。

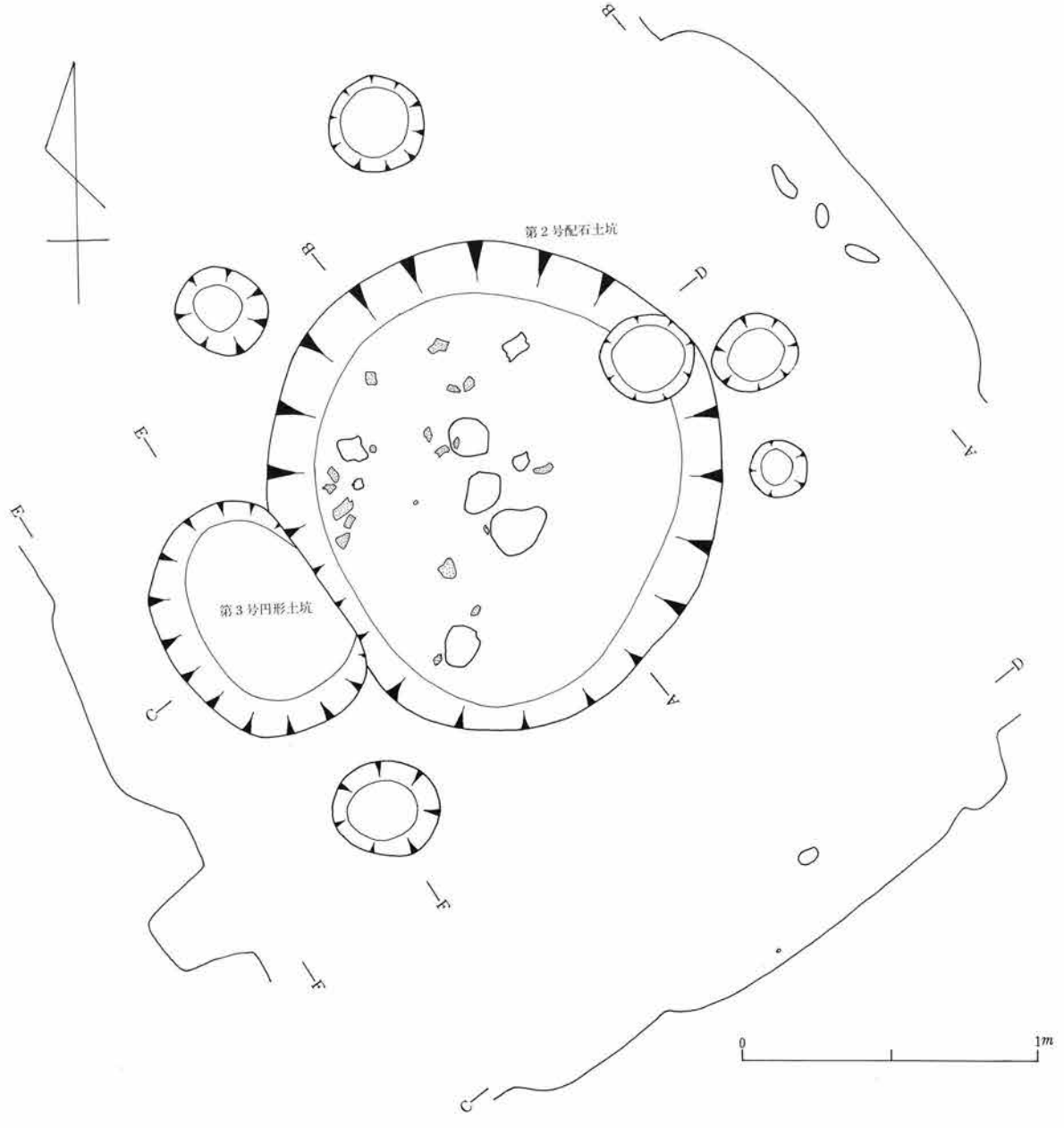
土坑内には石皿２個を含む大きな石７個と小礫多数、土器片を伴っており、配石土坑である。とりわけ、50×37×21cmもある大石はいわゆる枕石とも考えられるもので、主軸方向へ平行に配している。出土遺物は、石鏃３点のほか、加曽利E３式・曾利IV式を主体とする土器片が得られた。（第161・162図参照）



第62図　第II次調査 第１号配石土坑実測図

第２号配石土坑・第３号円形土坑（第63図、図版50）

第１号配石土坑の東側D･E－３グリッド内において検出されたものである。長径1.6m、短径1.5mでほぼ円形を呈する。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がり、最深部での深さは21cmである。土坑内にはやや大きめの石４個と小礫が存在する。出土遺物は、曾利Ⅳ式～Ⅴ式土器および加曽利Ｅ４式土器が出土した。また、木の実の炭化物１個が検出されている。



第63図　第Ⅱ次調査 第２号配石土坑、第３号円形土坑実測図

第１号土坑（第60図・図版51）

F－１グリッド内で検出された土坑。第５号住居跡の炉跡を切っており、また、第２号土坑によって東側半分を切られている。従って、プランの全容は把握出来なかったが、規模はおよそ長径1.8m、短径1.1mの東西に長い楕円形を呈するものと推定される。底面はほぼ平坦であり、立ち上がりはゆるやかである。最深部での深さは35cmである。出土遺物は、草創期および中期の土器が若干出土している。

第２号土坑（第60図・図版51）

第１号土坑の東側で検出された土坑で長径1.3m、短径0.72mの楕円形を呈する。底面は凹凸しており、壁はかなり急に立ち上っている。最深部は42cmと深い。本土坑は第１号土坑を切って構築しており、つまり本土坑のほうが新しいものであろう。出土遺物は、第１号土坑と同様草創期と中期の土器片のみで石器は検出されなかった。

第３号土坑（第57図）

第１号住居跡の南壁側で検出された土坑で、３分の１ほどしか検出出来なかったが、形状はおそらく方形を呈するものと思われる。底面は平坦で、壁の立ち上がりはやや急である。最深部は40cmと深い。土坑内には西側において焼土と炭化物が認められた。出土遺物は、曾利IV式と加曽利E３式土器が主体を占めている。また、本土坑は第１号住居跡の床面直下で検出されたが、構築時期は不明である。

第４号土坑（第57図・図版47）

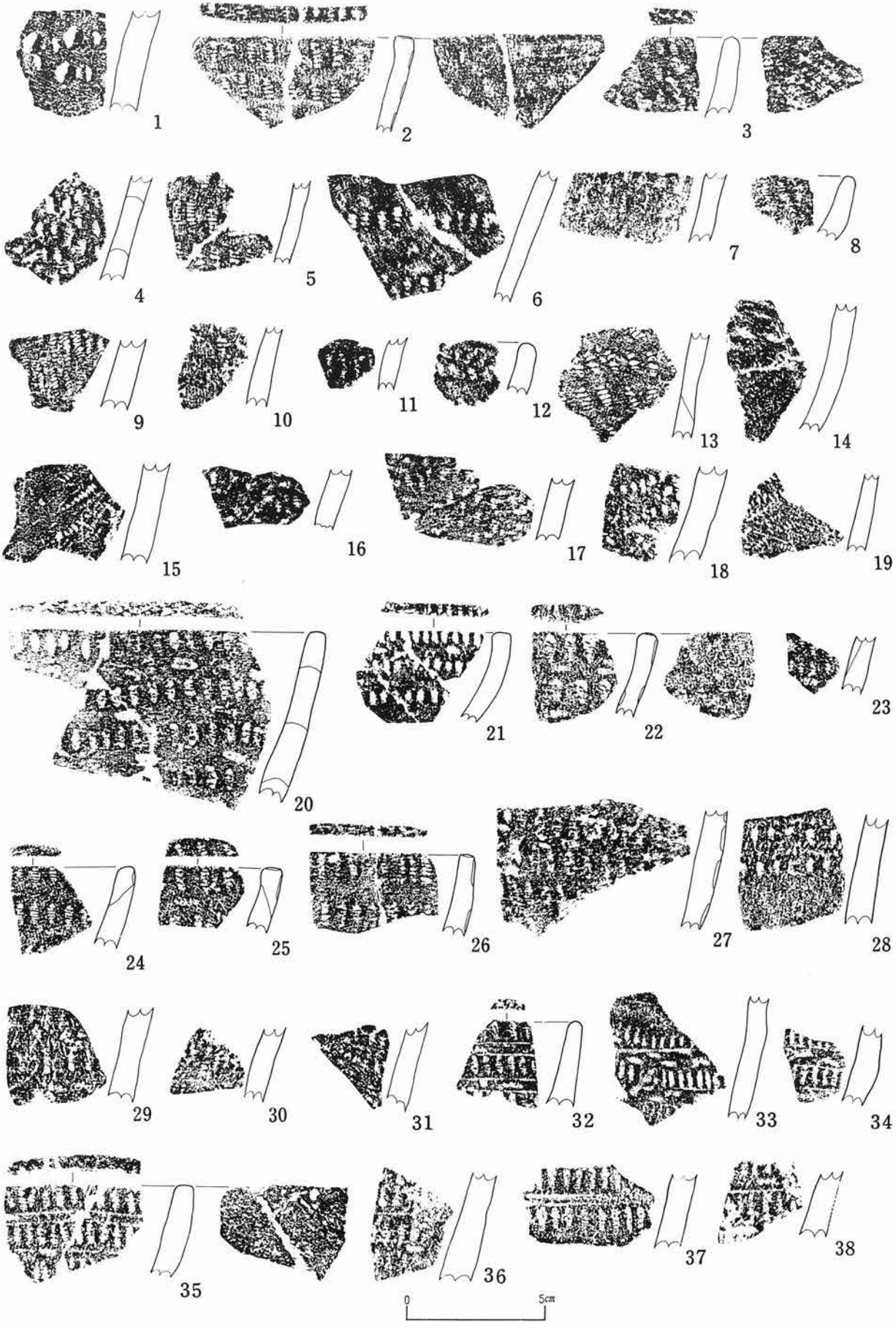
B－３グリッドの拡張部、第１号住居跡と第７号住居跡のプランが交叉した位置で検出されている。長径110cm、短径90cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、壁の立ち上がりはゆるやかである。最深部での深さは20cmである。遺物は、縄文時代中期終末の土器片が出土しているが、本土坑が第１号住居跡、第７号住居跡のいずれに属するかは明確ではない。

ｂ、遺物

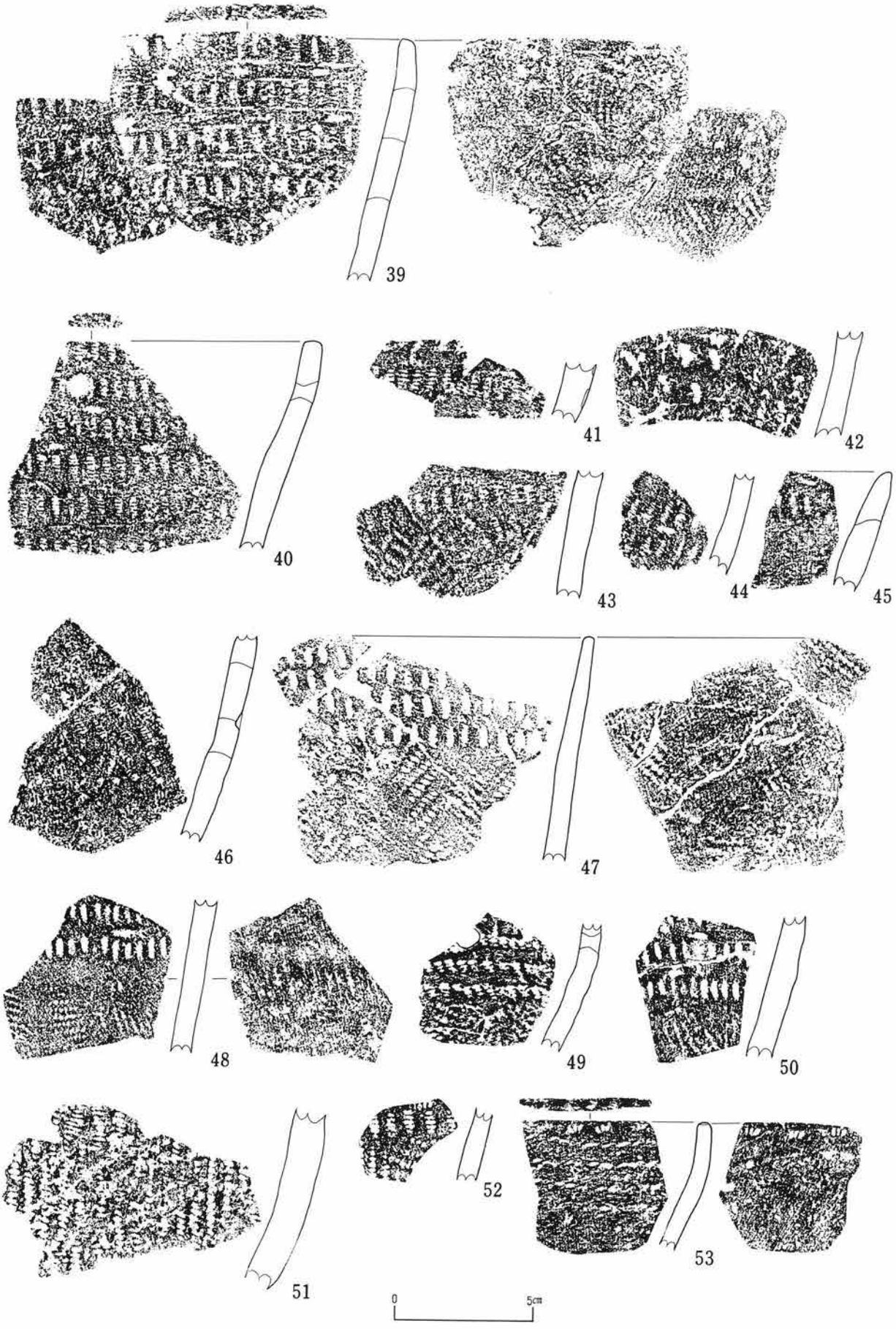
イ、土器

第Ⅰ・Ⅱ群土器（第64図～第145図・図版53～図版89）

第Ⅱ次調査では、縄文時代草創期後半に属すると思われる多縄文系土器が1300点出土した。所謂押圧縄文系土器群と回転縄文系土器群であり、文様原体の施文の組み合わせは実に多種多様である。調査区の全体に見られるが、圧倒的にF・G・Hグリッド内のトレンチからの出土が多い。

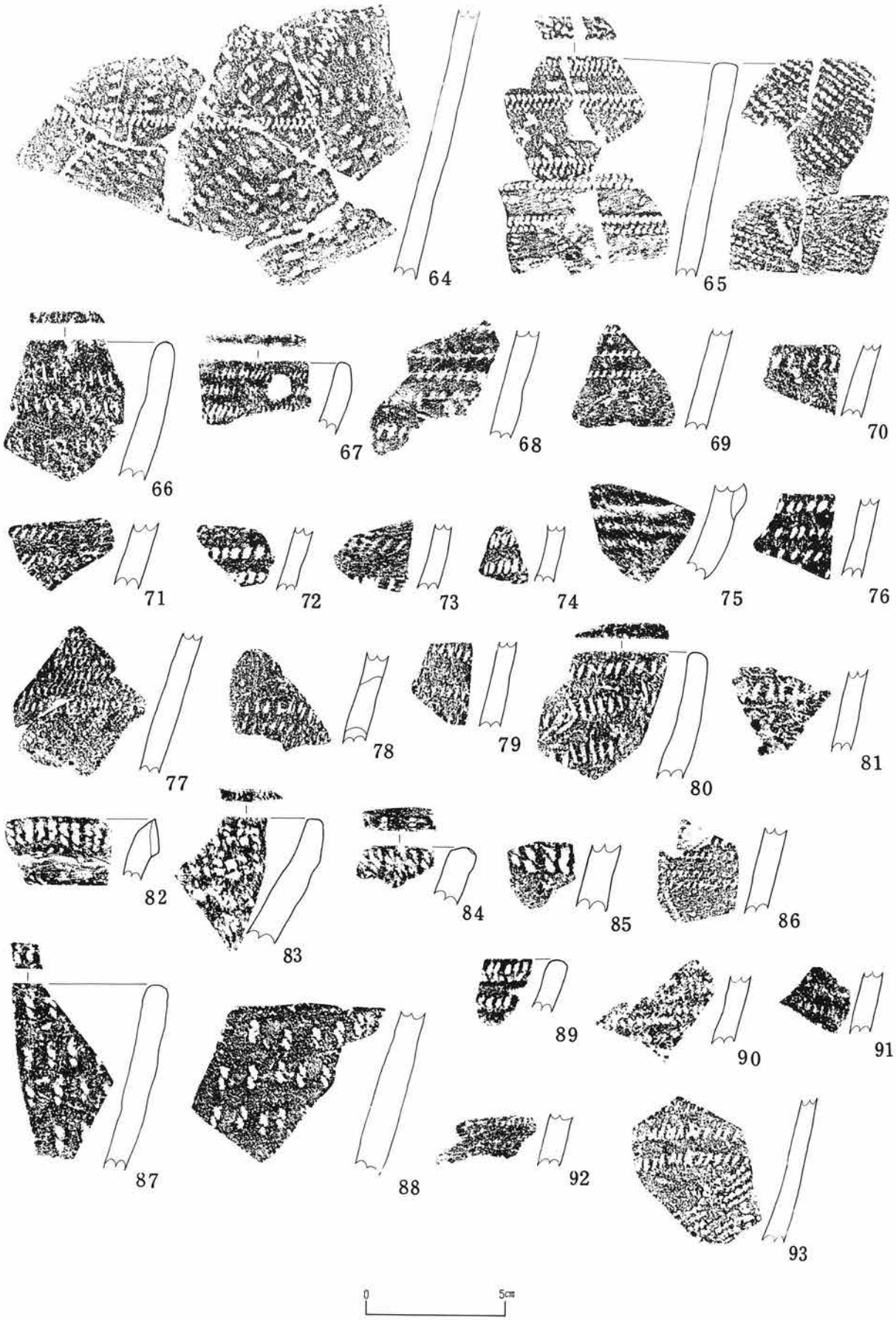


第64図　第II次調査 出土土器拓影（1）



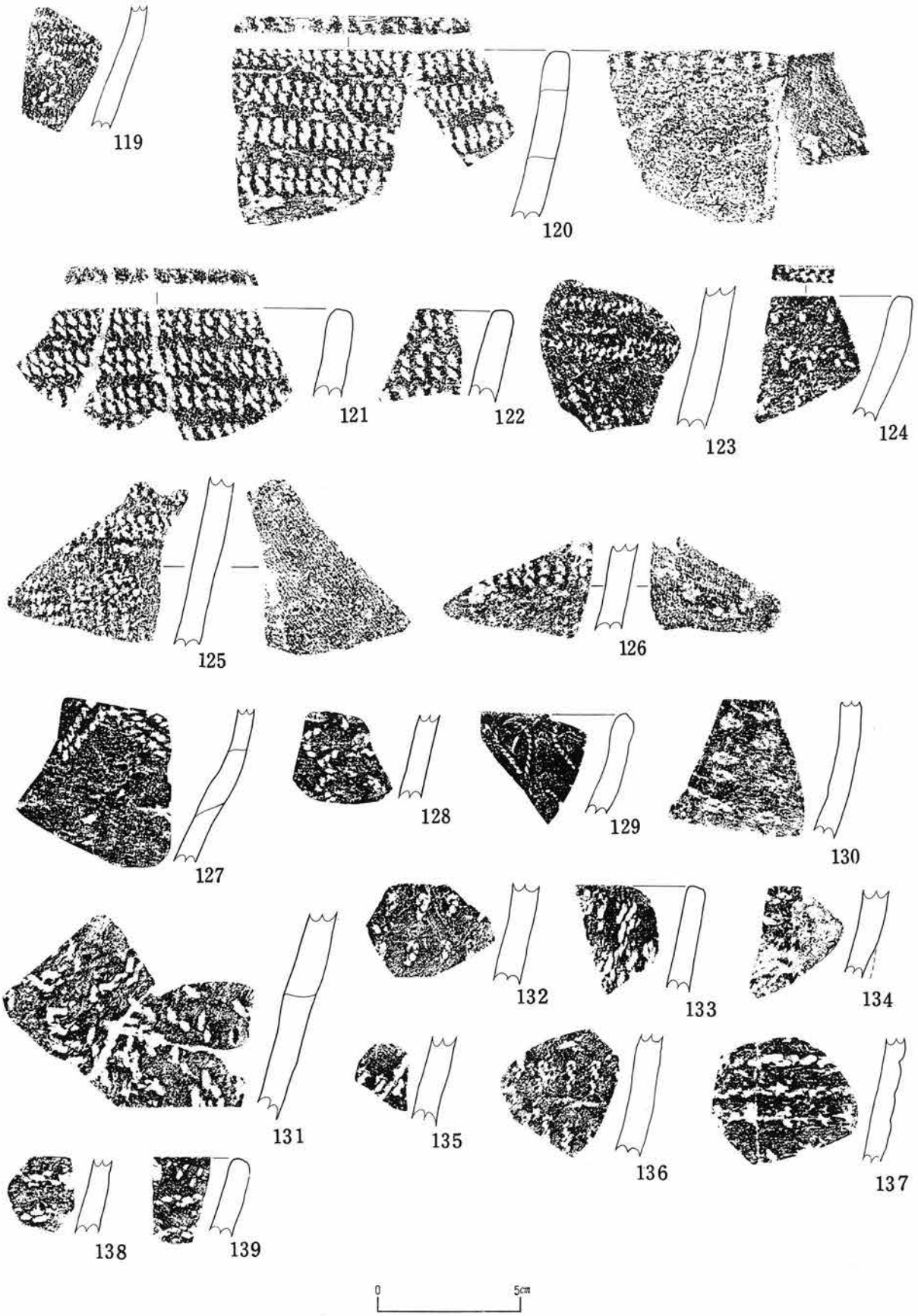
第65図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（２）

第66図　第II次調査 出土土器拓影（3）

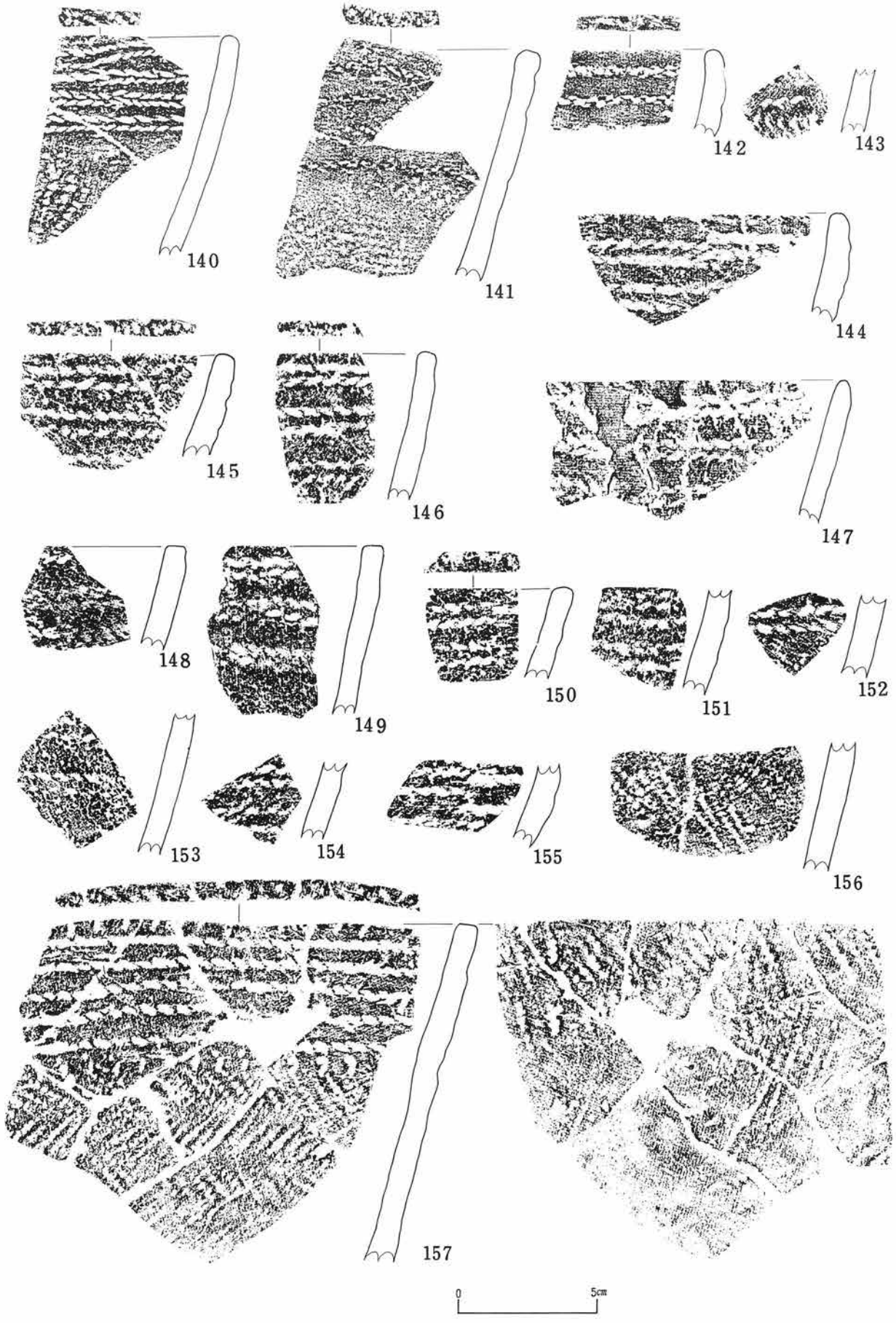


第67図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（４）

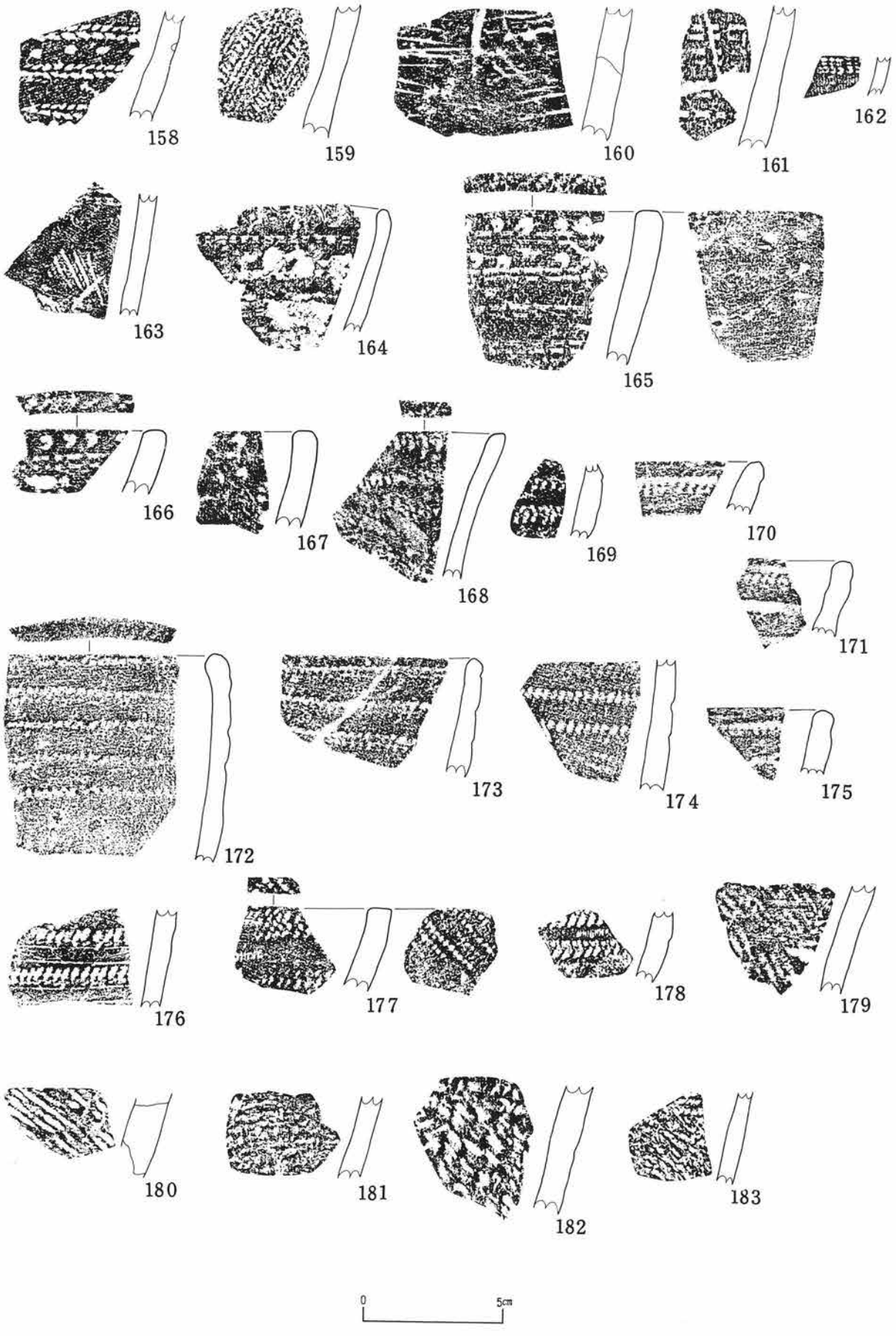
第68図　第II次調査 出土土器拓影（5）



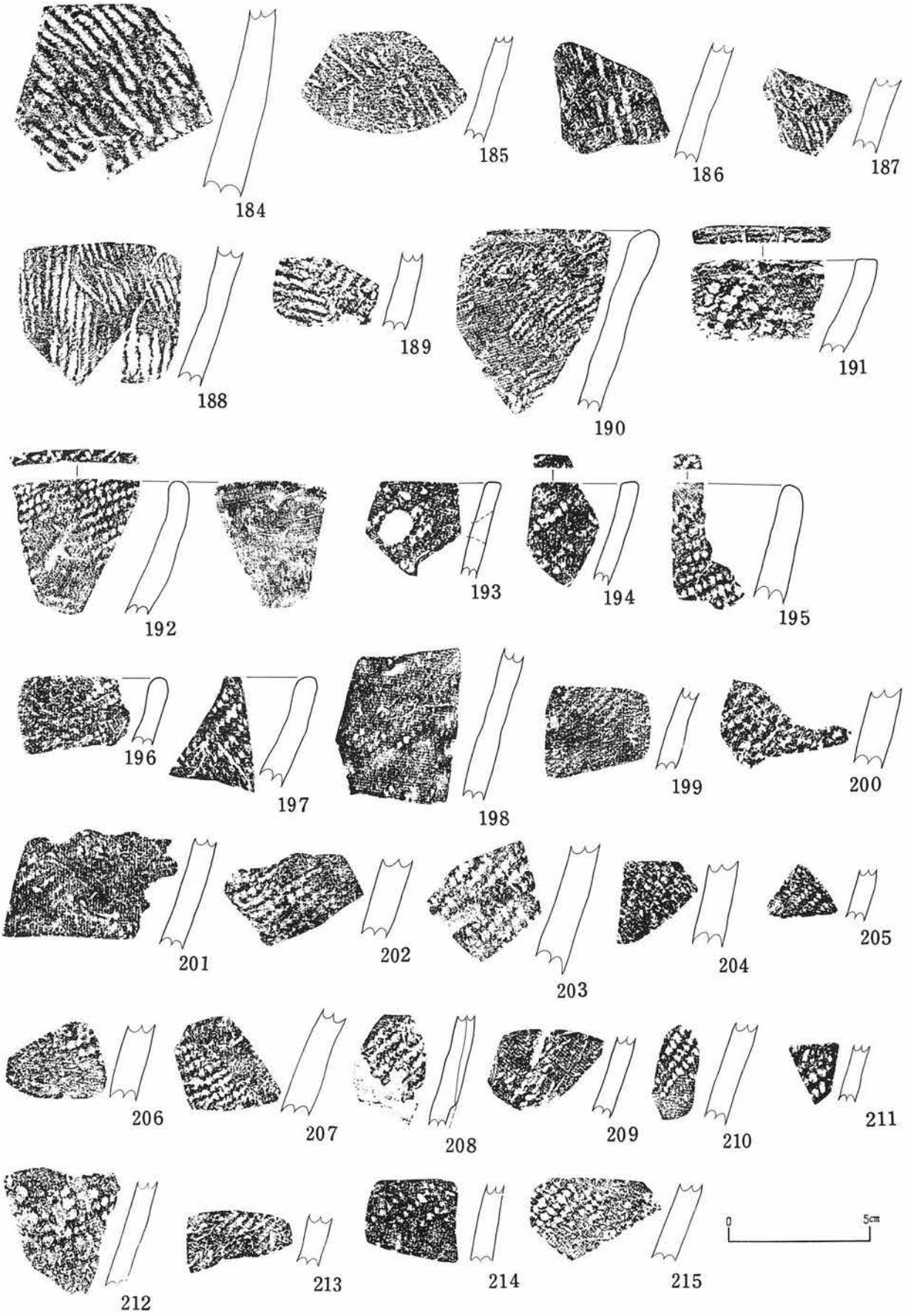
第69図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（６）



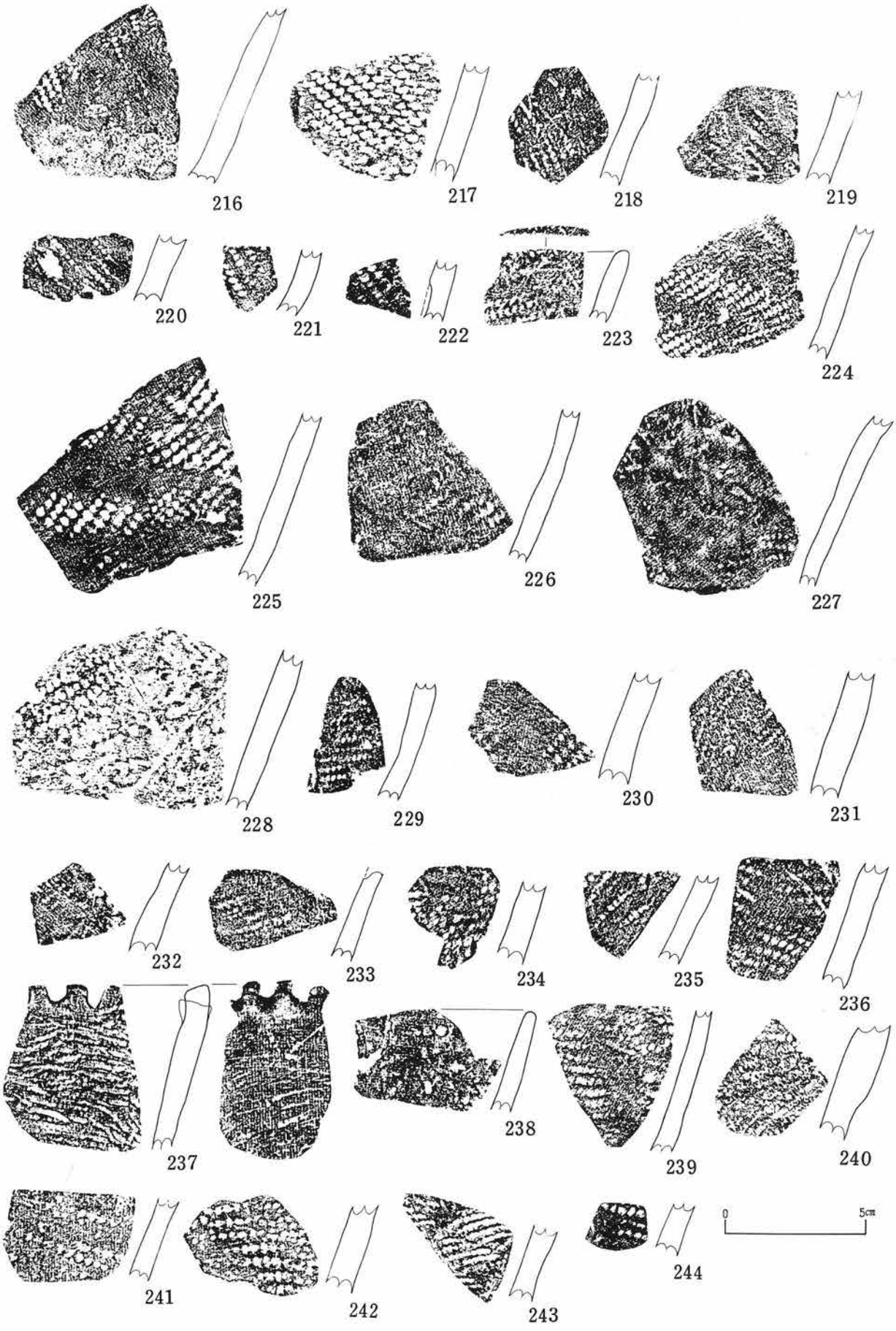
第70図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（７）



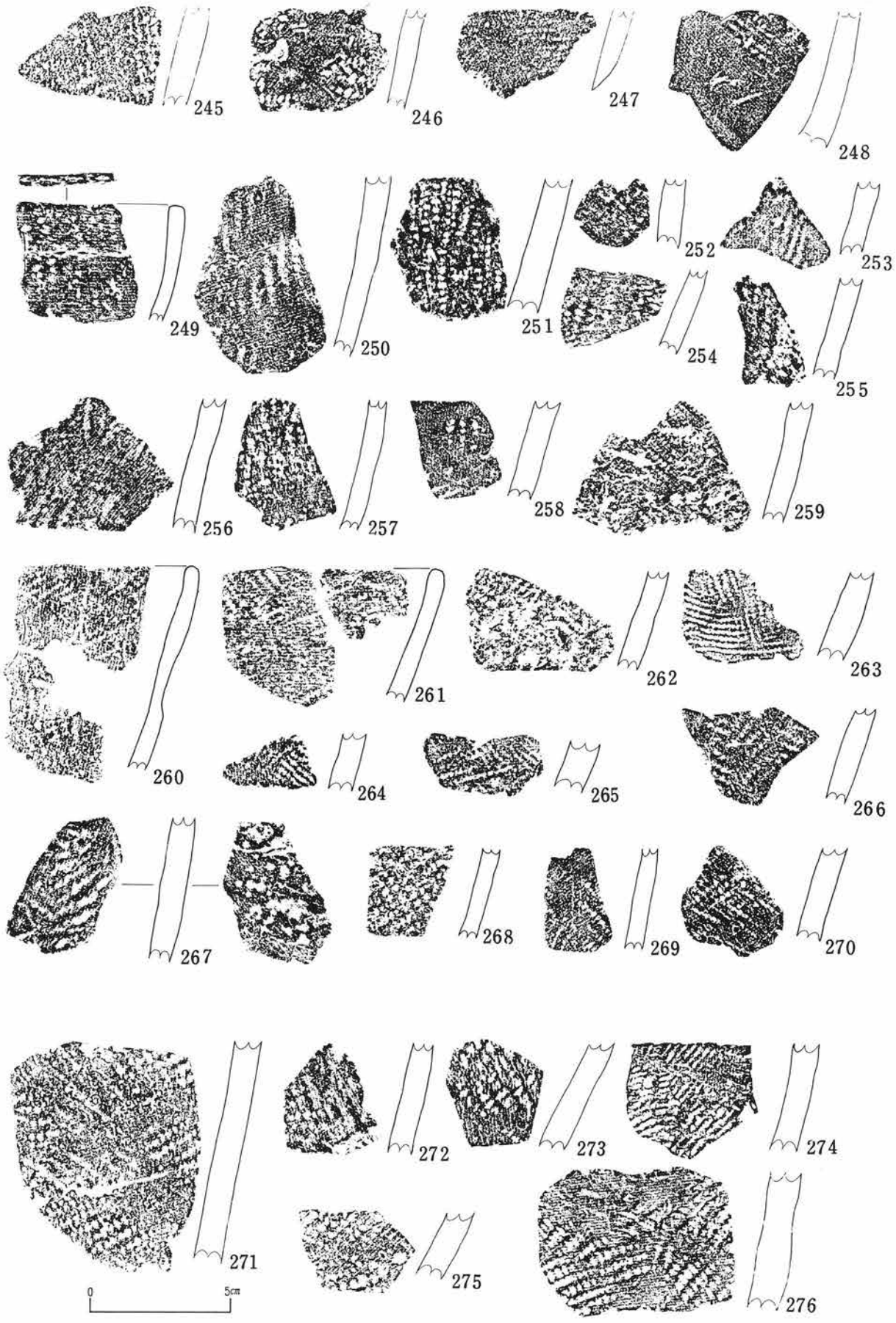
第71図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（８）



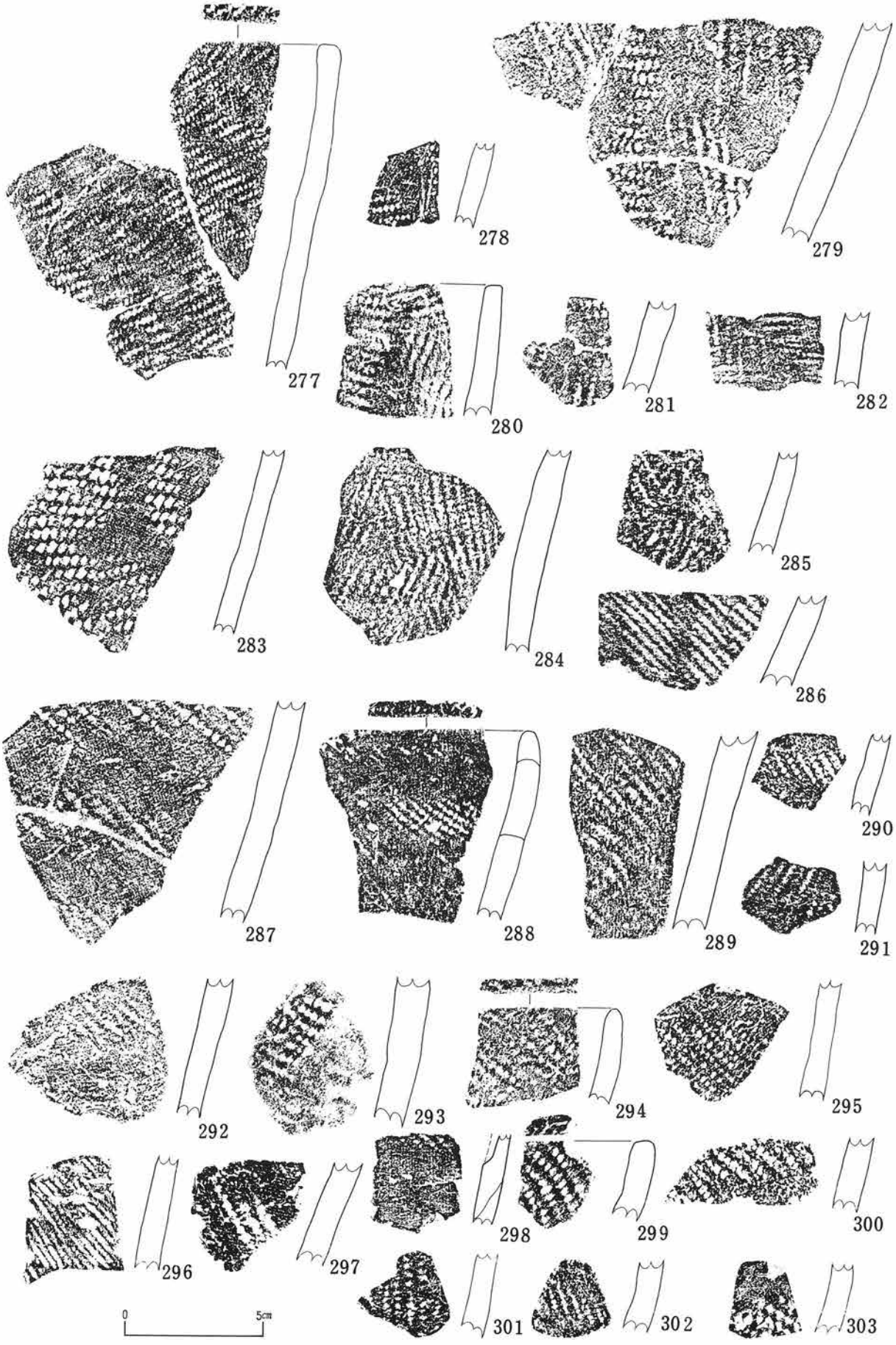
第72図　第II次調査 出土土器拓影（９）



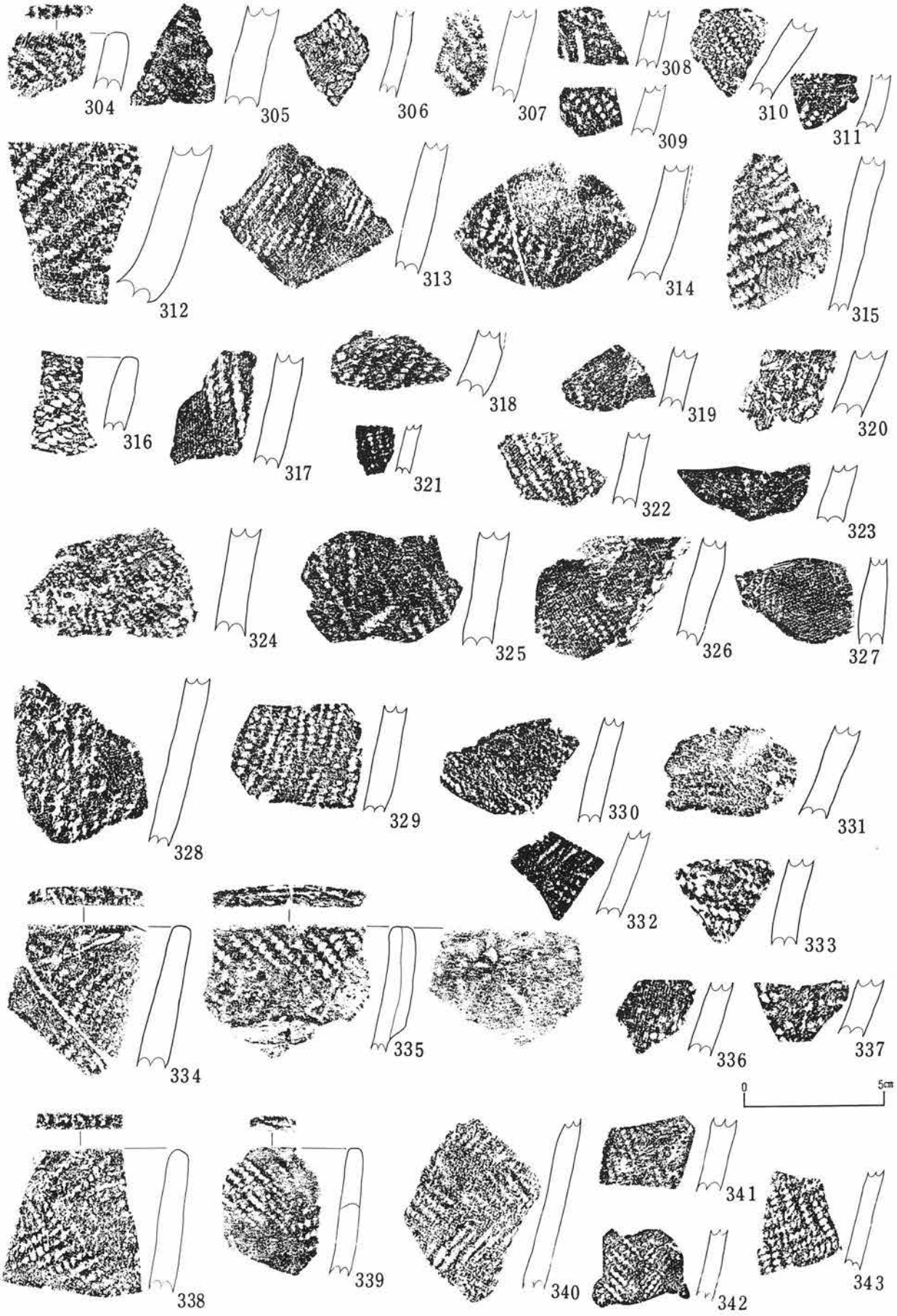
第73図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（10）



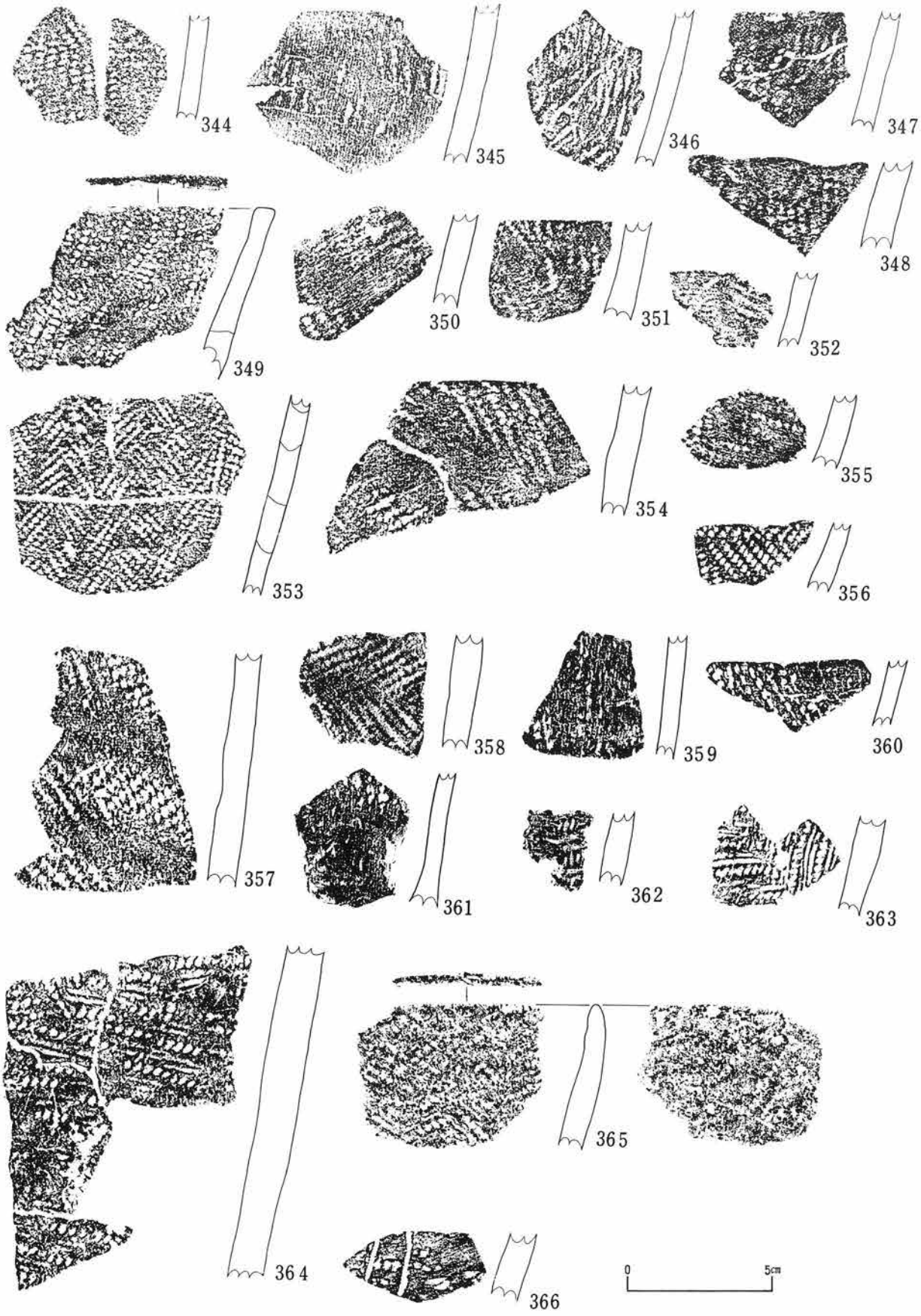
第74図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（11）



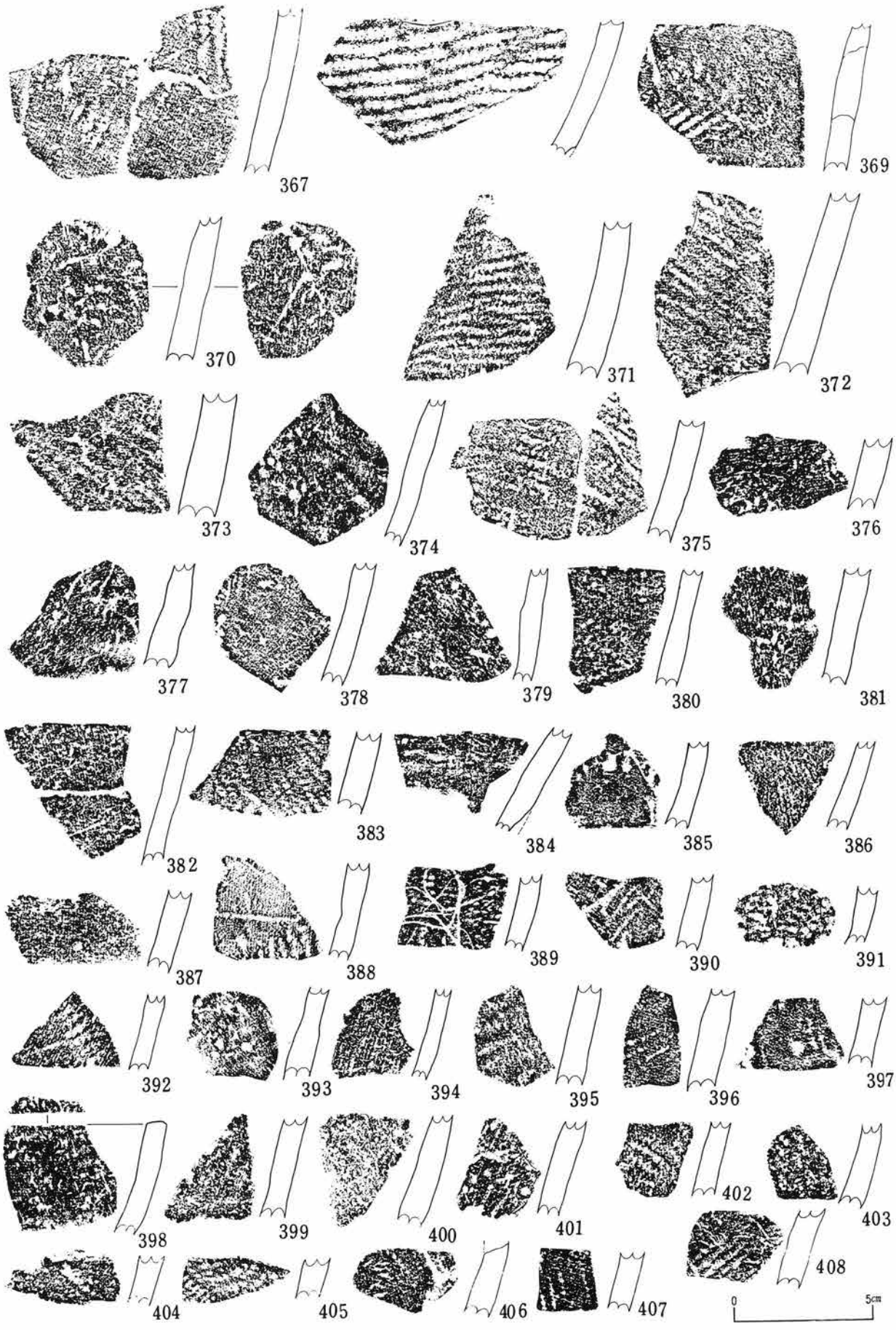
第75図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（12）



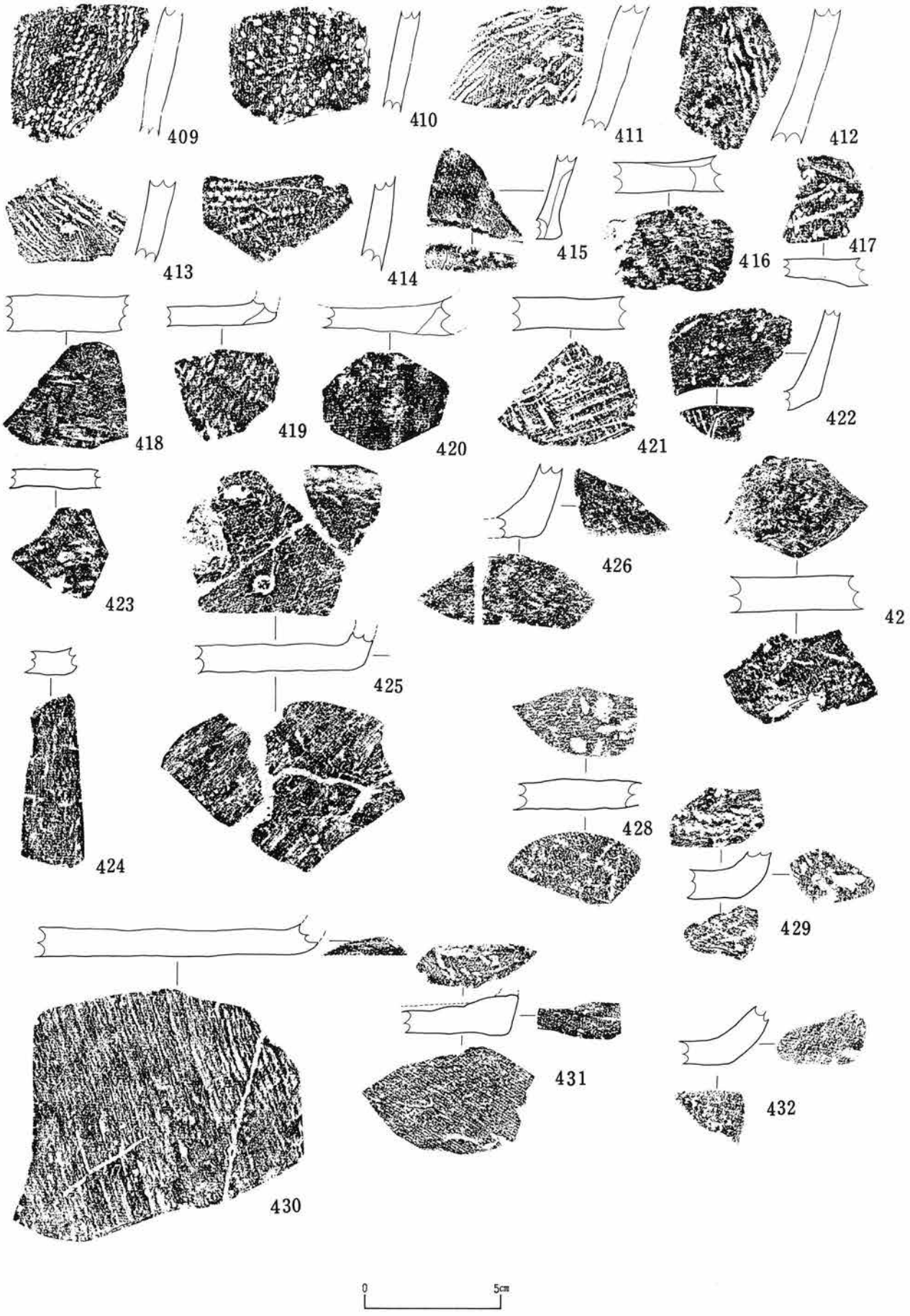
第76図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（13）



第77図　第II次調査 出土土器拓影（14）



第78図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（15）



第79図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（16）

凡　例

● …… 自縄自巻
◭ …… 絡条体圧痕
◒ …… 原体側面圧痕
◍ …… 半置半転
⊘ …… 縄　文
○ …… 無文又は不明

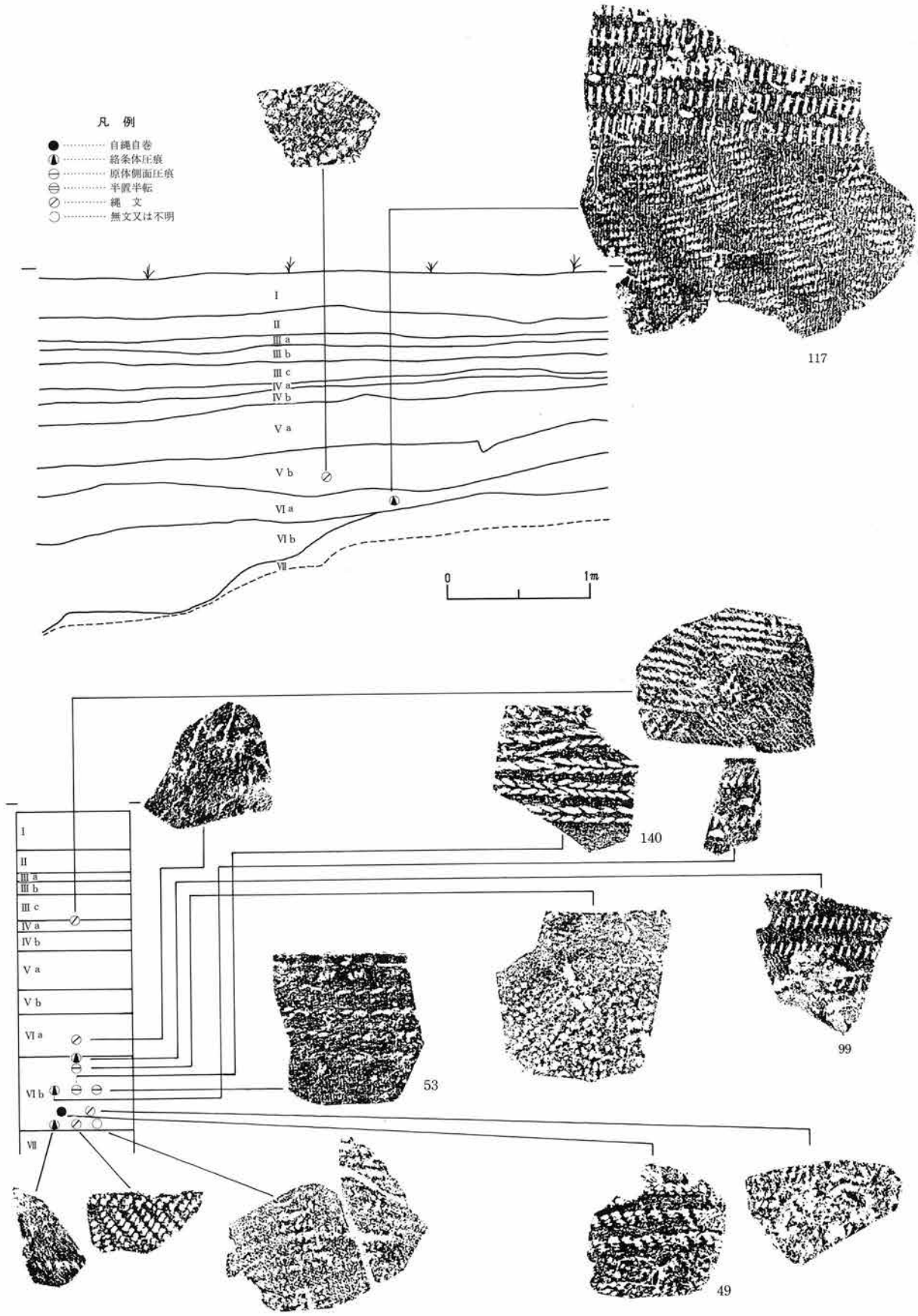
47
64
157
362
52
283
4
17

I
II
III a
III b
III c
IV a
IV b
V a
V b
VI a
VI b
VII

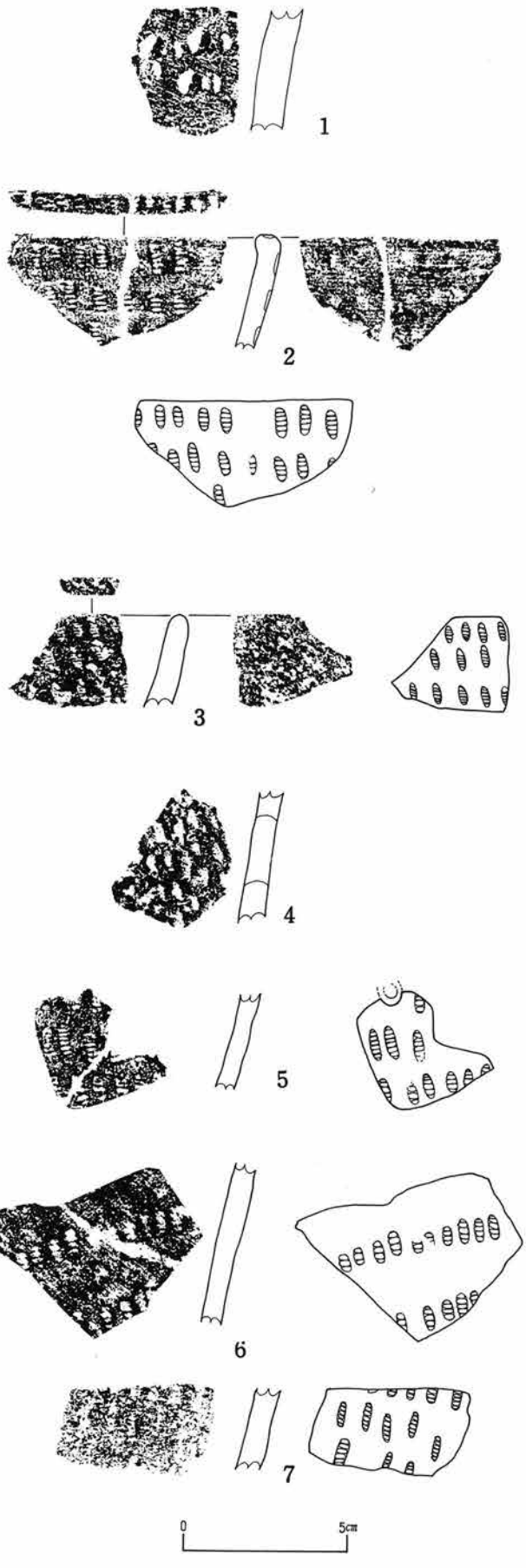
半置半転文土器
（復元第１号）

0　1m

第80図　第Ⅱ次調査Ｈ－１，２グリッドにおける草創期土器の出土状況



第81図　第Ⅱ次調査 G－2 グリッドにおける草創期土器の出土状況



（1） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様は爪形をハの字状に施しているが、片方が長さ7mm、幅3mmの半月状であるのに対し、もう一方は長さ4mm、幅2mmであり、片方が短かく狭い。内面にも文様があるようだが不明。器厚は10mmである。（H－1・VIa層）

（2） 1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。裏面に指痕がつき、炭化物が付着している。胎土中に長石を多く含む。口唇部6mm、下部5mm。

（3） 1の自縄自巻、焼成は良好。色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石を多く含む。口唇部にRLの縄文が施される。器厚は、口唇部で5mm、以下は7mmである。自縄自巻の長さ6mm、最大幅3mm。（H－3・VIb層）

（4） 1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を僅かに含む。器厚は7mmである。自縄自巻を5段、斜めに押している。（H－1・1088番）

（5） 1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に、石英・長石を含む。裏面に指痕が残る。器厚は6mm。自縄自巻の長さ8mm、幅3mm。器面はハ状の補修孔を土器焼成後入れる。補修孔は表面で6mm、内面で4mmである。

（6） 1の自縄自巻、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。裏面は暗茶褐色である。胎土中に長石・石英を含む。器厚は6mm。自縄自巻の長さ8mm、幅4mm。撚りの太さ1.5mm。自縄自巻を縦位に圧痕している。（F－3・Vb～VIa層）

（7） 縦位の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。器厚は7mm。自縄自巻の最大長10mm、最大幅3mm。自縄自巻を縦に圧痕する。（G－1・Va層）

第82図　第II次調査 出土土器拓影（17）

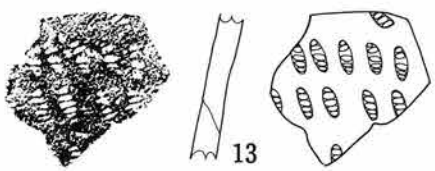
（8）1の自縄自巻を口縁直下に施している。焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。裏面に指痕が残る。自縄自巻の長さ最大7mm、最大幅2.5mm。

（9）　焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂・雲母・石英を含む。文様はrの条の自縄自巻を器面に対して縦位に圧痕している。器厚は9mmである。

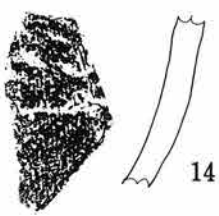
（10）　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を多量に含む。器厚は上部で6mm、以下7mm。文様は横位と縦位に自縄自巻を圧痕している。

（11）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母・長石を含む。文様は自縄自巻を縦位に圧痕している。自縄自巻の原体の長さは9mmである。器厚は7mmである。

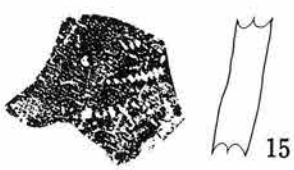
（12）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に多量の長石を含む。口唇直下にRの原体（もしかすると1の自縄自巻か）を圧痕し、以下原体を刺突している。



（13）　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。器厚は6mm。裏面に指痕が残る。自縄自巻の最大長さ9mm、最大幅4mm。自縄自巻は斜位に圧痕され、横位の帯状の文様になるようである。

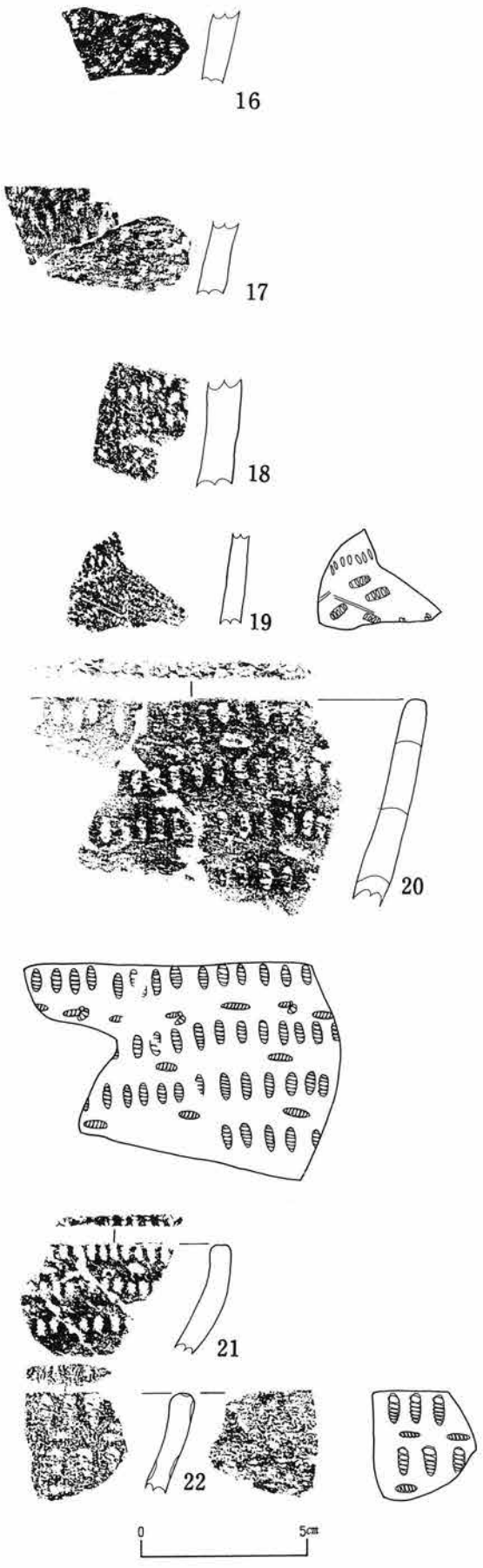


（14）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石を含む。文様は1の条の自縄自巻を圧痕している。自縄自巻の長さ7mm、幅3mm。以下の文様は風化により不明。器厚は7mm。（F－3・VIb層）



（15）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中にわずかな繊維と細砂・雲母を含む。文様は1の自縄自巻の圧痕と考えられる。器厚は10mmである。内面に指痕が施されている。（F－3・VIa層）

第83図　第II次調査 出土土器拓影（18）



（16）　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。1の自縄自巻の長さ5mm、幅3mm。自縄自巻を斜位に施している。（H－1・1067番）

（17）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。器厚は7mmである。5、6と同様自縄自巻を横位と斜位に圧痕させ、横位、斜位に帯状の文様を構成しているようである。（H－1・1088番）

（18）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英・長石・雲母を含む。文様原体は風化により不明である。自縄自巻の圧痕か？　器厚は10mmである。

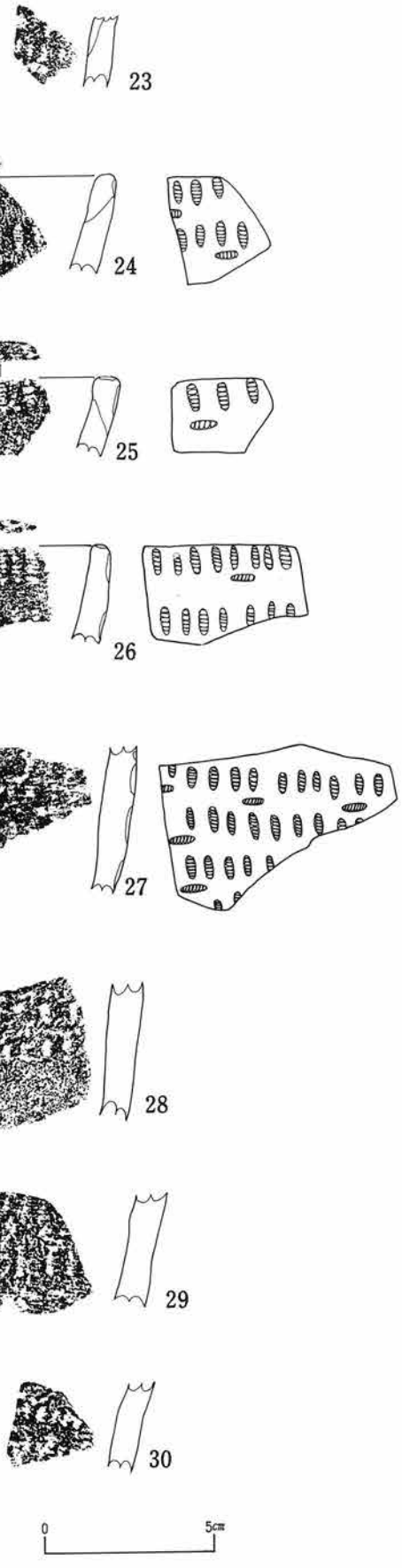
（19）　rの自縄自巻、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に繊維を多量に含み、石英を多く含んでいる。文様の上下・方向等は不明であるが、一応この位置としておきたい。1の自縄自巻の圧痕とrの自縄自巻の圧痕が施されている。繊維が多いためガサガサした感じであるが、裏面は茶褐色で石英の多いのが特徴である。器厚は5mm。表裏両面共繊維痕が認められている。

（20）　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。1の自縄自巻を縦位に施している。自縄自巻の長さ9mm、幅4mm。端部はLRの縄文を横位に回転している。器厚は口唇部で8mm、下部で9mm。1の条の太さ約1mm。裏面部に指痕が付いている。（G－3・VIb層）

（21）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は口唇部に1の自縄自巻を施し、自縄自巻を縦位、横位、縦位、横位、縦位と交互に施している。自縄自巻の長さ5mm、最大幅3mm。器厚は口唇部で5mm。

（22）　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶色を呈する。裏面に指痕が残る。胎土中に黒曜石・長石・石英を含む。1の自縄自巻の長さ9mm、最大幅4mm。1の自縄自巻は縦位と横位に圧痕を施している。裏面にも自縄自巻を縦位に施している。口唇部にも自縄自巻を施している。

第84図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（19）



(23)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。自縄自巻の長さ7mm、幅3mm。自縄自巻を縦位と横位に圧痕している。

(24)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。裏面は茶色を呈する。胎土中に長石を含む。器厚は口唇部で6mm、下部で8mm。自縄自巻の長さ8mm、最大幅3mm。口唇部に文様が施されているようであるが、原体等風化により不明、自縄自巻を縦位と横位に交互に施している。

(25)　自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。器厚は口唇部で7mm、下部で9mm。口唇部にも自縄自巻を圧痕している。自縄自巻の圧痕は縦位と横位を交互に繰り返す。

(26)　自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英と細砂を含む。自縄自巻を縦位と横位に施している。口唇部にも文様が施文されているが、原体は風化により不明である。器厚は口唇部で6mm下部で8mmである。

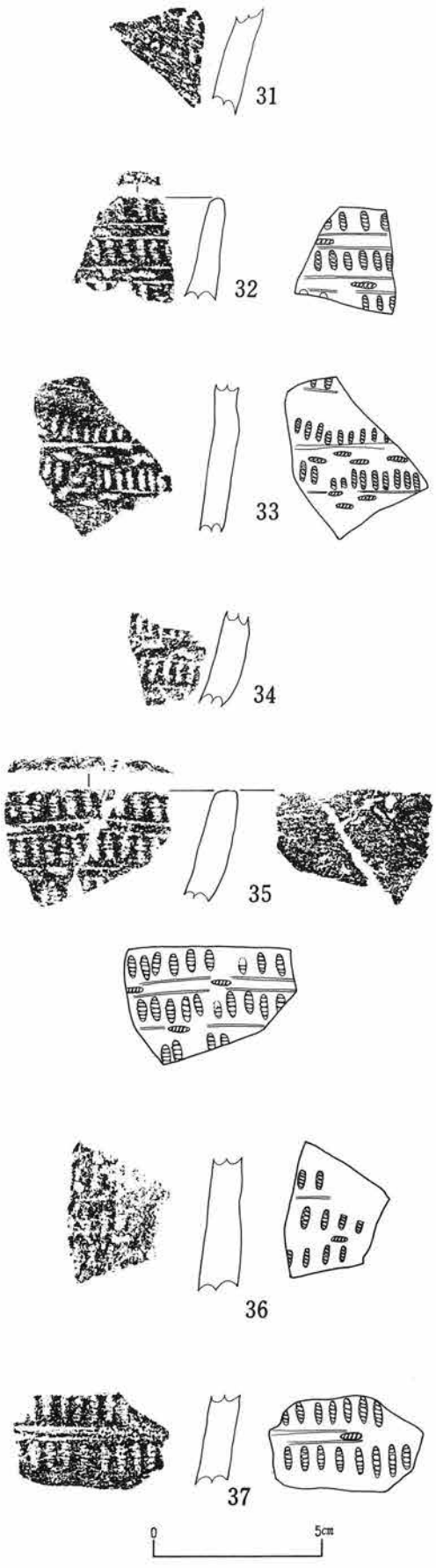
(27)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。器厚は7mm。1の自縄自巻最大長9mm。最大幅3mm。1の撚りの太さ1mmである。縦位と横位交互に自縄自巻を施している。

(28)　焼成は良好、色調は黄茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含む。文様は土器面が風化しており不明であるが、自縄自巻を縦位に2段施している。器厚は9mmである。（F－3・VIb層）

(29)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は自縄自巻を縦位に圧痕している。器厚は8mmである。（H－1・1072番）

(30)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は1の自縄自巻を縦位と横位に施している。自縄自巻の長さ5mm、幅2mmであり、器厚は8mmである。（H－1・1098番）

第85図　第II次調査 出土土器拓影（20）



（31）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化により不明であるが、自縄自巻の原体を縦位と横位に施している。器厚は7mmである。（H－1・1088番）

（32）　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。裏面は茶色を呈する。胎土中に長石・石英を僅かに含んでおり、また若干の繊維？を含んでいる。器厚は口唇部で5mm、下部で8mmである。口唇部に施文あり。自縄自巻の長さ7mm、幅5mm。自縄自巻タテ＋横位沈線＋自縄自巻ヨコ、※タテの自縄自巻を横位沈線が切っている。口唇部に、縄文原体を←→方向に施文しているか、自縄自巻を圧痕している。

（33）　自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を僅かに含む。器厚は7mmである。自縄自巻の長さ6mm、幅2mm。自縄自巻のタテ＋沈線＋自縄自巻のヨコ。自縄自巻の圧痕は、横位に施している自縄自巻の場合、沈線内に2段交互に施している。胴部で＞状に曲る器形であることが断面によりわかる。

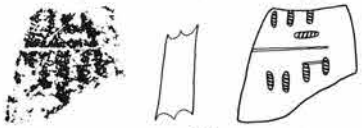
（34）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は自縄自巻を縦位と横位に施している。原体は土器自体風化しており不明であるが、自縄自巻を縦位と横位に交互に施しており、割り付け痕と思われる沈線が施されている。自縄自巻の最大長は7mm、最大幅は2mmである。器厚は7mmである。

（35）　1の自縄自巻、焼成は良好。色調は暗茶褐色、裏面は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。口唇6mm、以下9mm。1の自縄自巻を縦位と横位に圧痕している。沈線を施し文様を割りつけている。口唇部にも自縄自巻の圧痕か？

（36）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・雲母等を含む。器厚は9mm。内面に多量の指痕がつく。沈線が横位に施されている。（F－3・3164番）

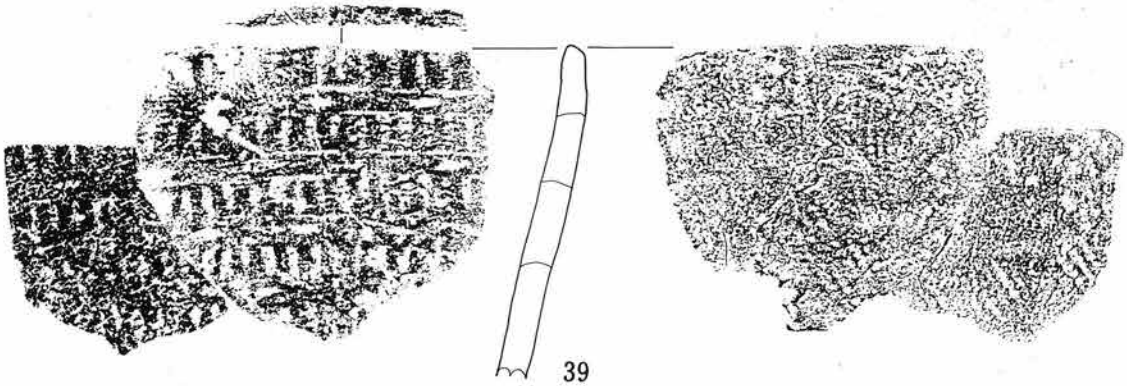
（37）　1の自縄自巻か？　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。器厚は7mm。自縄自巻の最大幅4mm。自縄自巻タテ2段＋幅4mm位の半截竹管状の圧痕＋横位の自縄自巻。半截竹管状の工具による沈線を施しその中に、横位の自縄自巻を圧痕している。

第86図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（21）



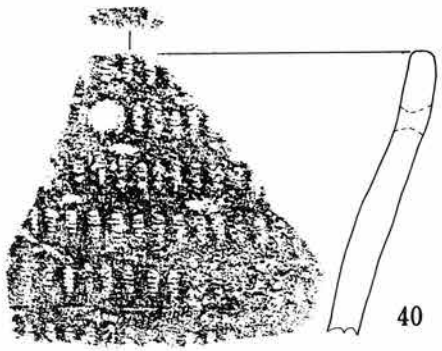
38

(38)　自縄自巻、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。自縄自巻の撚りの方向は風化により不明。器厚は10 mm、タテの自縄自巻＋横位沈線＋横位自縄自巻。



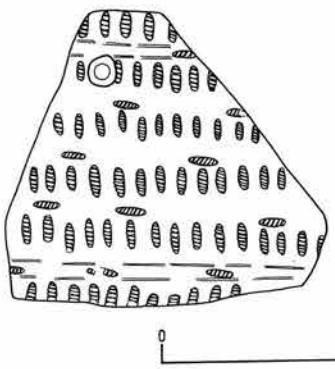
39

(39)　1の自縄自巻、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂・長石・石英・雲母を含む。土器は風化し摩滅している。口唇部に文様があったようであるが不明。表面は1の自縄自巻タテ⇨沈線横位⇨自縄自巻ヨコを5段繰りかえす。器厚は口唇部で6 mm、下部で8 mm。＊表・口唇から14 mm下に沈線、横位沈線の幅6 mm。裏・口唇から12 mm下に沈線。自縄自巻タテ9 mm・3 mm・自縄自巻ヨコ7 mm・3 mm。裏面にはRLの縄文が人・|→方向に施されている。（F－3・Vb～VIa層）

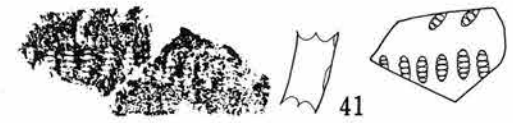


40

(40)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。裏面は茶色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。1の自縄自巻の長さ8 mm、幅3 mm。器厚は7 mm。補修孔は直径8 mmの円形である。自縄自巻は縦位と横位に交互に施されている。また、横位に沈線が施されている。口唇部には自縄自巻か縄文が施されているようであるが風化により不明である。

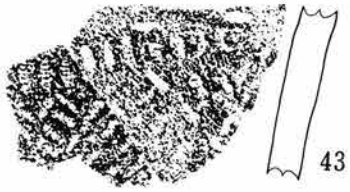


第87図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（22）

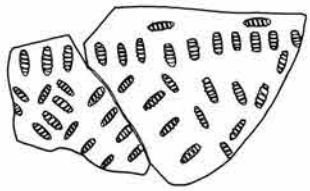


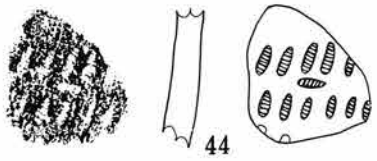
(41)　自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。器厚は11 mmである。自縄自巻の長さ8 mm、幅3 mm。縦位、横位、斜位に自縄自巻を圧痕している。

(42)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に繊維・石英を含む。器面縦位に1の自縄自巻を圧痕している。自縄自巻の長さ7 mm、太さ3 mm。1の条の太さ約1 mmである。縦位の自縄自巻の圧痕は文様としては斜位になるように施させている。器厚は9 mm。表面、裏面に繊維痕がつく。(F－3・VIa層)

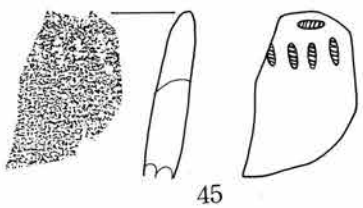


(43)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色、裏面は茶色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。自縄自巻の長さ8 mm、幅4 mm。自縄自巻を横位、縦位、斜位に圧痕して帯状をなす。

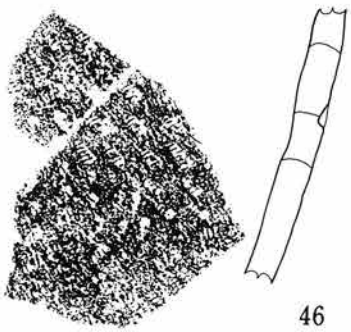




(44)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。裏面は茶色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。器厚は上部で7 mm、下部で8 mm。自縄自巻の長さ8 mm、幅3 mm。自縄自巻の圧痕は斜位、横位に施されている。

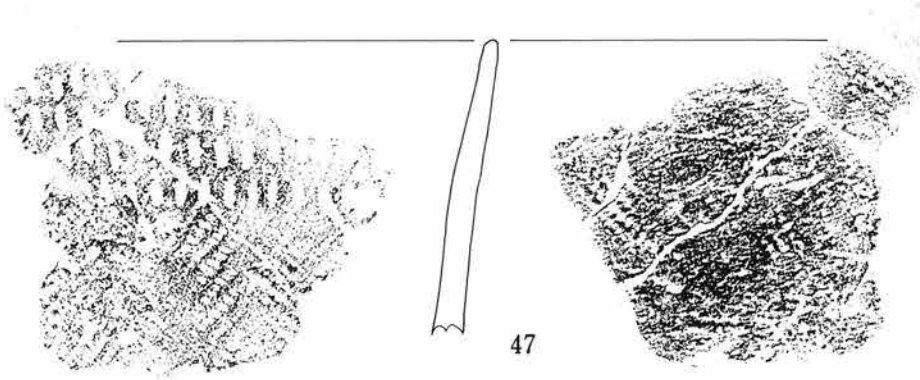


(45)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。風化している。口縁直下に横位に自縄自巻を施し、以下、縦位に自縄自巻を施している。自縄自巻の長さ7 mm、最大幅3 mm。

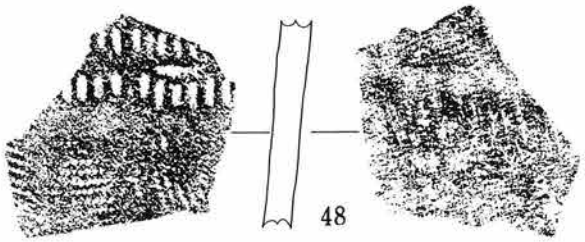


(46)　1の自縄自巻、焼成は良好、色調は焦茶色、裏面は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を多量に含む。1の自縄自巻を縦位、横位、斜位に施している。1の自縄自巻の長さ(圧痕)は、最大長で9 mm、太さは約4 mmである。1の条の自縄自巻の繊維の太さは約4 mm。器厚は7 mm。裏面に指痕と粘土紐の接合痕を残す。自縄自巻を縦位、横位に圧痕しながら、鋸歯状の文様をなすようである。

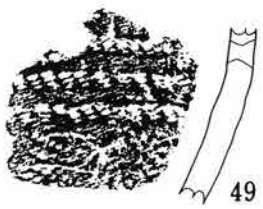
第88図　第II次調査 出土土器拓影(23)



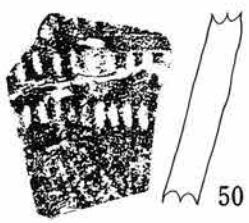
(47)　焼成は良好、色調は暗茶褐色である。胎土中に細砂(灰色4mm大)と繊維を含む。文様は器面に対して、1の条の自縄自巻を縦位に圧痕し、横帯状に5段施しており下部にRLと、LRの原体を↓方向に回転させて羽状縄文を施している。内面の施文原体と施文方向については、土器面は風化しているが、RLの縄文を↗に施している。(H－2・VIa層)



(48)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。1の自縄自巻を縦位と横位に施している。縄文はLRの縄文を↗、↙方向に施している。内面に指頭痕とヒッカキ痕をのこす。表面のLRの縄文は異方向縄文を施している。(F－3・VIb層)



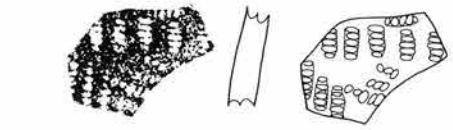
(49)　焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に黒曜石・石英・細砂を含む。1の自縄自巻を施しており、最大長5mm、最大幅3mm。その下より、LRの縄文を↓方向に回転している。また、補修孔がつくられている。直径約7mm。器厚は約7mm。(G－2・2199番)



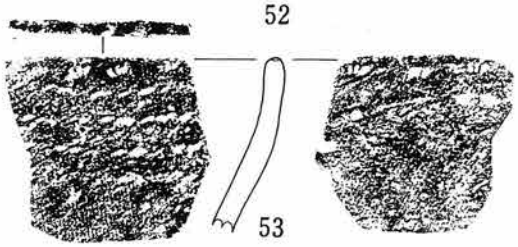
(50)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は自縄自巻を縦位と横位に施している。原体は風化しており不明であるが、自縄自巻をタテに3段、ヨコに2段施している。以下にRLの原体を|→方向に回転して施文している。器厚は8mm。

(51)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・長石・雲母が含まれる。器厚は11mmと厚手で、1の自縄自巻の圧痕と、LRの原体を↓回転して縦走の縄文を施している。(F－2・VIa層)

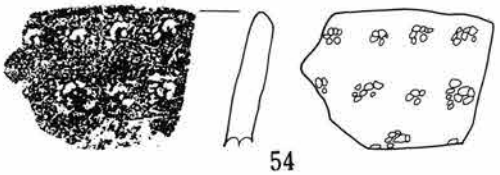
第89図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影 (24)



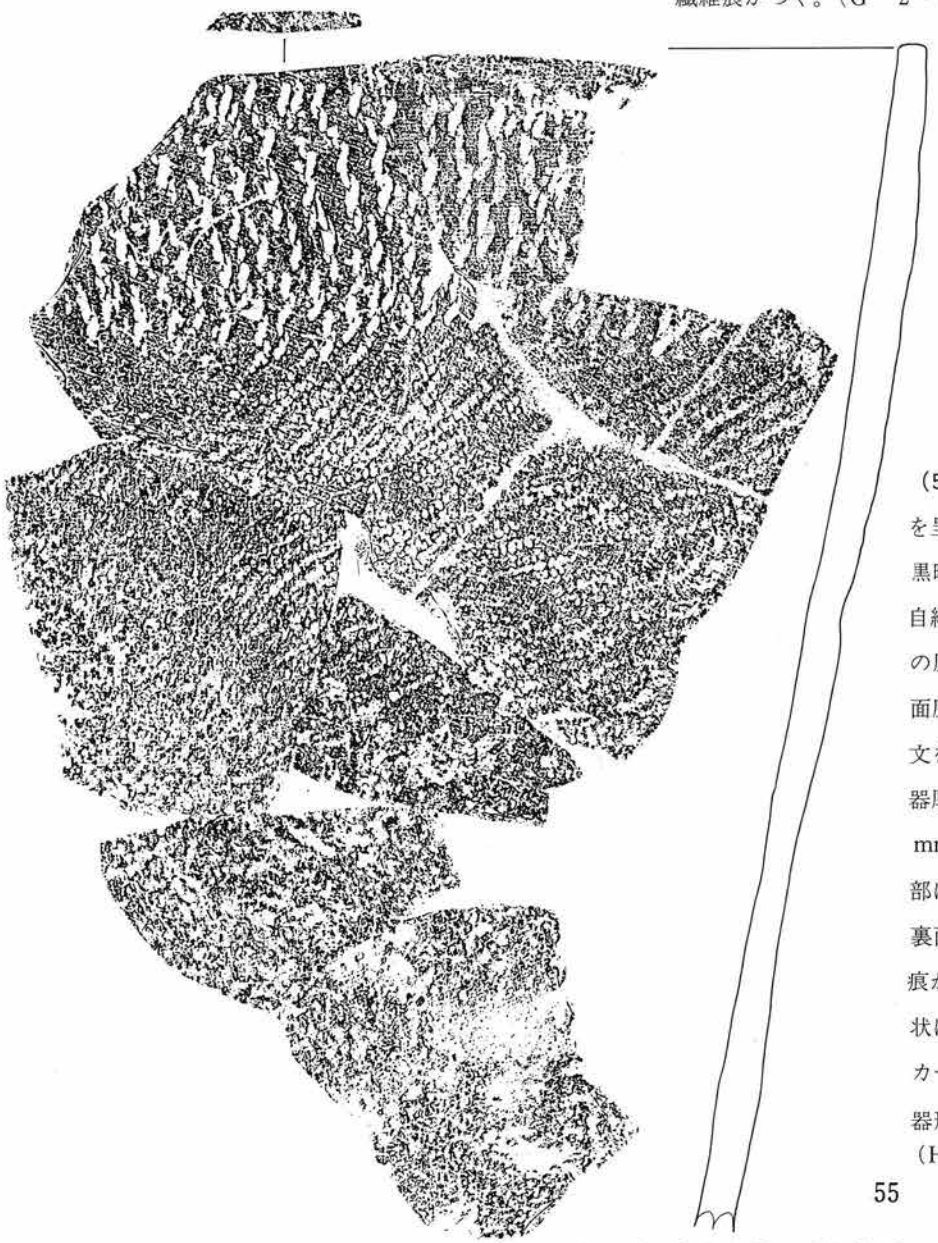
52



53



54



55

0 5cm

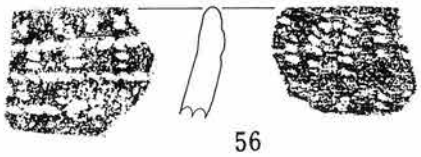
(52)　焼成は良好、胎土中に石英・灰褐色の細砂がまじる。1の自縄自巻の原体を縦位と横位と施している。LRの原体をLR↗、↘に回転している。自縄自巻の長さ8mm、幅4mmである。器厚は7mmである。(H－1・1053番)

(53)　焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。口唇部に自縄自巻を施しており、口唇部直下に1の自縄自巻を圧痕しており、Rの原体を横位に4段圧痕している。太さ約1.5mm、器厚は口唇部で5mm、下部で6.5mm。口唇に自縄自巻を圧痕しており、内面にも1の条の自縄自巻を横位に圧痕している。(G－2・2201番)

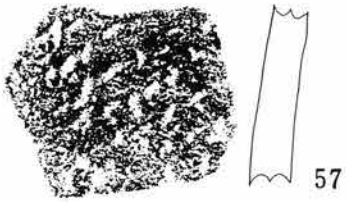
(54)　焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・繊維を含む。Lの自縄自巻の原体の端部で刺突を施していると思われる。文様としては、横位の文様を意識した刺突連のようになっている。口唇端部にも自縄自巻の圧痕が施されていると思われ、端部は丸くつくり、器厚が端部で5mm、下部で7mm。表面、裏面に繊維痕がつく。(G－2・VIb層)

(55) 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英・黒曜石・繊維を含む。文様はRの自縄自巻で巻の甘い原体か、LRの原体のほどけたものを縦位に側面圧痕し、以下の文様はLRの縄文を⊢、↗方向に回転している。器厚は口唇部で7mm、下部で11mm、口唇部は平につくり、口唇部にLRの縄文を⊢に施す。表面、裏面に繊維痕があり、内面に指頭痕がある。器形は隅丸方形の深鉢状になると考えられるが、大きくカーブする点がないので大きさ、器形等は不明である。
(H－2・VIb層)

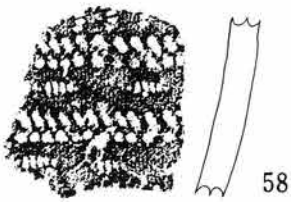
第90図　第II次調査 出土土器拓影 (25)



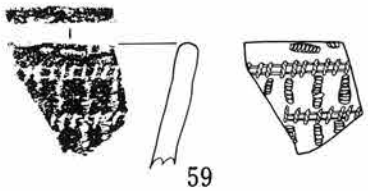
(56)　焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は口唇部から1の自縄自巻を縦位に施し、以下にRの原体の圧痕と1の自縄自巻の圧痕、Lの縄文原体の圧痕と1の自縄自巻の圧痕、Lの縄文原体の圧痕を順に施している。裏面には1の自縄自巻を2段施している。器厚は口唇部で5mm、下部で7mm。(F－3・VIa層)



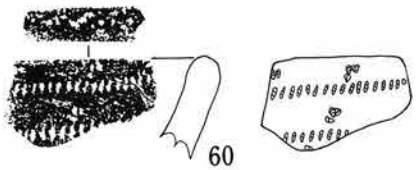
(57)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。文様は1の自縄自巻の巻の甘い原体か、Rの原体の撚りの甘い縄を側面圧痕していると考えられる。原体(縄文)の長さは30mmである。器厚は10mm。(H－3)



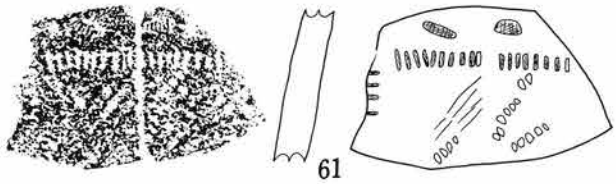
(58)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は条の太さ1mmのrの自縄自巻を器面に対して縦位に圧痕を施し、1の条の絡条体圧痕を時計方向に巻いて圧痕しており、絡条体圧痕を絡条体の部位をかえて施している。モチーフとしてはン状を作っている。絡条体の条の太さは1の条で2mmである。器厚は9mm。内面は入念に研摩している。



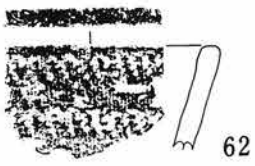
(59)　焼成は良好、表面は茶褐色、裏面は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。文様は1の条の自縄自巻を横位に施したのち、幅3mmの軸にrの条を時計と逆回りにからげた絡条体を横位に施し、縦位に1の自縄自巻を施している。絡条体＋1の自縄自巻。器厚は口唇部で5mm、下部で7mm。絡条体圧痕と自縄自巻を交互に施している。口唇部にも施文されているようであるが風化により不明である。(G－2・VIb層)



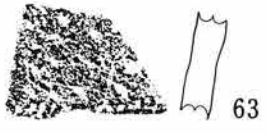
(60)　焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。Rの条の自縄自巻の端部の圧痕を施し、以下に絡条体Rの縄を軸に対してL方向に巻きつけている。口唇部にはLRの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は9mm。(第6号住居跡)



(61)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含み、繊維を少量含む。1の自縄自巻を長さ8mm、幅3mm、太さ1mmを施し、rの条の絡条体、長さ4mm、条の太さ1mmを横位と縦位に施している。下部はLRの縄文が施されている。器厚は8mm、裏面に指痕と繊維痕が残る。LRの縄文原体を|→方向に施文する。(H－1・Vb層)



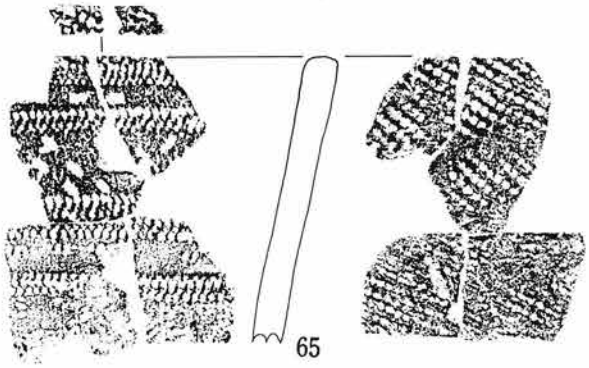
(62)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はRLの端部を半置半転しており|→方向に回転している。口唇部にRLの原体の縄を回転している。内面は入念に研摩している。RLの半置半転を二段施した間に、1の条の自縄自巻を横位に圧痕し、また、RLの端部を圧痕している。器厚は5.5mmである。



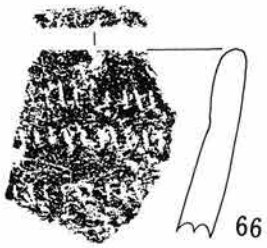
(63)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。風化しており文様は不明であるが、自縄自巻の圧痕を施し、下部に絡条体圧痕を施している。さらに下部には半置半転を施している。器厚は8mmである。(H－2・2090番)

第91図　第II次調査 出土土器拓影(26)

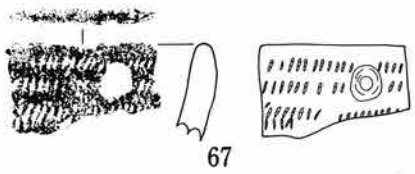
(64)　焼成は良好、色調は茶褐色、胎土に細砂を含む、文様はＬＲの縄文原体の半置半転を施し、風化により条は不明であるが、自縄自巻の圧痕を、ハ状に施している。鋸歯形の文様構成をとると思われる。器厚は７mmである。（Ｈ－１・1088番）



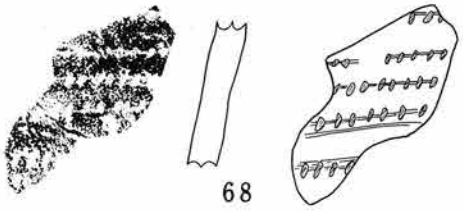
(65)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は口唇部にＲＬを|→方向の原体を回転し、口唇直下にはＬＲの縄文原体を半置半転している。自縄自巻を横位と縦位、斜位と施している。自縄自巻の長さ６mm、条の太さ1.5mm、幅３mmである。器厚は７mmである。また、裏面部にはＲＬ|→の縄文を施している。（Ｈ－１・1088番）



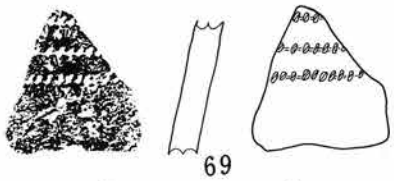
(66)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は１の条の絡条体を３段施している。また、内面には指頭による圧痕が施されている。絡条体の幅６mm、口唇部にも施文が施されているが不明である。内面に一部擦痕がある。器厚は口唇部で７mm、下部で９mmである。



(67)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。１の条の絡条体圧痕を横位に４段施している。内面横位に擦痕が施され、炭化物が付着している。裏面には指頭痕が残る。絡条体の幅６mm。口唇部にも施文が見られるが不明である。器厚は口唇部で６mm、下部で７mm、口唇部をまるく作り、補修孔（10mm）をつくる。（Ｅ－３）

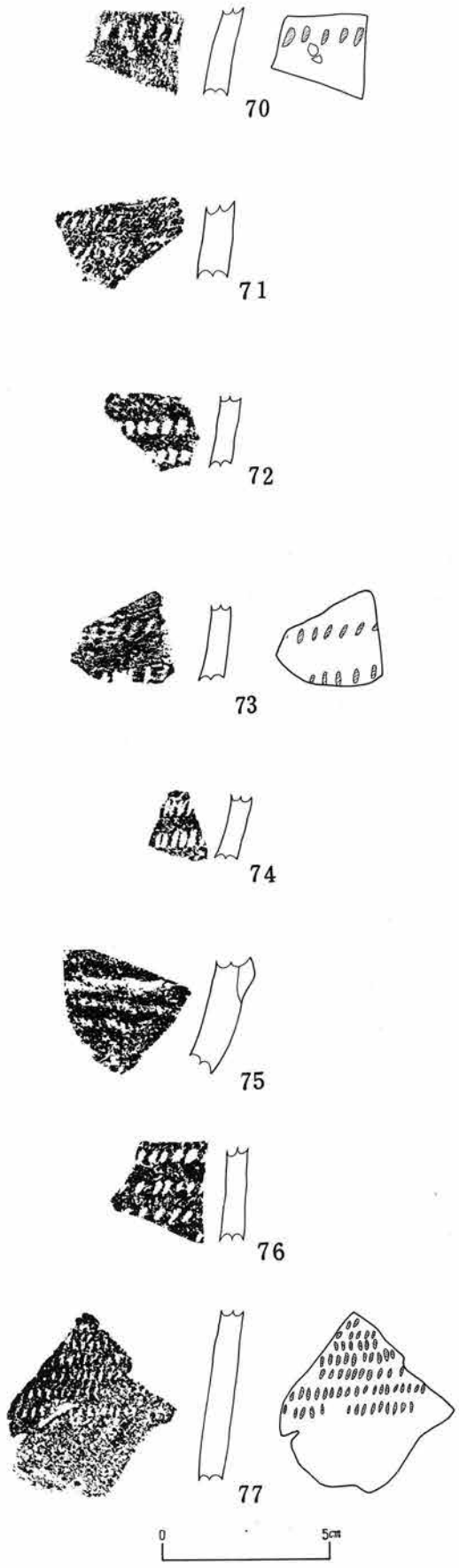


(68)　焼成は良好、色調は暗茶褐色、裏面は茶褐色を呈する。胎土中に長石を多く含む。１の条の絡条体が横位に５段施されており、幅11mmの低い横位の隆帯状のものが存在する。裏面には指頭痕と横位の擦痕が施されている。器厚は７mm。隆帯部で９mm。１の条を軸に時計回りと逆にからげている。絡条体の軸時計回りと逆にからげている。絡条体の軸が圧痕されている。（Ｆ－３・Ⅵb層）



(69)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を少量含む。１の絡条体圧痕を横位に３段施している。１の条を時計回りと逆にＬ方向にからげている。条の太さ１mm、幅２mm。器厚は８mm。絡条体の軸が圧痕されている。（Ｆ－３・Ⅵb層）

第92図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（27）



(70)　焼成は良好、色調は暗茶褐色、裏面は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。文様は1の条の自縄自巻をRの方向に巻いているか、絡条体で1の条をR方向に巻いて施文している。一部にRの縄の圧痕と考えられるものが施文されている。1の条の太さは約2mmである。裏面には指頭痕が残る。(F－3・VIb層)

(71)　焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は1の条の絡条体を施している。絡条体は時計回りと逆に巻き、2段施している。幅3mm、器厚は8mmである。

(72)　焼成は良好、色調は灰茶褐色を呈する。胎土中に長石と繊維細砂を含む。1の条の絡条体を圧痕している。1の条の太さ2mm、幅　5mm、条の間が約2mm、深さ1mm。(第1号住居跡)

(73)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石と繊維を含む。1の絡条体を施している。　幅5mm、太さ1mm。10mmの無文部を持つ。文様は、軸に対して1の条を時計回りと逆方向に巻いている。器厚は6mm。(F－3・VIa層)

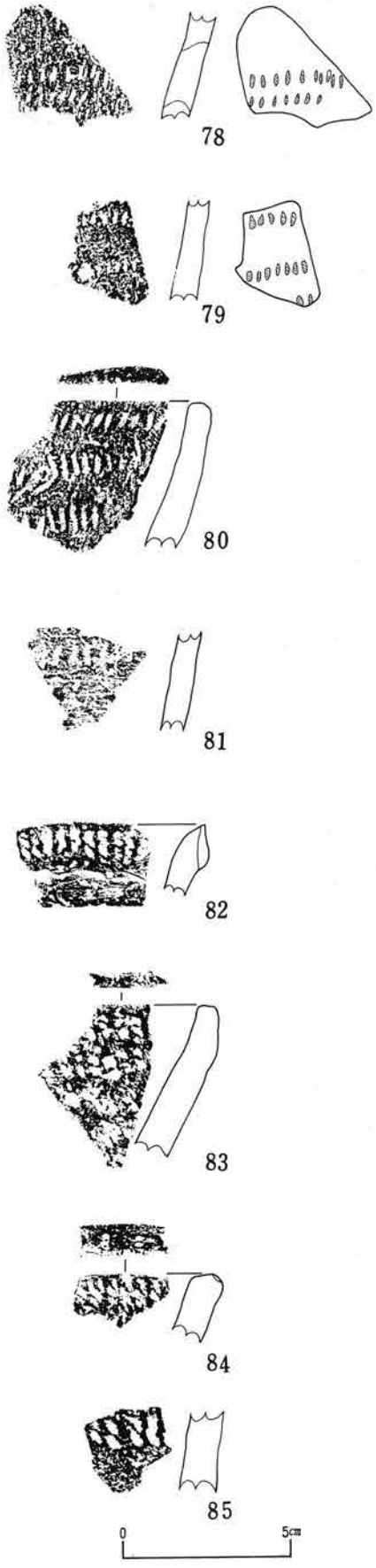
(74)　焼成は良好、色調は茶褐色であり、胎土中に細砂・長石・石英を含む。文様は太さ約1.5mmの1の条を、時計回りと逆方向に軸に巻きつけており、圧痕の幅は5mmを測る。器厚は5mm。

(75)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂(白色)・石英を含む。複合口縁と思われ、文様は風化しているが、rの絡条体を横位に施していると思われる。器厚は複合部12mm、その他は8mm。(G－2・VIb層)

(76)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様は4mmの幅に絡条体圧痕(r)0段条を横位に施している。rの0段の条は太めで2mmに近い。軸状のものに時計と逆回りに施している。器厚は7mm。内面は黒色で指痕が残る。(H－3・VIa層)

(77)　焼成は良好、色調は表面が暗茶褐色、裏面が茶褐色を呈する。胎土中に長石・黒曜石を含む。文様はrの絡条体を7段施す。軸に時計回りと逆の方向(L)に施している。器厚は7mm。横位に絡条体圧痕を施している。(G－2・VIb層)

第93図　第II次調査 出土土器拓影(28)



(78)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・黒曜石を含む。また少量の繊維を含む。rの絡条体圧痕を施しており、軸に時計方向と逆に巻いている。Lの方向、横位に2段施している。条の太さは1.5mm、幅は4mm。器厚は7mm。(F－2・VIa層)

(79)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英を多量に含む。rの条の絡条体をLの方向にからげて、横位に3段圧痕している。rの条の太さ1mm、幅3mm。器厚は7mm。

(80)　焼成は良好、色調は暗茶褐色、内側は暗褐色を呈する。胎土中に長石・黒曜石・繊維を含む。口唇部には文様が施されているらしいが不明。口唇から6mm下に1の絡条体を、時計回りと逆方向に巻いている。1の条の太さ約1mm。7mm下に右下がりの絡条体が、太さ約1.5mm、幅7mm施されている。そして、8mm下にやはり右下がりの絡条体が幅6mm施されている。表面には黒曜石・繊維痕が残り、裏面にも繊維痕・指頭痕が残る。2段目の絡条体では、左下がりの絡条体が2本でている。(F－3・VIa層)

(81)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。表面は繊維が混入しているためガサガサしている。文様はLの絡条体を圧痕していると思われる。絡条体の幅6mmである。器厚は7mmである。(第4号住居跡)

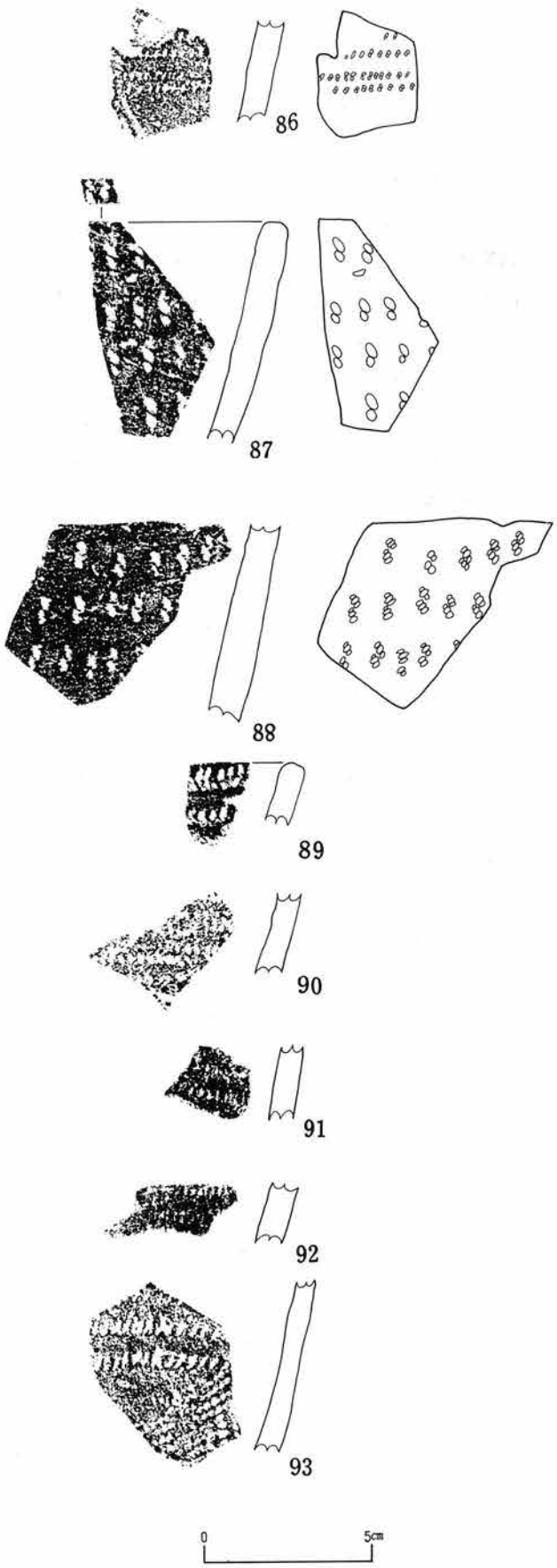
(82)　焼成は良好、色調は茶褐色、内面は黒色を呈する。胎土中に繊維を多量に含む。また、石英・細砂も含む。文様は口唇部直下にRの原体を絡条体圧痕しているか、側面圧痕を施している。下部にはRの縄文原体が圧痕されている。器厚は折り返し部で10mm、下部で7mmである。(F－3・VIb層)

(83)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。口唇に自縄自巻を圧痕している。口縁部直下から、Rの絡条体または、側面圧痕を施す。器厚は口唇部で6mm、下部で12mmである。(H－2・VIa層)

(84)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。口唇部に自縄自巻を圧痕したあと、ヘラ状工具で削る。文様はRの原体の絡条体圧痕を施す。(G－2・VIb層)

(85)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はRの原体の側面圧痕か、Rの絡条体圧痕と思われる。器厚は10mmである。

第94図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影(29)



(86)　焼成は良好、色調は暗褐色、内面は茶褐色を呈する。指痕が残る。胎土中に長石・黒曜石・細砂を含む。Rの絡条体を横位に4段施している。器厚は8mmである。(G－2・3・VIb層)

(87)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。Rの絡条体圧痕と思われるものを縦に4段施している。　軸にまかれている原体の太さは、3～4mm。圧痕されている原体の長さは8mmである。胎土中に僅かに細砂・石英を含む。器厚は口唇部で9mm、下部で8mmである。

またはRLの原体を口唇部に側面圧痕か、絡条体を施し、以下にRLの原体を縦位に側面圧痕している。縦位の側面圧痕か絡条体は4段で、原体の長さ8mm、太さ約3mm、縦位の圧痕と圧痕の間隔は、7～5mm、縦位の圧痕と圧痕の間に、横位に側面圧痕を施している。胎土中に繊維・細砂・長石を含む。

(88)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石・長石を含む。文様はRLの縄文原体を3段縦位に絡条体圧痕か、側面圧痕しており、圧痕されている原体の幅 は9mm、太さは約3mm。器厚は8～9mmである。(F－3・VIb層)

(89)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母が混ざっている。文様はRLの絡条体圧痕を施している。器厚は7mmである。

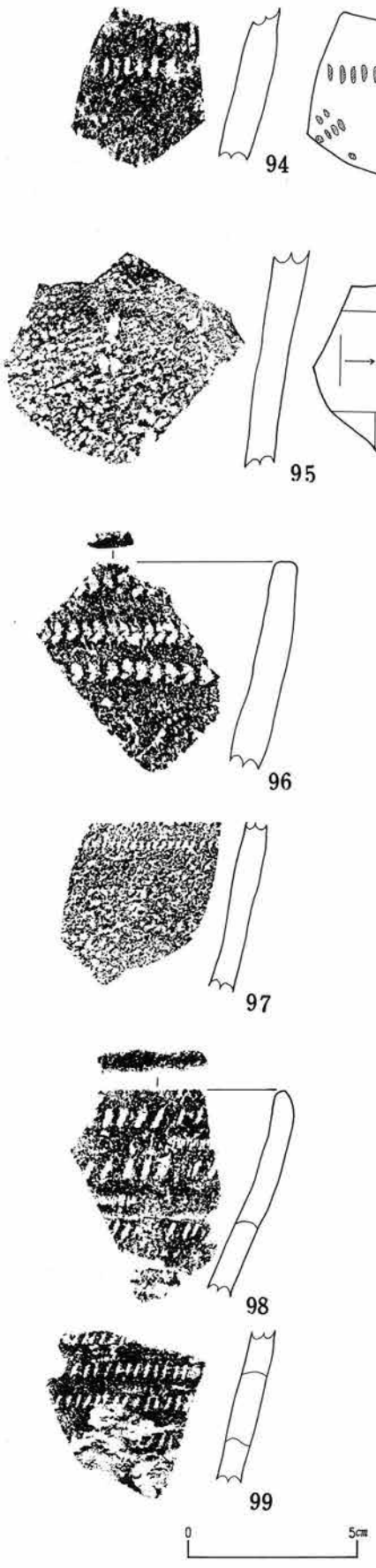
(90)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様は絡条体圧痕か自縄自巻を施しているが、風化しており原体と文様のモチーフは不明。器厚は7～8mmである。

(91)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。絡条体圧痕が2段横位に施されている。

(92) 焼成は良好、色調は茶褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土中に僅かな繊維と長石・石英を含む。絡条体圧痕が施されている。(F－3・VIa層)

(93)　1の絡条体圧痕、時計回り、幅4mmの棒状工具(竹かカヤ状のものを割っている)に、約1mmの1の条を時計の逆回りに巻きつけている。これを3段以上横位に圧痕を施して、以下にLの縄文を施している。裏面には指痕が残る。焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を含み、雲母を多量に含む。器厚は上部で5mm、下部で6.5mm、絡条体と絡条体の間は5mm。Lの縄文を⊢方向に回転している。(F－3・VIb層)

第95図　第II次調査 出土土器拓影 (30)



（94）　焼成は良好、色調は茶褐色、内面は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・繊維を多量に含む。1の条の自縄自巻か1の条の絡条体LRの縄文を|→方向に回転している。1の条の絡条体の場合は、軸にLの方向、時計回りと逆に条をからませている。器厚は7mmである。（F－3・VIa層）

（95）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は、rの条を時計回りに巻いたものを圧痕している。絡条体の直下より縄文原体をLRを|→方向と、LRを↓方向に回転している。器厚は9mmである。（G－2・2185番）

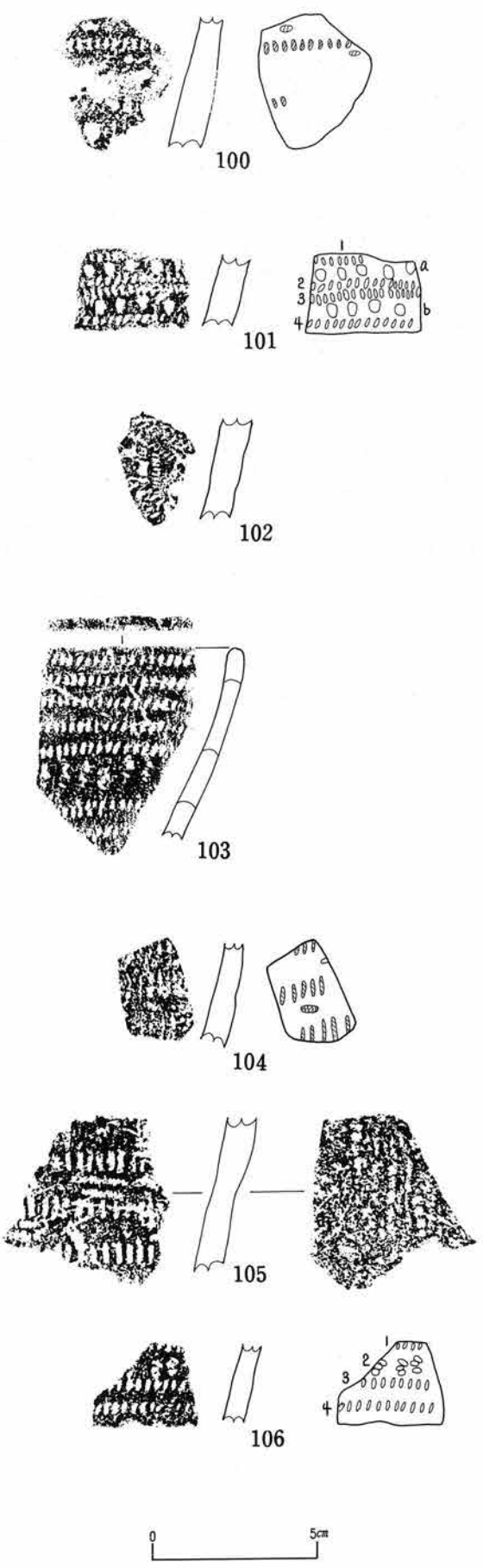
（96）　焼成は良好、色調は暗茶褐色、内面も暗茶褐色である。胎土中に黒曜石・石英・長石を含む。LRの縄文を横位に施している。器厚は口唇部で6mm、下部で8.5mm。文様についてはLRとRLの原体を棒状工具にまきつけた絡条体横位に圧痕しているか、LRの縄文原体とRLの縄文原体を側面圧痕しているとも考えられるが、文様の状況からみて、絡条体圧痕の方が可能性が高いと考えられる。

（97）　焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。文様はRの絡条体圧痕を施しており、以下に、縄文を施しているが風化により原体は不明である。絡条体は幅は2mm。Rの原体の太さは1mm。器厚は7mm。（H－3・VIa層）

（98）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に繊維を含む。口唇部は端部を丸くつくり、文様は絡条体（1の条、太さ1mm、幅約6mm）をL方向に巻いて横位に施文している。絡条体と絡条体との間に、長さ13mm、幅4mmの1の条の自縄自巻を施している。器厚は6mm。絡条体と自縄自巻を交互に施している。横位に自縄自巻を2段施す場合もある。

（99）　焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。また、繊維も僅かながら含む。1の条の絡条体を軸に時計回りと逆方向（L）に巻いており、幅4mmを測る。条の太さは約1mm。この横位の絡条体と絡条体の間を5mmあけており、ここに1の条の自縄自巻を横位に施文している。長さは14mm、幅は2mm。10本の条が数えられる。内面には指痕が残る。器厚は7mm。一部に絡条体の軸状の部分の圧痕が沈線状に見えるものがある。（G－2・2189番）

第96図　第II次調査 出土土器拓影（31）



(100)　焼成は良好、色調は暗茶褐色、内面は暗褐色を呈する。胎土中に長石･石英･細砂を含む。自縄自巻（1の条の自縄自巻、長さ5mm、幅2mm）1の条の絡条体圧痕が施されている。（F－2・VIa層）

(101)　1－1の条を時計回り（右R）に軸にからめる。軸は幅2mm、1の条の太さ約1mm。a－1の条の自縄自巻の圧痕（端部を斜位にしての圧痕）長さ4mm、幅3mm。
2－1の条を時計回り（左L）と逆方向に軸にからめる。軸は幅約2mm、1の条の太さ約1mm。3－1の条を右（R）回りにからめる。軸の幅約2mm、1の条の太さ約1mm。自縄自巻を横位に圧痕し、絡条体圧痕を＜状に圧痕している。b－1の自縄自巻の端部圧痕と思われる。長さ4mm、幅3mm。4－1の条の絡条体圧痕、左（L）方向に軸にからめる。器厚は7mm。焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。1と2はrの可能性がある。

(102)　焼成は良好、色調は暗茶褐色、胎土に繊維、細砂、雲母を含む、文様は1の条の絡条体圧痕を時計回りと、逆時計回りに施している。絡条体の幅は3mm、と2mmである。また、自縄自巻も縦位に施している。器厚は7mmである。

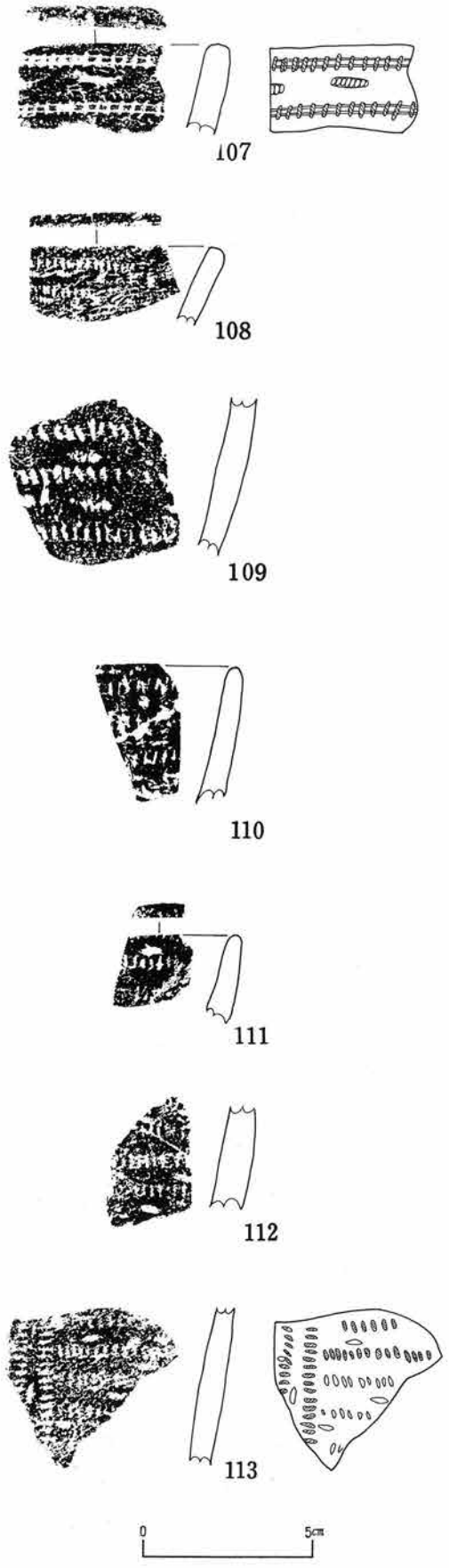
(103)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・繊維を僅かに含む。文様は、口縁直下よりrの条の絡条体を5段横位に施す。条の太さ1mm、幅3mmで（L）の方向に軸にからげている。そして、5段の横位絡条体の下に1の条の自縄自巻を施している。自縄自巻の長さ10mm、幅3mm。そして、その下に2段rの条の絡条体を（L）の方向に軸にからげている。横位の絡条体と絡条体の間は6～5mmの無文部がある。文様の割り付け痕と思われる沈線もある。器厚は5mmである。（F－3・VIb層）

(104)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。文様はrの条を軸に時計と逆方向に回いている。rの条の絡条体を横位に施し、その間に1の自縄自巻を施している。無文部の幅は約6mm。器厚は上部が5mm、下部は7mm。（F－3・VIa層）

(105)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はrの絡条体を横位に圧痕しており、絡条体と絡条体との間にrの条の自縄自巻を施している。内面は風化しているが、$L<\frac{R}{L}$の縄文を入方向に回転していると思われる。rの絡条体の太さ2mm、長さ6mmで、rの条の自縄自巻の長さ13mm、幅2.5mm、条の太さ1mmである。

(106)　1－絡条体の圧痕、2－1の条の自縄自巻、長さ6mm、幅3mm、太さ約1mm。3－rの条の絡条体圧痕、軸に時計と逆回りL方向に巻きつける。rの条の太さ1mm。4－3に同じ。器厚は6mm。焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石を含む。絡条体圧痕と自縄自巻を交互に帯状に施す。（F－3・VIb層）

第97図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（32）



（107）　焼成は良好、色調は茶褐色・暗褐色を呈する。胎土中に長石･石英を含む。ｒの条を幅２mmの軸にＬ方向に巻きつけている。絡条体と絡条体の間に自縄自巻を横位に圧痕している。裏面には指頭痕が残る。器厚は８mmであり、絡条体の軸、幅３ mmで、梯子状に施文されている。絡条体の長さは25 mmのようである。

（108）　焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に石英を多く含み、繊維･細砂を含む。文様は３mmの幅で絡条体圧痕（１）０段の条を横位に施して、その下に自縄自巻を縦位と横位に施している。以下に、１の絡条体圧痕を横位に施している。口唇部については不明。口唇部を丸く作っており、器厚は口唇部で5.5 mm、下部で６mm。（Ｆ－３・Ｖｂ～Ⅵａ層）

（109）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。絡条体圧痕と自縄自巻を交互に施している。絡条体圧痕は（ｒ）で軸状のものに時計回りに巻いている。絡条体の幅４mm、端部に結びめがでている。それから考えると絡条体の長さ約15 mm。自縄自巻の０段の条の撚りについては、風化しており不明であるが、長さ９mm、最大幅５mm。器厚は６mm。（Ｇ－２・３・Ⅵｂ層）

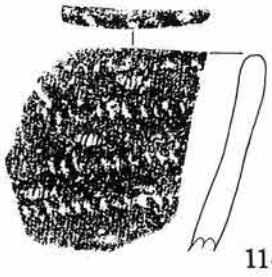
（110）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様は絡条体圧痕ｒの原体で幅３mm、原体と原体の間が２mmである。自縄自巻も施している。器厚は５mm、下部は６mmである。（Ｆ－２・Ⅵａ層）

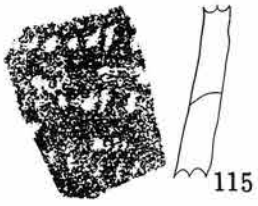
（111）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石と僅かな繊維を含む。器厚は口唇部で５mm、下部で９mmである。ｒの絡条体の軸は、幅３mm、その上に、太さ約１mm位のｒの条を軸に直角に近く巻いている。その下に自縄自巻の圧痕か絡条体の軸状のものの刺突が施される。軸状の幅５mmと１mm。112と同一個体。

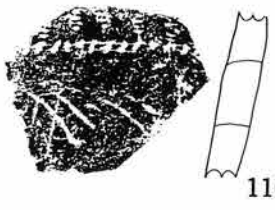
（112）　ｒの絡条体圧痕、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石と僅かな繊維を含む。器厚は口唇部で５mm、下部で９mmである。ｒの絡条体の軸は幅３mm、その上に太さ約１mm位のｒの条を軸に直角に近く巻いている。その下に自縄自巻の圧痕か絡条体の軸状のものの刺突が施される。軸状の幅５mmと１mm。111と同一個体。（絡条体圧痕と自縄自巻を横位に交互に施している。（Ｇ－２・Ⅵａ層）

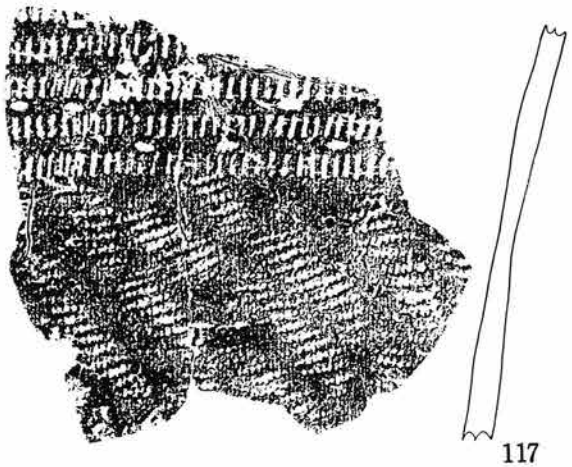
（113）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・繊維を含む。内面は暗褐色を呈する。文様はｒの絡条体と撚りの不明な自縄自巻を組合せている。器厚は５mm～６mmであり、内面に繊維痕が認められる。横断面でわかるように、器形が大きくカーブしている。

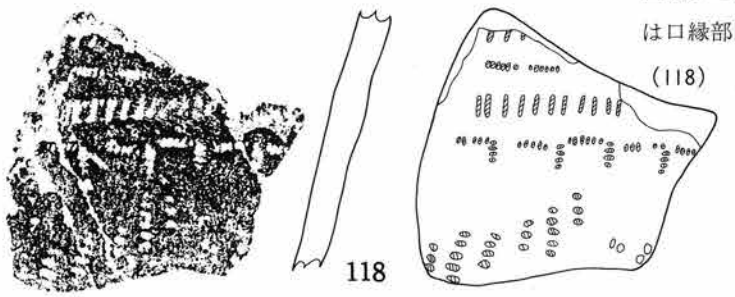
第98図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（33）











（114） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様は、絡条体圧痕と自縄自巻を交互に施している。横位の絡条体圧痕4段とその間に自縄自巻を3段施している。自縄自巻は横位に施されているが文様状は斜めになるように施されているらしい。絡条体圧痕（R）の原体を軸に時計回りに巻いており、圧痕の幅3mm、長さ10.5mmである。自縄自巻の長さ約7.5mm、最大幅4mm。自縄自巻は1の条である。口唇部に自縄自巻の圧痕があるようにも見えるが文様については不明である。器厚は、口唇部で7mm、下部で7mm。（G－3・VIb層）

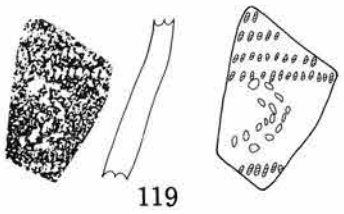
（115） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英、細砂を含む、器面が風化しているが、文様は自縄自巻と絡条体圧痕を交互に施している。器厚は7mm～9mmである。（G－2・VIb層）

（116） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石を多量に含む。自縄自巻の長さ6mm、幅2.5mmである。絡条体圧痕の軸の幅は2mm、1の条を軸に時計回りと逆L方向にからげている。条の太さ約1mm、そして約10mm下に長さ18mmと、14mmの1の条を斜位に圧痕している。裏面には指頭圧痕が残る。器厚は7mm。また、胴部には1の原体を#状に圧痕している。圧痕されている原体の長さは20mmである。（F－3・VIb層）

（117） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・雲母・繊維を含み密である。文様は1の条の絡条体と1の条の自縄自巻を横位に転がして4段施しており、その下にLRの縄文原体を人方向に回転させている。1の条の絡条体の条の太さ約1.5mm、幅6mm。軸に対して時計と逆回りに回転させている。1単位の長さ約30mmである。1の条の自縄自巻は長さ5mm、最大幅3mm。LRの縄文原体は約1.2mmと思われ人方向に回転させ横走する縄文を斜位の帯状に施している。器厚は口縁部附近で5mm、下部で8mm。（G－2・2198番）

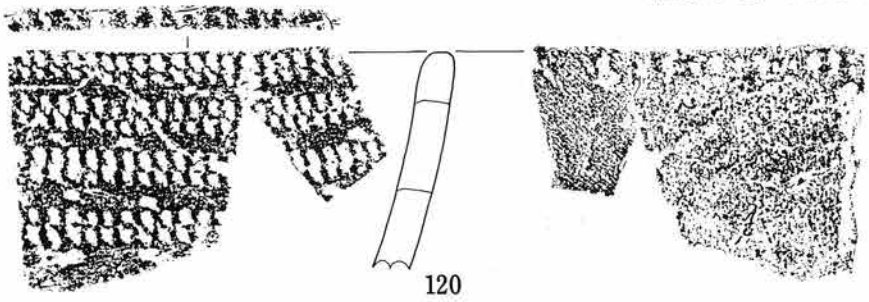
（118） 焼成は良好、胎土中に細砂を含む。幅5mmの絡条体を圧痕施しており、1の条を巻いている。1の絡条体と1の絡条体との間に、1の条の自縄自巻を施しており、口縁部と胴部の境にフの字状に自縄自巻を圧痕している。自縄自巻の圧痕の以下をLRの縄文原体を人方向にころがして、縦に走る縄文を施文している。

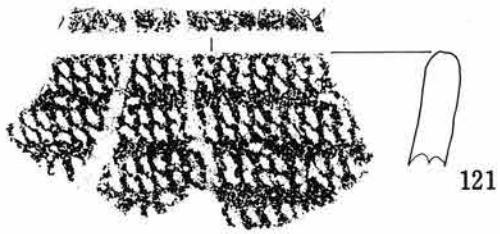
第99図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（34）



（119）　rの条の絡条体を4段横位に施し、その下にLRの原体を2本圧痕している。またその下に、絡条体圧痕を横位施文している。焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に長石・石英・細砂を含む。器厚は5mm。裏面に炭化物が付着している。（F－2・VIa層）

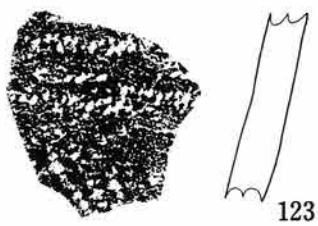
（120）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土に細砂、少量の石英を含む。器厚は口唇部で9mmで、下部で9mmである。口唇部にRLの絡条体圧痕を施し、口唇部直下より、縦位に長さ10mm、太さ3mmの絡条体圧痕を施し、圧痕と圧痕の間にRLの原体を横位に側面圧痕している。また、割り付け痕もある。内面にも、RLの絡条体を縦位に施し、口唇部にもRLの側面圧痕を施している。（F－3・Va～VIa層）



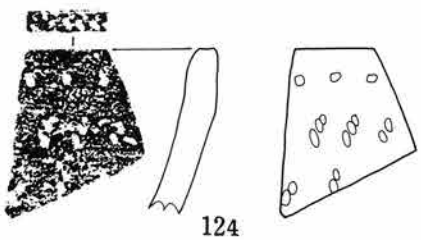


（121）　No.120に同じ。

（122）　（120、121）と同一個体である。

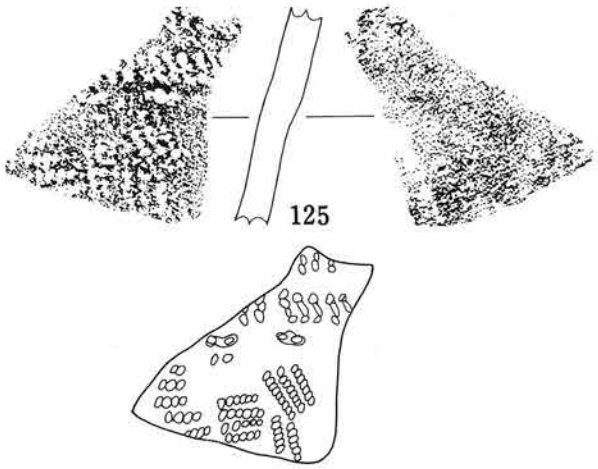


（123）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に、黒曜石・細砂を含む。文様は、絡条体圧痕（r）の原体を時計回りと逆方向に軸に巻いたものを圧痕している。原体の太さ1.5mm、幅3mm、長さ16mmの軸状のものに巻いているものと考えられる。横位の絡条体圧痕と、絡条体圧痕の間に、RLの原体で長さ11mm、太さ約2mm側面圧痕している。また、その下にRLの縄文原体を⊢方向に転がしている。器厚は10mm。（F－3・VIb層）

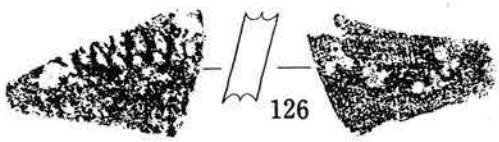


（124）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・石英・細砂を含む。口唇部にRLの縄文？　⊢かRLの側面圧痕を施している。口縁部に、縄文原体の端部圧痕を横位に施し、以下にRLの原体（9mmの長さ、太さ3mm）の縄文原体を縦位に絡条体圧痕している。器厚は口唇部で7mm、下部で9mm。（F－3・VIb層）

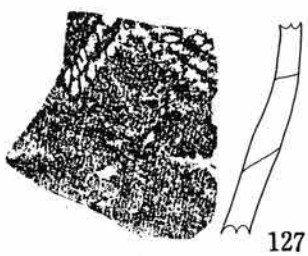
第100図　第II次調査 出土土器拓影（35）



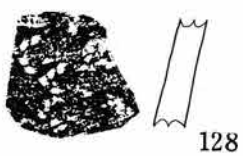
（125） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・細砂を含む。文様はRの絡条体圧痕を縦位に施し、RLの原体の側面圧痕を横位に施す。これを交互に4段行い、その下にLRの縄文を↙、↓、↘方向に施す。原体11mm、器厚は8mmである。（F－3・VIb層）



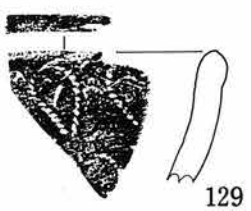
（126） （125）と同一個体。焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する、胎土中に細砂（灰色）・石英を含む。Rの絡条体か？ 器厚は8mmである。



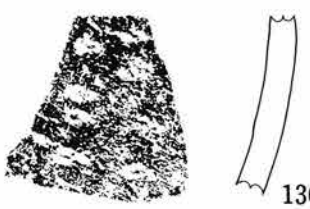
（127） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はRの縄文原体を斜位に側面圧痕している。原体の太さは約3mm。器厚は上部で5mm、下部で8mm。内面に指痕が残る。（H－3・Va層）



（128） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂・雲母を含む。Rの原体をハ状に側面圧痕している。原体の長さは8mm、太さ2mmである。器厚は8mmである。

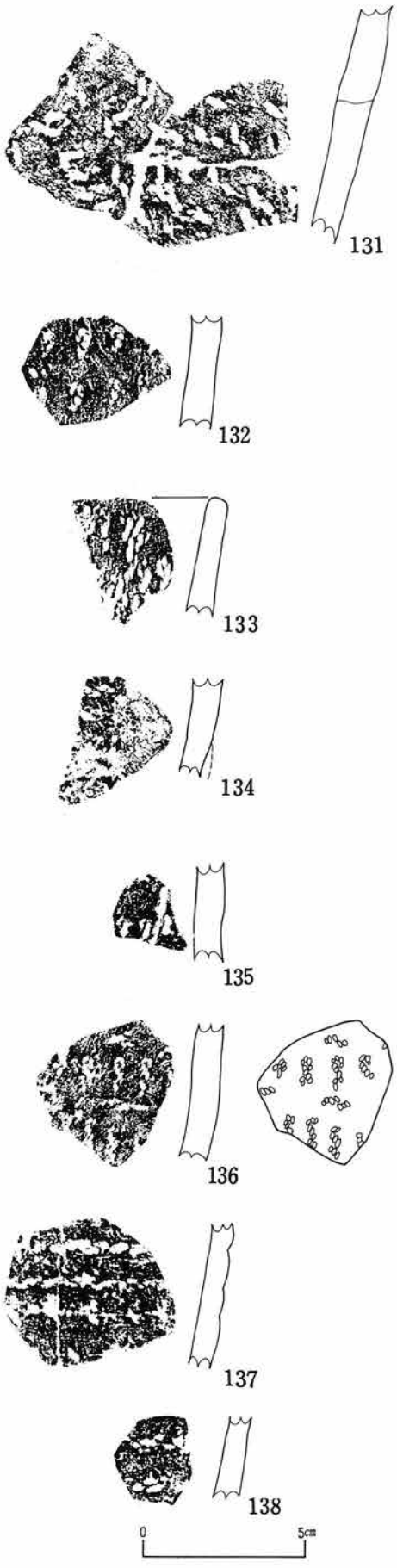


（129） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様は1段Rの原体を()状に圧痕している。器厚は口縁部で7mmである。（H－1・1075番）



（130） 焼成は良好、色調は暗茶色を呈する。胎土中に細砂・石英・繊維を含む。文様は風化しているがLRの縄文原体を∽状に側面圧痕しているか、器面に対して横位にLRの縄文原体の端部を圧痕している。内面に文様があると思われるが風化で原体は不明である。器厚は7mmである。（F－3・VIa層）

第101図　第II次調査 出土土器拓影（36）



（131） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・雲母を含む。文様はＬＲの原体を側面圧痕している。原体 11 mm、原体の太さ 4 mmである。ハ状の側面圧痕を施している。器厚は 8.5 mmである。（Ｆ－３・Ｖａ～Ⅵａ層）

（132） 焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様はＬＲの縄文原体を縦位に側面圧痕している。原体の太さ 3 mm、長さ 9 mmであり、縦位にＬＲの縄文を 2 段施した間に、ＬＲ縄文原体の側面圧痕を横位に施している。器厚は 9 mm。

（133） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様はＬＲの縄文を|→方向に僅かに回転させて、半置半転風に施文しており、その下にＬＲの原体の端部を側面圧痕している。器厚は 7 mm。（Ｈ－２・Ⅵｂ層・2205 番）

（134） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。表面が割れている。文様はＬＲの原体を横位に側面圧痕を 2 条施している。器厚は 9 mmである。（Ｈ－２・Ⅵｂ層・2107番）

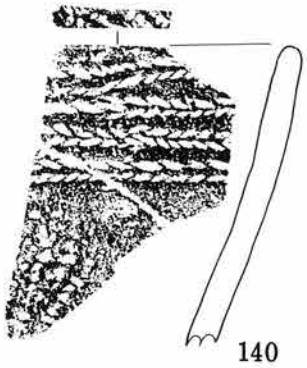
（135） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（灰色）を含む。文様はＬＲの原体を圧痕している。原体の太さは 2 mmである。器厚は、 8 mmである。

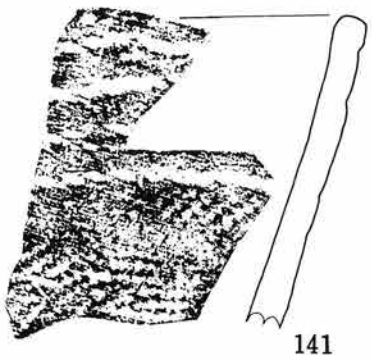
（136） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様はＲＬの縄文原体を縦位に長さ 11 mm、太さ 3 mmの側面圧痕を施し、縦位の圧痕の間にＲＬの縄文原体を器面に対して横位に圧痕している。器厚は 9 mm。（Ｈ－３・Ⅵａ層）

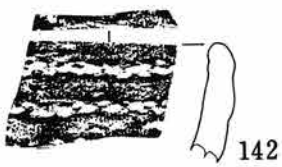
（137） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂と繊維を僅かに含む。文様は、ＲＬの縄文原体を横位に側面圧痕している。原体の太さは 3 mmであり、下にＲＬの縄文原体側面圧痕をタテに施している。10 mmの間隔を置いている。器厚は 6 mm。（Ｆ－３・Ⅵａ層）

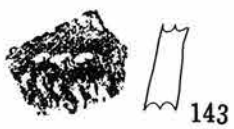
（138） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの太めの縄文原体を器面に対して横位に圧痕している。器厚は 6 ～ 8 mmである。

第102図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（37）









(139)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はLの原体を斜位に側面圧痕し、RLの縄文原体を器面に対して横位に側面圧痕を施している。RLの原体の太さは約4mmと思われる。器厚は約8mmである。

(140)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。口唇部直下よりL、RとL、R、L、RとR、L、L、Rの原体を器面に対して横位に側面圧痕し以下にRLの原体を↙方向に回転させて、縦走の縄文の文様効果をなしている。裏面、口唇直下に横位沈線を施している。器厚は口唇部で6mm、下部で7mm。口唇部には、RLの縄文を|→方向に回転している。≻状の文様効果をなすように側面圧痕を横位に8段施している。(G－2・2113番・G－3・3110番)

(141)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英・細砂を含む。文様はLRの縄文原体を器面に対して横位に4段側面圧痕を施しておりLRの原体は太さ約3mm、原体の長さ15mm～19mmである。また、側面圧痕の下にLRの縄文原体を|→と↙、↘方向に回転しており、異方向縄文を施している。口唇部にはRLの縄文原体を|→方向に施している。完形個体で口径280mm、330mmの隅丸方形、底形は110mm、125mmの隅丸方形、器高は190mmである。LRの縄文は胴部下部まで施文されるらしい。隅丸方形の深鉢形に復元されている。

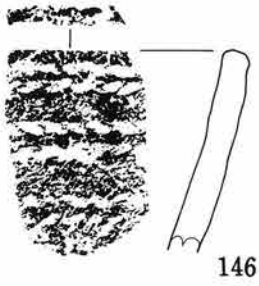
(142)は(141)に同じ

(143)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様はRLの原体を器面に対し横位に側面圧痕し、上下にRLの原体を縦位に回転している。器厚は7～8mmである。(第1号住居跡)

(144～156)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂(白色)・石英を含む。文様はLR、RL、LR、RL、LR、RLの側面圧痕を施す。口唇部にはRLの原体の縄文を施してある。器厚は口唇部で8mm。

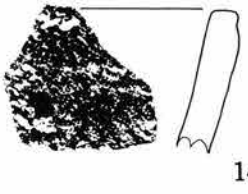
第103図　第II次調査 出土土器拓影(38)

(145) は (144) に同じ

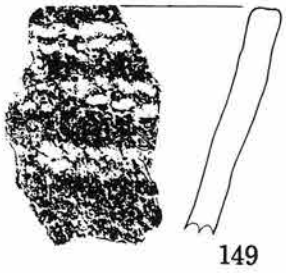


(146)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含む。ＬＲ、ＲＬ、ＬＲ、ＲＬ、ＬＲ、ＲＬの側面圧痕を施す。口唇部にはＲＬの原体の縄文を施している。器厚は口唇部で８mmである。

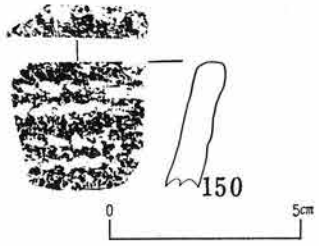
(147) は (144) に同じ



(148) は (144) に同じ

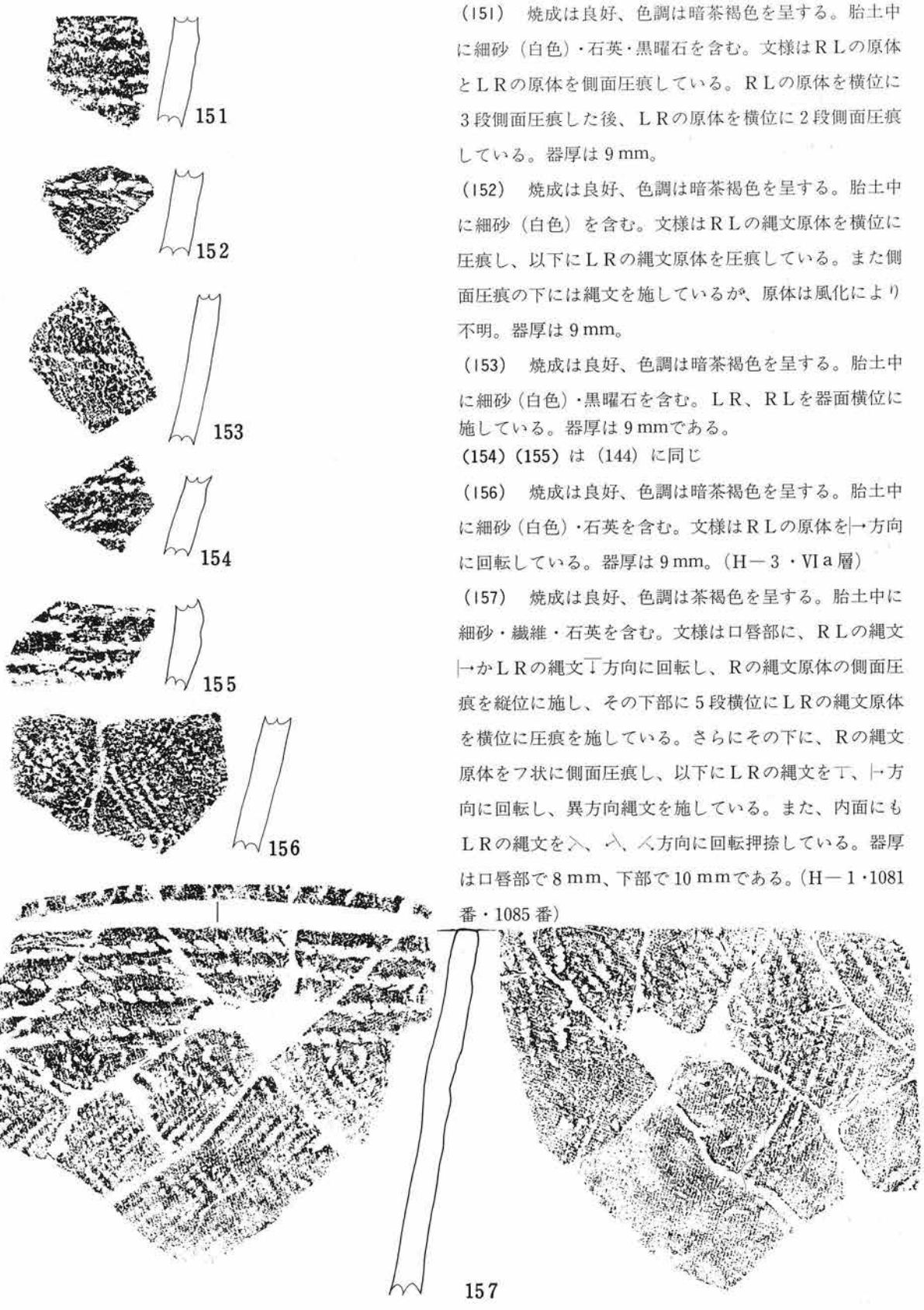


(149) は (144) に同じ



(150)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様は口唇部に施文したあとＬＲ、ＲＬ、ＬＲ、ＲＬの縄文原体による側面圧痕を施している。器厚は口唇部で７mm、以下で８mmである。

第104図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（39）



(151)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英・黒曜石を含む。文様はＲＬの原体とＬＲの原体を側面圧痕している。ＲＬの原体を横位に3段側面圧痕した後、ＬＲの原体を横位に2段側面圧痕している。器厚は9mm。

(152)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様はＲＬの縄文原体を横位に圧痕し、以下にＬＲの縄文原体を圧痕している。また側面圧痕の下には縄文を施しているが、原体は風化により不明。器厚は9mm。

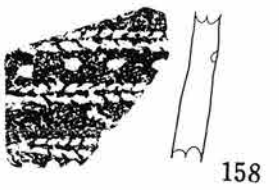
(153)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石を含む。ＬＲ、ＲＬを器面横位に施している。器厚は9mmである。

(154)(155)は（144）に同じ

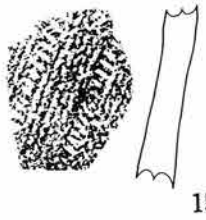
(156)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含む。文様はＲＬの原体を|→方向に回転している。器厚は9mm。（Ｈ－3・Ⅵａ層）

(157)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維・石英を含む。文様は口唇部に、ＲＬの縄文|→かＬＲの縄文↓方向に回転し、Ｒの縄文原体の側面圧痕を縦位に施し、その下部に5段横位にＬＲの縄文原体を横位に圧痕を施している。さらにその下に、Ｒの縄文原体をフ状に側面圧痕し、以下にＬＲの縄文を↓、|→方向に回転し、異方向縄文を施している。また、内面にもＬＲの縄文を↘、↓、↙方向に回転押捺している。器厚は口唇部で8mm、下部で10mmである。（Ｈ－1・1081番・1085番）

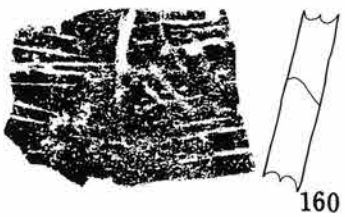
第105図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（40）



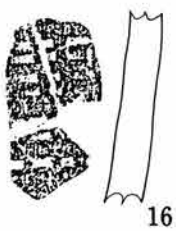
（158） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。灰色の細砂を多量に含む。文様はＲとＬの原体を交互に横位に側面圧痕し、く状の文様効果を出している。そして、１の自縄自巻の刺突を施している。器厚は７mm。



（159） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を多量に含む。文様は縄文が施されており、ＲＬの縄文を〈と〉方向に施文し、縦走りの縄文と横走りの縄文を作っている。器厚は８ｍｍで異方向縄文である。（Ｆ－３・Ⅴａ～Ⅵａ層）

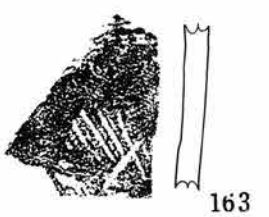


（160） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。文様は幅３mmの竹管状工具で平行沈線を施している。地文があるかどうかは不明である。器厚は９～10 mmである。（Ｆ－３・Ⅵａ層）

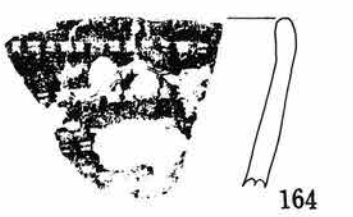


（161） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は半截竹管状工具により竹管文を施している。器厚は９mm。

（162） 焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様は、半截竹管文を施している。器厚は４mmである。

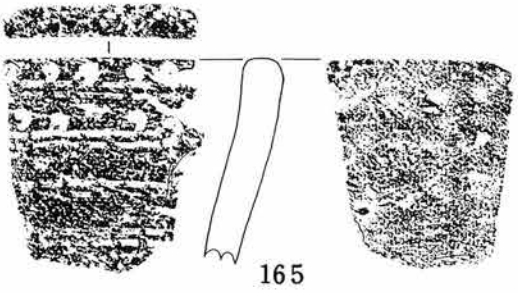


（163） 焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は上部に半截竹管による押引き文を施し、Ｒの縄文原体を〈方向に回転している。器厚は５mm。（Ｈ－３・Ⅵａ層）

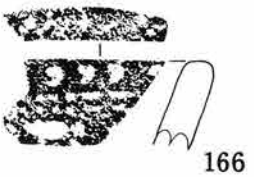


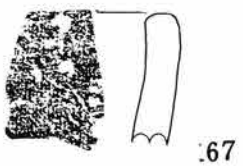
（164） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様は竹管文と１の条の自縄自巻を横位に圧痕している。器厚は口縁部で６mm、下部で６mmである。（Ｈ－３・Ⅵａ層）

第106図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（41）

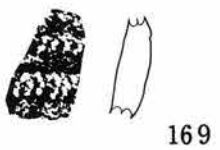


（165～167）　焼成は良好、色調暗茶褐色、胎土に細砂、石英を含む、文様はＬＲの原体端部の圧痕と、竹管文を施している。口唇部にはＬＲの原体を回転している。器厚は８ｍｍである。内面には指痕が施されている。



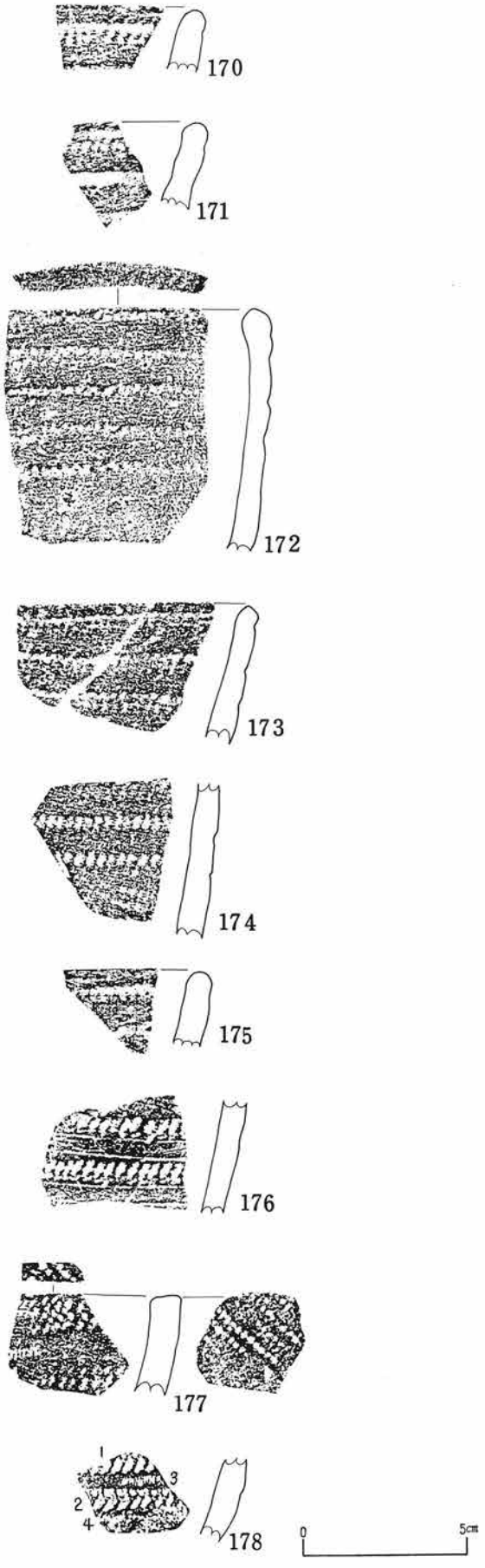


（168）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様は器表面が風化しており不明な点もあるが、口唇部にＬＲの縄文原体を|→方向に施し、口唇直下からＬＲの縄文原体を横位に３条圧痕を施している。半置半転とも考えられる。器厚は口唇部で６ｍｍ、下部で５ｍｍである。



（169）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体の半置半転と半置半転の間に自縄自巻を横位に圧痕している。器厚は７ｍｍである。

第107図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（42）



（170～175）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。文様はＬＲの縄文原体を半置半転している。また、半置半転を区画するためＬＲの縄文原体を器面に対して横位に圧痕しながら縦位に半置半転を５段施しているか、自縄自巻を５段横位圧痕しており、以下にＬＲの縄文原体を〉と〈、⊢方向に回転し異方向縄文を施している。口唇部にはＬＲの縄文原体を⊢方向に回転し、内面にも風化しているものの一部に縄文が施されている。器厚は８mm。裏面に指痕が残る。完形復元されており、口縁が円形に近い隅丸方形の深鉢形である。底部は隅丸方形である。口縁は口径300 mm、器高225 mm、底部は径125 mm～130 mmを測る。

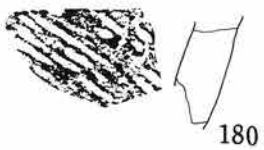
（176）　焼成は良好、色調は暗茶褐色、胎土中に長石・石英を含む。文様はＬＲの縄文原体を半置半転している。また、半置半転を区画するため沈線を施している。文様施文の順序としては、横位沈線⇨半置半転である。器厚は８㎜、内面に指痕が施されている。

（177）　焼成は良好、色調は暗褐色、裏面も暗褐色を呈する。胎土中に長石・石英を含む。ＬＲの半置半転、ＬＲの原体を横位に口唇部直下より半置半転を施し、ＬＲの半置半転と半置半転の間に１の条の自縄自巻を横位に圧痕している。口唇部にはＲＬの縄文を施し、裏面部にはＲＬの原体を⊢方向に施している。器厚は８mm。

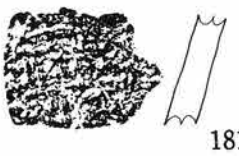
（178）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。ＬＲの縄文原体の端部を、横位に回転している半置半転である。２はＬＲの縄文原体を半置半転しており、ループ文状になっている。３は、１の条の自縄自巻で、横位に圧痕している。長さは12 mm、幅は２mm。器厚は８mm。

第108図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（43）

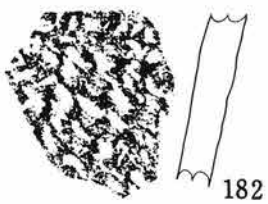
(179)　焼成は良好、色調は黄茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様はLの縄文原体を↓方向に回転していると思われる。器厚は7mmである。(H－3・Va層)



(180)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。文様はLの縄文を↓方向に回転している。接合痕がある。器厚は12mmである。(第1号住居跡)

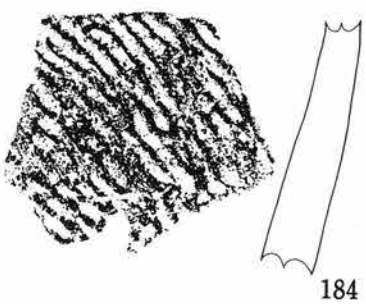


(181)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・長石を含む。文様はLの原体を↗方向に回転している。内面には、指痕と爪痕がついている。器厚は8mmである。

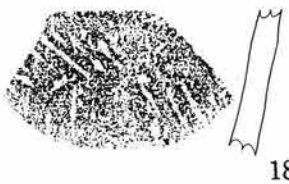


(182)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様はLの太い撚りの原体(径約7mm)を↗方向に回転を施しているものと考えられる。器厚は9mmである。原体の繊維自体がかたく、荒く撚っているものと思われる。器厚は9mmである。(G－3・VIa層)

(183)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。Lの原体を↗方向と、→方向に回転させている。器厚は5mmである。

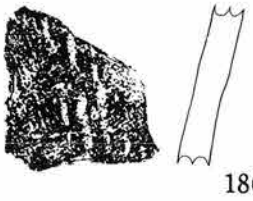


(184)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。器厚は10～13mm。Rの原体を→にころがしている。原体の太さがかなり太い。

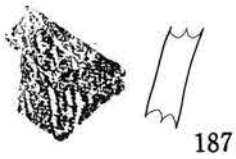


(185)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土に雲母・石英・細砂を含む。文様はRの縄文原体を→方向↗方向に回転している。器厚は6mmである。(H－1・VIb層)

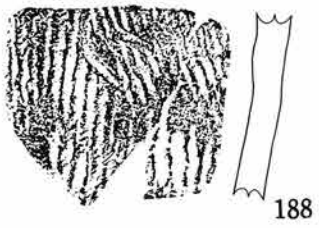
第109図　第II次調査 出土土器拓影(44)



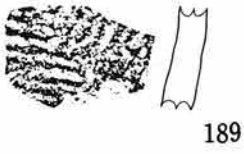
（186）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様はRの縄文を↘方向に回転している。（G－2・3・VIb層）



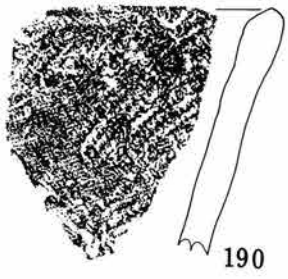
（187）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はRの原体を↙方向に回転している。器厚は7mmである。（H－1・VIb層）



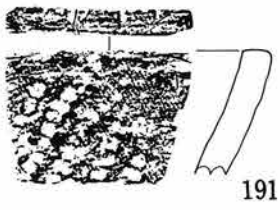
（188）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様はRの原体を↙、↘方向に回転している。器厚は9mmである。（F－3・Va～VIa層）



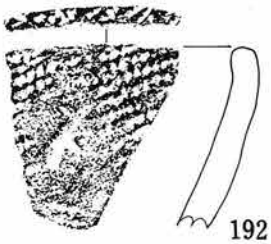
（189）　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はRの原体を↘方向に回転し、Lの原体を|→方向に回転し羽状縄文にしている。器厚は7.5mm。



（190）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様はLRの縄文原体を|→方向に回転している。器内面は削られている。器厚は8～9mmである。

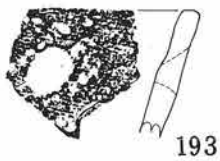


（191）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。口唇部に擦痕を施しており、口縁にLRの太い原体の縄文を|→方向に回転している。器厚は口唇で7mm。下部で8mm。（G－1・Va層）

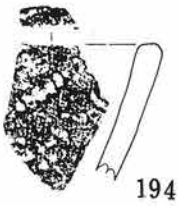


（192）　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に僅かな繊維・僅かな雲母等が混入している。LRの縄文原体を|→方向に施している。口唇部にも、LRの縄文が施されている。器厚は口唇部で7mm、下部で7mm。裏面部に擦痕が施されている。（G－3・3110番）

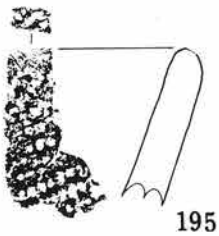
第110図　第II次調査 出土土器拓影（45）



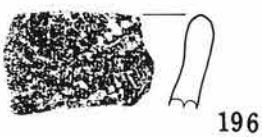
(193)　焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石・石英を含む。文様はＬＲの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は口唇部で6 mm、下部で6 mm。（Ｈ－２・2086番）



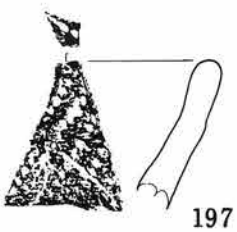
(194)　焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英・雲母を含む。文様はＬＲの原体を|→方向に僅かに回転あるいは圧痕している。口唇部にＬＲの原体を施している。器厚は口唇部で7 mm、下部で6 mm。（Ｅ－３・Ⅵａ層）



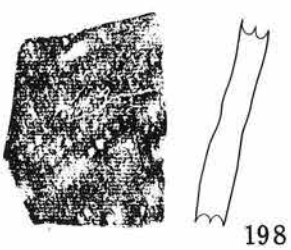
(195)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を|→、←方向に回転している。口唇部にもＬＲの縄文を|→方向に回転させている。器厚は口唇で8 mm、下部で11 mmである。（Ｆ－３・Ⅵｂ層）



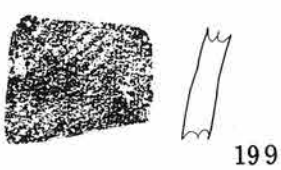
(196)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石を含む。口唇部直下よりＬＲの縄文を施している。器厚は口唇部で7 mm。（Ｇ－２・Ⅵｂ層）



(197)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様は口縁部にＬＲを|→に回転させた縄文を施している。器厚は口唇部で6 mm、以下は9 mm。口唇部も縄文を施している。（Ａ－３・Ⅶ層）



(198)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲを|→方向に回転している。（弱く回転している）表面に指痕が残る。また、繊維が見られる。器厚は9 mm。（Ｆ－３・Ⅵｂ層）



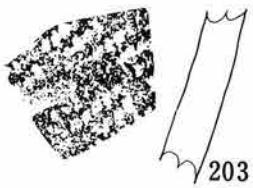
(199)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・雲母を含む。文様は風化しているため不明な点が多いが、ＬＲの縄文を|→方向に回転しているものと思われる。器厚は6 mm。（Ｆ－２・Ⅵａ層）

第111図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（46）

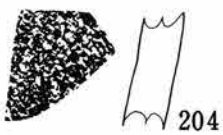
（200） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様は器面が風化しており不明であるが、ＬＲの縄文を施している。０段多条かも知れない。器厚は 10 mmである。

（201） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に白色の細砂を含む。文様はＬＲの縄文をかるく回転しているものと思われる。

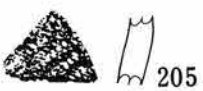
（202） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を〈方向に回転している。器厚は 9 mm。



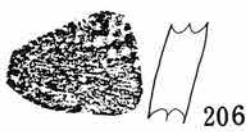
（203） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英をわずかに含む。文様はＬＲの原体を|→方向に回転しており、下段も|→方向に回転している。器厚は 9 mmである。



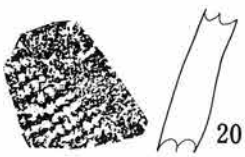
（204） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英・黒曜石を含む。文様はＬＲの縄文原体を|→方向に回転させている。器厚は 10 mmである。



（205） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は 7 mmである。

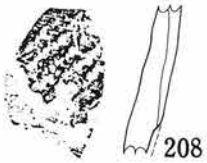


（206） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＬＲの原体を|→方向に回転している。内面には指痕が施されている。器厚は 10 mmである。

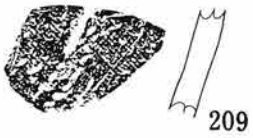


（207） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・細砂を含む。文様はＬＲの原体を|→方向に回転させ施している。器厚は 8 mm～11 mmである。

第112図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（47）



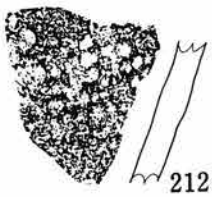
（208） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様はＬＲの縄文原体を|→方向に回転している。接合痕が断面に見える。器厚は７～８mmである。



（209） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文種はＬＲの縄文を|→方向に回転している。器厚は６mm。

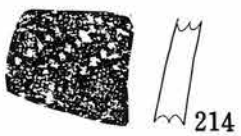
（210） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を|→に回転している。器厚は８mmである。

（211） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・細砂・長石を含む。文様はＬＲの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は６mmである。



（212） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様はＬＲの原体を|→方向に回転している。器厚は６mm。

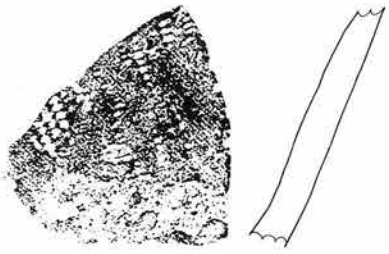
（213） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・細砂・繊維を含む。文様は器表面が風化しており不明であるが、ＬＲの縄文か？　器厚は８mmである。



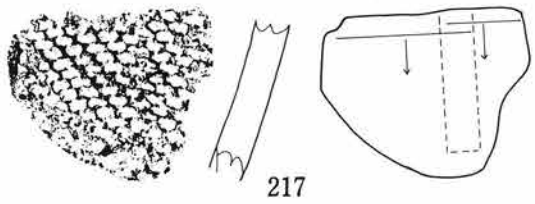
（214） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は縄文を施しているが風化している。ＬＲの |← 方向の回転？　器厚は８mm。

（215） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様はＬＲの縄文を|→方向に回転させている。器厚は８mmである。

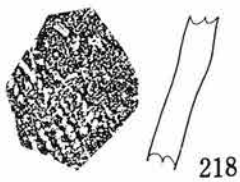
第113図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（48）



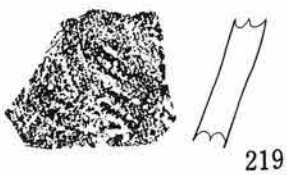
（216） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＬＲの原体で 11 mmである。器厚は 10～ 7 mmである。底部に近い。



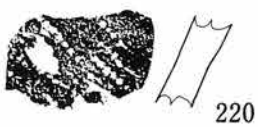
（217） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。ＬＲの原体を器面に対して↓方向において施文している。器厚は 9 mm。原体は約 35 mm位いで施文のダブリがある。



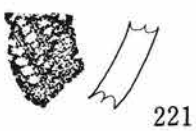
（218） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を↓方向に回転させている。施文されている原体の長さは 14 mmと思われる。器厚は 8 mm。



（219） 焼成は良好、色調は黄茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＬＲの縄文原体を↓方向に回転している。器厚は 8 mmである。

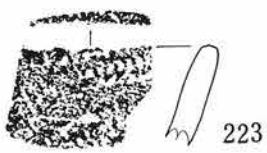


（220） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・細砂を含みわずかながら繊維も含む。文様はＬＲの縄文原体を↓方向に回転している。器厚は 9 mmである。



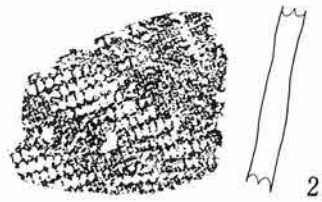
（221） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を↓方向に回転している。器厚は 7 mmである。

（222） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を↓の方向に回転している。器厚は 9 mmである。

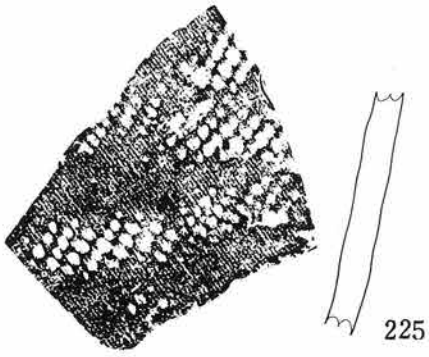


（223） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英が混ざっている。繊維も含む。文様はＬＲの縄文原体を↙方向に回転している。器厚は下部で 7 mmである。口唇部にも縄文が施文されている。

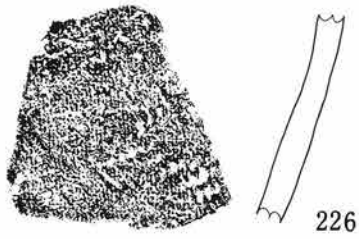
第114図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（49）



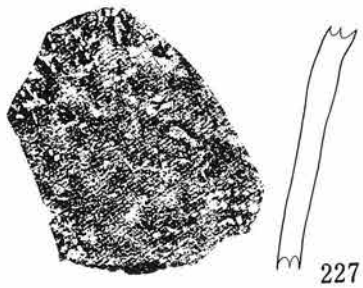
（224） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を↘方向に回転させている。原体の長さは 20 mm。器厚は 7 mm。内面に指痕が残る。縄文を帯状に施文している。



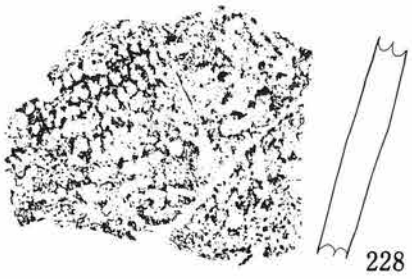
（225） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（灰色）を含む。文様は約 19 mm。ＬＲの縄文原体を↙方向に回転させている。裏面には指痕が残る。器厚は 8 mm。縄文を帯状に施文している。



（226） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様は風化しており不明であるが、ＬＲの原体を↙方向に回転しているらしい。器厚は 6 mm。



（227） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を↙方向に回転させている。内面には指痕が目立つ。器厚は 5 mm。

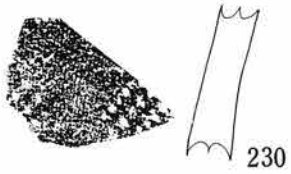


（228） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化により不明であるがＬＲの原体を↙方向に回転している。器厚は 8 mm。

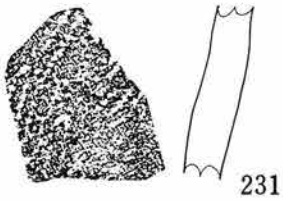
0 5cm

第115図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（50）

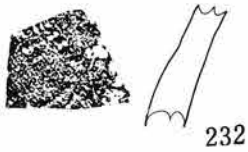
（229） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英をわずかに含む。文様はＬＲの縄文原体を↘方向に回転している。器厚は７mmである。



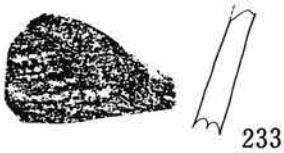
（230） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は10 mmである。



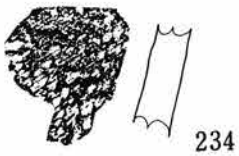
（231） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。ＬＲの縄文原体を|→と↘方向に回転している。器厚は９mm。



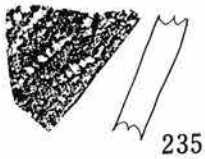
（232） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を人方向に回転している。器厚は８mmである。



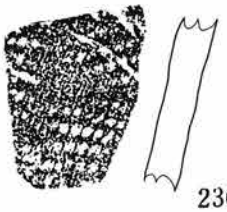
（233） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に雲母・石英をわずかに含む。文様はＬＲの縄文原体を人方向に回転をしている。器厚は７～８mmである。



（234） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を人方向に回転している。裏面に横位の擦痕がある。器厚は７～８mである。

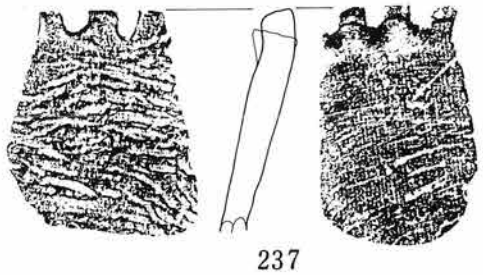


（235） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂、長石を含む。文様はＬＲの縄文原体を人方向に回転している。器厚は８mmである。



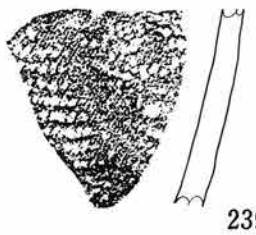
（236） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含み、僅かに繊維を含む。文様はＬＲの原体を↓方向に回転させている。内面にもＬＲの縄文を↓方向に回転している。器厚は９mm。

第116図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（51）



(237)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。口唇部に1の条？　の自縄自巻を強く圧痕してあたかも刻みを入れたように施してあり、口縁部にはL$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の縄文原体を↖と↘方向に回転している。横位縄文を施している。内面にはヘラ状のもので右⇨左へ研磨している。器厚は6～7mm、以下では7mm。

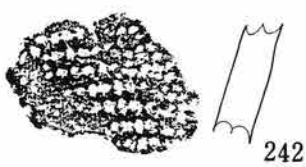
(238)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維・黒曜石を含む。文様は風化しているが、ＬＲの縄文を施しているものと思われる。器厚は口唇部で4mm、下部で8mm。



(239)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はＬＲを↖方向に回転させている。器厚は6～7mm。

(240)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む、折り返し口縁になっており、上部折り返し部はＬＲの縄文原体を↖方向に回転している。口縁下部は不明。器厚は折り返し口縁部で11mm、下部で9mmである。

(241)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を↖方向に転回して横走する縄文を作っている。器厚は8mm。

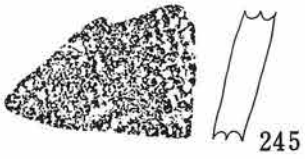


(242)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体の縄文を↖方向に回転させている。器厚は11mmである。

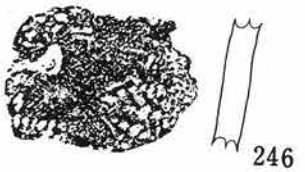
(243)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含んでいる。文様はＬＲの縄文原体を↖方向に回転し、ＬＲの縄文原体を↗方向に回転している。

第117図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（52）

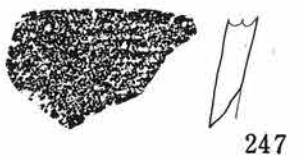
（244） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を↘方向に回転している。器厚は８mmである。



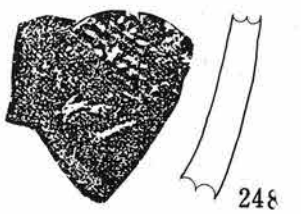
（245） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は器面が風化しているが、ＬＲの縄文を施文していると思われる。器厚は８mmである。



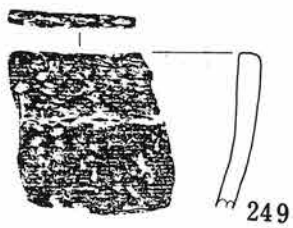
（246） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含んでいる。文様はＬＲの縄文原体を↙と↓方向に回転している。器厚は６mmである。



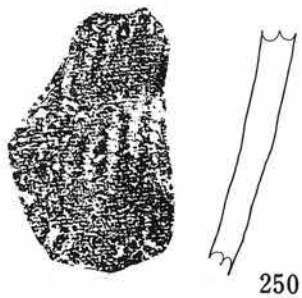
（247） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。文様はＬＲの縄文を↙方向に回転していると思われる。器厚は７mmである。



（248） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は縄文のＬＲの縄文原体を↓回転している。器厚は７～10 mmである。

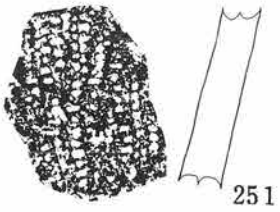


（249） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＬＲの縄文原体を↘方向に回転を施している。口唇部にも縄の圧痕を施している。器形は口唇部で５mmである。



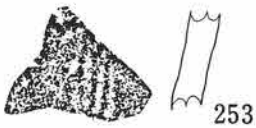
（250） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化しており不明であるが、文様はＬＲの縄文原体を↘方向に回転している。器厚は９mmである。

第118図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（53）

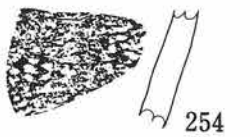


（251） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。文様はＬＲの縄文原体を↗方向に回転している。器厚は11～12 mmである。

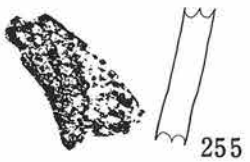
（252） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を↙の方向に回転している。器厚は8 mmである。



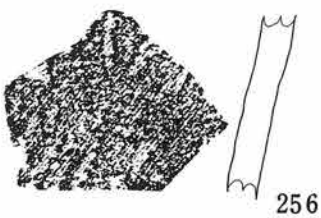
（253） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様はＬＲの原体を↗方向に回転させている。器厚は8 mmである。



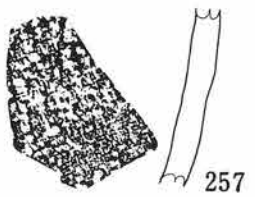
（254） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に雲母・黒曜石・細砂を含む。黒曜石は約2 mm大のものが表面裏面にある。文様はＬＲの縄文原体を↗方向に回転している。器厚は5～7 mmである。裏面に指痕がついている。



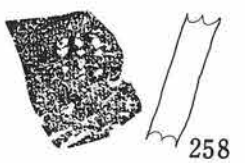
（255） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの原体を回転していると思われる。器厚は8 mmである。



（256） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石を含む。文様は風化しているので原体等は不明であるが、縄文を施している。器厚は9 mm。



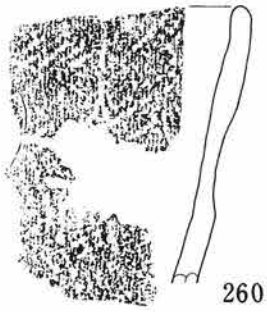
（257） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・雲母を含む。文様はＬＲの縄文原体を↗方向に回転している。器厚は7 mmである。



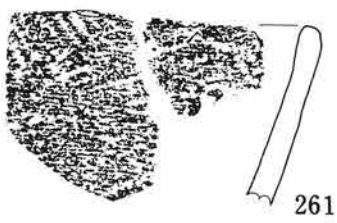
（258） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を↗方向に回転している。器厚は8 mmである。

第119図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（54）

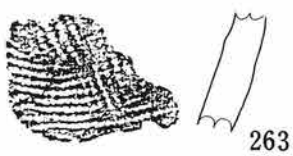
（259） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石・繊維を含む。文様はＬＲの縄文を↓方向と→方向に回転させている。器厚は７mmである。



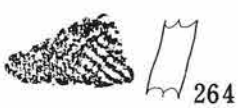
（260、261） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様は土器表面が風化しているが、ＬＲの縄文原体を→と↓と↗方向に回転しているものと思われる。異方向縄文を施している。器厚は７mmである。



（262） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様は風化しているがＬＲの縄文原体を↓と←方向に回転して異方向縄文を作っていると思われる。器厚は７mmである。



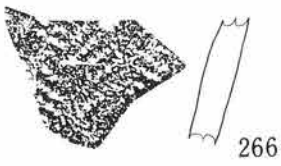
（263） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様はＬＲの原体を↖、↗方向に回転している。異方向縄文を施している。器厚は８～10mmである。



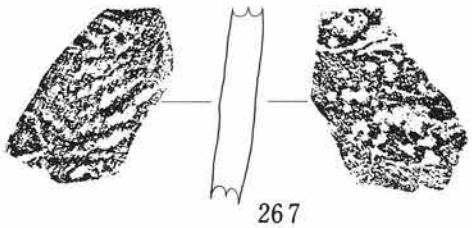
（264） 焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を←方向と↓方向に回転している。器厚は９mmである。

（265） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文を←方向に回転したり、↓方向に回転していると思われる。器厚は10mmである。

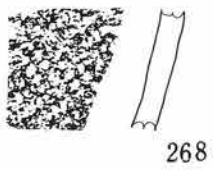
第120図　第II次調査 出土土器拓影（55）



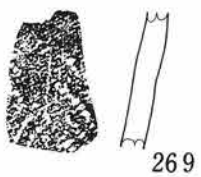
（266） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（灰色）を含む。文様は単節の縄文を施しているが風化により原体は不明である。器厚は7mmである。



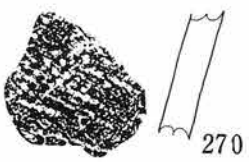
（267） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に繊維・石英を含む。文様は縄文を施しているが、風化により原体不明であるが、ＬＲの縄文を↖と↗方向に回転か？　器厚は7mm。



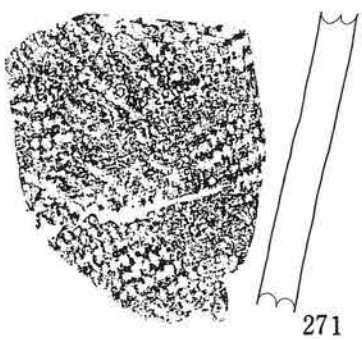
（268） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・雲母を含む。文様はＬＲ原体を|→方向に回転し、|→、↧方向に施す。器厚は6mmである。



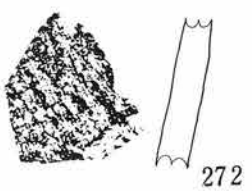
（269） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体で|→、↧方向に回転している。器厚は8mmである。



（270） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含む。文様はＬＲの縄文を|→方向と↧方向に回転し異方向縄文を施している。器厚は8mm。

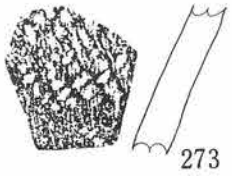


（271） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様はＬＲの原体を↖と|→と↧方向に回転している。原体の長さは16mmである。器厚は10mmである。

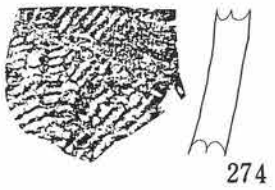


（272） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。文様はＬＲの原体を↖、↧、|→方向に回転している。器厚は8.5mm。

第121図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（56）

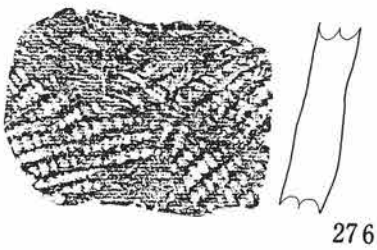


(273)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英・細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を→、↓方向に回転している。異方向縄文を施す。器厚は８mmである。

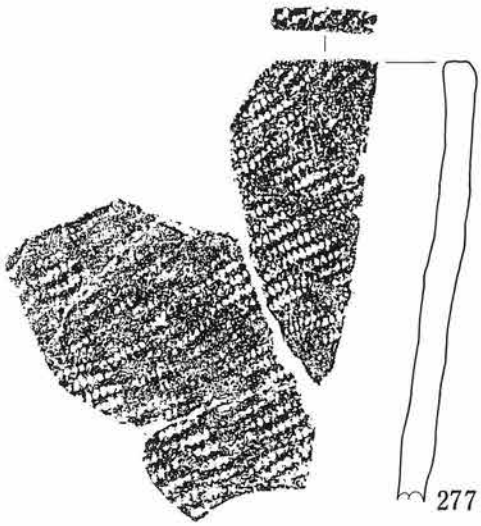


(274)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はＬの縄文を→方向と↘方向に回転している。器厚は10mm。

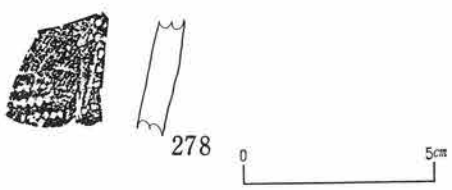
(275)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様はＬＲの縄文を↙方向、→方向に回転している。器厚は９mmである。



(276)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を僅かに含む。文様はＬＲの原体を→、↙、→方向に回転させている。器厚は10mm。



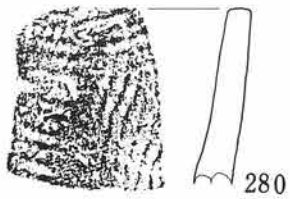
(277)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂石英を含む。器厚は７mmである。口唇部にＬＲの縄文を→と↙方向に施しており、裏面には指痕を施す。



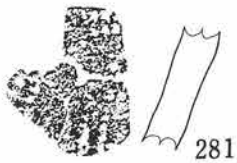
(278)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＬＲの縄文原体を↙と→方向に回転している。器厚は７mmである。

第122図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（57）

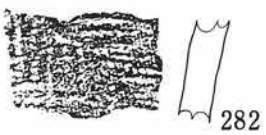
(279)　焼成良好、色調暗茶褐色で胎土に細砂を含む、文様はＬＲの縄文を↗と↘方向に回転して、異方向縄文を施している。



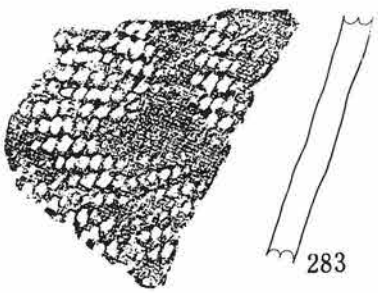
(280)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様は土器の表面が風化しているが、おそらくＬＲ？　の縄文を施しているものと思われる。↓と↳と↙の方向の回転である。口唇部で6 mm、下部で10 mm。



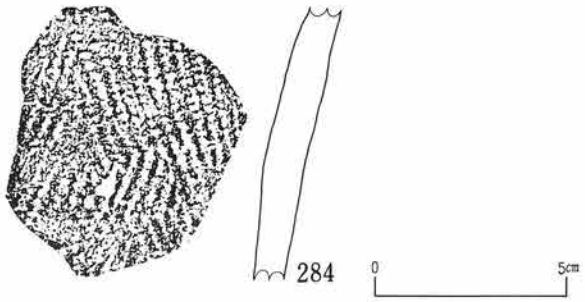
(281)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多く含む。文様はＬＲの縄文原体を↳と↖方向とに回転を施している。器厚は11 mmである。



(282)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は、ＬＲの原体を↙方向に回転したり↘方向に回転している。器厚は9 mmである。

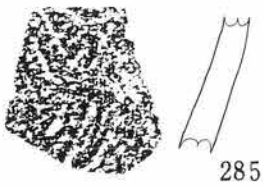


(283)　焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂（灰色）を含む。文様はＬＲの原体を↙、↳方向に回転させている。原体の長さは約17 mmと思われる。器厚は7 mm。



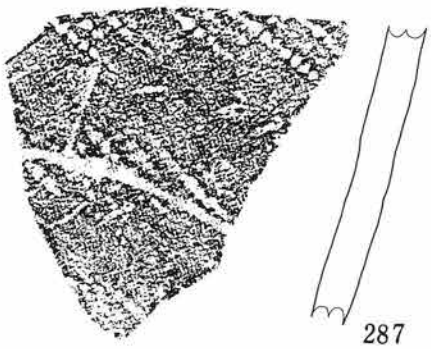
(284)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。ＬＲの縄文を↘方向に回転させ、また、↙方向に回転させている。器厚は9 mm。

第123図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（58）

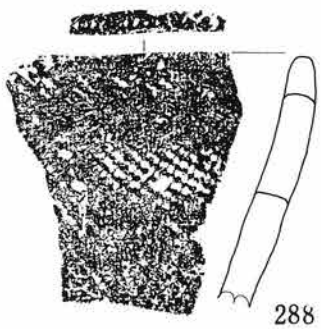


（285） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様は風化しているがＬＲの原体を→と↓方向に回転を施している。器厚は７～８mmである。

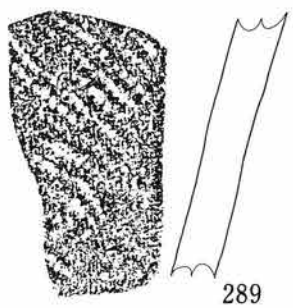
（286） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂(灰色)・石英を含む。文様はＲＬを|→方向に回転し、回転ののち縦位にスリ消している。器厚は10 mmである。



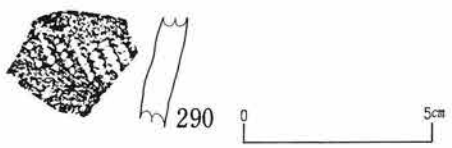
（287） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬを|→方向に回転している。器厚は10 mm。



（288） 焼成良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含み、僅かながら石英も含む。口唇部に絡条体または自縄自巻を圧痕しており、口唇部直下に斜縄文を（ＲＬ）施したのち磨消している。口唇部より25 mm下にＲＬの縄文を|→方向に12 mm施している。断面をみると幅18 mmの粘土紐の接合痕がみえる。器厚は口唇部で７mm、下部で９mm。



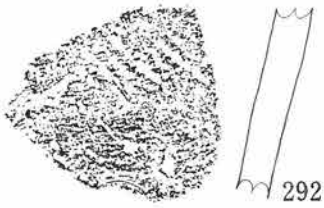
（289） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬを|→方向に回転しており、下段はＲＬを|→方向に回転している。器厚は12 mm、下部が15 mmである。



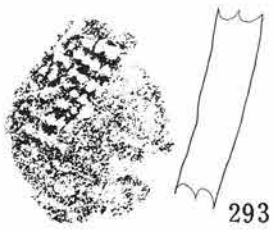
（290） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に、細砂・石英を含む。文様はＲＬの原体を|→方向に回転している。器厚は７mm。

第124図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（59）

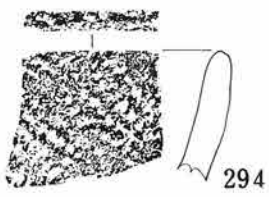
(291) 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。文様は表面が風化しているが、ＲＬの縄文を→方向に回転しているものと思われる。器厚は 8 mm。



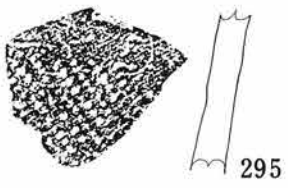
(292) 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（灰色）・雲母を含む。文様はＲＬの縄文を→方向に回転している。器厚は 8 mmである。



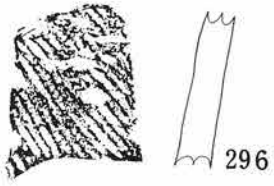
(293) 焼成は甘い、色調は黄灰色を呈する。胎土中に細砂を含む。器面に対して縦位にＲＬの原体をおき|→にころがしている。器厚は 12 mm。



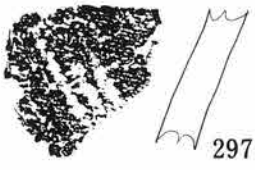
(294) 焼成良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に、石英・細砂を含む。文様は口唇部にＲＬの縄文原体を|→に施文し、口唇部直下にもＲＬの縄文を|→に施している。



(295) 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬの原体を|→方向に回転している。器厚は 9 mmである。

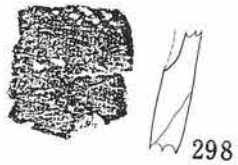


(296) 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬの縄文を施している。器厚は 8 ～ 9 mmである。

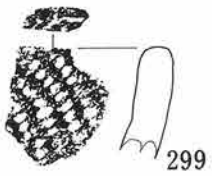


(297) 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含む。文様は風化しているが、ＲＬの縄文原体を|→方向に回転しているものと思われる。器厚は 10 mm。

第125図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（60）

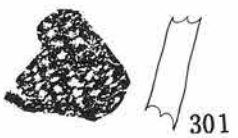


（298） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの原体を→方向に回転している。器厚は 7 mmである。

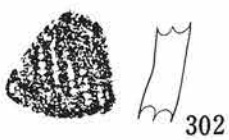


（299） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含んでいる。文様は口唇部に縄文が施されているが不明。口唇直下にはＲＬの原体を|→方向に回転している。器厚は口唇部で 7 mmである。下部では 9 mmである。

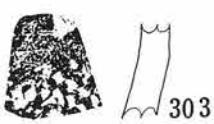
（300） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様はＲＬの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は 8 mm。



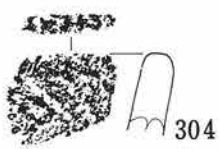
（301） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を＜方向に回転している。器厚は 8 mmである。



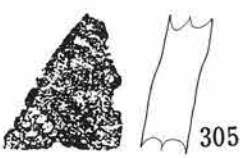
（302） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬを|→方向に回転している。原体の長さは約 10 mmと思われる。



（303） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬの縄文を施している。器厚は 8 mmである。

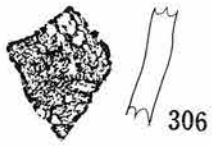


（304） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。口唇部に縄文を施し、 文様は縄文ＲＬ？ を施している。器厚は口唇部 8 mm、下部で 10 mmである。

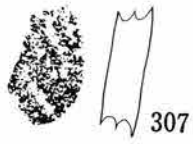


（305） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を|→方向に回転させている。器厚は 11 mmである。

第126図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（61）

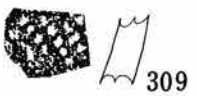


（306） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を|→方向に回転している。器厚は６～７mmである。

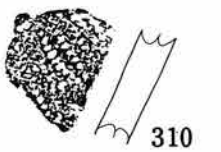


（307） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様はＲＬの原体を回転させている。器厚は９mmである。

（308） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を回転させている。表面に繊維状の圧痕がある。器厚は８mmである。

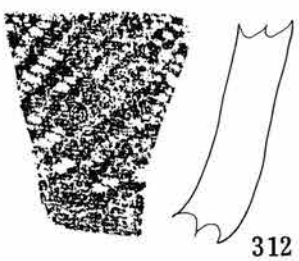


（309） 焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの原体を|→方向に回転している。器厚は７mmである。

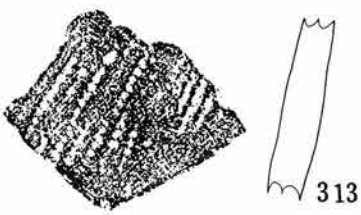


（310） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの原体を|→方向に回転している。器厚は８mmである。

（311） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を↓方向|→に施している。器厚は７mmである。



（312） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様はＲＬの縄文原体を器面に対して↓方向に回転している。底部であり、器厚は14 mmである。

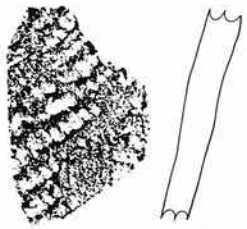


（313） 焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に繊維・黒曜石・細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を↓の方向に回転している。器厚は7.5 mm、下部で９mm。

第127図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（62）

314

（314） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は表面が風化しており不明な点が多いが、ＲＬの原体を↓方向に回転していると考えられる。器厚は 12 mmである。



315

（315） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬの原体を↓方向に回転している。器厚は 8 ～11 mmである。

316

（316） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。口唇部で文様は、ＲＬの原体を↓方向に回転させている。器厚は口唇部で 5 mm、下部で 7 mmである。

317

（317） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。文様は↙方向に原体を回転して縦走の縄文を施文している。

318

（318） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に、細砂・石英を含む。文様はＲＬの原体を↙方向に回転している。器厚は 11 mmである。

319

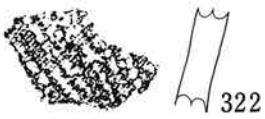
（319） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・雲母等を含む。文様はＲＬの縄文を↙方向に回転している。器厚は 9 mm。

320

（320） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。ＲＬの縄文原体を↙方向に施している。器厚は 12 mmである。

第128図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（63）

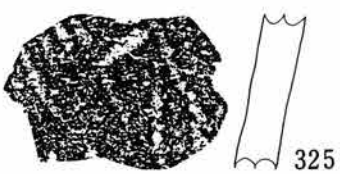
（321） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・長石を含む。文様はＲＬの縄文原体を↖方向に回転させ下部は↓方向に同一原体を施している。器厚は５mmである。



（322） 焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様はＲＬの縄文原体を⊢方向に回転している。器厚は８mm。

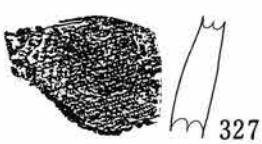
（323） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化により不明であるがＲＬ？ 縄文が施されていると考えられる。器厚は９mmである。

（324） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石・石英を含む。文様はＲＬの縄文原体を⊢方向、↙方向、↙方向に回転している。器厚は11mmである。



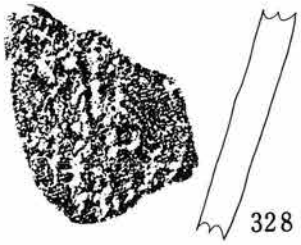
（325） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を↙方向に回転している。器厚は11 mm。

（326） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。ＲＬの縄文原体を↙方向に回転している。また、ＲＬを↗方向に回転している。器厚は９mm。

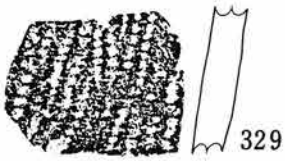


（327） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含み、僅かに繊維を含む。文様はＲＬを↙方向に回転している。器厚は５～７mm。

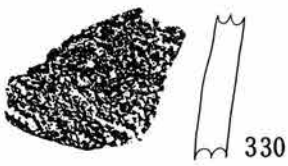
第129図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（64）



（328） 焼成は良、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂、石英を含む。文様はＲＬの原体を↖方向に回転している。器厚は８mm。

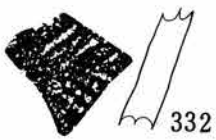


（329） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土に雲母・細砂（白色）を多量に含む。文様はＲＬの縄文原体を↑方向に回転し縦走の縄文を施している。器厚は８mmである。

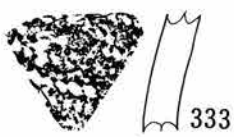


（330） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの原体を├→に回転している。器厚は８mmである。

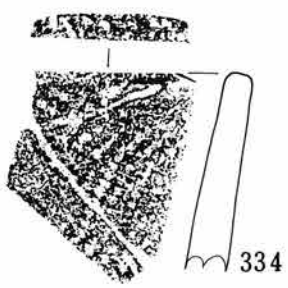
（331） 焼成は良好、色調は黄茶褐色を呈する。胎土中に繊維・細砂を含む。文様は土器表面が風化しているが、ＲＬの縄文原体を↗方向に回転していると思われる。器厚は９mmである。



（332） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含んでいる。文様は風化しているがＲＬの原体を├→方向に回転し、↓方向に回転している。器厚は８mmである。

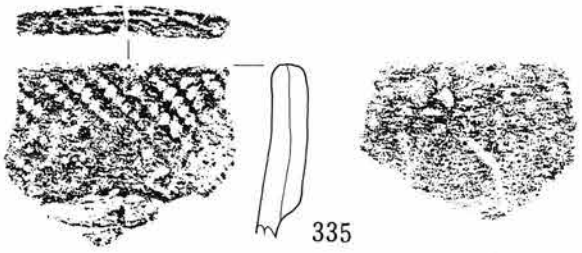


（333） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様はＲＬの原体を↗方向に回転を施している。器厚は９mmである。

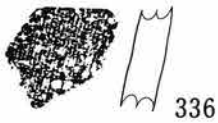


（334） (338)と同一個体

第130図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（65）

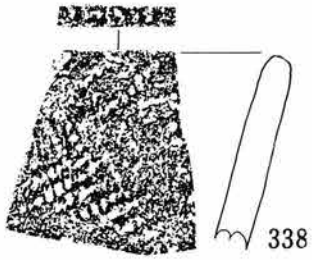


（335） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂･石英を含む。口唇部に文様を施しているが不明。口縁部を複合口縁にしており、幅36㎜の複合口縁帯をつくる。複合口縁部には、長さ約21㎜のＲＬの縄文を|→に回転しており、また、１部にＲＬ↾の縄文？も施されている。器厚は複合部で９㎜、下部で５㎜である。

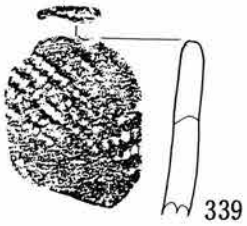


（336） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石を含む。文様はＲＬの原体↗方向に回転している。器厚は８mm。

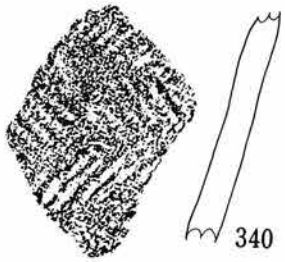
（337） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を↗方向に回転している。器厚は10 mmである。



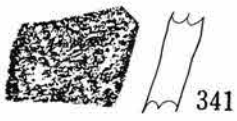
（338） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石・雲母を含む。口唇部にはＲＬの原体による縄文か？　口唇部をＬＲの原体を↾方向に回転させている。原体の長さ約17 mmと思われる。器厚は口唇部で９mm、下部で10 mm。



（339） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。器厚は口唇部で６mm、下部で７mm。口唇部直下に撫痕があり、器面調整をしており、ＲＬの原体を|→方向に25 mm施しており、ＲＬの原体を↾方向にころがしている。口唇部にもＲＬの原体を施文している。裏面には指状の圧痕がある。裏面と表面に、毛または繊維状の跡がある。

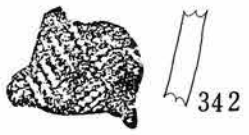


（340） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英、繊維、細砂を含む。文様は羽状に施している。風化により原体は不明であるが、ＲＬの縄文を用いている。器厚は７mm。

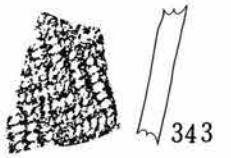


（341） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様は縄文を施しているが風化により原体は不明であるがＲＬの縄文原体を|→、↾？方向に施文していると思われる。器厚は９mmである。

第131図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（66）

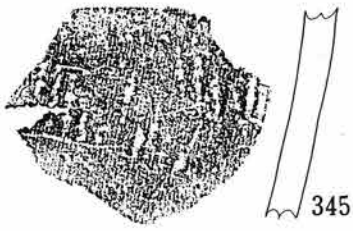


（342） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの原体を→方向に回転し、同一原体で↓方向に回転して異方向縄文を施している。

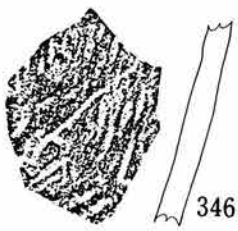


（343） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・石英を含む。文様はＲＬの原体を→と↓方向に回転している。器厚は6mmである。

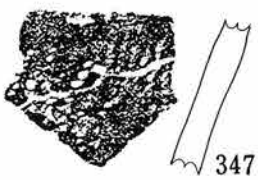
（344） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・長石・石英を含む。文様はＲＬの縄文原体を↗、↘方向に回転させ異方向縄文をつくっている。器厚は7mmである。



（345） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。ＲＬの縄文原体を↗方向と↗方向に回転しており、縦走りの縄文の効果を出している。器厚は8mm。



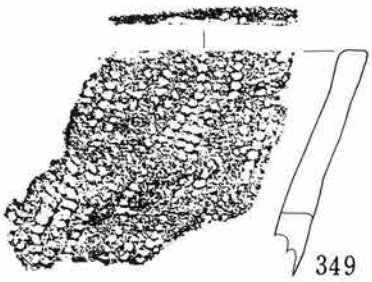
（346） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に雲母・石英を含む。文様はＲＬの縄文原体を↗方向と、↓方向に回転している。器厚は6mmである。



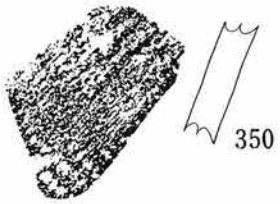
（347） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの縄文原体を↓方向と、↗方向に回転している。器厚は6mm。

（348） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化しているがＲＬの原体を↗方向と、↓方向に回転していると思われる。縦走の縄文。器厚は10mmである。

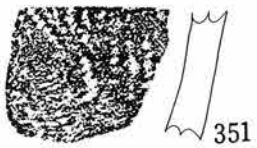
第132図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（67）



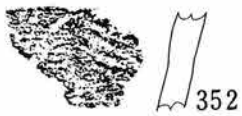
（349） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬの縄文原体を↘方向と↙方向に回転させ、縦走りの縄文の効果をだしている。口唇部は7mm、下部で8mm。口唇部は入念に整形している。



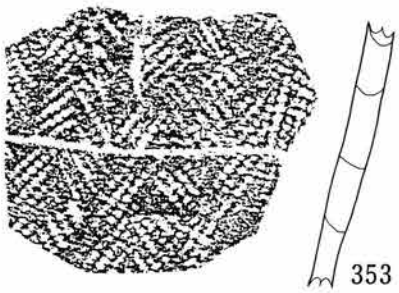
（350） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。文様は縄文が施されており、ＲＬを⊢と⊤方向に施文し、縦走りの縄文と横走りの縄文を作っている。器厚は8mm。



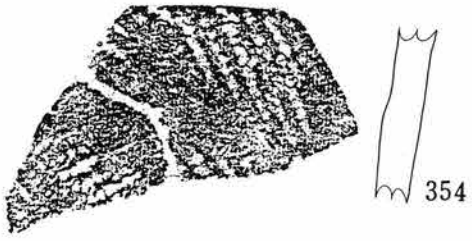
（351） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様はＲＬの縄文原体を↗、↖方向に回転している。器厚は10mmである。



（352） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。文様はＲＬの原体を↗と⊢方向に回転している。器厚は7mmである。



（353） 焼成は良好、色調は茶褐色･暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様はＲＬの原体・長さ約15mm、ＬＲの原体・長さ約15mmを器面に対して横位に置き、縦位⊤方向に転がしている。また、一部ＲＬの原体を↖方向に転がし、縦走りの縄文の効果をだしているものもある。器厚は8～6mm。内面に指痕が残る。

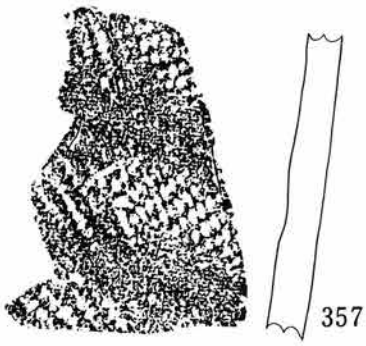


（354） 焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬを↖とＬＲの縄文を↗方向に施文している。器厚は10mm。

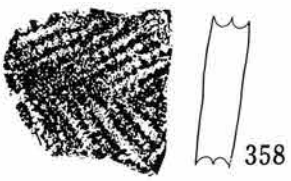
第133図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（68）

（355） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲＬの原体を↘方向に回転しており、ＬＲの原体を↗方向に回転している。器厚は 7 mmである。

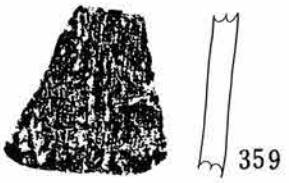
（356） 焼成は良好、色調は黒色に近い。文様はＲＬの原体を↦方向に回転させ、また同一原体を↖方向に回転させ、ＬＲの原体を↦に回転させている。器厚は 6 mm。



（357） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英・黒曜石を含む。文様はＲＬの縄文原体を↦方向と↖方向に施文し、ＬＲの縄文原体を↦方向と↗方向に回転させて羽状縄文を作っている。原体の長さＬＲが 19 mm、ＲＬが約 21 mmと思われる。器厚は 10 mm。

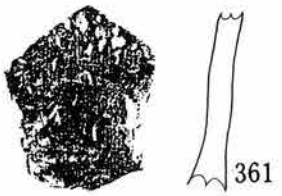


（358） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に繊維と細砂を含む。文様はＬＲを↦方向に回転し、$R<^{L}_{L}<^{R}_{R}<^{R}_{R}$ ？を↦方向に回転しているものと考えられる。器厚は 8 mm。



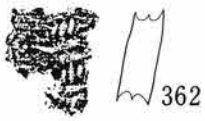
（359） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英を含む。214 と同一個体と思われ $R<^{L}_{L}<^{R}_{R}<^{R}_{R}$ の原体を転がしているものと思われる。器厚は 6 mm。

（360） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様は $R<^{L}_{L}<^{R}_{R}<^{R}_{R}$ の原体を↦方向に回転させている。器厚は 6 mm。



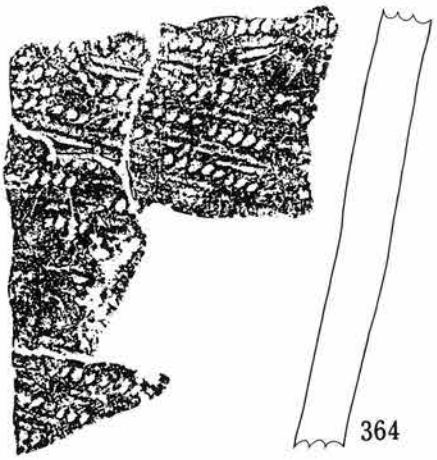
（361） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・繊維を僅かに含む。文様は $R<^{L}_{L}<^{R}_{R}<^{R}_{R}$ の縄文原体を↖方向に回転している。底部に近い。器厚は底部付近で 10 mm、他は 6 mm。

第134図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（69）

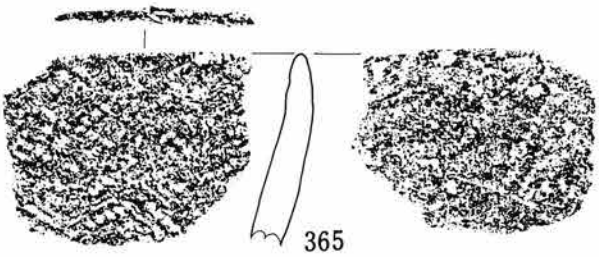


（362） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・繊維を含む。文様は$L<\frac{L}{R}$の原体を↖方向に回転させている。器厚は8mmである。

（363） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に繊維・細砂を含む。文様は$L<\frac{L}{R}$の原体を↗方向に施文し、その原体の施文と重なるように$R<\frac{L}{R}$の原体を↓方向に施文している。器厚は8mm。



（364） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。器厚は15～12mm。$L<\frac{L}{R}$の原体を↗方向に回転している。

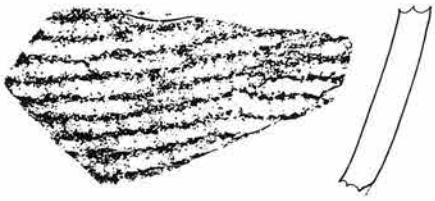


（365） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・繊維を含む。器厚は口唇部が6mm、下部8mm、原体の長さ約22mm。文様は土器表面が風化しているが、$L<\frac{L}{R}$の原体を↓と$R<\frac{R}{L}$の縄文原体を↓方向に回転を施し、羽状縄文をつくっていると思われる。また、裏面は風化しているが$L<\frac{L}{R}$を→に施文していると思われる。

（366） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英・雲母を含む。文様はRLの原体を↗方向に回転しており、そのあと、2本の沈線を施している。沈線の幅2mmである。器厚は9mmである。

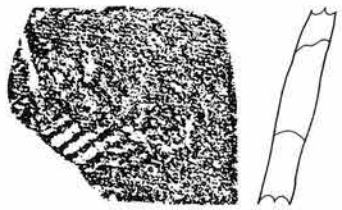
（367） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様は縄文を施しているが風化により施文原体は不明である。器厚は8mmである。

第135図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（70）



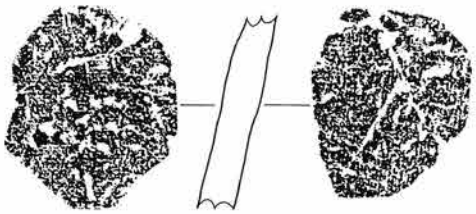
368

（368） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様は器面が風化しているが、縄文を施している。原体を風化してより不明である。器厚は8～10 mmである。



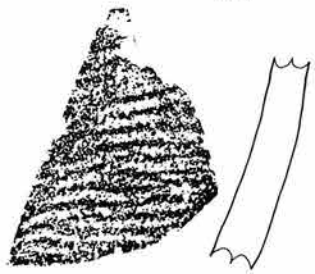
369

（369） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（灰色）雲母を含む。内外面に炭化物が付着している。断面と接合痕が残り幅20 mmである。文様は縄文を施しているが風化と炭化物によって原体不明である。器厚は7～8 mmである。



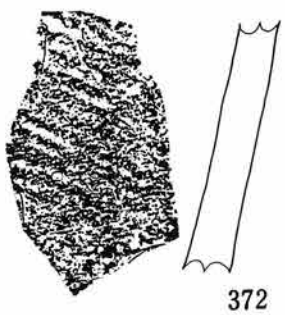
370

（370） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化して不明であるが自縄自巻の圧巻と思われる。器厚は10 mmである。内面に擦痕が残りわずかに繊維を含む。



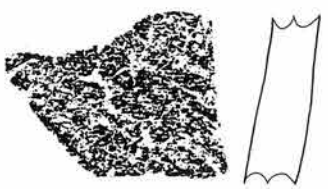
371

（371） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は表面が風化しており不明であるが、縄文が施されている。器厚は10 mm～12 mmである。



372

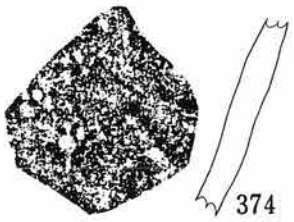
（372） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は縄文を施しているが、器表面の風化の為原体は不明である。器厚は10～12 mmである。



373

（373） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は風化により不明。器厚は14 mmである。

第136図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（71）

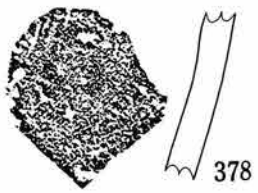


（374） 焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に細砂（黄灰色）を多量に含む。文様は器面が風化しており不明であるが、縄文が施されている。器厚は５～７mmである。

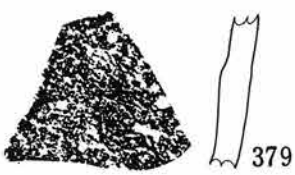
（375） 原体は不明。

（376） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は器面が風化しており原体の詳細は不明であるが縄文を施してある。器厚は10 mm。

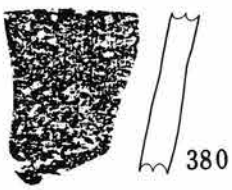
（377） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・石英・繊維を含む。文様は風化していて不明であるが、沈線か原体の圧痕が施されているものと思われる。器厚は底部で11 mm、上部で８mm。



（378） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に繊維・細砂を含む。文様は縄文が施されているが、風化により原体不明。器厚は８mmである。

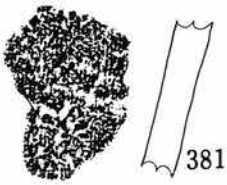


（379） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に繊維・細砂・石英を含む。文様は風化しており不明。器厚は６mm。

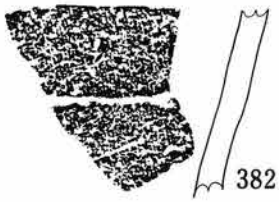


（380） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は土器表面が風化しているので不明である。器厚は６～８mmである。

第137図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（72）

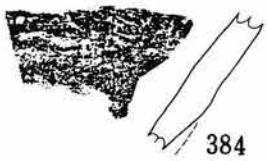


（381） 焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂を含む。文様は風化していて不明であるが、縄文が施されているらしい。器厚は 9 mm。

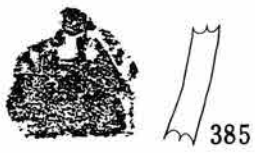


（382） 焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土中に繊維・細砂を含む。文様は縄文を羽状に施している。原体は風化により不明である。器厚は 6 mmである。

（383） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は縄文を施しているが器面が風化している為原体は不明。器厚は 9 mmである。



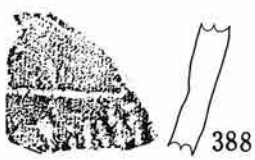
（384） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は土器表面が風化しており不明であるが、縄文が施されていると思われる。器厚は 8 mmである。



（385） 焼成は良好、色調は暗茶褐色、胎土中に細砂・石英を含む。文様は風化により不明。器厚は 7 ～ 8 mmである。

（386） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は縄文を施文しているが風化により原体は不明である。器厚は 7 mmである。

（387） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を多量に含む。文様は風化しており不明。器厚は 8 mmである。



（388） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は縄文が施されているが、器面の風化により原体不明である。器厚は 8 mmである。

第138図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（73）

（389） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に雲母・細砂を含む。また、繊維状のものを多量に含む。文様は縄文を施しているようであるが、原体は不明。器厚は 7 mm。

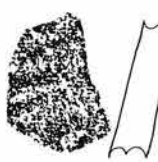
（390） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に雲母・石英を含む。文様は縄文が施されているが風化しているため原体は不明である。器厚は 8 mmである。

（391） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（灰色）を多量に含む。文様は縄文が施されているが風化しており原体は不明である。器厚は 7 mmである。

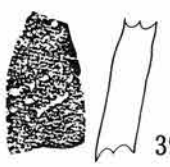
（392） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様は縄文が施されているが、風化により原体は不明。器厚は 6 mm。

（393） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は縄文を施しているが風化により不明。器厚は 7 ～ 8 mmである。

（394） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は風化しているため不明であるが、撚糸か自縄自巻を回転したものと思われる。器厚は 5 mm。

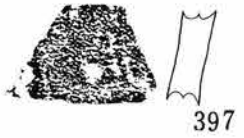


（395） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は器面が風化しており、原体不明であるが、縄文が施されている。器厚は 8 mmである。

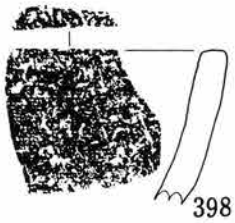


（396） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は縄文を施しているが風化により原体は不明である。器厚は 9 mmである。

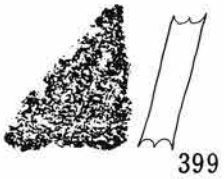
第139図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（74）



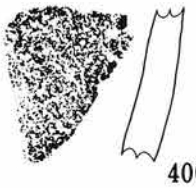
（397） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は縄文が施されているが、風化により原体不明である。器厚は8mmである。



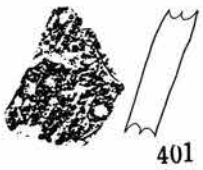
（398） 焼成は良好、色調は黒色を呈する。胎土中に細砂（白色）と僅かに繊維を含む。文様は風化しており不明であるが、口唇部に自縄自巻を圧痕しているが縄文を施しており、以下の文様は不明。器厚は口唇部で6mm、以下は6.5mm。



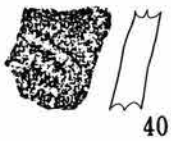
（399） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・黒曜石・石英を含む。文様は縄文を転がしているが、表面が風化しており原体は不明である。器厚は8mmである。



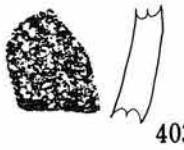
（400） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は縄文が施されているが、原体は風化により不明である。器厚は7～10mmである。



（401） 焼成は良好、色調は茶色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様は風化しており不明。器厚は6mm。



（402） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は縄文が施されているが風化により、原体は不明である。器厚は8mmである。



（403） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に雲母・石英・長石を含む。文様は縄文が施されているが風化しており原体は不明である。器厚は8mmである。

（404） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化しており原体は不明である。器厚は8mmである。

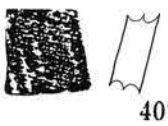
第140図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（75）

405

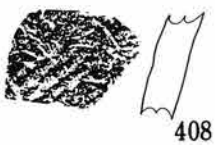
（405） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。文様は器面が風化しており不明であるが、絡条体圧痕が施されていると思われる。器厚は8mmである。

406

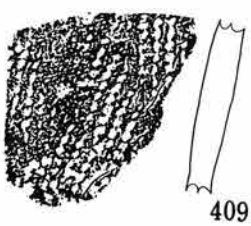
（406） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化により不明であるが縄文が施されている。器厚は8mmである。


407

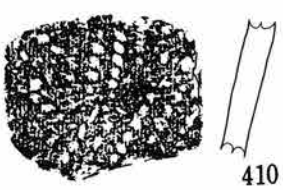
（407） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様は風化して不明であるがＬＲの縄文を施文しているものと思われる。


408

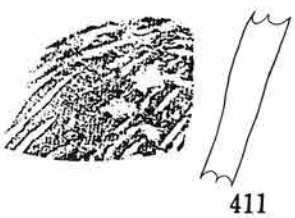
（408） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に繊維を含む。文様は風化しており、原体が不明であるが、縄文を施している。裏面には擦痕を施している。器厚は9mmである。


409

（409） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。文様はＲＬの縄文原体を人と丁と人方向に回転している。土器面に縄文原体をかるく回転していると考えられる。器厚は7mmである。


410

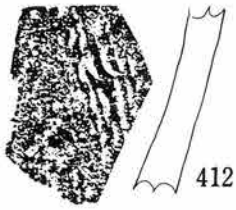
（410） 焼成は良好、色調暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂、白色の砂等を含む。文様は、ＬＲの縄文原体を人方向と、⊢方向に縄文を施している。土器面がかたくなってから原体を回転したと思われる。器厚は6mmである。


411

（411） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）を含む。文様は1の自縄自巻ないしは撚糸を↗方向に施している。器厚は9mm。

0 5cm

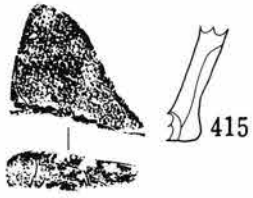
第141図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（76）



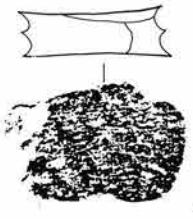
(412)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はｒの自縄自巻を回転したものか、ｒの撚糸文である。底部近くと思われ、器厚も 10～13 mm である。

(413)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。文様はＲの撚糸文かＲの自縄自巻を斜位に施している。器厚は 9 mm。

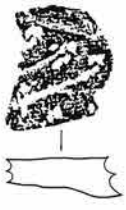
(414)　原体は不明。



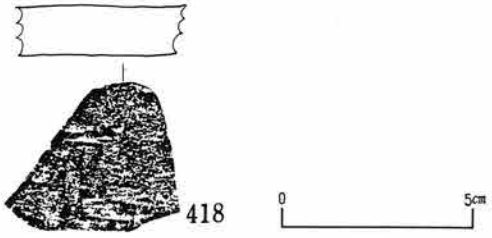
(415)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。底部であり、側面は張り出し気味に作られている。器厚は 6 mm、底面 9 mm。



(416)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。底部にアジロを施していると思われる。器厚は 11～13 mmである。

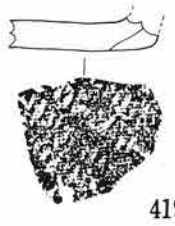


(417)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。底部であるが、そげている。底部内面にＬＲの縄文原体の端部を圧痕し、ワラビ状の側面圧痕を施している。



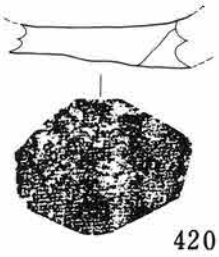
(418)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。底部にアジロ痕を残す。器厚は 13 mmである。

第142図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（77）



419

（419） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。土器底部に敷物の痕がある。底部の厚さは7mmである。

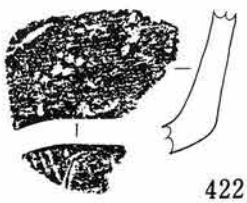


420

（420） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂を含む。底部であり凹凸している。底部厚は8～11mmである。

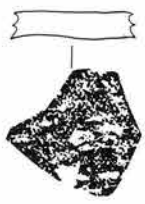
421

（421） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に細砂（白色）・黒曜石を含む。底面にはアンペラ（網代）状のものが圧痕されている。底部の器厚は11mm。



422

（422） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・雲母を含む。文様はRLの縄文原体を←方向に回転している。底部には擦痕ないしアンペラ（網代）痕が残る。器厚は5mm、底部は8mm。



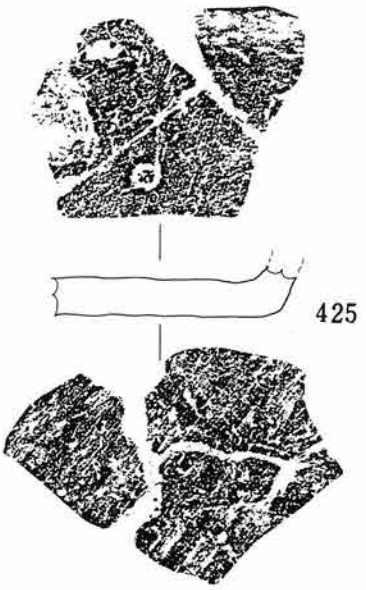
423

（423） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・長石・雲母を含む。底部底面であり、やはり圧痕が施されている。器厚は8mmである。

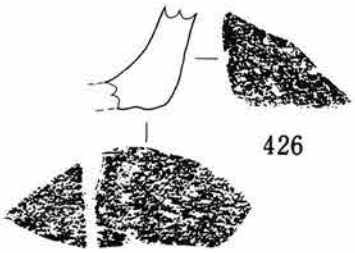
424

（424） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・長石・石英・雲母とわずかに繊維を含む。文様は不明であるが底部内面に指ナデ痕を施している。底部形は隅丸方形をなすと考えられる。底部厚は8mmである。

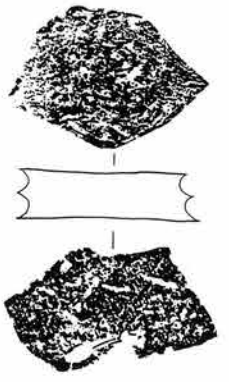
第143図　第II次調査 出土土器拓影（78）



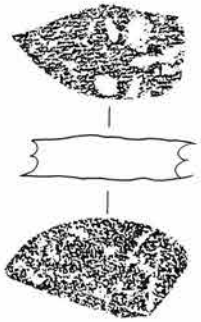
（425） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に繊維・細砂を含む。土器底部に敷物の痕がある。底部の厚さは 10 mmである。底部形は隅丸方形をなす。



（426） 焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈する。胎土中に石英・長石・細砂を含む。底形は隅丸方形か円形であり文様は風化により不明である。器厚は底部で 10 mmである。

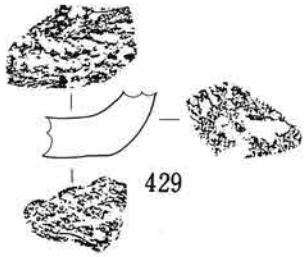


（427） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に黒曜石・細砂・石英・雲母を含む。平底の底部である。

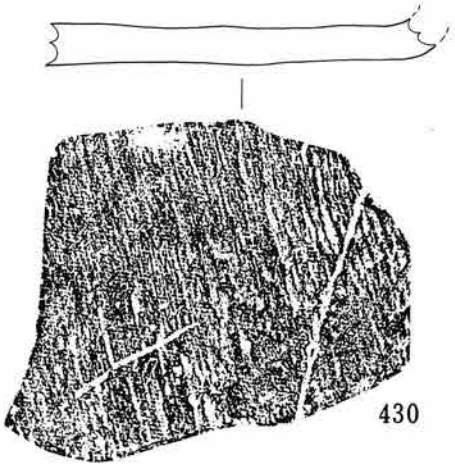


（428） 焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に石英・細砂を含む。器厚は 10 mmである。

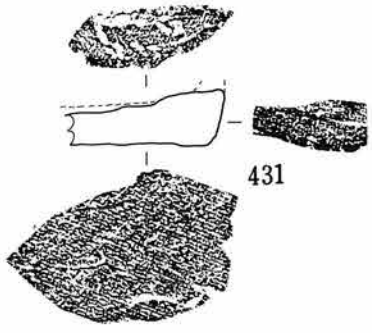
第144図　第II次調査 出土土器拓影（79）



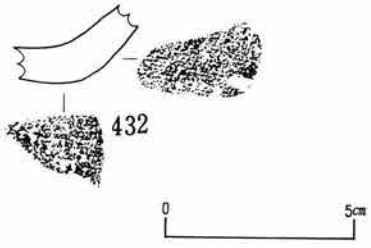
(429)　焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土中に細砂・石英を含む。底部内面と体部の立ち上がりの部分にLの原体を2条側面圧痕している。器厚は11 mmである。



(430)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂・雲母を含む。底部外面に敷物状の圧痕がついている。底部の形は隅丸方形と思われる。



(431)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に細砂、灰色の4 mm大の砂を含む。底部内面にLRの原体の側面圧痕を施している。底部は隅丸方形を呈すると思われる。



(432)　焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。胎土中に長石・石英・細砂を含む。平底の底部であるが底形等については不明である。文様も風化しているため不明である。底部厚は9 mmである。

第145図　第II次調査 出土土器拓影（80）

種別 / グリッド	自縄自巻	絡条体圧痕	原体側面圧痕	半截竹管文	半置半転	縄文	撚糸文	底部	不明・無文	計
A－1										
2										
3		1				(1) 6			3	10
B－1						1				1
2	(1) 1					1	1			3
3		1				9			(1) 3	13
C－1										
2										
3										
D－1										
2									1	1
3									(1) 2	2
E－1									1	1
2						2				2
3		(1) 1			2	(1) 5			3	11
F－1	(1) 2		1			7			6	16
2	3	(4) 7				12			(1) 3	25
3	(3) 18	(8) 31	(10) 21	1	(1) 2	(15) 121	4	23	(3) 36	257
G－1	1				1	(1) 11			3	16
2	(2) 6	(3) 10	(1) 2		1	(2) 31	1	8	(1) 19	78
3	(3) 3	(1) 5	(1) 2	1		(3) 28			(1) 14	53
H－1	15	(1) 6	(9) 11		(22) 27	(1) 55		12	(2) 29	155
2	(7) 13	(1) 3	(1) 2		(1) 20	(4) 24		8	(8) 27	97
3	(1) 6	(3) 3	5	(1) 2		(1) 28		3	15	62
I－1										
2									1	1
3						1			2	3
J－1										
2										
3									1	1
出土地不明	(21) 48	(11) 27	(15) 28	(3) 3	1	(1) 125	1	24	(3) 187	444
合計	116	95	72	7	54	467	7	78	356	1252

（　）内は口縁部破片数

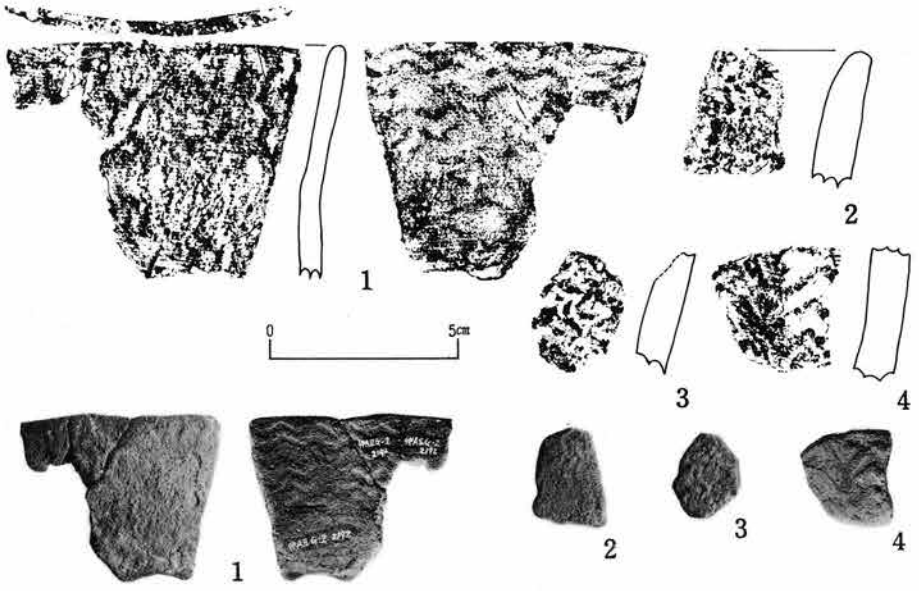
※爪形文土器はH－1グリッドVIa層より1点出土。第Ⅰ次調査出土の10点は除外してある。
尚、本文中等に総数1300点とあるが、微細片は省いたので上記の数となった。

グリッド / 種別 / 層位	F－1 Va Vb VIa VIb	F－2 Va Vb VIa VIb	F－3 Va Vb VIa VIb	G－1 Va Vb VIa VIb	G－2 Va Vb VIa VIb	G－3 Va Vb VIa VIb	H－1 Va Vb VIa VIb	H－2 Va Vb VIa VIb	H－3 Va Vb VIa VIb
自縄自巻	2	1 (VII) 1	12 6	1	1 5	3	15	4 9	2 2 (VII) 1 1
絡条体圧痕		7	15 16		2 8	5	3 3	2 1	2
原体側面圧痕	1		9 12		2	2	10	2	4
半截竹管文			1			1			2
半置半転			2		1		12 15	18 2	4 14 6
縄文	7	6 (VII) 1 1	39 71	6 2	1 5 (VII) 22 2	1 19	5 13 25	8 16	
撚糸文			2		1				1 2
底部			1 3 19		1 7		1 11	1	
不明・無文	2 4	3	16 18	1 1	2 16	2 12	29	9 18	4 4 6

第5表　草創期土器出土表

第III群土器（早期の土器）第146図１～４

縄文時代早期の土器は、押型文土器（山形文）に限られており４点出土している。第146図１は表裏両面に口縁より押捺されている。表は横位に、また裏は縦位にそれぞれ施文が行われている。また、裏面には調整の際の指痕が見られる。山形の波調は大きくゆるやかで条間は広くなっている。口唇はやや摩滅しているが施文の痕跡がある。口縁はかなり外反している。焼成はわりあい良く堅い。胎土中には若干の砂粒が含まれている。色調は暗褐色を呈する。器厚は約７㎜である。第146図４は大きく幅広い山形文が縦位に施文されておりその条間は広い。裏面には指痕が残されている。焼成はわりあい良い。色調は明黄褐色を呈する。器厚は10㎜。



第146図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（81）

第IV群土器（中期中葉の土器）第163図

第163図１は、放射状に伸びる隆帯の上に横位あるいは綾杉状に刻み目を入れてある。隆帯は下部において結び瘤となって、ここから横位に構成されている。そして、隆帯による区画の中を竹管状工具によって沈線を施しており、さらにこの中を縦横の刺突を施し充填してある。焼成は極めて良く堅い。胎土中には若干の砂粒が含まれている。色調は明赤褐色を呈する。第163図５は、直線状あるいは渦巻状の隆帯の組み合わせからなり、この隆帯上に深い刻み目を入れている。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒が含まれている。色調は鈍い褐色を呈する。第163図６は厚手でしかも堅牢な土器である。太くて力強い隆帯であり、この上に大きな刻み目を付けたもの、あるいは半載竹管状工具によって直線と弧状の幅広い沈線を施してある。焼成は良く堅い。胎土中には砂粒が含まれ、色調は鈍い褐色を呈する。

以上、第163図に見る土器は勝坂式に比定されるものと考えられる。

第Ⅴ群土器（中期後半の土器）

第１類（第148図１・３～６・８～14、第164図１～３・５～13、第165図１～12、第166図１～10）地文に条線文を有し、直線の隆帯や粘土紐の貼付けによる渦巻文や波状の隆帯を特徴と

したものを本類とした。第148図４・８・12、第166図２・３・５・10は隆帯上に刻み目を持っており、第４号住居跡内出土の埋甕（第59図・図版102）に共通、また第148図３・５・６や第165図２・４～12に類似している。焼成はわりあい良く堅い。胎土中には多量の雲母と砂粒・石英粒が含まれている。色調は、明褐色や褐色・明赤褐色・赤褐色・黒褐色を呈する。第148図１～３のようにソーメン状の細い粘土紐を斜めの条線上に交叉させて貼付けたものや、第164図５～13、第165図１のような条線だけを施した口縁がある。焼成はかなり良い。胎土中には雲母・砂粒の他、やや大き目の石英粒が含まれている。色調は赤褐色・褐色を呈する。第165図４・５・６もこれと同じである。第148図10～14、第166図13～19は、縄文を地文とする中に渦巻状の隆帯や粘土紐の貼付けが見られる。焼成はわりあい良い。胎土中には雲母・砂粒が多く含まれている。色調は、明るい赤褐色を呈する。

以上は、曾利Ⅰ式土器に比定されるものであろう。しかし、第148図１、第164図１～３・５～13、第165図１・４・５・６などの文様構成は曾利II式に見られるものでありまた、第59図・図版102の復元土器はII式的要素の強いものである。

第２類（第148図２・７、第164図４、第166図１・19、第167図１～10、第169図１～９、第174図１～４）口縁に隆帯（渦巻文）を有し、条線文・刺突文を施してあるものを本類とした。第148図２・７は、口唇上にやや幅広の沈線を有し、口縁に隆帯を持っている。この隆帯上には、竹管状工具による刺突文が見られる。また、口縁下より胴部下にかけては二条の幅広い隆起帯が施され、これらの区画の中に綾杉状の条線があり、この中を波状沈線が走っている。焼成は良く堅い。胎土中には砂粒とやや大き目の石英粒が含まれている。色調は赤褐色を呈する。第164図４は、口縁から口縁裏まで竹管状工具による集合条線が施され、この合流点上に粘土紐による波状の貼付けが見られる。また、これの頂点には粘土紐をドーナツ状にした突起が付けられている。焼成はかなり良い。胎土中には砂粒と若干の雲母が含まれている。第166図１は、条線を地文として条間に渦巻状の隆帯や集合条線が施されている。渦巻上には、所々刻み目が付けられており、渦巻の粘土紐が付いている。第166図19は、縄文を地文に二条の隆帯があり、その下に粘土紐を貼付けている。１・19とも焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒が多く含まれている。色調は鈍い褐色と灰褐色を呈する。第167図１は、口縁に同心円状の隆帯が付けられている。また口縁は内側に彎曲しており、キャリパー状の器形をなすものであろう。焼成は悪く脆い。胎土中には砂粒が多く含まれている。第167図４は、細い隆帯を鉤の手・直線・弧状に組み合わせて貼付けてある。この隆帯の内側はやや幅広い沈線が施され、無文部との仕切になっている。焼成は良く堅い。胎土中には砂粒・石英粒が多く含まれている。色調は暗赤褐色を呈する。第167図７は、口縁上に隆帯による渦巻や区画された隆帯内に縦の条線が描出されている。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒が多く含まれている。色調は赤褐色を呈する。第174図１～４は３本～４本の隆起帯を胴部に弧状あるいは渦巻状にめぐらし、このまわりを大きい雨粒状の刺突文が施されている。

以上は、曾利II式土器に比定されるものと考えられる。また、第148図７や第164図４などは

II式～III式への移行期のものであろう。

第VI群土器（中期末葉の土器）

第１類（第150図～第152図、第155図、第157図、第168図、第170図、第172図～第174図）曾利III式～曾利IV式に比定されるものを本類とした。さらにその施文法により５種に細分する。

a種：第168図１・３・４・７・10、第170図１

口縁に波状突起のあるものを本種とした。第168図１・３・４などは、突起の頂点に渦巻が見られ、円形あるいはS字状の渦巻が描出されている。中葉の土器に見られるような華やかさはないが、力強さは失われていない。隆起帯によって区画された中には条線が施されている。また、装飾帯の下から胴部にかけては三条の沈線が見られる（第168図１）。焼成はわりあいに良い。胎土中にはやや大きい砂粒や石英粒が含まれている。第168図10は、渦巻あるいは縦の隆帯が施され、斜めの条線で構成されている。焼成は良く堅い。胎土中には砂粒・石英粒の他多量の雲母が含まれている。

b種：第150図２、第170図２・４

口縁部に隆起渦巻文を有するものを本種とした。基本的にはa種に類似している。渦巻の隆起帯が口縁を巡り、条線や縄文がその区画内や下方に施されている。第168図１～10は、おそらく第170図１・２・４・８などに接続する部分であろう。

c種：第152図１～14、16・17、第171図１～５・７・８・９・13～16、第172図２～11・13・14条線を地文として、沈線文を有するものを本種とした。口縁に、一条あるいは二条の幅広で浅い沈線が横位に施されたもの、または縦位に描出したものなどが見られる。第172図10は、口縁に細い隆帯による連弧文を施し、その中を細い条線で充填している。さらに、懸垂する隆帯の区画の中を斜めの条線で仕上げている。焼成は良く堅い。胎土中には砂粒が含まれる。色調は暗褐色を呈する。第172図14は、口縁下より櫛歯状工具によって条線を交叉させて施文してある。これは第173図６に共通している。デザイン的には、後者が斬新なものと云えよう。また、前者は波状の沈線を懸垂して描出している。焼成は悪く脆い。胎土中には砂粒・石英粒・雲母が多量に含まれている。色調は黒褐色・明褐色を呈する。

d種：第155図18・19・21・22、第174図５

隆起帯や沈線が施され、刺突文を有するものを本種とした。第155図18・19・21・22は、口縁部にそのままあるいは隆起帯によって区画された中に、丸棒状工具の先端で刺突文が付けられている。その下には、縦・斜めまたは曲線の沈線が見られる。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒が含まれている。色調は明褐色・褐色・黒褐色を呈する。第174図５は、幅広の降起帯によって区画された中を、やはり、丸棒状工具によって刺突文が施されている。これらは、大平Ｃ遺跡第１号配石遺構出土の土器に酷似している。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒と若干の石英粒が含まれている。色調は赤褐色を呈する。

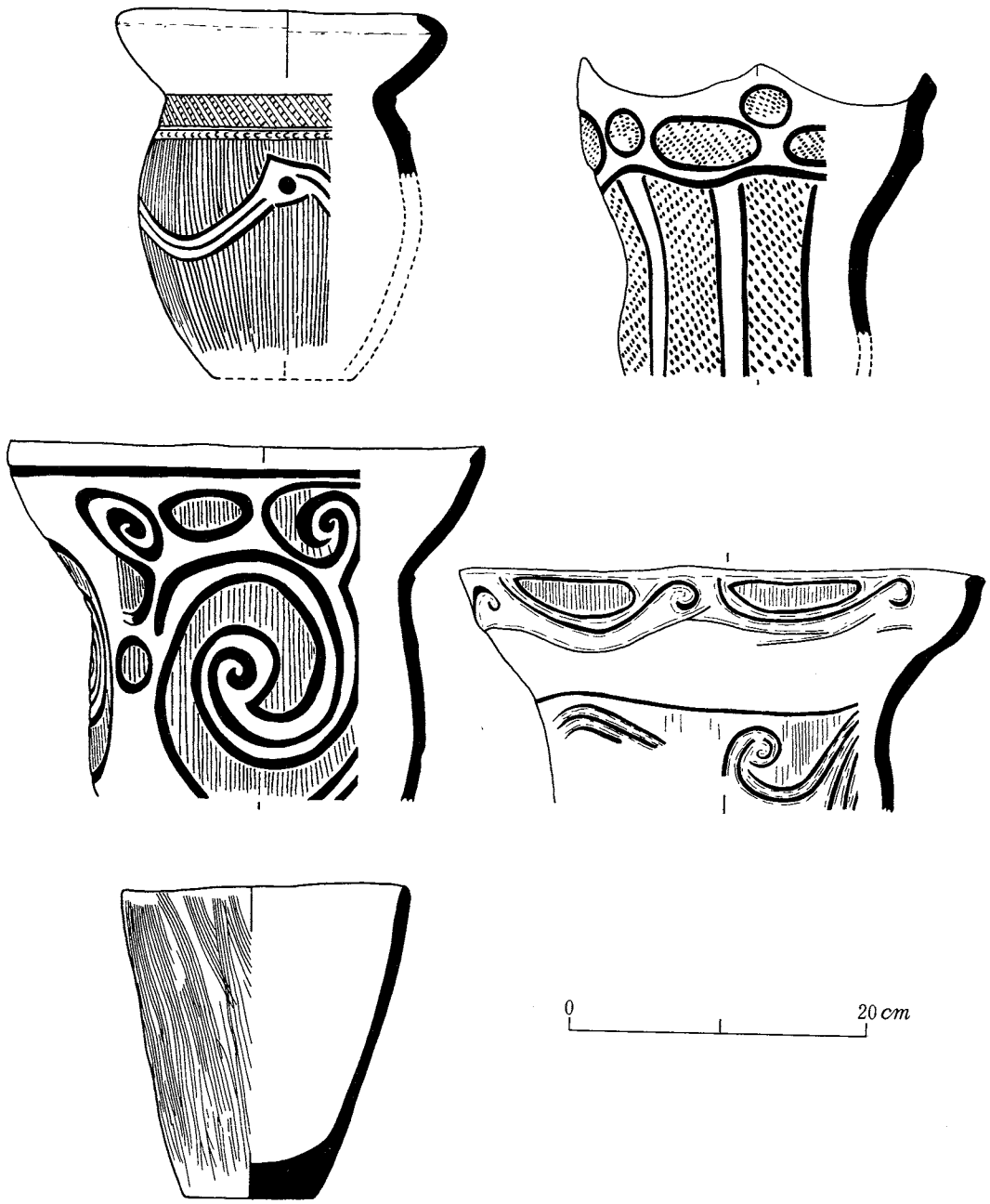
e種：第151図１～４・６～10

縦の条線を地文とし、幅広の隆起帯を有するものを本種とした。口縁に区画を持ち、あるい

は幅広の沈線を巡らして、その下に広い隆起帯を懸垂させている。そして、この区画内に縦の条線を充填させている。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒と若干の石英粒が含まれている。色調は黒褐色・褐色・明褐色を呈する。

以上、第1類土器をその施文法により5種に細分したが、曾利III式～IV式土器の範疇に入るものと考えられる。

第2類（第149図、第154図、第161図、第162図、第176図、第177図14）加曽利E3式に比定されるものを本類とした。第161図、第162図は、加曽利E3式に比定される良好な資料と云えよう。3式がさらに細分化する傾向の中で、いわば3式の典型例である。口縁部を隆帯によって区画し、



第147図　第II次調査 グリッド内出土土器実測図

胴部文様帯は隆起帯（隆線）による懸垂文を施してある。そして、これらの区画の中を斜行する縄文で充填している。焼成はあまり良くない。胎土中には砂粒と石英粒が含まれる。色調は明褐色を呈する。第176図や第177図14はこれと同時期か、もしくは後続するものであろう。3式の中でもより新しい段階であると考えている。

第Ⅶ群土器（中期終末の土器）

第1類（第57図、第58図1・2、第155図、第160図、第175図）曾利Ⅳ式～Ⅴ式に比定されるものを本類とした。さらにその施文法により2種に細分する。

a種：条線と蕨手状隆線を有するものを本種とした。第57図は、縦あるいは斜めの条線を地文としている。口縁に隆帯を一巡させ、縦に7本蕨手状の隆帯を描出している。またこの隆帯の両側は、凹線によってなぞりを加えて、レリーフ状に仕上げてある。第58図1もやはり条線を地文とするが、施文は縦のみでしかも細い。また、隆帯には蕨手状のものと弧状とが見られ、後者は、その区画内にも条線を施してある。第58図2は、胴部下方のみであるがH状懸垂の隆線が見られ、細い条線が施されている。第58図1・2は、器形的にはⅢ式の要素が残されているものの、3者ともⅣ式の範疇に収まるものではなかろうか。

b種：第155図2・4～17、第160図3・5～11、第175図1～12

隆起帯の区画内に、「ハ」の字状沈線や矢羽状条線を有するものを本種とした。第155図2・4～8、第175図1～3は、胴部に隆起帯が施されて、短い刻みの「ハ」の字状沈線が付けられている。第155図9・11～15、第160図4・6～8、第175図5・6は、深い刻みでやや幅広になっている。第155図13・14、第160図5は浅く幅広の「ハ」の字であり、第155図10・16・17は矢羽状の条線で構成されるなどバラエティーに富んでいる。また、第160図3は、口縁に幅広の沈線が施され、刻みの深い沈線が力強く描出されている。これもやはり、「ハ」の字状沈線の仲間と考えている。第160図9～11、第175図10～12は、この種のものとしては退化形態であり雑な施文となっている。

第2類（第156図、第159図、第178図）加曽利E4式に比定されるものを本類とした。また、その施文法により2種に細分する。

a種：第156図1・2

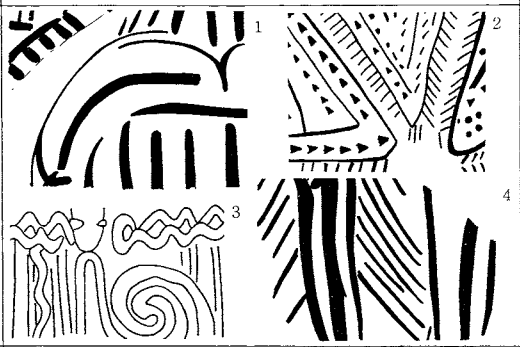
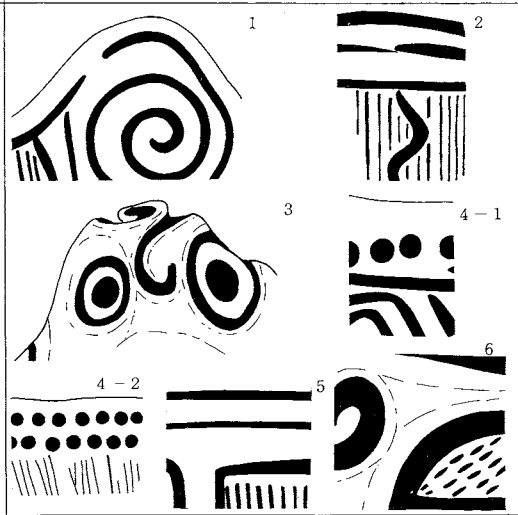
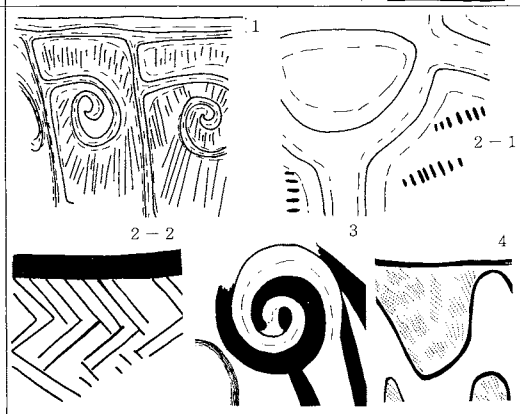
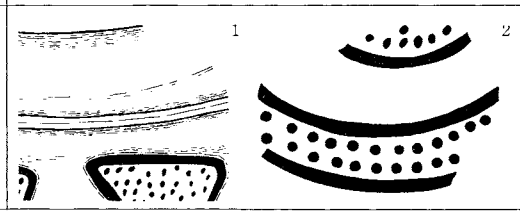
渦巻などの隆帯と把手を有するものを本種とした。1は、渦巻やこれに接続して懸垂する隆帯が施されており、さらに把手状のつまみが付いている。2は、無文の口縁の下にやはり隆帯やつまみが付けられており、いずれもE4式に比定するものと考えられる。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒と若干の雲母が含まれる。色調は黄褐色を呈する。

b種：第159図1～7、第178図1～20

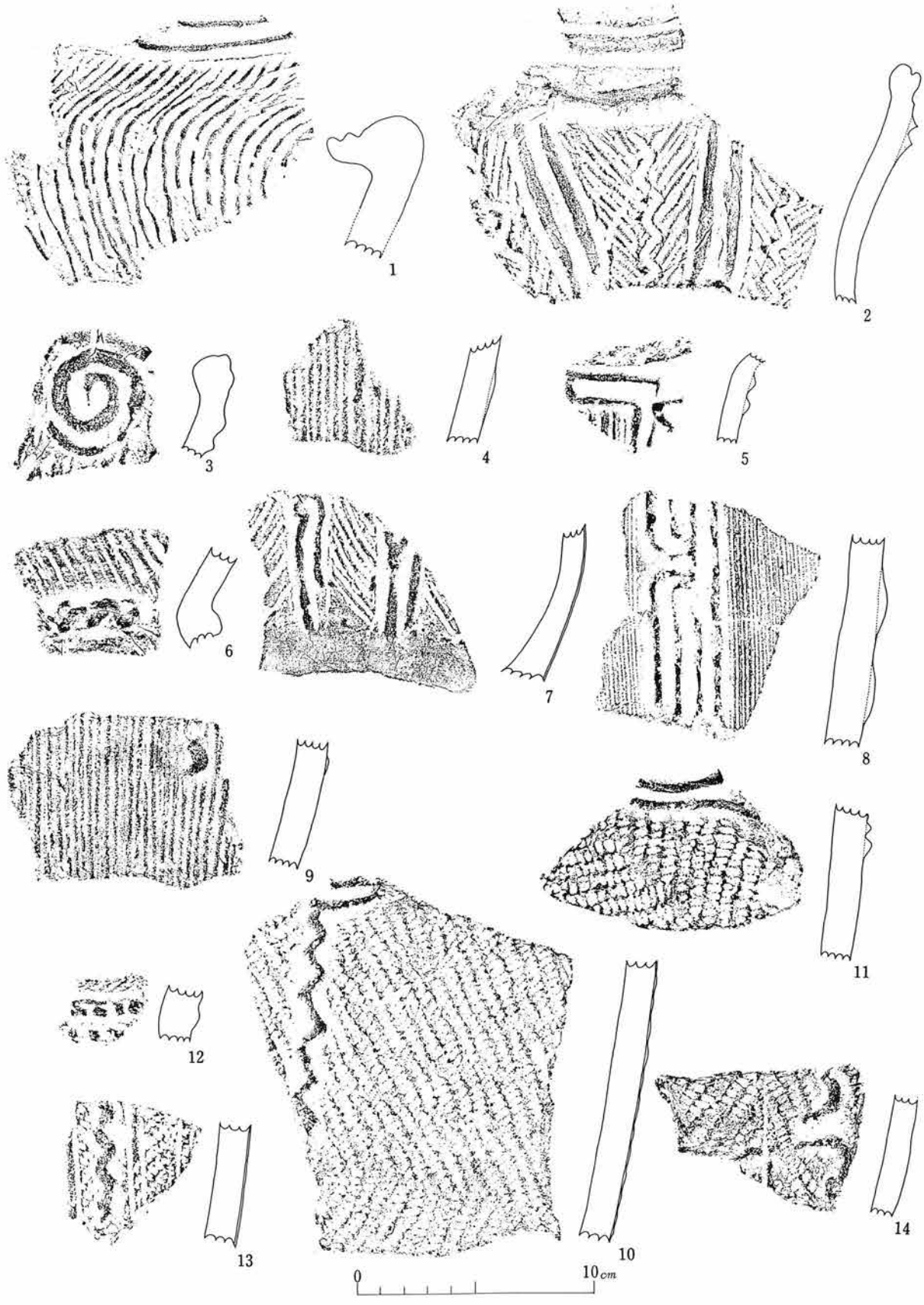
曲線的な沈線の区画内に磨消縄文帯を有するものを本種とした。第159図の土器は、口縁を竹管状工具によって沈線を一巡させており、胴部以下は曲線的な沈線を描出している。そして、この区画内を縄文で構成し、また磨消縄文もつくり出している。焼成は良好。胎土中には砂粒が含まれている。色調は暗褐色を呈する。

第Ⅷ群土器（後期の土器）第155図１、第164図16～19

隆起帯（隆線）や沈線が施され、刺突文を有する土器。第155図１は、いわゆる鍔付土器である。細い沈線による区画の中を、極めて細い丸棒状工具によって刺突文が施されている。器面は良く調整されている。焼成はわりあい良い。胎土中には砂粒・石英粒・雲母が含まれる。色調は暗褐色を呈する。

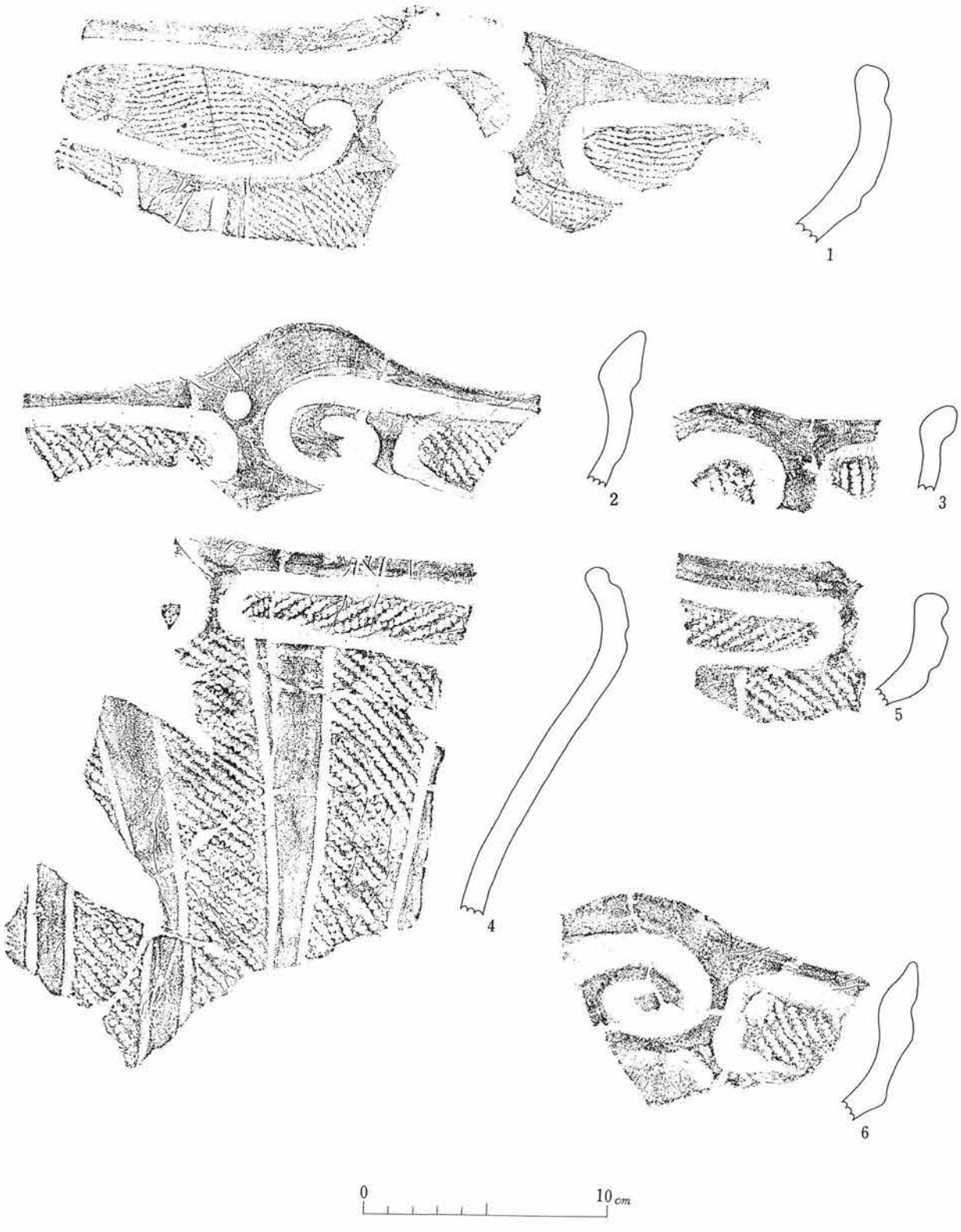
時期	群	類	種	比定型式	文様構成	解説
中期中葉	第Ⅳ・Ⅴ群	１類		勝坂		1. 直線あるいは、渦巻による隆帯が施され、刻み目が入る。また竹管状工具による沈線が描出される。 2. 隆帯によって区画。沈線が施され、これらの中を刻み目や刺突で充填している。 3. 条線を地文に、直線の隆帯や粘土紐の貼り付けによる渦巻や波状の隆帯を施してある。 4. 隆起帯と集合条線が施され、この間をぬうように波状沈線が走っている。
		２類	a種	曾利Ⅰ		
			b種	曾利Ⅱ		
中期末葉	第Ⅵ群	１類	a種	曾利Ⅲ～Ⅳ		1. 口縁に波状突起があり、渦巻や条線.沈線が描出されている。 2. 条線を地文として沈線文を有する。 3. 口縁部に隆起渦巻文を有する。 4. 隆起帯や沈線が施され、丸棒状工具による刺突文が見られる。 5. 縦の条線を地文とし、幅広の隆起帯を有する。 6. 口縁部と胴部を隆起帯によって区画し、その中を斜行する縄文が充填している。
			b種	〃		
			c種	〃		
			d種	〃		
			e種	〃		
		２類		加曾利E３		
中期終末	第Ⅶ群	１類	a種	曾利Ⅳ～Ⅴ		1. 縦あるいは斜めの条線を地文とし、口縁に隆帯を一巡、胴部に蕨手状の隆帯を有する。 2. 隆起帯(隆線)が施され、この区画内に「ハ」の字状沈線や矢羽状条線が描出されている。 3. 渦巻を含む隆帯を特徴としており、これに把手状のものが付けられている。 4. 口縁に沈線を一巡させ、細い曲線的な沈線の区画内に磨消縄文帯を持っている。
			b種	〃		
		２類	a種	加曾利E４		
			b種	〃		
後期	第Ⅷ群					1. 2. 隆起帯(隆線)や沈線が施され細い丸棒状工具による刺突文が見られる。

第６表　縄文中期・後期土器文様一覧表



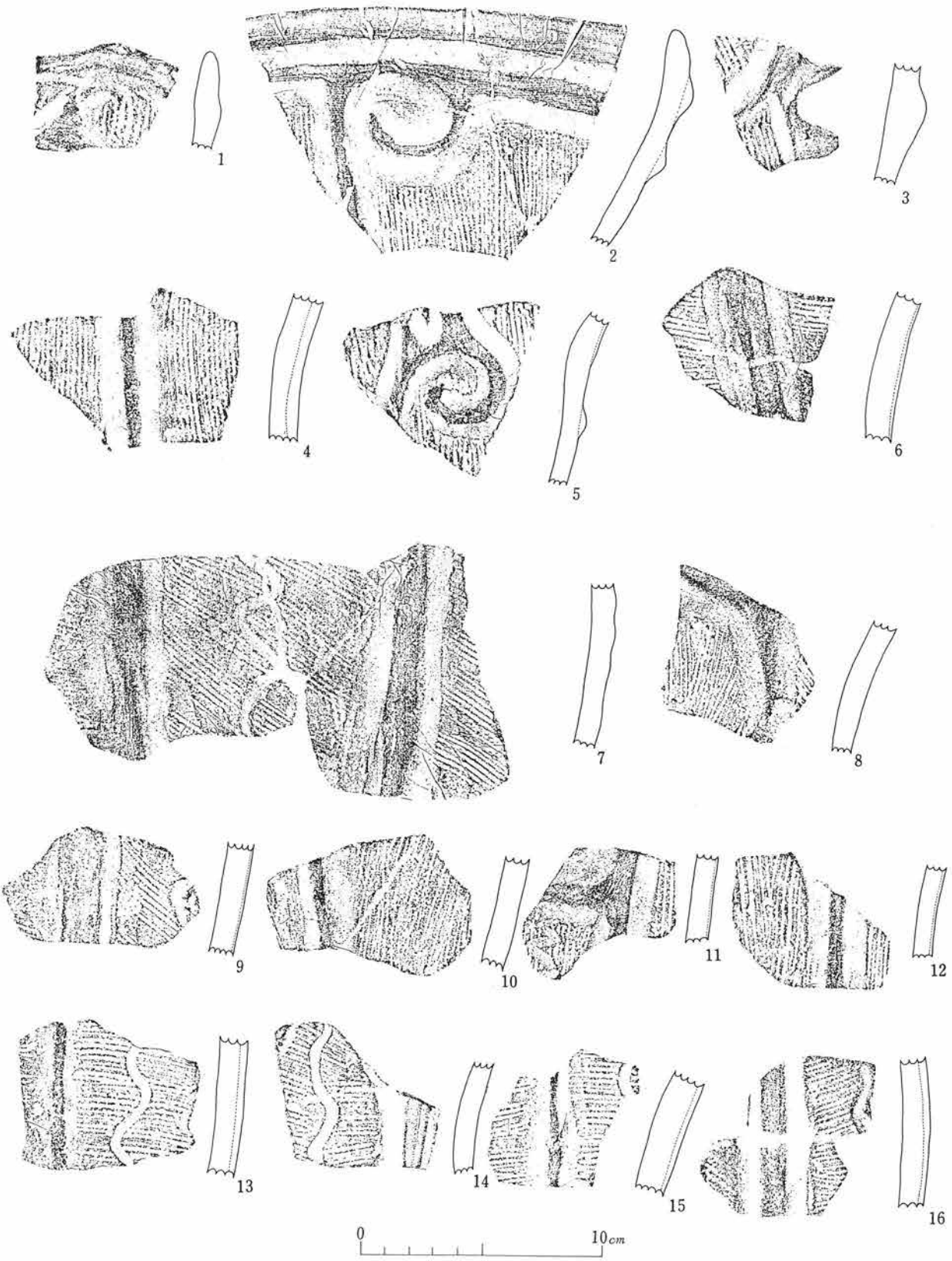
1～14 第1号住居跡

第148図　第II次調査 出土土器拓影（82）



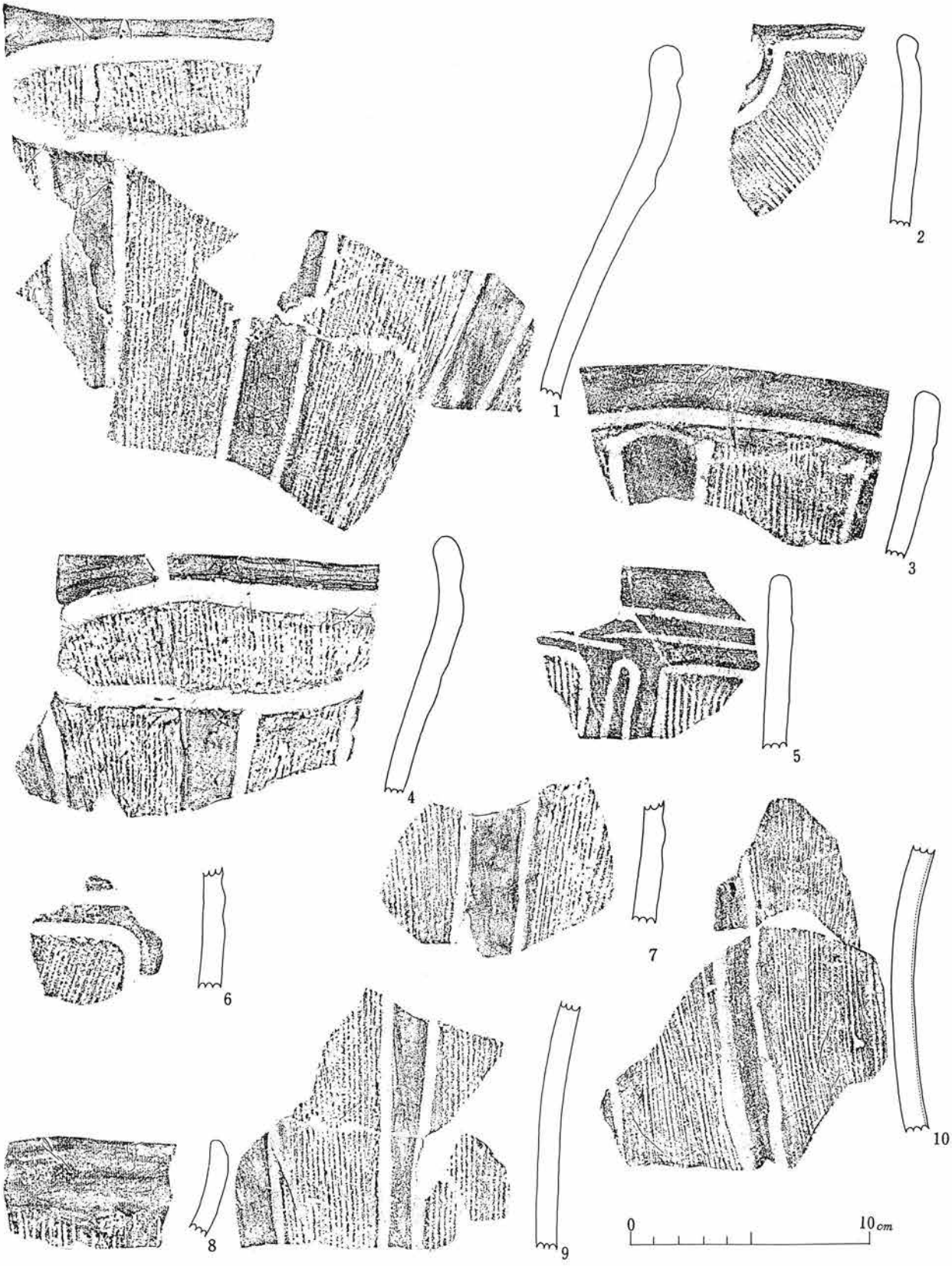
1～6　第1号住居跡

第149図　第II次調査出土土器拓影（83）



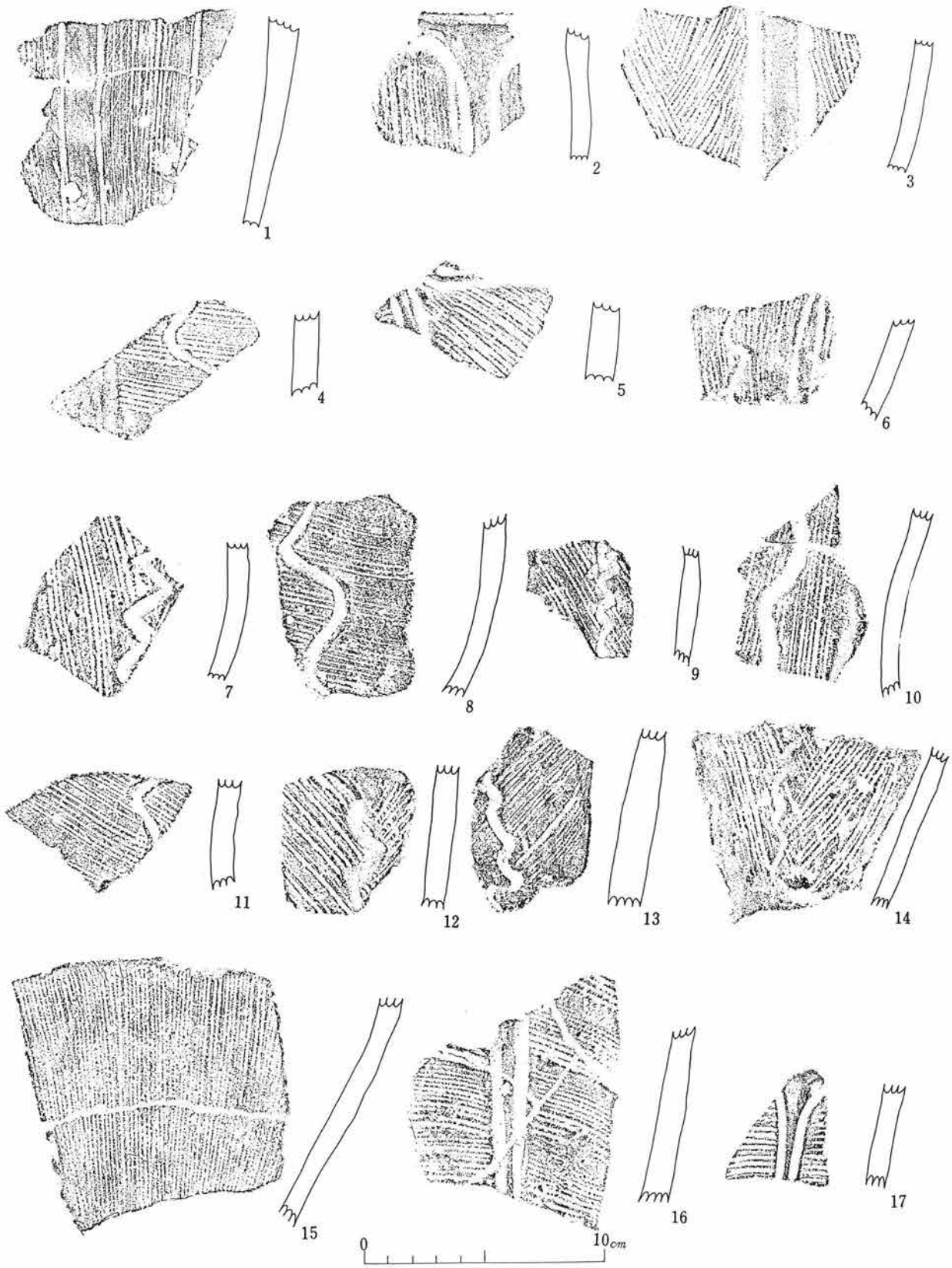
1～16　第1号住居跡

第150図　第II次調査 出土土器拓影（84）



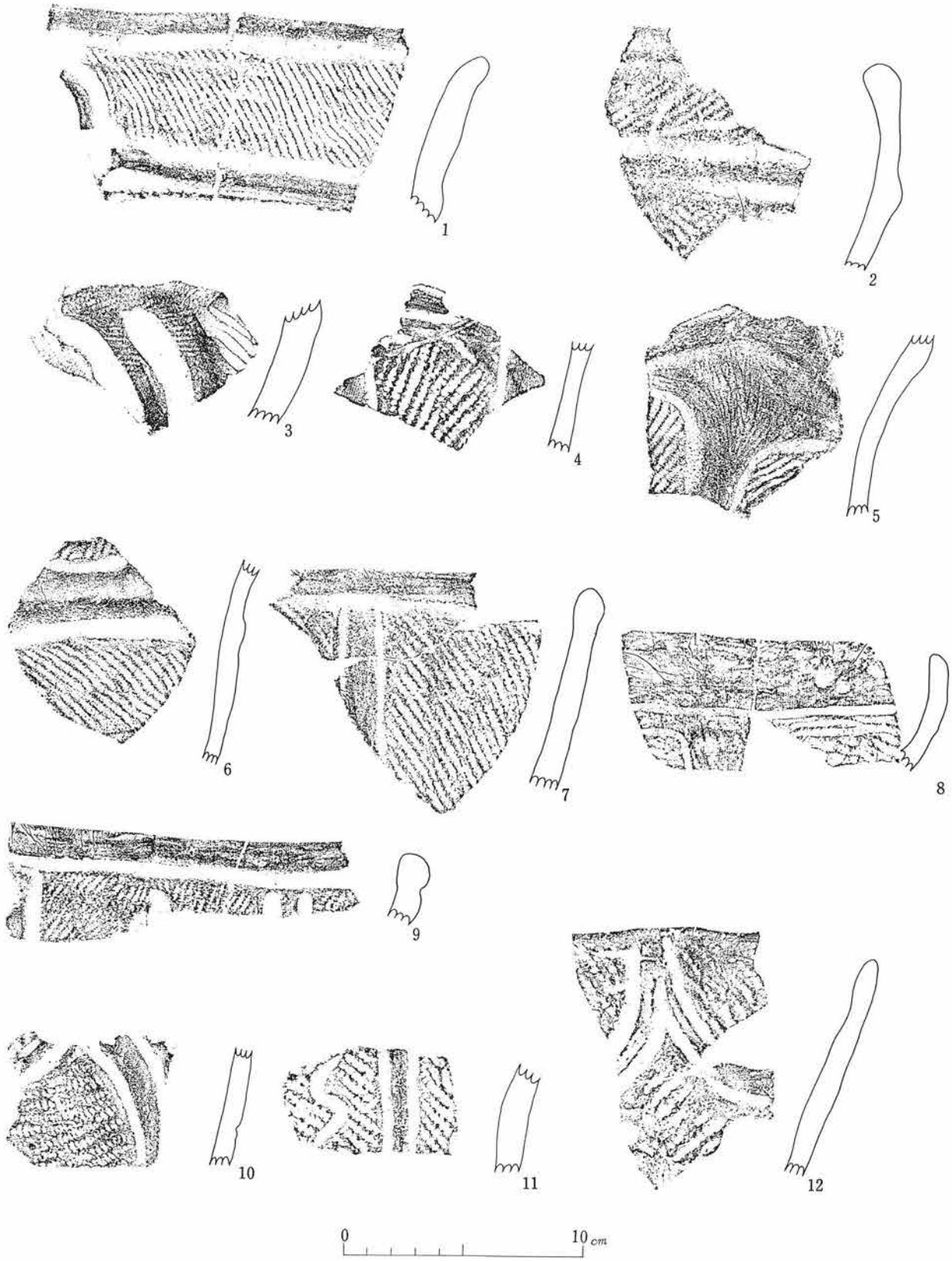
1～10　第1号住居跡

第151図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（85）



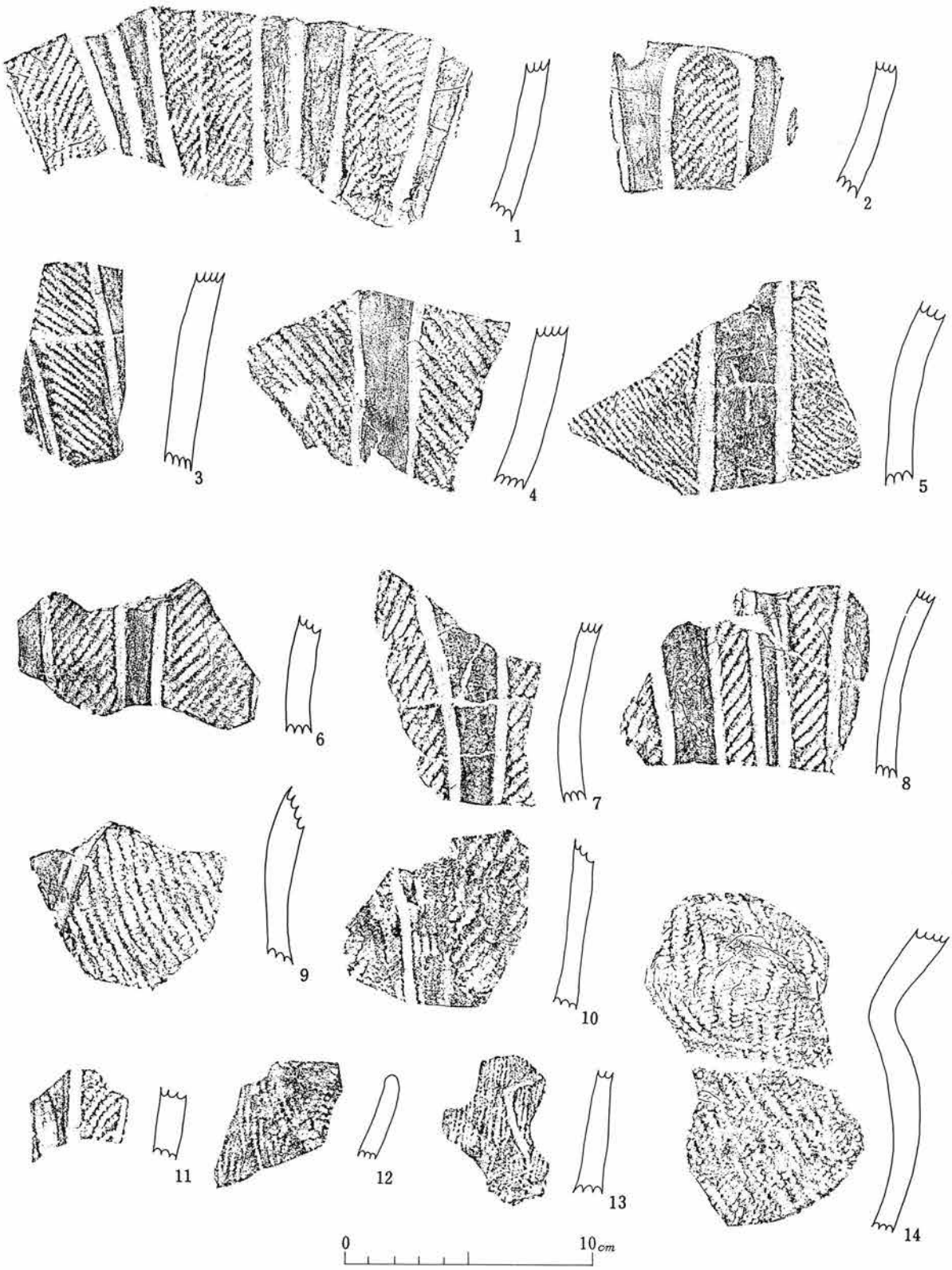
1～17　第1号住居跡

第152図　第II次調査 出土土器拓影（86）



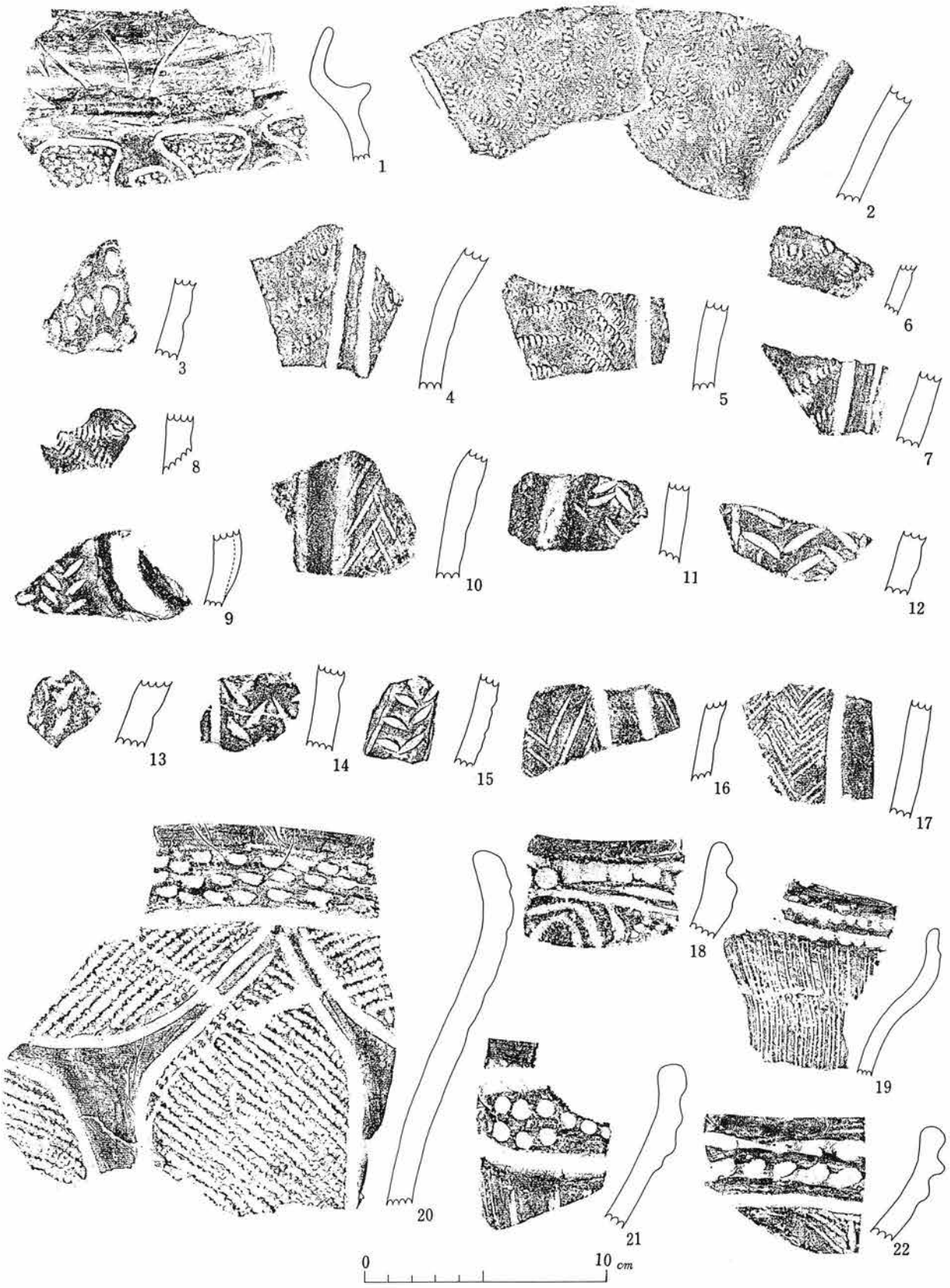
1～12　第1号住居跡

第153図　第II次調査 出土土器拓影（87）



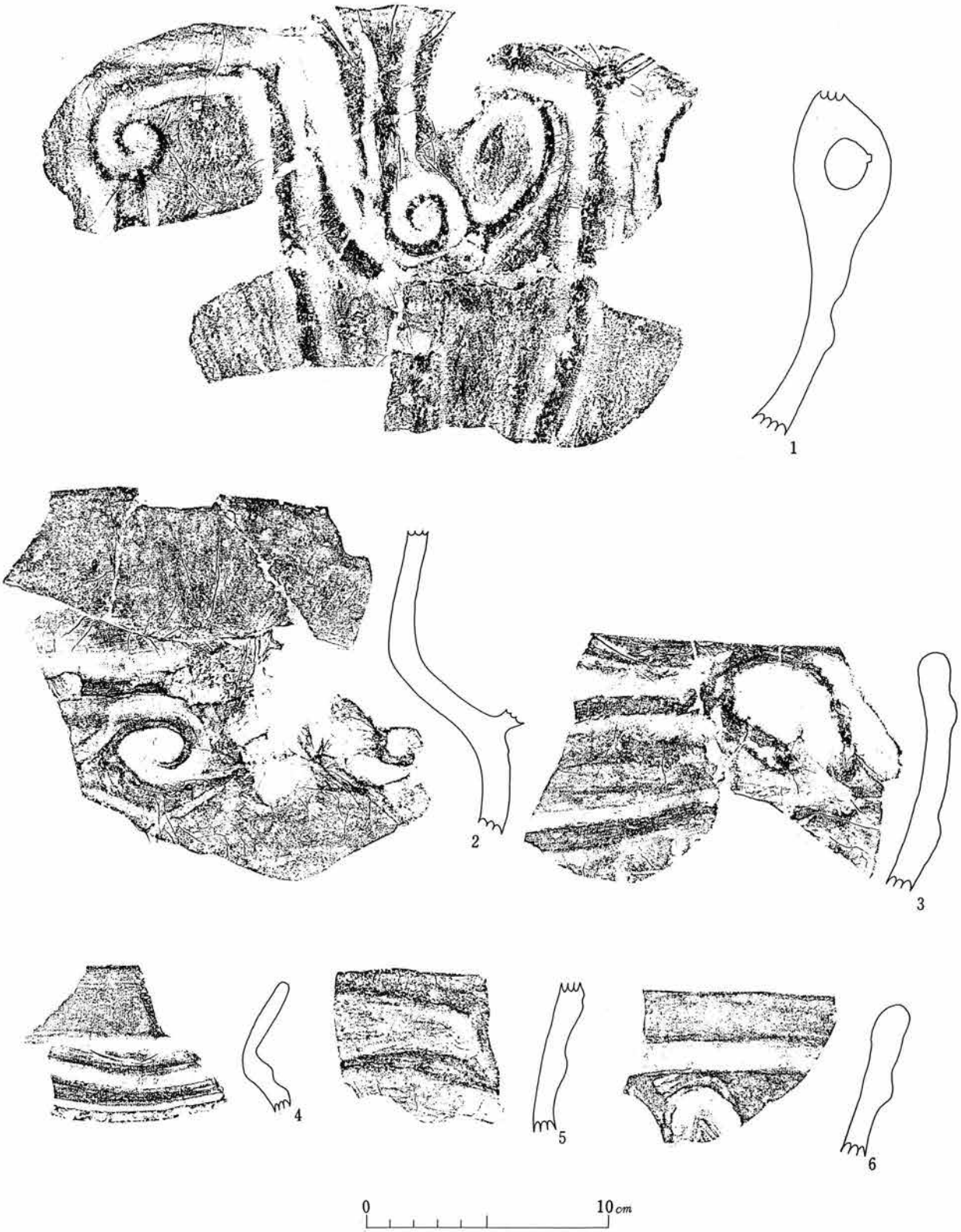
1～14　第1号住居跡

第154図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（88）



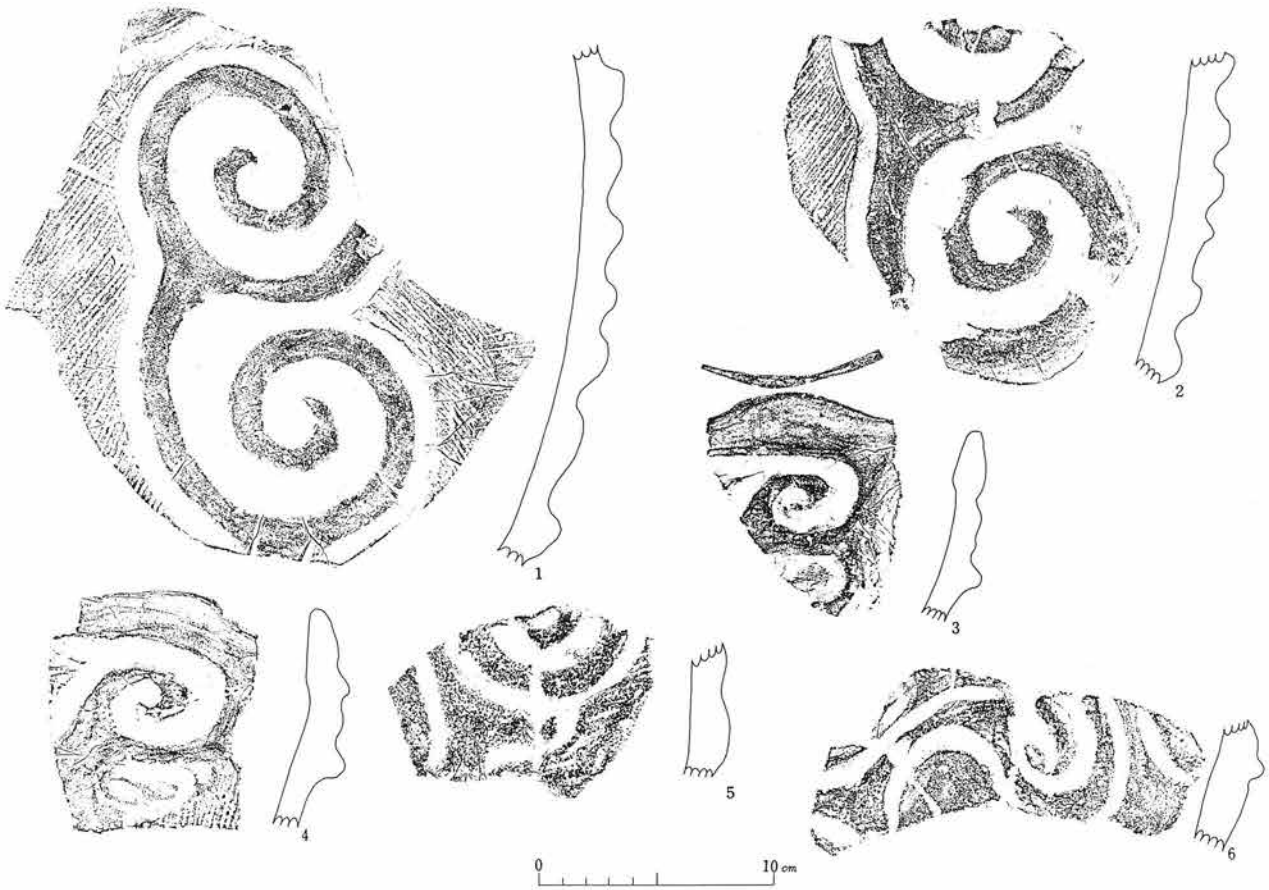
1～22　第1号住居跡

第155図　第II次調査出土土器拓影（89）



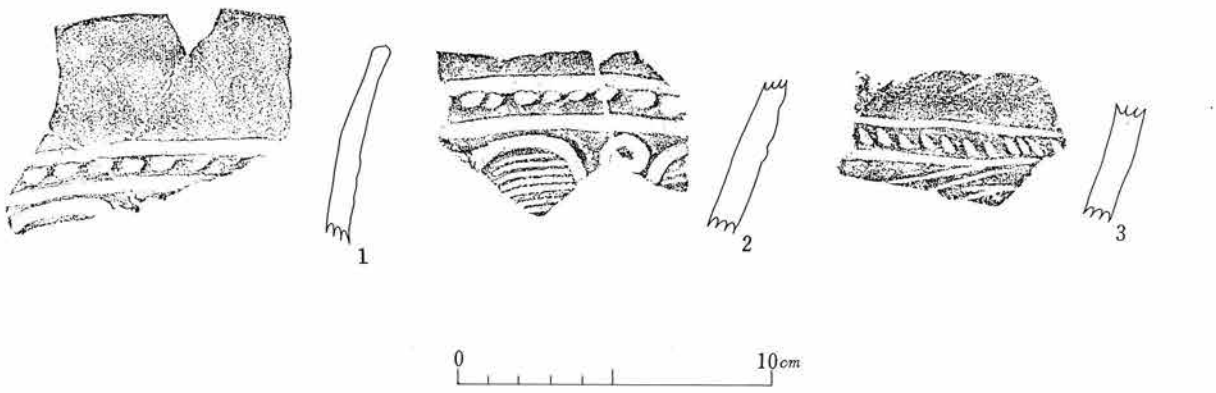
1～6　第1号住居跡

第156図　第II次調査 出土土器拓影（90）



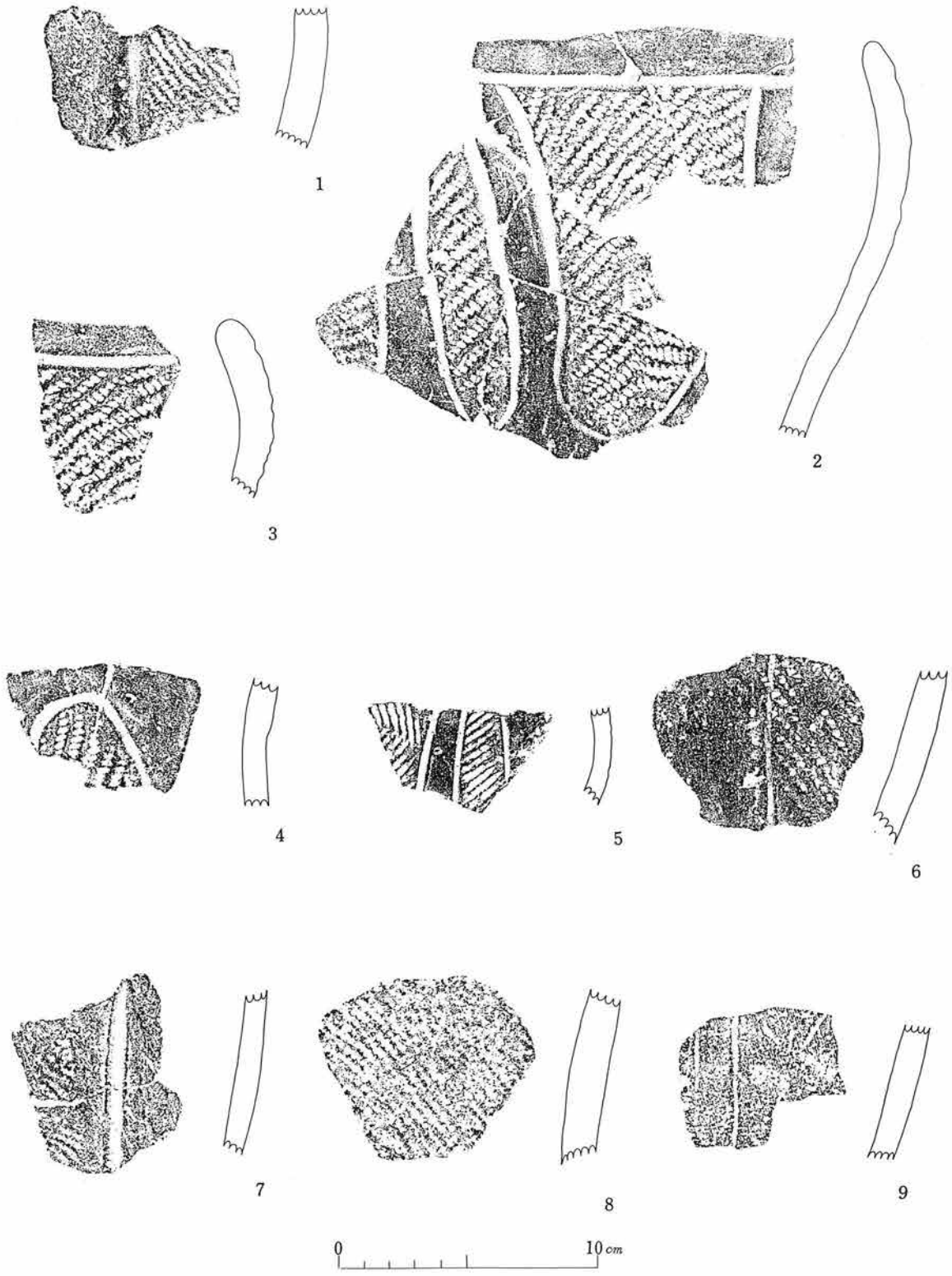
1～6　第1号住居跡

第157図　第II次調査 出土土器拓影（91）



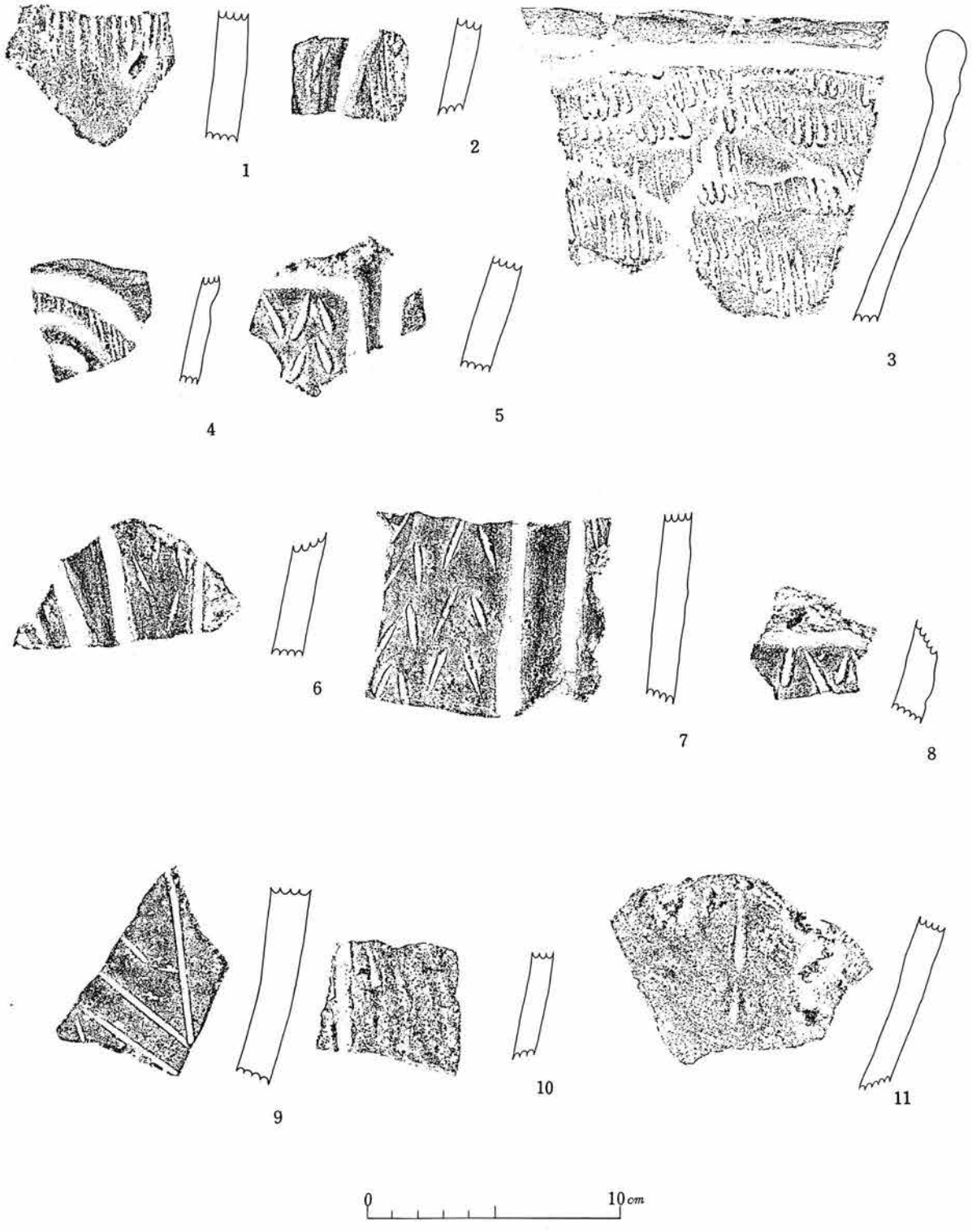
1～3　第1号住居跡

第158図　第II次調査 出土土器拓影（92）



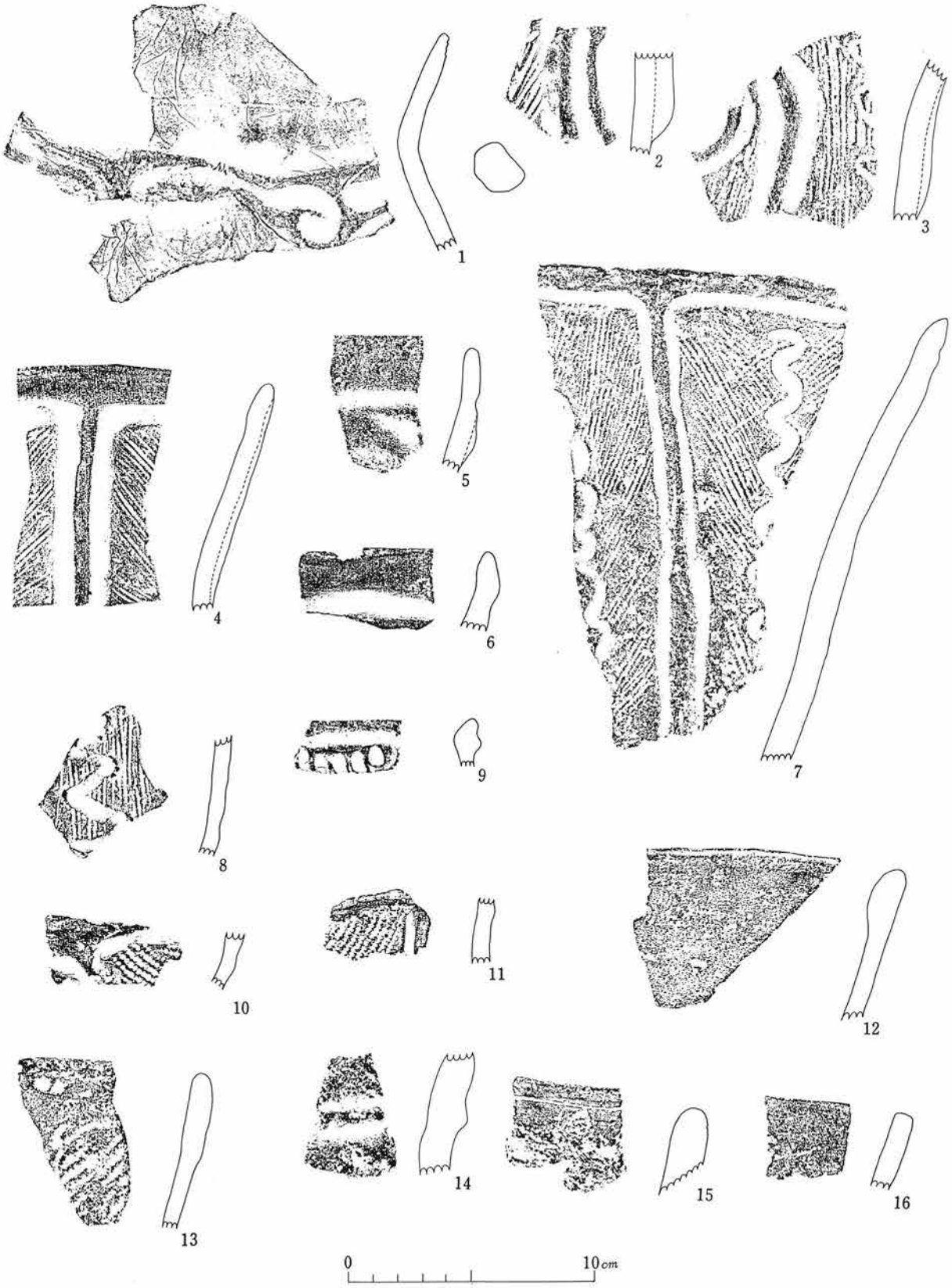
1～9　第6号住居跡

第159図　第II次調査 出土土器拓影（93）



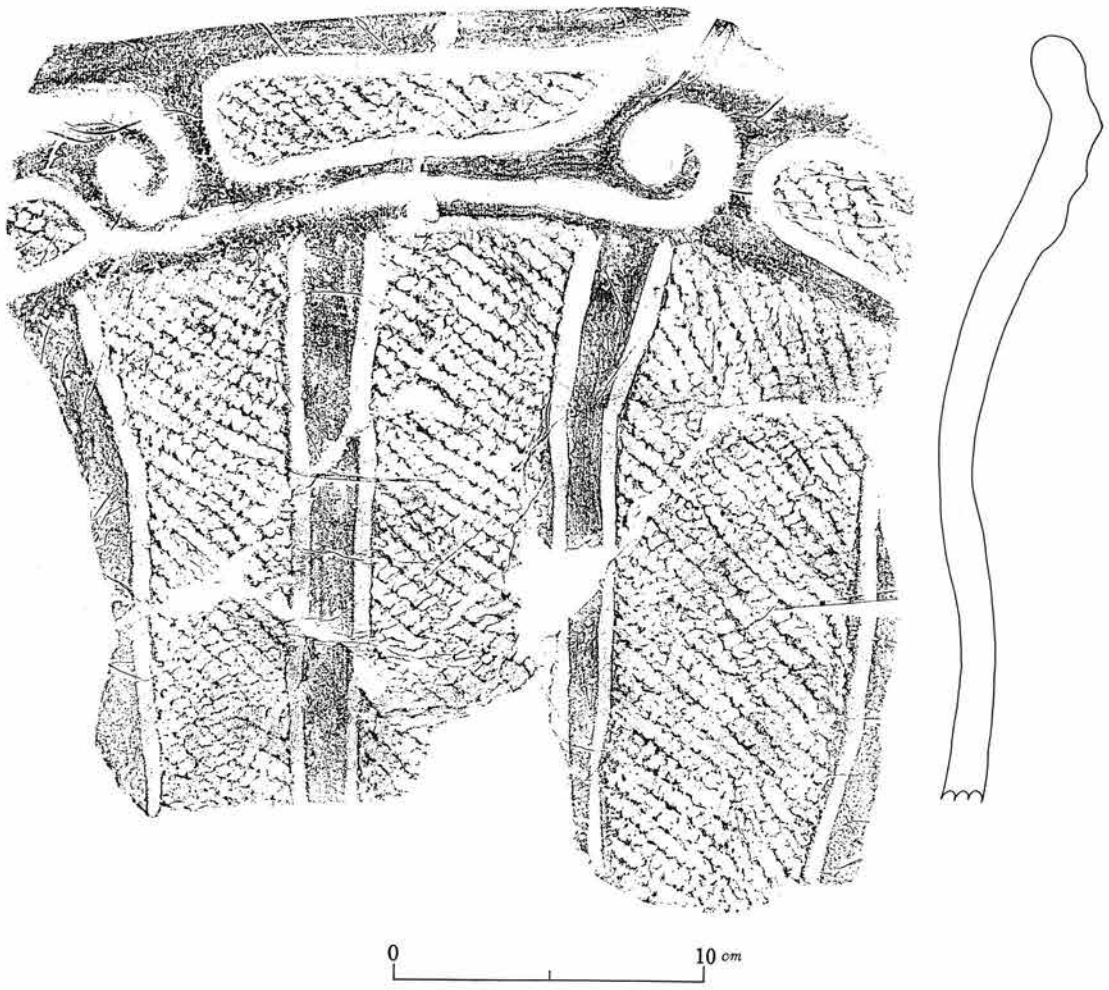
1～11　第6号住居跡

第160図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（94）



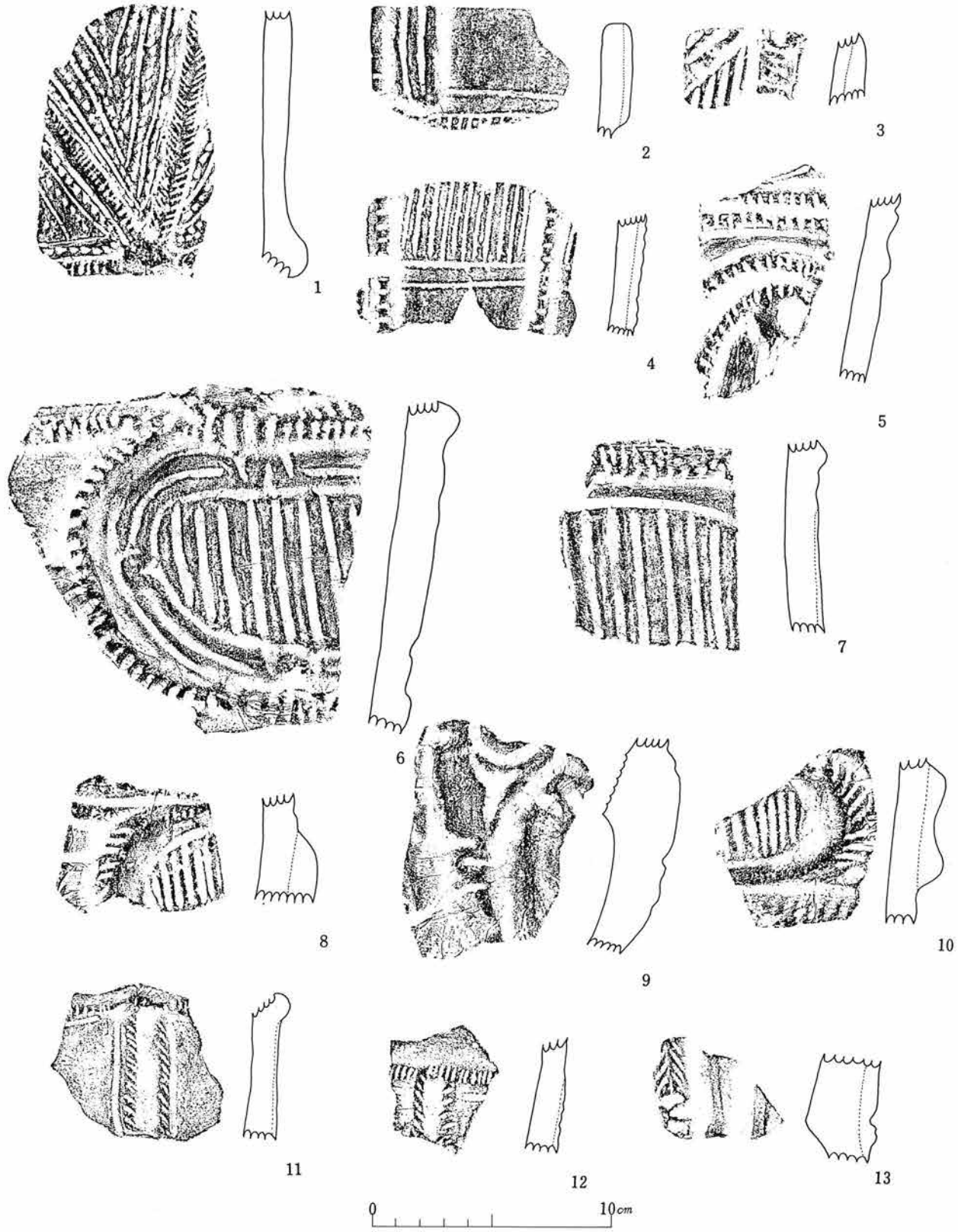
1～16　第1号配石土坑

第161図　第II次調査 出土土器拓影（95）



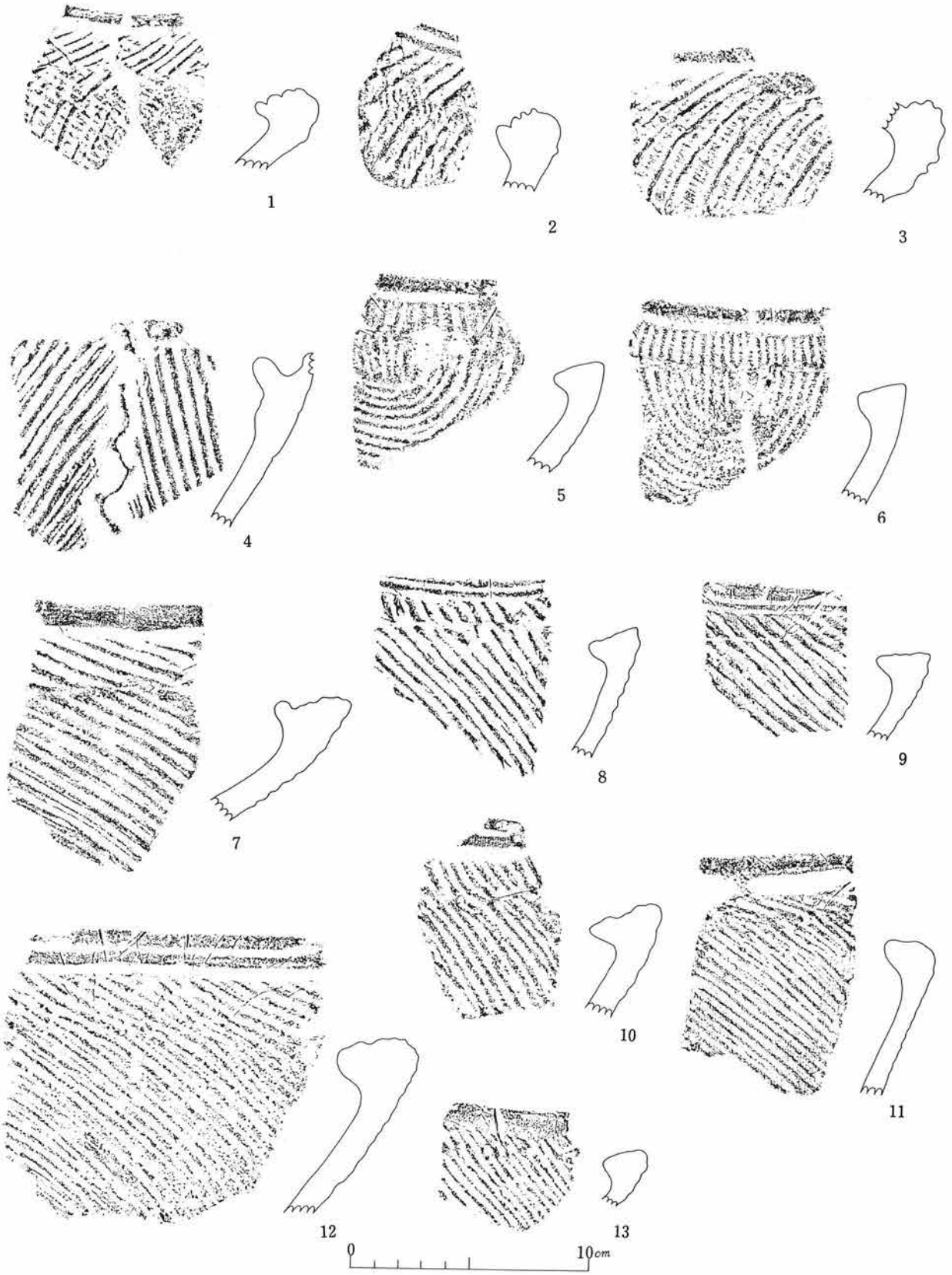
第1号土坑

第162図　第II次調査 出土土器拓影（96）



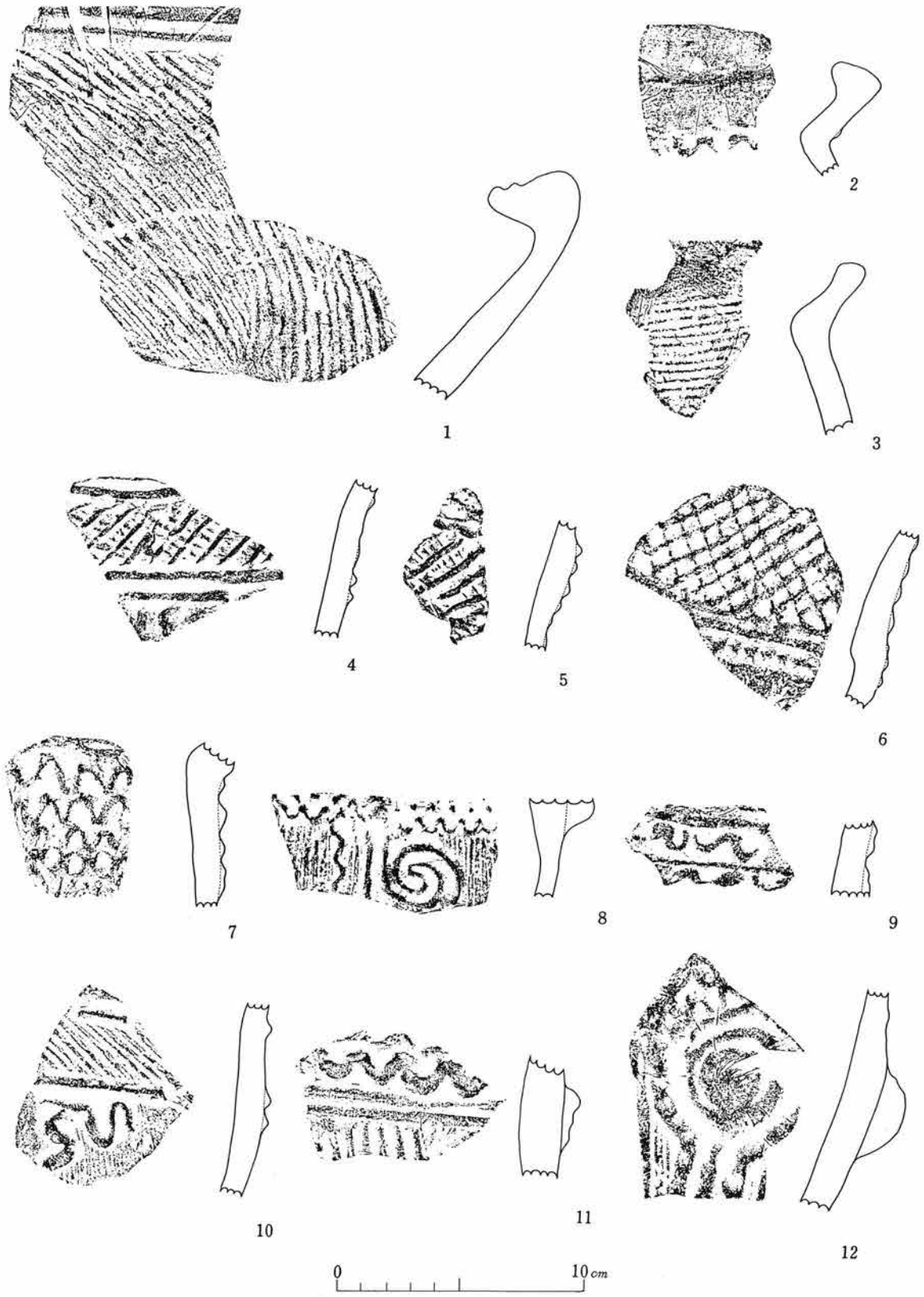
9.11.12 F－3グリッド，1.5.6.7.13 G－3グリッド，3.8.10 H－3グリッド，2.4 表採

第163図　第II次調査 出土土器拓影（97）



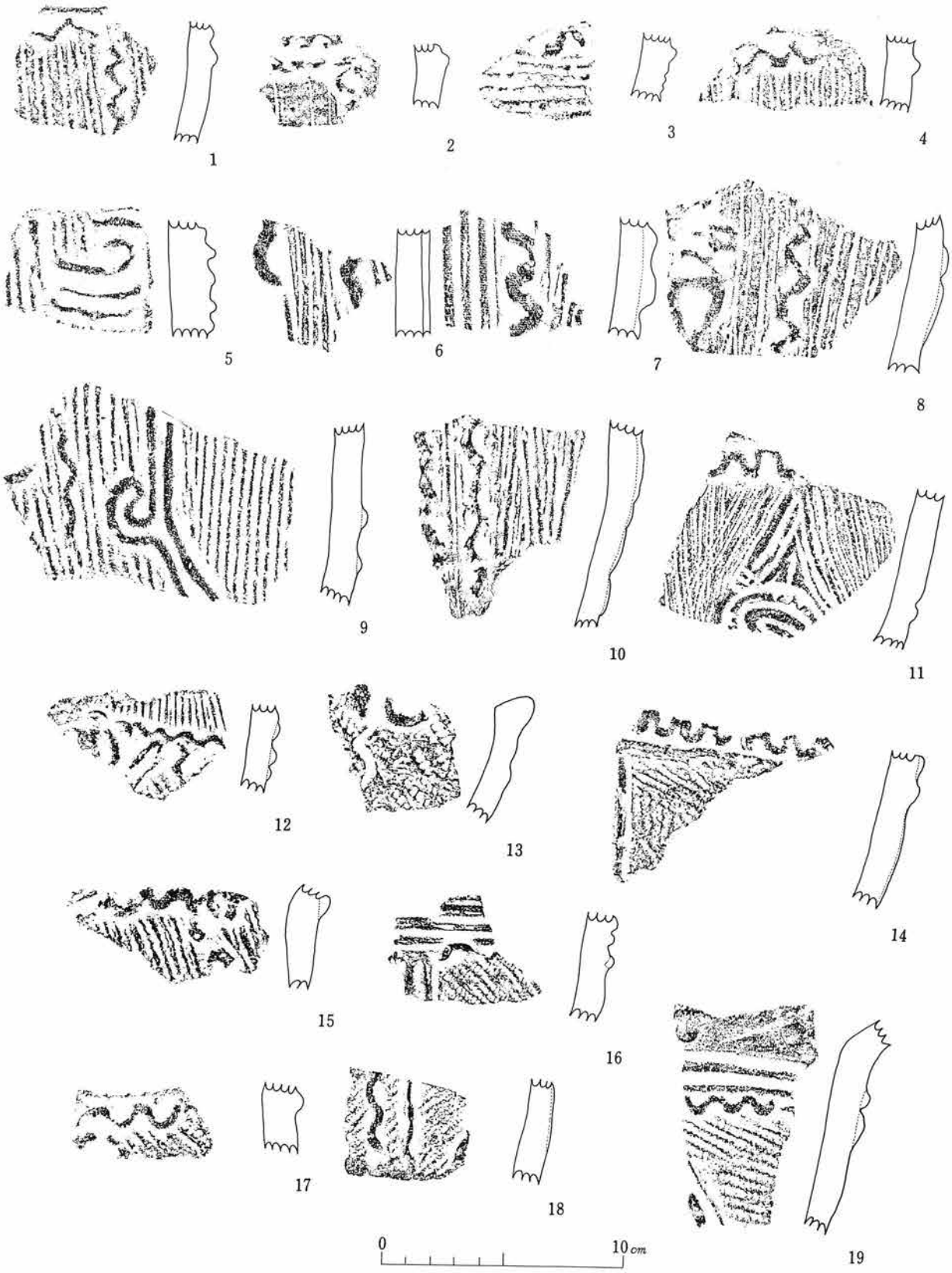
11 F－2グリッド，2.13 F－3グリッド，7 G－1グリッド，1.10.12 G－2グリッド，
5 H－1グリッド，4.6 H－2グリッド，8.9 表採

第164図　第II次調査 出土土器拓影（98）



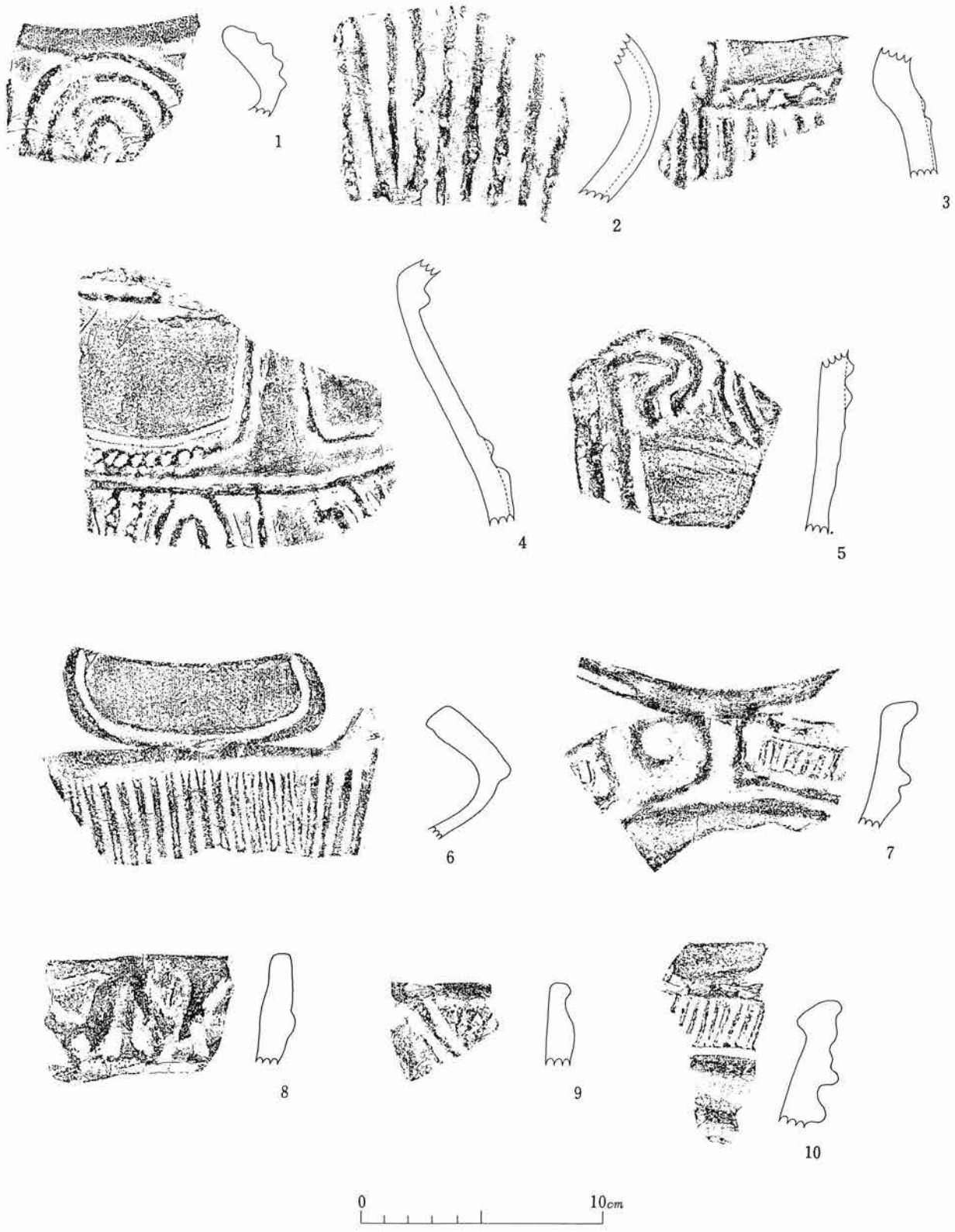
1 第1号住居跡，3 E－3グリッド，2．9．10 F－2グリッド，4．5．6 G－3グリッド，
7．8．11．12 H－2グリッド

第165図　第II次調査 出土土器拓影（99）



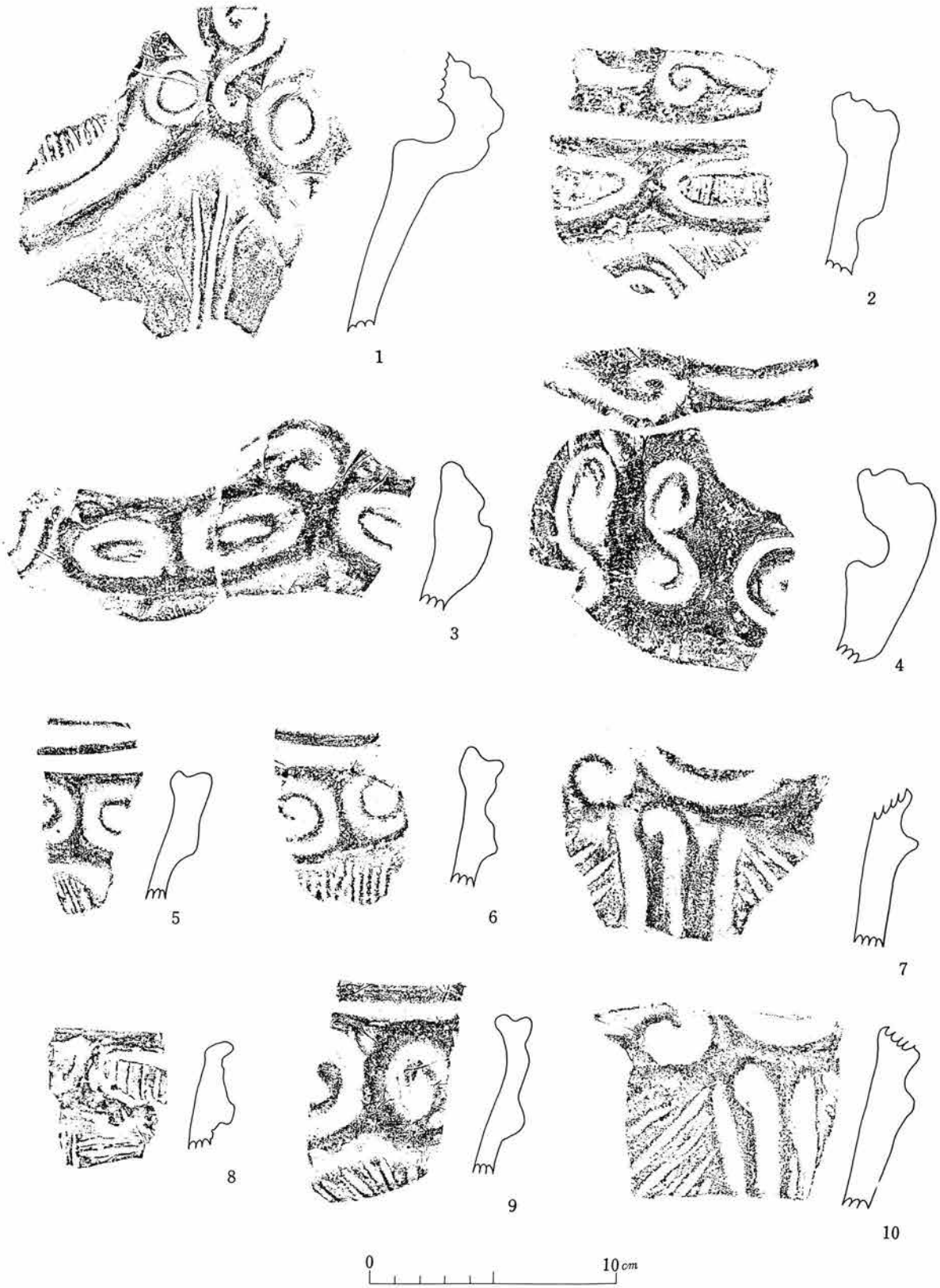
10 E－3グリッド，6．8．16 F－2グリッド，4．5．7．12．14 F－3グリッド，17．18 G－2グリッド，2．3．9．19 H－2グリッド，11．13 H－3グリッド，1．15 表採

第166図　第Ⅱ次調査 出土土器拓影（100）



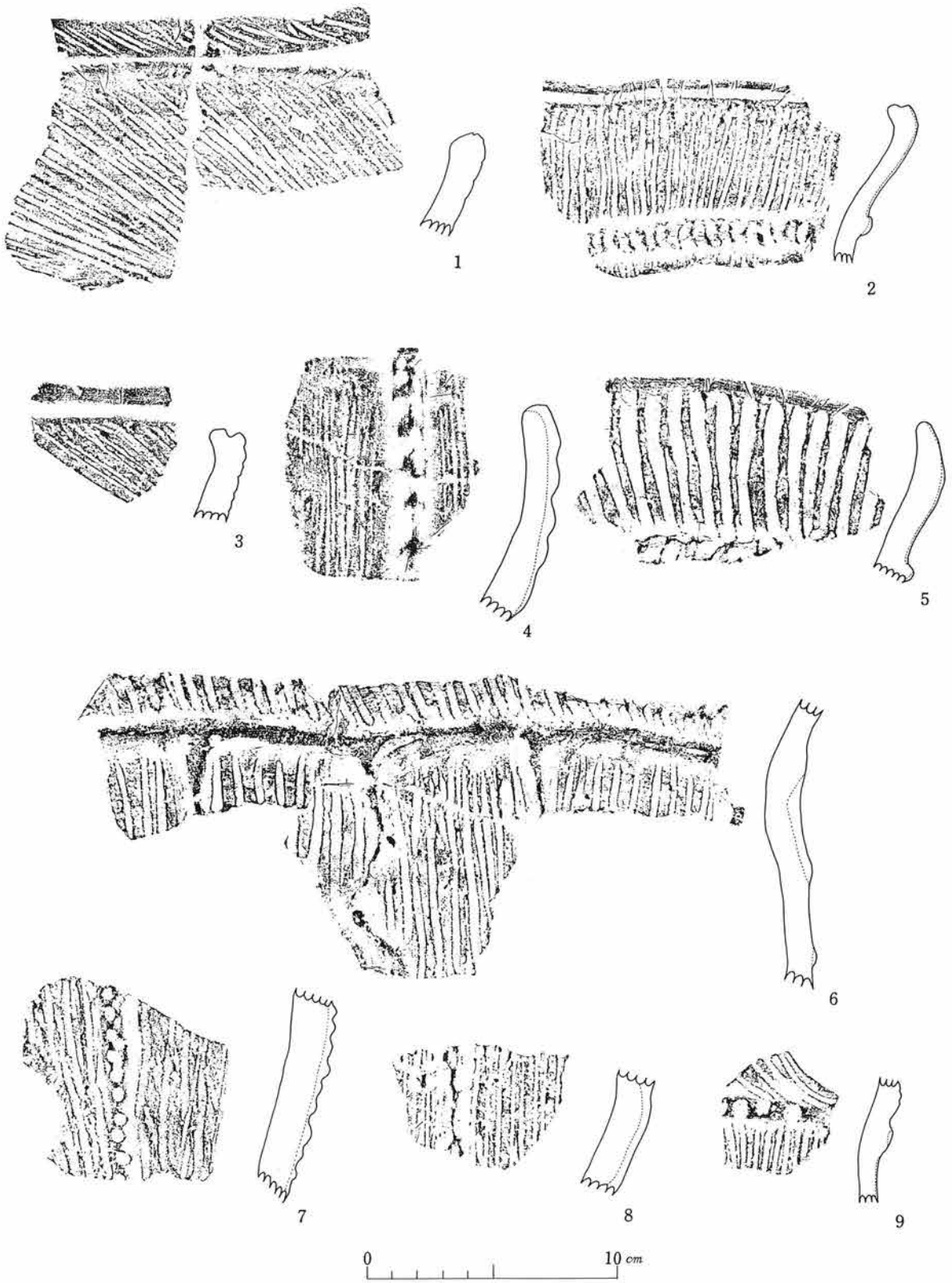
3 F－3グリッド，5．7．10 G－2グリッド，2．4 G－3グリッド，9 H－1グリッド，
1．6．8 H－3グリッド

第167図　第II次調査出土土器拓影（101）



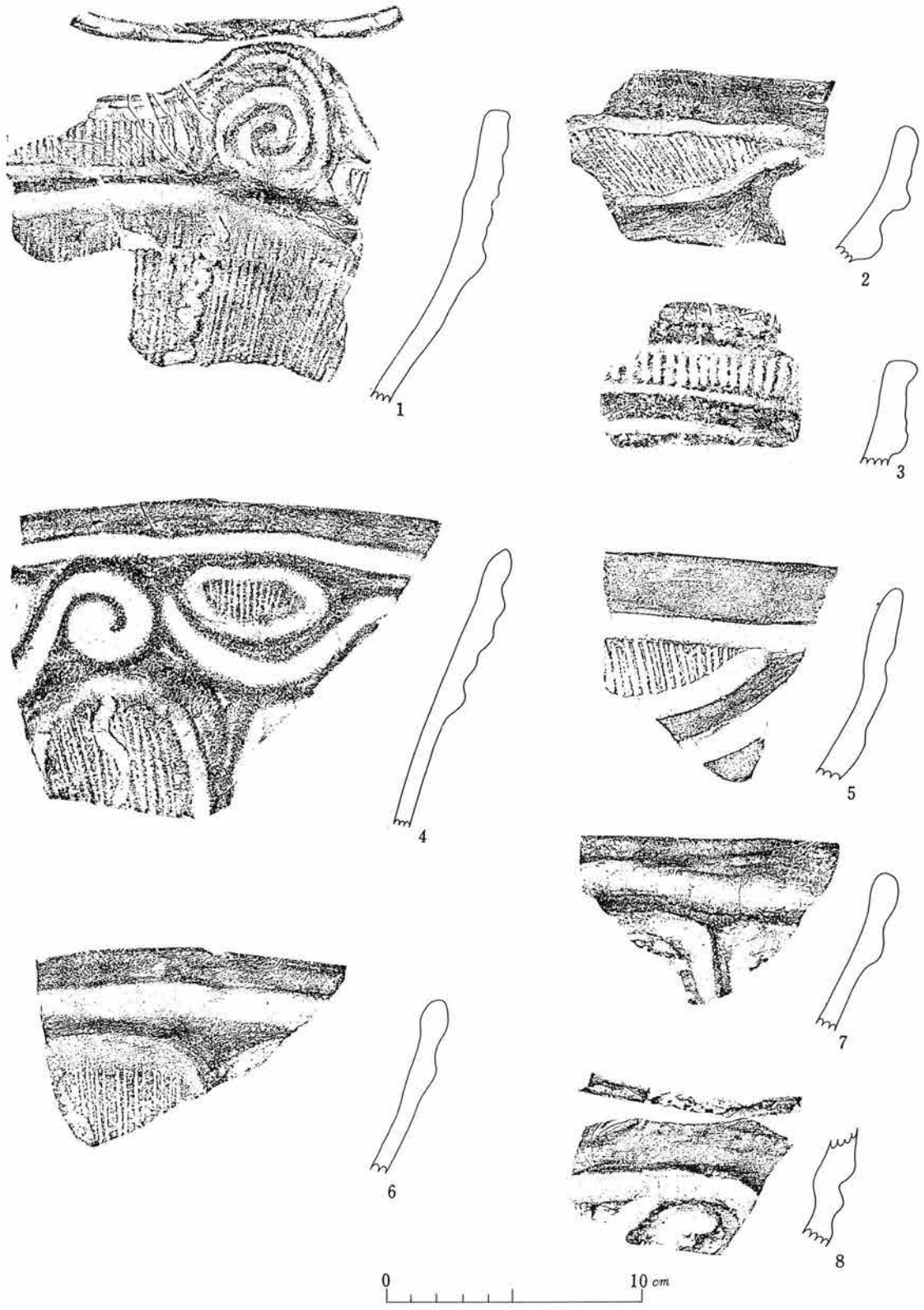
3～5．9．10 F－2グリッド，1．2．7 F－3グリッド，8 G－1グリッド，6 H－3グリッド

第168図　第II次調査 出土土器拓影（102）



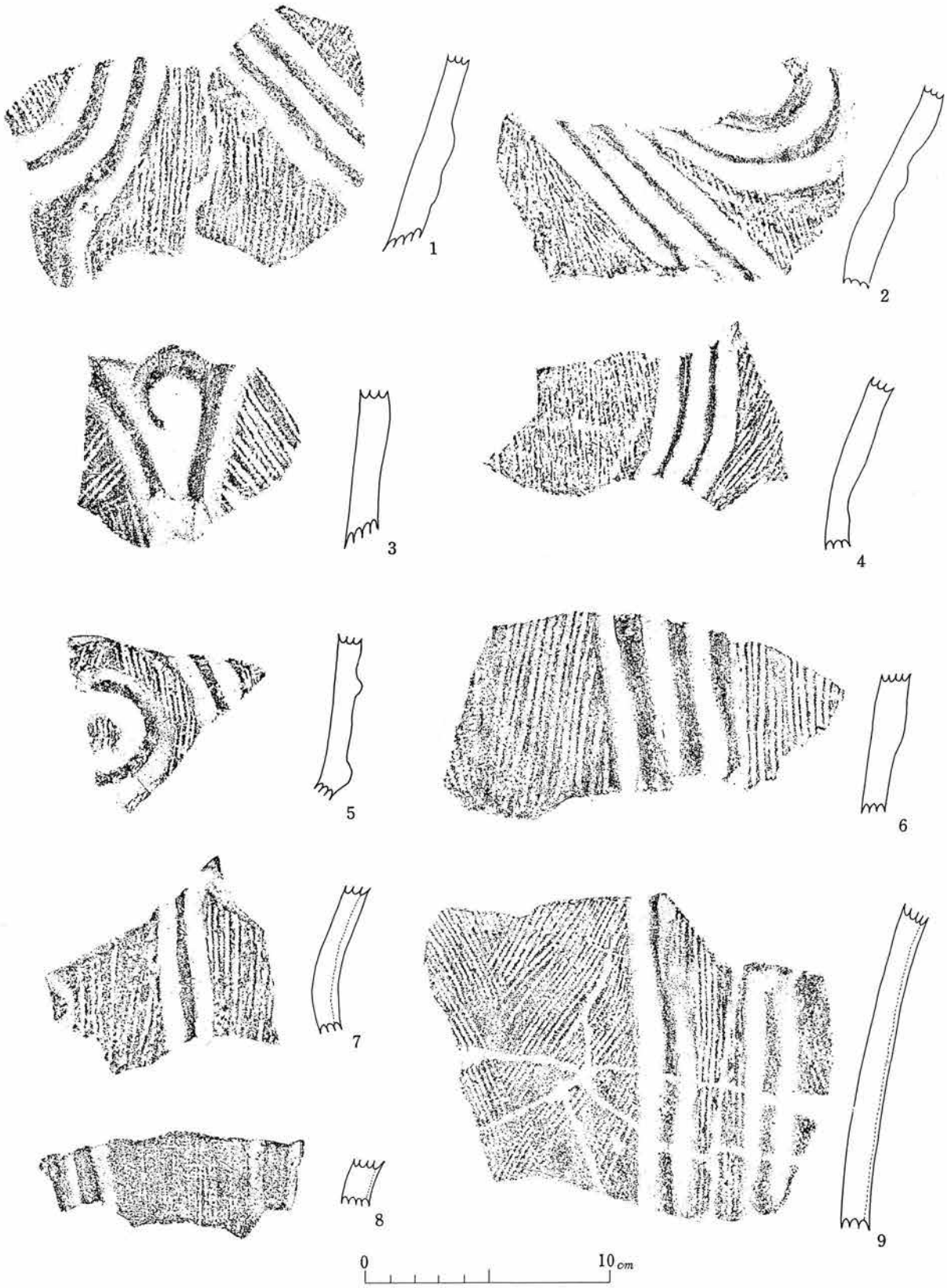
4 A－2グリッド，2．3．9 F－2グリッド，6 F－3グリッド，1 G－2グリッド，
8 H－2グリッド，7 I－1グリッド，5 表採

第169図　第II次調査 出土土器拓影（103）



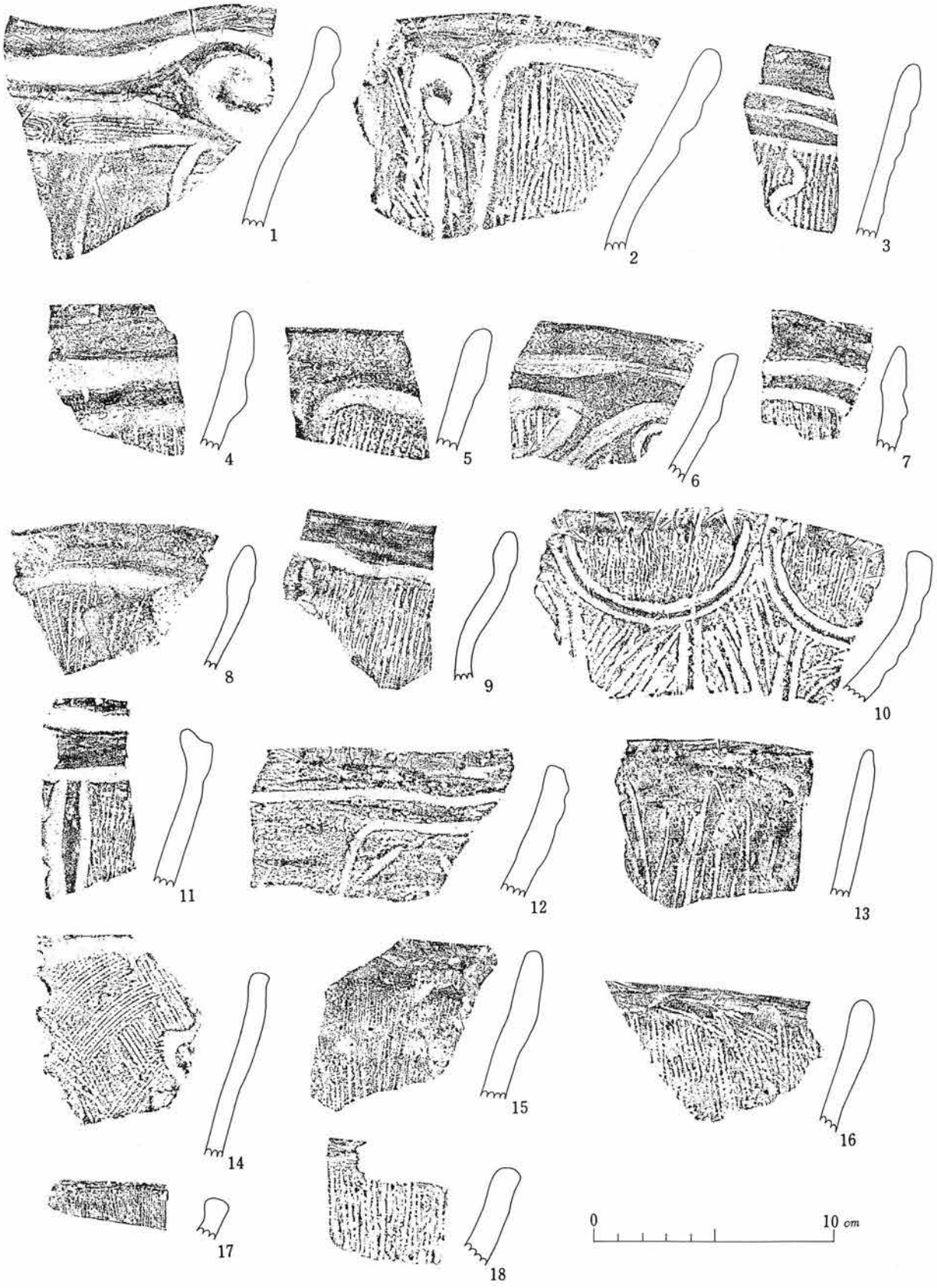
5．8 第1号住居跡，1．4 F－2グリッド，6 F－3グリッド，3 G－3グリッド，
2．7 H－2グリッド

第170図　第II次調査 出土土器拓影（104）



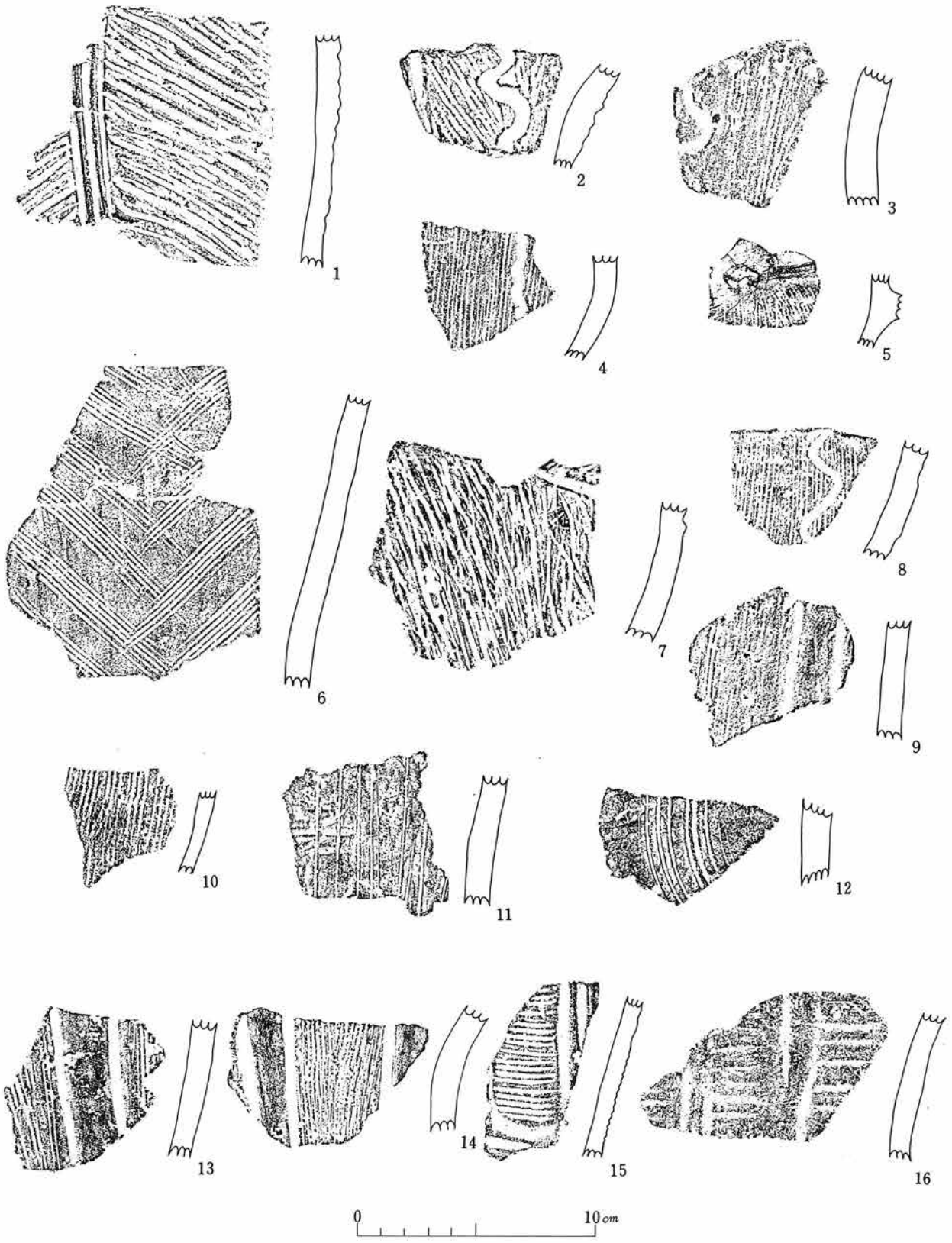
9 第1号住居跡，7 F－3グリッド．2．3 G－2グリッド，1．4 G－3グリッド，
6．8 グリッド，5 H－3グリッド

第171図　第II次調査 出土土器拓影（105）



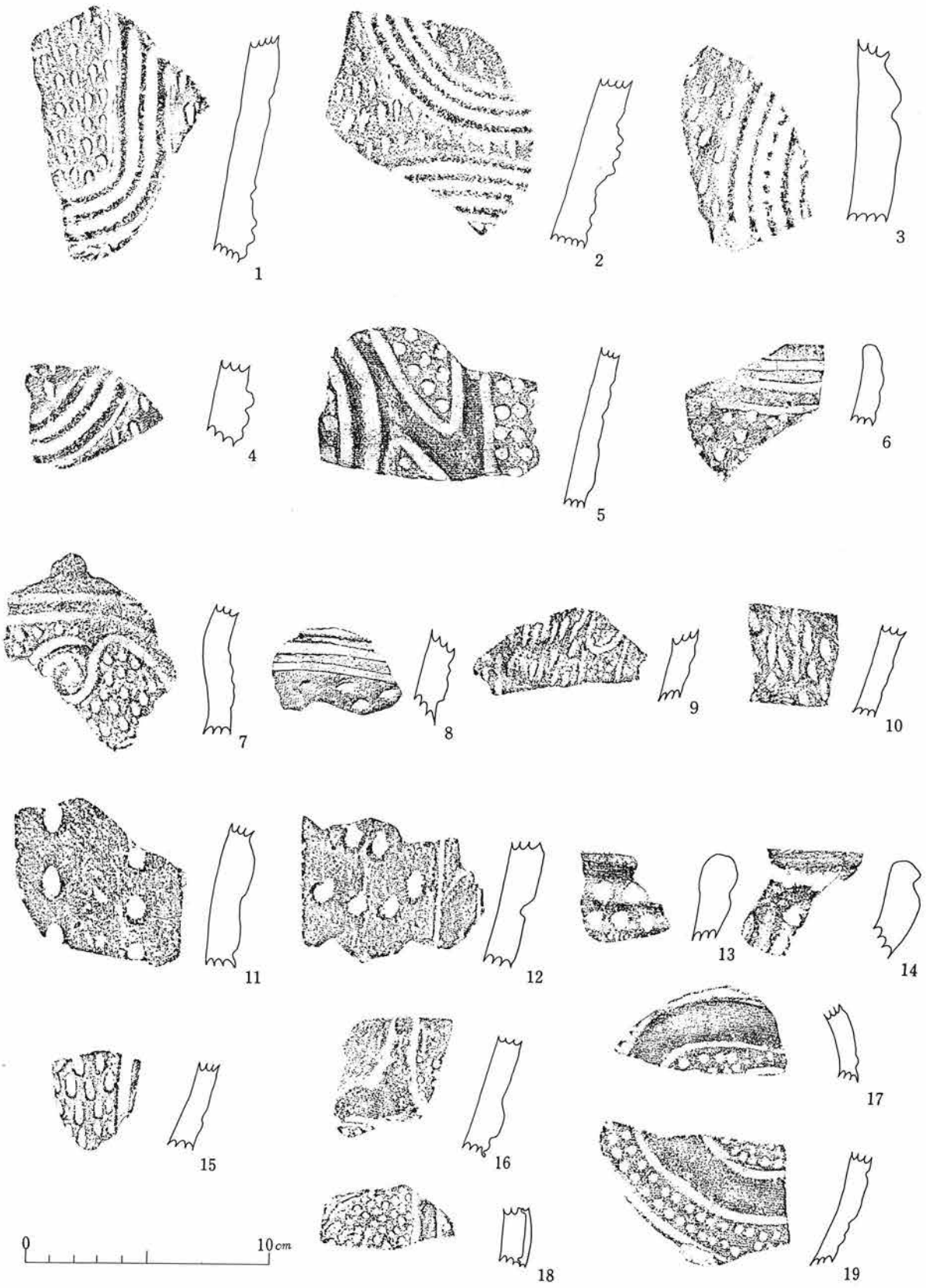
3 第1号住居跡，6．8 B－2グリッド，14 B－3グリッド，2 F－2グリッド，4．5．7 10.17.18 F－3グリッド，12 G－1グリッド，9.16 G－2グリッド，13 G－3グリッド，15 H－2グリッド，1.17 表採

第172図　第II次調査 出土土器拓影（106）



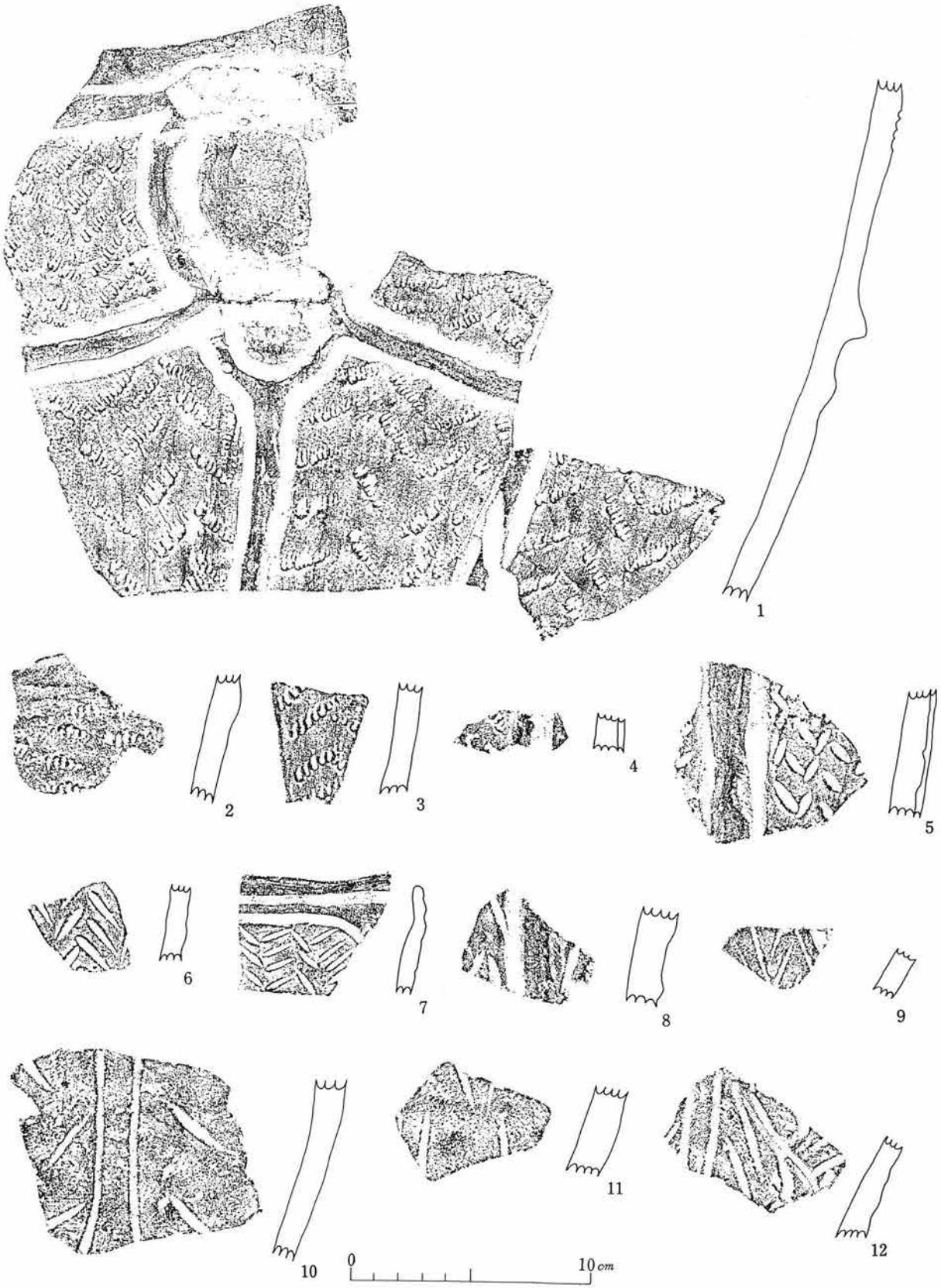
3．6．9．14 第1号住居跡，1．7 F－3グリッド，2．4．11．15 G－2グリッド，10．13．16 H2グリッド，5．8．12 H－3グリッド

第173図　第II次調査 出土土器拓影（107）



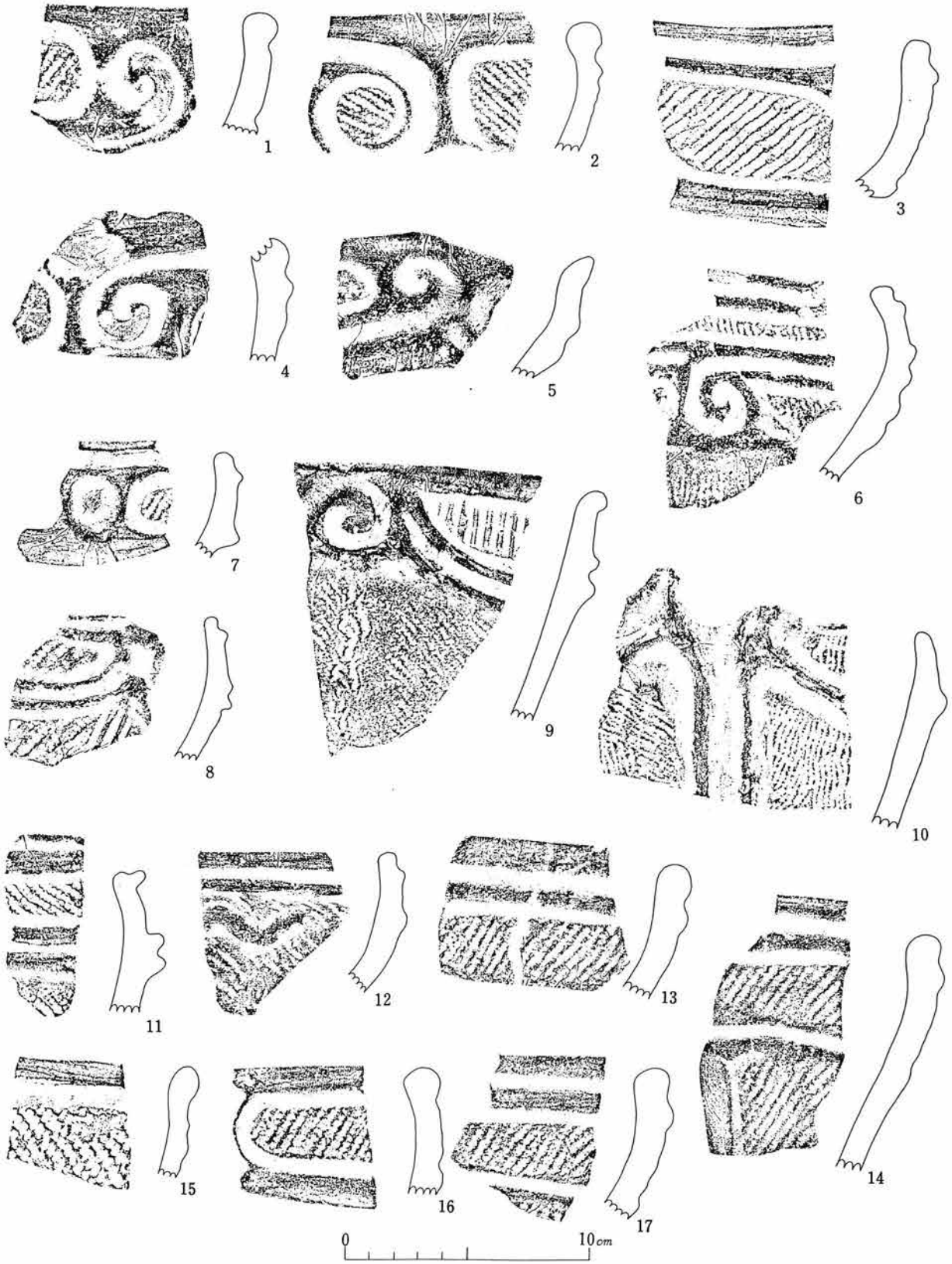
3．5．9．14 F－2グリッド，1．13 F－3グリッド，2．6．7．17．18．19 G－2グリッド，
4．15．16 H－2グリッド，8．11 H－3グリッド

第174図　第II次調査 出土土器拓影（108）



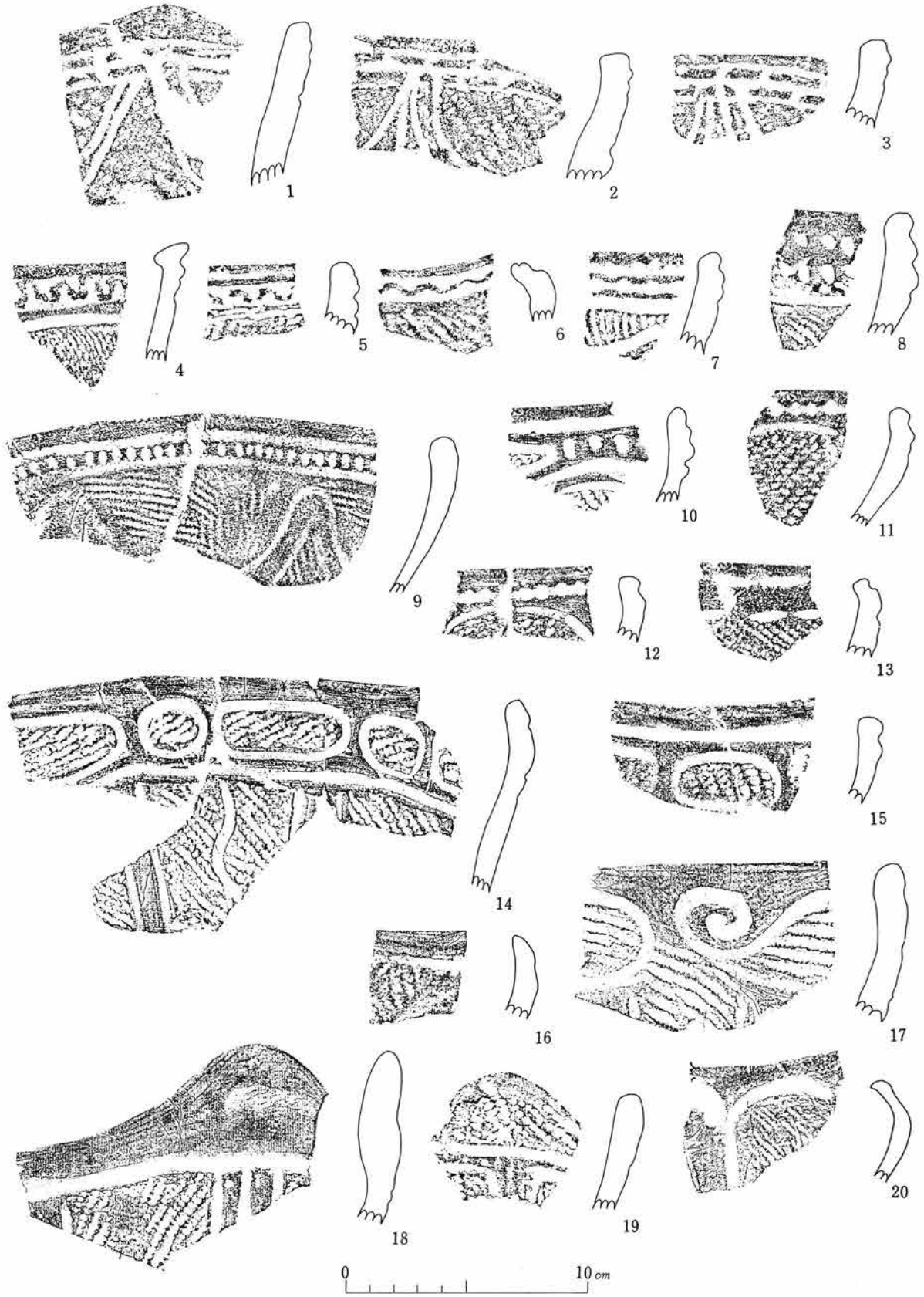
4 E－3グリッド，7 F－2グリッド，1．6 G－2グリッド，9．10 G－3グリッド，
11．12 H－2グリッド，2．12 H－3グリッド，4．5 表採

第175図　第II次調査 出土土器拓影（109）



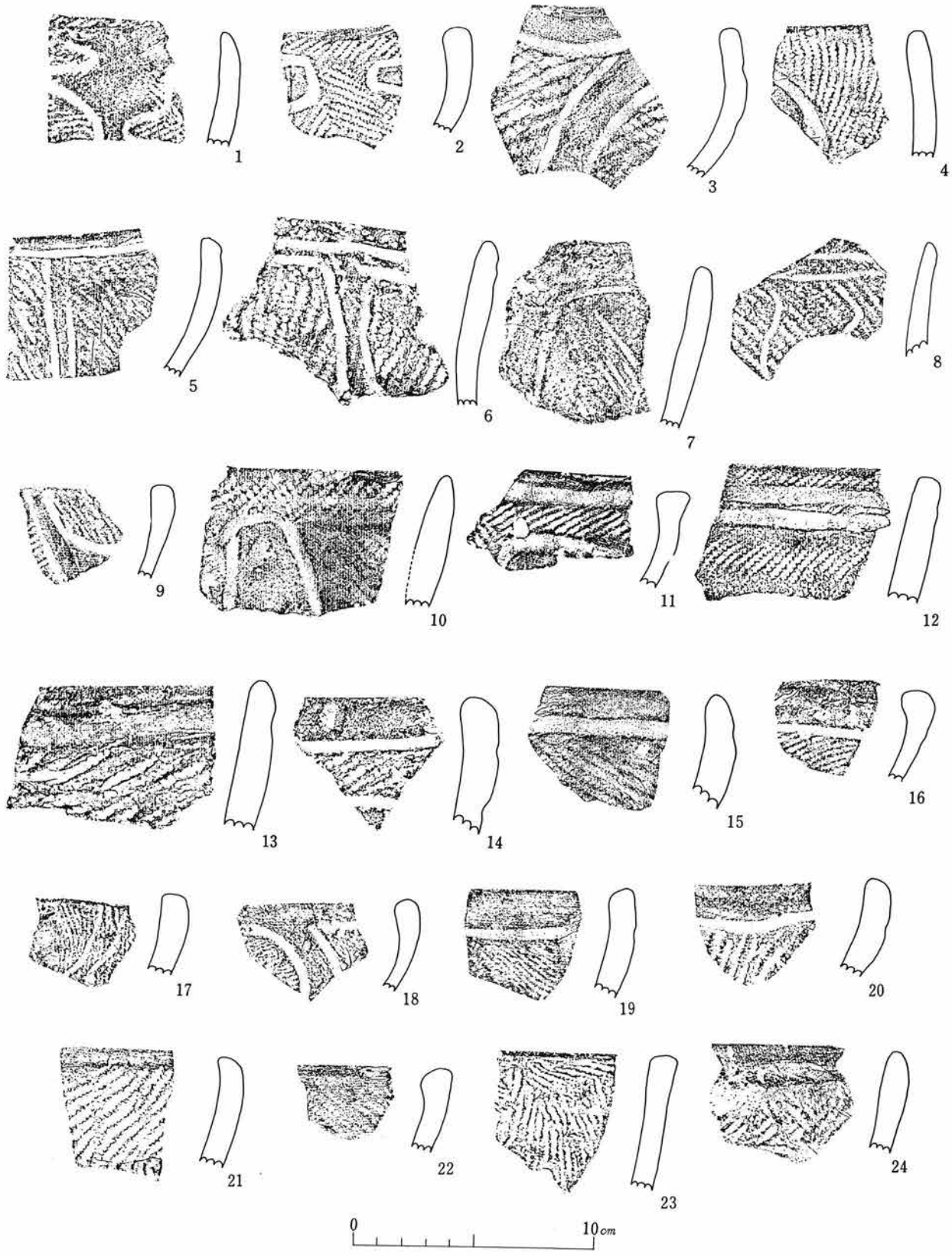
1．4　F－2グリッド，8．12．13．15　F－3グリッド，3．6．16．17　G－2グリッド，2．5．7　G－3グリッド，9．11　H－2グリッド，10．14　表採

第176図　第II次調査　出土土器拓影（1/10）



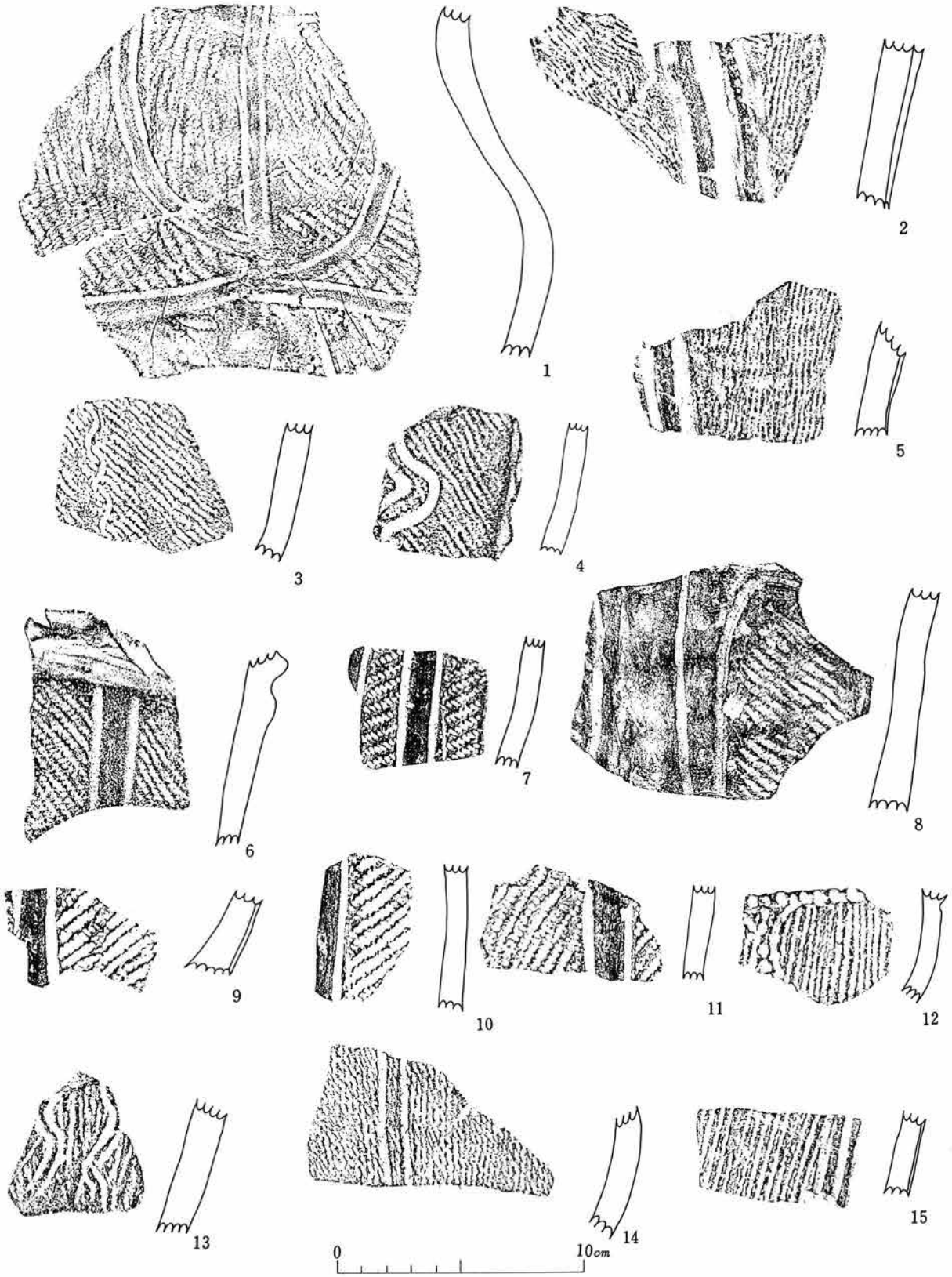
5.18 第1号住居跡，9 B－2グリッド，14.15 F－2グリッド，1～4.6～12 F－3グリッド，
8 I－1グリッド，16 H－2グリッド，10.20 H－3グリッド，13.17.19 表採

第177図　第II次調査 出土土器拓影（111）



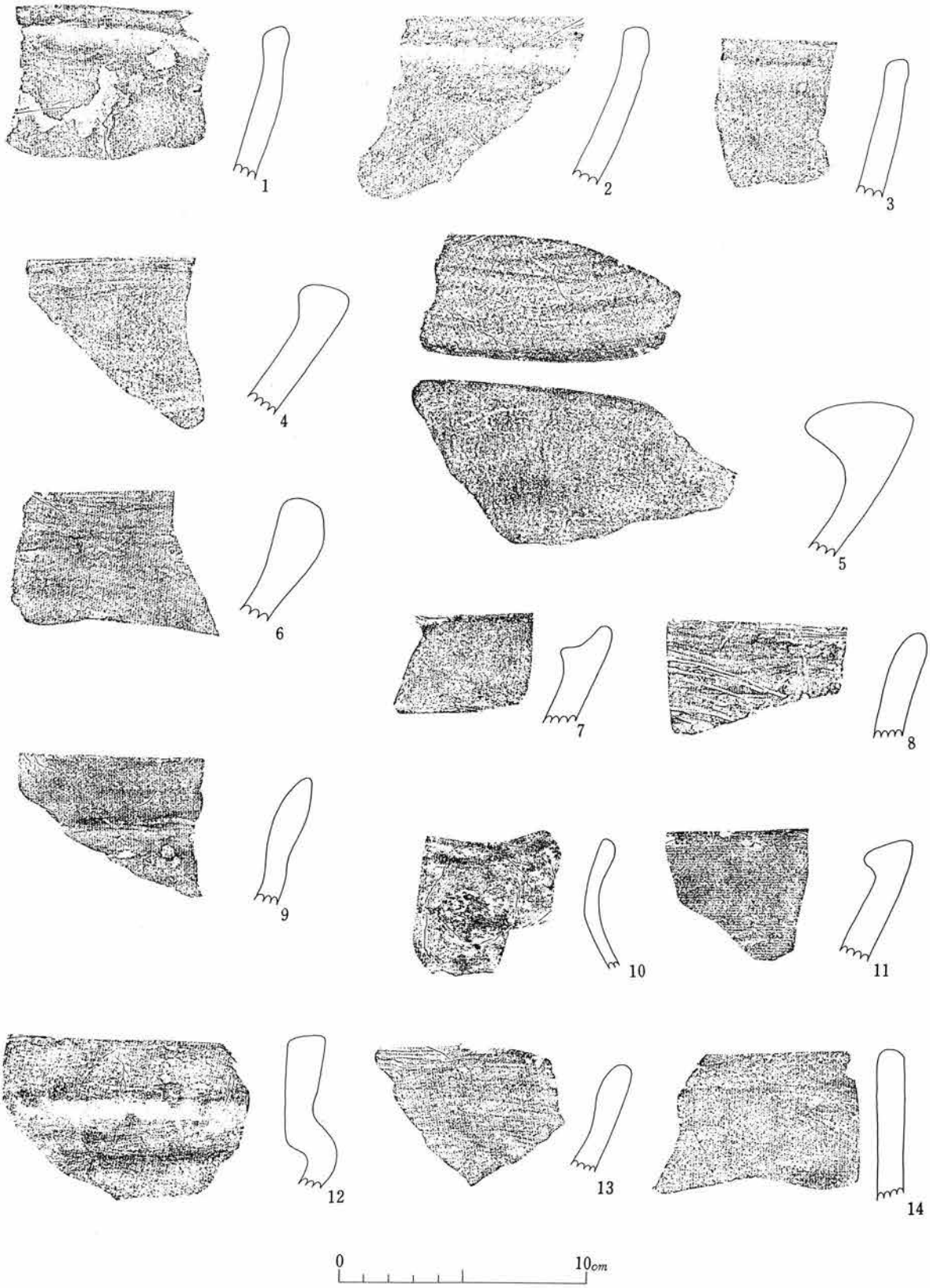
3 E－3グリッド，9 F－2グリッド，14.19.24 F－3グリッド，18 G－1グリッド，11.20.21 G－2グリッド，1．4，10.12.23 G－3グリッド，17 H－1グリッド，8．15．16.22 H－2グリッド，5．6 H－3グリッド，2．7 I－1グリッド，13 表採

第178図　第II次調査 出土土器拓影（112）



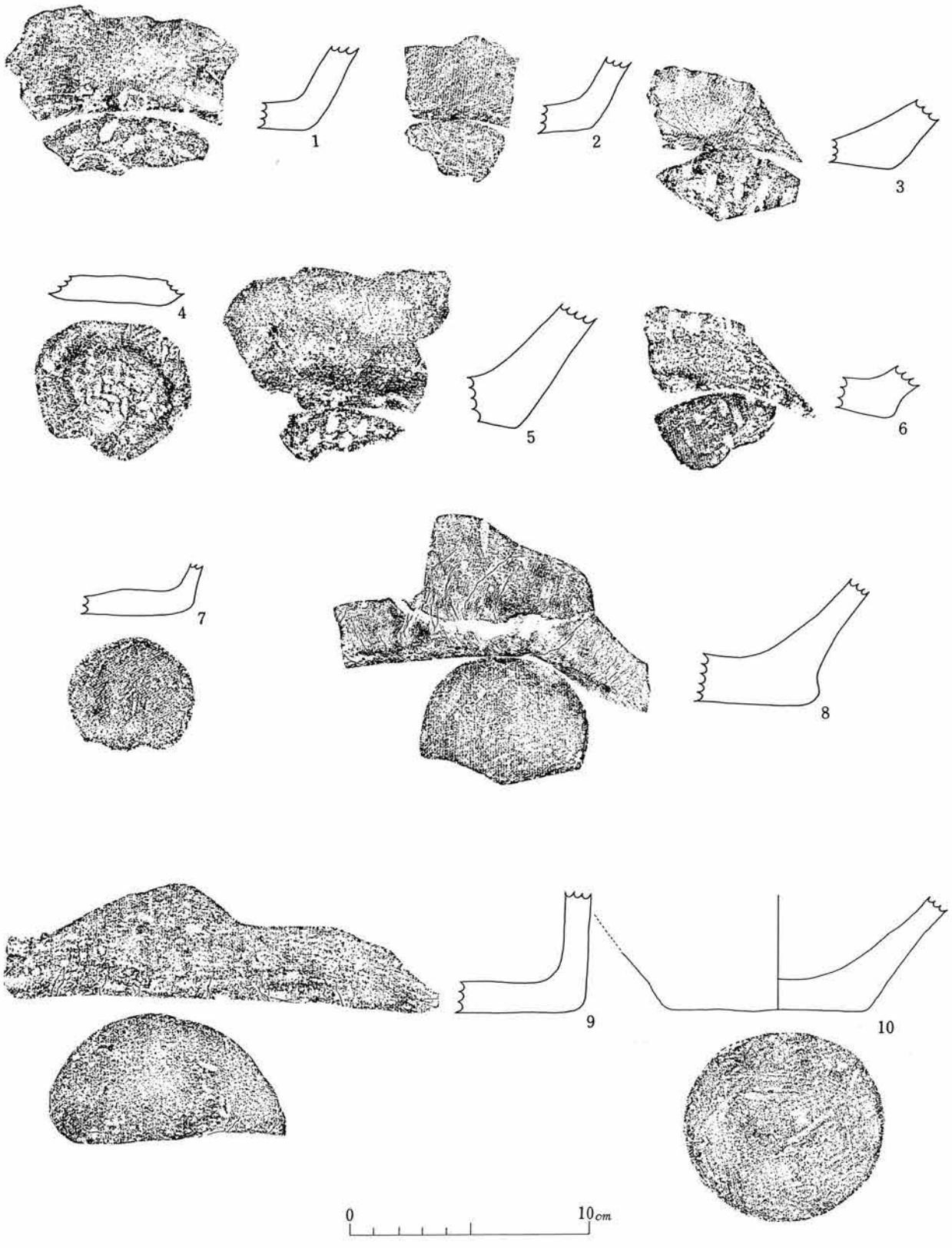
12 F－2グリッド，7 F－3グリッド，3．4．9．10.13 G－2グリッド，1．14 G－3グリッド，
2．5．11 H－2グリッド，6．8．15 H－3グリッド

第179図　第II次調査 出土土器拓影（113）



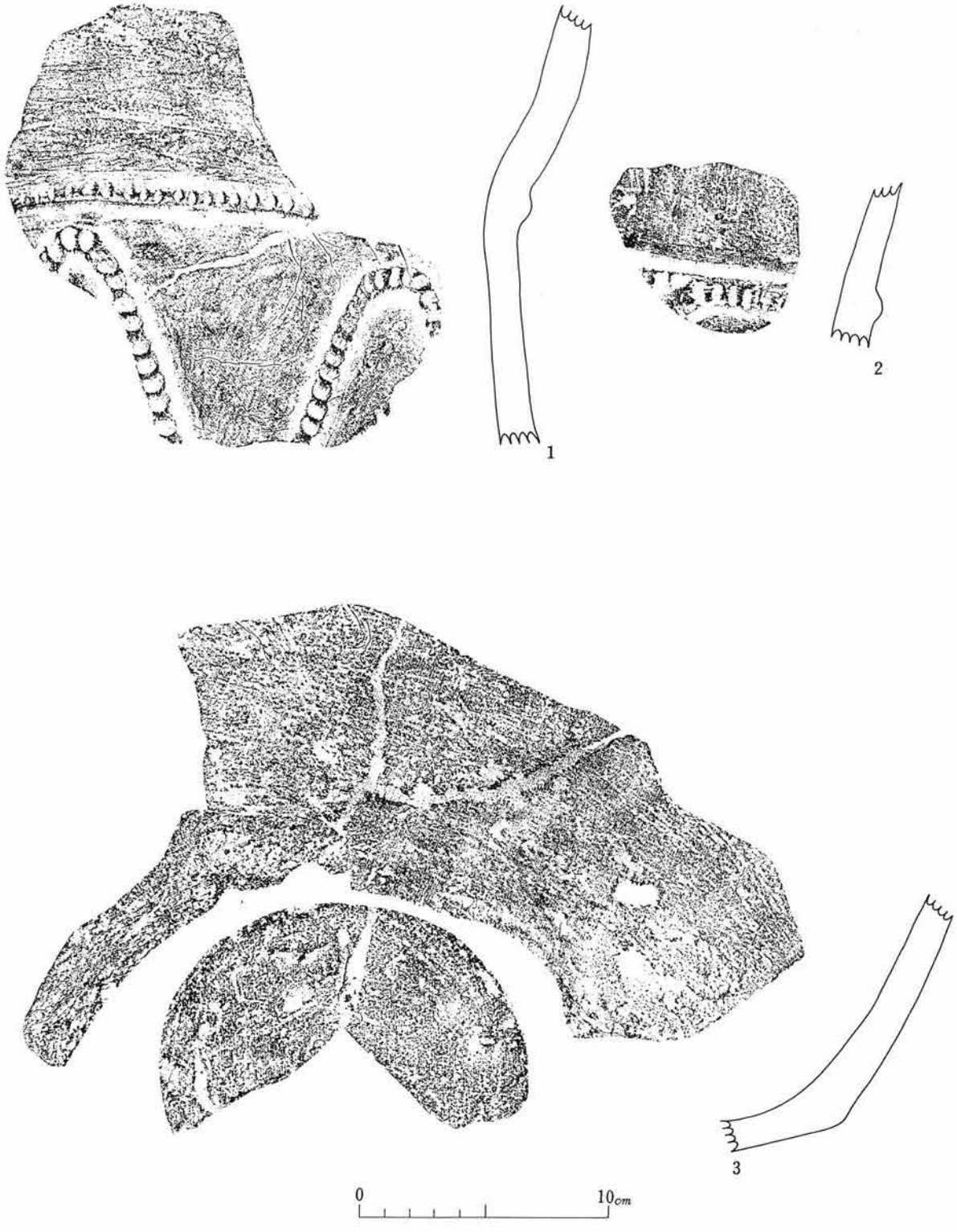
9.10 F－2グリッド，7.8.13 F－3グリッド，6.11 G－2グリッド，1.14 G－3グリッド，
4.12 H－2グリッド，5 H－3グリッド

第180図　第II次調査 出土土器拓影（114）



7.10 F－3グリッド，6 G－2グリッド，1.2.5.9 G－3グリッド，4 H－1グリッド，3.8 表採

第181図　第II次調査 出土土器拓影（115）

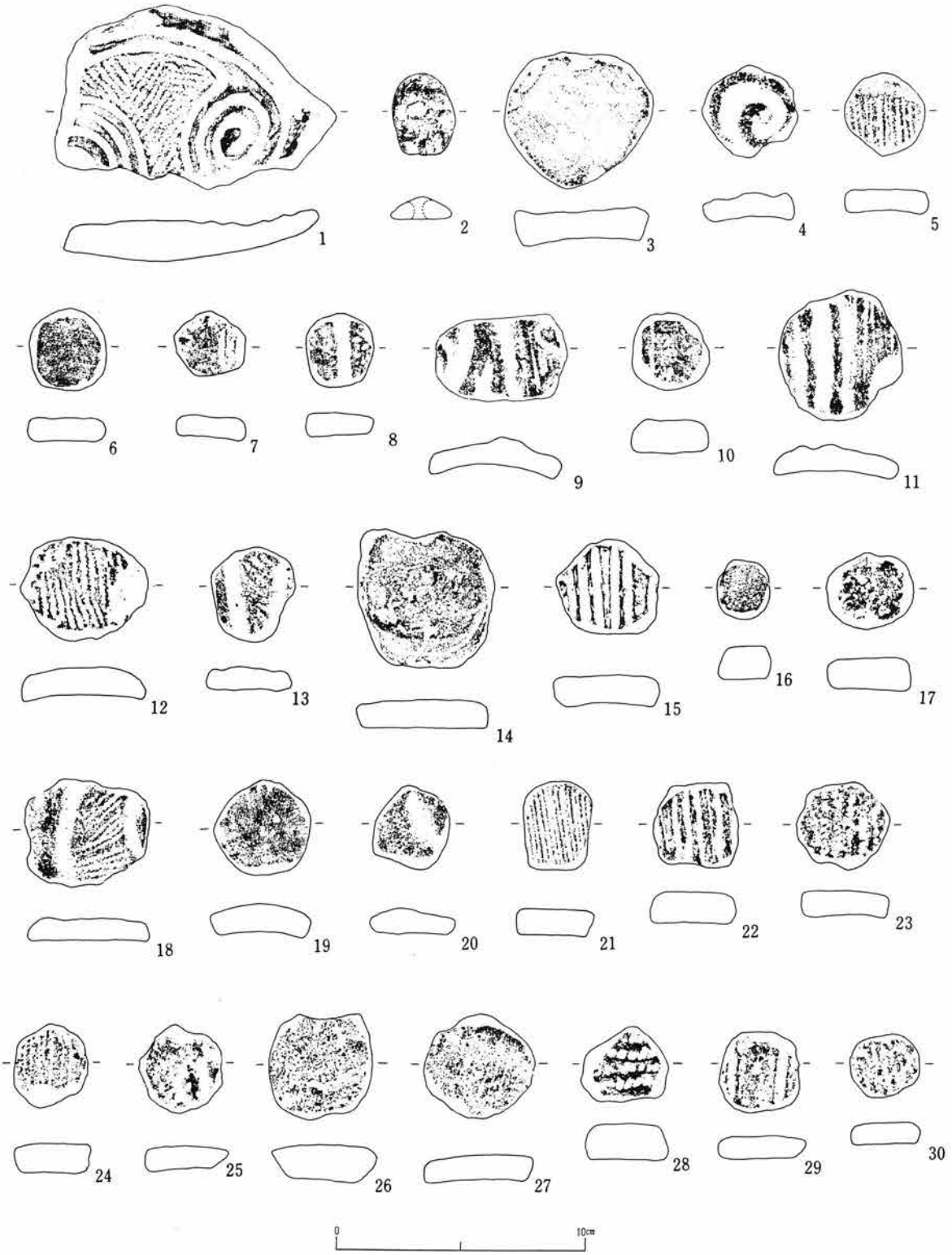


1～3　G－3グリッド

第182図　第II次調査 出土土器拓影（116）

土製品（第168図）

土製品は30点図示した。1は渦巻状の沈線と縄文の土器片を利用したもの。2は孔が穿たれている。その他は、円形・楕円形・長方形などであり、各種の文様の土器を使っている。



1．3～5 第1号住居跡，6 第4号住居跡，7 第6号住居跡，8 B－3グリッド，9．10 D－3グリッド，11～13 F－2グリッド，14.15 F－3グリッド，16～19 G－2グリッド，20～22 G－3グリッド，23 H－1グリッド，24.25 H－2グリッド，26.27 H－3グリッド 28～30 表採

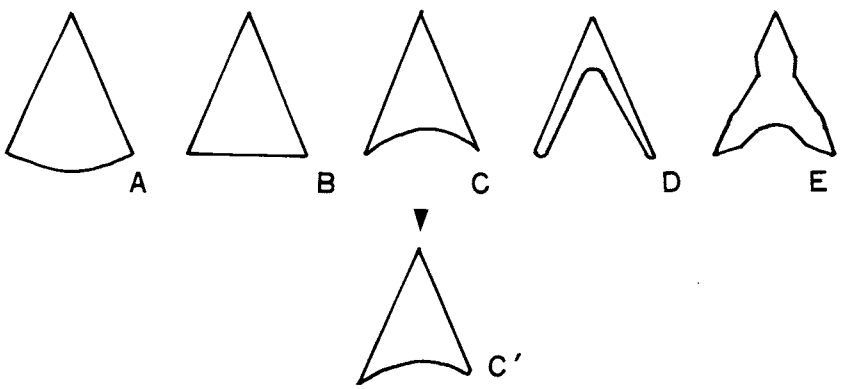
第183図 第II次調査 出土土器拓影（117）

ロ、石器

縄文時代草創期の石鏃（第185図・図版90）

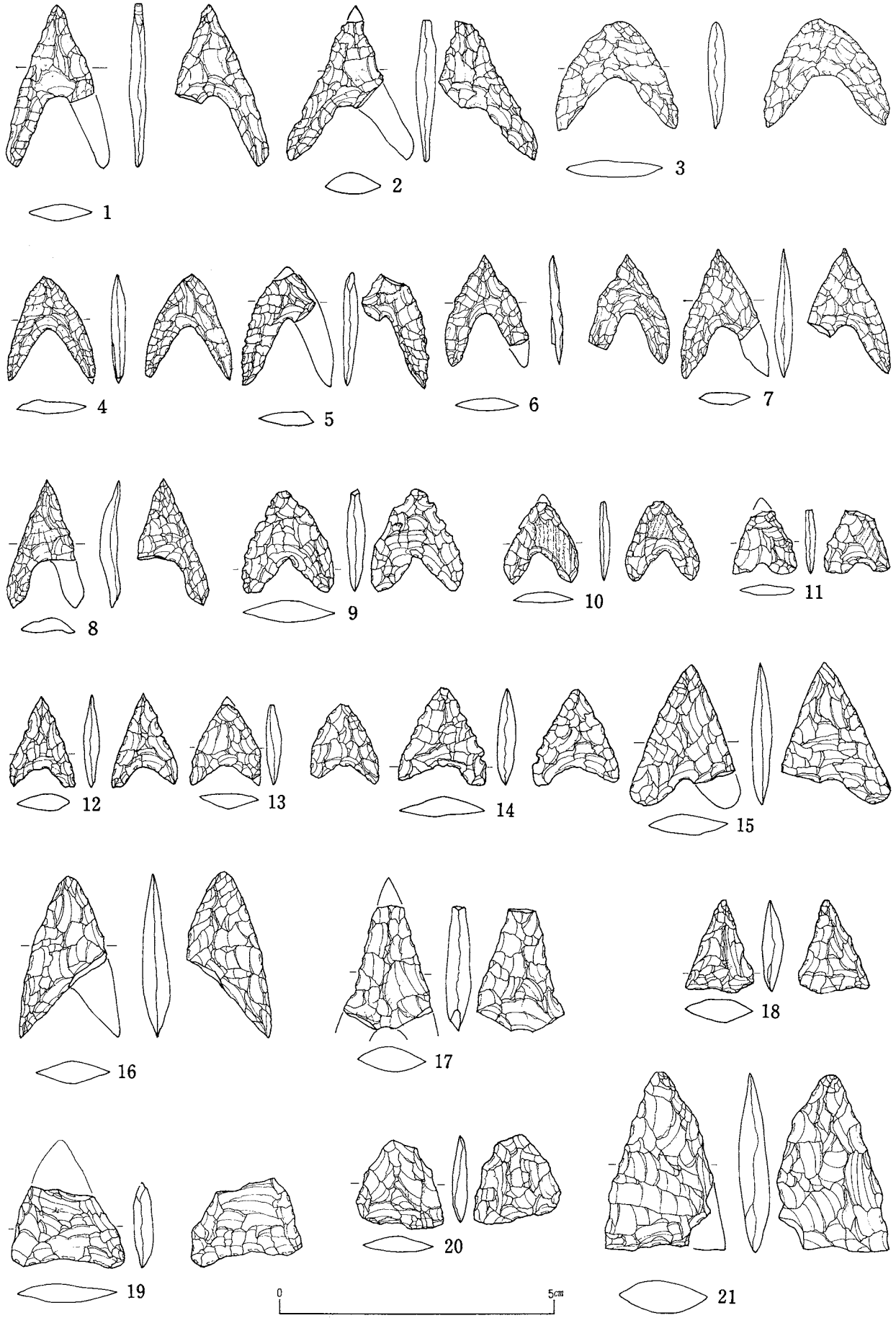
草創期に属すると思われる石鏃は21点。この内F・G・Hグリッド内トレンチのVIa層及びVIb層から土器に伴って検出されたものとしては1・4・6・9～21が上げられる。とりわけGグリッド内トレンチでの出土が最も多く、6・10・14・17・19の5点を数える。使用された石材については、1が安山岩の他は総て黒曜石である。第184図は出土した石鏃の形態別模式図であるが、これにあてはめると、1～8がD、12～14・19・20がC′、18がA、21がBにそれぞれ分類されよう。また、9・10・16・17はDに近く、11・15はCに近いと思われる。（3・7は第Ⅰ次調査で出土）

これらの石鏃について他地域の遺跡との関連を見ると、A・B・C・C′の形態のものについては、山形県日向洞穴（加藤・1976）、埼玉県八ケ上B遺跡（佐々木・1974）、東京都根津山遺跡（十菱・1980）、神奈川県花見山遺跡（坂本・1977）、愛知県酒呑ジュリンナ遺跡（大参・1970）等の発掘調査によって検出された石鏃によく類似している。また、Dの形態のものについては、千葉県山倉大山遺跡（篠原・1983）、長野県曽根遺跡（八幡・1972）、岐阜県椛の湖遺跡（紅村・原・1974）等の調査によって検出された石鏃によく類似している。



第184図　石鏃形態模式図

こうした石鏃に伴出する土器群としては、A・B・C・C′の形態のものについては隆線文系土器群が、Dの形態のものについては爪形文系土器群、押圧・回転縄文系土器群がそれぞれ認められる。また形態Bの石鏃については、二等辺三角形状を呈するものが千葉県布佐余間戸遺跡（高野・1981）などから検出されている。形態Dの石鏃については通称長脚鏃と呼ばれるもので、爪形文系土器群に伴出する事が曽根遺跡や椛の湖遺跡等の調査で確認されているが、本遺跡のように押圧・回転縄文系土器群に、この種の石鏃が伴出した例としては、先に上げた千葉県山倉大山遺跡のもの以外他に類例を見ない。本遺跡の石鏃中には例を見ないが、押圧・回転縄文系土器群には、形態Eの石鏃を伴出する事が、新潟県室谷洞窟10層（中村・1964）、埼玉県宮林遺跡（宮井・1985）、神奈川県深見諏訪山遺跡（曽根・1983）等の発掘調査によって確認されている。



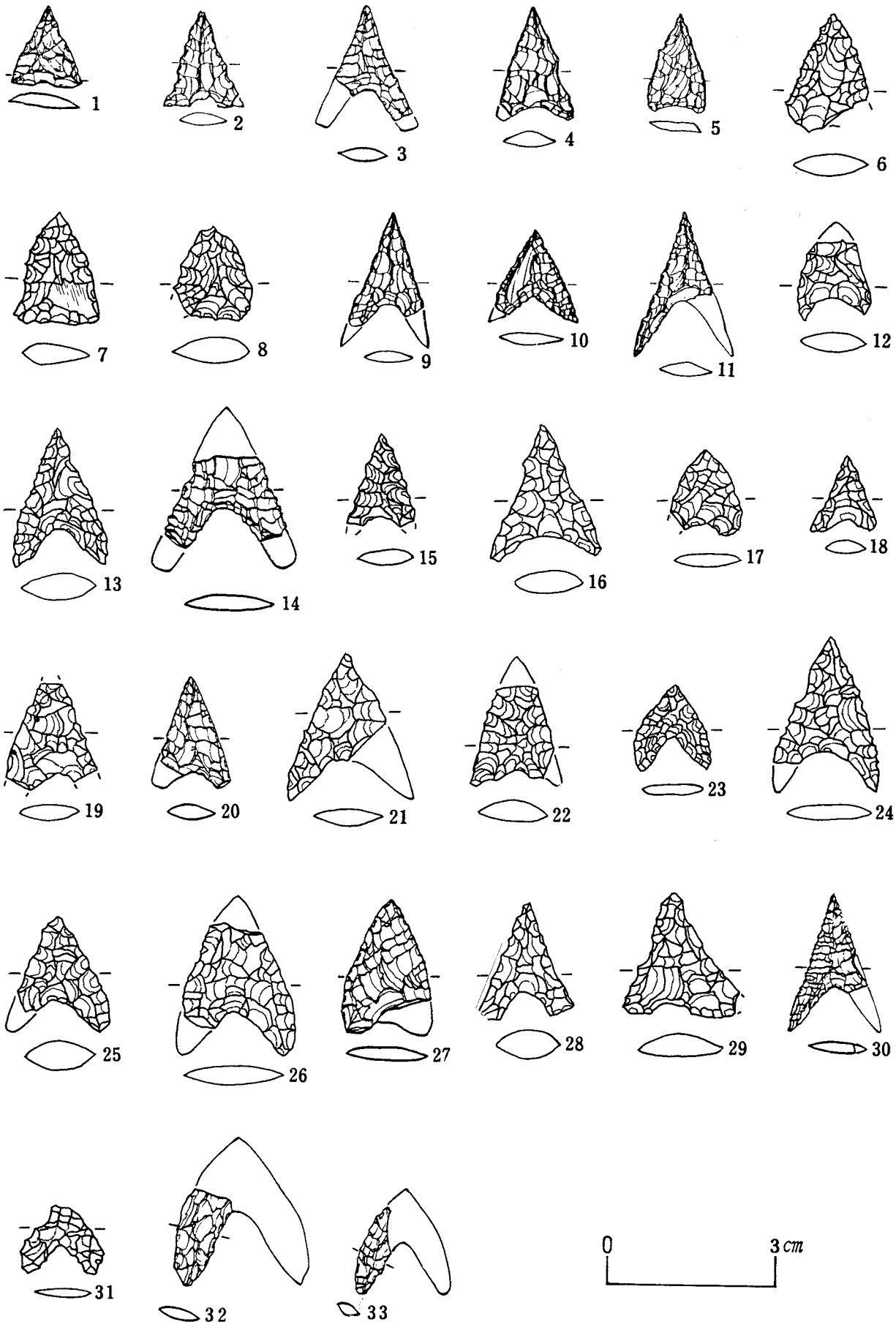
第185図　第II次調査 出土石器実測図（２）

草創期の石鏃は、愛媛県上黒岩岩陰7層(鈴木・1972)から細隆起線文土器に伴って検出したものが最も古い段階のものと思われ、それ以後、草創期の全般を通じてその存在が確認されている。本遺跡の土器群は草創期の後半に位置づけられている事から、伴出した石鏃もほぼ同時期のものと考えられ、また同時期の他遺跡との比較においても、石鏃の形態に共通したものが認められると言える。隆線文土器群に伴出する石鏃の形態を見ると、先に上げた各遺跡から検出されたものの中には形態D・E等は少く、爪形文系土器群や押圧・回転縄文系土器群を検出した室谷洞窟・宮林遺跡・深見諏訪山遺跡・布佐余間戸遺跡・山倉大山遺跡等からはA～Eのほとんどの形態のものが検出されている。こうした事は、形態D・Eの石鏃が草創期後半に確立された事を窺わせ、本遺跡の土器群の編年的位置ともよく合致していると思われる。

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
ナイフ形石器		A	55－1	52	23.0	16.8	7.7	2.0	黒曜石	下半部欠損
〃		A	－2	〃	31.0	15.7	5.5	2.8	〃	先端部欠損
〃		A	－3	〃	24.8	10.7	4.7	1.0	〃	完形品
〃		A	－4	〃	24.4	15.3	7.0	2.3	〃	完形品
彫器		B	－5	〃	41.4	30.0	1.1	12.05	〃	完形品
石槍	G－3	C	－6	〃	40.3	18.9	6.7	4.4	安山岩	先端部、下半部欠損
〃	D－3	C	－7	〃	59.8	38.1	9.8	29.4	〃	下半部欠損
有舌尖頭器	表採	C	－8	〃	16.5	16.7	4.5	1.05	黒曜石	先端部、返し部欠損
石鏃	E－3	H－1	185－1	90	30.5	14.7	3.1	1.0	安山岩	右脚部欠損
〃	B－3	H－1	－2	〃	26.7	13.3	4.2	0.9	黒曜石	右脚部欠損
〃	2号住居	H－1	－3	〃	20.5	22.5	3.4	0.95	〃	1次調査・完形品
〃	B－3	H－1	－4	〃	19.5	16.1	2.7	0.5	〃	完形品
〃		H－1	－5	〃	19.8	13.4	2.4	0.35	〃	右脚部欠損
〃	G－2	H－1	－6	〃	20.7	15.6	2.1	0.45	〃	右脚部欠損
〃	第2区	H－1	－7	〃	23.8	14.6	3.1	0.55	〃	1次調査・右脚部欠損
〃	B－3	H－1	－8	〃	23.1	11.5	2.8	0.5	〃	右脚部欠損
〃	F－2	H－1	－9	〃	18.9	16.9	3.3	0.8	〃	完形品
〃	G－2	H－1	－10	〃	15.0	13.5	2.7	0.4	〃	頭部欠損
〃	F－3	H－1	－11	〃	11.5	11.8	1.8	0.25	〃	頭部欠損
〃	H－2	H－1	－12	〃	16.6	12.0	3.3	0.45	〃	完形品
〃	F－2	H－1	－13	〃	14.3	12.9	2.4	0.35	〃	完形品
〃	G－2	H－1	－14	〃	17.7	16.1	3.4	0.7	〃	完形品
〃	G－2	H－1	－15	〃	26.1	18.8	3.8	1.3	〃	右脚部欠損
〃	F－2	H－1	－16	〃	28.9	15.2	4.8	1.4	〃	右脚部欠損
〃	G－3	H－1	－17	〃	22.8	16.2	4.3	1.4	〃	頭部、両脚部欠損
〃	G－2	H－2	－18	〃	16.3	12.7	3.8	0.65	〃	完形品
〃	F－3	H－1	－19	〃	15.8	20.7	4.1	1.35	〃	頭部欠損
〃	F－3	H－1	－20	〃	16.0	16.1	3.0	0.65	〃	完形品
〃	H－2	H－1	－21	〃	32.7	18.9	5.6	3.45	〃	右脚部欠損

第7表　第II次調査石器計測一覧表　(1)



第186図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（３）

註１、（鈴木道之助•1972「縄文時代初頭の狩猟活動」考古学ジャーナル76—Ｐ13）中に示されている。

参 考 文 献

大参義一　1970「酒呑ジュリンナ遺跡(2)」名古屋大学文学部研究論集（史学）17
八幡一郎　1972「日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上）」
鈴木道之助　1972「縄文時代初頭の狩猟活動」考古学ジャーナル76
佐々木保俊　1974「八ケ上遺跡Ｂ地点発掘調査報告書」埼玉県富士見市所在八ケ上遺跡・打越遺跡・北通遺跡発掘調査報告書
紅村弘他　1974「椛の湖遺跡」
加藤　稔　1976「山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化」山形県の考古と歴史
坂本　彰　1977「花見山遺跡の隆起線土器」港北のむかし
十菱駿武　1980「根津山遺跡・孤塚古墳他」世田谷区遺跡調査報告１
高野博光　1981「布佐・余間戸遺跡」我孫子市教育委員会
曽根博明　1983「深見諏訪山遺跡」大和市文化財調査報告14集
篠原　正　1983「山倉大山遺跡」北総考古研究会
宮井英一　1985「大林Ⅰ・Ⅱ、宮林、下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集

縄文時代各期の石器

第Ⅱ次調査により出土した石器は、遺跡の性格上きわめて多種多彩であった。本遺跡の主体は縄文時代中期であり、石器もその性格をもつものが多く出土している。種類としては、打製石斧39点、磨製石斧10点、局部磨製石斧１点、礫器４点、磨石50点、凹石12点、敲石１点、石皿４点、石棒３点、砥石１点、石錘５点、石鏃33点、スクレーパー４点、石匙１点、石錐２点、楔形石器７点が出土している。他に多量の黒曜石の剝片及び石核があり、剝片の縁辺に細部加工が行われたものが多く存在する。ここではそれらの内22点を図示した。また細部加工された剝片は縄文時代草創期の多縄文系土器が検出された層位から多く出土している。

石鏃（第186図・図版91）

出土した石鏃の多くは、先端部、あるいは脚部が欠損していた。石材は、実測した総てが黒曜石製である。石鏃の形態は、凹基無茎鏃（１類）と平基無茎鏃（２類）の２種類に大別でき１類が圧倒的に多い。１類には、６～８の様に基部の抉入が浅くずんぐりとしているもの、11•30の様に長脚のもの、28の様に鍬形のもの、29の様に未完成と思われるものがある。加工面から見ると５の裏面の様に基部の部分のみに加工を施してあるものや、10・11・30の様に両縁部が細い鋸歯状をなしており、先端部も鋭利に尖りきわめて丁寧に作られているものがある。２類は、１と８で、１は薄手の剝片を利用した極めて小型の完形品である。又１・２・３は押型文土器に伴う石鏃と考えている。

細部加工剝片と石核（188図～第191図）

数千点にのぼる黒曜石の剝片のうち、明らかに縁辺に調整が行われているものが存在する。その多くは定形的な刃部をもたず、又形状も一定していないが、しかし意識的に調整のための細部加工が施されている点から、何らかの使用目的をもった剝片に違いないと思われる。37～47は多縄文系土器が多量に出土したＦ・Ｇ・Ｈトレンチの Ⅵａ層、Ⅵｂ層より出土した。37は剝

片の両側縁に主に裏面より加工が行われ、刃部が作り出されている。38・45は縦長剝片の一側縁に調整が施されている。剝片上部には、打面を有し、裏面には打瘤裂痕がみられる。47は薄手の剝片の側縁に調整を施して刃部としており、調整痕は、裏面に見られる。40は断面が三角形を呈し、表面の側縁に急斜度の調整が行われているもので、サイドスクレーパーと思われる。42は平面が三角形を呈し、片側の側縁に細い調整が施されている。46は側縁の加工が鋭く先端部まで及んでいる。先端部の断面は、ほぼ三角形を呈し、おそらく石錐と思われる。43は石核である。47～60はF・G・HトレンチのV_b層、及びVI_a層の上部より出土した、細部加工のある剝片と石核である。48～50は平面が三角形を呈する剝片の側縁に調整を加えて刃部を作り出している。48は上部の打点方向に向ってフィッシャーが集中する。52は縦長剝片の両側縁に調整が行われている。53は丸みをもった端部を刃部にしたと思われる。55は厚みのある木の葉形の剝片の両面に加工が施されている。57・58は打面を持つ横長剝片を素材としており、側縁の両面に加工が行われている。54・56・60も剝片の一部縁辺に加工痕がみられる。51の小形剝片は、石器の未製品とも思われる。59は石核である。62～86は各グリッドより出土した、細部加工のある剝片である。62は三角形を呈する薄手の剝片を素材とし側縁の表面に細い調整が加えられている。65・67・70は上部に打面が、裏面には、打瘤がみられる。剝片を素材とし、それらの側縁に調整を加え、刃部としている。64・66・68・69・73・74は不整形な剝片を素材とし、その縁辺の一部を加工し刃部としている。63は半円形を呈する剝片でその周辺に表面より調整が加えられており、スクレーパーとも考えられる。71は横長剝片を素材としその表面全体に調整が行われ、裏面にも一部縁辺に加工が施されている。石器の未製品とも思われるが明らかではない。85も同様な剝片の両面に加工が行われている。72・77・80～84は小形の剝片であるが、側縁には調整が行われている。78・79は刃部を剝片の端部に作っている。

スクレーパー（第191図）

87～89・96の4点をここではラウンドスクレーパーとしてとらえた。87・88は小形の楕円形を呈し、両面とも加工が施されている。89・96は断面が三角形を呈する比較的大形のものである。89は素材の裏面周辺に加工が及ぶが、96は半周にのみ加工の跡がみられる。材質は黒曜石である。

楔形石器（第189図・第191図）

61・90～95の7点は、剝片を取った後の残核ともみれるが、ここでは、用具としての楔形石器として図示した。向かいあった二辺の打撃部には、階段状の剝離痕が存在し、フィッシャーが集中する。平面形は、四辺形をなすものが多い。材質は総て黒曜石である。

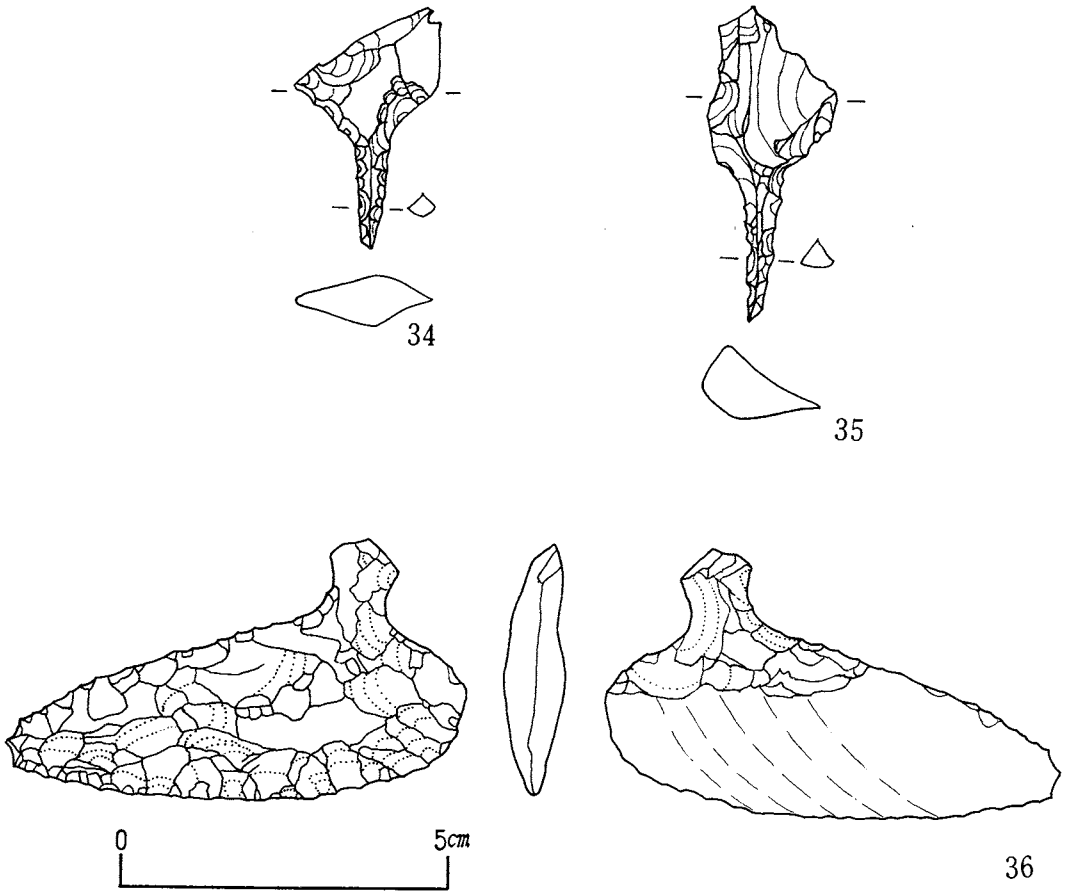
石錐（第187図・図版91）

2点出土している。いずれもつまみをもち、先端部を尖らせている。先端部の調整は非常に細く加工され、34の断面は変形、35の断面は三角形を呈する。材質は黒曜石である。

石匙（第187図・図版91）

非常に整った形のつまみをもつ横型の石匙である。片面は全面にわたり調整加工が行われる

が、裏面にはほとんど調整がみられない。材質は硅質頁岩である。



第187図　第II次調査 出土石器実測図（4）

礫器（第192図97～100・図版92）

玄武岩製の礫器で重量感がある。裏面には礫面を大きく残し、表面には第一剝離面を残す。左右の側縁には打撃による階段状の剝離痕が存在する。刃部は片刃状を呈する。98は小形の礫の両端を打ち欠いており、一端を刃部としたと思われるが、用途は明確ではない。礫器というより、クサビ等に使用した可能性も考えられる。99は偏平な礫の一端を打ち欠いて刃部としている。100は裏面に礫面を大きく残し、表面は周縁より打撃が加えられている。刃部は側縁を使用したと思われる。これらの礫器は縄文時代早期に属するものと思われ、特に97はFグリッドのVIa層より出土している。

局部磨製石斧（第192図101、102・図版92）

青味がかった砂岩製の長身の石斧である。裏面には剝離面がみられ、表面は研磨されている。

又刃部は特に鋭利に整形されている。102は基部を欠損する石斧である。表裏共に刃部を中心に研磨が行われている。この石斧はFトレンチの多縄文系土器と共に出土している。所謂草創期に属する石器と思われる。

打製石斧（第193図～第195図・図版93・94・95）

遺構及び各グリッドより完形品、破損品合せて39点出土しているが、図示したのはその内26点である。材質は安山岩製が最も多く、砂岩、頁岩がこれにつづく。形態的に刃部・基端部ともほぼ同じ幅を持つ短冊形、刃部が中広になる撥形、中央に抉りをもつ分銅形に大別されるが、その中間形態のものもみられる。

1類（第193図・194図103～117）

短冊形及びそれに近い形態のものを本類とした。出土量は本形態が最も多い。104・105・107は正面に礫面を残し、両側縁及び裏面は細く調整加工されている。105は主要剝離面に向かって彎入し、丸のみ状を呈する。104は細身の石斧で、礫面部分がわずかに彎曲する。108・109は基端部の尖った石斧で、刃部はともに欠損している。109は一側縁の上半部にゆるやかな抉入部が作られる。113は片側の縁辺に稜を作り出し、刃部は偏刃状を呈する。114・115は刃部が欠損しているが、113と同様片側に稜が作り出され、115は又刃部も偏刃と思われる。117は細身薄手で刃部は偏刃を呈する。石斧、あるいは、他の用途に使用された可能性もみられる。110は基部が欠損している大形の石斧である。表面は礫面を利用し刃部を作り出している。

2類（第194図・195図118～127）

撥形及びそれに近い形態のものを本類とした。118・120は片側の縁辺に稜を作り出しており、118は頭部にも稜を持つ。この形態は1類113～115と類似するが、刃部は直刃となる。これら5点の石斧の内113を除く4点と、117は、多縄文系土器を出土したトレンチ及びその近くの地点より出土している。121は全体に良く調整されている石斧で、刃部近くには擦痕が認められる。122は礫面を持つ頭部が大きく内彎し、刃部は片刃状を呈する。123は小形の整った石斧で、刃部は裏面より調整されている。形状からみて掻器として使用された可能性もある。124は礫面を持つ正面の上部が甲高となり、頭部が軽く内彎する。刃部は裏面より調整が行われる。125・126は大きさは異なるが基端部が尖り三角形状を呈し、表面に礫面を大きく残す。125の片側縁辺には稜が作られ、両側縁の中央部には弱い抉りがみられる。刃部は表面からの調整により作られ片刃状を呈する127は125と同様、頭部が細く、刃部が扇状に広がる大形の石斧である。主剝離面である裏面は平坦で、刃部は鋸歯状を呈する。又基部中央に軽い抉りがみられる。

3類（第195図128）

所謂分銅形に類似するが、抉りは頭部近くにあり、最大幅は頭部より刃部にある。表面に礫面を大きく残す大形の石斧である。

磨製石斧（第196図・第197図・図版95・96）

16点出土している。乳棒状石斧11点、定角状石斧2点、その他3点の出土であるが、いずれも刃部、頭部が欠損しており、完形品は皆無である。乳棒状石斧は129～139で、132・137・138

は頭部、刃部共に欠損しているが、クサビ等に再使用した痕跡がみられる。136は刃部が一部欠損しているが、蛤刃の磨製石斧である。139は敲打痕を有し刃部欠損部を再使用したようである。140・141・142は頭部5～6cmのみの欠損品であり、142においては、稜がみられ磨石の欠損したものかもしれない。143・144は定角状石斧で、両側縁が研磨され稜がある。143は刃部が欠損している。144は頭部を欠損しているが、刃部は片刃で鋭利な小形の石斧である。129・130は斧身が厚く直線的であり、刃部は剝落して荒れている。頭部は切断されたと思われ、大型の乳棒状の石斧かもしれない。

131は頭部、刃部共に大きく欠損している。刃部は欠損部を再使用したと思われ、打痕及び磨痕がみられる。

磨石（第198図～第200図・図版97・98・99）

各種あわせて50点出土したが、図示したのはこの内32点である。形態から棒状、箱形、楕円形、円形の4つの型に分類した。出土地点及び石材は第12・13表に示した。

1類（145～155）

棒状のものを本類とした。11個出土。総て4～8cmの頭部のみの半載品である。145・147は表面裏面とも平滑、縁部に幅広の稜を有し、平面形は横櫛形を呈する。断面は底面で幅狭く、上面で幅広になる。使用面は主として底面であったと思われる。146・150・152は断面がそれぞれ、楕円形、台形、四辺形を呈する、146の使用面は平坦部を、6は幅広の底面を主に使用し、152は4面に摩滅がみられる。149・151・153・154は平面が長円形を呈し、磨面がわずかに平坦である。148は上下部が欠損しているので形態が不明であるが、胴部に厚みを持つ磨製石斧の一部かもしれない。1類とした磨石は、その多くがF・G・Hトレンチ内の早期押型文土器に伴って、Vb層から出土している。これら一群の磨石が、はたして縄文時代早期に属するものか明確ではない。しかし当町内における、縄文時代早期の代表遺跡である大平遺跡出土の磨石に酷似していることは確かである。

2類（156～160）

箱形のものを本類とする。6個出土。平面が長方形あるいは正方形に近い箱形を呈し、上面、下面とも平滑に仕上げられている。断面は胴部の張る長方形を呈する。又各側面も平らに整形が行われている。

3類（161～168）

楕円形のものを本類とする。16個出土。平面は楕円形を呈し、断面は胴部が厚く、縁部に丸味を持つ。162・165・168は主に使用された面が片面にみられる。

4類（169～177）

円形およびそれに近いものを本類とする。完形品5個、半載品12個の出土。断面は楕円形を呈し、縁部に丸味をもつ。使用面が主として片面のもの、両面のものがみられる。174は円形というより頭部が尖り、磨面が側面上方にみられる。

凹石（第201図178～189・図版99・100）

（単位mmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
石鏃	C－3	H－2	186－1	91	14.5	11.5	1.7	0.25	黒曜石	完形品
〃	F－2	H－1	－2	〃	17.5	12.9	2.0	0.4	〃	右脚先欠損
〃	J－1	H－1	－3	〃	21.2	10.1	3.6	0.5	〃	両脚部欠損
〃	G－1（6号住）	H－1	－4	〃	21.7	12.9	3.0	0.5	〃	左脚先欠損
〃	F－2	H－1	－5	〃	18.1	10.1	2.2	0.4	〃	完形品
〃	G－2	H－1	－6	〃	20.2	14.2	4.7	1.15	〃	右先端欠損
〃	G－3	H－1	－7	〃	20.0	16.0	5.0	1.2	〃	完形品
〃	表－採	H－2	－8	〃	17.2	13.8	4.4	1.15	〃	左先端欠損
〃	B－3（1号住）	H－1	－9	〃	21.0	12.8	2.8	0.5	〃	両脚部欠損
〃	B－3（1号住）	H－1	－10	〃	15.8	14.0	1.6	0.3	〃	左脚先欠損
〃	B－3（1号住）	H－1	－11	〃	25.0	10.1	2.8	0.4	〃	右脚欠損
〃	F－1（5号住）	H－1	－12	〃	13.7	12.2	4.3	0.65	〃	頭部欠損
〃	G－1（6号住埋甕）	H－1	－13	〃	25.0	16.0	4.7	1.05	〃	完形品
〃	D－3	H－1	－14	〃	17.1	21.2	2.65	0.7	〃	頭部脚先欠損
〃	E－3	H－1	－15	〃	17.4	12.0	3.4	0.5	〃	両脚部欠損
〃	E－3	H－1	－16	〃	24.5	20.0	4.6	1.3	〃	完形品
〃	F－3	H－1	－17	〃	15.5	13.5	3.2	0.6	〃	左脚部欠損
〃	G－3	H－1	－18	〃	13.6	12.0	3.0	0.3	〃	左脚部欠損
〃	G－3	H－1	－19	〃	19.3	15.5	4.1	0.85	〃	頭部両脚欠損
〃	G－3	H－1	－20	〃	20.8	12.5	3.0	0.5	〃	右脚欠損
〃	H－1	H－1	－21	〃	26.0	13.0	3.8	0.95	〃	左脚欠損
〃	H－3	H－1	－22	〃	17.2	15.0	4.8	1.15	〃	頭部右脚欠損
〃	F－3	H－1	－23	〃	15.2	13.1	2.4	0.4	〃	完形品
〃	I－3	H－1	－24	〃	27.2	18.1	4.3	1.3	〃	左脚部欠損
〃	J－1	H－1	－25	〃	20.8	16.0	4.9	1.15	〃	〃
〃	表　採	H－1	－26	〃	23.6	20.0	4.0	1.65	〃	頭部左脚部欠損
〃	〃	H－1	－27	〃	25.3	16.1	3.0	0.8	〃	右脚欠損
〃	〃	H－1	－28	〃	21.0	16.7	5.9	1.15	〃	完形品
〃	〃	H－1	－29	〃	18.2	20.0	3.2	1.35	〃	右脚部欠損
〃	〃	H－1	－30	〃	24.0	10.1	2.0	0.35	〃	右脚欠損
〃	F－2	H－1	－31	〃	12.4	14.8	2.2	0.3	〃	両脚頭部欠損
〃	表　採	H－1	－32	〃	17.6	8.5	2.8	0.45	〃	左脚部のみ
〃	〃	H－1	－33	〃	16.1	5.1	2.0	0.15	〃	〃
錐	B－3（1号住）	F	187－34	〃	37.1	22.1	9.5	3.3	〃	
〃	表　採	F	－35	〃	48.7	20.1	10.7	5.5	〃	
石匙	F－3	J	－36	〃	37.6	71.5	11.8	21.6	硅質頁岩	
細部加工剝片	F－3	G	188－37		40.1	26.4	5.5	8.1	黒曜石	
〃	F－3	G	－38		41.0	30.1	6.0	5.9	〃	
〃	F－3	G	－39		38.0	25.0	7.2	6.7	〃	
〃	F－3	G	－40		31.2	20.8	8.5	5.3	〃	
〃	F－3	G	－41		44.2	29.2	9.2	13.5	〃	
〃	G－2	G	－42		35.8	41.0	8.0	9.25	〃	
石核	G－2	I	－43		85.2	38.1	23.5	6.25	〃	
細部加工剝片	G－2	G	－44		25.6	23.5	5.1	3.5	〃	

第8表　第II次調査石器計測一覧表　（2）

（単位mmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
細部加工剥片	G－3	G	188－45		48.9	27.1	6.1	9.7	黒曜石	
〃	H－1	G	－46		40.0	33.8	12.8	12.5	〃	
〃	G－2	G	－47		37.6	23.7	4.9	4.2	〃	
〃	F－3	G	－48		38.9	32.0	5.2	6.8	〃	
〃	F－2	G	189－49		52.0	38.1	9.0	10.3	〃	
〃	F－3	G	－50		30.1	41.2	4.0	4.0	〃	
〃	H－3	G	－51		19.1	13.4	2.5	1.0	〃	
〃	F－3	G	－52		57.4	33.7	7.0	11.0	〃	
〃	G－3	G	－53		45.2	27.2	8.5	5.5	〃	
〃	F－3	G	－54		33.5	36.0	3.5	4.4	〃	
〃	G－3	G	－55		37.0	17.6	8.2	5.6	〃	
〃	F－3	G	－56		33.1	34.5	6.5	6.2	〃	
〃	H－3	G	－57		31.1	25.5	6.1	7.7	〃	
〃	H－3	G	－58		26.9	32.1	6.1	5.7	〃	
石核	H－2	I	－59		63.4	28.0	21.0	49.0	〃	
細部加工剥片	H－3	G	－60		32.0	29.5	6.1	8.0	〃	
楔形石器	G－3	E	－61		19.2	14.2	5.5	1.7	〃	
細部加工剥片	B－3（1号住）	G	190－62		62.5	45.5	7.5	16.2	〃	
〃	A－3	G	－63		31.1	22.2	10.0	5.0	〃	柱穴内
〃	G－1	G	－64		39.2	31.0	7.5	10.5	〃	
〃	H－1	G	－65		32.4	27.7	5.5	6.0	〃	
〃	H－3	G	－66		30.5	26.5	6.0	4.9	〃	
〃		G	－67		37.6	37.8	6.5	8.5	〃	
〃		G	－68		28.9	35.0	4.0	5.0	〃	
〃		G	－69		41.2	27.2	5.1	6.3	〃	
〃		G	－70		37.9	35.2	8.5	15.2	〃	
〃		G	－71		40.8	23.0	7.1	5.5	〃	
〃		G	－72		30.0	20.1	5.9	3.3	〃	
〃		G	－73		33.5	19.5	5.5	4.0	〃	
〃		G	－74		42.7	18.5	6.2	5.0	〃	
〃		G	－75		51.5	20.5			〃	
〃		G	－76		46.0	19.2	3.5	4.5	〃	
〃		G	－77		25.1	17.0	6.0	2.6	〃	
〃		G	191－78		35.0	24.0	7.0	6.0	〃	
〃		G	－79		33.2	19.1	9.0	5.2	〃	
〃		G	－80		25.7	17.0	5.0	2.5	〃	
〃		G	－81		22.9	14.5	5.5	1.7	〃	
〃		G	－82		21.2	15.9	3.5	1.3	〃	
〃		G	－83		30.8	14.8	4.1	1.3	〃	
〃		G	－84		27.5	11.5	6.0	1.5	〃	
〃	C－3	G	－85		34.2	20.1	7.6	5.0	〃	
〃		G	－86		50.5	15.5	15.5	23.0	〃	
スクレーパー		D	－87		22.5	14.5	5.9	2.0	〃	
〃		D	－88		21.8	15.0	5.1	1.7	〃	

第9表　第Ⅱ次調査石器計測一覧表　（3）

（単位mmおよびg）

器　種	出土区	分　類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　材	備　号
スクレーパー		D	191－89		26.9	23.5	10.0	6.7	黒曜石	
楔形石器	H－3	E	－90		23.0	27.5	5.8	4.2	〃	
〃		E	－91		24.2	28.0	8.1	5.7	〃	
〃		E	－92		22.1	16.1	9.0	3.2	〃	
〃		E	－93		21.0	16.0	6.0	2.5	〃	
〃		E	－94		26.8	14.9	5.6	3.0	〃	
〃		E	－95		19.1	9.1	6.1	1.2	〃	
スクレーパー	G－3	D	－96		24.5	22.0	8.0	4.7	〃	

第10表　第Ⅱ次調査石器計測一覧表　（4）

12個出土。石材は粒子の粗い粗面安山岩が多く使用される。平面は円形、楕円形棒状を呈し、凹部が両面にあるものと、片面だけのものとに分けられる。178～182・184～187・189は両面に凹みを持ち、凹みが深くえぐれているもの、浅いもの、複数に存在するもの等がある。又凹みの周辺に黒く煤が付着するものも多い。183・188は片面に凹み部を有し、その反対面は磨滅し、磨石として使用された様子がみられる。

石錘（第202図190～194・図版100）

5点出土。扁平な石の両端を打ち欠いたものと、両端を溝状に削って作られたものとがある。191・193は両端を小さく打ち欠いた小形の石錘である。192は両端を粗く大きく打ち欠いてある。190・194は両端に溝をつけ、190は表裏を平らに整形してある。

敲石（第202図・図版100）

1点のみの出土で平面は円形に近い形をしているが、周縁に磨って加工した稜を有し、多面に敲打痕と磨痕を持っているが主に底面の平端部を使用したとおもわれる。

石皿（第202図・196・197）

4点出土。総て破損している。196は両面とも平滑に仕上げられている。197は片面が平坦に整形されており、使用面と思われるその反対面は中央部でゆるやかな凹みをもつものであろう。

石棒（第202図198）

3点出土したが、総て欠損している。ここでは比較的形態の明瞭な1点のみ図示した。198は角柱状を呈し、断面はおよそ正方形をなす。頭部は無頭であり、円端に整形してある。又頭部には黒く煤の付着がみられる。

（単位cmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
礫器	F－3	K	192－97	92	10.3	11.6	5.0	760	玄武岩	
〃	B－3	K	－98		8.1	3.7	1.8	90	砂岩	
〃	G－3	K	－99		5.9	5.4	1.6	85	砂岩	
〃	表採	K	－100		9.6	6.9	1.9	200	砂岩	
局部磨製石斧	B－2	L	－101		19.3	5.4	2.4	510	砂岩	3号住居柱穴
〃	F－3	L	－102	92	7.3	4.2	1.6	102	砂岩	
打製石斧	F－2	M－1	193－103	93	8.8	4.5	1.4	100	砂岩	
〃	B－3	M－1	－104	〃	8.6	3.7	2.1	83	砂岩	1号住居
〃	G－3	M－1	－105	〃	10.1	4.6	1.8	115	安山岩	
〃	表採	M－1	－106	〃	9.6	4.1	1.7	97	砂岩	
〃	L－1	M－1	－107	〃	9.5	4.3	1.5	98	頁岩	
〃	H－3	M－1	－108	〃	8.0	4.1	1.4	71	頁岩	
〃	B－4	M－1	－109	〃	9.9	5.0	1.8	140	砂岩	1号住居
〃	B－4	M－1	－110	〃	8.9	8.2	1.7	210	安山岩	〃
〃	G－2	M－1	－111	〃	3.7	5.2	1.2	80	頁岩	〃
〃	表採	M－1	－112	〃	5.8	4.4	1.5	60	安山岩	
〃	B－4	M－1	194－113	94	9.2	4.9	1.2	80	頁岩	1号住居
〃	F－3	M－1	－114	〃	6.0	4.4	1.1	57	砂岩	
〃	F－3	M－1	－115	〃	6.2	4.4	1.3	65	頁岩	
〃	F－3	M－1	－116	〃	7.2	3.7	1.2	44	砂岩	
〃	F－3	M－1	－117	〃	10.1	3.7	1.0	55	砂岩	
〃	D－1	M－1	図化せず		7.9	4.3	1.4	61	砂岩	4号住居柱穴
〃	B－1	M－1	〃		7.9	4.5	1.8	92	頁岩	
〃	F－3	M－1	〃		8.9	4.2	1.5	91	砂岩	
〃	F－3	M－1	〃		6.0	4.3	0.8	41	頁岩	
〃	F－3	M－1	〃		7.0	4.1	1.4	69	砂岩	
〃	G－3	M－1	〃		6.2	4.7	1.7	65	安山岩	
〃	G－2	M－1	〃		8.4	4.9	2.2	131	安山岩	
〃	表採	M－1	〃		8.7	3.6	1.4	61	砂	
〃	G－2	M－2	194－118	94	10.3	4.4	1.5	110	頁岩	
〃	C－3	M－2	－119	〃	8.9	4.6	1.4	92	安山岩	
〃	F－3	M－2	－120	〃	8.1	4.0	1.2	59	安山岩	
〃	B－4	M－2	－121	〃	8.0	5.2	1.5	109	砂岩	1号住居
〃	H－3	M－2	－122	〃	8.2	4.3	1.2	77	砂岩	
〃	表採(A・Bベルト)	M－2	－123	〃	6.6	3.3	1.2	41	頁岩	
〃	B－4	M－2	－124	〃	9.1	4.8	1.4	86	砂岩	1号住居
〃	F－2	M－2	195－125	95	14.4	7.0	1.9	236	安山岩	
〃	表採	M－2	－126	〃	8.2	3.9	1.7	60	安山岩	
〃	表採	M－2	－127	〃	13.8	6.1	2.3	305	安山岩	
〃	G－1	M－2	図化せず		5.9	4.9	2.0	95	安山岩	6号住居
〃	H－1	M－2	〃		8.1	4.7	1.1	60	砂岩	
〃	D－2	H－2	〃		8.8	4.8	1.5	95	頁岩	

第11表　第Ⅱ次調査石器計測一覧表　（5）

（単位cmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
打製石斧	H－2	M－3	195－128	95	12.6	7.7	1.6	341	砂岩	
磨製石斧	G－3	N	196－129	96	13.1	5.8	4.6	600	〃	刃部欠損
〃	表採	N	－130	〃	11.1	5.0	3.5	270	〃	
〃	F－3	N	－131	95	(10.0)	4.8	3.2	280	〃	下部欠損
〃	B－2	N	－132	〃	8.6	4.5	3.6	248	〃	刃部欠損
〃	B－4	N	－133	〃	13.0	5.6	3.5	485	〃	1号住居址
〃	F－3	N	－134	〃	(10.7)	4.3	3.7	290	〃	刃部欠損
〃	表採	N	197－135	〃	(10.1)	4.2	3.1	234	〃	刃部欠損
〃	B－3	N	－136	〃	11.0	4.5	2.7	220	〃	刃部一部欠損
〃	G－3	N	－137	〃	11.6	4.4	4.0	332	〃	上下部欠損
〃	G－3	N	－138	96	10.6	4.0	3.0	220	〃	刃部欠損
〃	H－3	N	－139	〃	15.2	4.9	3.0	285	〃	刃部欠損
〃	表採	N	－140	〃	(5.4)	3.5	2.5	60	〃	下部欠損
〃	B－3	N	－141	〃	(4.8)	3.9	3.2	75	〃	〃
〃	F－3	N	－142		(5.5)	3.8	2.6	83	〃	〃
〃	表採	N	－143	96	9.8	4.5	2.5	190	〃	刃部欠損
〃	G－2	N	－144		(5.3)	2.5	1.2	26	〃	頭部欠損
磨石	F－3	O－1	198－145	97	(7.9)	8.5	5.1	595	〃	半截
〃	G－3	O－1	－146		(7.5)	6.4	5.4	322	安山岩	〃
〃	G－2	O－1	－147	97	(6.4)	6.5	3.9	300	砂岩	〃
〃	G－2	O－1	－148	96	(7.4)	5.4	4.5	265	〃	上下部欠損
〃	G－2	O－1	－149	97	(8.2)	6.4	2.7	190	安山岩	半截
〃	G－2	O－1	－150	〃	(5.3)	5.1	3.3	146	砂岩	〃
〃	G－3	O－1	－151	〃	(5.9)	5.8	3.7	185	安山岩	〃
〃	H－2	O－1	－152	〃	(9.1)	4.2	4.0	202	〃	〃
〃	H－3	O－1	－153	〃	(7.3)	6.9	3.7	305	〃	〃
〃	H－3	O－1	－154	〃	(8.0)	6.5	3.5	280	〃	〃
〃	表採	O－1	－155		(4.7)	6.7	2.7	145	砂岩	〃
〃	F－2	O－2	－156		(5.2)	6.7	4.9	355	安山岩	〃
〃	B－4	O－2	199－157	98	11.7	9.0	5.2	895	〃	1号住居址
〃	F－3	O－2	－158	〃	11.3	8.4	5.0	814	〃	
〃	F－3	O－2	－159	〃	9.4	8.5	5.1	672	〃	
〃	G－3	O－2	－160	〃	(7.7)	8.2	5.4	545	〃	下部欠損
〃	B－3	O－2	図化せず		(5.3)	(3.8)	3.6	114	〃	破片
〃	B－1	O－3	199－161	98	11.6	9.1	6.5	1550	〃	
〃	G－2	O－3	－162	〃	12.1	12.2	7.1	2700	〃	
〃	B－1	O－3	－163		14.5	10.8	7.2	2100	〃	側面欠損
〃	表採	O－3	－164		10.0	7.2	4.8	515	〃	
〃	D－3	O－3	－165		9.6	8.0	5.2	640	〃	
〃	C－3	O－3	－166		9.8	7.7	5.1	610	〃	
〃	G－3	O－3	200－167		11.7	10.1	8.1	1900	〃	
〃	表採	O－3	－168	99	11.5	9.0	5.9	925	〃	
〃	B－1	O－3	図化せず		11.3	9.0	3.3	550	〃	
〃	B－3	O－3	〃		9.9	7.8	5.1	530	〃	

（ ）内は推定

第12表　第II次調査石器計測一覧表　（6）

（単位cmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備号
磨石	C－2.II層	O－3	図化せず		11.3	7.2	3.8	465	安山岩	
〃	C－3	O－3	〃		8.1	(5.7)	3.0	260	〃	
〃	F－2.IIIb層	O－3	〃		8.0	6.5	4.3	322	〃	
〃	G－3.VIa層谷	O－3	〃		(6.1)	8.9	4.0	265	〃	半截
〃	G－3	O－3	〃		(10.6)	(4.8)	6.2	295	〃	破片
〃	H－3.IIIa層谷	O－3	〃		11.2	9.4	5.9	900	〃	
〃	I－1.IVa層	O－4	200－169	99	12.0	12.3	6.3	2000	〃	
〃	B－2	O－4	－170		9.0	7.9	3.7	415	〃	
〃	F－1	O－4	－171	97	(5.5)	8.5	3.8	250	〃	
〃	G－2.IIIa層	O－4	－172	〃	(4.4)	8.0	4.0	235	〃	半截
〃	H－3.新谷	O－4	－173		7.2	7.3	4.9	383	砂岩	
〃	H－2.VIa層	O－4	－174		8.4	7.7	6.6	600	〃	
〃	H－3.VIb層	O－4	－175	97	(4.0)	8.6	3.9	186	〃	半截
〃	H－3.IIIc層	O－4	－176		(3.5)	8.2	4.4	190	〃	〃
〃	表採	O－4	－177		(6.7)	10.0	5.6	556	〃	〃
〃	F－2.VIa層	O－4	図化せず		6.5	5.7	3.4	165	安山岩	〃
〃	B－3.II層	O－4	〃		(3.0)	8.2	5.1	210	〃	〃
〃	F－3.VIb層	O－4	〃		(6.4)	(8.6)	(2.6)	180	〃	破片
〃	G－3	O－4	〃		(5.0)	(7.9)	5.0	240	〃	半截
〃	G－3.VIa層谷	O－4	〃		(6.0)	10.9	8.6	920	〃	〃
〃	H－3.IIIa層谷	O－4	〃		(6.9)	9.0	5.1	475	〃	〃
〃	表採	O－4	〃		(4.4)	6.8	5.1	160	〃	破片
〃	表採	O－4	〃		(7.2)	9.8	6.7	710	〃	半截
凹石	B－3	P	201－178	99	(9.4)	6.0	3.9	280	〃	両面に凹み
〃	A－3	P	－179	〃	10.3	5.2	4.3	330	〃	〃
〃	B－3	P	－180	〃	10.3	8.3	4.6	585	〃	〃
〃	C－3	P	－181		11.1	8.5	4.5	590	〃	〃
〃	F－3	P	－182		(7.5)	(4.8)	3.9	170	〃	両面に複数
〃	F－3.VIa層	P	－183	99	6.2	5.6	3.1	120	〃	片面に凹み
〃	G－3	P	－184	100	10.7	5.7	2.7	280	〃	両面に凹み
〃	G－3.谷	P	－185		8.8	8.5	4.4	400	〃	〃
〃	G－3	P	－186	99	5.8	6.2	3.4	160	〃	〃
〃	G－2.トレンチ	P	－187	〃	10.1	7.3	3.9	389	〃	〃
〃	K－2.IIIa層	P	－188	100	14.7	10.7	4.2	1150	〃	片面に凹み
〃	表採	P	－189		13.9	8.5	5.5	950	〃	両面に凹み
石錘	B－1	Q	202－190	100	8.8	5.2	1.8	115	〃	
〃	C－2.II層	Q	－191	〃	6.5	5.3	2.3	124	〃	
〃	H－3.VIb層	Q	－192	〃	8.8	7.8	3.3	290	〃	
〃	表採	Q	－193	〃	6.5	3.7	1.9	75	〃	
〃	表採	Q	－194	〃	6.7	5.0	2.2	84	〃	
敲石	表採	R	－195	〃	6.9	6.7	4.2	320	〃	
石皿	F－2	S	－196		21.3	(16.6)	5.0	2600	〃	一部欠損
〃	G－3.IIIc層	S	－197		(13.3)	4.5	5.5	1100	〃	破片
〃	B－3	S	図化せず		(13.4)	(10.9)	7.2	2100	〃	1号住居

（ ）内は推定

第13表　第II次調査石器計測一覧表　（7）

（単位cmおよびg）

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
石皿	G－3、VIa層	S	図化せず		(6.6)	(7.1)	8.4	560	安山岩	
石棒	G－3、VIb層	T	202－198		14.3	10.2	11.1	2900	〃	
〃	F－1	T	図化せず		(10.0)	14.7	(8.0)	2100	〃	第2号円形土坑
〃	G－3、VIa層	T	〃		(7.4)	12.6	(6.3)	1500	〃	破片
砥石	G－3	U	202－199		7.8	4.2	1.1	55	緑泥片岩	鎌倉時代

（ ）内は推定

第14表　第II次調査石器計測一覧表　（8）

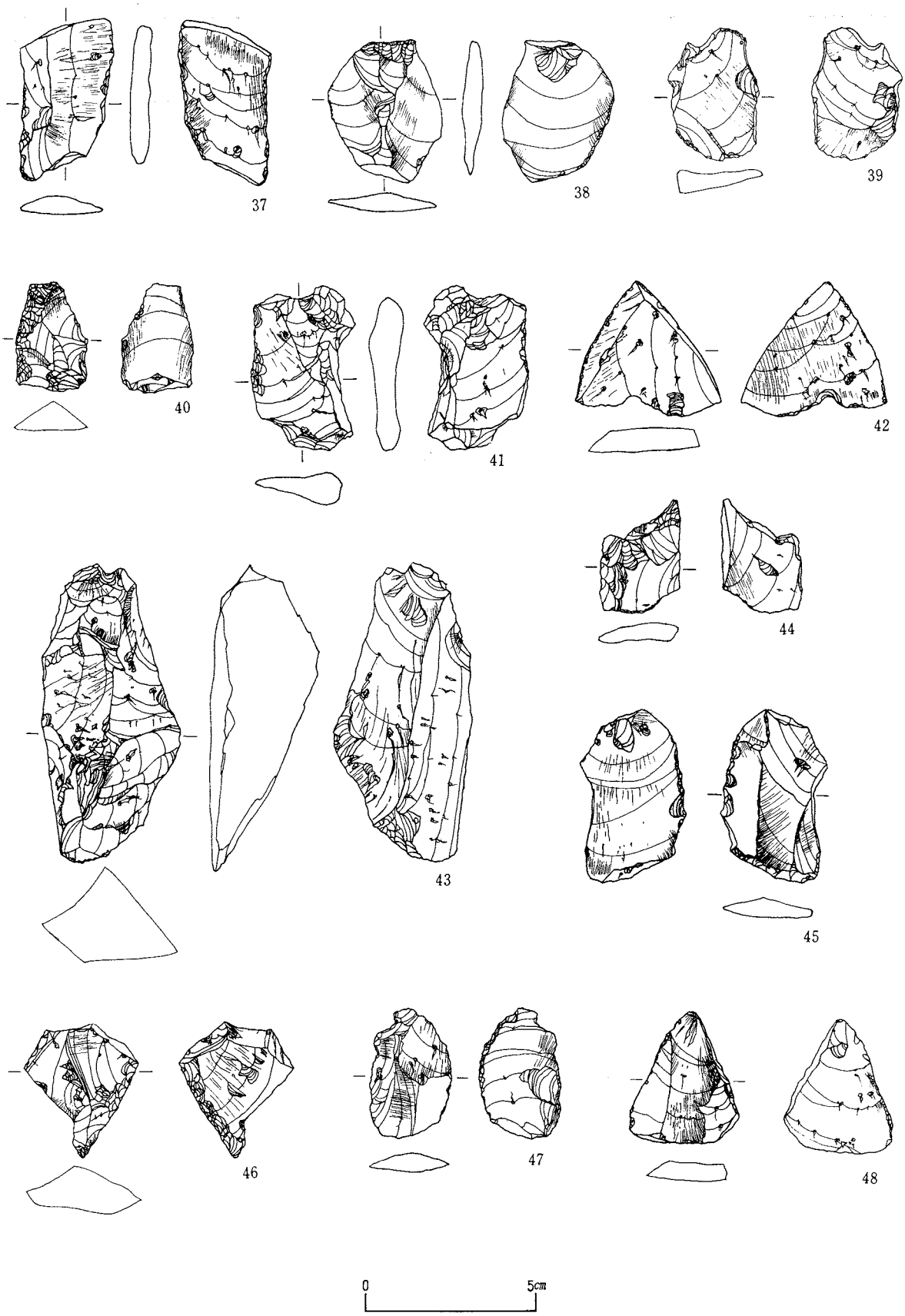
石器分類記号

A　ナイフ形石器　　B　彫器　　C　石槍　　Ć　有舌尖頭器　　D　スクレーパー

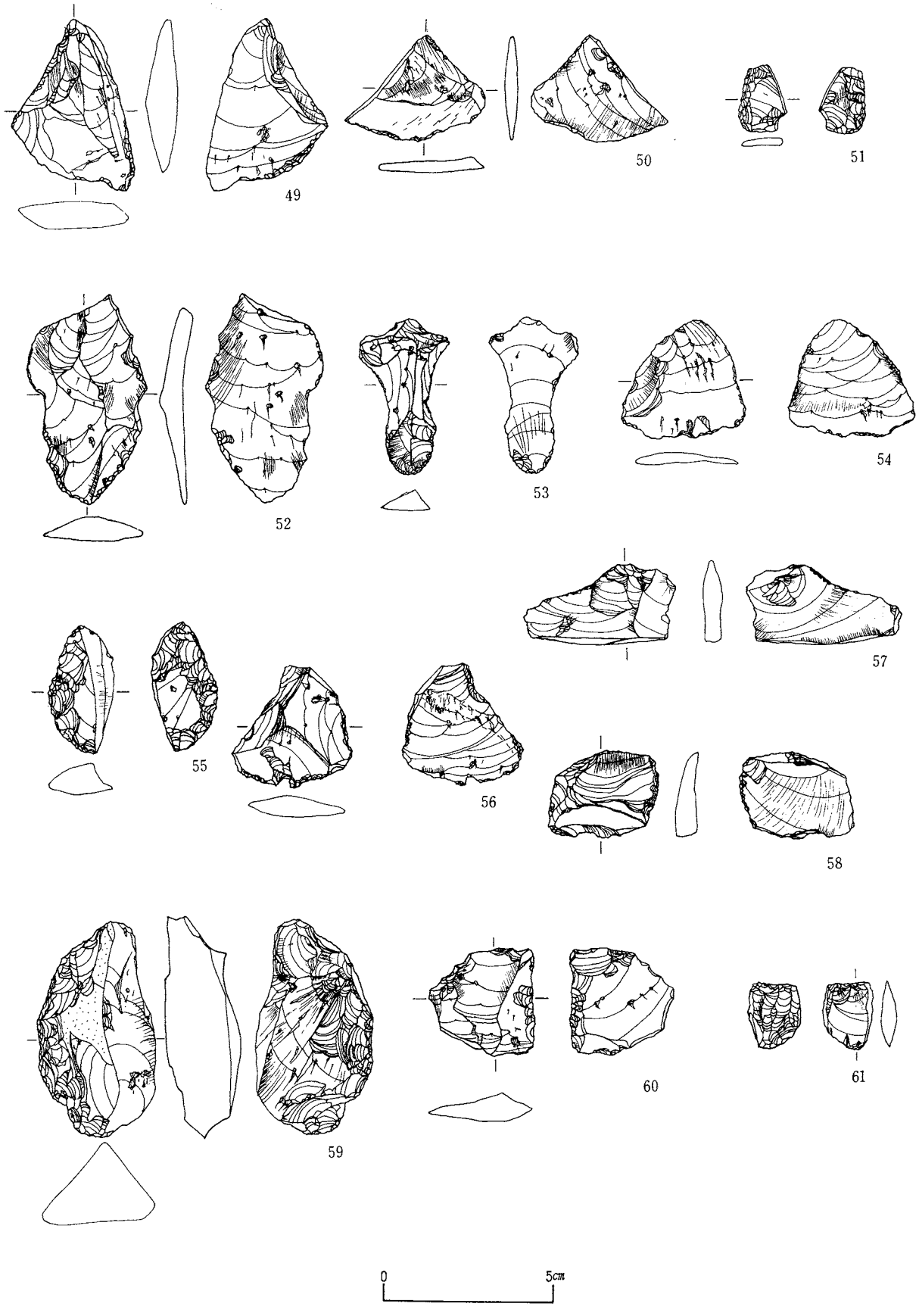
E　楔形石器　　F　錐　　G細部加工剝片　　H　石鏃　　I　石核　　J　石匙

K　礫器　　L　局部磨製石斧　　N　磨製石斧　　O　磨石　　P　凹石

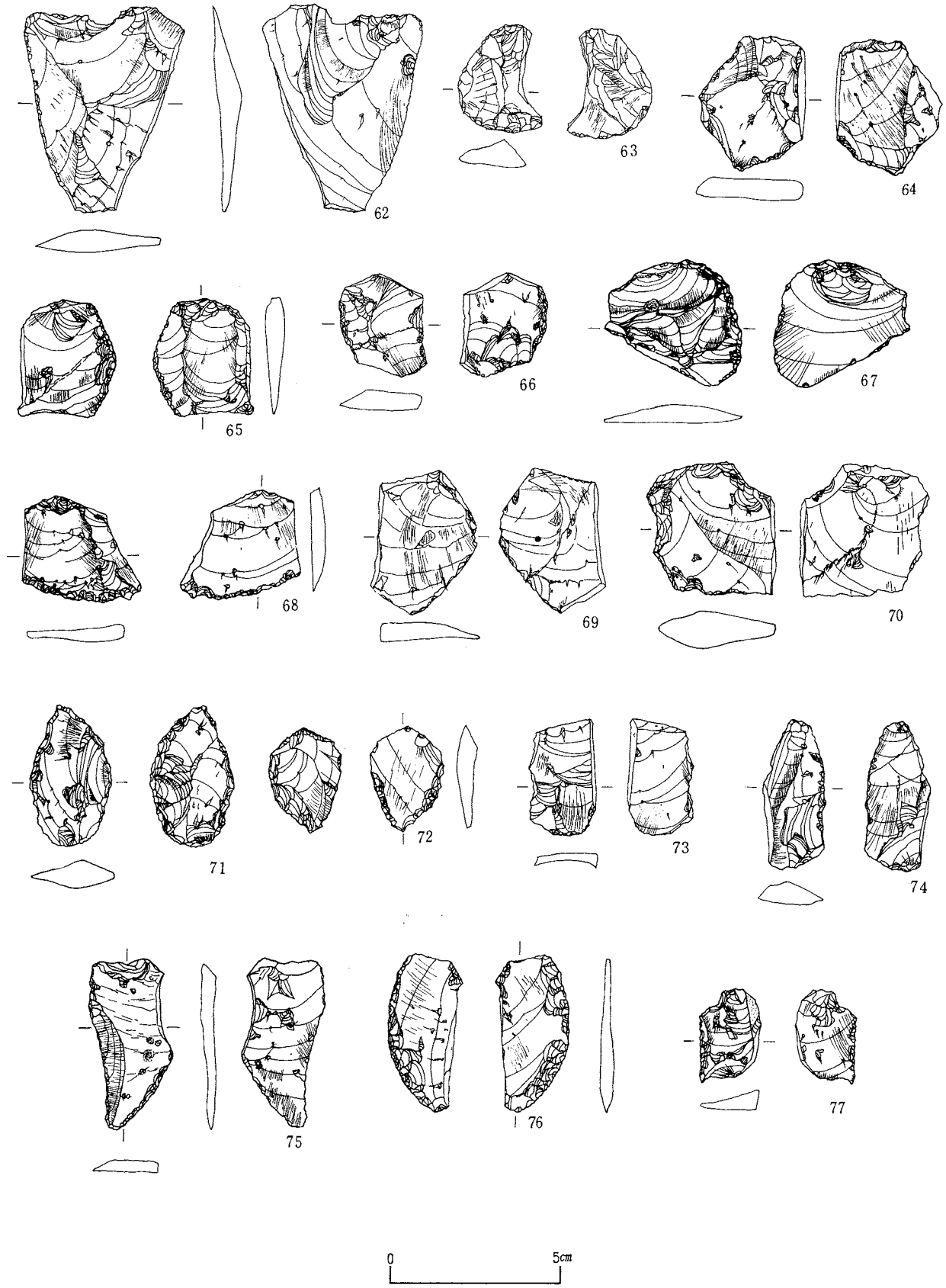
Q　石錘　　R　敲石　　S　石皿　　T石棒　　U砥石　　V　抉入石器



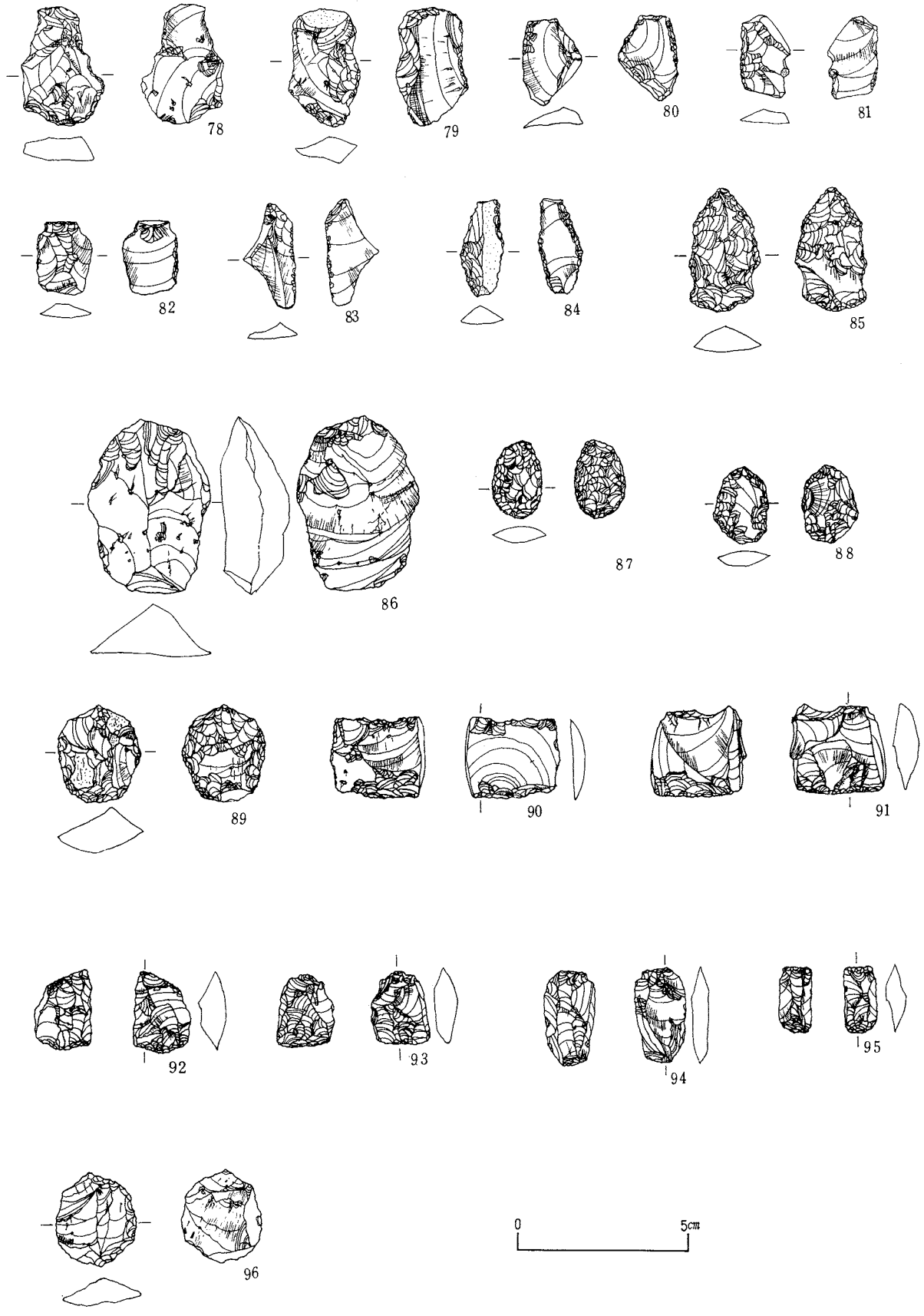
第188図　第II次調査 出土石器実測図（５）



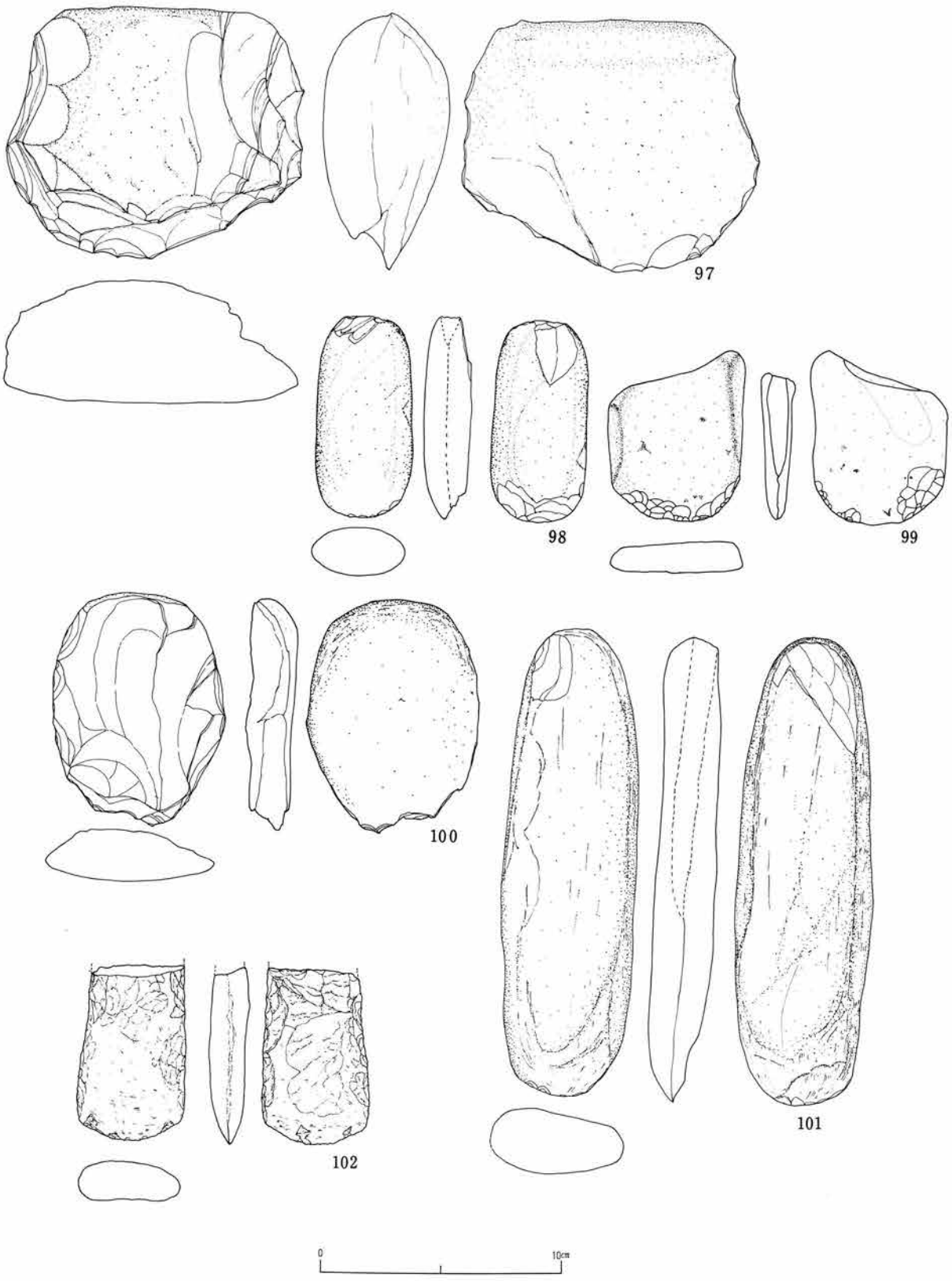
第189図　第II次調査 出土石器実測図（6）



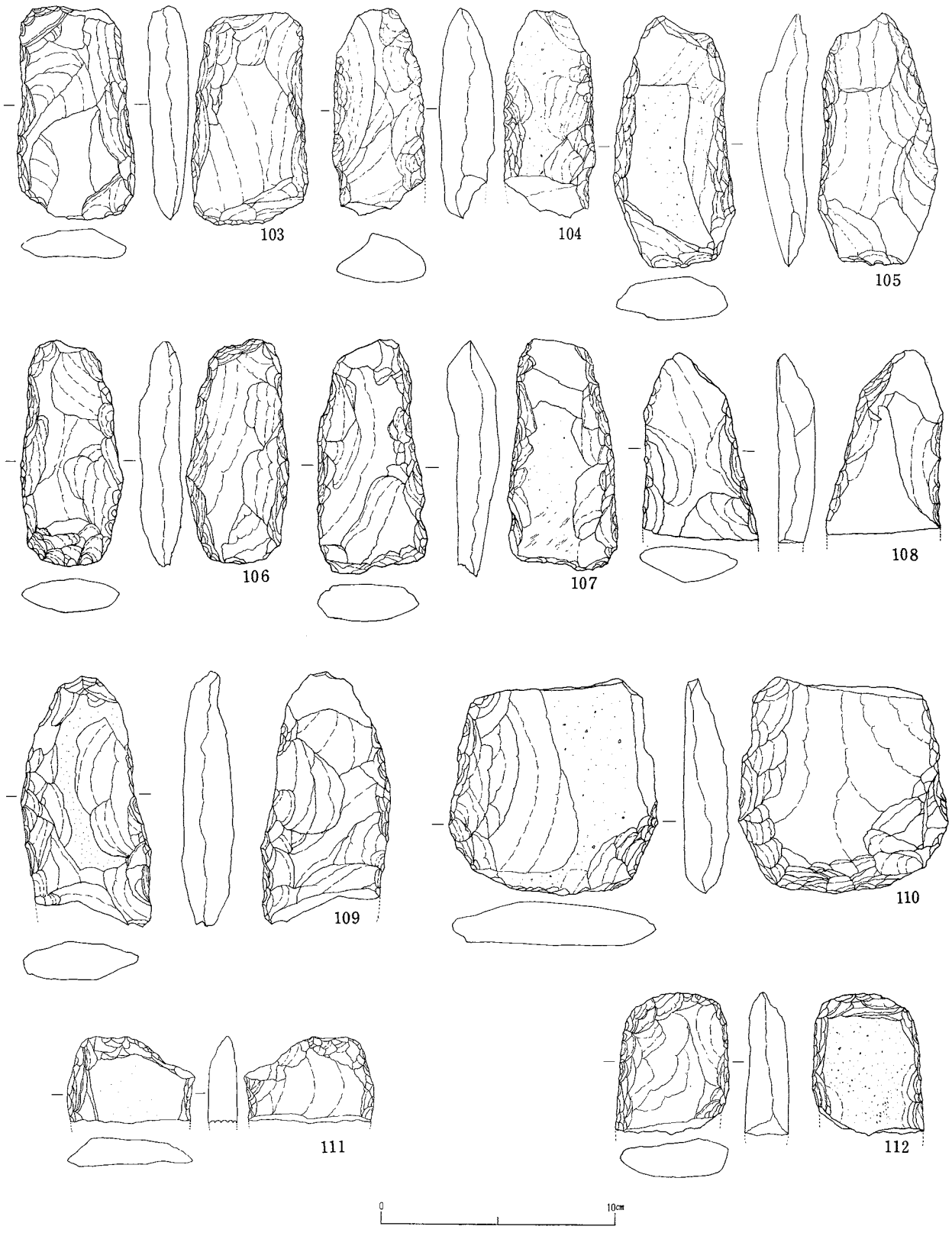
第190図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（７）



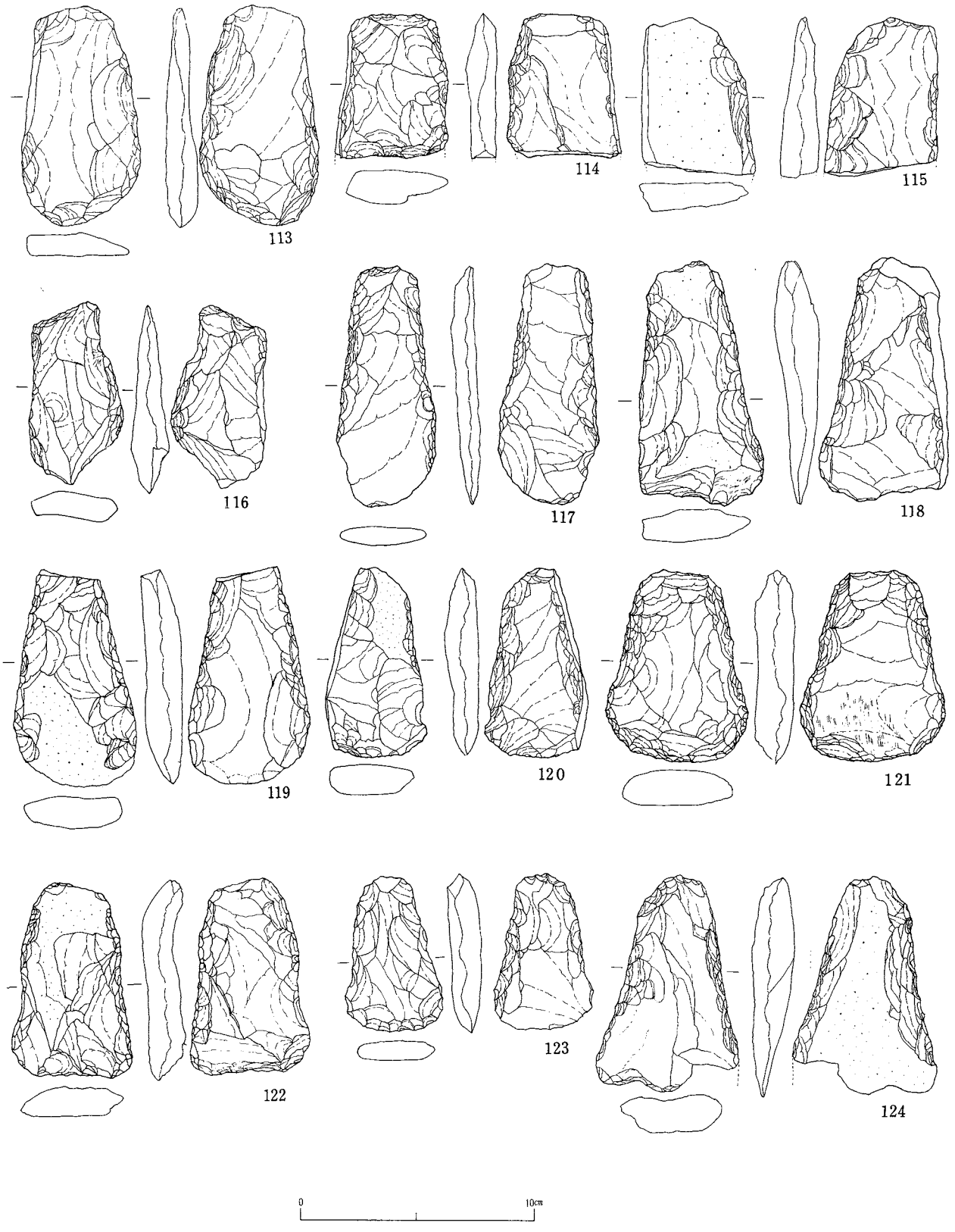
第191図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（８）



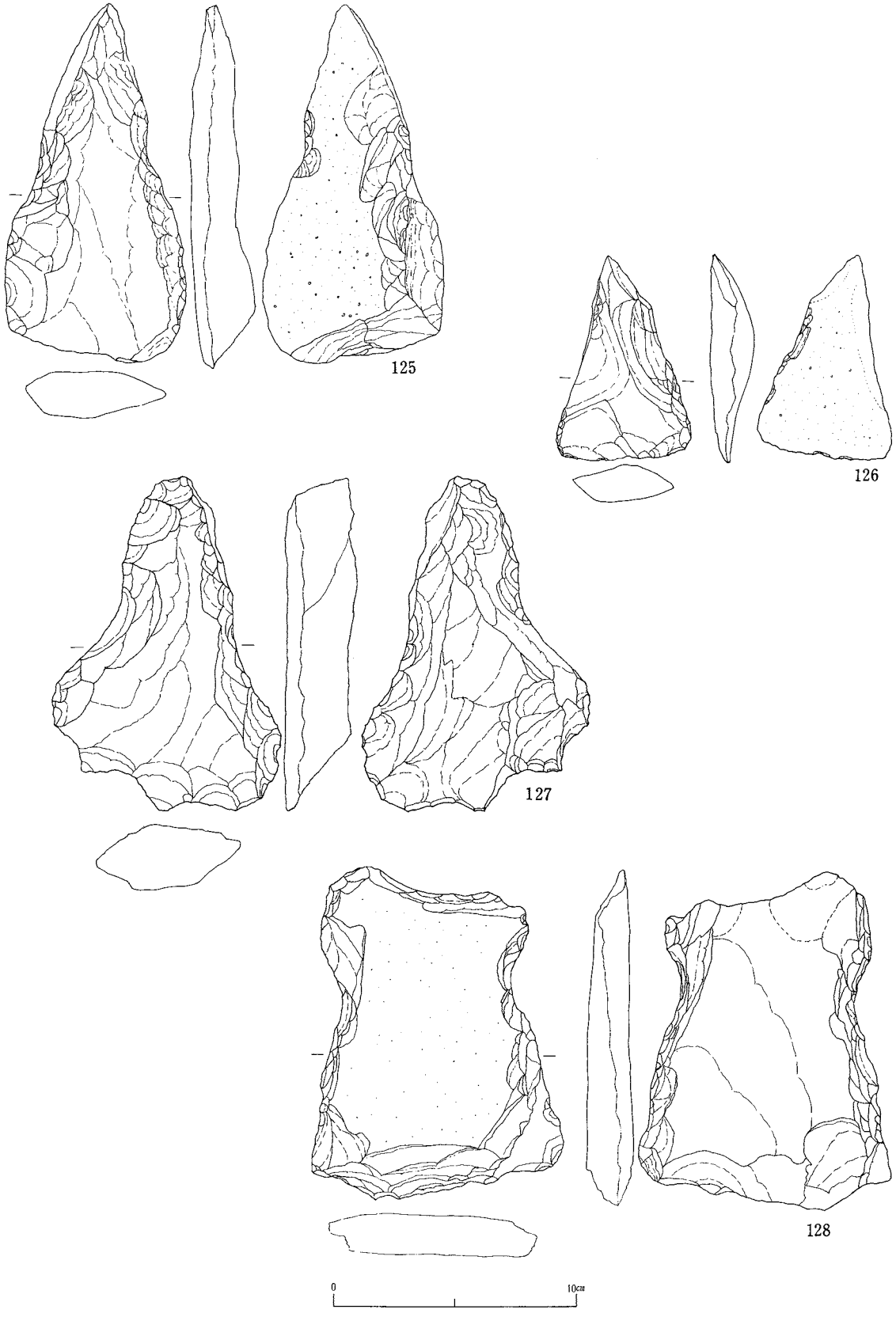
第192図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（９）



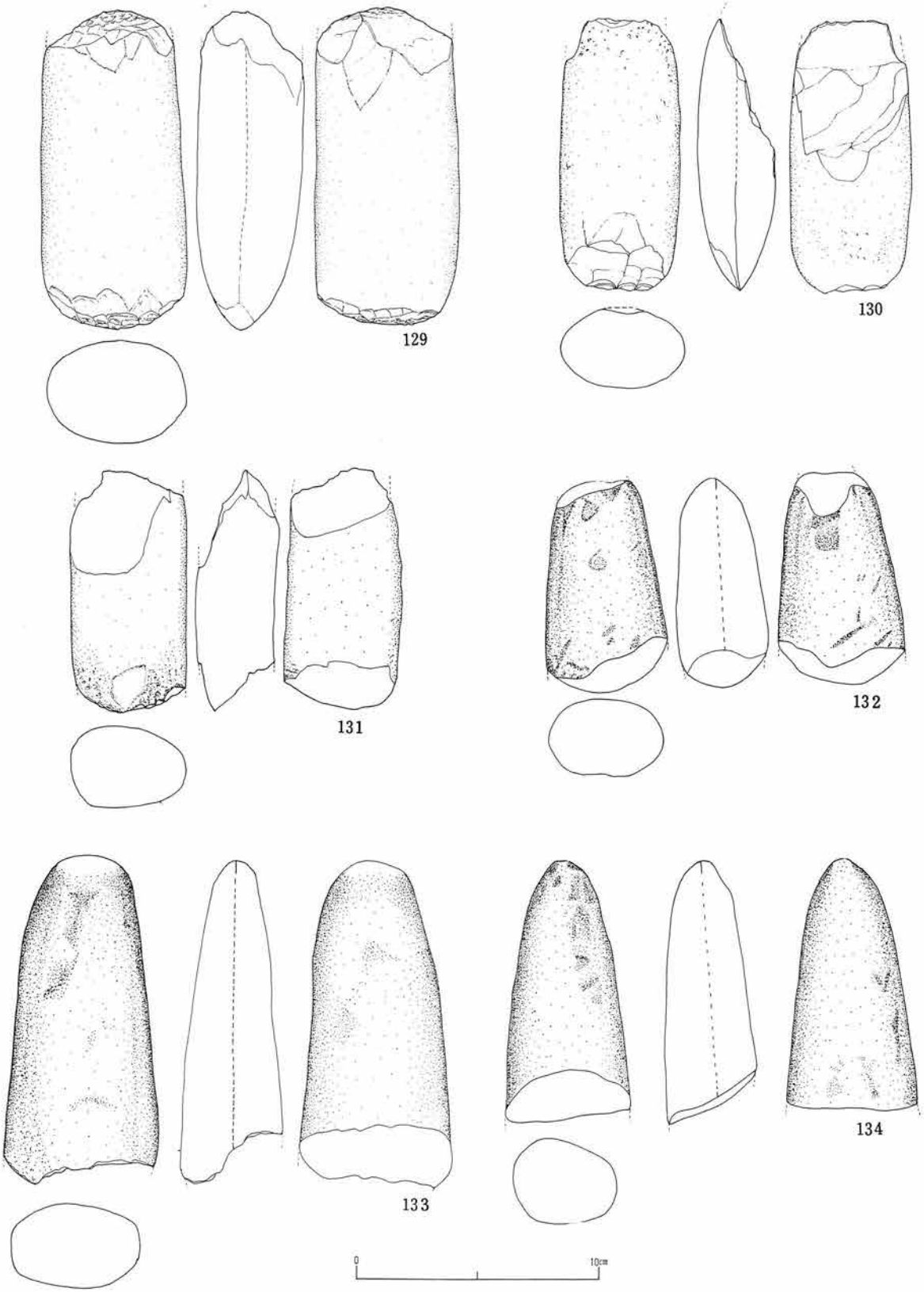
第193図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（10）



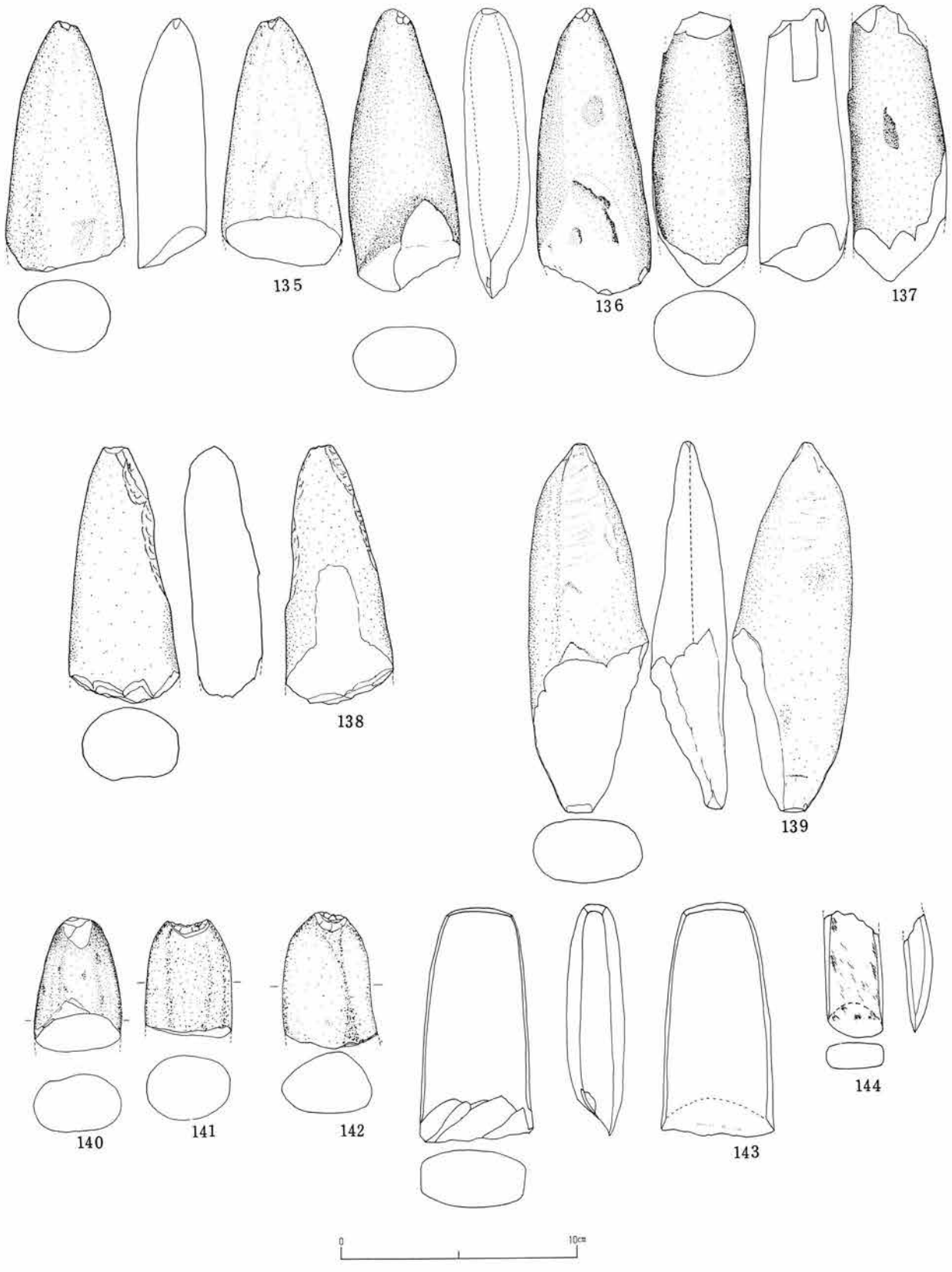
第194図　第II次調査 出土石器実測図（11）



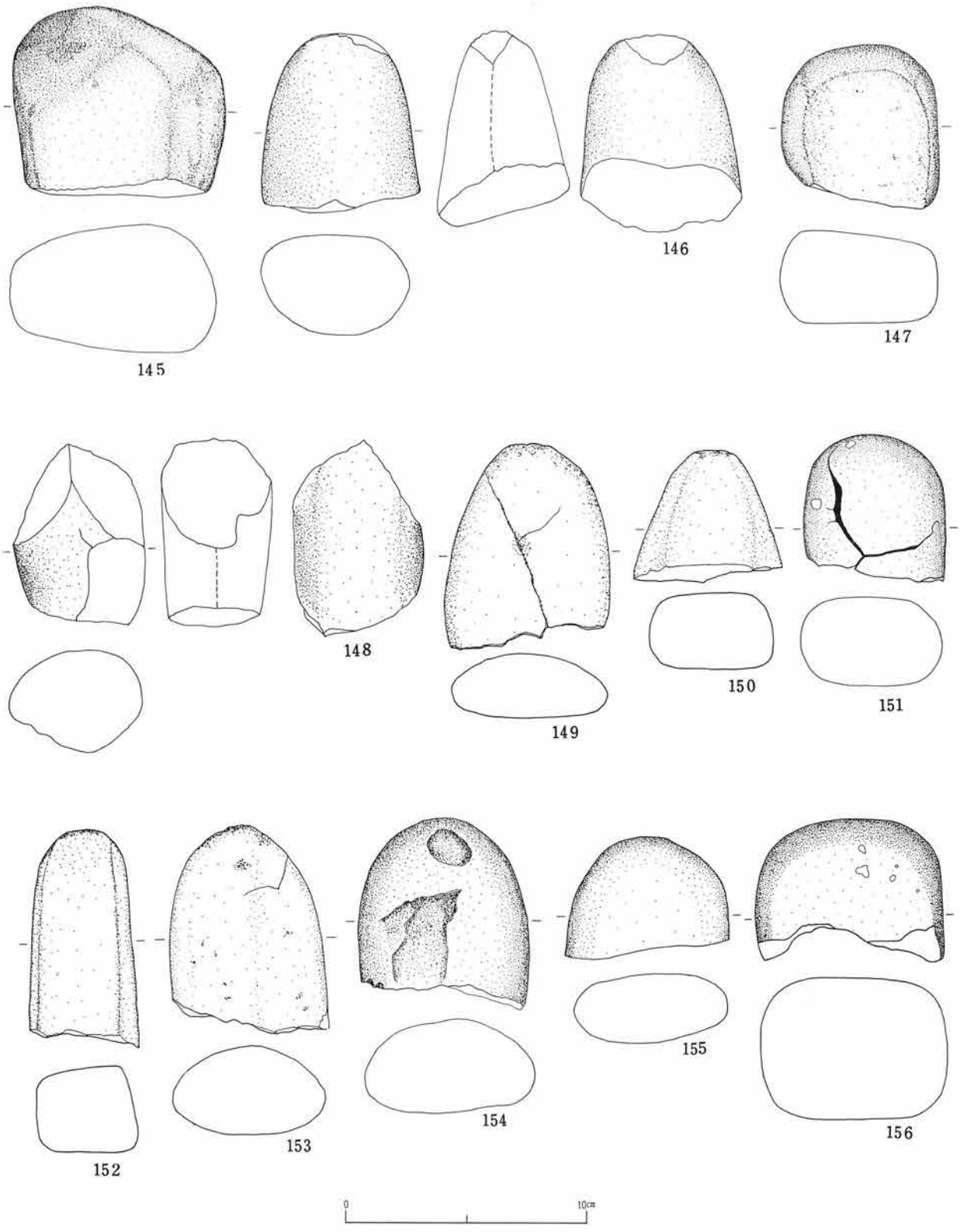
第195図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（12）



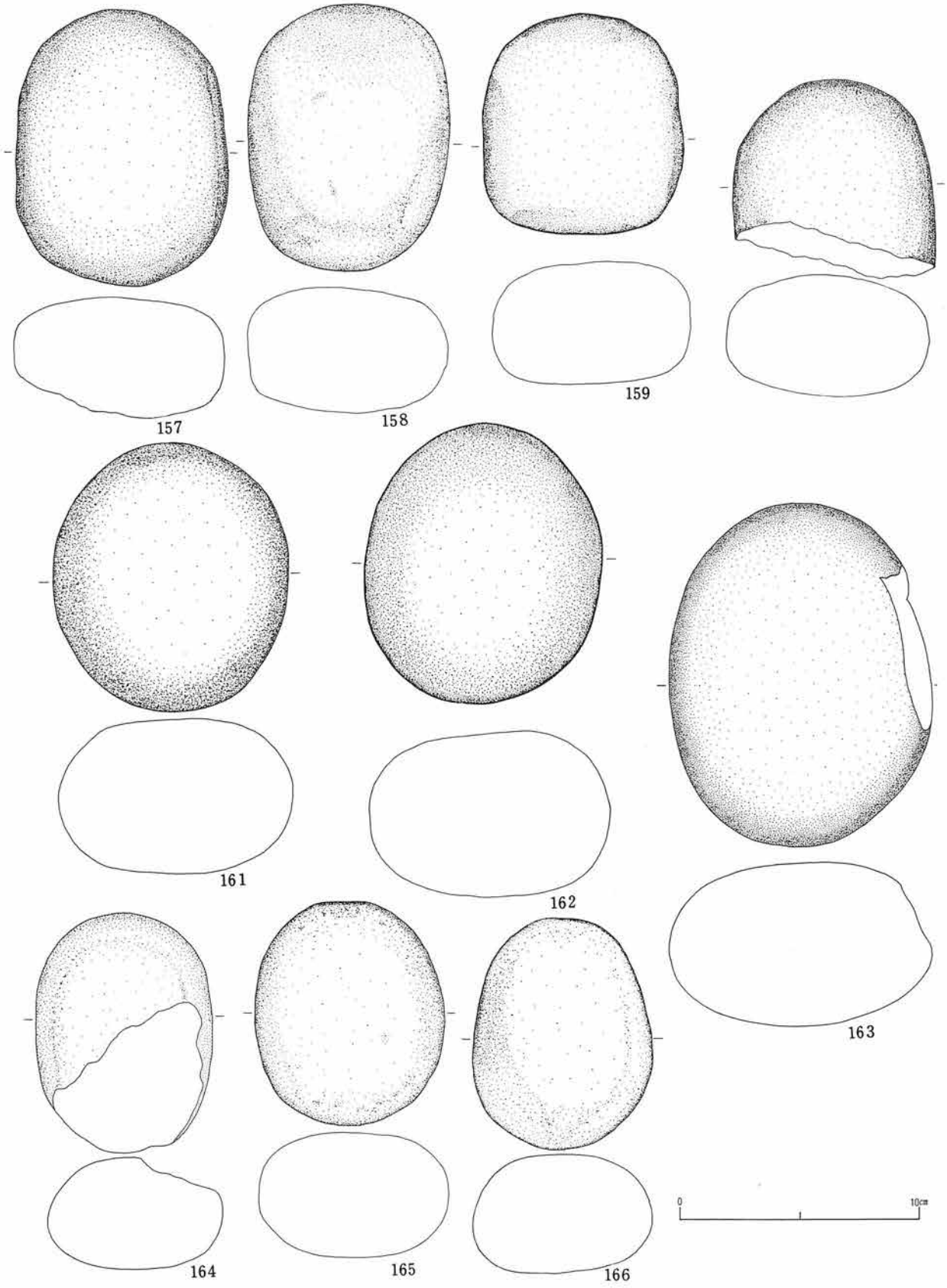
第196図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（13）



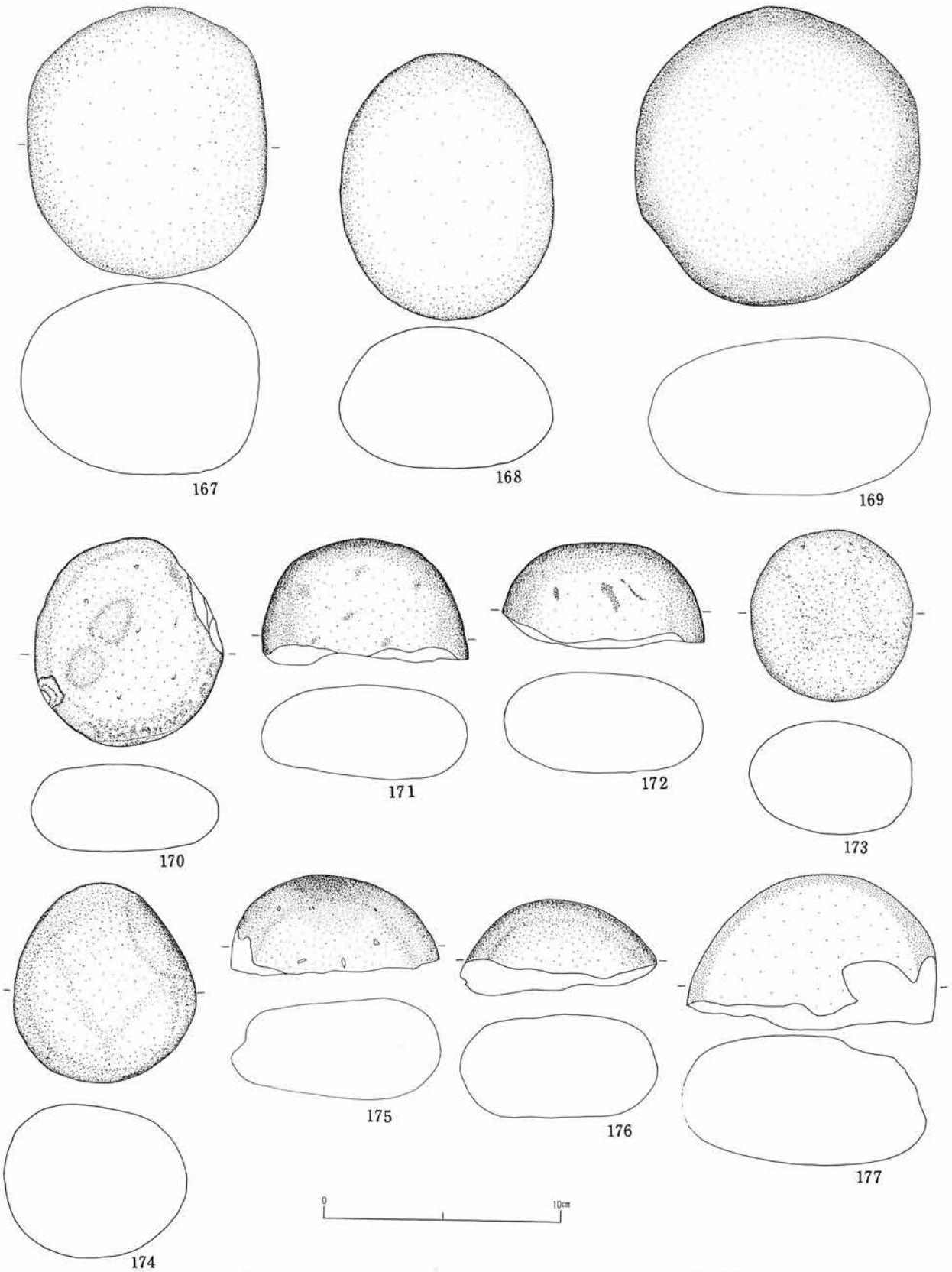
第197図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（14）



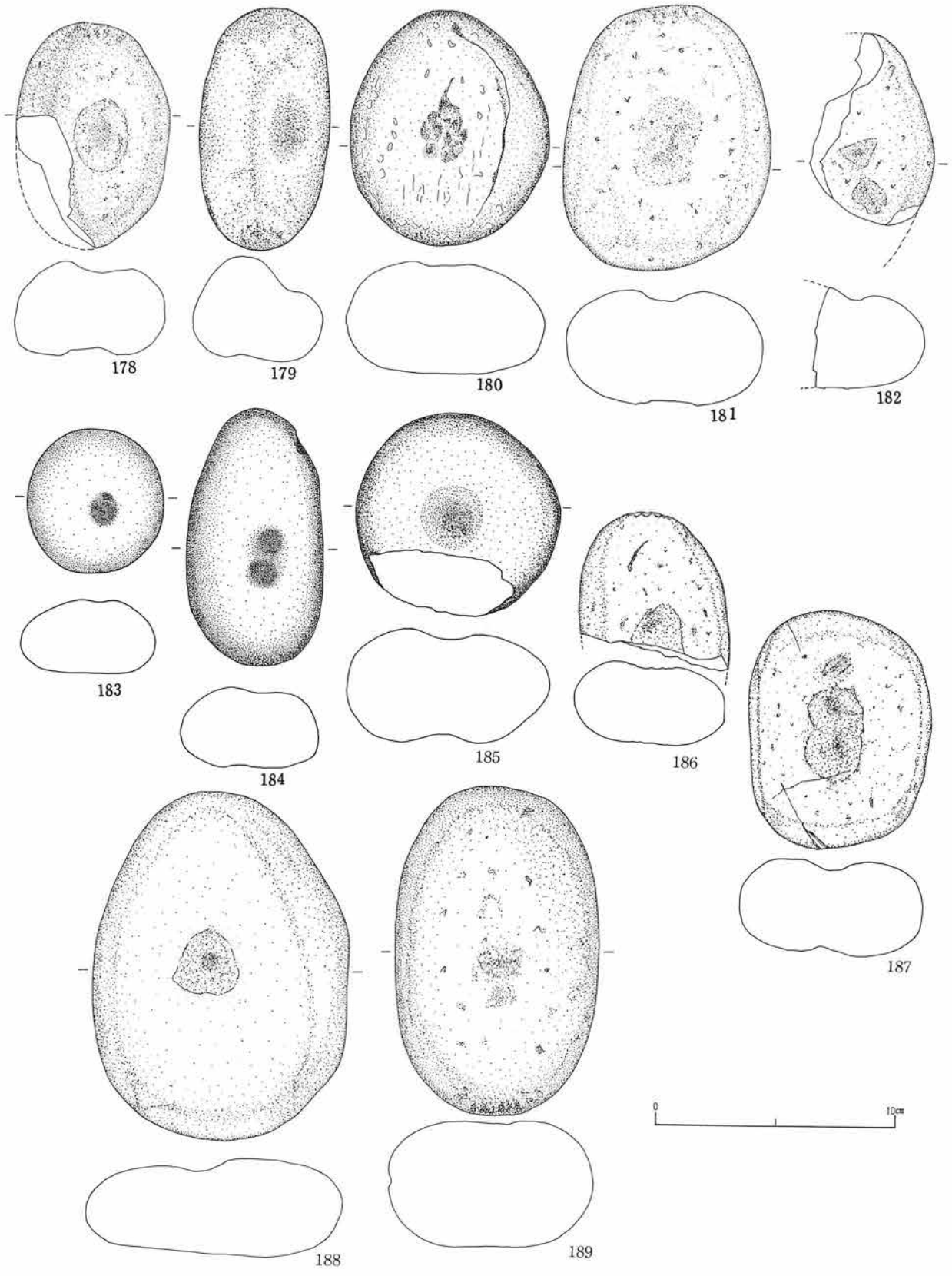
第198図　第II次調査 出土石器実測図（15）



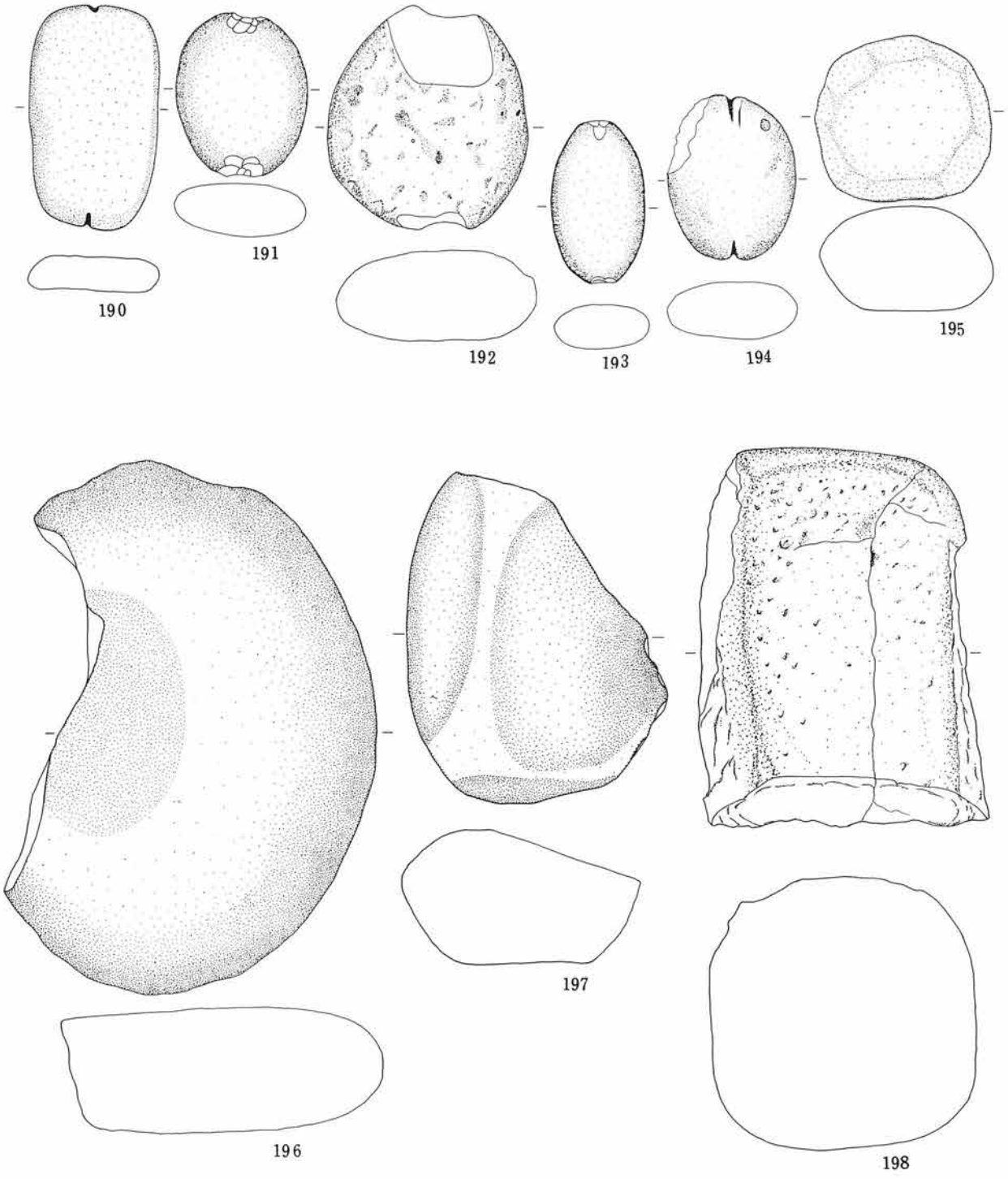
第199図　第II次調査 出土石器実測図（16）



第200図　第II次調査 出土石器実測図（17）



第201図　第Ⅱ次調査 出土石器実測図（18）



第202図　第II次調査 出土石器実測図（19）

4、歴史時代の遺構と遺物

本遺跡からは、これまで当町では知られていなかった歴史時代の遺構や興味ある遺物が発見されている。いわゆる方形竪穴住居跡１基、方形土坑１基、円形土坑６基などであり、また該期の柱穴と思われる小ピットも数多く検出されている。また、調査区の南東側で見つかった小河川跡も、やはりこれらの遺構と同時期と考えられるもので、木製品や桃の果核などが出土している。

a　遺構

イ、住居跡

方形竪穴住居跡（第203図・図版103・120）

調査区の西側、Ｂ－２グリッド内で検出されている。第２号・３号住居跡を掘り込んで構築しているもので、長径3.05m、短径2.45mほどの方形のプランを呈する。当時の生活面はすでに削土されているため、現存する壁高は35～50cmである。炉跡は住居跡東側の壁中央で確認され、焼土・炭化物が検出された。焼土は壁際に25cmの厚さに堆積していた。柱穴は、やや角張ったもので壁の外側に添って10本検出されている。床面下まで掘られているのは僅かに２本で、残りは壁の上位部分までしか掘り込まれていない。径は約20～35cm、深さは12～36cmである。さらに、住居跡の北西隅には長径115cm、深さ12cmの半円形のピットが存在する。

出土遺物は、床面および覆土中より常滑焼の破片３点と釘・鎹・刃器・責め金具など鉄製品９点が検出されたにすぎない。（第212図・216図・図版108）なお本住居跡の構築時期は、出土した常滑焼の時期を以て考察するにはやや時間差があり、おそらく平安時代末期～鎌倉時代初頭であろう。しかし、当地方においては、韮山町を除いて古代～中世の資料が乏しかっただけに当時の様相を探る貴重なものとなるであろう。

ロ、土坑

方形土坑（第204図・図版104）

調査区の北側中央、Ｆ－１グリッド内で検出された。当初壁際にプランが検出されたため調査区域を若干拡張して全容の解明につとめた。その結果、長径1.5m、短径0.93mを呈するものである事が分かった。底面はほぼ平坦で立ち上がりはやや急である。最深部での深さは31cmを測る。土坑内には石・礫等はなく、遺物はわずかにカワラケ２点、須恵器１点が出土しているにすぎない。

このうち、須恵器の小破片は土坑底面に貼りつくような状態で検出されている。覆土については、前述の方形竪穴住居跡と同様に灰黒褐色を呈し、該期のものであろうと思われる。しかし、本土坑の性格についてはその裏付けとなる資料がなく判然としない。

第１号円形土坑（第205図）

方形土坑の南西側、Ｅ・Ｆ－１グリッド内において検出されている。北東側を第２号円形土坑によって切られているが、およそ80cmの径を有するものと推定される。また、本土坑の構築時における層はすでに削土されており、第Ⅵ層直上での検出であるため、往時の壁高を知るこ

とは出来なかった。最深部での深さはわずかに10cmと極端に浅い。底面は平坦である。覆土は黒褐色を呈する。出土遺物はなく、構築時期は不明である。

第2号円形土坑（第205図）

Ｅ・Ｆ－１グリッド内で検出され、第１号円形土坑と重複しこれを切って構築している事が確認された。径はおよそ105cmの円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、壁はなだらかに立ち上っている。最深部での深さは第１号円形土坑と同じく壁が削られているため11cmと浅い。覆土は黒褐色を呈し、第１号円形土坑と同時期であろう。出土遺物はなく、小礫が一個検出されただけである。

第3号円形土坑（第206図）

調査区の南側、Ｄ－３グリッド内で検出された。東壁は第２号配石土坑に接しこれを切って構築している。長径83cm、短径はおよそ56cmの楕円形を呈する。底面は南東部が凹んだ不整形な皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上っている。最深部における深さは約12cmと浅い。覆土は、第１号・第２号円形土坑と同様黒褐色であり、出土遺物は検出されなかった。

第4号円形土坑（第207図）

Ｄ－１グリッド内で検出された。第４号住居跡の東側に位置している。長径54cm、短径52cmの円形を呈する。底面は平坦で立ち上がりは急である。最深部での深さは21cmである。本土坑は第４号住居跡と同様に、第Ⅴ層が削られているため第Ⅵ層の上面において検出している。出土遺物はなく性格は不明である。

第5号円形土坑（第208図・図版105）

第１号ピットの北側、Ｄ・Ｅ－１グリッド内に位置している。北側の一部は調査区域外のため全プランを確認する事は出来なかったが、直径およそ60cmの円形を呈するものと推定される。底面は平坦で壁の立ち上がりはやや急である。最深部での深さは21cmを測る。この土坑も第４号土坑と同様Ⅵ層上面で検出されている。時期不明の土器片が若干出土したのみで、本土坑の性格は不明である。

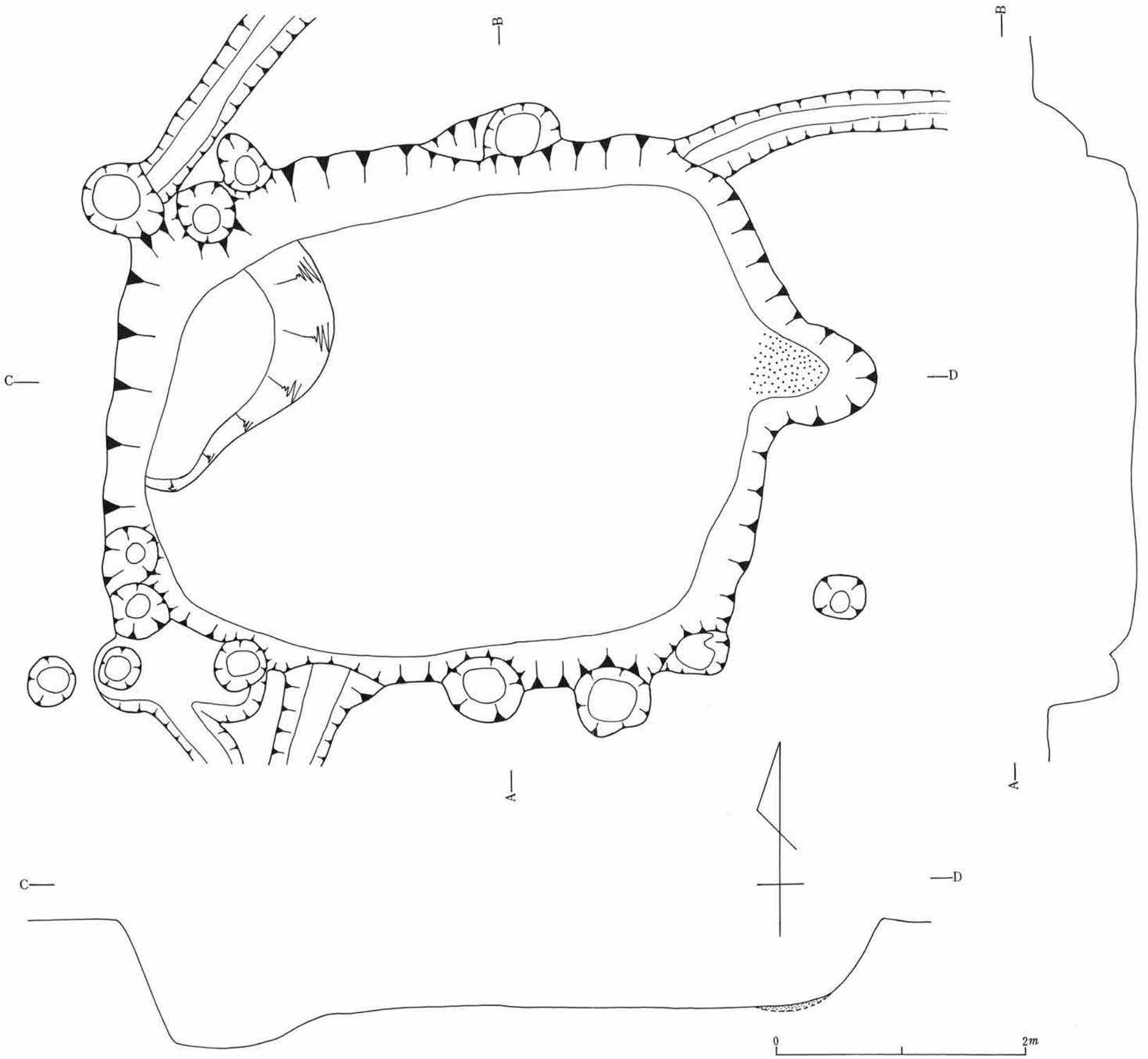
第6号円形土坑（第209図）

第５号住居跡の西南側、Ｅ－２グリッド内において検出されている。径75cmの円形を呈する。底面は平坦であり立ち上がりはやや急である。最深部での深さは18cmと若干浅い。これは、第５号住居跡と同様に構築面である第Ⅴ層が削られている事によるものである。出土遺物は時期不明の土器片１点のみである。

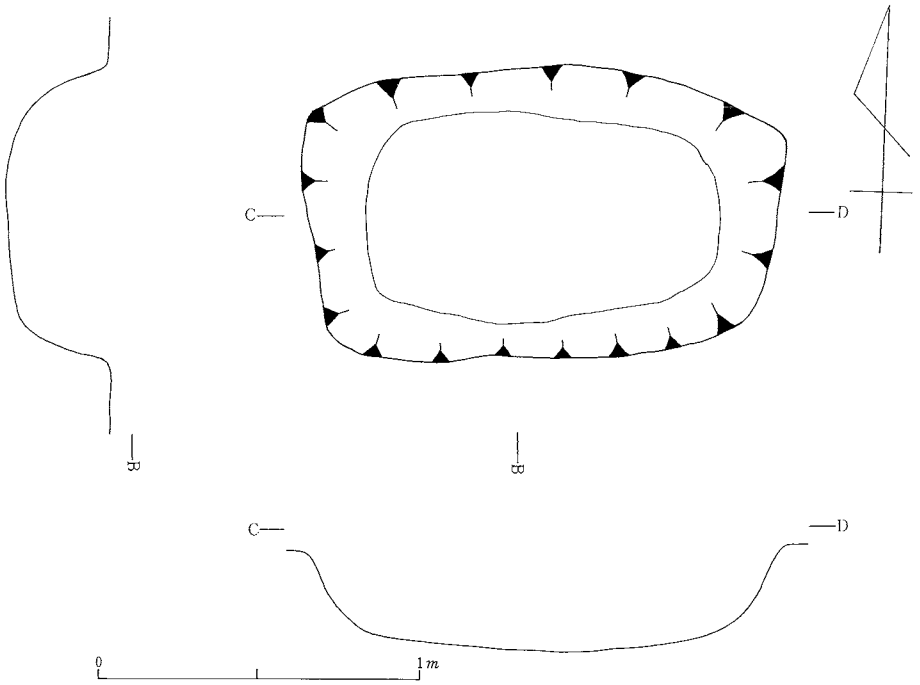
ハ、河川跡（第210図・図版106）

Ｈ－３グリッドを削土していくと、Ⅻ層に至って粘性のある灰黒褐色土層が出現した。有機質土であり、ⅩⅣ層（黒色土）とは色調の違いにより分離したが、基本的には同質である。

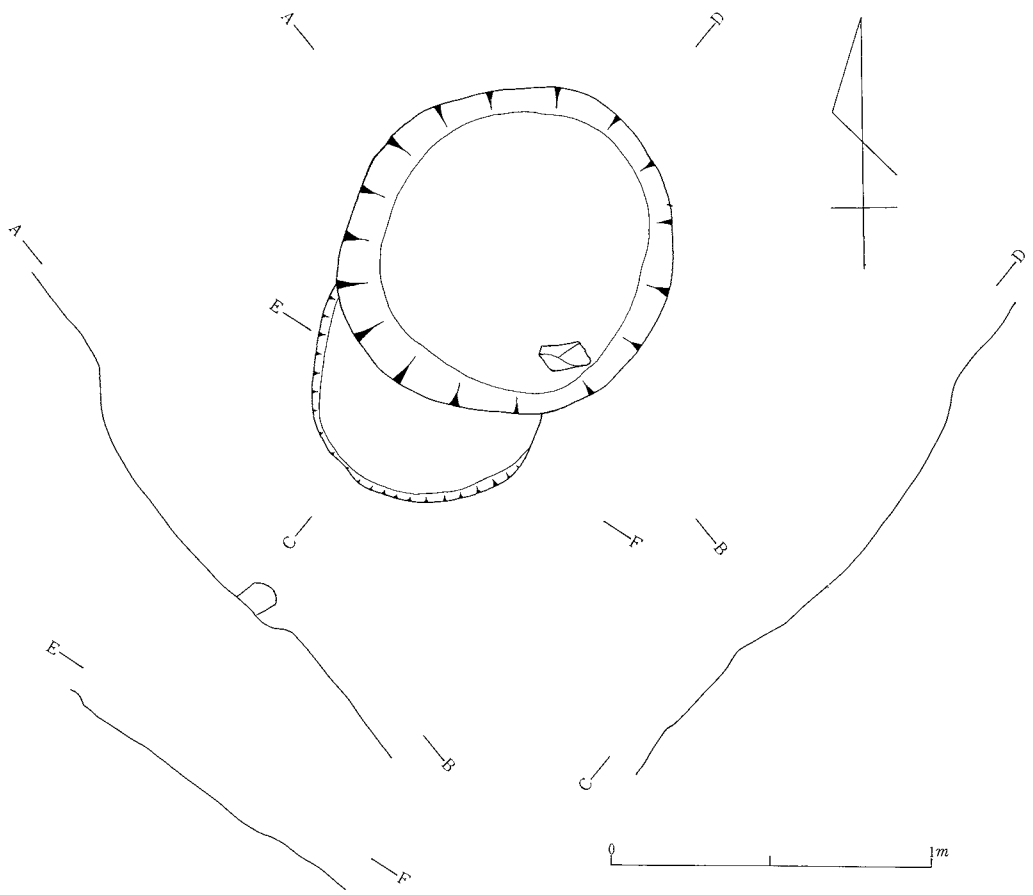
ⅩⅤ層は暗灰褐色を呈する砂質土で小礫を含んでいる。これら各層から平安時代末期～鎌倉時代初頭の漆塗木椀・木皿・箸などの木製品や桃の種子などが出土している。当時の小河川跡と考えられる。



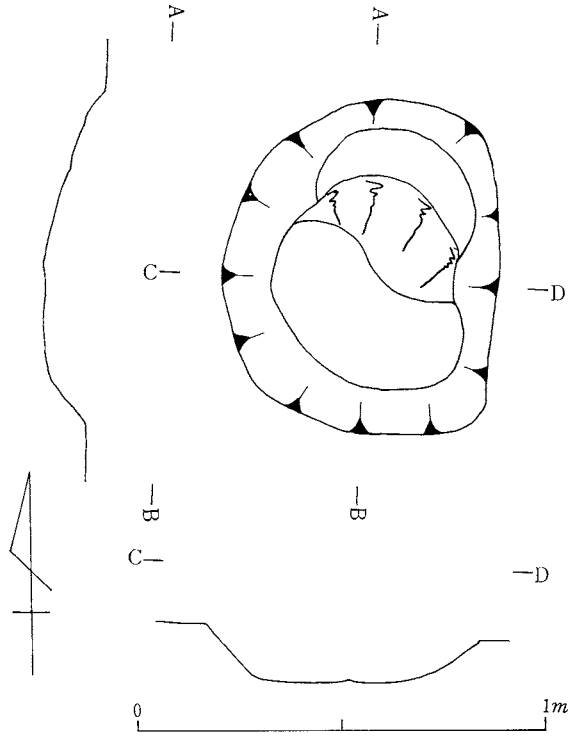
第203図　第Ⅱ次調査 方形竪穴住居跡実測図



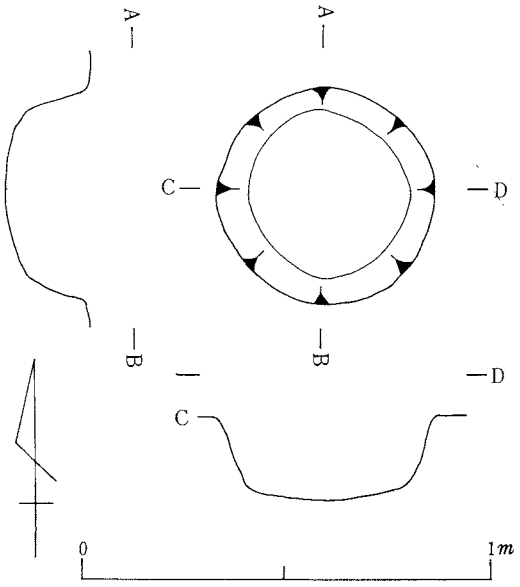
第204図　第II次調査 方形土坑実測図



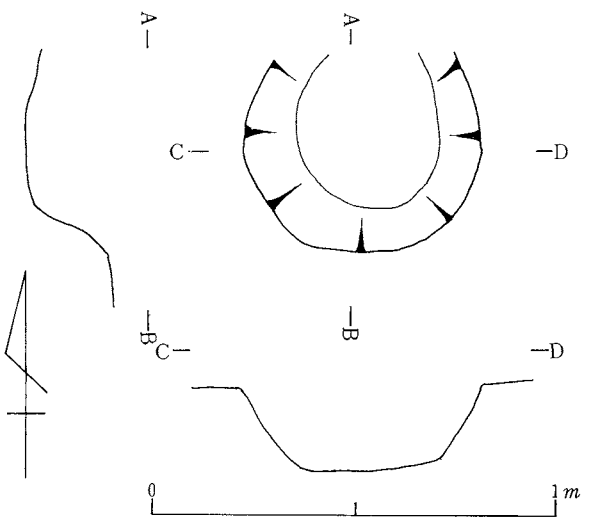
第205図　第II次調査 第1号,第2号円形土坑実測図



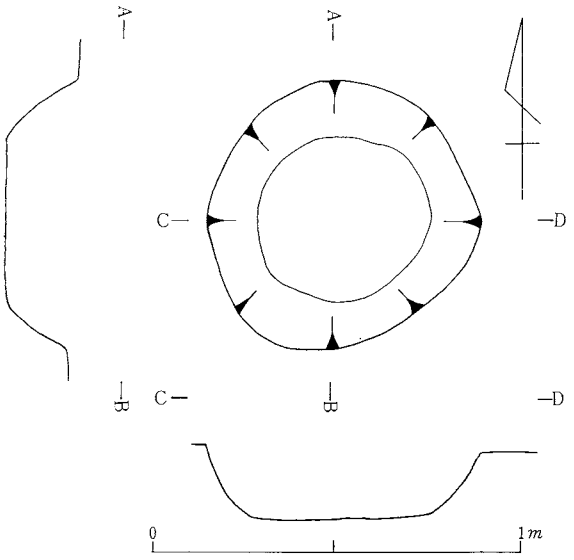
第206図　第II次調査 第3号円形土坑実測図



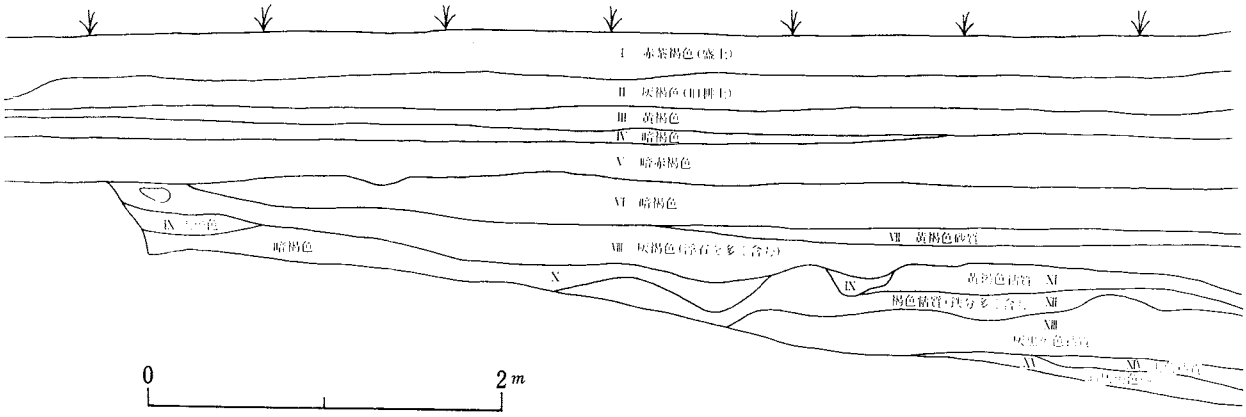
第207図　第II次調査 第4号円形土坑実測図



第208図　第II次調査 第5号円形土坑実測図



第209図　第II次調査 第6号円形土坑実測図



第210図　第Ⅱ次調査Ｈ－２．３グリッド東壁セクション図（河川跡）

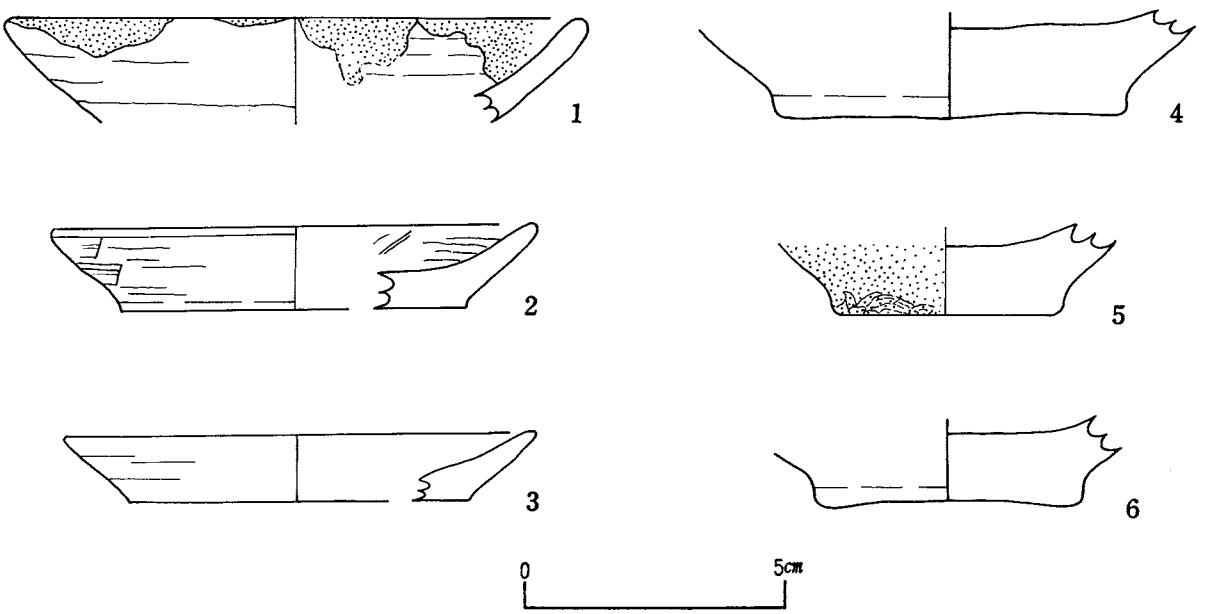
b　遺物

古墳時代以降の遺物としては土器類と木器とがある。

古墳時代以降の土器類としては、須恵器、山茶碗類や古瀬戸系陶器、瀬戸・美濃系陶器、常滑系陶器、渥美系陶器などの国産陶器類と、宋・元・明代の青磁・白磁・青白磁などの舶載磁器類、かわらけなどであった。

イ．須恵器（第213図15）

古墳時代の須恵器が数点出土しており、大甕の胴部の破片であった。器面の外側には叩き目があり、器肉の中央は赤褐色を呈し、表面は青灰色を呈する。



第211図　第Ⅱ次調査 出土土器実測図

ロ．山茶碗類（図版115—14～29．第213図４・６～11）

須恵質のもので、碗と小皿・蓋とに分けられる。

碗（図版115—14・20～25、27～29、第213図７～９・11）

14（第213図７）は底部の破片で、碗の底面に断面形が三角形を呈する高台を貼り付けてあり、灰色を呈する。20～25・27～29は口縁部の破片で、20・27は灰色を、他は灰白色を呈する。口唇部には自然釉の降灰が見られるものもある。27～29は東遠江の大井川水系で焼かれたものと思われ、14は12世紀の初頭頃、20～25・27～29は13世紀代のものと思われる。

蓋（図版115—26）

東遠江系のもので、灰白色を呈し、器面の外側には降灰による自然釉が認められ、13世紀代のものと思われる。

小皿（図版115—15～19、第213図６・10）

15（第213図６）は高台付のもので、16には高台が付いていない。灰青色から灰白色を呈し、一部に自然釉の降灰が認められる。16・17（第213図10）の口唇部の一部に煤が付着しており、灯明用に使用されたと思われる。15は12世紀前半頃、16～19は13世紀代のものと思われる。

ハ．国産陶器（図版109～114）

a．古瀬戸系陶器（図版109・110—１～14．第213図16・17・19、第214図15）

壺（図版109—１）

底部の小破片で、底面には断面が台形を呈する高台が貼り付けられている。底部の内面には淡緑黄色の釉が一部に見られる。12世紀代のものと思われる。

灰釉壺（図版109—２～４）

２～４は胴部の破片で、器面には淡灰緑色の釉が薄く施されている。胎土は灰黄色で、13世紀後半のものと思われる。

灰釉花瓶（図版109—６～10）

花瓶と思われるもので、いずれも胴部の破片である。小破片のため全体の器形は知り得ないが、底部からラッパ状に開く胴部を呈すると思われる。器面には透明な淡い黄朽葉色の釉が施されており、６の一部には乳濁色の部分も見られ、内面にも釉が見られる。６・８には釉が流れて釉溜りができている。室町時代中頃・15世紀前半頃のものと思われる。

灰釉小皿（図版109—11）

底部の破片で、底面には糸切りの痕が見られる。底面の縁部の一部と内面に透明な淡緑色の釉が見られる。15世紀前半頃のものと思われる。

片口鉢（図版109—12～22、第213図16・17・19、第214図15）

灰釉が施されていないもので、14・16（第213図17）・19（第213図19）は口縁部、12・13・15・18・21・22（第213図16）は胴部下方、17（第214図15）は高台付の底部の破片である。器面は灰色ないし灰白色を呈するが、19は赤味をやや帯びている。16の器面には黒い煤状のものが付着しており、12・19・22の内面には自然釉の降灰が見られる。12～15は12世紀後半、16は12世

紀代またはそれ以前、17・18は13世紀代、19～20は13～14世紀代のものと思われる。

灰釉三足盤（図版110－１、第214図20）

三足盤の口縁部の破片で、やや濁りのある緑灰色の釉が器面の内外に見られ、内面では口縁部に施され、下方に釉が流れている。15世紀後半頃のものと思われる。

灰釉下し皿（図版110－２・３）

共に口縁部の破片で、２は器面の内外に黄朽葉色の釉が薄く施されている。３は器面の内外に緑色の釉が見られる。２は13世紀代、３は15世紀後半頃のものと思われる。

下し皿（図版110－４・５）

共に口縁部の破片で、施釉されず、器面は灰色を呈する。13世紀後半頃のものと思われる。

灰釉皿（図版110－６・７）

６は口縁部、７は底部の破片で、６には器面の内外に黄緑色の釉が、７には底面を除いた他の部分に黄味のある飴色の釉がそれぞれ施されている。胎土は共に灰白色を呈し、15世紀末頃の大窯初期に焼かれたものと思われる。

灰釉平碗（図版110－８～10）

８は口縁部、９・10は胴部下方の破片で、８は器面の内外に、９・10は内面と外面の上半に釉がそれぞれ施されており、釉は８・９は半透明の淡黄緑色、10は飴色を呈し、胎上は８・９が灰色、10は黄白色をそれぞれ呈する。15世紀中頃から末頃にかけて焼かれたものと思われる。

灰釉小瓶子壺（図版110－11～14）

11・12は底部近くの破片で、底面の貼り付けた部分が剝落している。13・14は胴部の破片である。12は器面の外面に、11は外面と内面の一部に、13・14は内面・外面共に釉が施されている。釉の色は、11・13が淡緑色、12・14が淡黄緑色を呈する。胎土はすべて黄白色を呈し、14世紀の南北朝時代のものと思われる。

b. 美濃・瀬戸系陶器（図版111－15～32、図版111－１～９）

小鉢（図版110－15）

小鉢状を呈する入れ子の皿の底部と思われるもので、底面には細かい糸切りの痕が見られる。器面には施釉されず、灰黄色を呈する。13世紀前半頃のものと思われる。

小皿（図版110－16～21、第214図17）

16（第214図17）・20は底部、17は胴部、18・19は口縁部から底部にかけての破片である。16は器面の一部に黒色の釉が、内面には黒い釉と半透明の暗緑色の釉が見られる。17にも器面の内外に黒い釉が一部に見られる。18・19の口縁部に半透明の黄緑色の釉が施され、20の底面の一部にわずかながら釉が見られるが、施釉はされていない。21は火熱を受けて、口縁部の内外の釉は白色化している。胎土の色調は、16.17.19は灰白色、18・20は灰黄白色を呈する。21は元来灰黄白色を呈していたと思われるが、火熱を受けたため大部分が灰色を呈する。18・19・21は小皿の口縁部の内外に釉を施した縁釉皿である。15世紀後半頃ののものと思われる。

鉄釉皿（図版110－22）

口縁部の破片で、茶褐色の釉が施されており、内面には茶褐色に黒色の発色も見られる。胎土は黄白色で、15世紀代に連房式登り窯で焼成されたものと思われる。

鉄釉小皿（図版110—23）

口縁部の破片で、茶褐色から黒褐色の釉が施されているが、釉の表面に艶が少くザラザラしており、いわゆる鉄泥釉風である。胎土は灰褐色で、器地と釉との境は白黄色を呈する。16世紀代のものと思われる。

天目皿（図版110—24～26）

すべて口縁部の破片で、暗褐色の釉が施されているが光沢を失っている。胎土は灰色を呈し、15世紀代に連房式登り窯で焼成されたものと思われる。

下し皿（図版110—27・28）

共に底部の破片で、内面には格子状の溝がある。27には一部に濁りのある釉が見られる。胎土は27が灰色、28が灰黄色を呈し、15世紀代のものと思われる。

天目碗（図版110—29）

底部の小破片で、高台が削り出されている。内面には、暗褐色の釉が施されているが、光沢を失っている。15世紀初頭の頃のものと思われる。

灰釉平碗（図版110—30～32）

30は底部近くの破片で、内面に半透明の黄緑色の釉が施されている。31・32は口縁部の破片で、口唇部の内外に茶褐色の釉を施しているが、釉は光沢を失って白色化している。胎土は灰黄色を呈し、30は15世紀代、31・32は15世紀末頃に大窯で焼成されたものと思われる。

鉄釉壺（図版111—１）

胴部の破片で、黒褐色と褐色の混り合った色を呈する釉が、器面の内外に施されており、胎土は白褐色を呈する。15世紀代のものと思われる。

摺鉢（図版111—２～７）

２～５は胴部、６・７は口縁部の破片で、３の内面には４本１単位、４には５本１単位の櫛目状の刻文が施されている。５にも櫛目状の刻文が施されているが何本が１単位か不明である。２は器面の内外共に褐色の釉が、３は外面に褐色、内面に褐色と一部に濁りのある黄緑色の釉が施されている。４は器面の内外共に暗赤紫色から黒紫色の釉が、５は内外共に暗紫色の釉が、６・７も内外共に黒色の釉がそれぞれ施されている。胎土は、４が淡白褐色、５が淡白茶色、６が茶褐色、７が黄灰色をそれぞれ呈する。２・３は15世紀後半頃に穴窯で、４～６は15世紀末から16世紀初頭頃に大窯で、７は16世紀代に大窯でそれぞれ焼成されたものと思われる。

内耳鍋（図版111—８）

口縁部の破片で、口唇部の内側に凸帯のあるもので、器面は内外共に褐色の釉が施されている。胎土は白褐色を呈し、16世紀代のものと思われる。

三足盤（図版111—９、第214図10）

底部の破片で、底部と胴部の境に足の１つが貼り付けられている。器面には釉が認められず、

淡灰黄色を呈し、15世紀中頃のものと思われる。

c. **常滑系陶器**（図版111—10～23、図版112～1～18）

小皿（図版111—10・11）

共に口縁部の破片で、口唇部に自然釉の降灰が見られる。器面は灰色を呈し、11の口唇部の一部に煤の付着が見られ、灯明用に使用されたものと考えられる。共に13世紀代のものと思われる。

片口鉢（図版111—12・13・15）

12・13は口縁部、15は高台付の底部の破片で、器面はすべて灰色を呈する。胎土中には白色の粒子を含み、13世紀代のものと思われる。

白土系摺鉢（図版111—14）

白土を原料として焼成されたもので、底部付近の破片である。器面は灰白色を呈し、胎土中には白色粒子などの砂粒を多く含み、内面には自然釉の降灰が見られる。13世紀代のものと思われる。

三筋壺（図版111—16～20、第214図13）

頸部の接合部から肩部にかけての破片で、16・18（第214図13）には肩部に1～2本の沈線が見られる。また、16～20の器面の外側には、全面または一部に自然釉の降灰が胡麻状に振りかかっている。13世紀初頭の頃のものと思われる。

壺（図版111—21）

口縁部の破片で、口唇部の内側に小さな凸帯がめぐり、外側にも凸帯がめぐらされている。器面は茶褐色を呈し、13世紀初頭の頃のものと思われる。

大甕（図版111—22・23、図版112—1～4）

すべて大甕の胴部の破片で、図版111—22と図版112—4は淡緑色の釉が、図版112—1～3は暗緑色の自然釉が見られる。13世紀代のものと思われる。

片口大平鉢（図版112—5～8、第213図1・21～23）

すべて口縁部の破片で、器面は赤褐色から暗褐色を呈し、口唇部と内面には自然釉の降灰が胡麻状に振りかかっている。15世紀後半のものと思われる。

摺鉢（図版112—9～17、第213図2・24、第214図16）

10・11・14～16（第213図24）は口縁部、17（第214図16）は底部、他は胴部の破片である。器面は、9（第213図2）～13が暗褐色から褐色を呈し、14～17は赤褐色から褐色を呈する。器面と口唇部には自然釉の降灰が見られない。9～13は室町時代中期（15世紀後半）頃のものと思われ、14～17は15世紀末から16世紀初頭の頃のものと思われる。

掛壺（図版112—18）

胴部上方の破片で、上部に乳白色をした自然釉がもりあがっている。いわゆる　掛とよばれるもので、15世紀末から16世紀初頭の頃のものと思われる。

d. **渥美系陶器**（図版113—1～16、図版114—1～3、第213図20、第214図1～9・14）

大甕（図版113—１～16、第213図20、第214図１～９）

すべて胴部の破片で、１～４・６・９・10・12～16には叩き目が輪積みの継ぎ目の外面に施されており、器面は灰色から灰褐色または灰黒色を呈する。渥美系陶器と考えられ、12世紀末頃のものと思われる。

山茶碗（図版114—１～３、第214図14）

１～３（第214図14）は底部の破片で、すべて高台が貼り付けられている。器面の内側には自然釉の降灰が認められ、特に３には緑色の自然釉が見られる。胎土は三者共に灰白色を呈し、12世紀後半頃のものと思われる。

ニ．舶載磁器（図版114・115）

a．青白磁（図版114—４・５）

合子（図版114—４）

底部の破片で、表裏が剝離して、外面側が失われている。底面の内側には淡青色の釉が施されており、12～13世紀頃のものと思われる。

四耳壺（図版114—５）

肩部の耳のある部分の破片で、淡青色の釉が施されている。12世紀代の元朝のものと思われる。

b．自磁（図版114—６～20）

瓶子（図版114—６）

胴部の破片で横方向に２本の沈線がみられ、器面には透明な釉が施されている。12～13世紀のものと思われる。

碗（図版114—７・９～19）

７は櫛目文のあるもので、内側には細かな櫛目文の曲線が描かれており、外側にもゆるやかな曲線の沈線文が見られる。器面の内外には黄色味を帯びた釉が施されている。９・10は底部の破片で、いわゆる玉縁口を呈するものと思われる。器面の内側には黄色味を帯びた釉が施されている。11～19は小破片であるが碗と思われる。器面の内外または内側のみに白色～黄色味を帯びた釉が施されている。７・９～19は13～14世紀代に焼かれたものと思われ、11～19は元朝のものと思われる。

皿（図版114—８）

口縁部の破片で、口縁部の釉を剝ぎ取ったいわゆる口剝ぎの皿である。13～14世紀代のものと思われる。

小皿（図版114—20）

底部の破片で、器面の内外にやや黄色味を帯びた白釉が施されており、器面の内側には重ねて焼成したために上の器の底部の痕が残っている。15世紀後半以降の明朝時代のものと思われる。

c．青磁（図版114—21～26、図版115—１～11）

碗（図版114—21～26、図版115—１～11）

図版114—21は器面の内外に櫛目文が施文されており、図版114—22・26、図版115—１・２はいわゆるシノギ連弁といわれる文様が施されているが、図版115—２は器面の外側には櫛目文が見られる。図版115—３・４・６・７は口縁部、10は底部、他は胴部の破片である。釉の色は青緑色から暗青緑色または黄色味の帯びた青緑色などを呈する。図版114—21～26と図版115—１～２は13～14世紀代、図版115—３～11は13～14世紀代の元朝のものとそれぞれ思われる。また、図版114—21は同安窯系、図版114—22～26と図版115—１・２は龍泉窯系のものと思われる。

盤（図版115—12・13）

13は底部の破片で、他は胴部の破片である。青緑色の釉が厚く施されており、15世紀後半から16世紀代の明朝のものと思われる。

かわらけ　（第212図）

灯明用として用いられたもので、口縁部に煤の付着していたものが見られる。底部は全体的に厚く、底面には糸切りの痕を残すものもあり、糸切りの後にへらで整形しているものもある。粗製のつくりで、風化も激しい。

ホ．木　製　品

木器には椀と皿が各１点、曲物の底の破片と思われるものや箸及び加工のある木片などが出土した。

椀（図版116、第215図１）

底径7.3cmで、底部はやや厚く1.3cmを計る。口縁部は欠損しており、器高は不明である。器面の内側には黒漆が厚く塗られているが、外側には塗られていない。

皿（図版117、第215図２）

底径5.1cm、口縁部は全て欠損しており、器高は不明である。底部はやや薄く0.5～0.2cmを計る。器面の内外共に漆は認められず、風化が激しい。

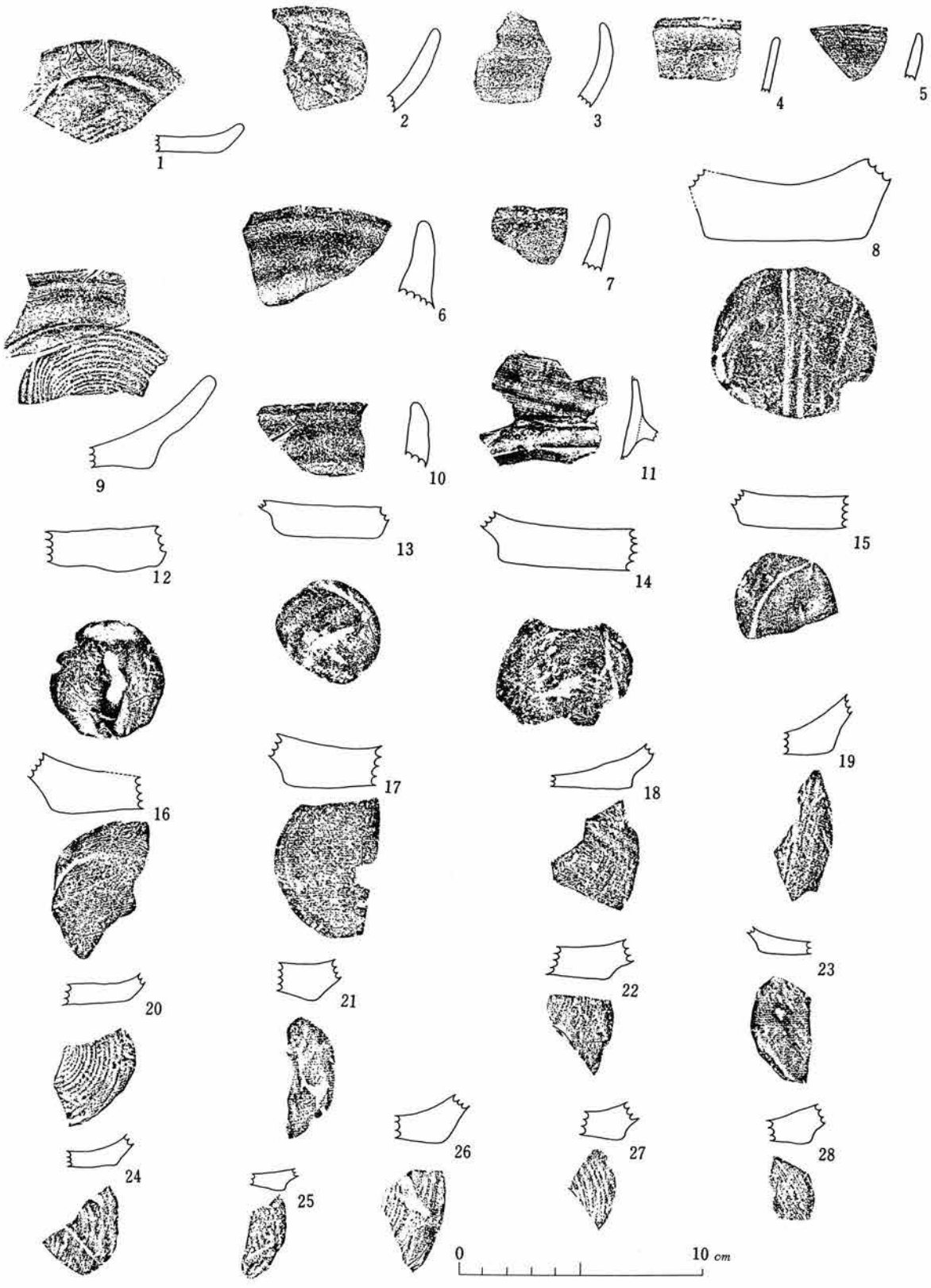
加工のある木片（図版118、第215図３～６）

３～５は曲物の底と思われるが、その一部なので、詳細は不明であるが、いずれも、その一端が丸味を持ってきれいに削られている。６は片面に段をもつもので、何に使用されたかは不明である。

箸（図版118、第215図７）

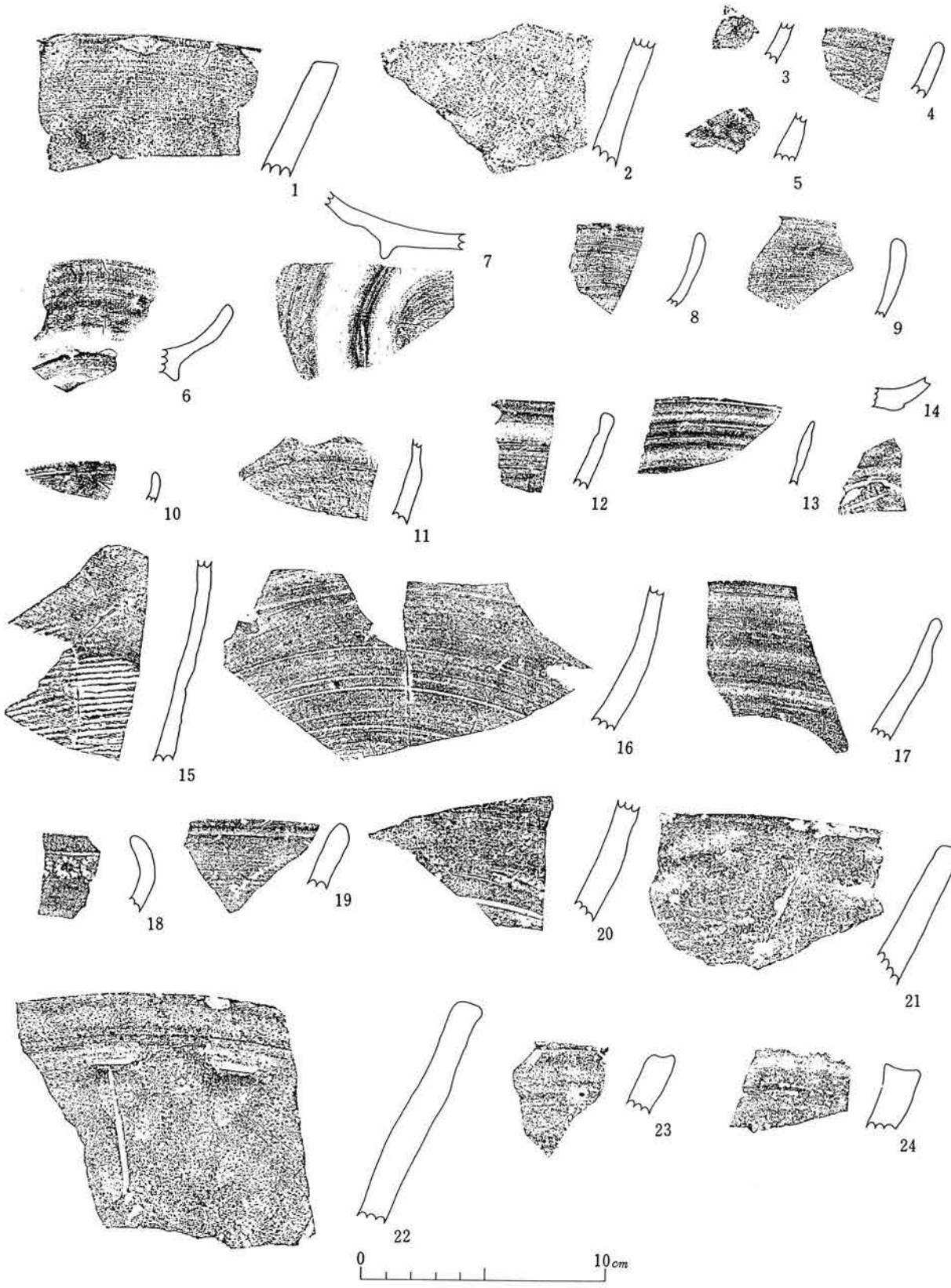
木を削って、その断面形を円形に近くしたもので、先の部分と持つ部分を欠損している細かな整形が行われていないのであるいは他のものかも知れない。

これらの木器は伴出遺物が陶磁器であったことより13世紀代頃のものと思われる。



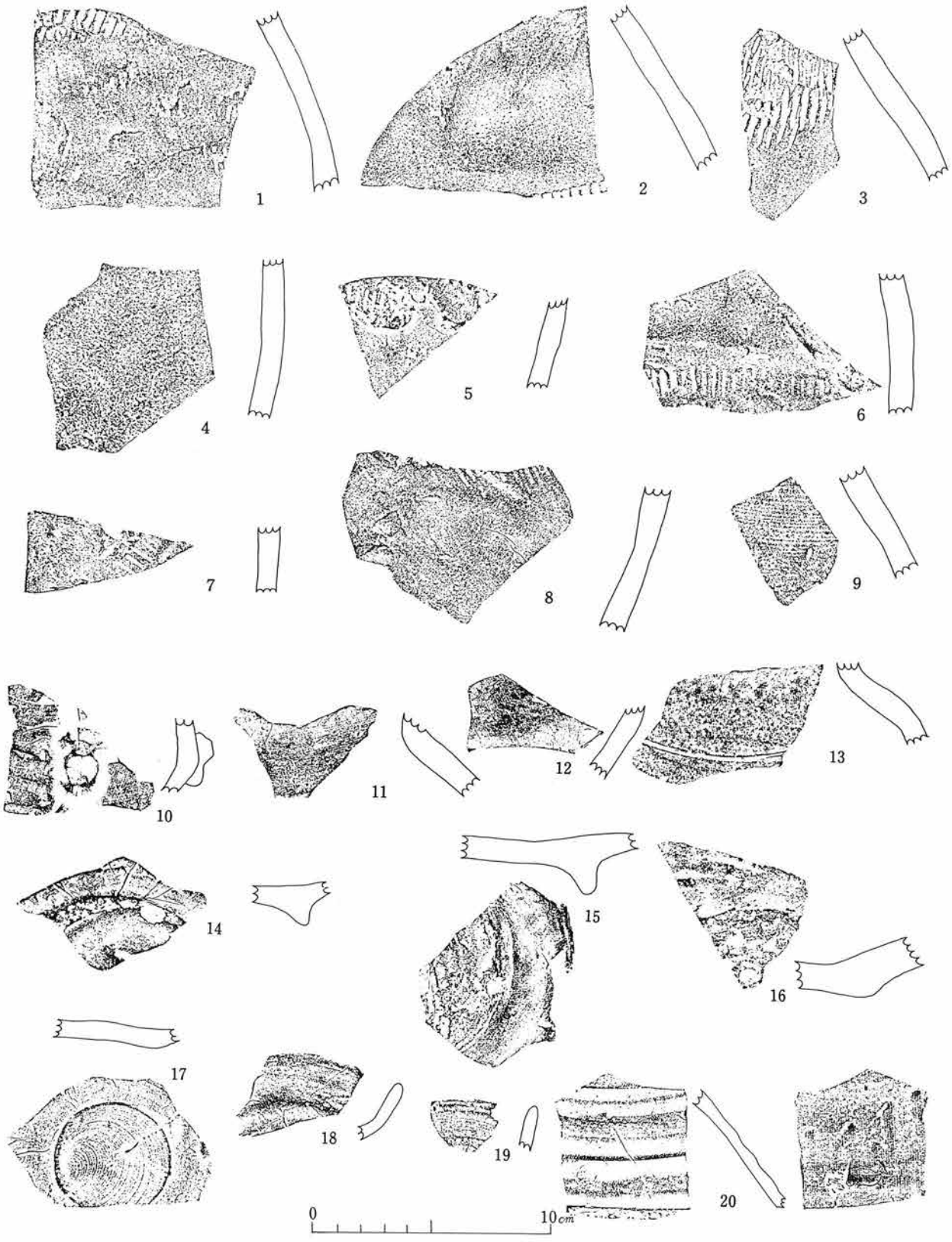
25 F－2グリッド，1.17 G－3グリッド，24 H－1グリッド，20 H－2グリッド，2.15.16 H－3グリッド，11 I－3グリッド，4 L－3グリッド，3.5～10.12～14.18.19.21～23. 26～28 表採

第212図　第II次調査 出土土器拓影（118）



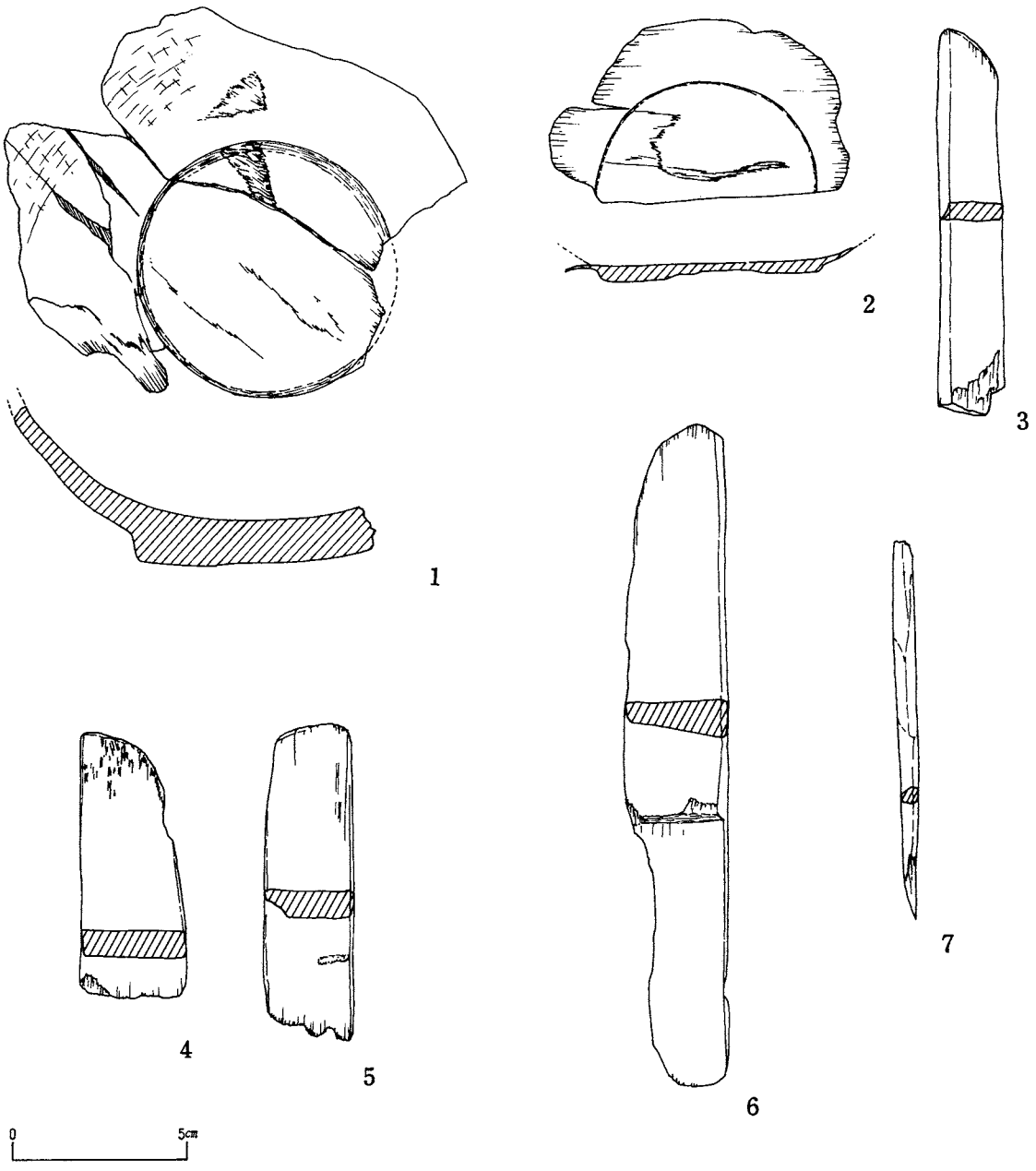
1．2 方形竪穴住居跡，8．9 B－3グリッド，15.21 F－3グリッド，22 G－1グリッド，23 G－2グリッド，7.11.12 G－3グリッド，18 H－2グリッド，6.13.16.20 H－3グリッド，14.24 I－2グリッド，10 L－3グリッド，3．4．5.17.19 表採

第213図　第II次調査 出土土器拓影（119）



13第1号住居跡，9　D－2グリッド，6．7．12　G－3グリッド，15.16　H－2グリッド，1．2．3．14　H－3グリッド，11　I－1グリッド，20　I－2グリッド，4．17.18　I－3グリッド，5　J－3グリッド，10　K－3グリッド，8．19 表採

第214図　第II次調査 出土土器拓影（120）



第215図　第II次調査 出土木製品実測図

へ．鉄製品と砥石・植物の遺存体

第II次調査で出土した鉄製品には、第216図・図版108に示した釘、鎹、刃器と金具がある。このうち鉄釘の計測値を第15表に示した。

釘（１～８）　これらの形状は、全て巻き造りで四角錐状体部と皆折の頭を持つ釘で、中でも１は頭を巻き込むように造り、その先端は楔形をなす。これらの頭部の形は、例えば奈良時代に属すると考えられる大北横穴群第34号横穴から出土した鉄釘と比較すると、大北例が方頭に整形されているのに対し、本例は単に折り曲げただけであり著しく簡略化されていると言わなければなるまい。

全長を知得るものは、１の5.5cmである。その有効長から板厚を推定すると2.2～2.7cm程となろう。尚、この１の全面には赤色の顔料が付着していたことを記しておきたい。

また８も巻き造りであるが、横断面形が長円形を呈しており、ここでは釘に含めておきたいと思うが、別の用途が想定できる余地を残している。

鎹（９）　横断面形が長円形を呈し、端部に向かうに従って横断面形が方形に近づく。蓋止めに用いられたと考えられ、その有効長から板厚は１cm前後であろう。

以上の釘と鎹から帰納される容器は、側板厚2.5cm、蓋板厚１cm程の木箱であると推定されるが、その用途については、前述の大北例と同様の火葬骨を納めた木櫃を想定するのがもっとも穏当であろう。

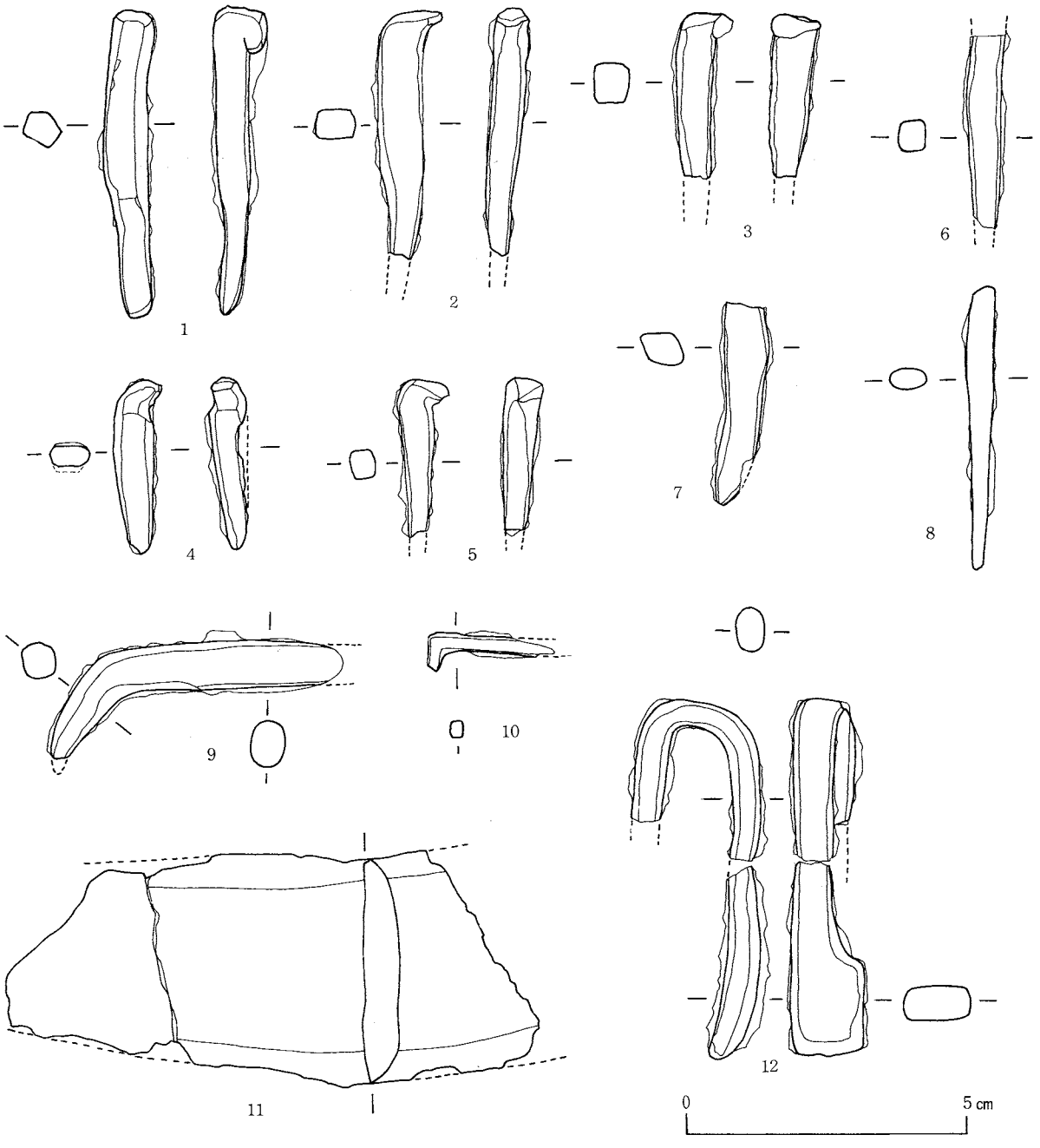
番号	出土位置	残存長	幅	厚さ	備考
1	B2.3-竪穴住居跡内	5.5	0.8	0.6	完形
2	G3-Ⅲ層	4.5	0.7	0.5	先端部欠損
3	B3-Ⅱ層	2.9	0.7	0.6	先端部欠損
4	B2.3-竪穴住居跡内	3.1	0.7	0.5	先端部欠損
5	〃	2.8	0.5	0.5	先端部欠損
6	〃	3.4	0.6	0.5	先端・頭部欠損
7	〃	3.7	0.8	0.6	頭部欠損
8	〃	5.1	0.6	0.4	頭部欠損

第15表　鉄釘計測表　（単位はcm）

刃器、責め金具（10・11）　10は残存長10.5cm、幅4.1cm、厚さ0.6cmを測るカマボコ形の横断面形を呈する両側辺に刃を付けた刃器で、赤色顔料の付着が全面に観察される。また11は残存長6.4cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを測り、10とセットとなる責め金具である。従って10は木柄を有していたものと思われる。

刺金状鉄製品(12)　横断面形を四角形に造り、先端を直角に折り曲げる鉄製品である。基部を欠損しており用途を判断しかねるが、ここでは刺金としておきたいと思う。

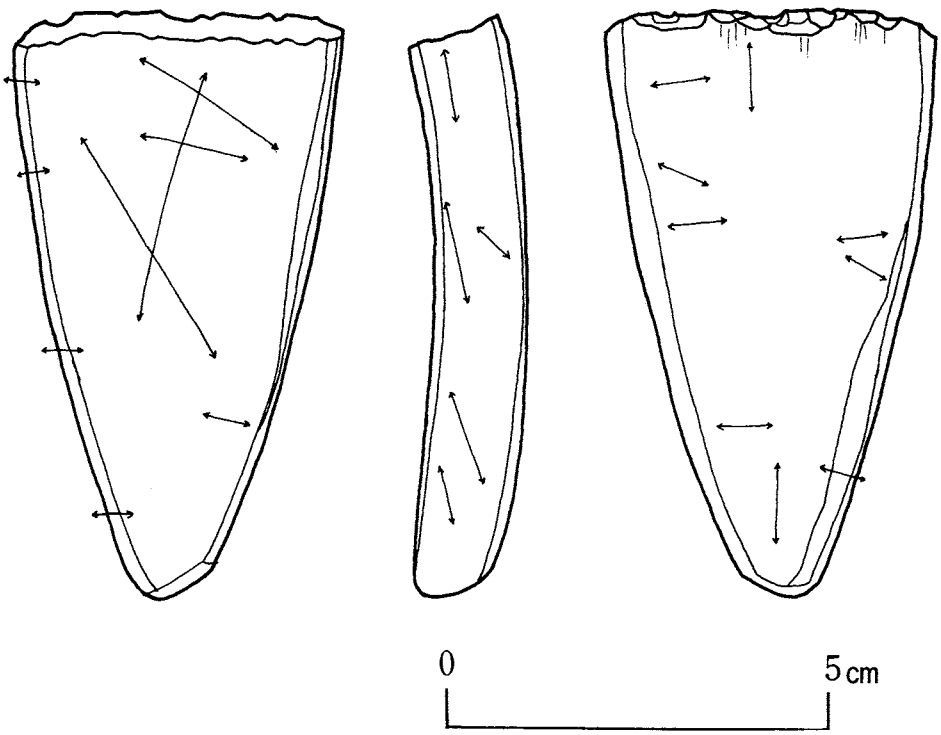
これらの鉄製品は12を除くとしても、やはり埋葬に関係しているとしたほうがよさそうである。これらは方形竪穴住居跡の覆土及びその周囲から集中して出土している。従ってこの住居



第216図　第II次調査 鉄製品実測図

跡の覆土中に木櫃を納めた土坑が存在し、しかも１と10には赤色顔料が付着していたことから、この木櫃は赤色に塗彩されていたと想像される。

砥石（第217図・図版108）　破損しているが、長さ7.7cm、幅4.3cm、厚さ1.2cmを計る。略三角形の平面形を有し、横断面形は方形を呈する。湾曲する両平面と両側面及び先端部に線状痕が残り、例えば鎌のような薄い刃部を持った道具を、平面の長軸方向に運動させて研ぎ出しを行ったと考えられる。両側面に残る線状痕は深く刃潰しに用いられたと思われる。



第217図　第II次調査 砥石実測図

植物の遺存体（図版108）

Ｈ－３グリッドのⅫ層（粘性のある灰黒褐色土層）・ⅩⅣ層（粘性のある黒色土層）・ⅩⅤ層（暗灰褐色の砂質土層）から、約100個の桃の種子が出土している。

5、小　結

第II次調査で検出された遺構•遺物によって、本遺跡は先土器時代終末期から縄文時代後期、平安時代前期から中•近世の各時代にわたって集落が営まれた複合遺跡である事が確認された。

まず、先土器時代～縄文時代草創期前半の遺物は、当町においてはこれまで田中山・浮橋・下畑・三福などから、表面採集によって若干の資料が得られていたにすぎなかった。今回出土したナイフ形石器・彫器・石槍・有舌尖頭器は、層位的な把握・立証が出来なかったものの、貴重な資料となろう。

縄文時代草創期後半では、多縄文系に属する土器がF・G・Hグリッド内トレンチのVIa層およびVIb層としたソフトローム層を中心に出土している。さらに、同時期所産の石鏃も少いながら出土している。石鏃は図示した形態模式図のうちA・B　C・C′・Dの形態に含まれるものが見られる。

縄文時代早期では、山形押型文土器4点が出土している。このうち、第131図1は口唇上に施文され、また口縁より表裏両面に、波長が大きくゆるやかで条間の広い山形が施されている。比較的薄手で焼成は良く堅い。口縁はかなり外反している。この押型文土器は早期の中でも比較的新しい時期に属するものであろう。さらに、同時期の礫器・石鏃も出土している。

縄文時代前期のものは今回の調査では出土しなかったが、第I次調査の際に関山式比定の土器2点が出土している。

縄文時代中期では、住居跡7基、土坑6基が検出されている。このうち第6号住居跡は当町では初の敷石住居跡であり、その規模や形態あるいは伴出した深鉢型土器などを以てすれば、おそらく中期終末の所産と考えられる。

平安時代～中・近世にかけては、実に多種多様のものが検出されている。まず、平安時代末期～鎌倉時代初頭と思われる方形竪穴住居跡やこれと同時期あるいはそれ以降の構築と思われる方形・円形の各土坑の検出は一つの収穫であった。さらに、河川跡から出土した漆塗木鉢と皿、箸、その多木製品と桃の種子などは、当町では新発見のものであった。加えて、各種の焼きもの（宋代・元代・明代の青磁・白磁を含む）の出現は、古くからその存在が指摘されている「狩野庄三福郷」の候補地として有力な手掛りを与えてくれるものであろう。しかし、これについてはまだまだ未知の部分がおおく資料の増加を待たなければならない。

今回の調査で検出された縄文時代中期の住居跡のうち、第4号住居跡（曾利II式期の深鉢を伴出）を除いて他の住居跡は、すべて第I次調査のものよりやや新しい中期末葉～終末の所産と考えられる。これは、仲道における集落の変遷を探る上で重要な決めてになるであろう。

第Ⅴ章　縄文時代草創期の土器について

仲道A遺跡出土土器の文様や施文原体について検討してみたい。自縄自巻を主に施している土器片は約46点存在しており、そのうち l の条の自縄自巻を圧痕している土器は29片、 l と r の自縄自巻を施している土器は１片、 r の自縄自巻を施している土器は２片、その他自縄自巻を施しているが、風化等により原体が不明の土器片24片である。 l の自縄自巻の原体の使用が著しく多いことがわかる。圧痕された自縄自巻原体の長さ、幅については、自縄自巻の圧痕が俵状を呈し、最大の長さ７㎜～９㎜、最大幅３㎜～４㎜が多い。また、０段の条の太さは１㎜～15㎜である。文様は別図1に示したように、自縄自巻を縦位に３段以上圧痕しているもの（２，３，47）、自縄自巻を器面に対して縦位と横位に交互に圧痕しているもの（20～25，32，33，35，39，40）等があり、この中には、割り付けの横位沈線とも考えれるものが施文されるもの（32～40）が存在する。また、器面に対して横位に施される自縄自巻圧痕の位置は、各段ごとにそれぞれずらして圧痕される例が多く、こうしたずらしを意識的に行っていることは、大きな特色と言えるだろう。また、自縄自巻の圧痕が斜位に施され、菱形のモチーフをとるとも考えられるもの（15～17，42，43）もある。これ等の自縄自巻の圧痕されている土器の、胴部以下の文様については（47，48，50，52）が示すように、縄文が施される場合が多いように考えられるが、こうした点については不明な点も多い。自縄自巻の施されている土器の内面に文様が施されているものとしては、内面に自縄自巻が施されているもの（22，53）等と、縄文が施されているもの（３，39，47）等があり、口唇部に自縄自巻や縄文が施されるもの（２，３，20～22，24～26，32，35，39，40）等がある。これ等についても、自縄自巻の圧痕と、縄文の施文とが無関係では無いことを示しており、注意されなければならないと思われる。自縄自巻については、自縄自巻A、自縄自巻Bの分類（小林達雄、安岡路洋、1979年）がなされており仲道A遺跡では、自縄自巻A（２，３，20，21，26，39，40）等が圧倒的に多いが、自縄自巻B（15，51）等も存在しており、自縄自巻Bは絡条体圧痕的な文様効果をもつ点も重要であろう。

また、自縄自巻と他の施文原体と組み合わせて文様を施している例も多い。（53，56）等は自縄自巻＋縄文原体側面圧痕、（58，59，61，63）等は自縄自巻＋絡条体圧痕、（54）は自縄自巻の端部の刺突、（60）は自縄自巻端部の刺突＋絡条体圧痕、（62）は半置半転＋自縄自巻であり、（55，57）は自縄自巻の撚のほどけたような原体、つまり、自縄自巻原体と縄文原体の中間的な原体で圧痕を施している。

次に絡条体圧痕について検討してみたい。 l の条の絡条体圧痕には、軸に時計回りに l の条を巻いたと考えられるものと、時計回りと逆に巻いたと思われる例とがある。（66～69，71～74）は l の条を軸に対して時計回りと逆に回いた原体で絡条体圧痕を施している。この類には絡条体の軸を土器面に対して横位に３段以上施しているもの（66，69）、４段以上施しているもの（67）、５段以上施しているもの（68）があり、 l の条の絡条体の幅は３㎜～５㎜、条の太さも１㎜～２㎜が多い。（80）は l の条の絡条体を〈状に圧痕しており、（93）は l の絡条

体を軸に対して時計回りに回いている。また、（75～79）はｒの条の絡条体圧痕と考えられる。ｒの条の絡条体圧痕も、軸に時計回りと逆に巻いたものが多い。（79）はｒの条の絡条体圧痕で、条の太さが1㎜、幅3㎜である。また、Ｌの絡条体圧痕と思われる例（81）、Ｒの絡条体圧痕と思われる例（84～87）がある。これ等は（82，83）と共に、絡条体圧痕か縄文原体による側面圧痕と考えられるが、縦に圧痕されている縄文原体の上部が直線的にそろっており、縄文原体の側面圧痕を縦位に1つ、1つ施したとは考えにくい。このため、これ等の例については絡条体圧痕としてあつかっておくことにした。ここで注意しておきたいのは、（82～84）の土器片で、それぞれ口縁部の破片である。（82）は口縁部のくの字状に外反しており、口縁部の帯状の部分にＲの絡条体を施している。（83）はゆるやかに〉状に内反しており、口唇部には自縄自巻を圧痕し、Ｒの絡条体を施している。（84）は口唇部に自縄自巻を圧痕したあと、ヘラ状のもので口唇の内側を削り、以下にＲの絡条体を施している。（93）はｌの条を軸に対して時計回りに巻いた絡条体を施し、以下にＬの縄文を施している。また、（95）はｒの条を軸に時計回りに巻いた絡条体を施し、以下にＬＲの縄文を施している。

（93～126）のように絡条体圧痕にほかの文様要素が組み合わされて、文様構成されている例も多い。これ等の中には、

ａ、絡条体圧痕と回転縄文が組み合わされているもの。

ｂ、絡条体圧痕と自縄自巻圧痕が組み合わされているもの。

ｃ、絡条体圧痕と自縄自巻圧痕と回転縄文とが組み合わされているもの。

ｄ、絡条体圧痕と縄文原体側面圧痕とが組み合わされているもの。

ｅ、絡条体圧痕と縄文原体側面圧痕と回転縄文とが組み合わされているもの。

等があり多様である。

ａ種としたものは（93～96）等で、ことに（96）はＬＲの縄とＲＬの縄を棒状工具に巻きつけて〉状の絡条体圧痕を3段横位に施文し、その下に回転縄文を施している。

ｂ種とした絡条体圧痕と自縄自巻の圧痕が組み合わされているものも多い。（98～118）がこれである。（98）はｌの条の絡条体圧痕で、条の太さ1㎜、幅6㎜と、ｌの条の自縄自巻長さ13㎜、幅4㎜で横位に交互に圧痕されている。（101）はｌの条を軸に時計回りと、時計回りと逆に巻いた絡条体を圧痕し〈状の絡条体圧痕を施している。絡条体圧痕と絡条体圧痕との間に自縄自巻を縦位に圧痕している。（103）はｒの条の絡条体圧痕を器面に対して横位に5段圧痕し、その下にｌの条の自縄自巻の圧痕を縦位に施しており、その下に、ｒの条の絡条体圧痕を横位に施している。（107）は絡条体の軸の部分も圧痕されており、梯子状を呈している。ｒの条を幅2㎜の軸にＬ方向に巻きつけた絡条体で、器面に対して横位に圧痕しており、横位の絡条体圧痕の間に、自縄自巻の圧痕を横位に施している。これ等の梯子状の絡条体圧痕は室谷洞窟の出土例が有名である。また、（114）はやはり、絡条体圧痕と自縄自巻の圧痕とを交互に施している。絡条体はＲの縄文原体を軸に時計回りに巻いており、器面に対して横位に4段施し絡条体圧痕と絡条体圧痕との間に、ｌの条の自縄自巻を横位に圧痕している。自縄自巻の横位圧痕を見ると斜位に意識的にずらして圧痕していることがわかる。

c種の絡条体圧痕と自縄自巻の圧痕と回転縄文が施されているものとしては、(117, 118) 等がある。(117) は1の条の絡条体圧痕と、1の条の自縄自巻の圧痕を交互に施しており、その下にはＬＲの縄文原体による回転施文がなされている。ＬＲの縄文が斜位に帯状に施されており、自縄自巻の横位の圧痕も、各段ごとに斜位に意識的にずらせて圧痕されている。(118) は1の条の絡条体圧痕と絡条体圧痕との間に、1の条の自縄自巻の圧痕を施している。また、自縄自巻圧痕を⊐状に施しており、下部にＬＲの縄文原体を回転押捺している。

これ等の中には (105) のように、内面に縄文を回転押捺したものもある。(105) はｒの条の絡条体圧痕を器面に対して横位と施し、絡条体圧痕と絡条体圧痕との間に、ｒの条の自縄自巻の圧痕を横位に2段施している。内面にはＬ $\{^{R}_{L}$ の縄文原体を回転押捺している。

d種は絡条体圧痕と縄文原体の側面圧痕とが組み合わされているものであり、(120～122) で同一個体である。口唇部にＲＬの側面圧痕を施し、口唇部直下からＲＬの原体を巻いた絡条体圧痕を施す。絡条体圧痕と絡条体圧痕との間に、ＲＬの縄文原体を横位に側面圧痕している。内面にも口唇部直下に絡条体圧痕が施されている。

e種は絡条体圧痕と縄文原体の側面圧痕と縄文原体の回転押捺が施されているもので、(123, 125, 126) であり、(123) はｒの条を軸に時計回りと逆に巻いたものを圧痕しており、絡条体圧痕と絡条体圧痕との間に、ＲＬの縄文原体を横位に側面圧痕を施しており、以下にＲＬの縄文原体を回転押捺している。

次に縄文原体の側面圧痕を主に施している土器について検討してみたい。

原体側面圧痕が施されている土器片の文様をみると、

ａ、口縁部から横位に帯状に繰り返す文様を意識したもの。

ｂ、斜位の文様を意識したもの。

に大きく分類でき、しかも、圧倒的に多くの土器片は、横位に帯状に繰り返す文様を意識したものであることに気が付く、この横位帯状文様では、縄文原体の側面圧痕を施す場合、縄文原体の側面圧痕を土器面に対して横位に側面圧痕している類と、横位と縦位の側面圧痕を帯状に繰り返し圧痕して、全体的に見た場合に横位の帯状文様になっている類と、縄文原体自体を∩状に曲げて圧痕し、全体としてはおそらく横位帯状文様になっている類等がある。ことに、横位と縦位を繰り返し圧痕している類は、(120) 等の絡条体圧痕、(132, 136) 等の原体側面圧痕、(20, 21) 等の自縄自巻の圧痕等と共通した文様のテーマがあると考えられ、文様施文具の転換であろう。

(129) はＲの縄文原体を∩状に曲げたものを圧痕しているが、全体的には横位の帯状になるものと思われる。(132, 136) は縄文原体を器面に対して、縦位と横位とに繰り返し圧痕している。(140) は口唇部直下より横位にＬの縄文原体と、Ｒの縄文原体を交互に側面圧痕しており、側面圧痕の下にはＲＬの縄文を施している。(141) は完形復元されており、口径280mm、330mmの隅丸方形、底径は110mm、125mmの隅丸方形の平底で、器高は190mmである。文様はＬＲの縄文原体を器に対して横位に4段側面圧痕を施しており、側面圧痕の下にはＬＲの縄文原体を回転押捺している。器形は室谷下層出土土器と近似した器形となっている。(157) は口唇部直下からＲ

の縄文原体の側面圧痕を縦位に施し、その下にＬＲの縄文原体の側面圧痕を横位に５段施し、さらにＲの縄文原体を「ㄱ」状に側面圧痕している。そして、下部にはＬＲの縄文原体を回転押捺しており、内面にもＬＲの縄文原体を回転押捺している。また、（127）は器面に対して斜位に縄文原体の側面圧痕を施している土器として注意を要するし、（158）はＲの縄文原体と、Ｌの縄文原体とを交互に横位に側面圧痕し、その下に、１の条の自縄自巻を施しており、原体の側面圧痕と自縄自巻の圧痕を組み合せている。

次に、竹管状工具による施文している土器について検討したい。これ等の多くは、半截竹管状工具の先端を土器面にあて、平行する２点を直線的に描くように、工具をずらせながら施文したものが多く、これ等の竹管文と、自縄自巻や縄文原体端部の圧痕とを組み合わせて施文している（164～167）もある。この半截竹管状工具による施文について、押型文と考える向きもあるが、押型文ではなく、竹管状工具による施文であると考えている。この施文方法について、土肥孝氏より御教示をいただいた。（165）は口唇部にＬＲの縄文原体を回転押捺しており、口唇部直下からＬＲの縄文原体の端部の圧痕を施し、半截竹管状工具による竹管文を施している。（163）は、竹管文を施し以下にＲの縄文原体を回転押捺している。（164）は竹管文と１の条の自縄自巻の圧痕を繰り返し施している。

次に半置半転を施した土器については、器面に対して縄文原体を器面対して横位に半置半転を施す土器と、縄文原体を器面に対して縦位に半置半転を施す土器とがある。また、半置半転と自縄自巻の圧痕とを組み合せている土器もある。これ等の文様も横位の文様を帯状に施すことを意識していると考えられる。

（168）はＬＲの縄文原体を器面に対して横位に⊢方向に半置半転している。（170～175）はＬＲの縄文原体を器面に対して横位に圧痕し、縦方向に半置半転を５段施している。また、半置半転の下にはＬＲの縄文原体による異方向縄文を施している。この土器は口縁が円形に近い隅丸方形の深鉢形で、底部は隅丸方形となる。口縁部の口径は300mm、器高は225mmである。（177）はＬＲの縄文原体を器面に対して縦位におき、横位に半置半転を施し、半置半転と半置半転との間に１の条の自縄自巻を横位に圧痕し、内面には縄文が施されている。

次に縄文については、回転押捺されている原体として、Ｌ、Ｒ、ＬとＲ、ＬＲ、ＲＬ、ＬＲとＲＬ、ＲＬＲ、Ｌ$\{^{L}_{R}$、Ｌ$\{^{L}_{R}$とＲ$\{^{L}_{R}$等さまざまな縄文原体が使用されている。

このうち、縄文原体の回転押捺方向の特長については、『丘陵第12号』に「仲道Ａ遺跡出土草創期土器における縄文回転押捺方向の研究」として、渋谷がふれる予定であるが、異方向縄文が多い点、（225，277，279，357）等のように意識的に帯状に原体を回転押捺している土器が多い点、（363～365）のように、Ｌ$\{^{L}_{R}$、Ｒ$\{^{L}_{R}$等の縄文原体が使用されている点、（335）のように、複合口縁に縄文原体の回転押捺がなされている土器が存在する点等が指摘できる。

次に底部であるが、底部の形は（141，172）等の復元された個体、（425，430）等の底部の形から、隅丸方形が多い点が注意される。これは室谷下層出土土器と類似している。また、（417，429，431）のように、底部の内面と縄文原体の圧痕されている土器、（418，419，425）のように、底面にアンペラ状の圧痕のある土器が存在することも特色として指摘できる。

さて、出土土器について記してきたが、仲道A遺跡出土草創期土器の特色は何といっても厚手の土器という点であろう。こうした土器群の中には、自縄自巻、絡条体圧痕、縄文原体の側面圧痕、半置半転の土器等さまざまな文様の土器があるが、これ等の土器の文様について、施文具の転換等を考慮すると、意外にいくつかの文様パターンの中で分類できることがわかる。これ等については、側面圧痕文土器のところでも記したが、文様の幅と施文されている位置を実大で表化したもの（別図２）をのせているので、参考にしていただければと考えている。

さて、編年的な位置であるが、（１）の爪形文土器は別として、仲道A遺跡出土の草創期土器群は、室谷下層式土器の古い段階に位置すると考えられる土器群が多い。室谷下層式土器の細分についても不明な点が多いが、仲道A段階、仲道A式をおくことにより、室谷下層式がより整理されると考える。これは筆者の独断と偏見であるかも知れない。これ等の点について、渋谷自身冷静に今後考えてみたい。

Ⅰ群　爪形文
　１類　爪形文
Ⅱ群　多縄文
　１類　自縄自巻
　　ａ、自縄自巻
　　ｂ、自縄自巻＋縄文
　　ｃ、自縄自巻＋原体側面圧痕
　　ｄ、自縄自巻＋絡条体圧痕
　　ｅ、自縄自巻端部＋絡条体圧痕
　　ｆ、自縄自巻＋絡条体圧痕＋縄文
　　ｇ、自縄自巻＋半置半転
　２類　絡条体圧痕
　　ａ、絡条体圧痕
　　ｂ、絡条体圧痕＋縄文
　　ｃ、絡条体圧痕＋自縄自巻
　　ｄ、絡条体圧痕＋自縄自巻＋縄文
　　ｅ、絡条体圧痕＋自縄自巻＋原体側面圧痕
　　ｆ、絡条体圧痕＋原体側面圧痕
　　ｇ、絡条体圧痕＋原体側面圧痕＋縄文
　　ｈ、絡条体圧痕＋原体端部の圧痕
　３類　原体側面圧痕（縄文）
　　ａ、原体側面圧痕
　　ｂ、原体側面圧痕＋縄文
　　ｃ、原体側面圧痕＋自縄自巻
　　ｄ、原体側面圧痕＋絡条体圧痕
　４類　半截竹管文
　　ａ、半截竹管文
　　ｂ、半截竹管文＋縄文
　　ｃ、半截竹管文＋自縄自巻
　　ｄ、半截竹管文＋縄の端部圧痕
　５類　半置半転
　　ａ、半置半転
　　ｂ、半置半転＋沈線
　　ｃ、半置半転＋自縄自巻
　６類　縄文
　　ａ、Ｌ
　　ｂ、Ｒ
　　ｃ、Ｌ、Ｒ
　　ｄ、ＬＲ
　　ｅ、ＲＬ
　　ｆ、ＬＲ、ＲＬ
　　ｇ、ＲＬＲ
　　ｈ、Ｌ $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right.$
　　ｉ、Ｌ $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right.$、Ｒ $\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right.$
　　ｊ、縄文＋沈線文
　７類　撚糸文
　８類　底部

※第５表と別図１・２を参照されたい。

第VI章　特　　論

特論1　大仁町仲道A遺跡出土土器をめぐって

――静岡県内における草創期の実態――

加藤学園考古学研究所長　　小　野　真　一

1960年の夏、長崎県福井洞穴の発掘調査が行われて以来、日本の縄文土器研究は「より始源的なもの」を求めて画期的な発展期を迎えた。すなわち福井洞穴では、第1層から縄文早期の押型文土器と石鏃、第2層から爪形文土器と細石器（細石刃・細石刃核）、第3層から隆起線文土器と細石器（同前）、第4層から尖頭器と細石刃がそれぞれ出土した。そしてこの第4層からは土器の発見は全くなかったのである。これによって従来知られていた、ほぼ3万年～1万年くらいの間の後期旧石器時代における、刃器（石刃）→尖頭器→細石器の発展段階と、井草・大丸式以降の縄文時代早期との間の空白が埋められ、その結びつきがほぼ明確になったわけである。すなわち、旧石器時代（先土器時代）末期の尖頭器→細石器の発展経過の中で、尖頭器＋細石器→細石器＋隆起線文土器→細石器＋爪形文土器→押型文土器＋石鏃（早期）という図式が成立するようになったわけである。そしてこの隆線文土器や爪形文土器などは、従来の撚糸文土器・押型文土器などの早期のものよりも一層古い時期のものとして、草創期という時期名も生ずるに至った。

昭和7年（1932）年当初、日本の最古の土器として発表された三戸式や田戸式の土器は、貝殻文や平行沈線文を有する尖底深鉢形土器で、これに回転押圧による押型文土器が伴う場合があった。これは現在知られている撚糸文系→押型文系及び貝殻沈線文系→条痕文系という、縄文早期の様式体系からみれば、その中葉に編年されるものであった。それから17年後の昭和24年、日本の旧石器時代（先土器時代）の存在確認の端緒となった群馬県岩宿遺跡の発見があり、さらにまた11年を経て草創期の土器が編年的に知られるようになって、日本の旧石器時代から縄文時代への移行過程が、層位的に明確に把握できるまでに至ったわけである。その後、長崎県泉福寺洞穴で豆粒文土器と呼ばれるものが発見され、福井第3層の直前に位置するものとして、隆起線文土器の初期の段階と考えられるようになった。さらにまた、愛媛県上黒岩洞穴、栃木県大谷寺洞穴、埼玉県橋立岩陰、新潟県室谷洞窟、山形県一ノ沢岩陰、同県火箱岩洞穴など相次ぐ発掘調査の層位的事実から、草創期の編年は一層の充実を見るに至った。そしてなお、青森県大平山元、茨城県後野A、東京都前田耕地、神奈川県上野（大和市）等からの無文土器の発見も重なり、特に上野遺跡等において隆線文土器を出す層の下層から無文土器が検出されたことにより、この草創期の編年もほぼ完成に近づいた感がある。つまり、無文土器群→隆起線文土器群→爪形文土器群→押圧縄文系土器群→回転縄文系土器群という変遷過程が明らかに

なってきたわけである。そして最古の無文土器群には、広い意味での石刃（刃器）や、尖頭器、あるいは細石器が伴出しているようである。

調査される遺跡は現在もなお年と共に増加しているが、現段階での各様式土器を出土する遺跡数を都道府県別に列挙してみると次の通りである。なお、細分については鈴木保彦氏の「草創期の土器型式」（鈴木、1982）に順拠した。

無文系土器群……青森１、茨城１、東京１、神奈川１

隆起線文系土器群

豆粒文土器……長崎２、鹿児島１

隆起線文土器……新潟１、長野１、岐阜１、京都１、長崎２、鹿児島１

細隆起線文土器……宮城１、山形２、新潟４、栃木１、群馬１、千葉２、埼玉２、東京７、神奈川３、山梨１、長野６、愛知１

微隆起線文土器……宮城１、山形６、新潟２、栃木２、千葉３、埼玉５、東京２、神奈川３、山梨１、長野３、愛知１

爪形文系土器群

「ハ」の字爪形……千葉１、東京１、神奈川１

細隆起線文土器

「ハ」の字爪形……山形３、千葉３、東京１、神奈川１

微隆起線文土器

爪形文土器……山形３、新潟２、栃木１、群馬１、茨城２、千葉１、埼玉９、東京１、神奈川１、長野４、岐阜１、福井１、福岡１、長崎３、鹿児島３、沖縄１

押圧縄文系土器群

「ハ」の字爪形……山形１、新潟２、埼玉１、長野１

押圧縄文土器

縄文先端部押圧文土器……山形３、新潟３、埼玉２、長野１

縄文Ｕ字形側面圧痕文土器……山形１、新潟１、長野１、岐阜１

絡条体圧痕文土器……山形２、新潟３、群馬１、茨城１、埼玉５、神奈川１、静岡２、長野３、岐阜１

短縄文押圧文土器……山形４、新潟５、埼玉３、神奈川１、静岡１、長野２、岐阜１、

縄文側面圧痕文土器…山形２、新潟４、茨城１、埼玉５、長野１、高知１

回転縄文系土器群

自縄自巻の回転縄文土器……埼玉２、長野１

羽状縄文土器……新潟１、千葉１、埼玉２、静岡１、長野２

表裏縄文土器……新潟１、千葉１、埼玉３、長野11、岐阜３、福井１

普通の縄文のある土器……新潟２、栃木１、千葉１、埼玉５、長野３、岐阜２、福井１

以上の中には一つの遺跡から何種もの土器を出している例も多く、実際には100近い遺跡についての内容である。全体的にみて草創期の遺跡はほぼ全国的に分布していることがわかるが、特に隆線文系土器群と、爪形文土器群は全国的であり、押圧縄文土器は東日本に多く、西日本にはほとんど見られない。また、回転縄文系土器は東北にほとんど見られず、西日本にもごく僅かな存在である。

小林達雄氏は押圧縄文系土器と回転縄文系土器を合わせて、多縄文系土器として把握されているが、これはかつて故山内清男氏が、「多縄文型式群」（山内、1964）と名付けられたことに由来している。この多縄文系土器は撚紐や絡条体などの縄目文様（縄文）を多用する土器で、この様式の土器は多種多様である。なお、縄文原体が大いに工夫された最初の土器ともいわれ、新しい気運を招来したものでもあった。そしてこの様式を以て草創期を終わり、撚糸文や縄文を多用する早期に移行していくのである。いわば草創期終末期に登場したもので、縄文土器に多用される縄文そのものが初めて出現した時期のものである。この縄文の手法はすでに述べた如く多様であるが、大別すれば押圧縄文・半置半転縄文・回転縄文などに分けられる。その個々の手法内容については本報告書にも詳しいので、ここでは省略するが、当大仁町の仲道A遺跡出土土器は、まさにこの段階のものであり、半置半転縄文の好資料を多量に出土したところに大きな特徴がある。

現在のところ静岡県内発見の草創期の遺跡は、確実なものとしては仲道A遺跡のみであるが、他に絡条体圧痕文をもつ半置半転系縄文を有する土器を1片のみ出土しているものとして、近隣の修善寺町熊坂付近の1遺跡があるに過ぎない（地元の研究者長倉紫朗氏の収蔵品）。

しかし、このことは静岡県内でも中伊豆地域に草創期の遺跡が複数存在していることを証明しており、今後の調査研究によっては、さらに増加する可能性を示している。なお、こうした草創期の土器を見慣れない静岡県内の研究者の1員として、本遺跡調査者も当初絡条体圧痕文や羽状縄文を有する土器片を見て、早期から前期にかけてのものと錯覚したのは止むを得ないことであるが、われわれも同じ静岡県内の研究者として、大いに反省させられるところがあった。つまり、従来、列点状糸文土器とか絡条体圧痕文のある土器を、すべて縄文早期のものとして片付けたり、また羽状縄文のある土器をほとんど前期のものとして処理してきたことであり、今後もう一度それらを見直す必要にも迫られたのである。それは尖頭器や有舌尖頭器などを出す遺跡が、特に県東部の駿豆地方に多い事実とも考え合わせて再調査が望まれるわけである。なお、仲道A遺跡出土の土器は、その破片数の豊富なこと、完形に復原できたものが2個体もあることなど、多縄文系土器群の実態を知る点で、全国的にも最良の資料を提供したものであることを特筆しておきたい。

最後に本遺跡の年代についてであるが、福井洞穴第3層出土の隆起線文土器に伴う木炭から得られた木越邦彦氏の年代測定値が約12,000年前であり、また第2層の爪形文土器包含層のC14年代測定値がB.C10,450±350年といわれている。この後者はフィッショントラック法により約9,800年前と補正されている点も考慮して、大体、今から約10,000年位前に、多縄文系土器の

使用も始っていたと考えてよいのではなかろうか。一般の読者の参考までに付記しておく。

参 考 文 献

山内清男　「室谷洞窟、序」『室谷洞窟』長岡市立科学博物館考古学研究報告第6冊、1964年

小林達雄　「縄文土器の世界」『縄文土器』日本原始美術大系Ⅰ、講談社、1977年

小林達雄　「(縄文土器) 総編」『縄文文化の研究』3、(縄文土器Ⅰ)、雄山閣、1982年

堀越正行　「縄文時代の研究」『日本の考古学を学ぶ』、有斐閣、1978年

芹沢長介　「縄文土器の起源」『縄文土器大成』①早・前期、講談社、1982年

鈴木保彦　「草創期の土器型式」『縄文土器大成』①早・前期、講談社、1982年

特論2

2個体の復元土器について

東京都埋蔵文化財センター調査課主査　可 児 通 宏

仲道A遺跡の土器との出合いは一昨年の夏のことであったであろうか、大仁町の漆畑氏が国学院大学の小林教授のもとに持参されたのを拝見し、その質、量の豊富さに驚いたものである。草創期の多縄文系土器は、これまで主に日本海側の遺跡で発見されてきており、これが伊豆の大仁町で、しかもこれほど大量にまとまって出土するとは思ってもみなかったからである。

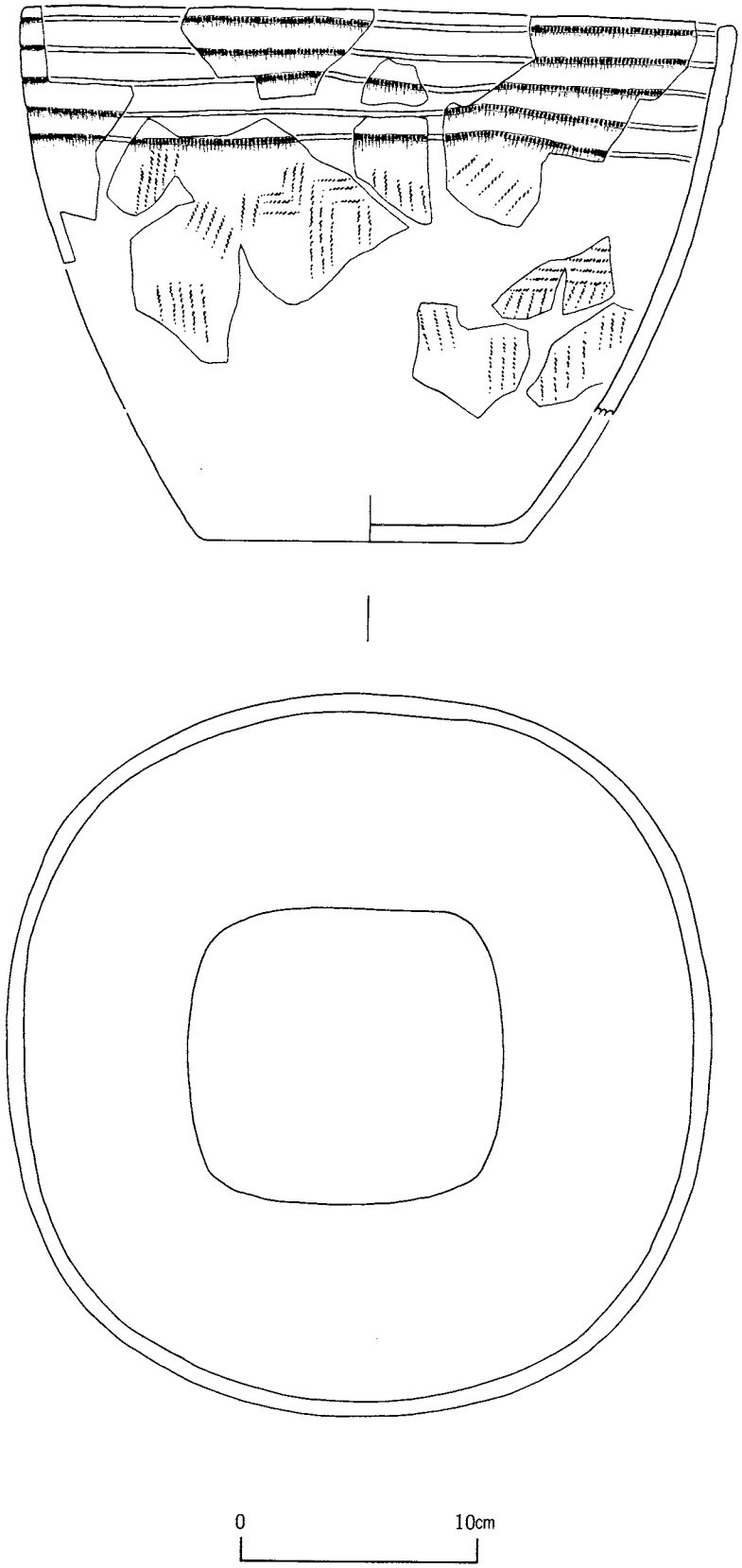
その後、この出合いが縁となって、仲道A遺跡の土器の復元を引受けることになったのであるが、ここでは土器の説明は本文に譲り、復元の過程で気の付いたことを記しておくので、復元土器を見る上での参考にしていただきたい。

復元第1号の土器（第218図）は、口縁部の破片が全周のほぼ半分近くあり、また胴部の破片についても接合して比較的大形の破片になるものがあるなどして、復元を行う上では好条件の備わった個体であったが、実際の復元作業を行うにあたっては、次のような点に手を煩わせられることになった。1つは、胎土が軟質（スコリア粒かパミスとみられる混入物を含むためか脆い）なために破片が磨滅していて、それが接合作業を進める上で支障をきたしたこと。2つは、土器の平面形が隅丸方形になるため、少なくとも方形の一辺の長さの判るまでの大きさに接合しなければ土器の大きさが判らなかったこと。3つは、底部を含む胴下半部の破片がなかったことと、接合しない板状の破片がかなりの量あったこと、等の点である。特に2つ目の点に関しては、かろうじて一辺の長さの判るまでに破片が接合したので、器形については、底部付近を除いてかなり正確な形に復元されているはずである。ただ全体の器形については、新潟県室谷洞窟の土器のプロポーションを参考にしてはいるが、特に似せて復元したわけではないから、両者のプロポーションはもともとよく似たものであったようである。

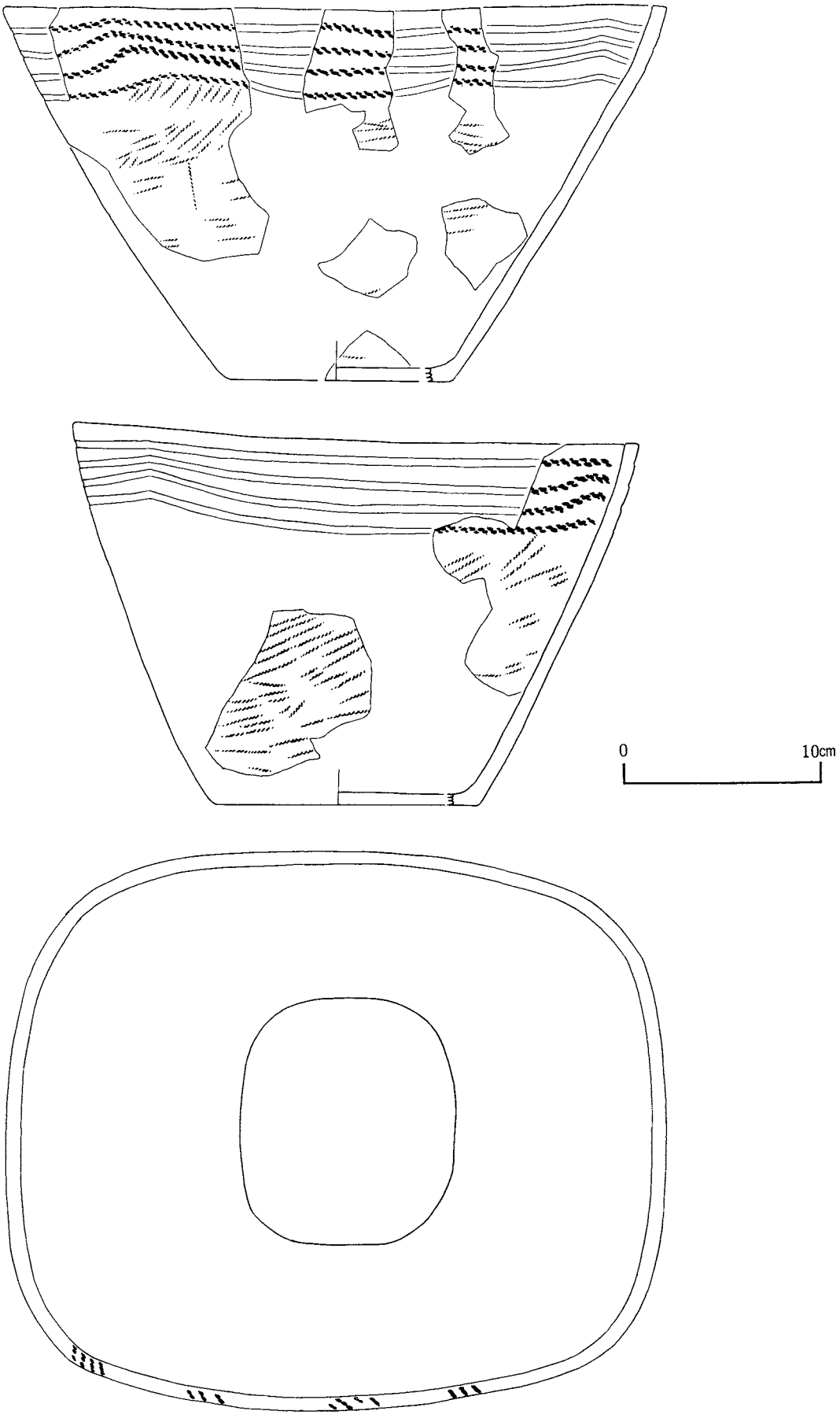
復元第2号の土器（第219図）は、1号土器の復元に目処のついた段階で、再度復元を依頼さ

れたものである。破片の量は1号に比べてはるかに少なかったが、口縁から胴部にかけての、しかも隅丸方形のコーナーにあたる部分の大形破片があったので復元を試みることにした。1号と異なる点は、方形の一辺の長さが全く不明であるので、この土器の本当の大きさは判っていないという点である。復元の手順としては、1号土器に合せて型を作り、それに破片を埋め込んでいくという方法を考えたのであるが、破片を埋め込む段になって、2号の破片は1号の型にははまらず、両者は異なる器形の土器であるということが明らかになった。器形の相違点とは、2号を1号の型にはめていくとコーナー部分の口縁が波状に突出する器形になり、また、平口縁にすると平面形が長方形になるというものである。現在、波状口縁の初源が早期中葉以前に遡る可能性は少ないので、2号土器は平面形を長方形に、器高をほぼ1号に合せて復元した。その結果、器形は1号とはやや異なった形態になり、また側面圧痕の縄文も、コーナー部分で上がり、辺の中央部で垂れ下がるという装飾的効果の強調された施文になっている。

以上、気の付いたことを思いつくまま記した。1・2号土器ともかなり強引に復元した土器となったが、数少ない該期の土器を知る上での参考になれば幸いである。



第218図　半置半転文土器実測図



第219図　側面圧痕文土器実測図

特論 3

鉱物組成から見た仲道A遺跡出土土器について

伊豆中央高校　増島　淳

I　目的

土器は砂と粘土から出来ている。土器作製者は、良質な粘土を得、水や枯木のある場所で粘土をこね、つなぎに砂を入れる。そして焼成する。

土器体内に含まれている砂粒は、土器作製地の特徴を反映しているものと思われる。

そこで、土器体内に含まれる砂粒鉱物の特徴を調べれば、土器作製地について手がかりを得ることが出来るかもしれないと考え、土器体内の砂粒鉱物の観察を行った。

II　方法

1、試料土器について

試料とした土器は、発掘担当者から提供された20片である。

2、観察方法

土器体内に含まれる砂粒鉱物の観察は次の様な手順で行った。

a　外見の観察

試料表面の紋様の有無について観察した。結果は、20片とも無紋に近かった。

肉眼観察では、雲母は認められなかった。

b　砂粒鉱物の観察

i)各試料を秤量する。

ii)各試料を乳鉢に入れ粉砕する。

iii)蒸発皿に移し、希塩酸を加え、煮沸し、土壌粒子の分散と、砂粒鉱物のクリーニングを行う。冷却後、水を加え、親指で砂粒をこすり、物理的なクリーニングを行う。この操作を3回、くり返す。

iv)乾燥後、ふるい分けを行い、105(ミクロン)μ～250μの粒子を得る。(1000μ＝1㎜)これを検鏡試料とする。

v)試料を、カナダバルサムとキシレンの混液で封入し、プレパラートを作る。

vi)100倍の鉱物顕微鏡で検鏡する。検鏡は重鉱物*が200粒に達するまで行う。ただし、試料中の鉱物粒が少い場合は、その限りでない。検鏡中、重鉱物以外の粒子にも注意する。

※鉱物を大きく分けると、比重が2.7以上の重鉱物（有色鉱物）と、2.7以下の軽鉱物（無色鉱物）がある。その内で重鉱物の組み合せ（以下、組成と呼ぶ）が、砂粒を供給した、母岩の特徴をよく表わしている。

また、顕微鏡下には、特徴ある天然ガラス片や、岩片等も含まれているので、注意しながら検鏡した。

III　結果

各試料の検鏡結果は、第16表にまとめておいた。表中の重鉱物組成にある、Hyはシソ輝石を、

Auはフツウ輝石を、Hoは角セン石を、Opは不透明鉱物を、それぞれ意味する。

軽鉱物量は、特に多いものを明示した。

天然ガラスは、その特徴で分けると５種類ほど検出されたが、その内試料の分類に利用できる３種のみを記載した。

ピンクと記したガラスは、ガラスの屈折率が、カナダバルサムより低いため、薄いピンク色に見える物である。

発泡は、ガラスが火山体から放出され、冷却する時、気泡が残ったり、ぬけでた穴が認められる物である。

晶子状は、ガラス体内に、晶子と呼ばれる鉱物結晶のできかかりが認められるもので、黒耀石中などでは一般的に存在する。

なお、◎は多量に含むことを、○は含むことを意味している。№３、６、14、15、20の各試料は砂粒鉱物量が少ないため、重鉱物を200粒に達するまで観察できなかった。

IV　考察

以下に各試料の鉱物的特徴についてまとめ、作製地について考察を行う。

１、各試料の三角ダイヤグラムについて。

各試料に含まれている重鉱物のうち、特徴的な、Ho（角セン石）、Hy（シソ輝石）、Au（フツウ輝石）の三成分の、組成化を三角ダイヤグラムで表わしてみた。

試料	重鉱物組成					軽	(火山)ガラス			備考
№	Hy	Au	Ho	Op	計	鉱物量	ピンク	発泡	晶子状	
1	107	29	53	27	216	多い				
2	118	66	16	5	205		◎	○	○	
3	22	14	2	41	79					試料不足
4	110	63	7	23	203		◎		○	
5	102	22	57	35	216	多い				
6	37	33	1	1	72		◎		○	試料不足
7	123	79	4	3	209		○			
8	31	14	88	75	208		○			
9	107	82	10	7	206		◎	◎	○	
10	89	37	50	30	206	多い				
11	84	9	44	71	208	多い				
12	126	68	4	17	215		◎	◎		
13	117	70	16	11	214		◎	○	○	
14	64	24	2	4	94		◎	○	○	試料不足
15	61	50	5	2	118		◎			試料不足
16	99	82	12	7	200		◎	○		
17	130	69	5	7	211		◎	○	○	
18	130	67	13	15	225		◎	○	○	
19	127	68	6	7	208		◎	○	○	
20	50	40	5	2	99		○			試料不足

第16表　各試料の検鏡結果（説明は本文中）

図の見方について説明を加える。

試料中に、Ho、Hy、Auの三成分が等しく入っている場合、点は三角形の中央に打たれる。Hoしかない場合は、三角形の上の頂点に点が打たれる、Hoを全く含まず、HyとAuが50%ずつ含まれている場合、点は、三角形の底辺の中央に打たれる。

点がHo側（上の方）にある時は、その試料中には、酸性岩（花コウ岩、流紋岩など）から供給された砂粒が含まれているものと考えられる。

点が三角形の底辺近くにある場合は、中性岩（安山岩など）から供給された砂粒が含まれているものと考えられる。

2、各試料の分類

各試料について、観察結果をもとにし、グループ分けを行ってみる。

Ⅰ類土器（試料№2、3、4、6、7、9、12、13、14、15、16、17、18、19、20）15点

共通点をあげると、重鉱物組成では、シソ輝石に富み、フツウ輝石がこれに次ぎ、角センも少量混入する。軽鉱物量が少い。

砂粒試料不足の№3を除き、屈折率の低い（ピンク色の）ガラスを多量に含み、また発泡したガラスや、晶子の入ったガラスを検出した場合が多かった。

Ⅱ類土器（試料№1、5、10、11）4点

重鉱物組成では、シソ輝石に富み、角セン石がこれに次ぎ、フツウ輝石が少量混入する。

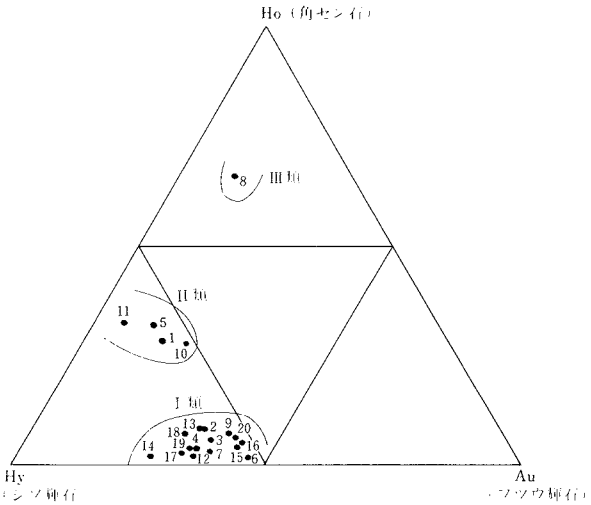
軽鉱物量が多く、ガラス粒を含まない。

Ⅲ類土器（試料№8）1点

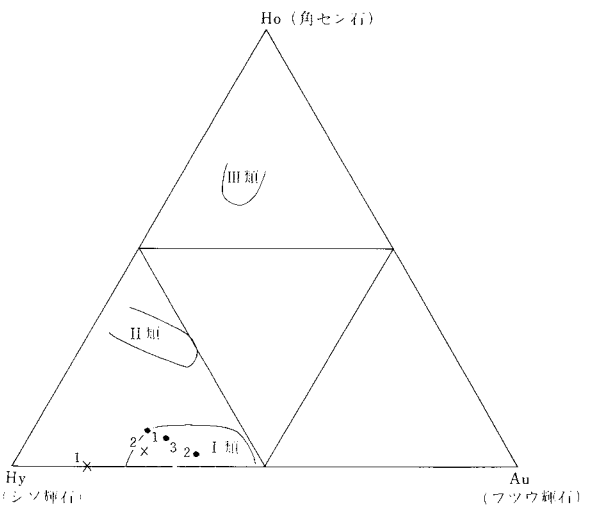
角セン石量多く、シソ輝石、フツウ輝石も少量混入する。

3、作製地の推定

遺跡及び、その近辺の土層について、鉱物組成の調査を実施していないため、作製地の特定は出来ないが、土器体内に含まれている砂粒鉱物の供給源の種類は推定できる。



第17表　各試料の三角ダイヤグラム（説明は本文中）



第18表　火山灰層と土器類型の比較
●浮橋辻　×田中山公会堂

観察した各試料共に単一の母岩から供給された砂粒のみが、土器中に混入された様ではなく、複数の供給源を持つ様に思われる。

つまり、粘土中に含まれている、風化され残った若干の砂粒の混入も考えられるが、基本的には、火山灰起源の砂粒（Ho、Hyの一部で自形を示すもの及び、天然ガラス）と河川砂（火山灰起源の砂粒も河川に堆積していたものかも知れないが）が混入している様である。

分類した各型の作製地について考察してみると、次の様になる。

Ⅰ類土器

ガラスを良く含む事から、火山灰の堆積地域であり、重鉱物組成から見て、周囲に安山岩の山体が存在する所で作製された様である。

II類土器

軽鉱物量が多く、角セン石も目立つ事から、酸性岩の風化砂が主体になっているが、シソ輝石やフツウ輝石などの存在も考えると、中性岩の混入も考えられる。また火山ガラスを含まない点では、他と異質である。Ⅰ類土器とは、砂粒の採取方法が異っていたか、まったく、別の場合で作製されたものの、いずれかと思われる。

III類土器

角セン石量が多く、シソ輝石やフツウ輝石も若干混入する事から、酸性岩体を母岩とし、他の岩体からの風化砂も若干供給される地域で作製されたものと考えられる。なおⅠ類土器に多量に含まれていた屈折率の低いガラス（ピンク色のガラス）も若干検出されたので、Ⅰ類土器の作製地にも関連する地域かもしれない。

４、土器の焼成温度について

縄文土器は酸化炎で焼成される。土器体内に含まれている角セン石は、酸化状態で温度を上げると色が変化する。つまり、低温から高温になるに従い、緑色→褐色→赤色と変化し、また結晶の光学的特徴も変化する。これを利用して、土器の焼成温度を推定することが出来る。

今回観察した各試料とも、角セン石を含んでいたので、これを調べてみた。

結果は各試料とも、緑色のものが多く、褐色のものが、若干含まれる程度であり、赤色のものは全く検出されなかった。

つまり各土器とも、比較的低温の炎（400℃～500℃前後）で焼成された様である。

Ⅴ　まとめ

今回調べた、20片の土器試料は、その鉱物組成の特徴から、三類型に大別された。それぞれ、同一類型に入る土器試料は、同一の場所で作製されたものとして良いだろう。

これが正しければ、三箇所の作製地（研粒の採取場所）が存在したわけである。

その場所が、どこにあるか、については、前記した様に、遺跡近辺の土層調査を行っていないので、具体的な推定はできなかった。

しかし、筆者が別の調査の際に分析した、大仁町域の火山灰層の鉱物組成を比べて見ると、

今後の土器作製地推定の目安となるものがあるので記しておく。

一つは、大仁町、浮橋辻のバス停付近の露頭で採取したもので、第18表のNo.1は九州の姶良カルデラ起源の火山ガラスを含む層の直上(姶良カルデラは今から約2万年前に活動した)。No.2は火山ガラスの主堆積層。No.3は火山ガラスの堆積層と下位の三島パミス（箱根火山の中央火口丘噴出物）の中間から、それぞれ得たものである。(表中●印で示した。)

他は、大仁町、田中山公会堂横の露頭で採取したもので、No.1、2、共に三島パミス上部の褐色ローム層中から得た。(×印)

第17・18表の三角ダイヤグラムには、両試料の他に、土器の類型も合わせ記した。

これを見ると、Ⅰ類土器と、火山灰層の鉱物組成が一致する様に見えるが、実際には、火山灰層中の鉱物量は少く、火山灰がそのまま土器作製に用いられたとは思われない。(火山灰層が浸食され、洗い出された鉱物粒がまとまって堆積すれば別だが)

また図には示してないが、三島パミス層のずっと下位に、オレンジパミス層があり、その付近には、もっと角セン石が集中している層が、三島市近辺で発見されている。この辺の火山灰層も土器作製地を推定するカギになる様に思われる。(なお、現在の狩野川や、その流域の河川砂には、角セン石が普通に認められるが、その供給源は、天城火山の側火山であるカワゴ平火口である。しかしカワゴ平火口の活動時期は、今から約2900～3000年前であることが確められているので、本遺跡で人々が生活していた当時は、まだ存在していない。)

また、土器の焼成方法は、その温度から見て、各類型とも、似たような方法で行っていた様である。

なお、今回の調査研究には、伊豆中央高校、地学部員諸君の協力を得た。

特論 4

仲道Ａ遺跡の土器の作製地をめぐって

沼津市歴史民俗資料館学芸員　**瀬川裕市郎**

20片の仲道Ａ遺跡の土器の胎土分析をおこなった増島氏によれば、シソ輝石に富み、フツウ輝石がこれに続き、角セン石を少量持つものと、角セン石とフツウ輝石の量が入れ変わるもの、角セン石が多く、シソ輝石・フツウ輝石が少量混ざるものの三類型に区分できるという。そしてそれらは基本的には、火山灰起源の砂粒と河川砂であるという。それを増島氏自身が採集した周辺地域の火山灰層の鉱物組成と比較すると、特にⅠ類としたものについては、遺跡の周辺の火山灰が含まれているという。但しその火山灰層に見られる鉱物は、その量も少くなくそれをそのまま土器に混ぜたとは考えられないという。

それではどこの火山灰を混ぜたのだろうか。

以前私は東部地域の現代陶芸家一人一人を訪ね、「土」をどこから手に入れているか尋ねたことがある。そのとき愛鷹山周辺の陶芸家はことごとく他地域から粘土を購入していた。ただ伊豆中央部に住まいされている何人かの陶芸家は以前は土地の粘土を使っていたという。それが増島氏の東部地域の土器の胎土分析の結果と奇妙に一致するので大変興味を覚えたことがある。

また最近私は静岡大学の加藤芳朗教授に粘土の鉱物組成の分析を依頼した。そして土器となる粘土には、モンモリロナイト・バーミキュライト・ハロサイト・メタハロサイトが含まれているという結果が得られた。だから土器となる粘土には、以上の粘土鉱物が含まれていなければならないなどとは単純には思わないが、土器となる粘土についての一つのヒントにはなると思っている。しかし実際には粘土鉱物の量であるとか、脱水するさいの温度であるとか粒子の細かさなども大きく影響しているものと思っている。またどこの粘土で作られたかということと、どんな粘土で作られたかということは別の問題でもあると思えるので、土器を作るということに関しては未解決な点が多いといえるだろう。

さて、増島氏は角セン石の変色の過程から、仲道A遺跡の土器は400度から500度前後の温度で焼成されたとされている。しかし、ハロサイトの大部分の脱水に要する温度は500度～600度であるようだし、モンモリロナイトが再結晶するには900度～1000度の熱を要するようである。そうすると単純に考えて、400度～500度ではハロサイトの脱水は完了していないし、モンモリロナイトは再結晶していないということになる。それが焼成された土器とどのように係わるかは知らないが、なんとなく矛盾するようにも思える。焼成温度については再検討を要するということか。

また土器を作るさいに多くが粘土に砂を混ぜるとしているが、既に粘土の段階である程度の砂粒が混入されているということは有り得ないであろうか。これも今後の検討課題として置きたい。

増島氏がII・III類とした土器はそのダイヤグラムによれば、甲府盆地か八ケ岳周辺ということも考えられる。そうだとすれば、それらは粘土で運ばれたのだろうか、あるいは土器という製品で運ばれたのだろうか。その際I類とII類・III類とに器形や文様の上でどの程度の差があったのだろうか。一体それらはだれがどこで作ったのだろうか。

第Ⅶ章　総　　括

仲道Ａ遺跡の発掘調査は、第Ⅰ次・第Ⅱ次を通じて約1200㎡、凡そ４ヶ月半にもおよぶものであった。これは、遺跡全体から見れば10分の１足らずではあったが、内容的には極めて密度の濃い調査であった。本遺跡から出土・検出された遺物や遺構は実に時代幅が広く、先土器時代終末期から中・近世にまでまたがっている。

このうち、先土器時代のナイフ形石器・彫器の出土は、当町における該期の遺跡研究に大いなる希望を持たせるものとなった。すなわち、従来は田中山・浮橋など比較的高所（標高260～400ｍ付近）の遺跡から僅かに採集されていたに過ぎなかったものが、向原遺跡（三福）に続いて低位の遺跡から、しかも、発掘によって出土した事の意義は大きい。

縄文時代草創期前半の石槍・有舌尖頭器は、浮橋の土沢遺跡の表採品と共に良好な資料であり、最古の土器群である隆起線文系土器の存在を予測させる重要なものであろう。

続く、草創期後半については前述の通り、所謂多縄文系土器が第５表で示したように、Ｆ・Ｇ・Ｈグリッド内トレンチのⅥａ層～Ⅵｂ層を中心に出土した。特に、Ｆ－３、Ｇ－２、Ｈ－１・Ｈ－２グリッドからの出土が多い。第80図と第81図は、出土状況を表したものであるが、Ⅴｂ層を境としてこれ以下に草創期の遺物が集中している事が分かる。Ⅴａ層は中期～早期（押型文土器）が検出されており、一部がⅤｂ層上面から出土しているものの、本層（Ⅴｂ層）が草創期の鍵層となるものである。図で見る限りは各種の土器が混在しており、これによって層位による時期差を求める事は困難である。いずれにしても、本遺跡出土の草創期土器は、その量の豊富さもさる事ながら多縄文系土器としての特徴（文様・施文原体）をあます事なく備えており、加えてこれまでの認識を変える厚手の土器という点で注目される。第Ⅴ章で述べたように、その編年的位置はおそらく室谷下層式の古い段階に位置するものと思われるが、今後さらに十分な検討をしてゆかなければならないと考えている。石器としては、同時期の石鏃が発見されているが、その出土状況から伴出関係は明らかである。

早期・前期は、資料が乏しく今後の増加を待ちたいところである。中期では、第Ⅰ次調査検出の呪術的要素を持った第２号住居跡、これに伴う釣手形土器や深鉢形土器は注目に値する。また、第Ⅱ次調査検出の第６号住居跡は小規模ながらまとまりのある敷石住居跡であろう。

平安時代末期～鎌倉時代初頭と推定される方形竪穴住居跡をはじめ、中・近世の遺構や遺物の出現は、当時における「三福」の歴史的な位置付けを再認識する絶好の資料となった。

以上、仲道Ａ遺跡の調査成果を述べてきたが、とりわけ縄文時代草創期後半の遺物については伊豆地方はもとより、県内においても初めて確認されたものであり、広く全国的視野に立って見ても、これからの草創期研究には欠く事のできない重要な資料であると確信している。

あ と が き

昭和34年の早春のある日、筆者は友人の脇田敏之君より一個のヤジリを貰ったことがあった。三福の熊野神社境内で拾ってきたものだという。漆黒に輝くその石に妙に魅かれ、以来、すっかり考古学のとりこになってしまった。それから20年目の昭和54年、三福公民館の増築と遊具設置に伴う事前調査として記録保存の為の発掘調査が行われた。これには、相川富之助氏を始め三福区より全面的な協力が得られ、縄文時代中期中葉～終末の住居跡4基、同時期の所産であろう土坑45基などが確認された。そのなかで、第2号住居跡から出土した釣手形土器や深鉢形土器は、県内を代表する好資料であろう。

続く昭和58年、東洋醸造の社員住宅改築に先立って、会社側の文化財に対する深い理解と協力によって、再び発掘調査を行う事となった。この結果、縄文時代中期中葉～終末の住居跡7基、同時期の土坑6基、平安時代末期～鎌倉時代初頭の竪穴式住居跡1基、同時期の土坑7基が確認された。さらに、当初は全く予想もしていなかった縄文時代草創期後半の多縄文系に属する土器群が発見されたのである。これは、調査員でありまた実質的な推進役であった鍵山一郎氏の努力によるものであり、まさに執念の証でもあった。F・G・Hグリッド内の3本のトレンチ設定については、氏はまるで何かにとりつかれたかのように一途で意欲的であった。とことん掘り尽くせとばかりに調査参加者を叱咤して、表土下2mにもおよぶ粘土層を掘り上げたのである。湧水に悩まされながらも、皆んな本当によくやってくれた。

この調査については、東洋醸造の福井孝氏、尾朝理一氏、渡辺義男氏を始め関係各位に多大な御迷惑をおかけした。心より御礼を申し上げたい。

本書の作成にあたっては、実に多くの方々より様々なかたちで御援助を頂いた。特に草創期の資料に関しては、小林達雄先生、佐原真先生、江坂輝弥先生、芹沢長介先生を始め可児通宏先生、鈴木保彦先生、舘野孝先生、土肥孝先生、原川雄二先生、瀬川裕市郎先生、関野哲夫氏、渋谷昌彦氏には公私共御多忙の中を大変御世話になった。心より御礼を申し上げたい。

調査指導の秋本真澄氏、協力者鍵山一郎氏にはいつもながら感謝の言葉以外のなにものもない。また、第Ⅰ次調査、第Ⅱ次調査に参加された多くの皆さん、そして、本書の作成作業にあたった鳥海嘉奈子、勝又裕代、碓井恵美子、山下静子、木崎貞子の諸姉および友野直亮君には改めて御礼を申し上げる。

思えば、考古学に興味を持つきっかけとなった仲道A遺跡を発掘する機会を得て、しかも、またとない縄文時代草創期の遺物を発見できた事に、何か因縁めいたものさえ感じている。今ここに「仲道A遺跡」を上梓するにあたり、今日まで何かと御指導下さった小野真一先生や、尾形礼正先生には末筆ながら記して謝意を表するものである。

考古学をやっていて本当によかったと思う。それもこれも、多くの諸先輩の御陰である事をよく心得ているつもりである。

昭和61年2月2日　　漆畑　稔

大仁町埋蔵文化財調査報告第９集

仲　道　Ａ　遺　跡

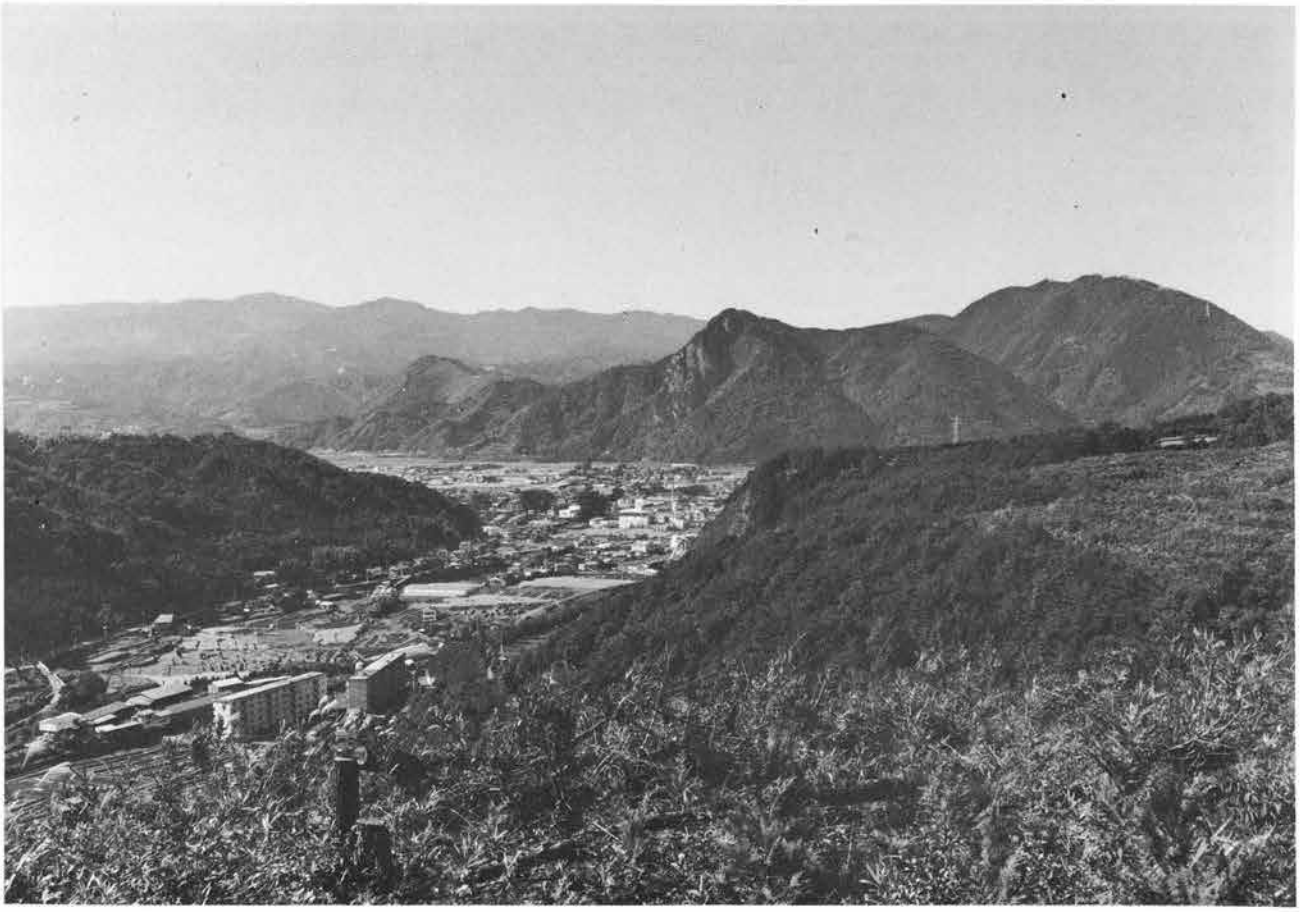
昭和61年３月10日　　印刷
昭和61年３月15日　　発行
編集　／　大仁町教育委員会社会教育課
発行　／　大仁町教育委員会
ＴＥＬ　0558（76）3600（代表）
印刷　／　岳　南　社　印　刷　所

図　　版

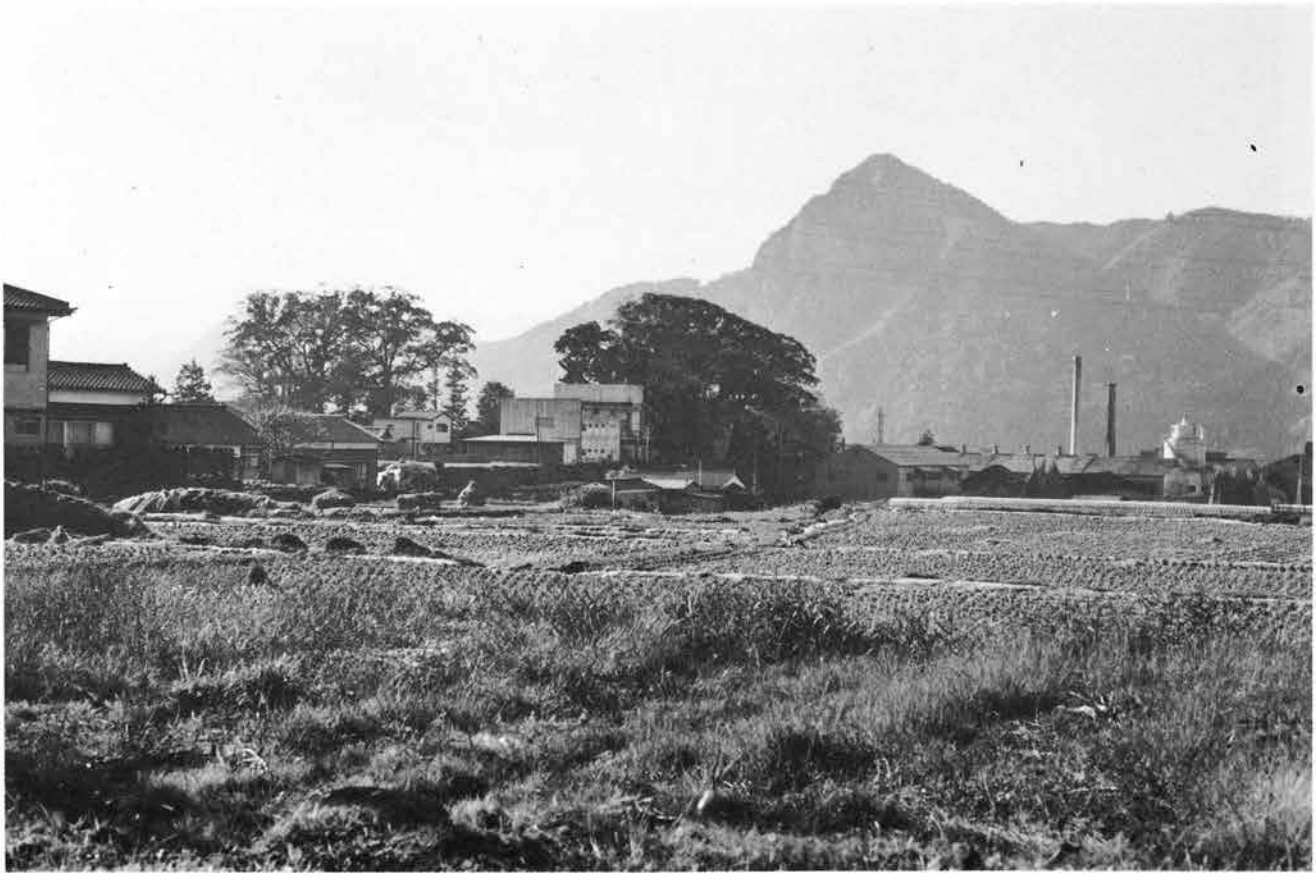
図版 1

仲道Ａ遺跡の遠景（城山山頂・西方より）

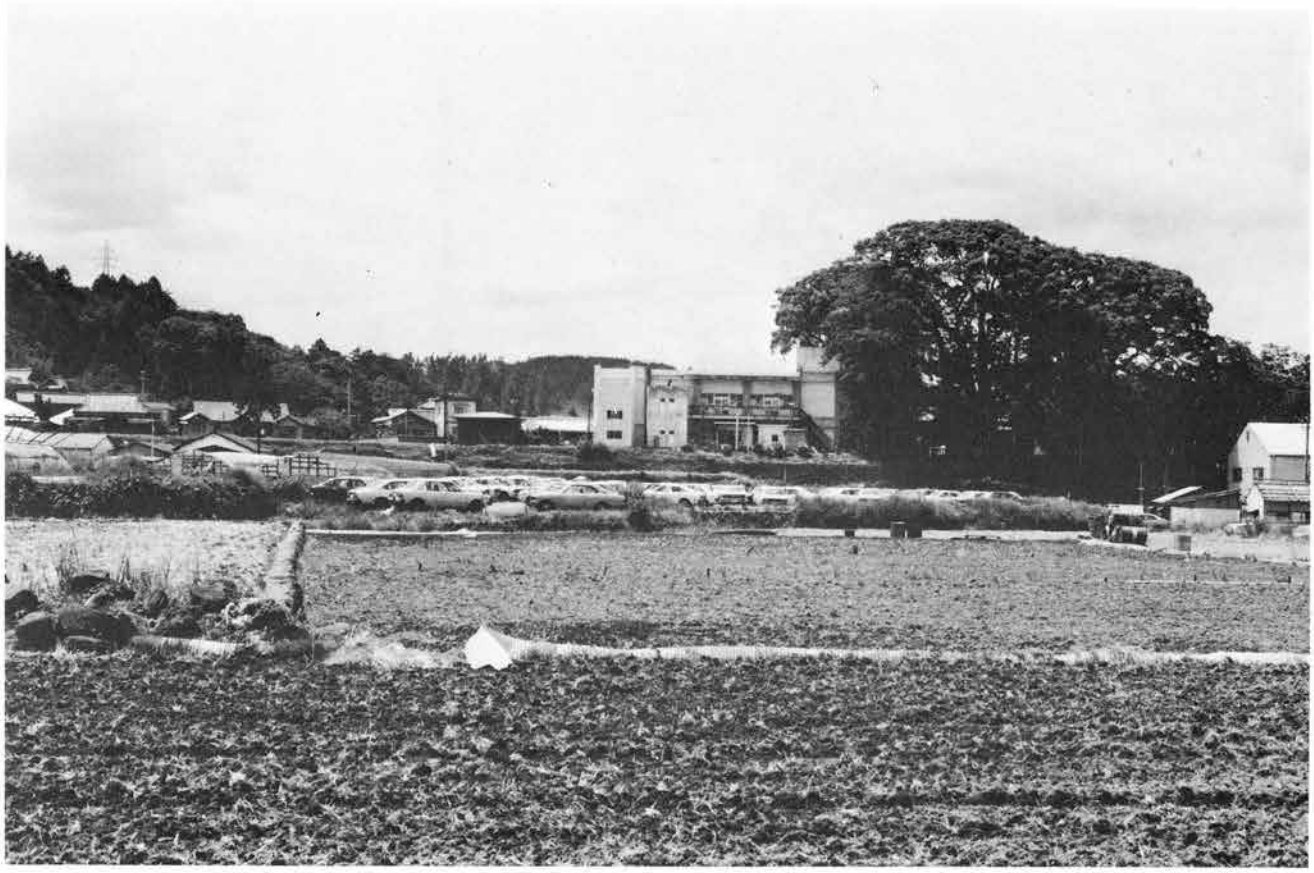
図版 2



仲道Ａ遺跡の遠景（田中山南・東方より）



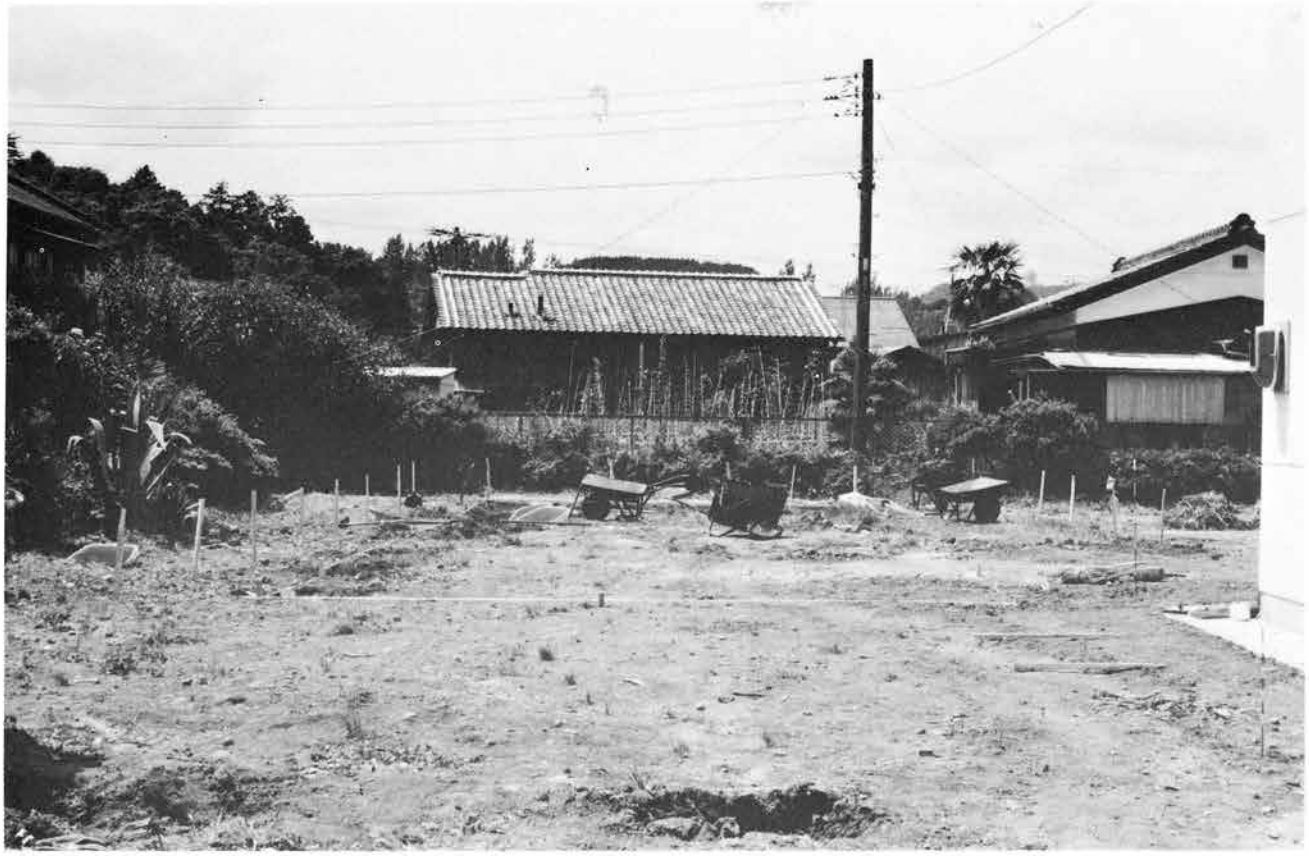
仲道Ａ遺跡の遠景（北東方より・昭和54年）



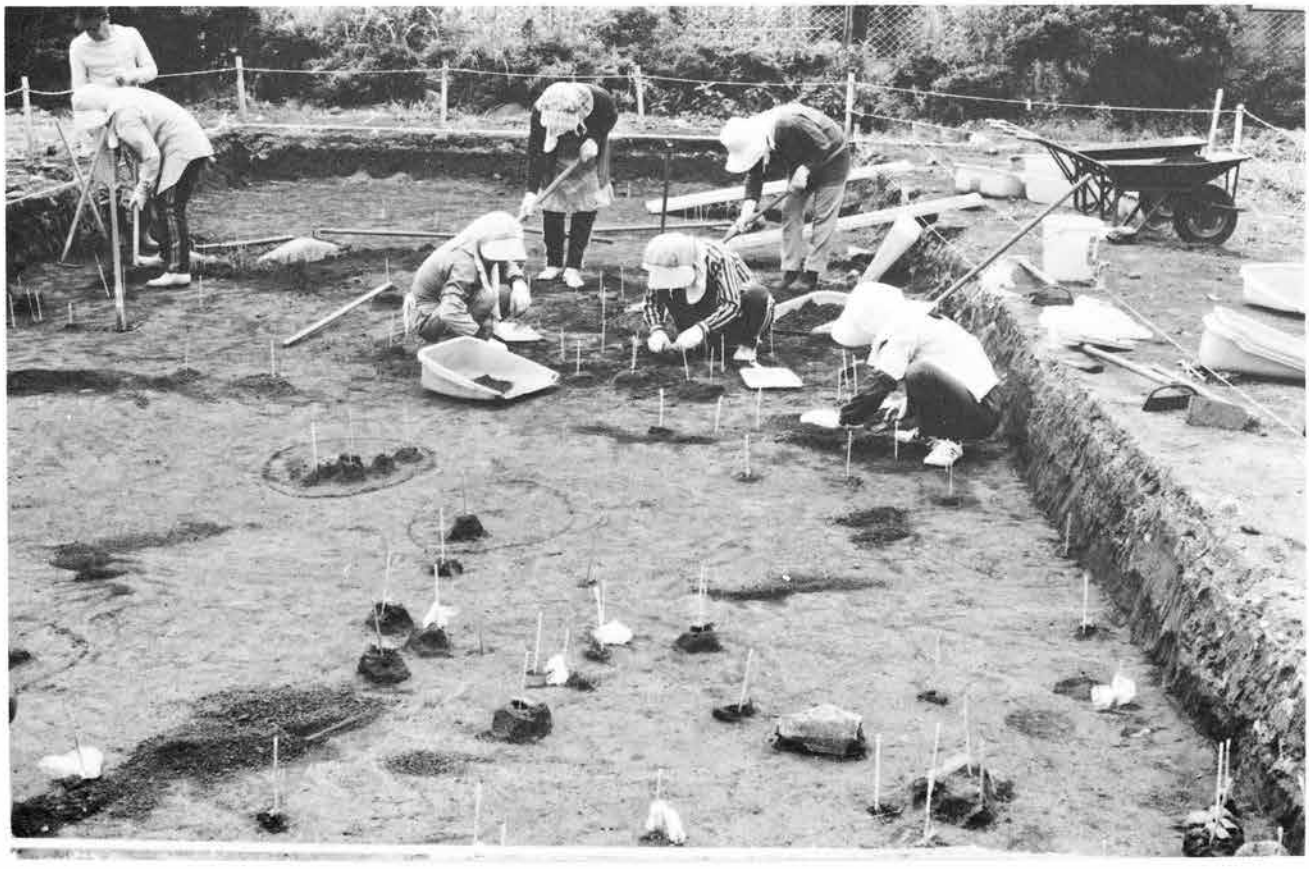
仲道Ａ遺跡の近景（北方より・昭和54年）

第Ⅰ次調査区近景（西側より）

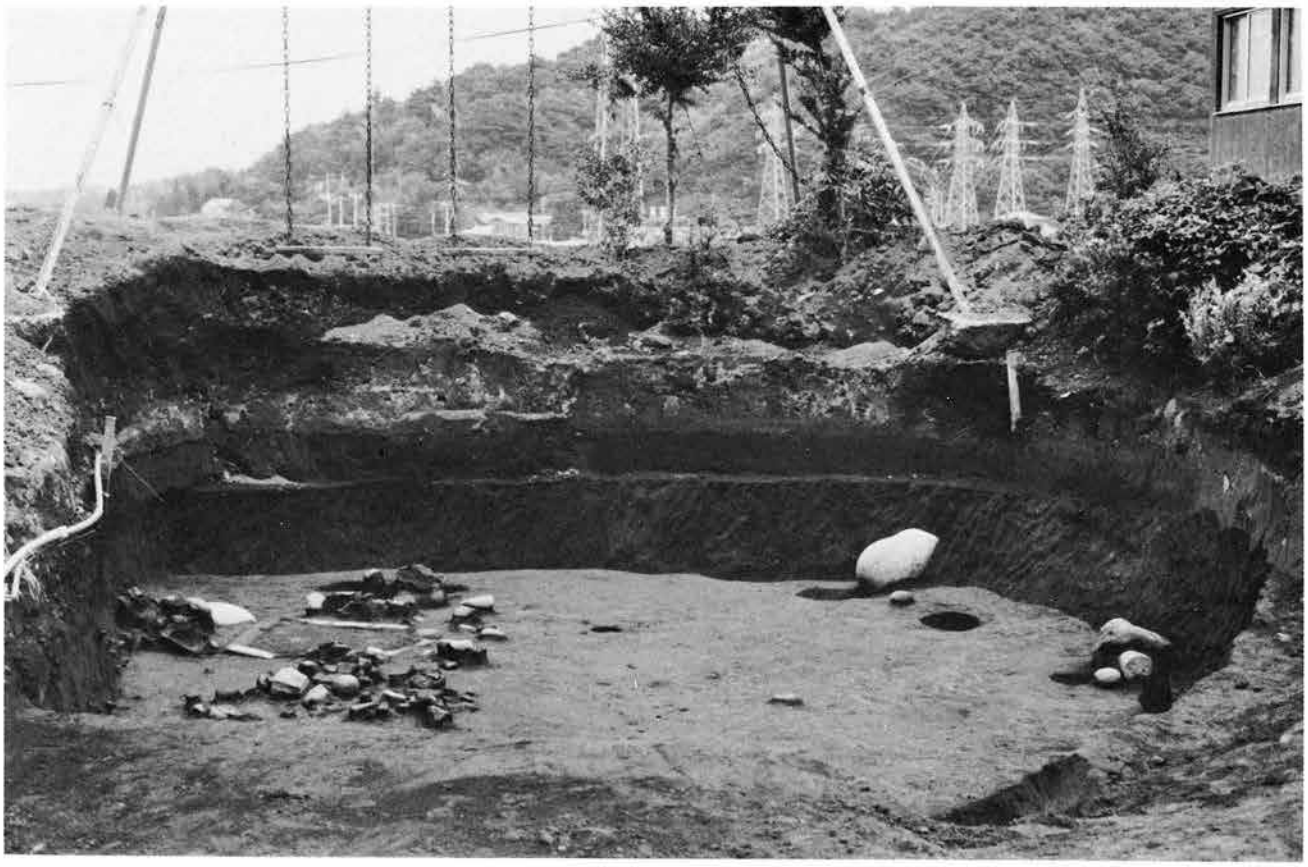
図版 4



第 1 次調査区近景（北側より）



調　査　風　景（北側より）

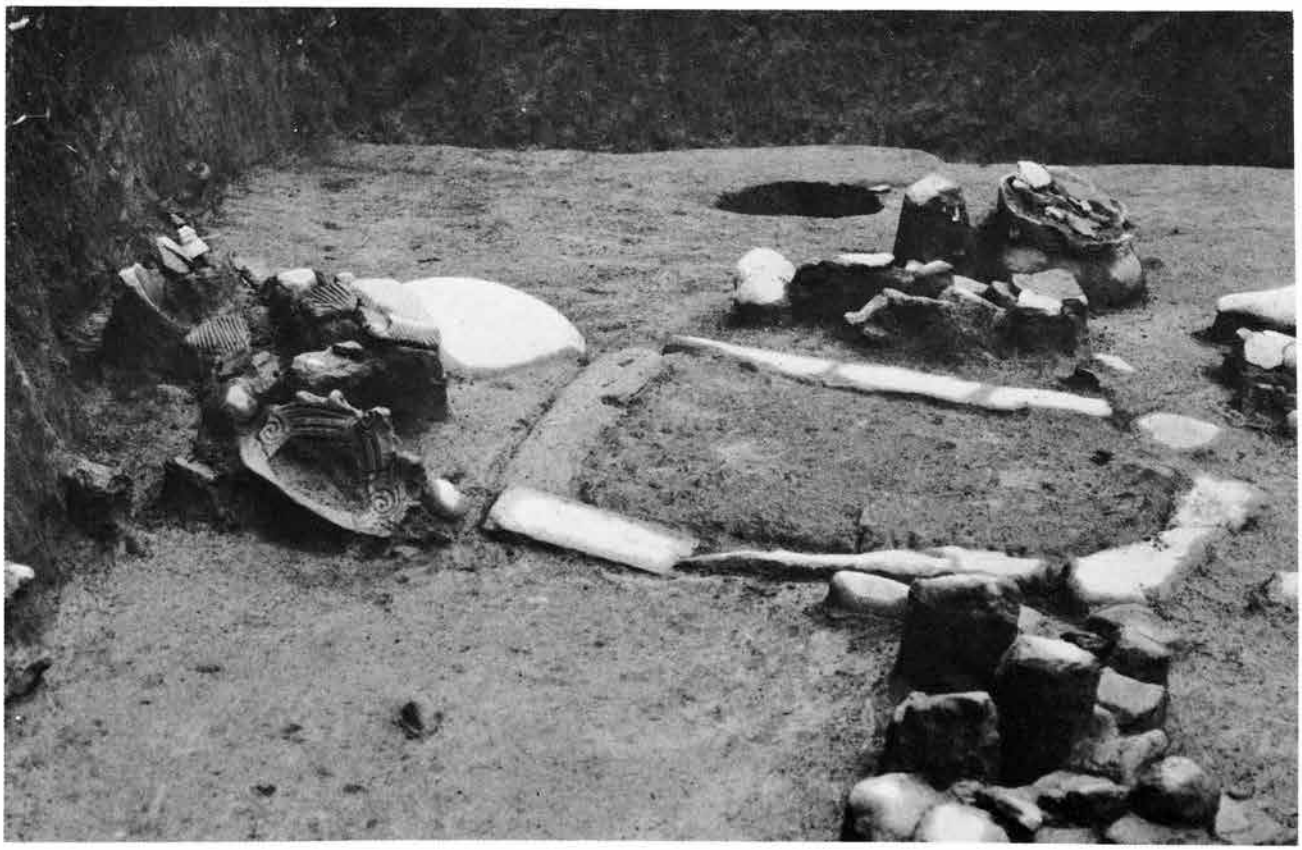


第 2 号住居跡検出状況（南側より）－ 1

第 2 号住居跡検出状況（西上方より）－ 2

図版 6

第 2 号住居跡（石棒と磨石・石皿）



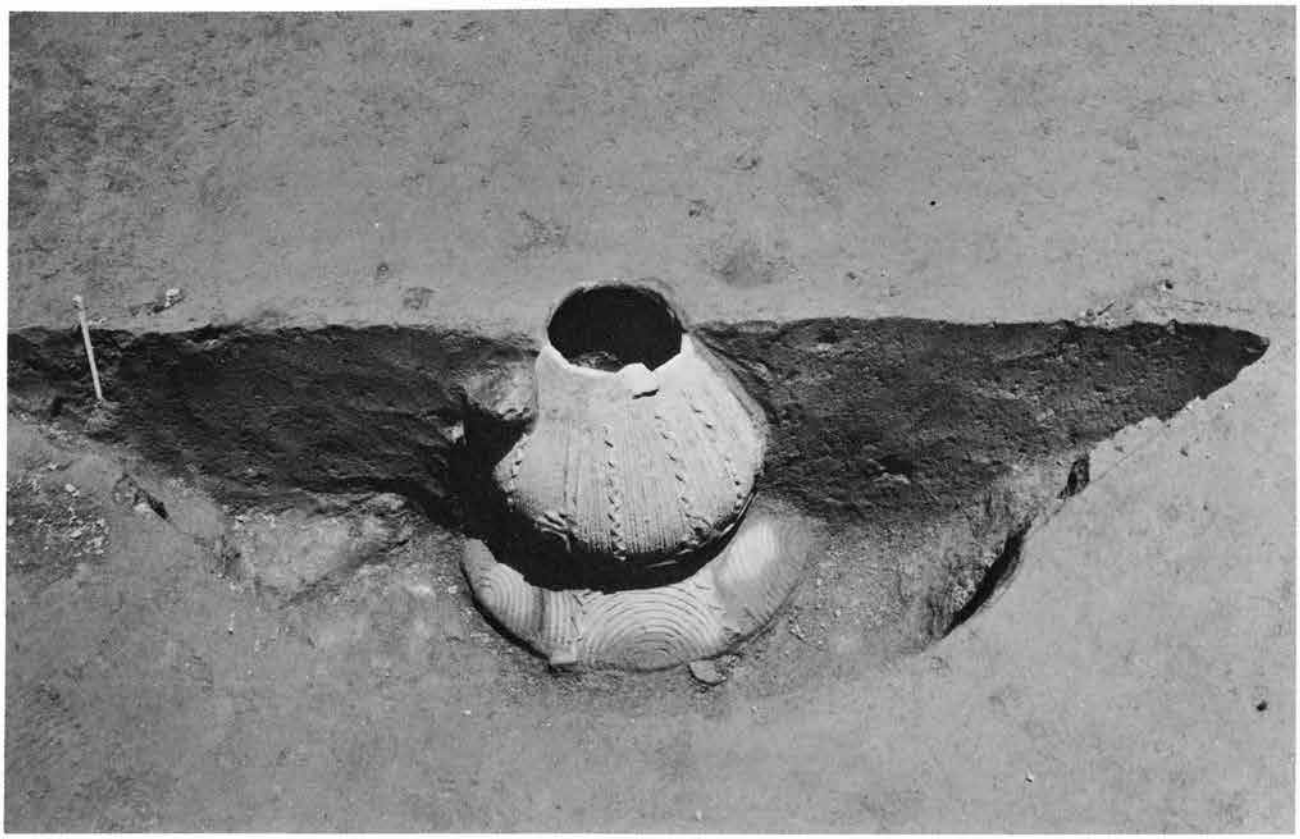
第 2 号住居跡（石囲い炉と釣手形土器）

第 2 号住居跡（釣手形土器）

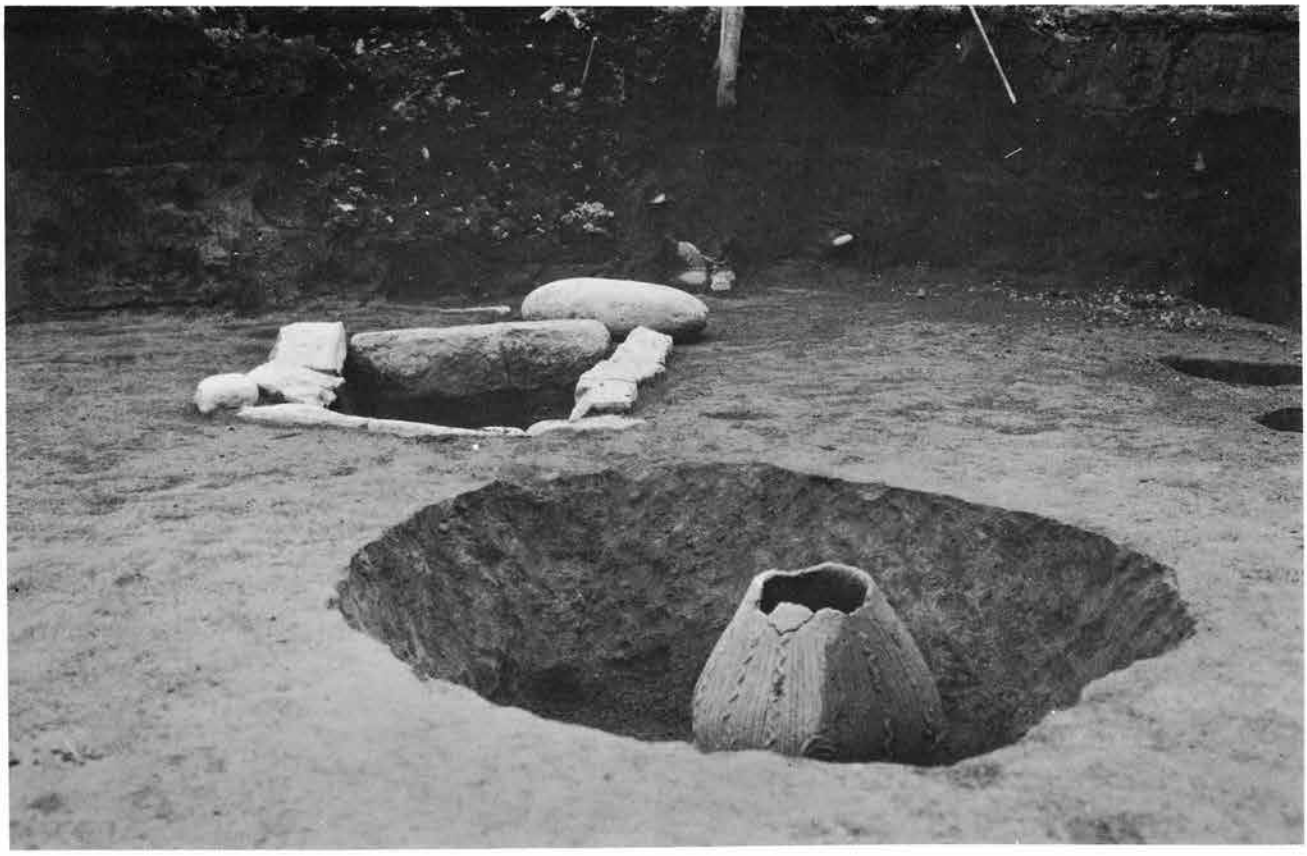
第 2 号住居跡（深鉢形土器）

図版 8

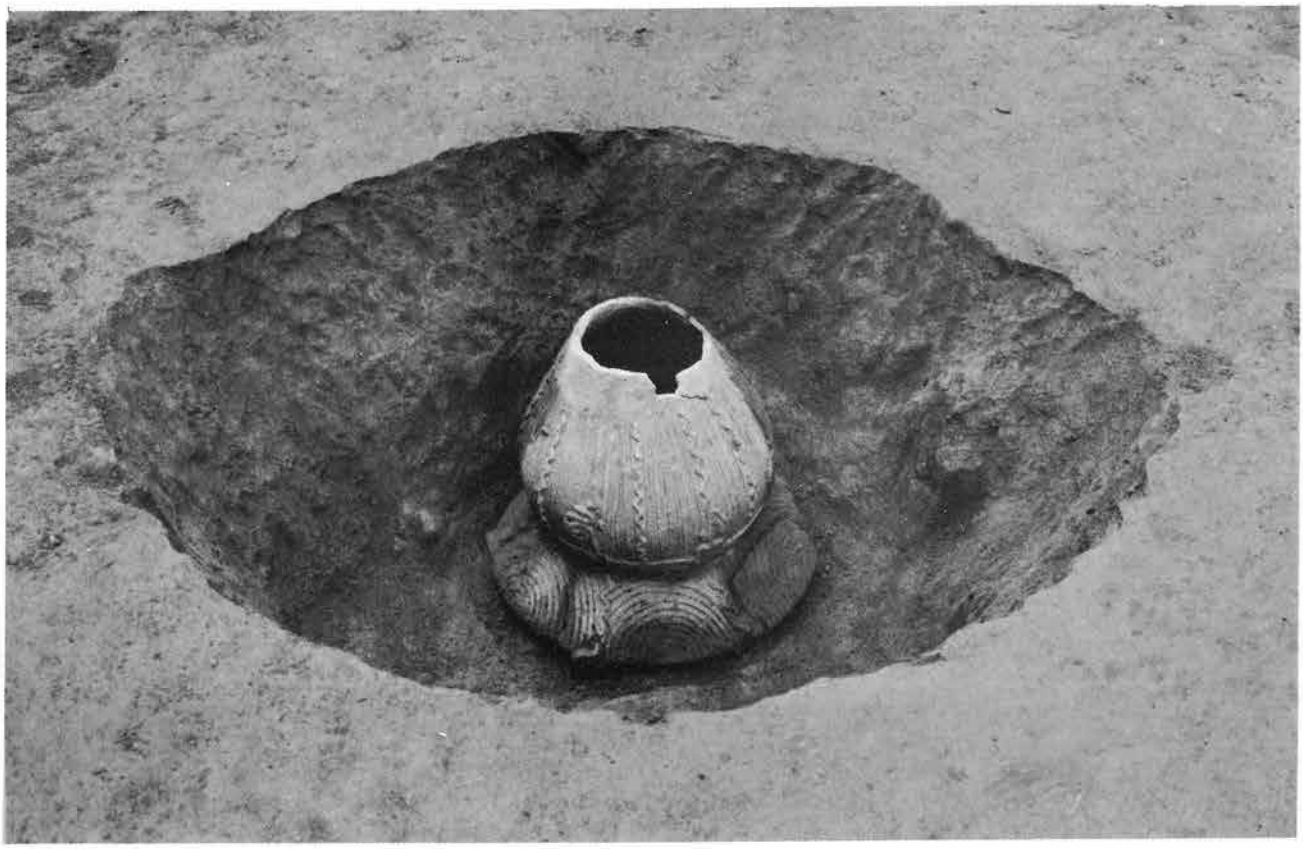
第 2 号住居跡（深鉢形土器と石皿）



第 2 号住居跡（伏甕の検出状況・南側より）

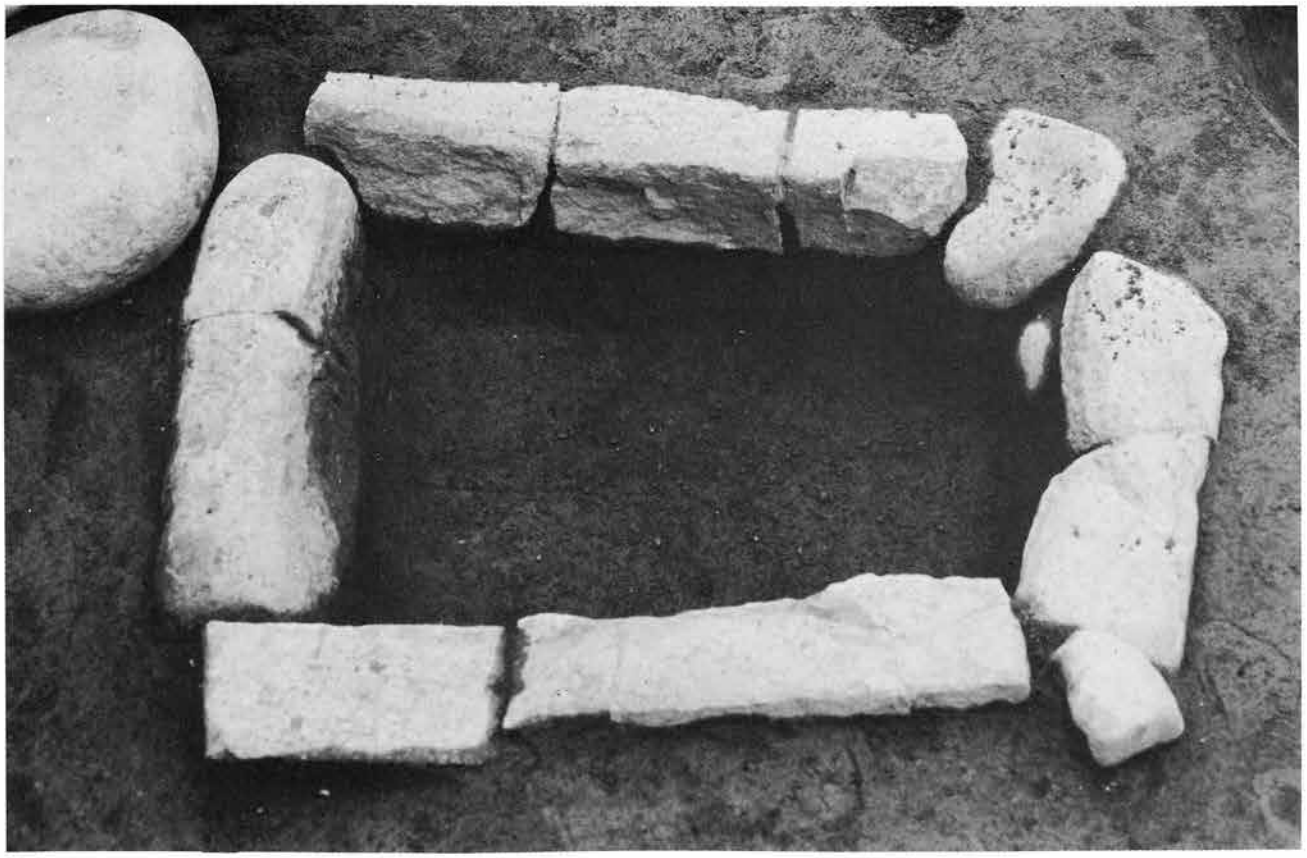


第 2 号住居跡（伏甕と石囲い炉・東側より）



第 2 号住居跡（伏甕と掘り方・南側より）

図版10



第２号住居跡（石囲い炉）

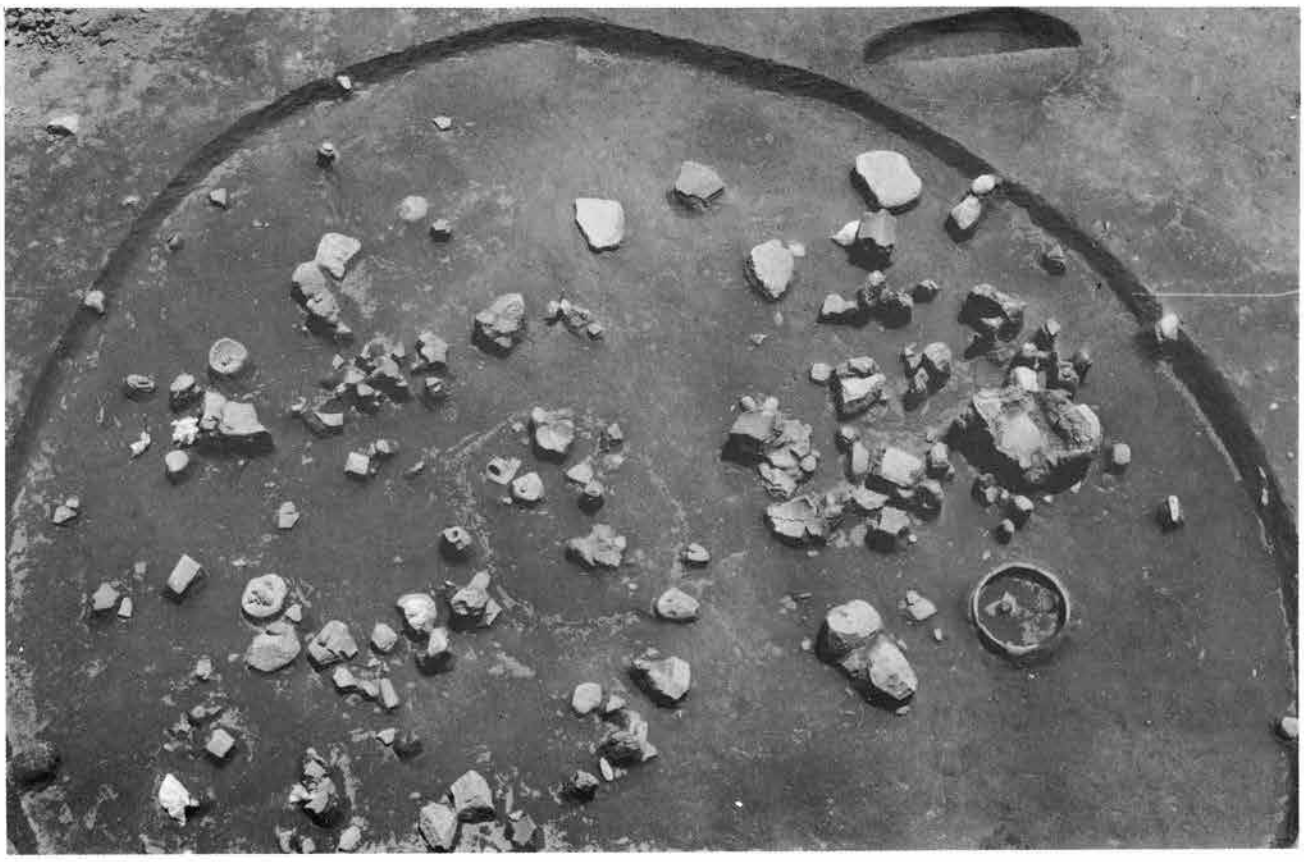
第２号住居跡（完掘した状態・西上方より）

第3号住居跡（確認状況・東側より）

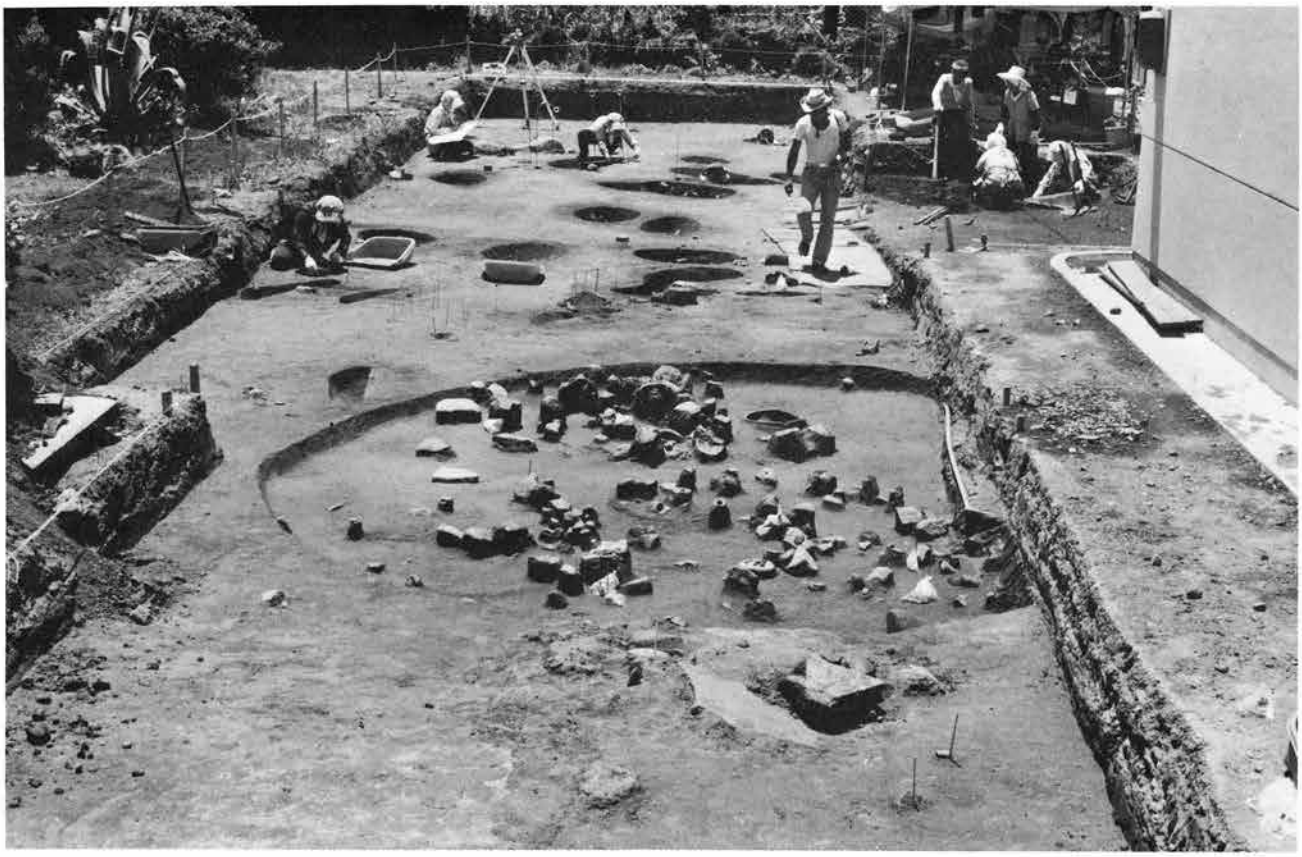
第3号住居跡（調査風景・北側より）

図版12

第3号住居跡（調査風景・西上方より）



第3号住居跡（遺物の検出状況・西上方より）



第3号住居跡（遺物の検出状況・北側より）

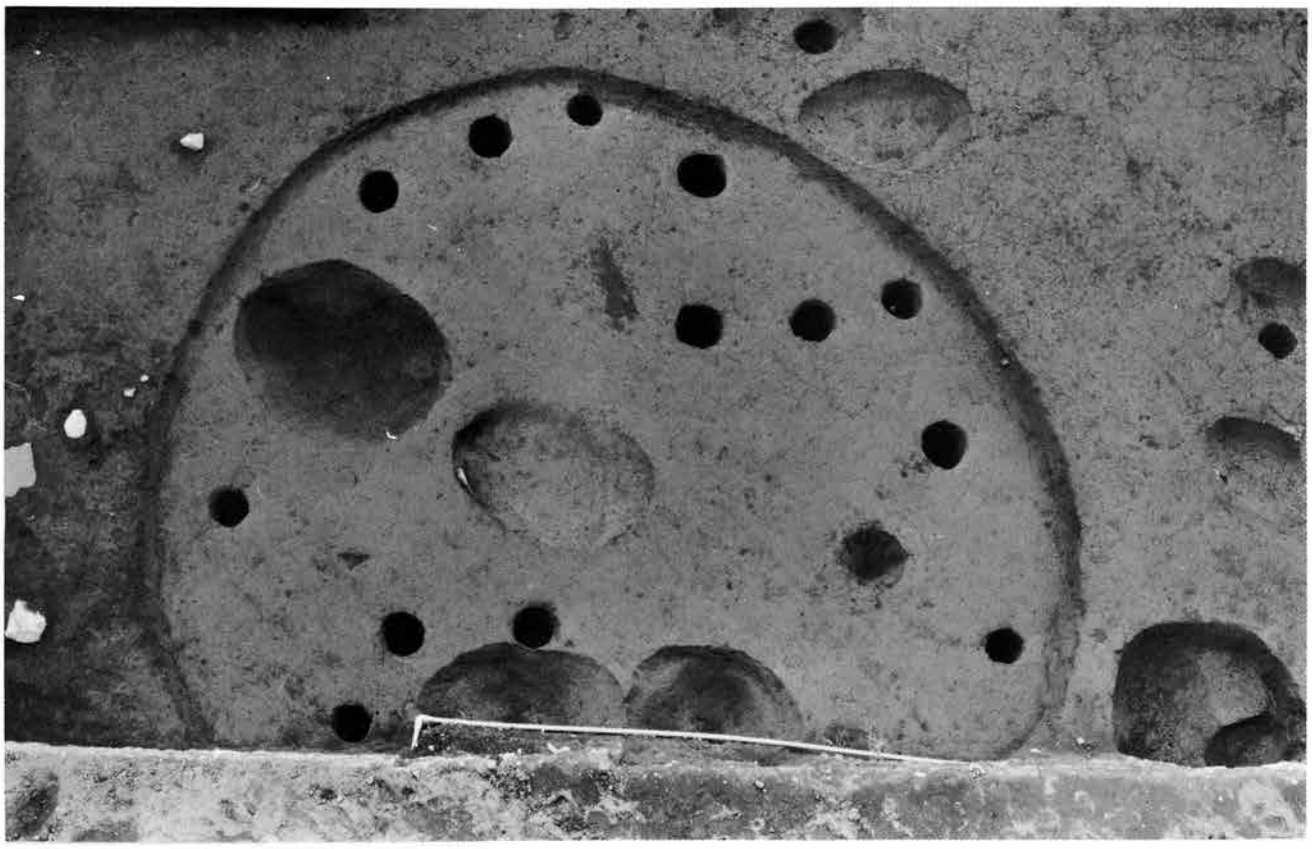
第3号住居跡（深鉢形土器）

図版14

第3号住居跡（埋甕）

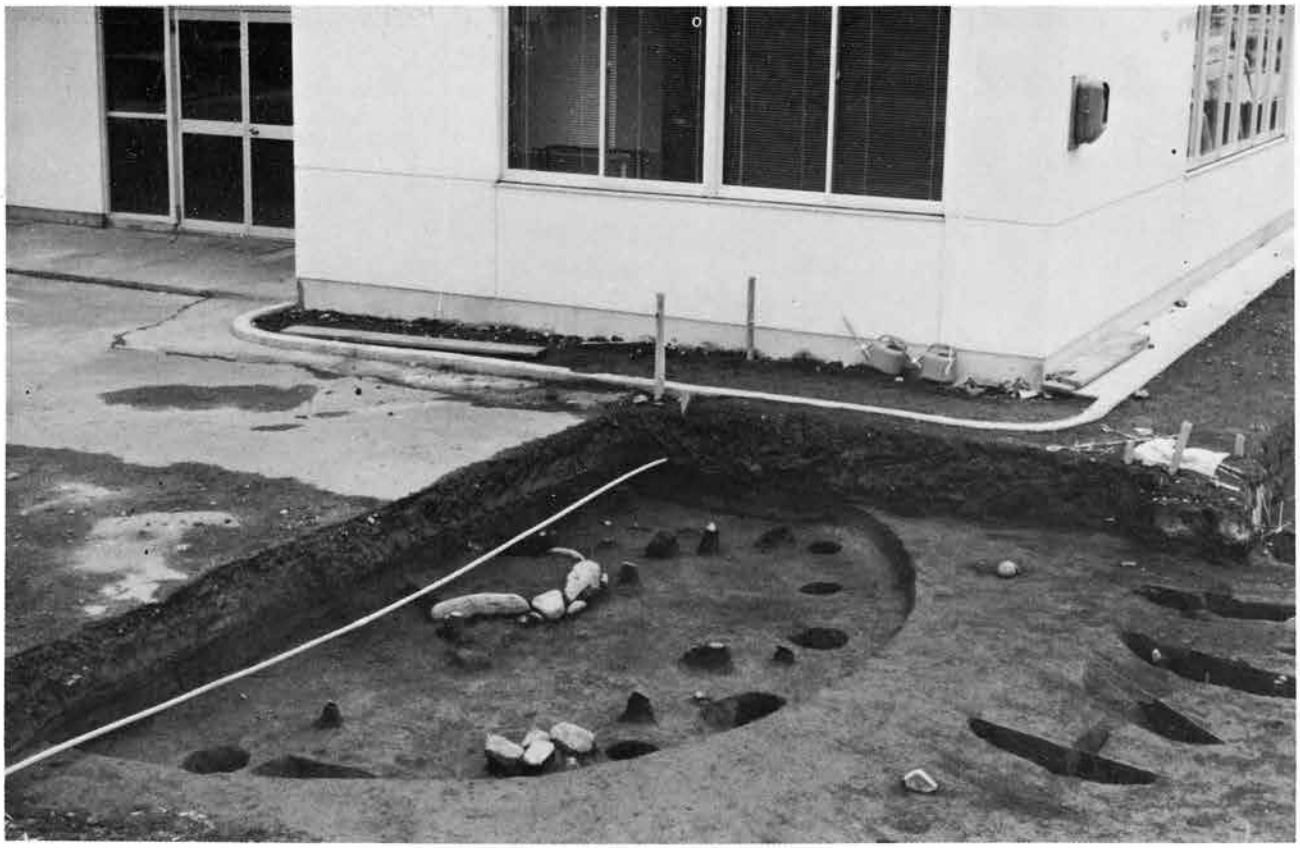
第3号住居跡（第2号炉）

第3号住居跡（完掘した状態・南側より）－1



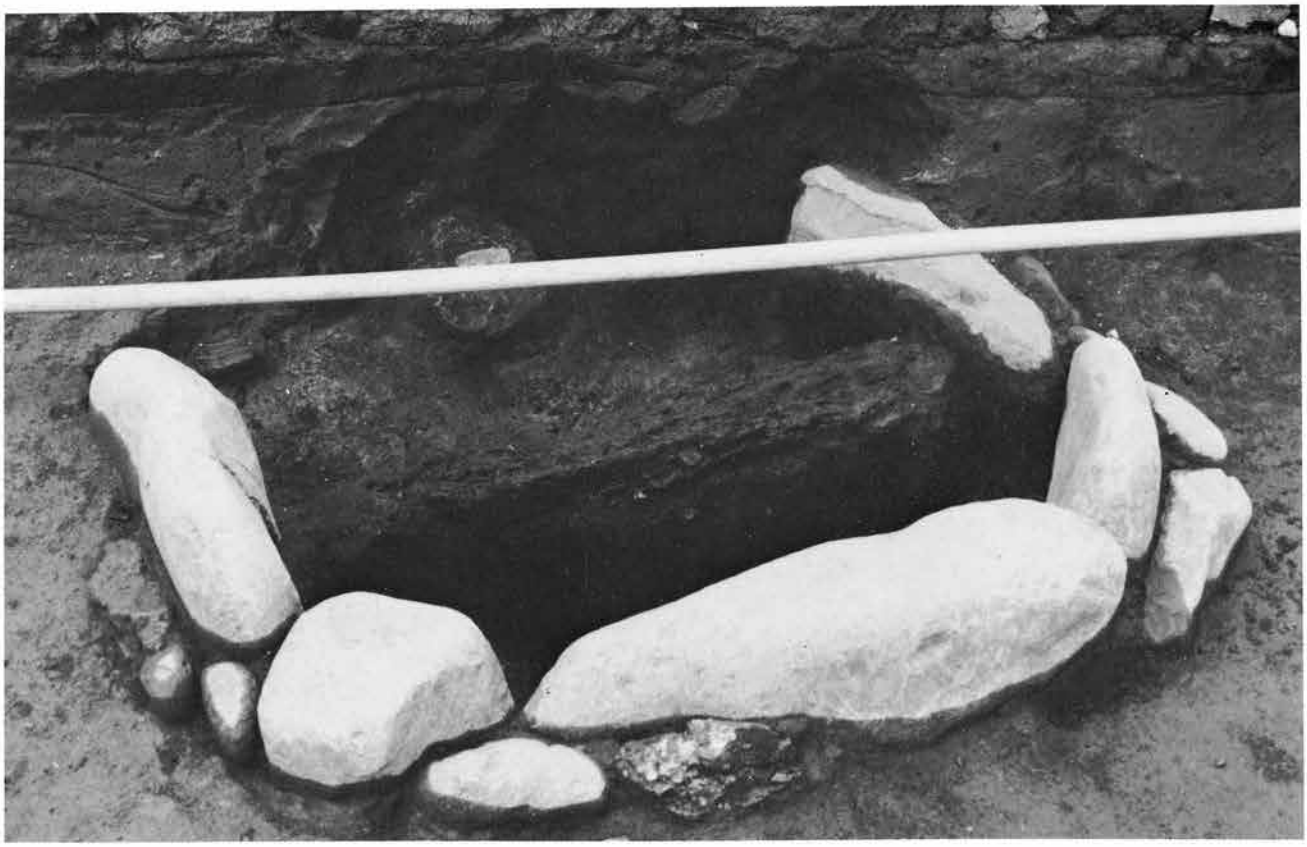
第3号住居跡（完掘した状態・西上方より）－2

図版16

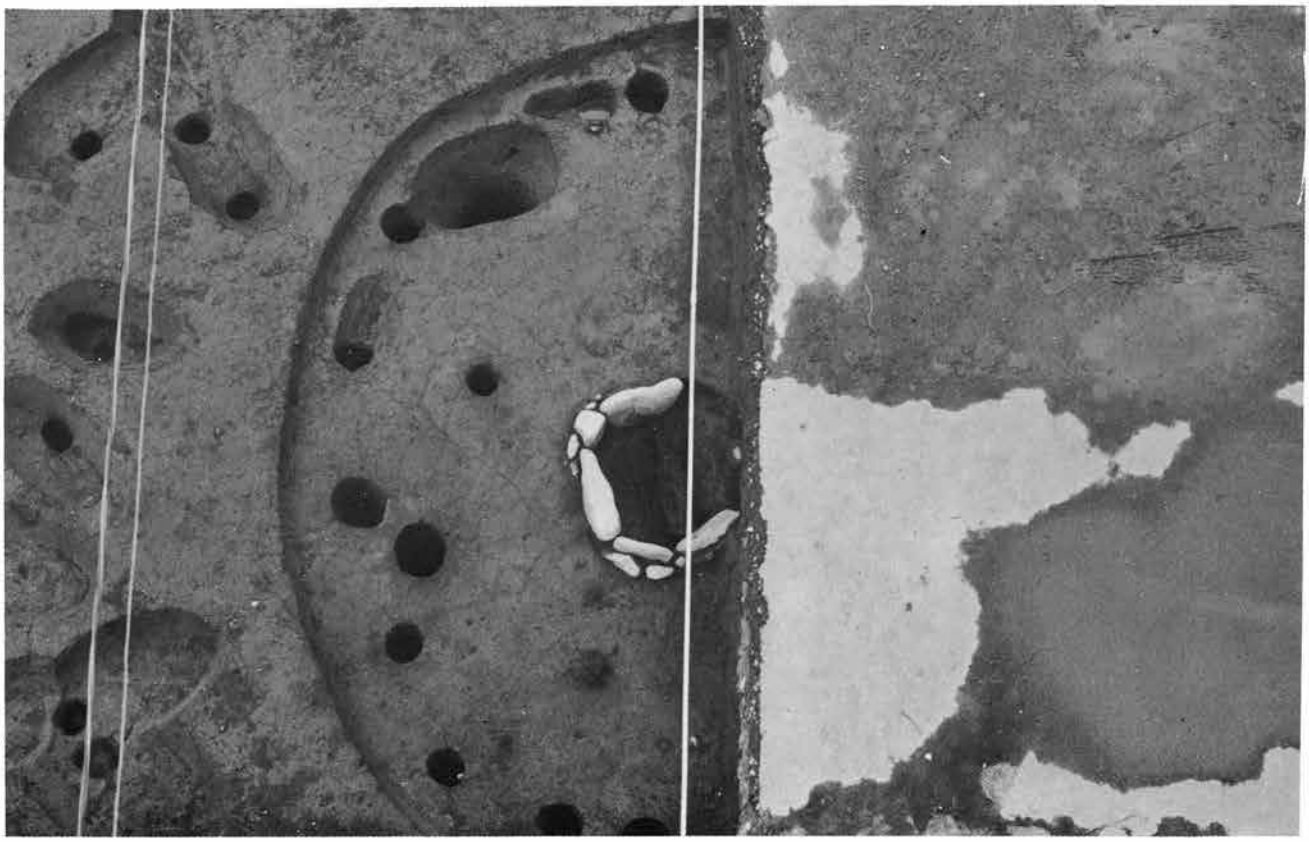


第4号住居跡（検出状況・南東側より）

第4号住居跡（石囲い炉の状況）

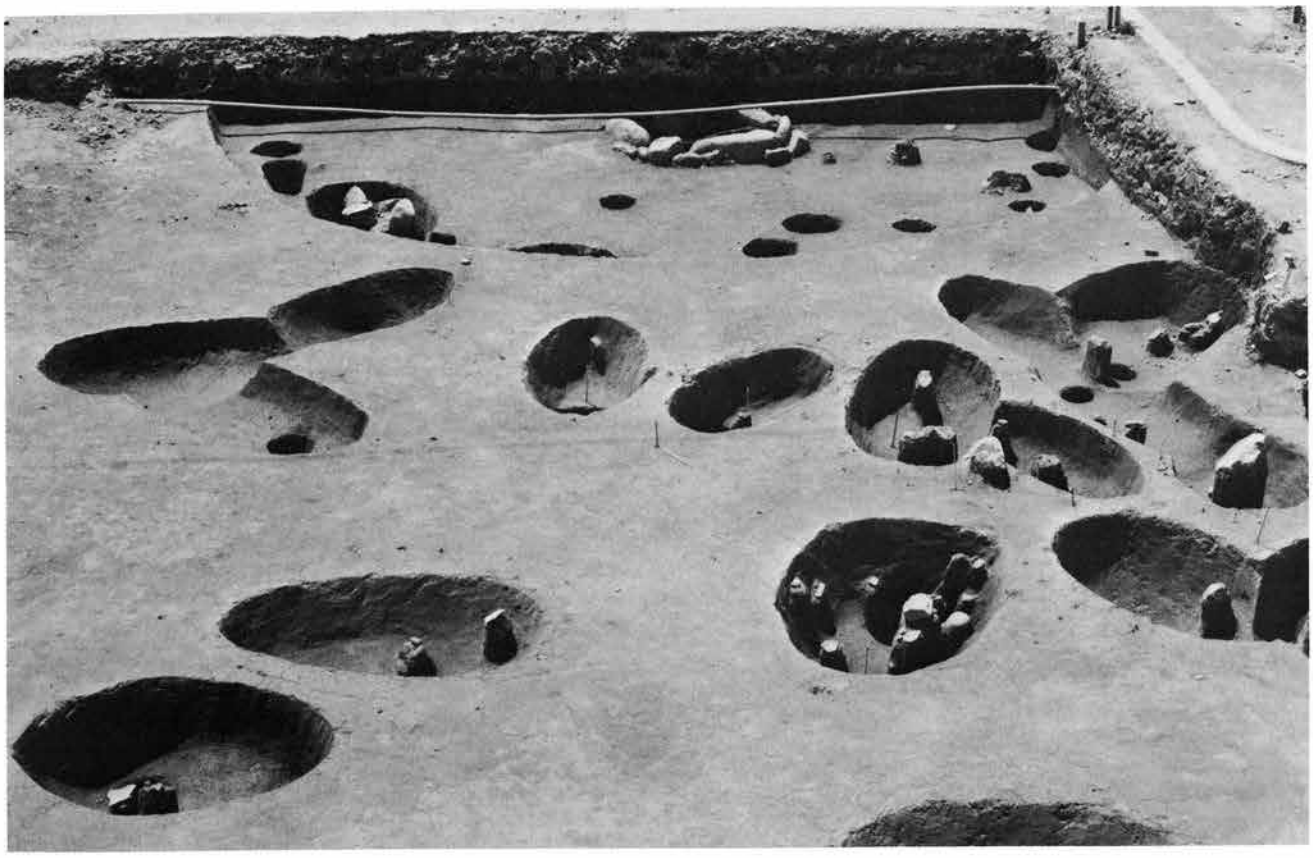


第4号住居跡（石囲い炉に残された炭化材）



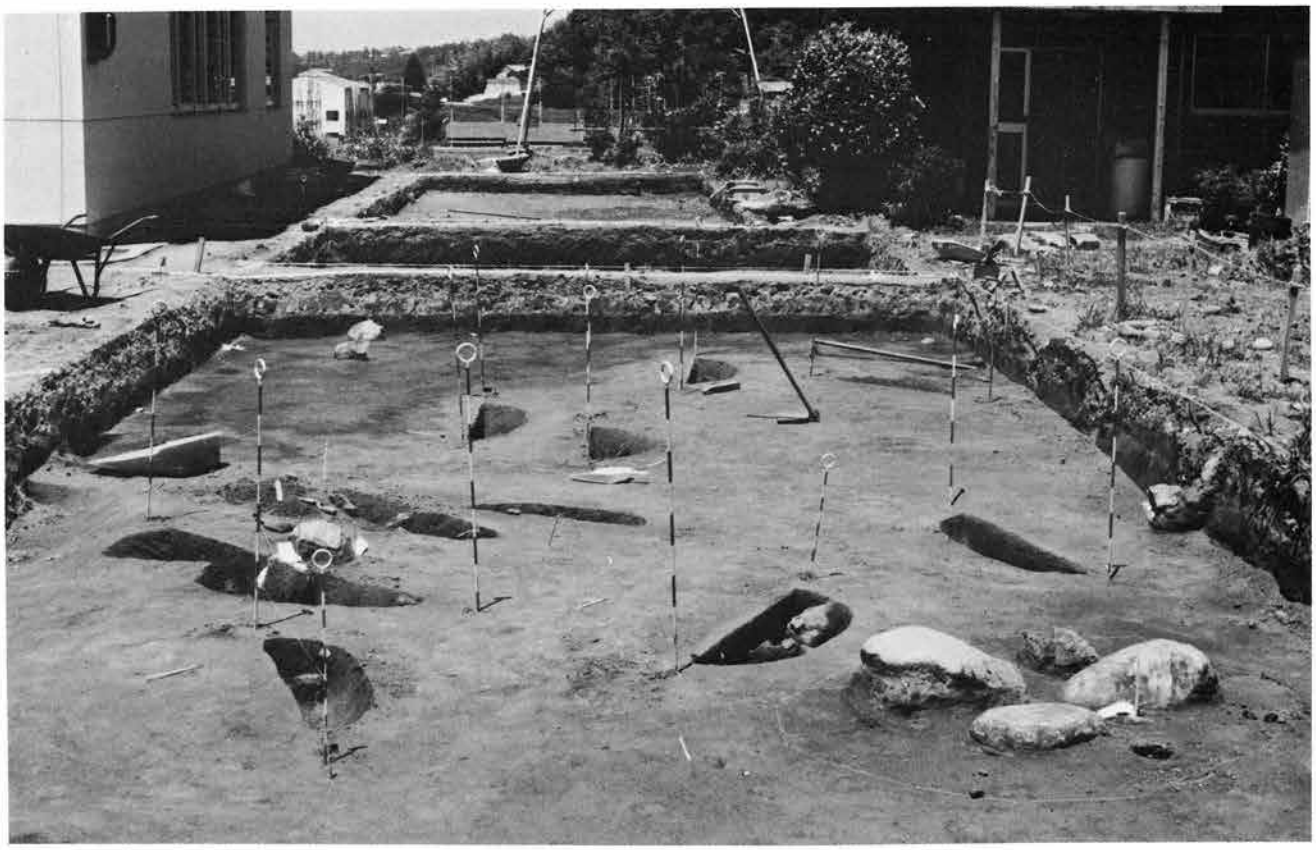
第4号住居跡（完掘した状態・北上方より）

図版18



土坑（C，D，E，F群・東側より）

土坑（A，B，C，D群・南側より）



土坑（B，D，F，G群・南側より）

土坑（F群・南側より）

図版20

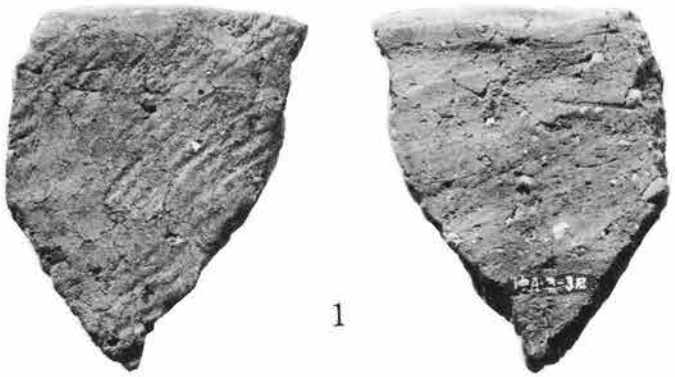
土坑（B，C，D，F，G群・南側より）

土坑（G群・南側より）

遺構全景（南側より）

図版22

予備調査・第Ⅰ次調査出土の縄文時代草創期土器



1

2

3

4

5

6

7

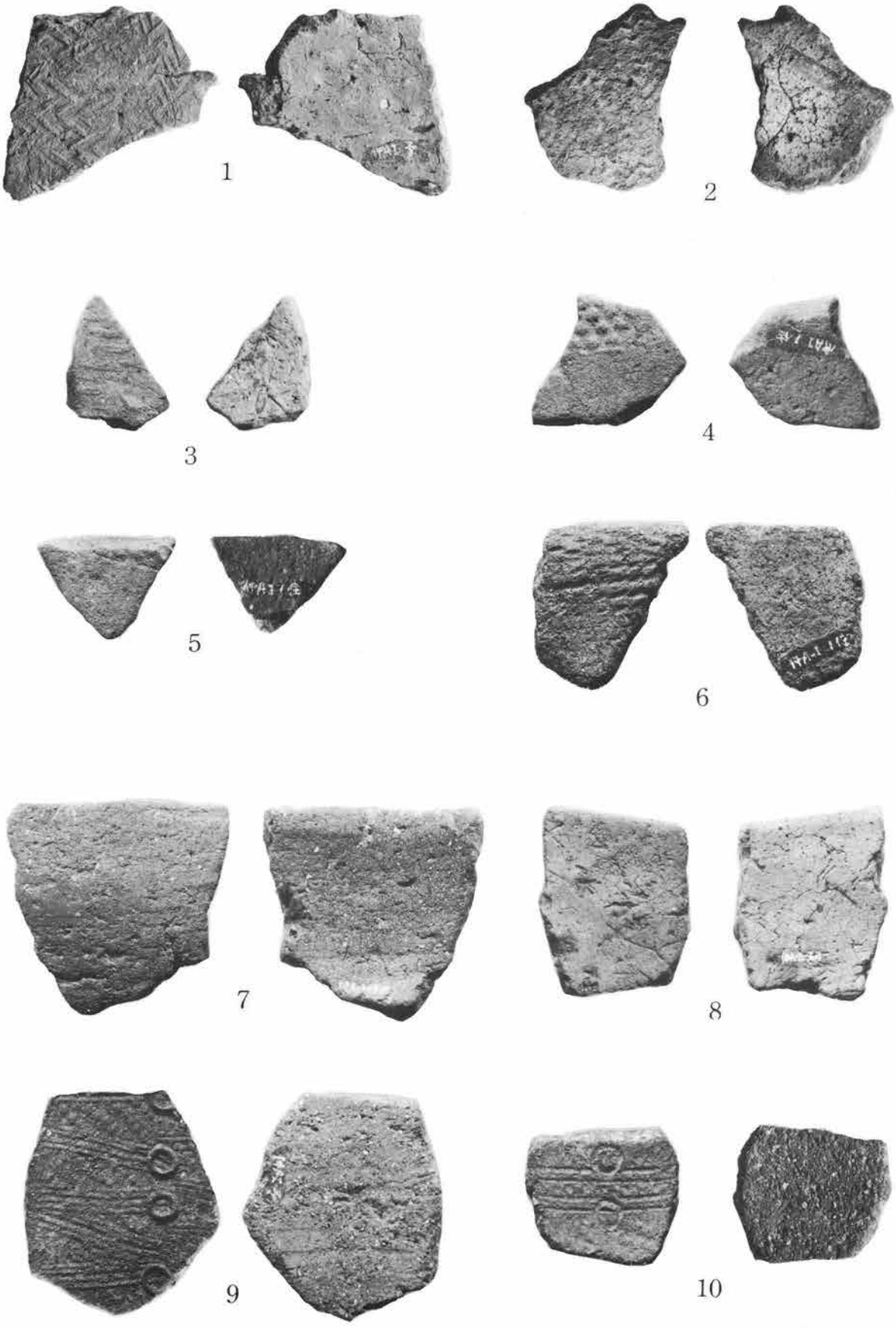
8

9

10

第Ⅰ次調査出土の縄文時代草創期・早期土器

図版24



第Ⅰ次調査出土の縄文時代 早期・前期土器

1

2

3

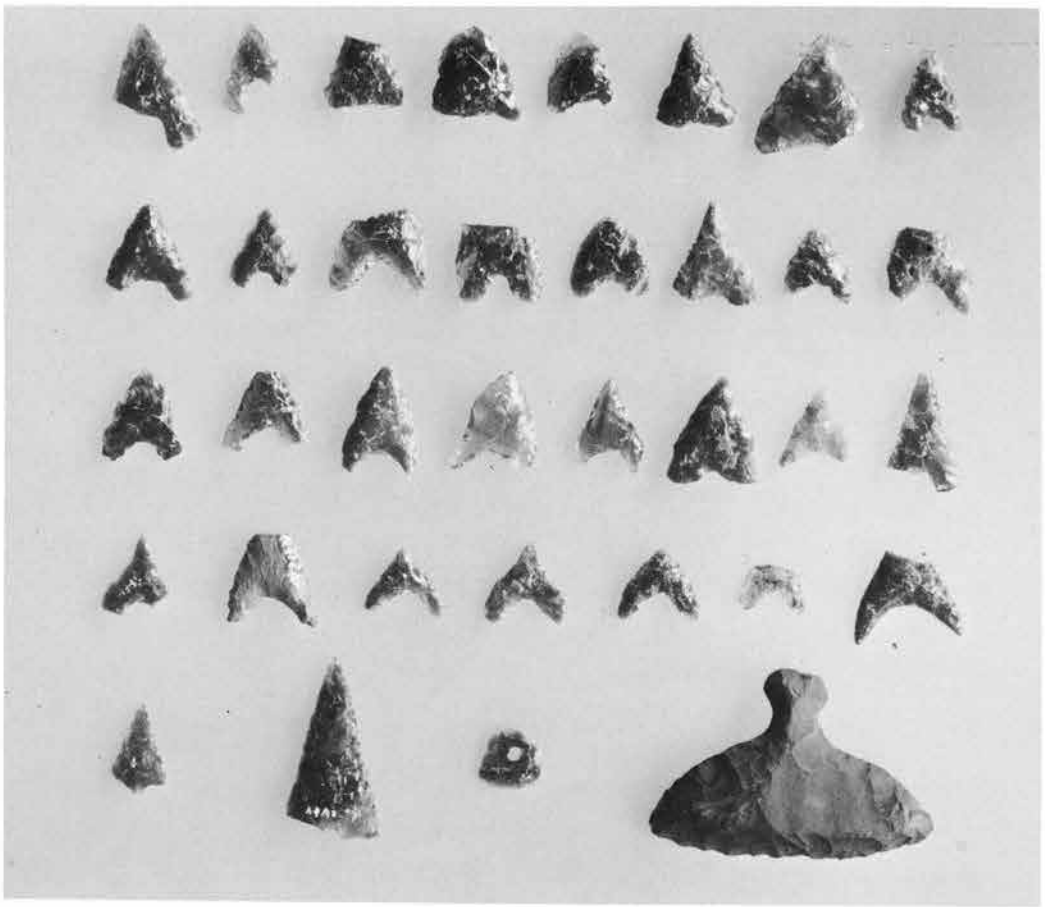
4

5

第Ⅰ次調査出土の縄文時代中期土器（1）

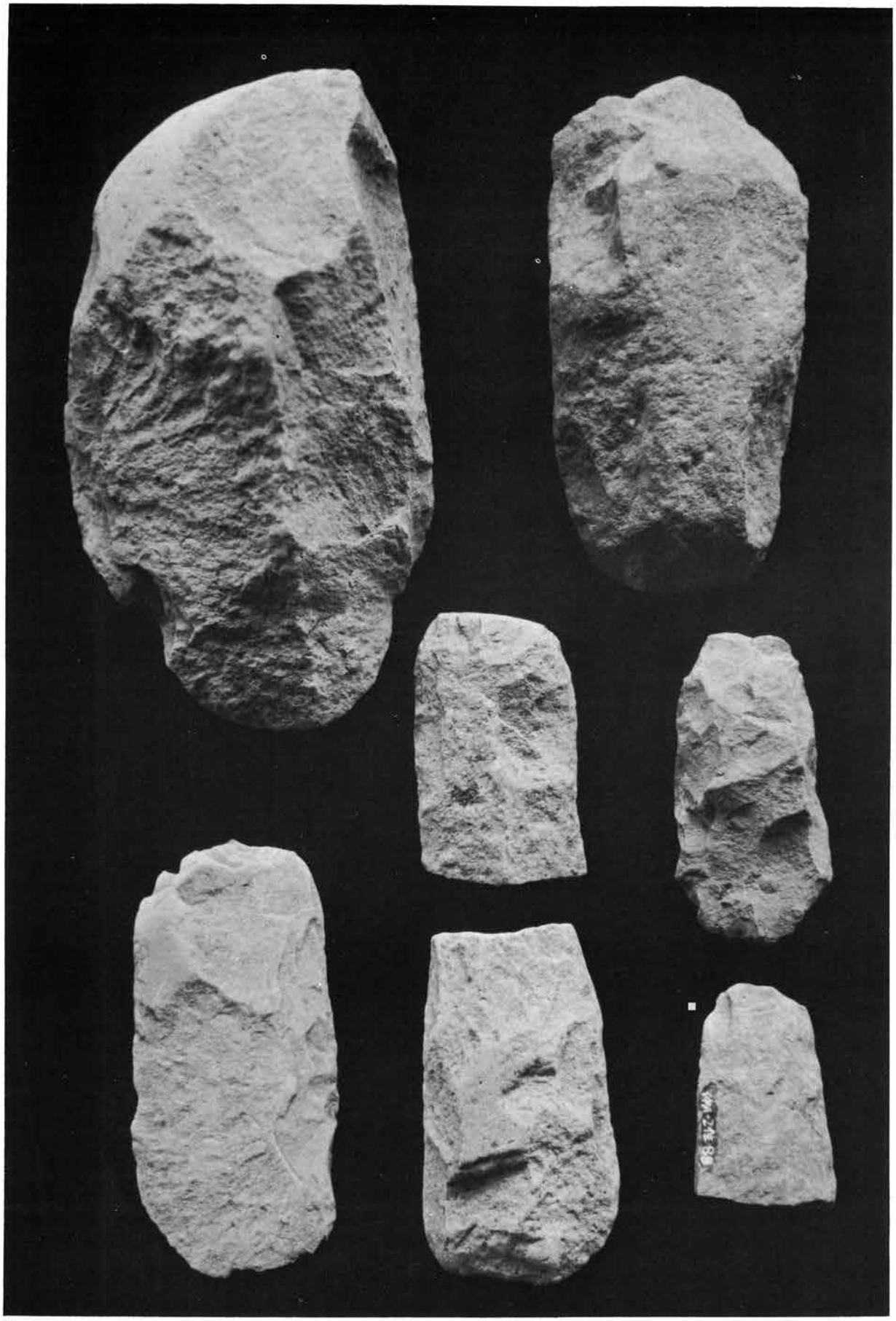
図版26

第Ⅰ次調査出土の縄文時代中期土器（２）

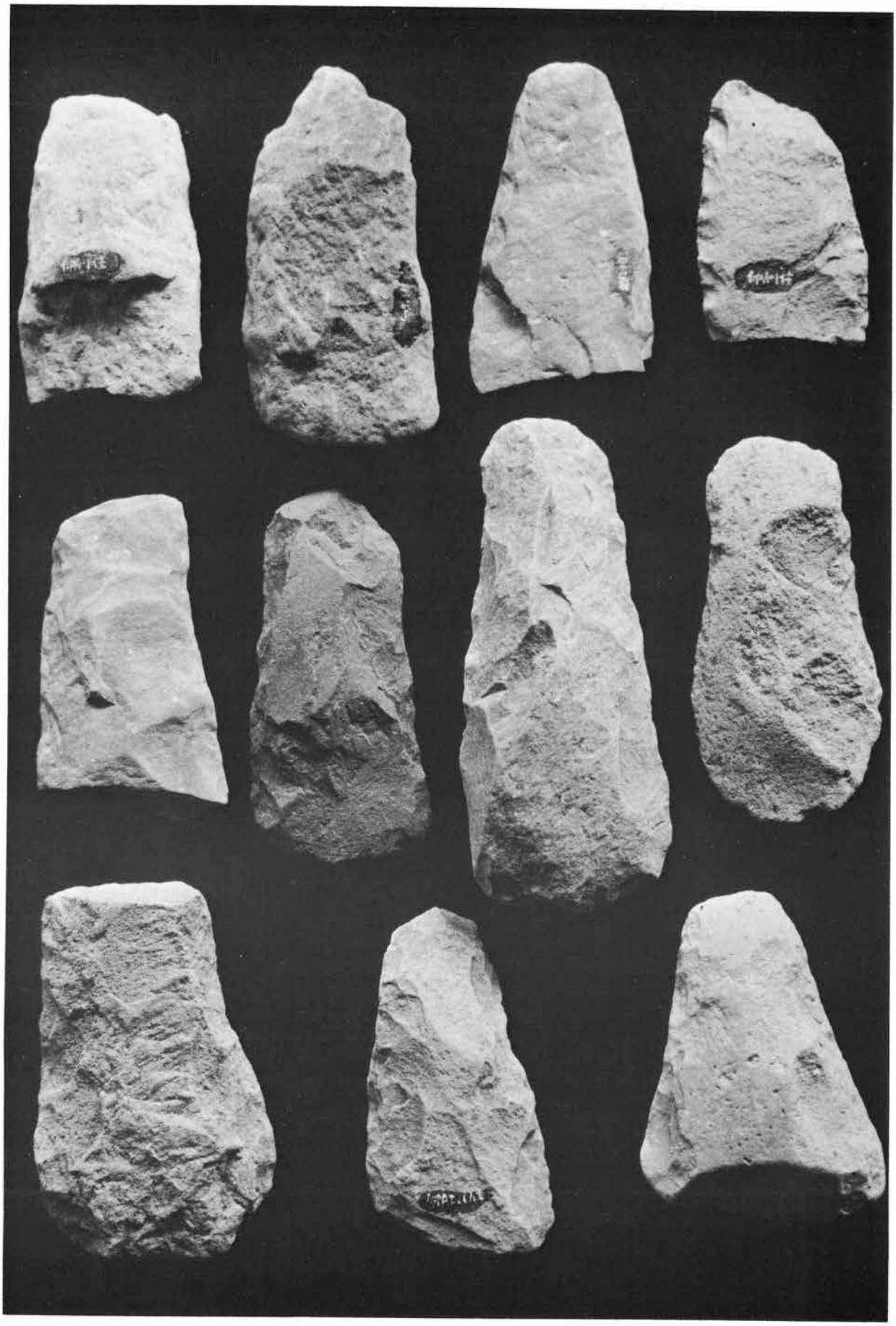


第Ⅰ次調査出土の石器（１）

図版28

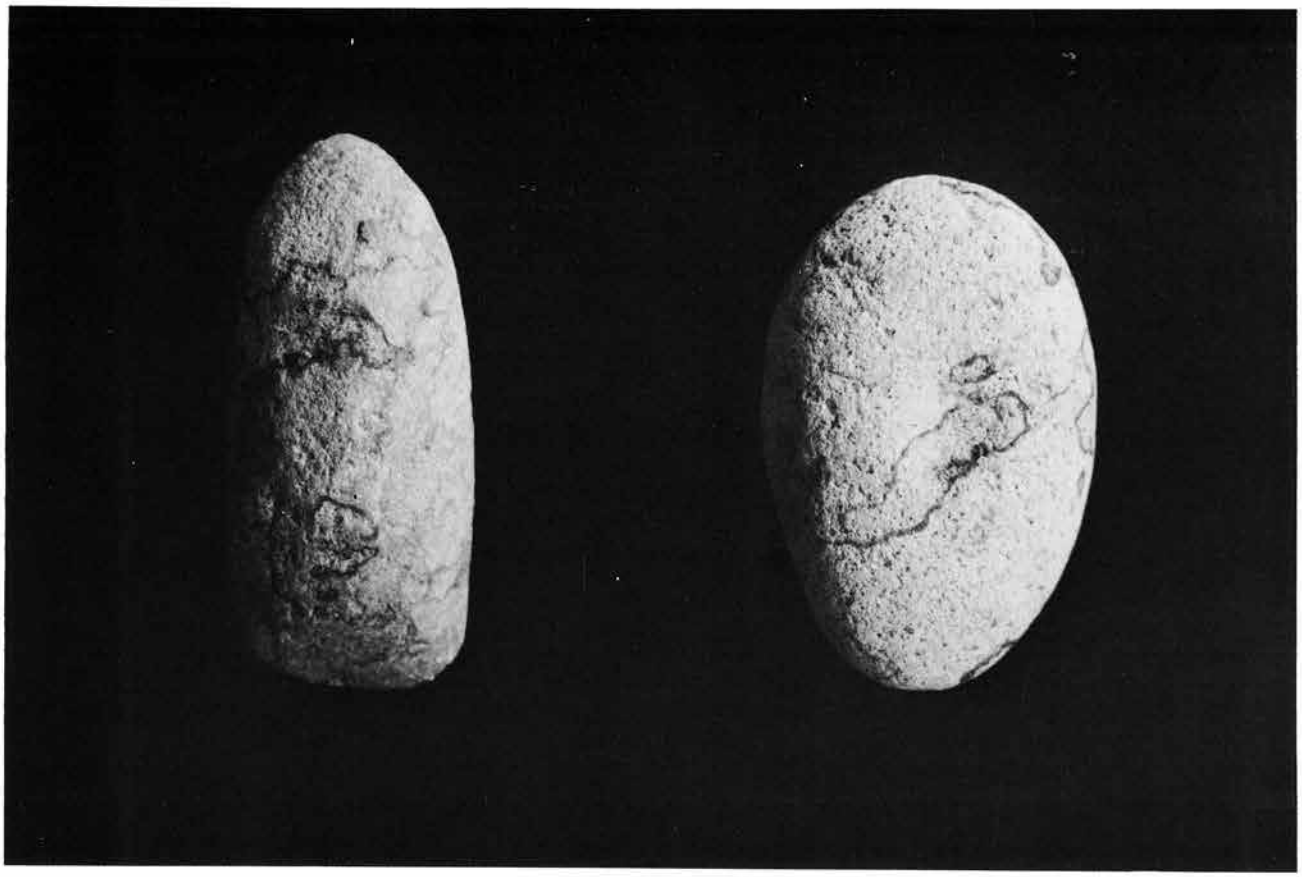


第Ⅰ次調査出土の石器（２）

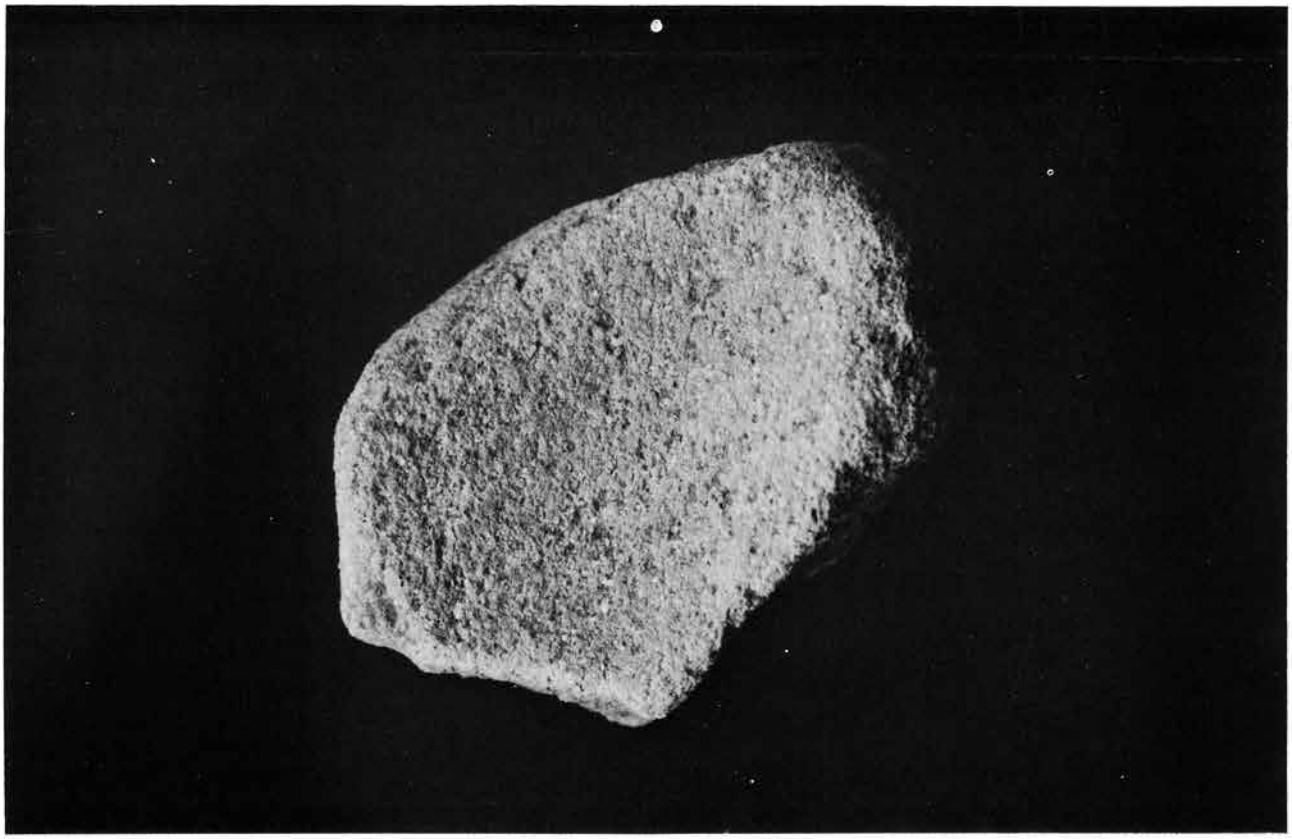


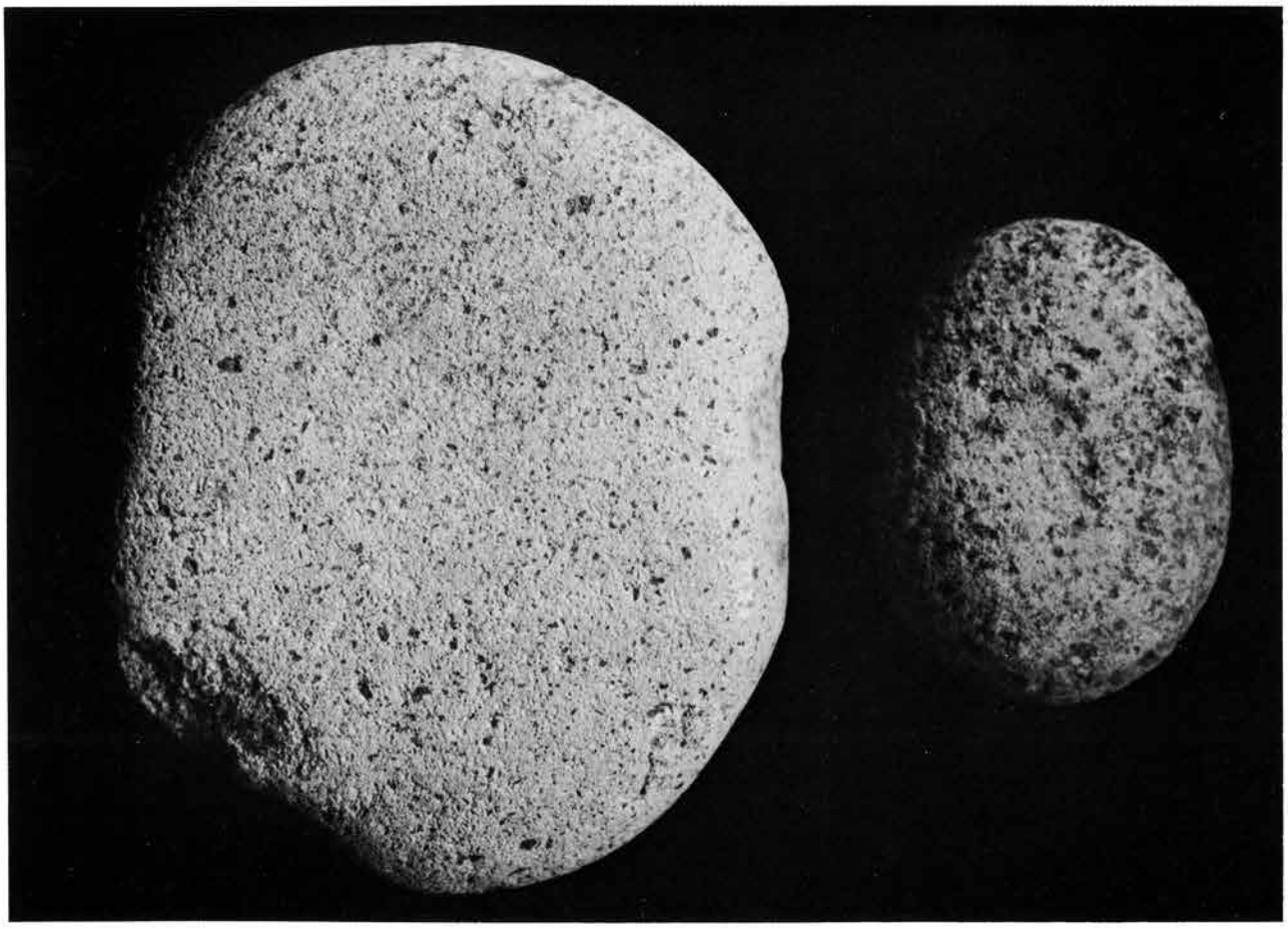
第Ⅰ次調査出土の石器（３）

図版30



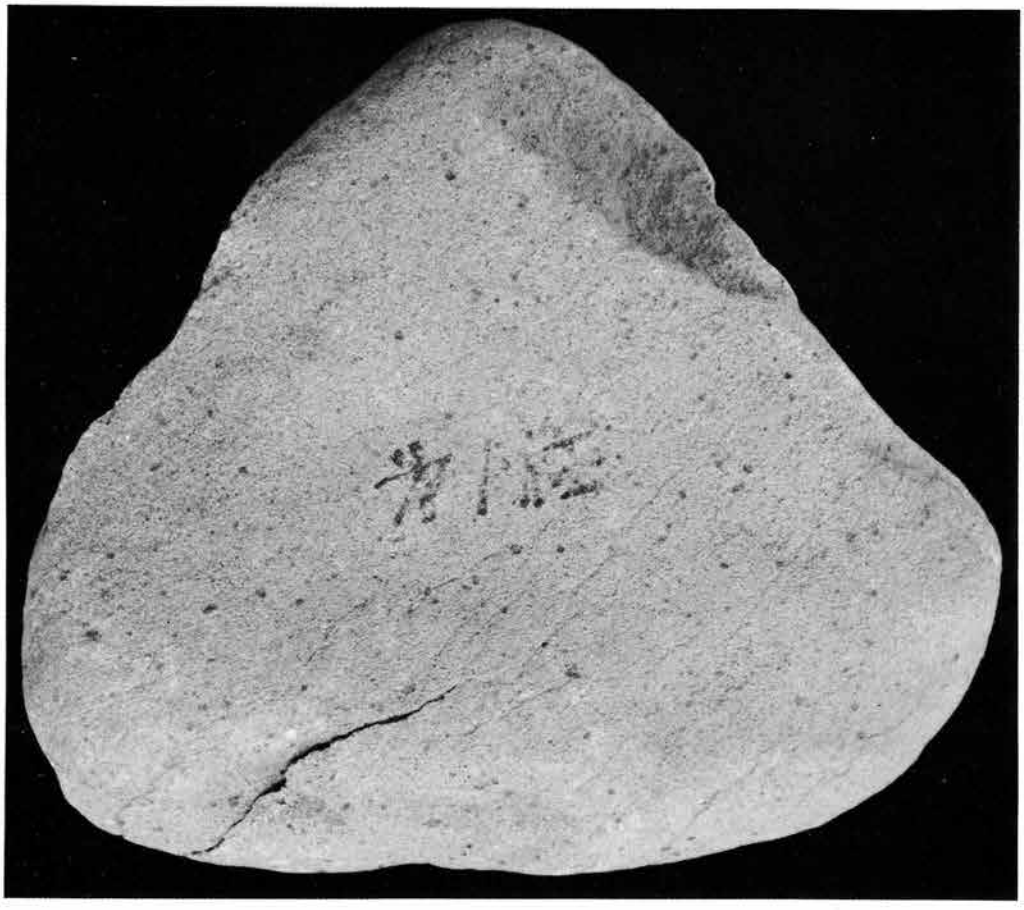
第Ⅰ次調査出土の石器（4）



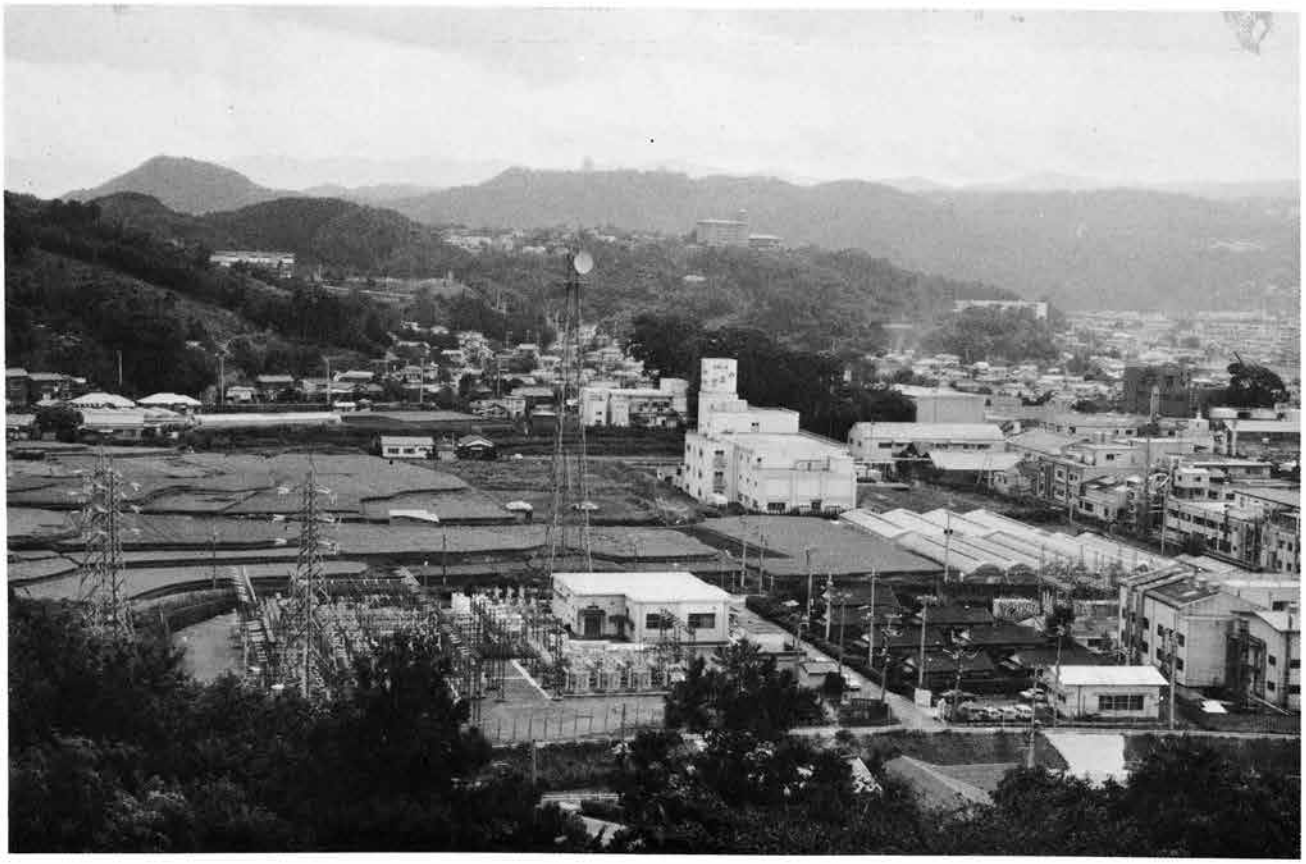


第Ⅰ次調査出土の石器（5）

図版32



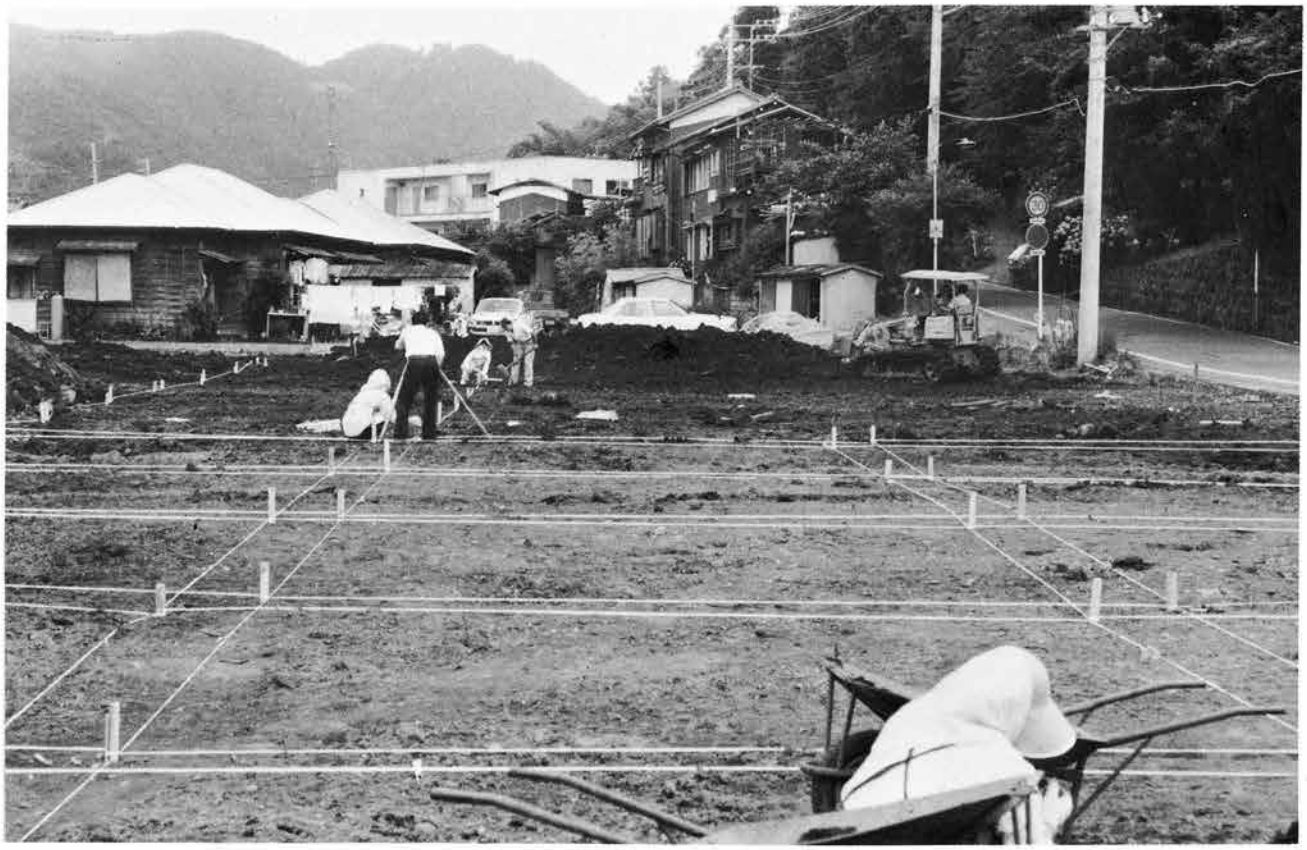
第Ⅰ次調査出土の石器（６）



仲道A遺跡の遠景（北方より）

第Ⅱ次調査区近景（西側より）

図版34



グリッドの設定（西側より）－1

グリッドの設定（東側より）－2

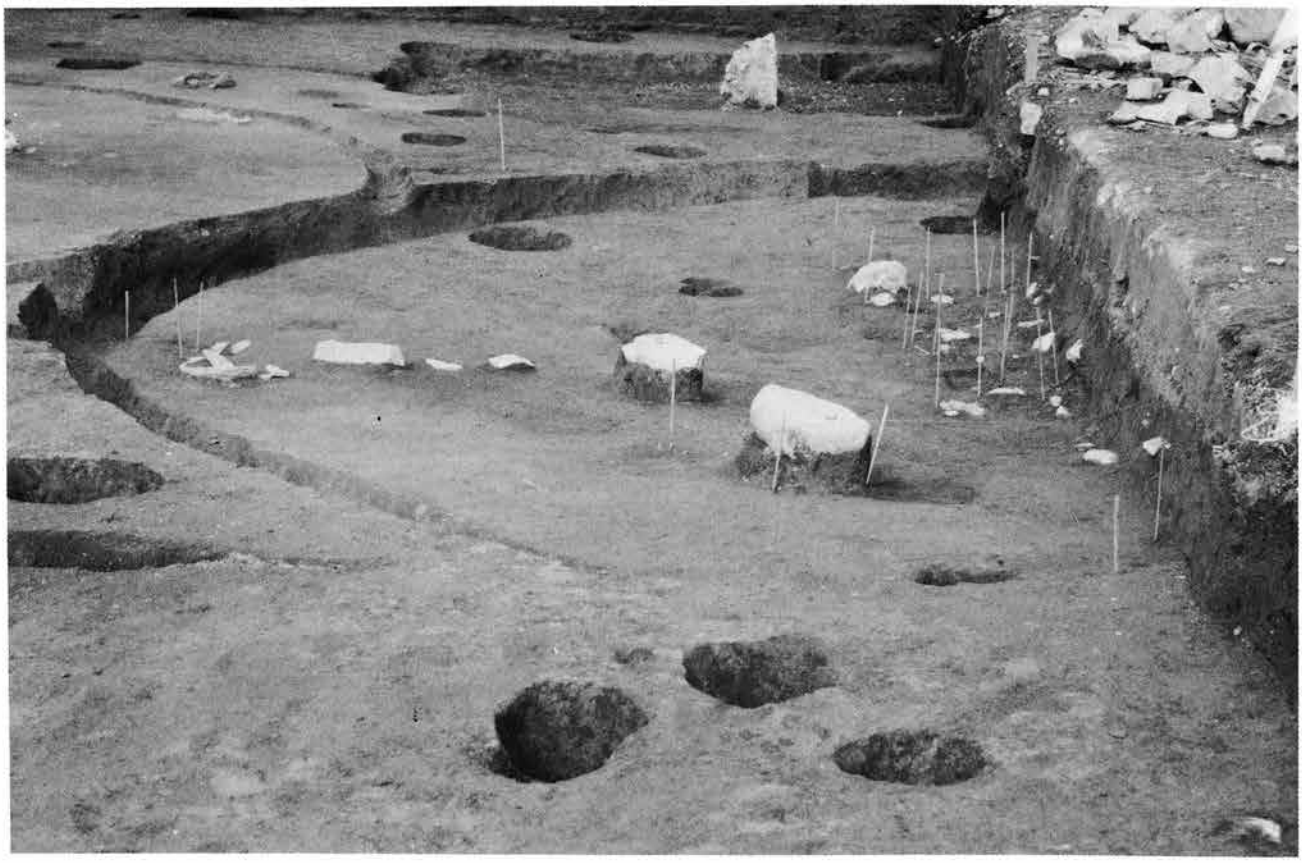
第1号住居跡（確認状況・東側より）－1

第1号住居跡（確認状況・北側より）－2

図版36

第1号住居跡（遺物の検出状況）－1

第1号住居跡（遺物の検出状況）－2



第1号住居跡（完掘した状態・西側より）－1

第1号住居跡（完掘した状態・西側より）－2

図版38

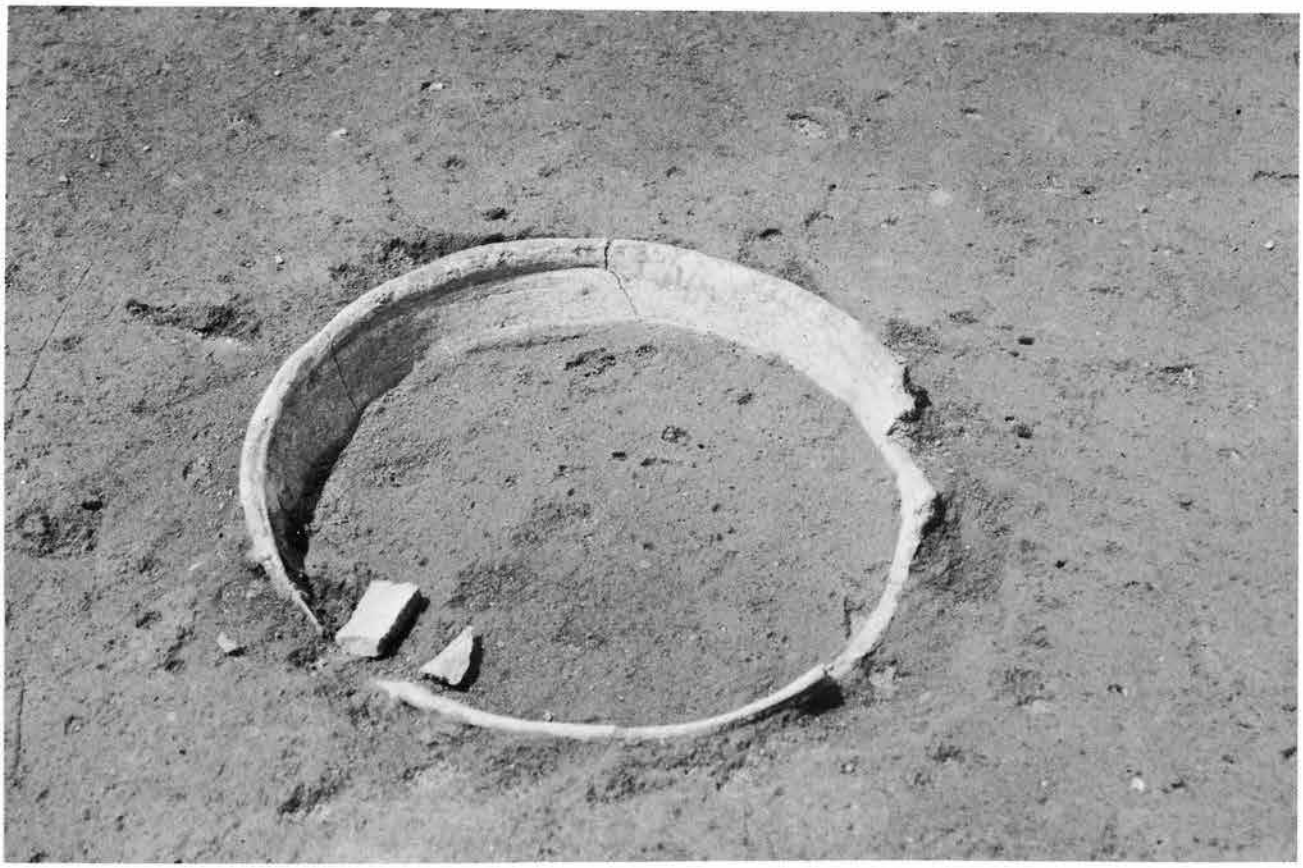
第1号住居跡（埋甕の検出状況）－1

第1号住居跡（埋甕と掘り方）－2

第2号・第3号住居跡（確認状況・南側より）

第3号住居跡（確認状況・西側より）

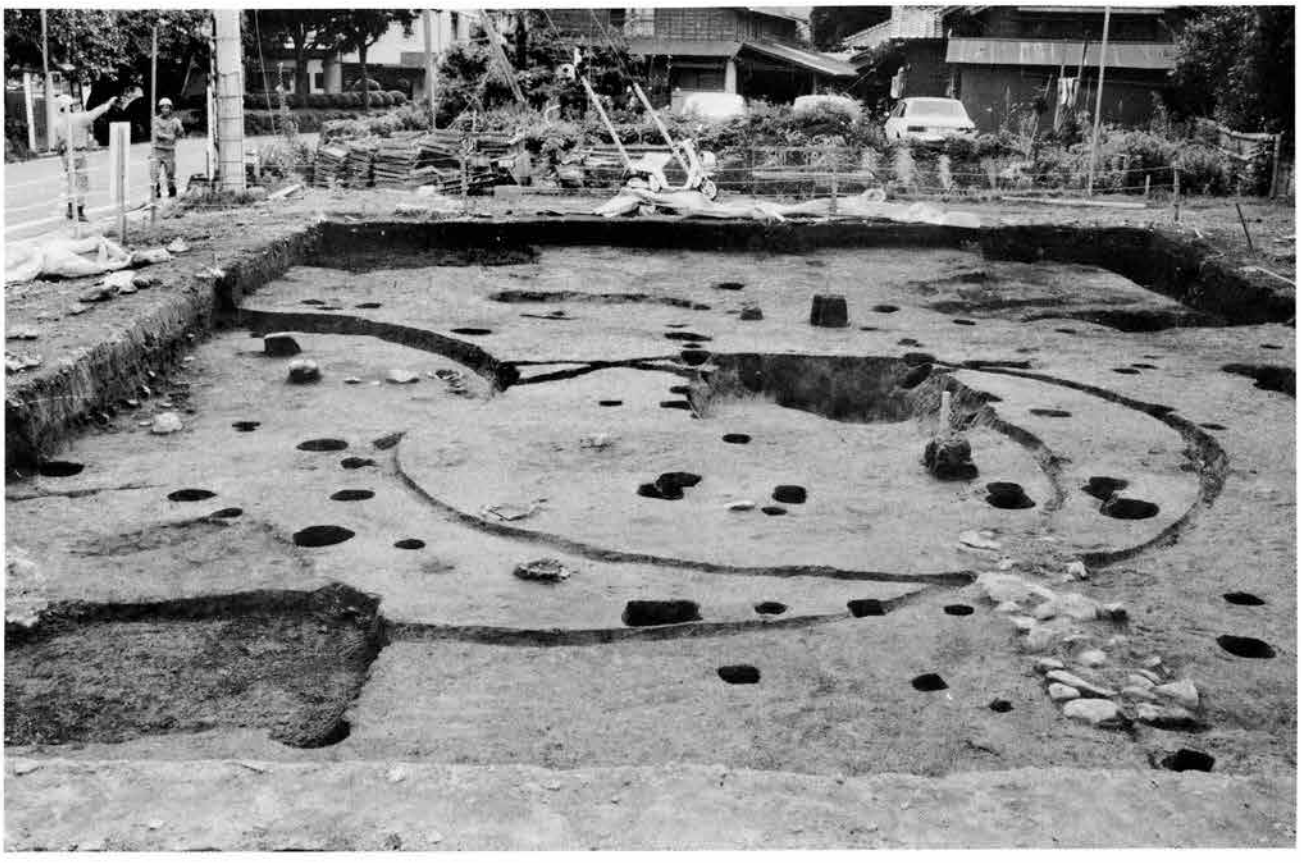
図版40



第3号住居跡（埋甕の検出状況）

第3号住居跡（埋甕と掘り方）

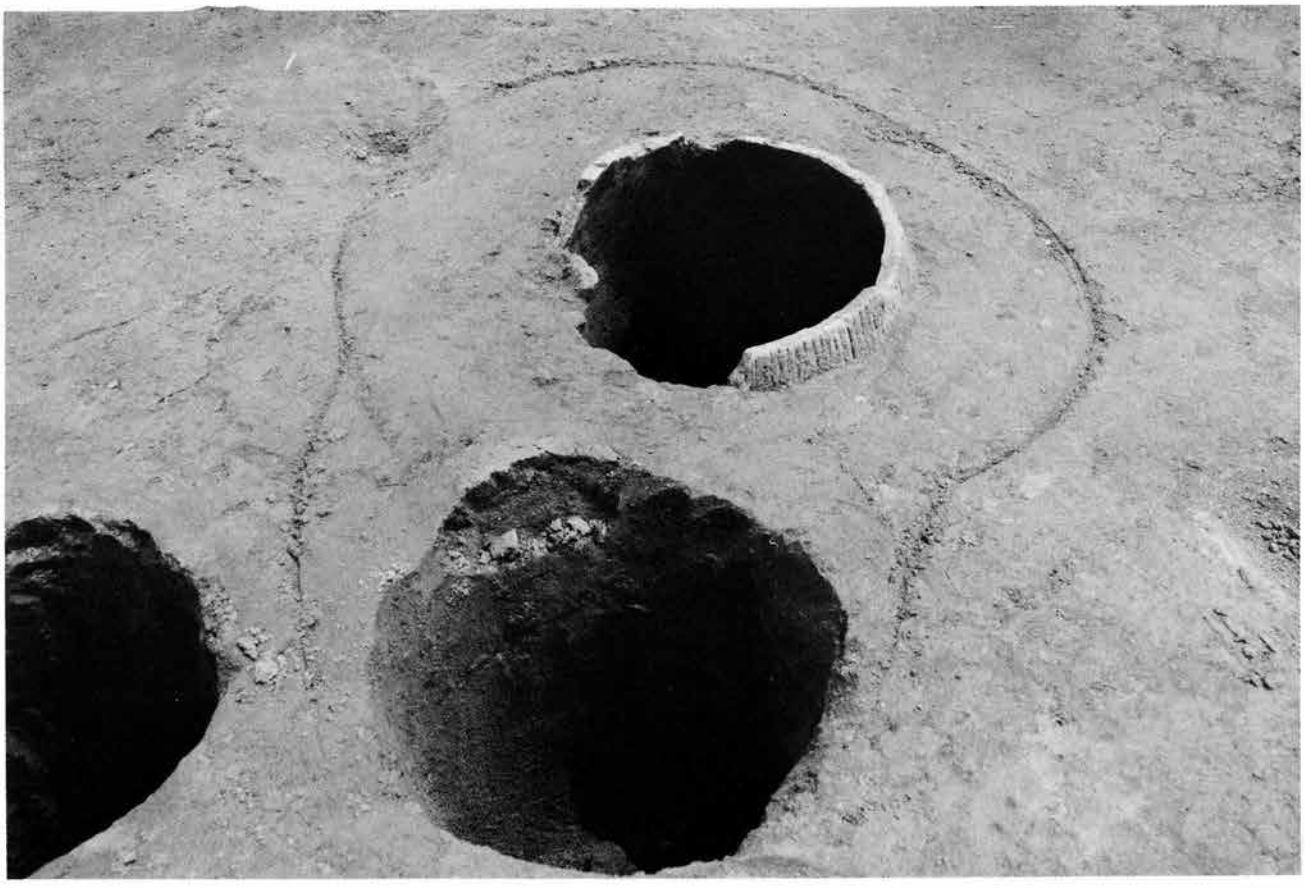
第１号・第２号・第３号住居跡（完掘した状態・西側より）



第１号・第２号・第３号住居跡（完掘した状態・東側より）

図版42

第4号住居跡（完掘した状態・西側より）



第4号住居跡（埋甕の検出状況）

第4号住居跡（完掘した状態・東側より）

第5号住居跡（完掘した状態・東側より）

図版44

第6号住居跡（確認状況・西側より）

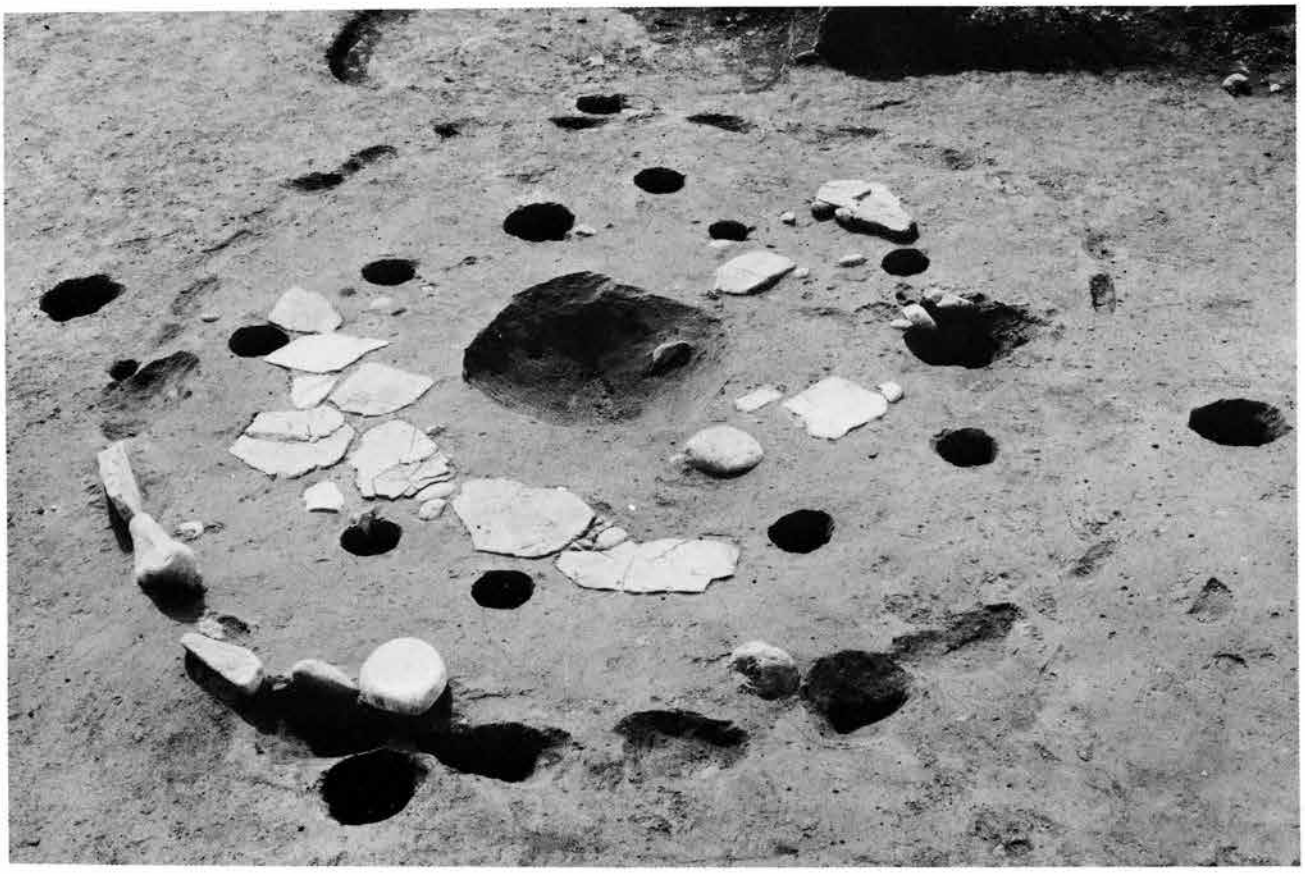
第6号住居跡（東側より）

第6号住居跡（実測風景）

第6号住居跡（完掘した状態・北西側より）

図版46

第6号住居跡（炉の状態・南側より）

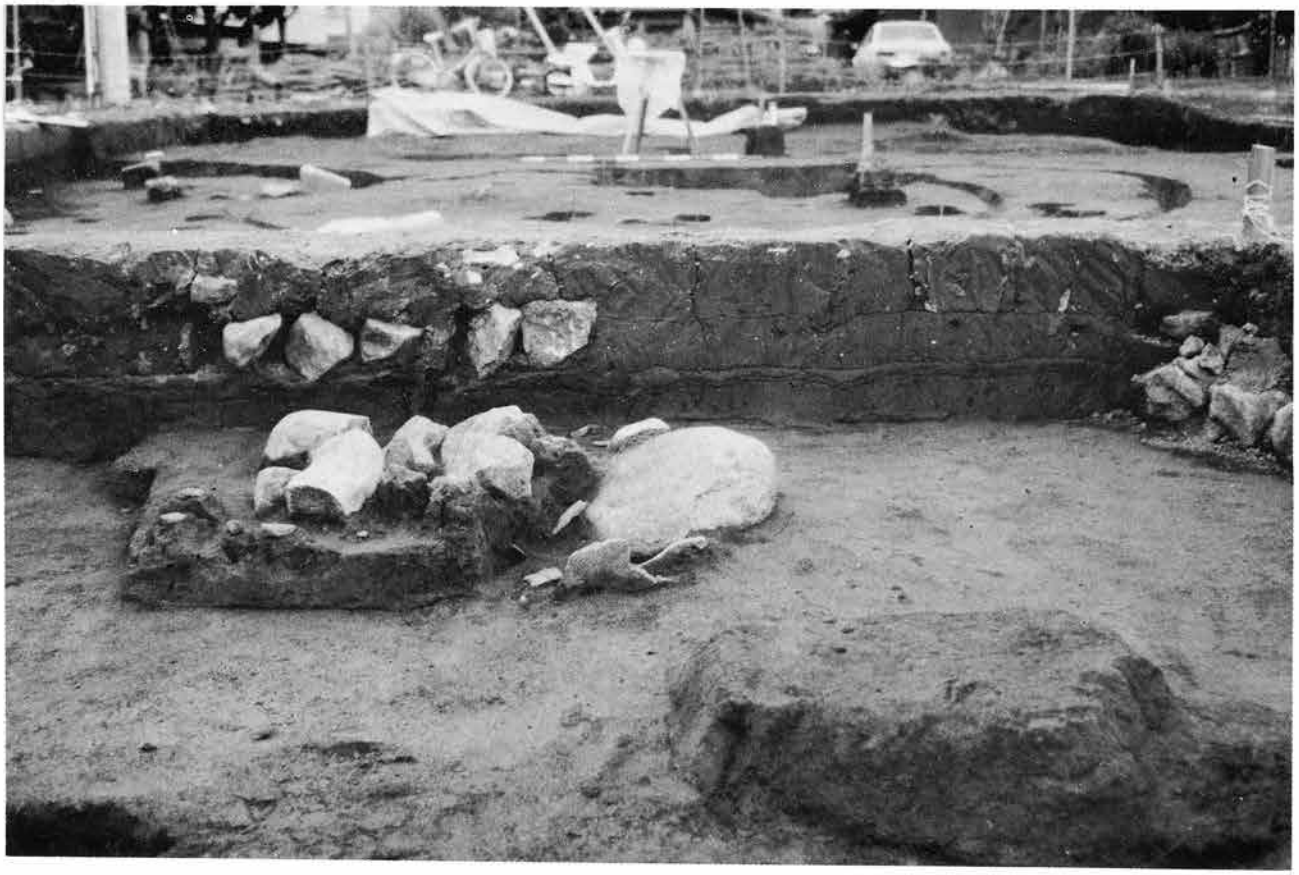


第6号住居跡（完掘した状態・東側より）

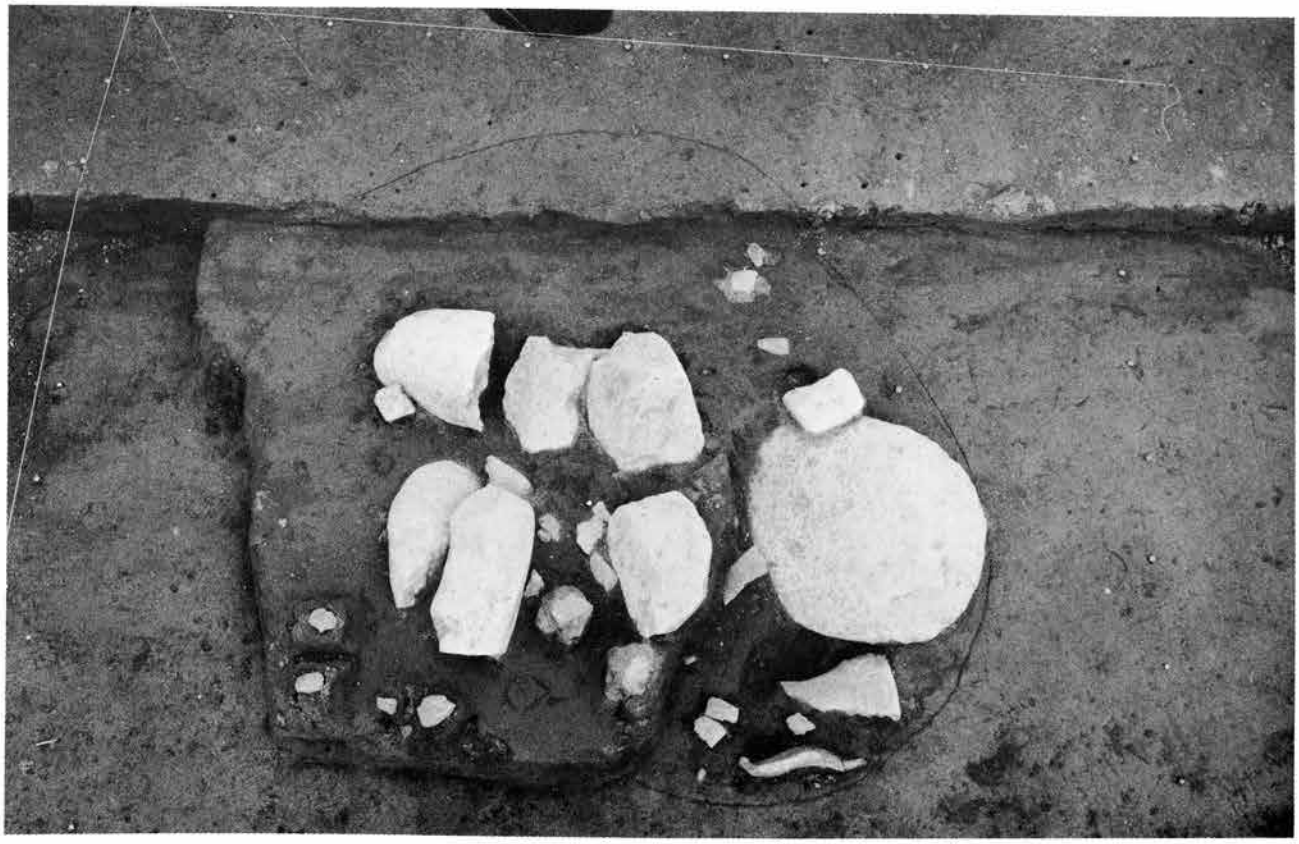
第7号住居跡の一部（西側より）

第7号住居跡の一部（南側より）

図版48

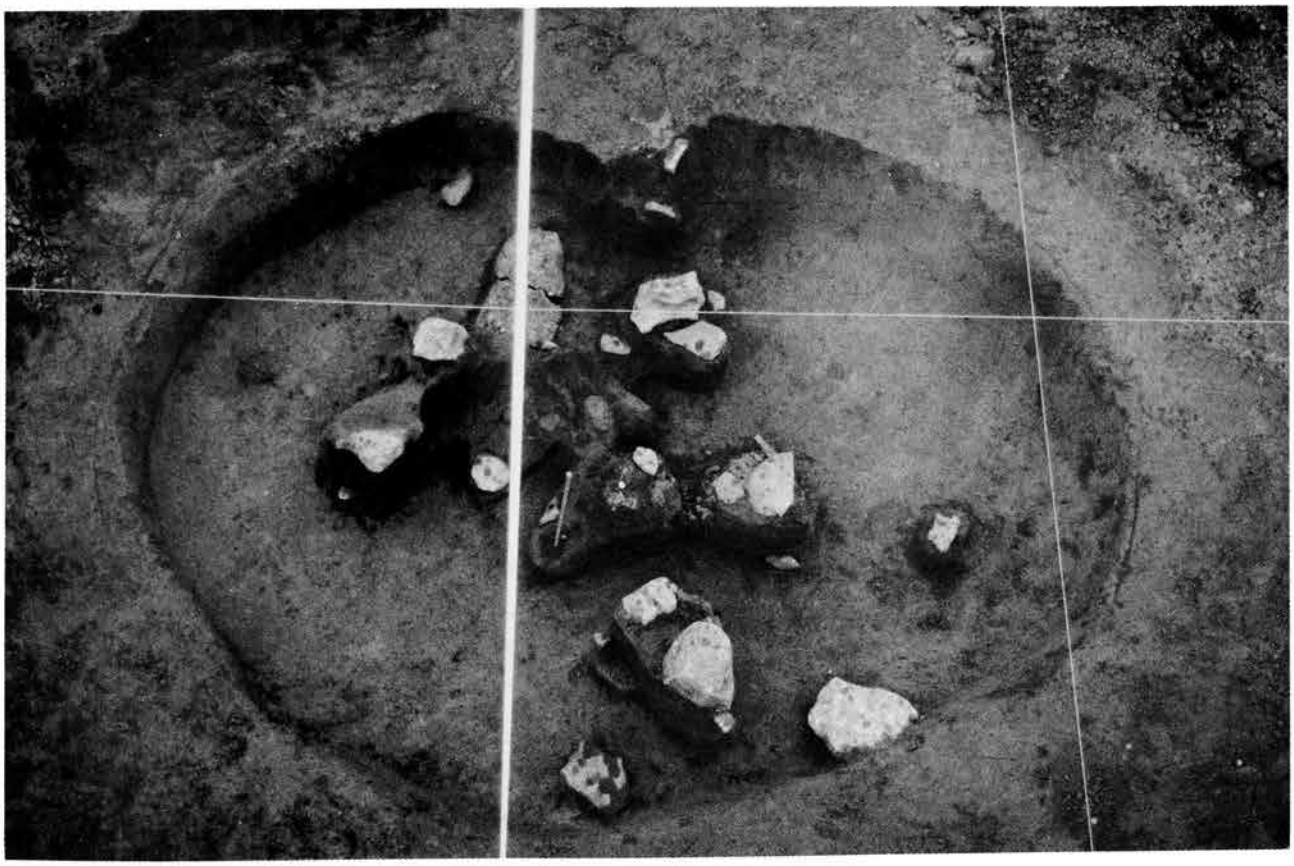


第1号配石土坑（確認状況・東側より）



第1号配石土坑（確認状況・東上方より）

第1号配石土坑（遺物の検出状況）－1



第1号配石土坑（遺物の検出状況・東側より）－2

図版50

第２号配石土坑（遺物の検出状況・南側より）

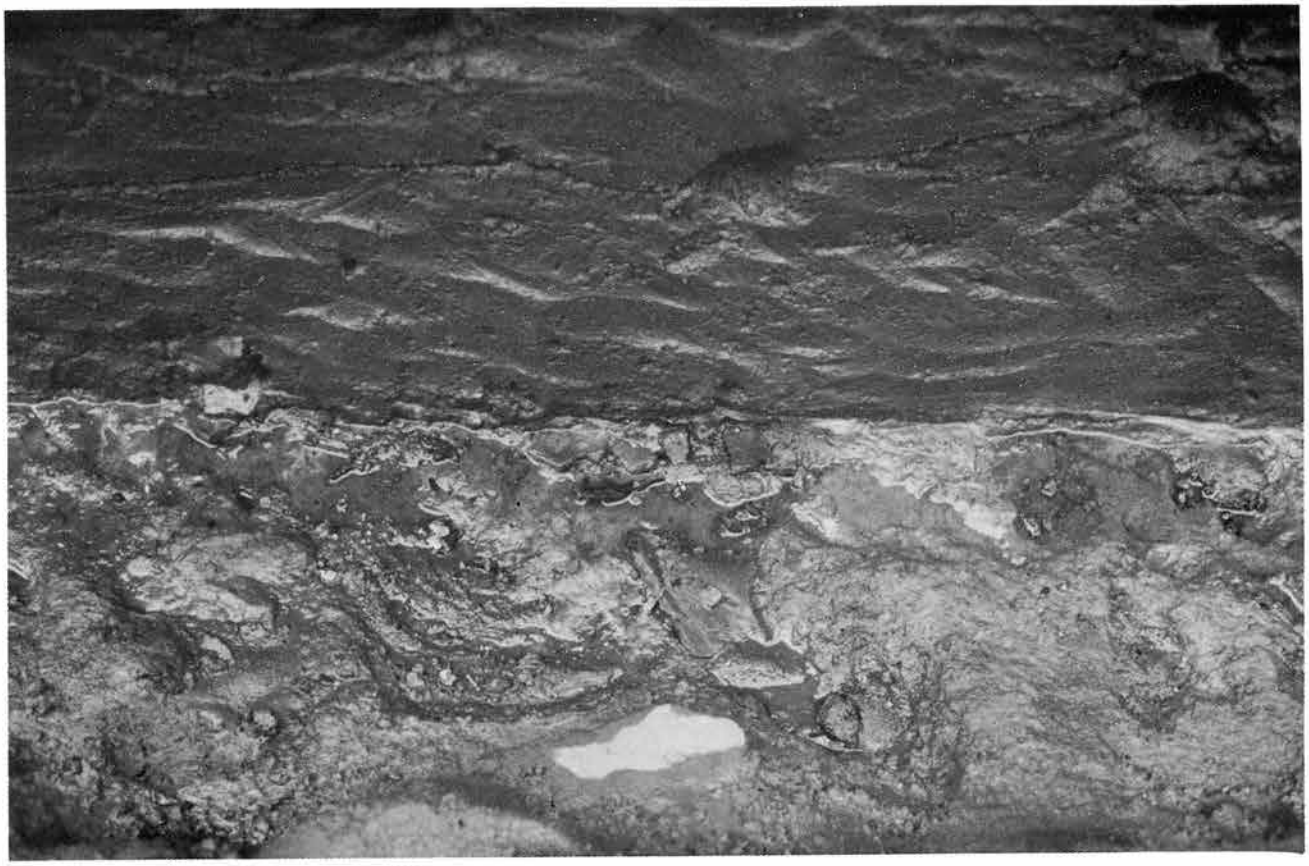
第２号配石土坑（完掘した状態・東南側より）

第１号・第２号土坑（遺物の検出状況・南側より）

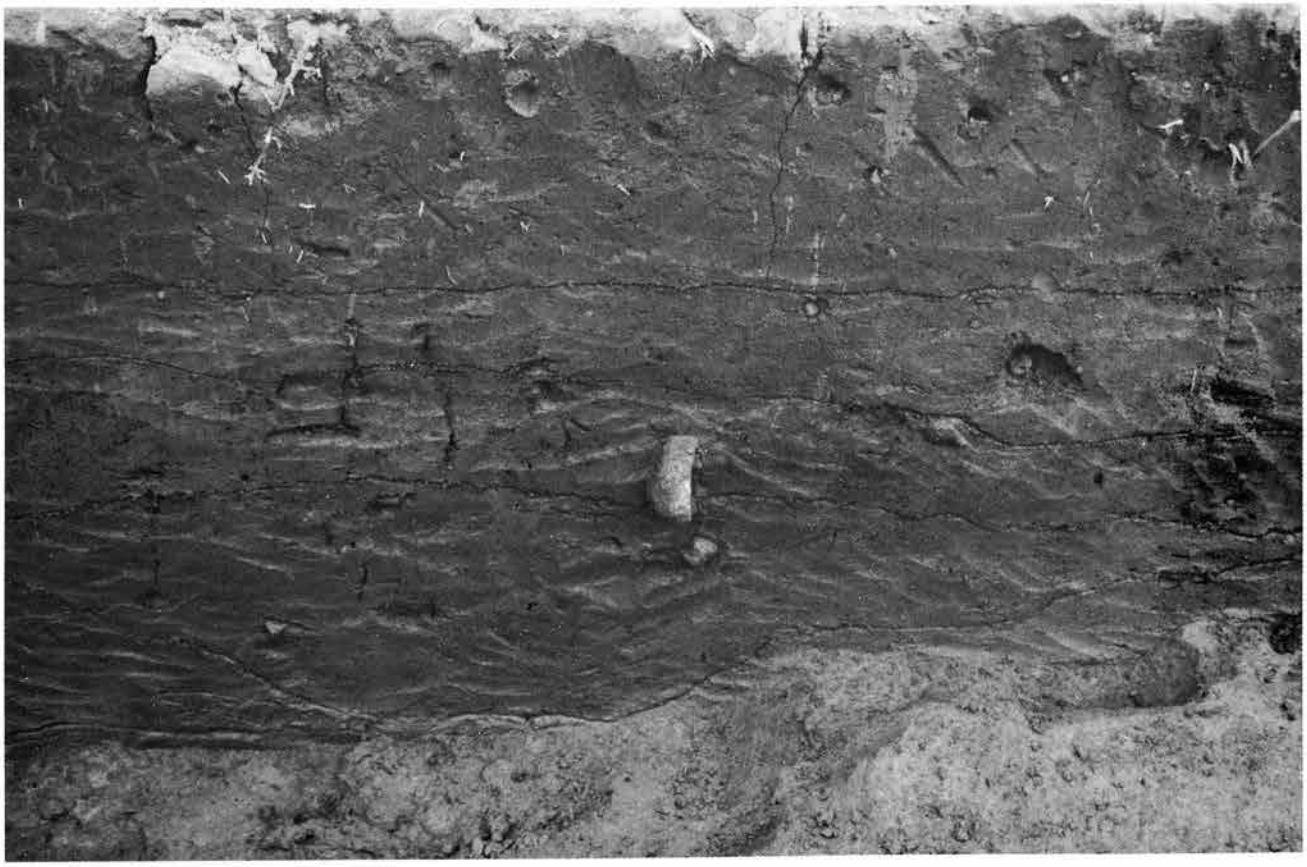
第１号・第２号土坑（完掘した状態・西側より）

図版52

第Ⅱ次調査出土の石器（１）

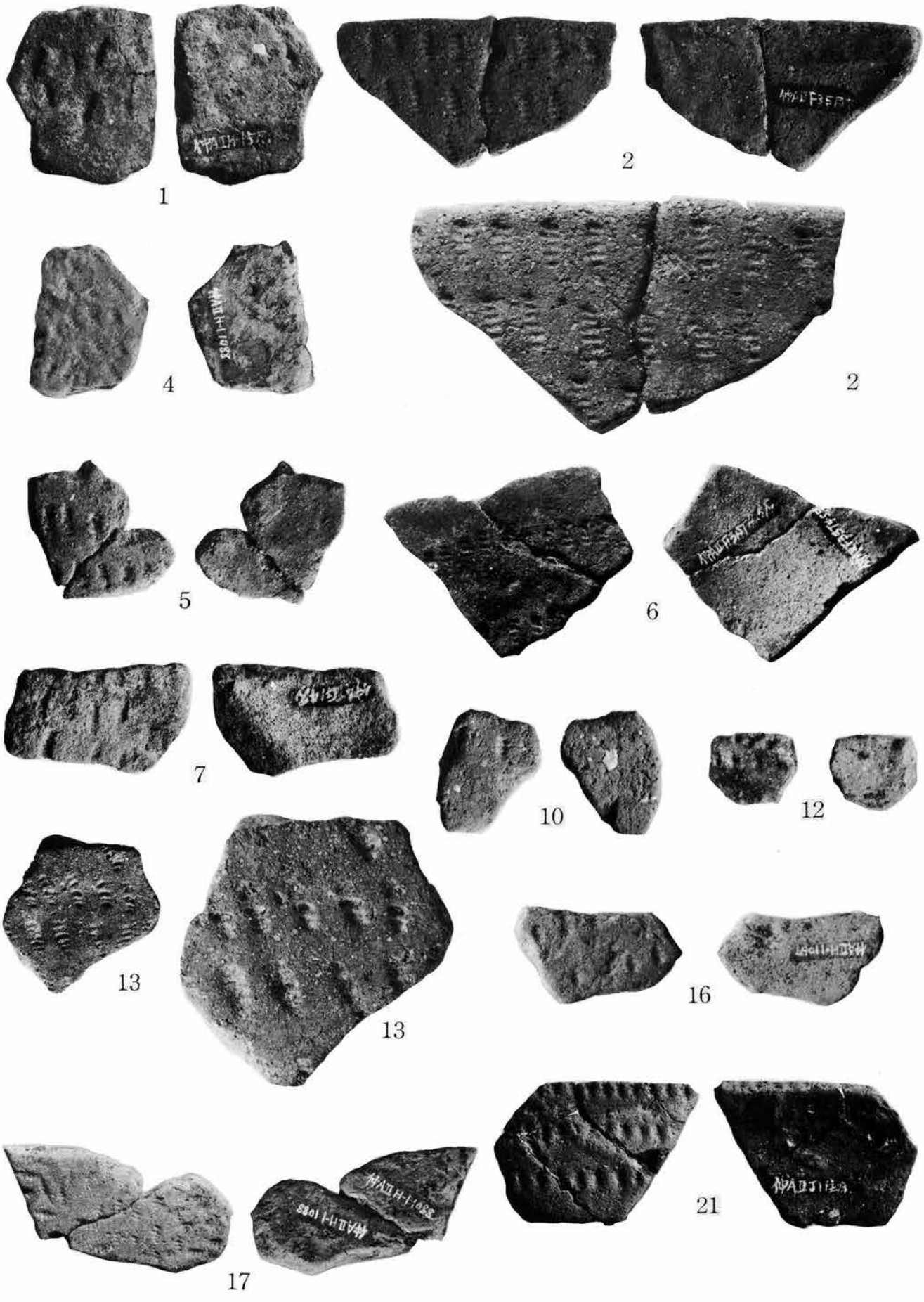


G－2グリッド内トレンチにおける縄文時代草創期土器の出土状況



H－1グリッド内トレンチにおける層序・Ⅴa,Ⅴb,Ⅵa,Ⅵb層

図版54

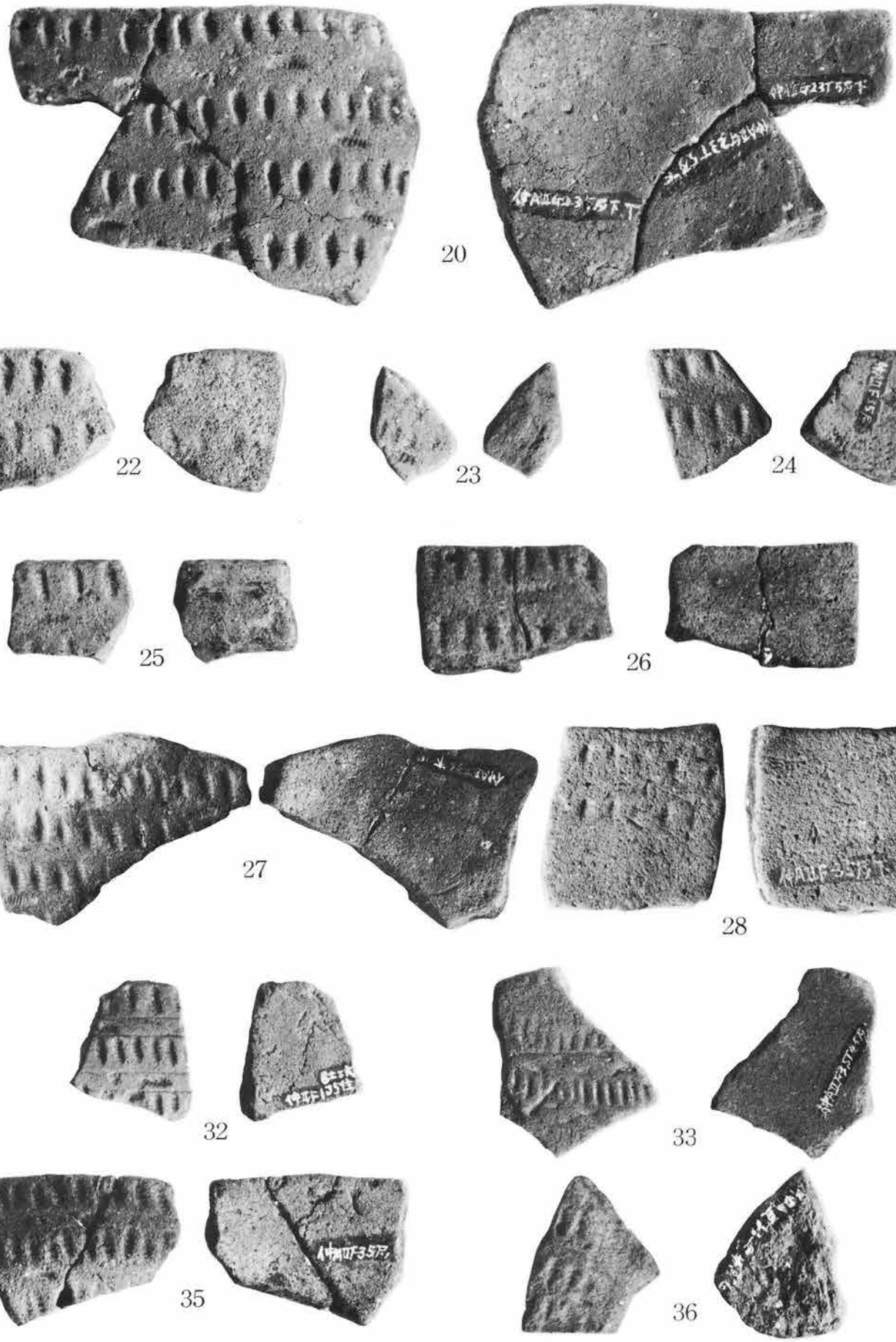


第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（1）Ⅰ群・Ⅱ群1類a種①・②

20

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（２）Ⅱ群１類ａ種③

図版56



第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（３）Ⅱ群１類ａ種③・④

37

38

39

40

42

43

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（４）Ⅱ群１類ａ種④～⑥

図版58

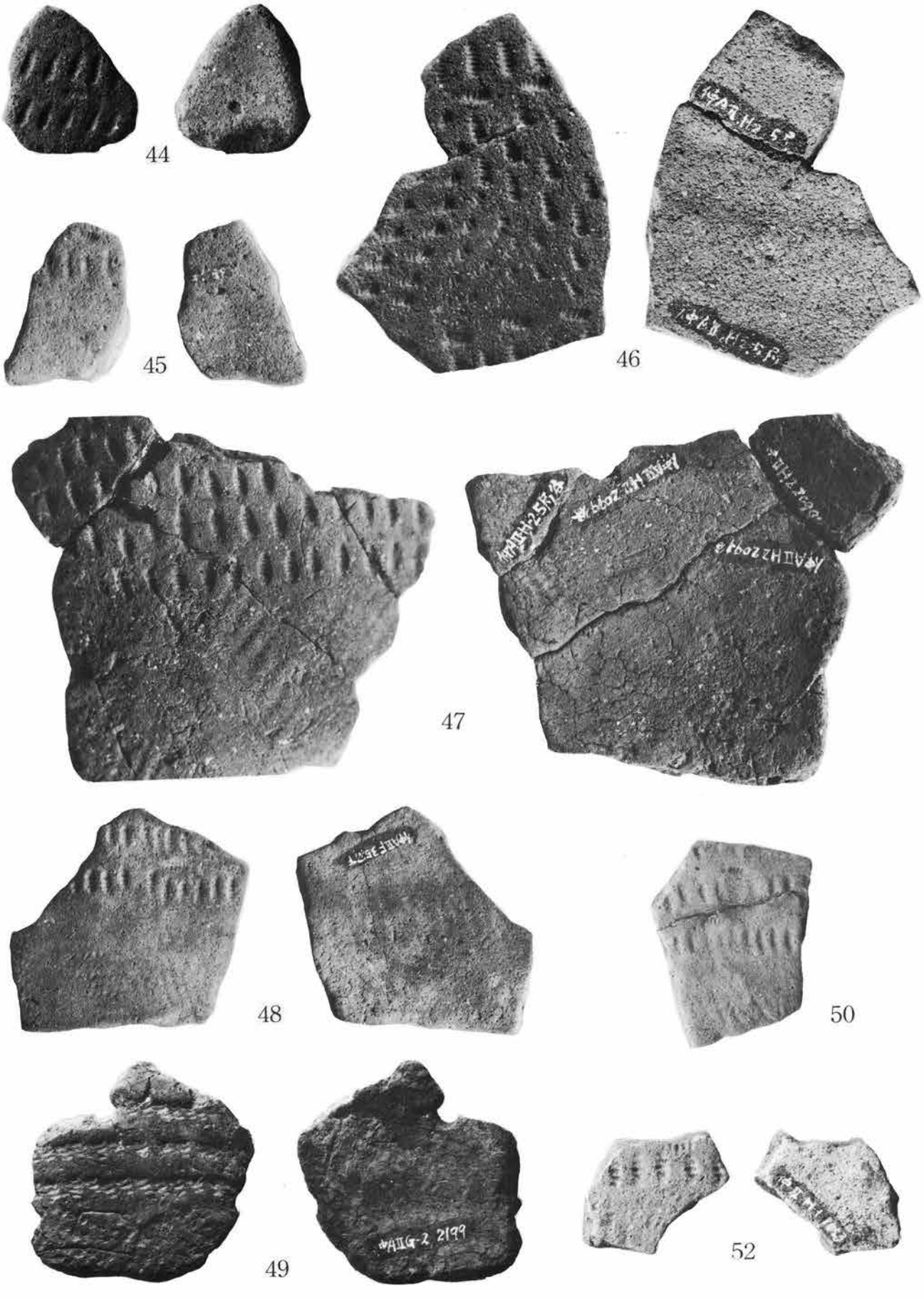
39

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（５）Ⅱ群１類ａ種④

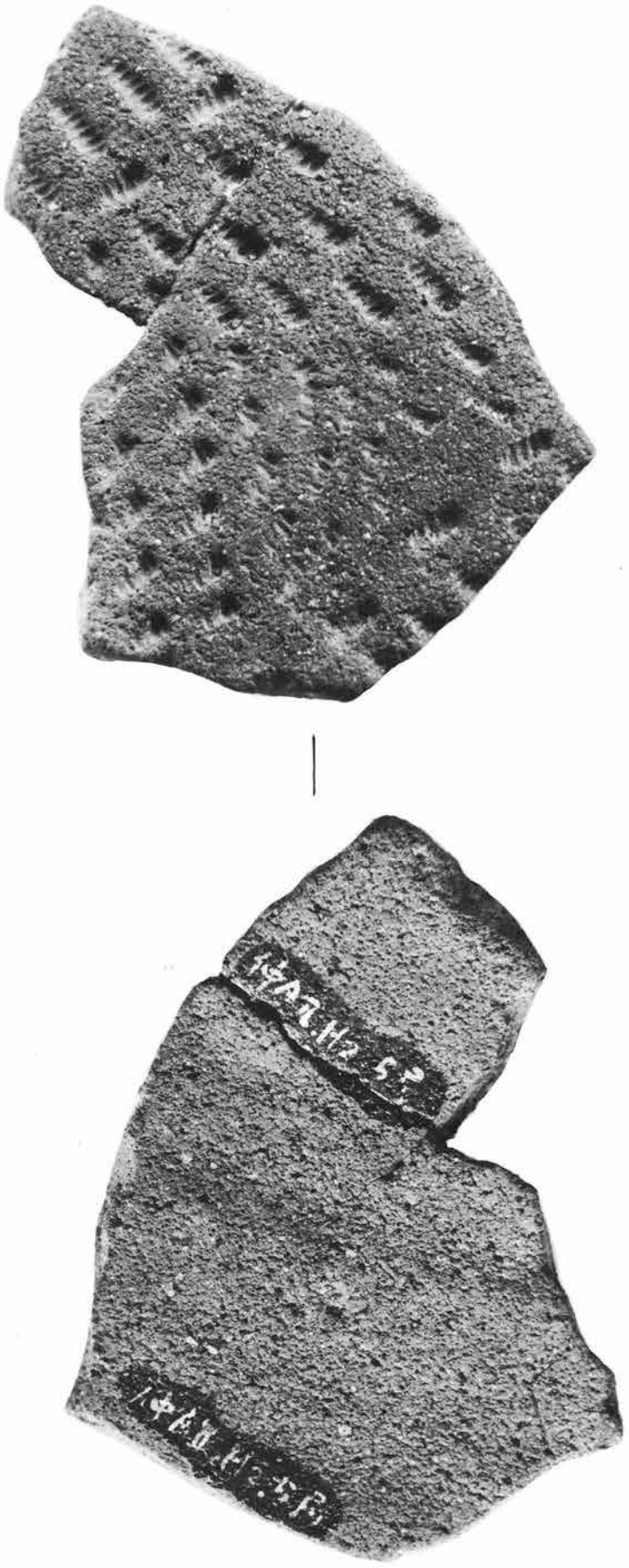
40

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（６）Ⅱ群１類ａ種④

図版60



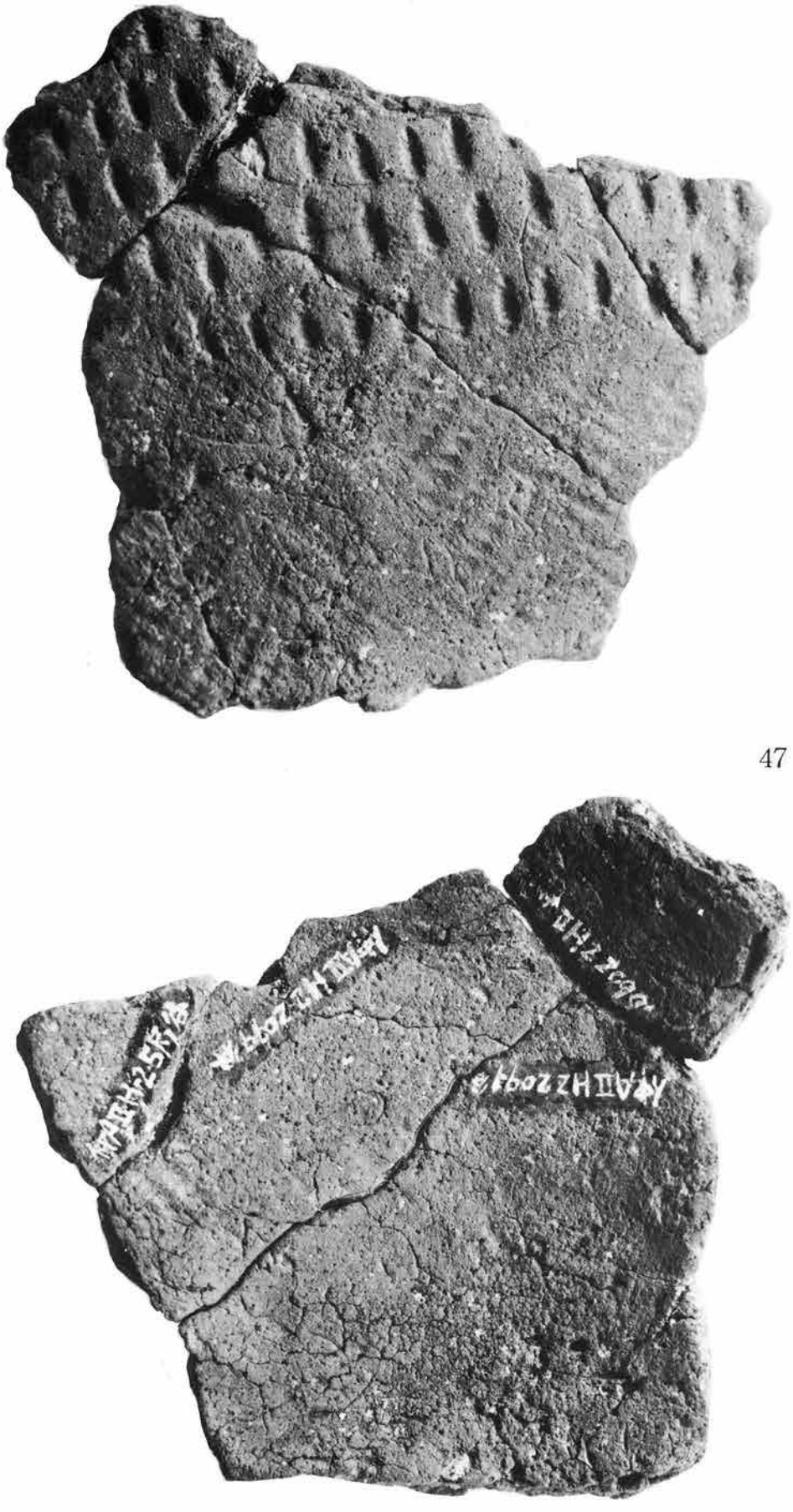
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（７）Ⅱ群１類ａ種⑥，ｂ種



46

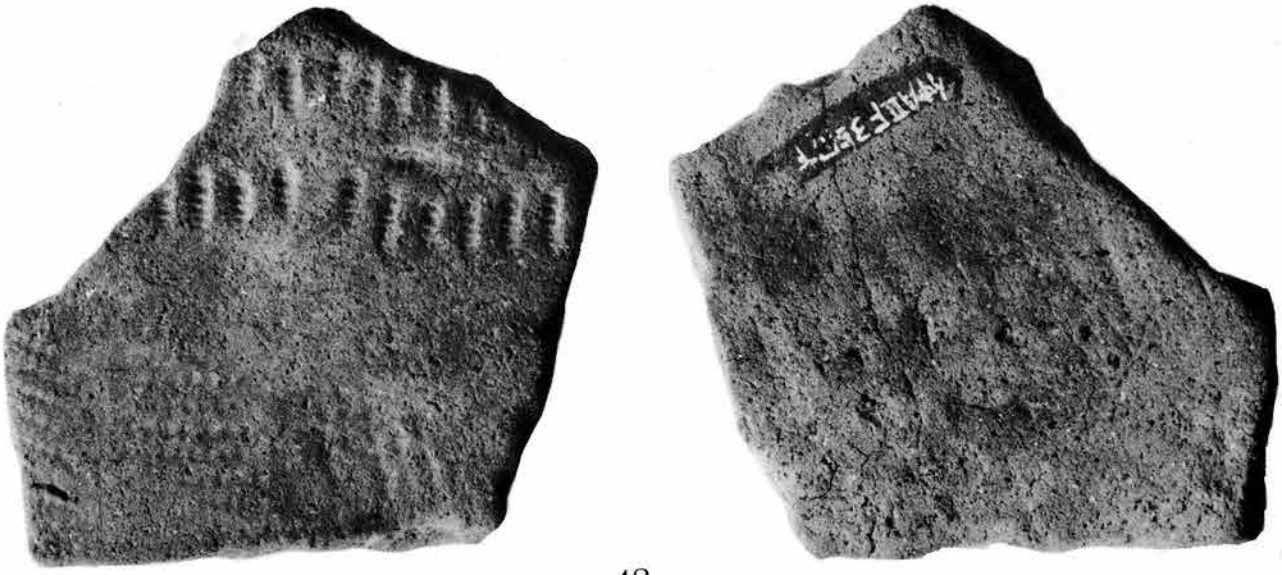
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（８）Ⅱ群１類ａ種⑦

図版62

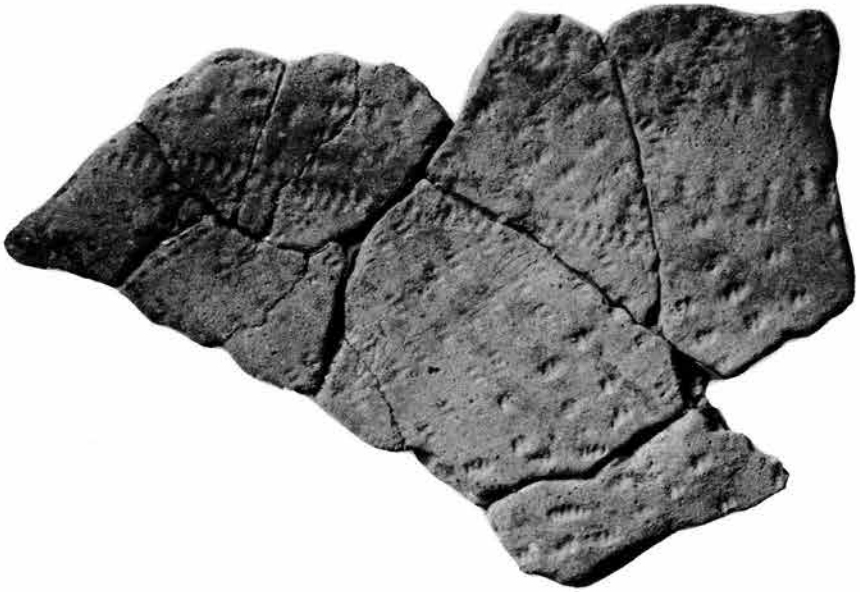


47

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（９）Ⅱ群１類ｂ種



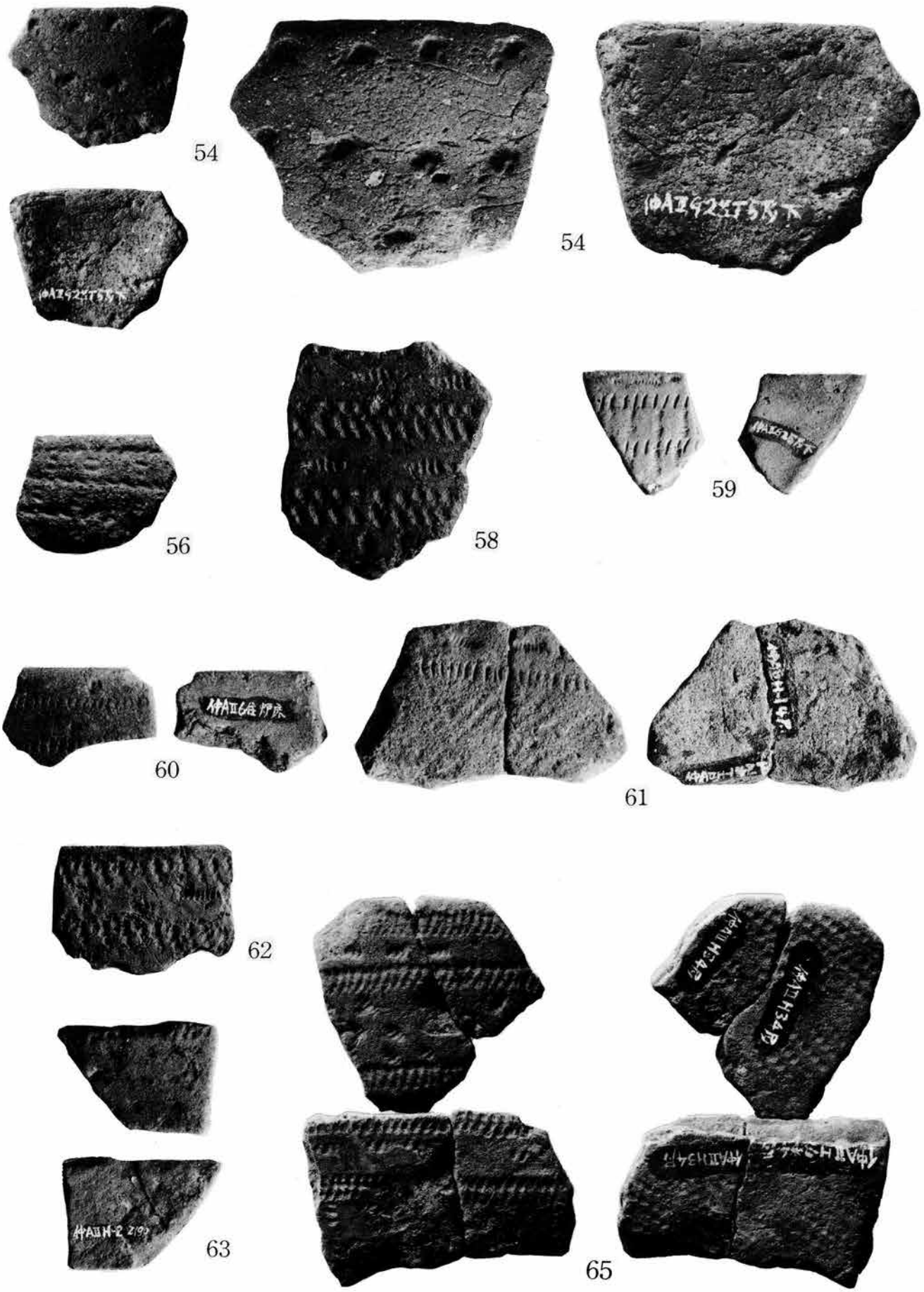
48



64

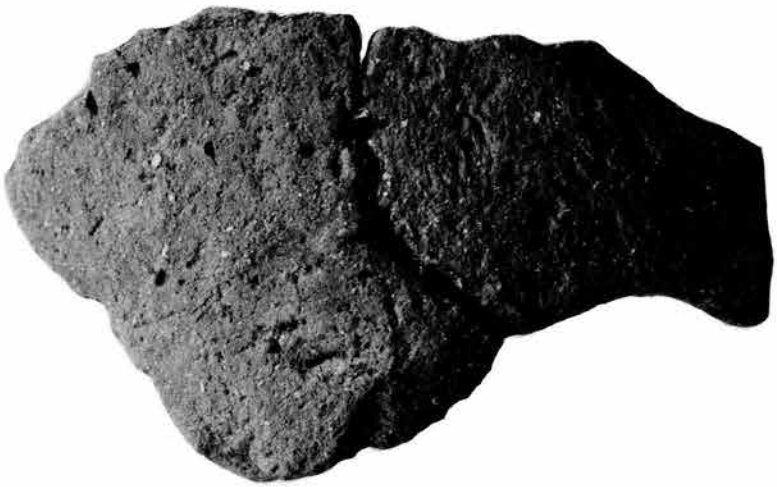
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（10）Ⅱ群1類b種，f種

図版64



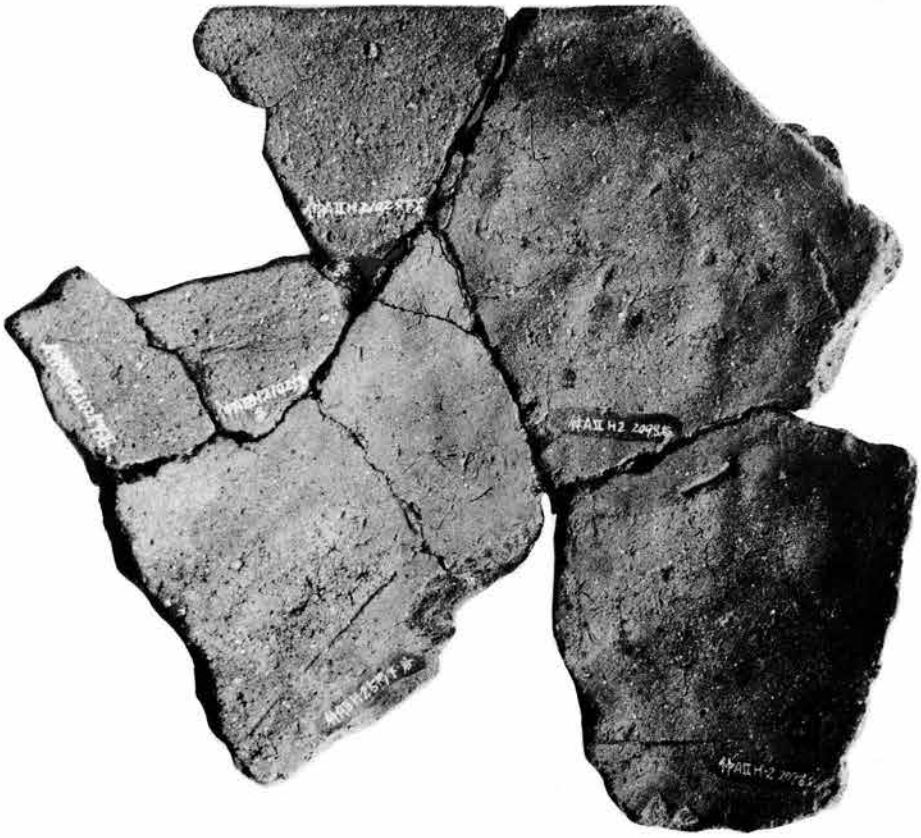
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（11）Ⅱ群1類b種～ f種

55



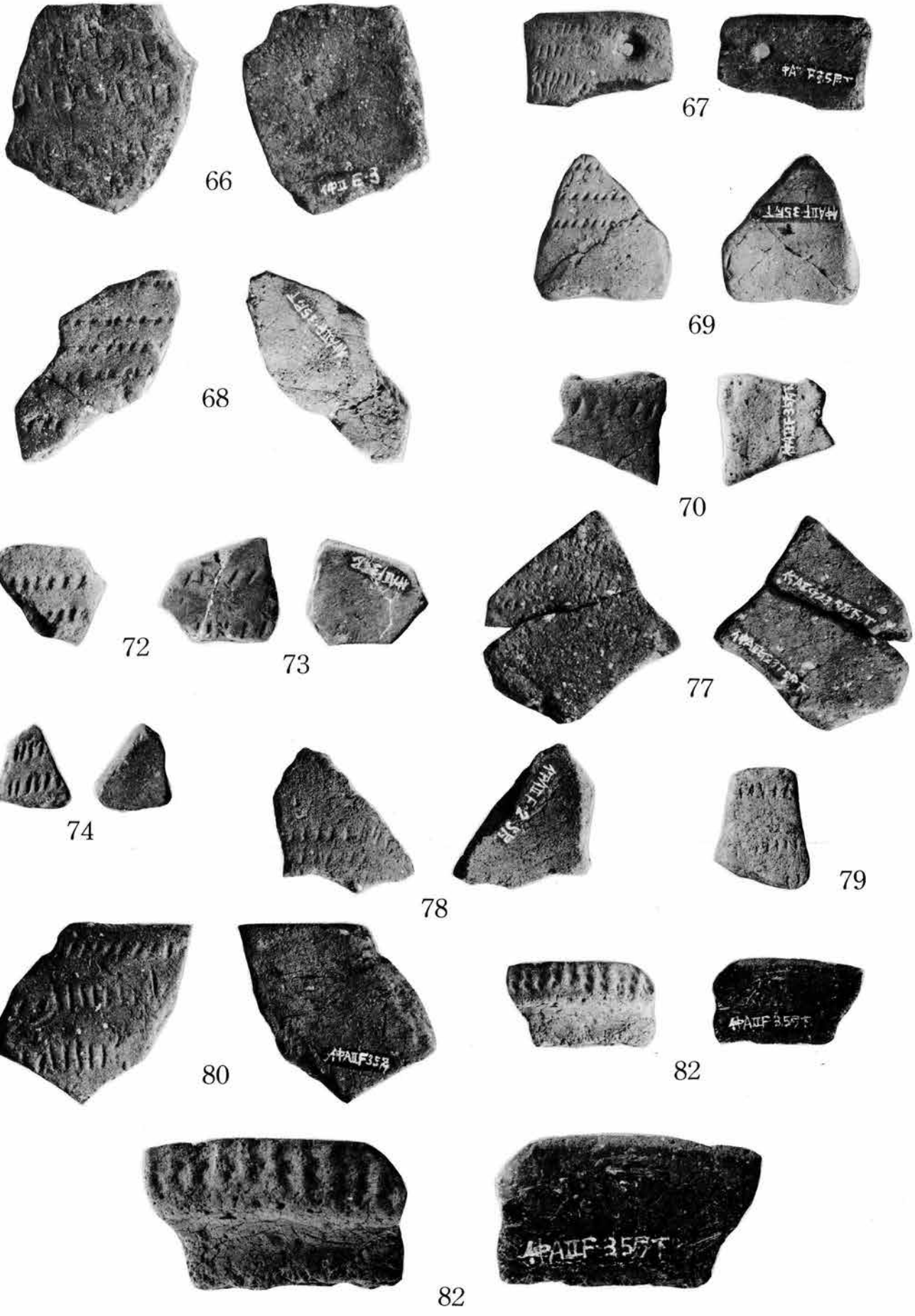
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（12）Ⅱ群1類b種――表

図版66



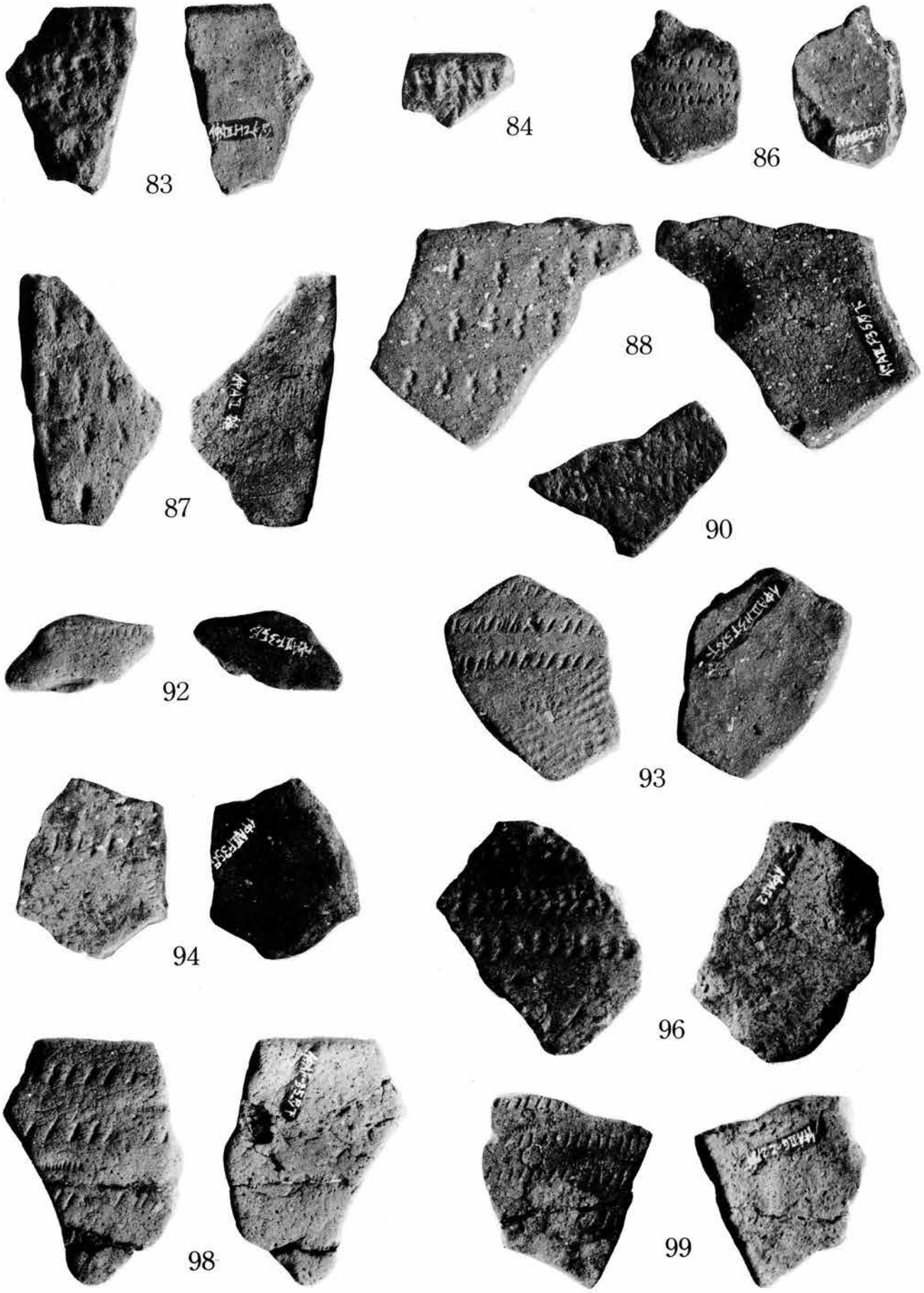
55

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（13）Ⅱ群1類b種——裏



第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（14）Ⅱ群2類a種①～③

図版68



第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（15）Ⅱ群2類a種⑤～⑦，b種①～⑤，c種①

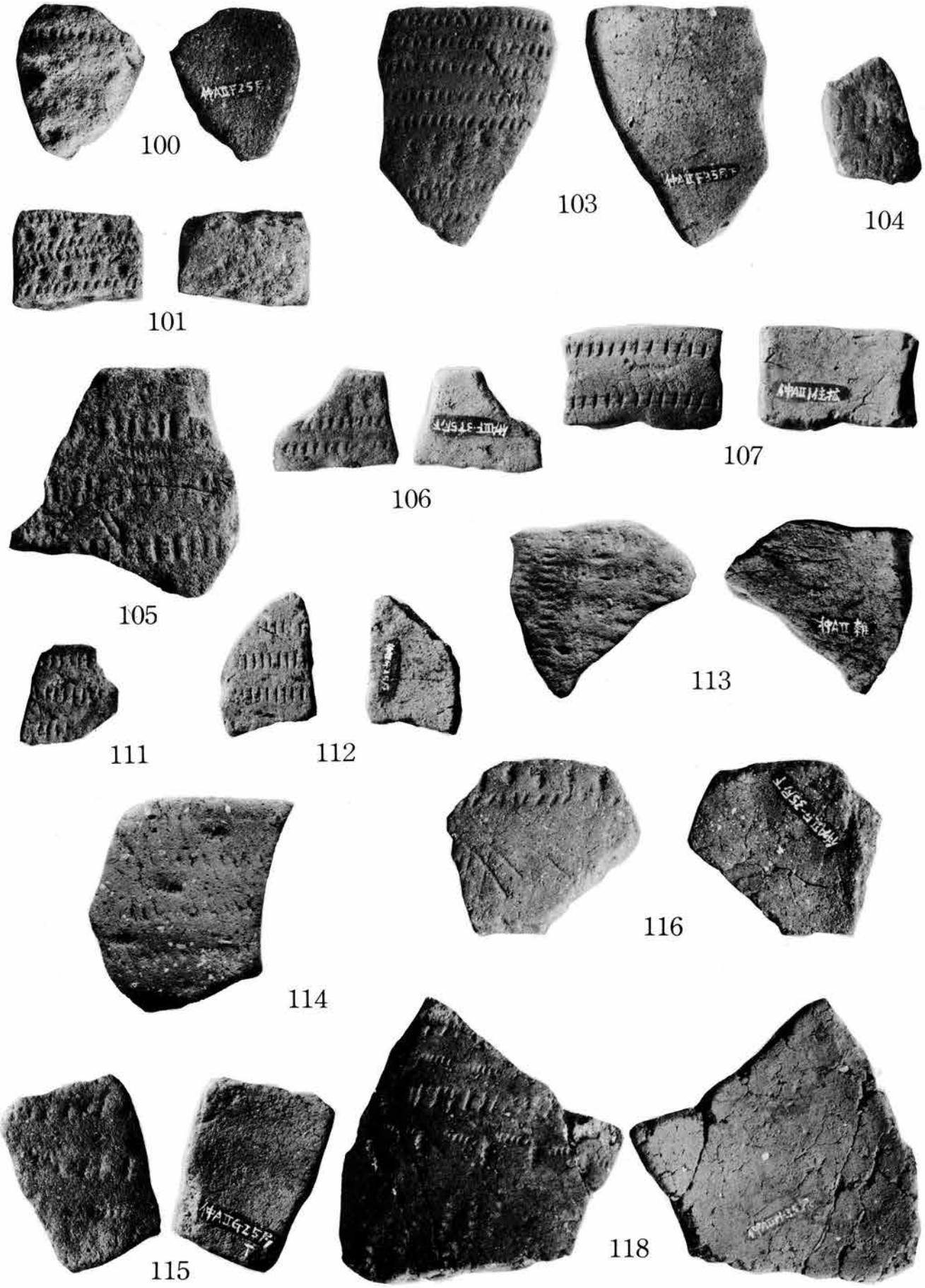
98

103

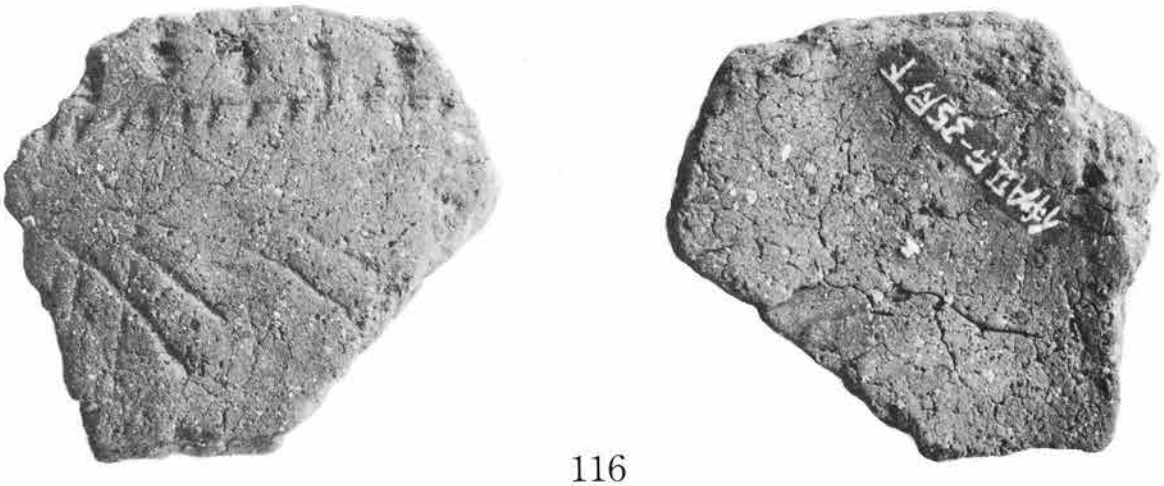
107

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（16）Ⅱ群2類c種①・③・⑤

図版70

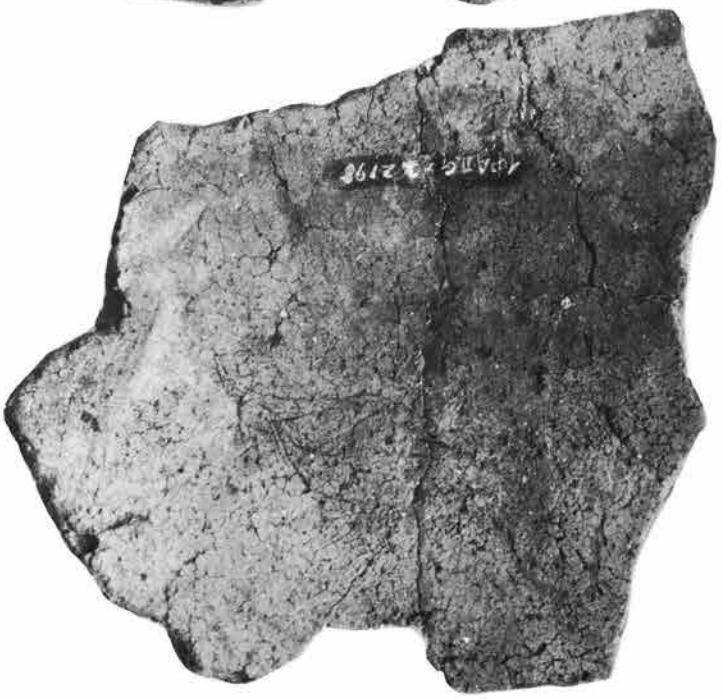


第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（17）Ⅱ群2類c種①・③～⑦，e種①



116

117



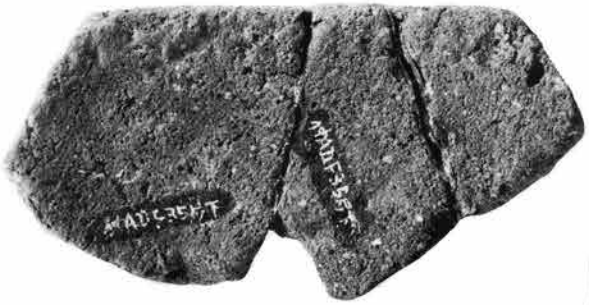
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（18）Ⅱ群2類d種①，e種①

図版72

119

120

121



123

122

129

124

125

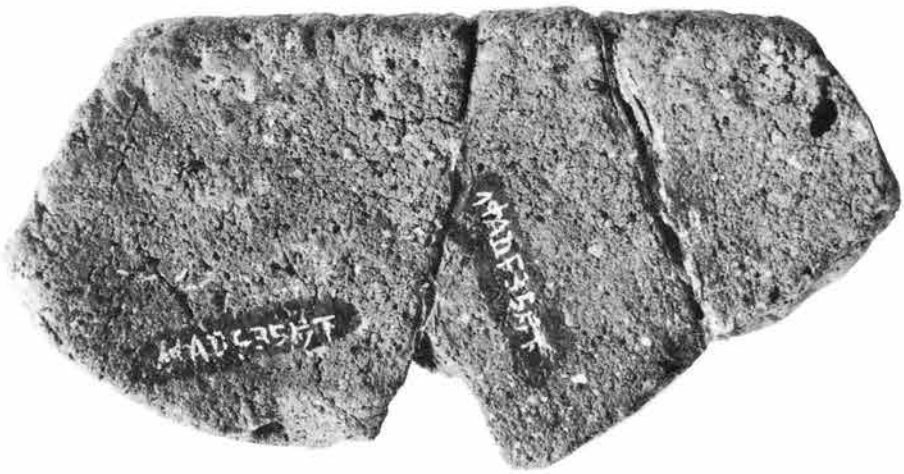
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（19）Ⅱ群2類f種①・②，g種①・②，
h種①，3類a種①・②

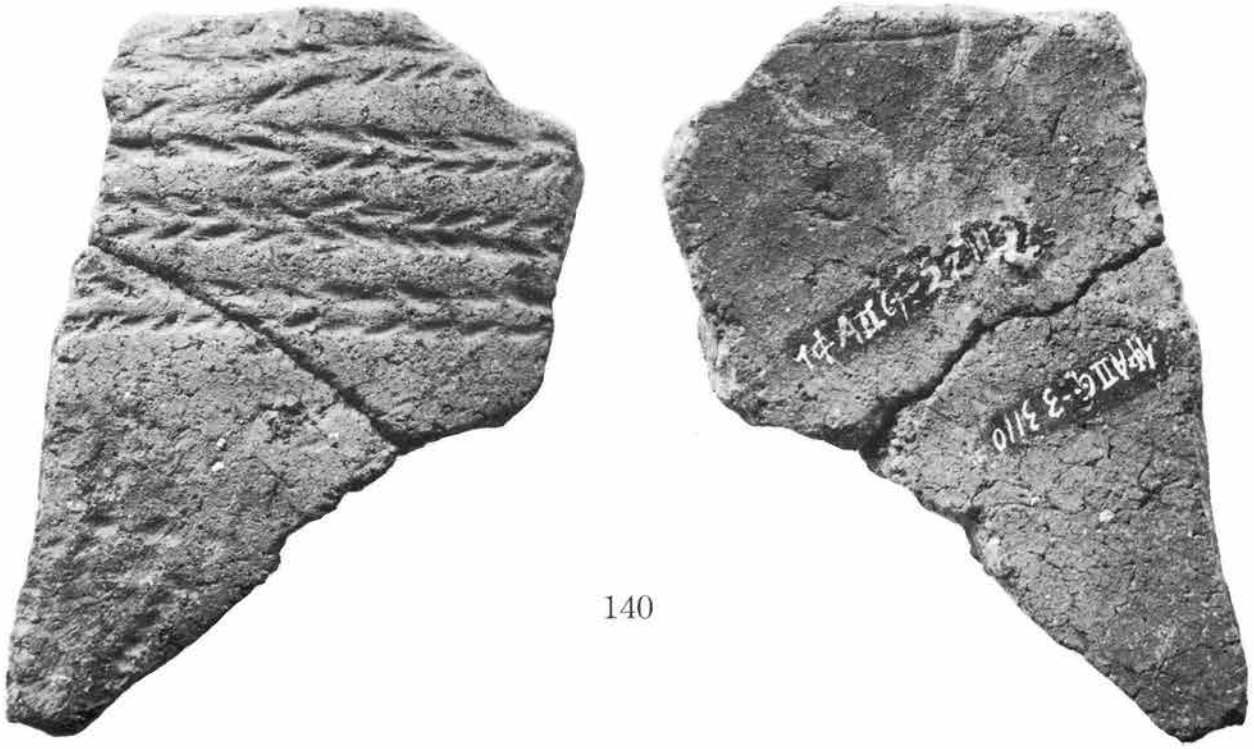
120

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（20）Ⅱ群２類ｆ種②

図版74

121

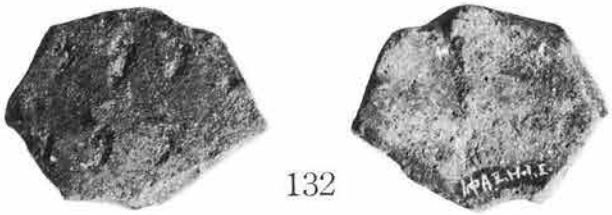




140

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（21）Ⅱ群2類f種②，3類b種①

130



132

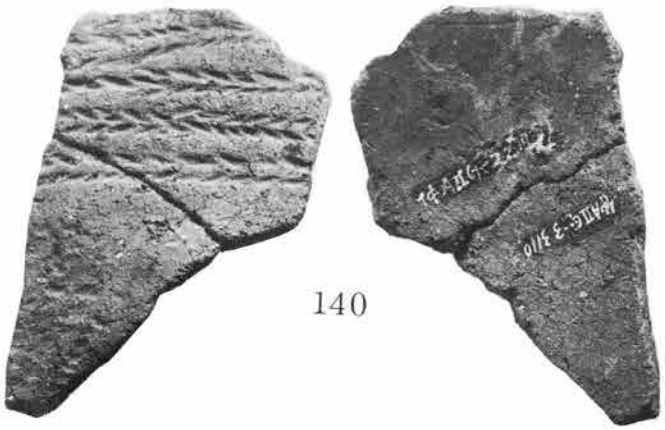
133

131

136

137

144

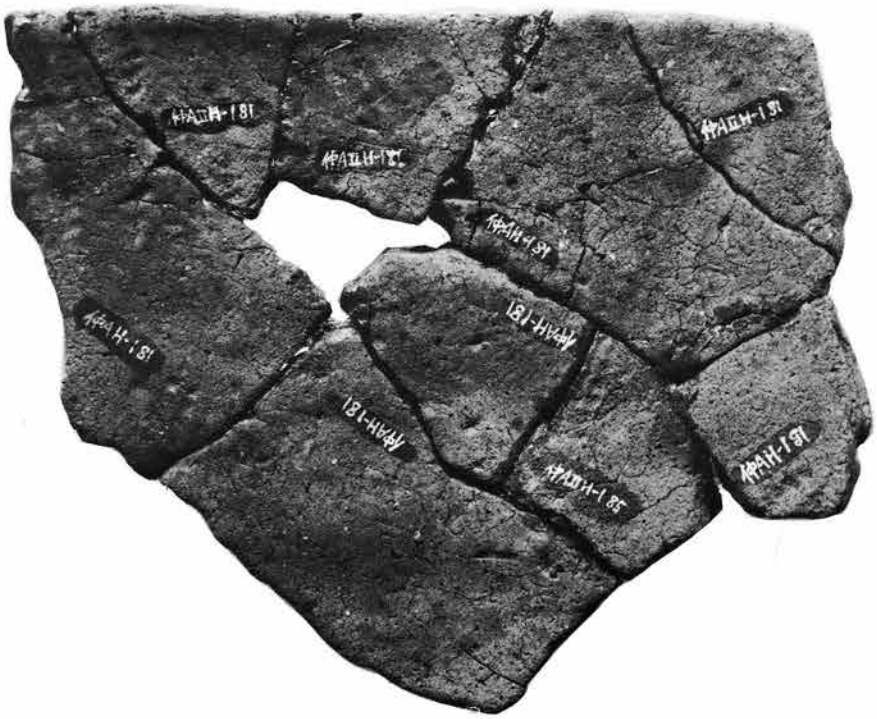


140

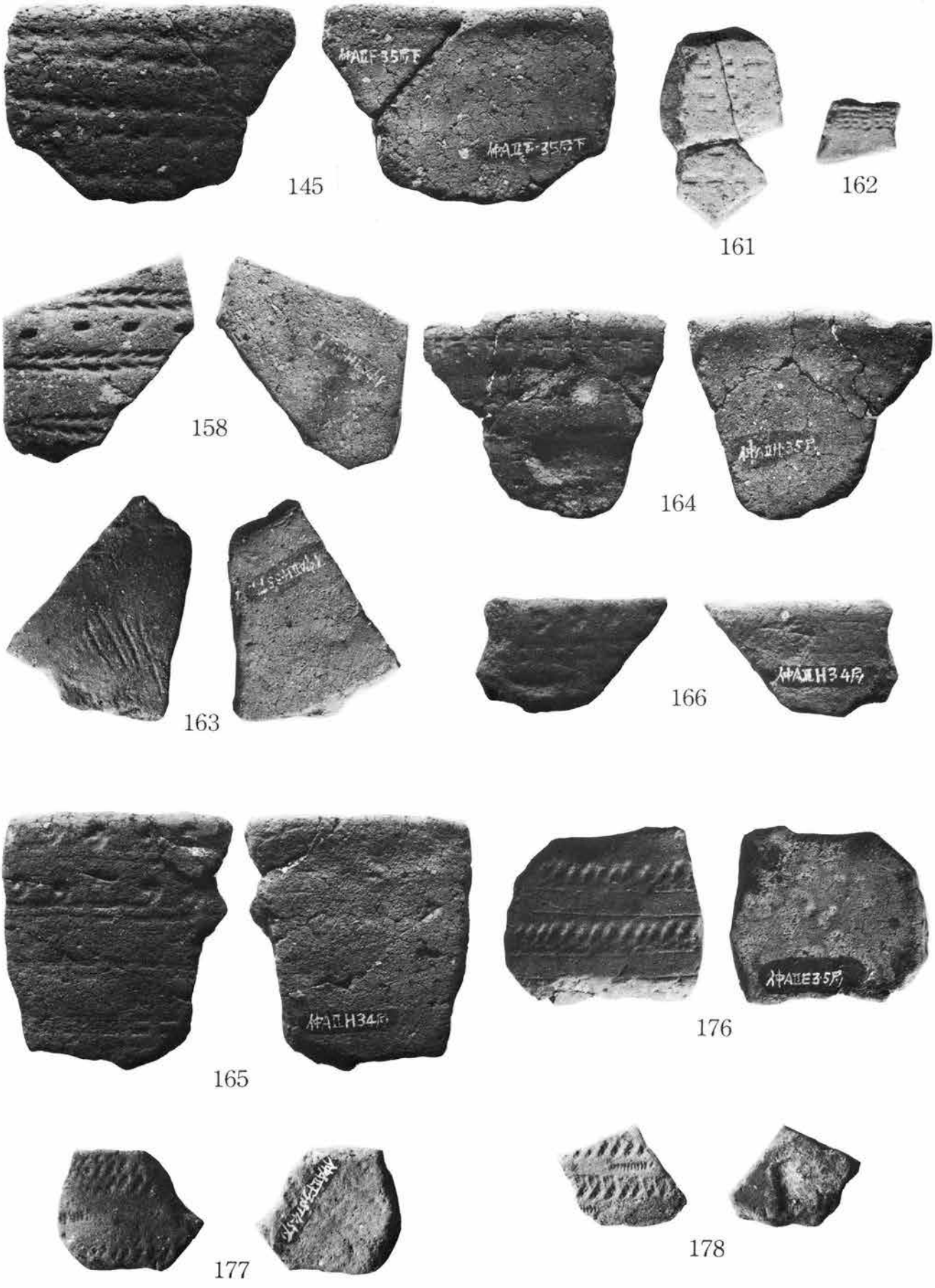
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（22）Ⅱ群３類ａ種①・③・④，ｂ種①

図版76

157

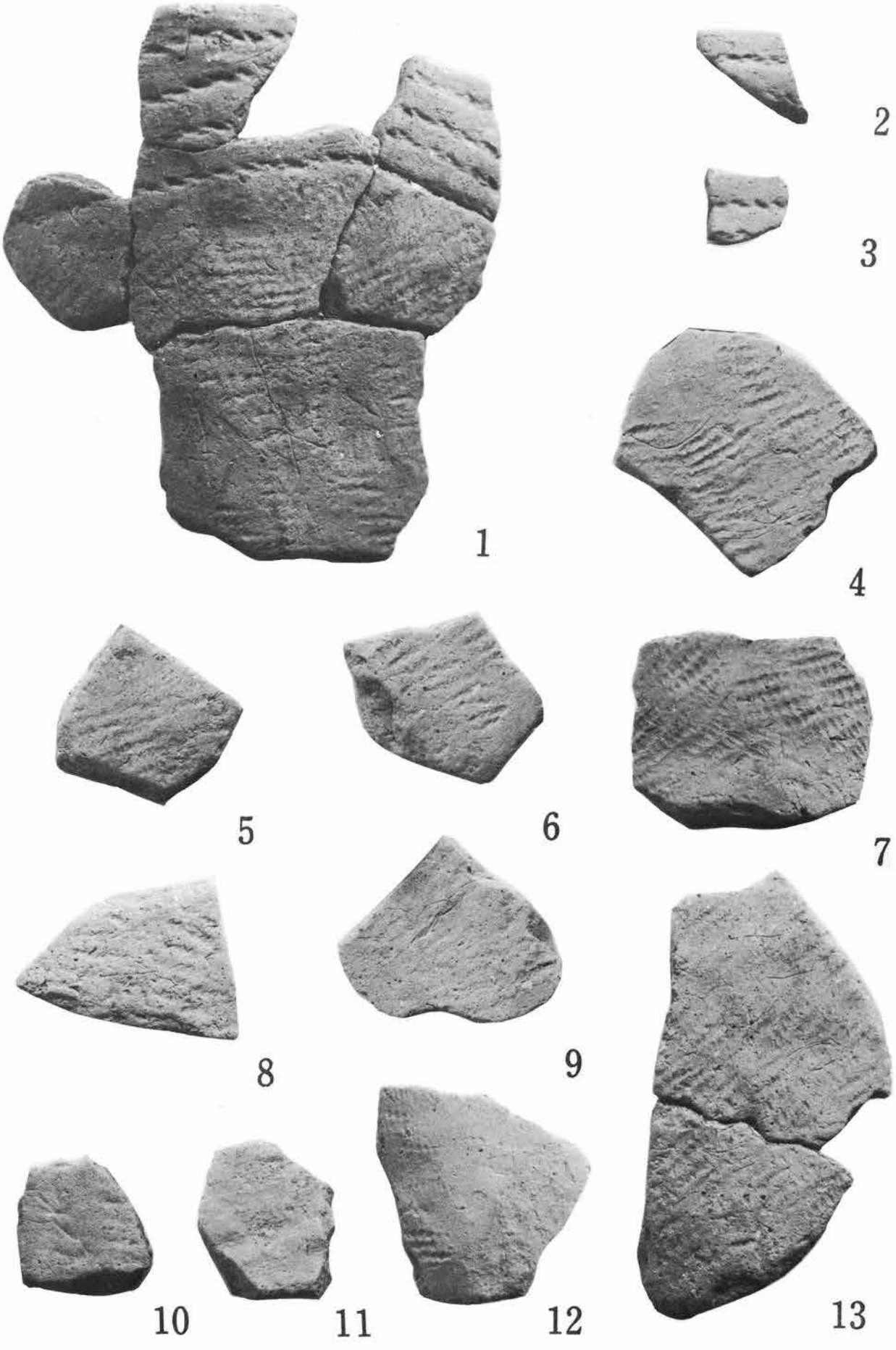


第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（23）Ⅱ群3類b種④

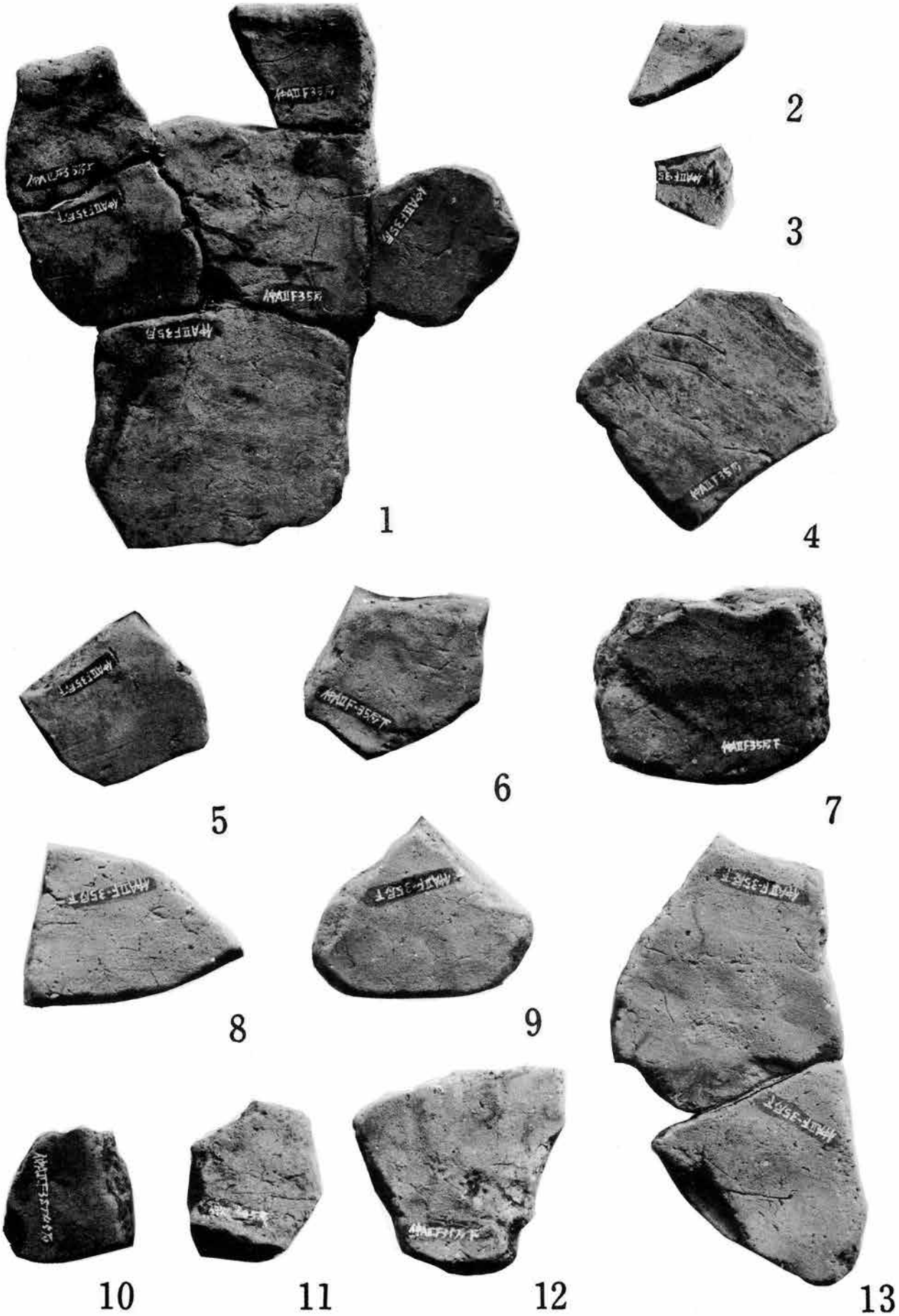


第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（24）Ⅱ群3類b種⑤，c種①，4類a種①
b種①，c種①，d種①，5類b種①，c種①

図版78

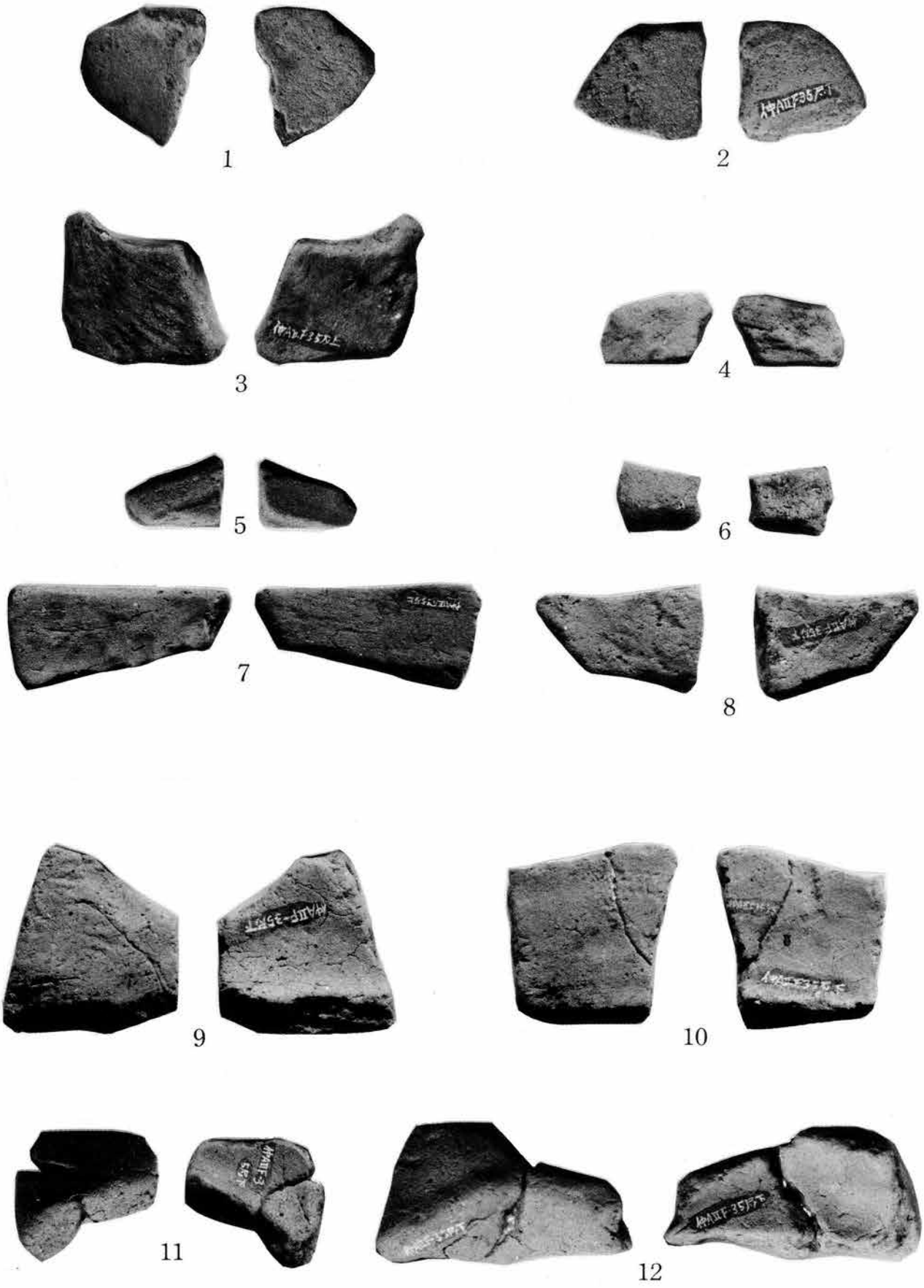


第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（25）復元前の側面圧痕文土器――表



第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（26）復元前の側面圧痕文土器――裏

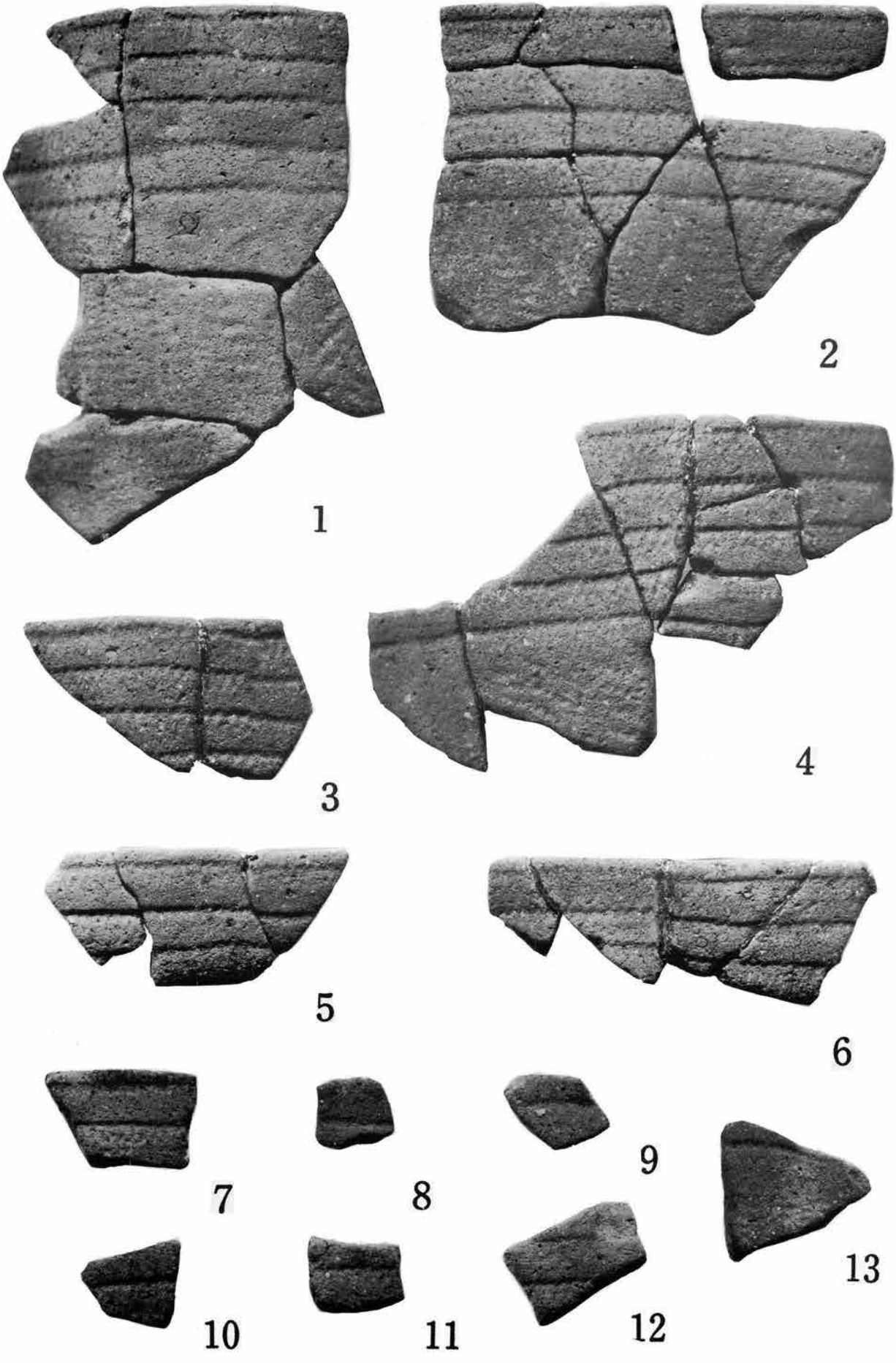
図版80



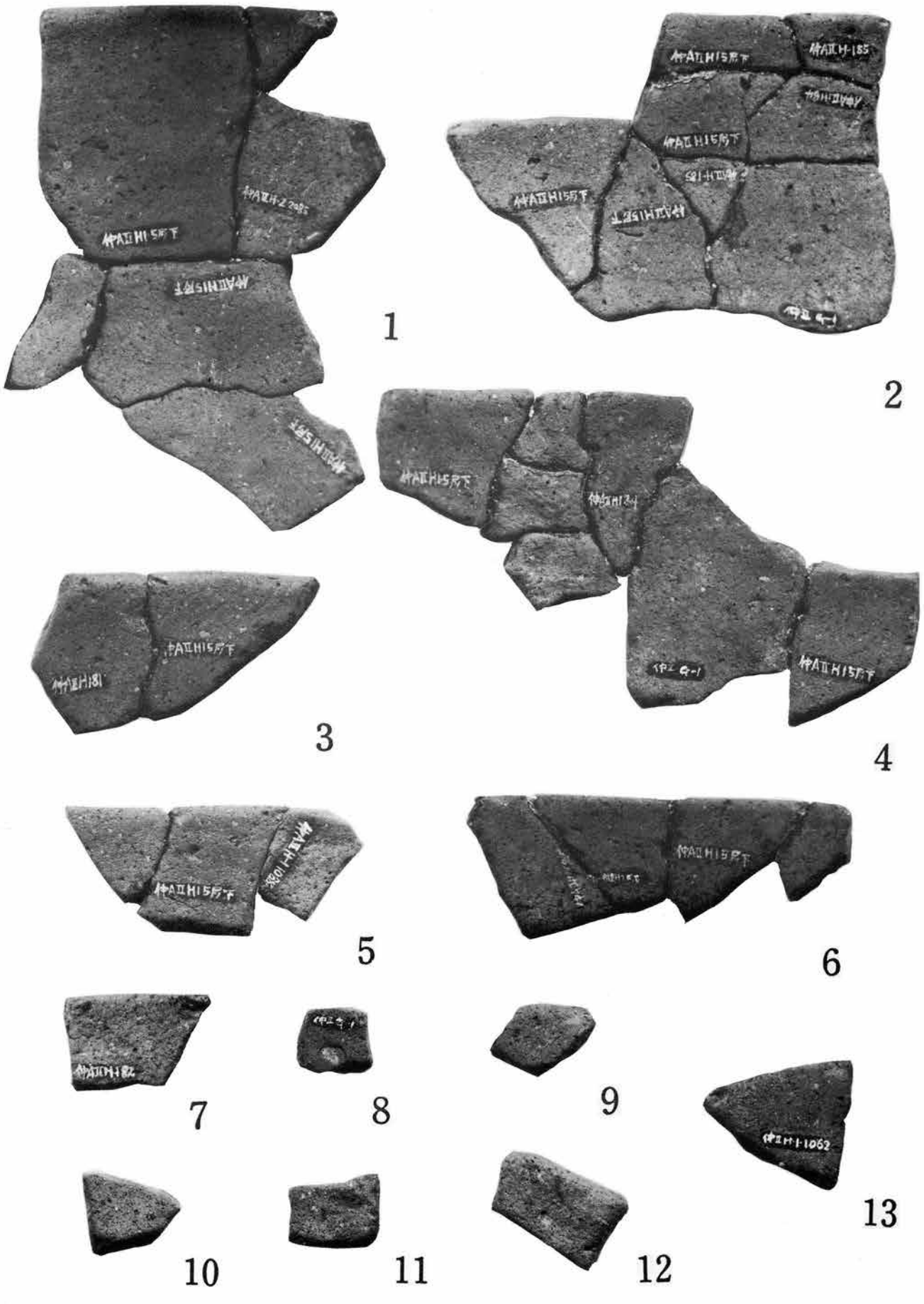
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（27）復元前の側面圧痕文土器

第II次調査出土の縄文時代草創期土器（28）復元された側面圧痕文土器

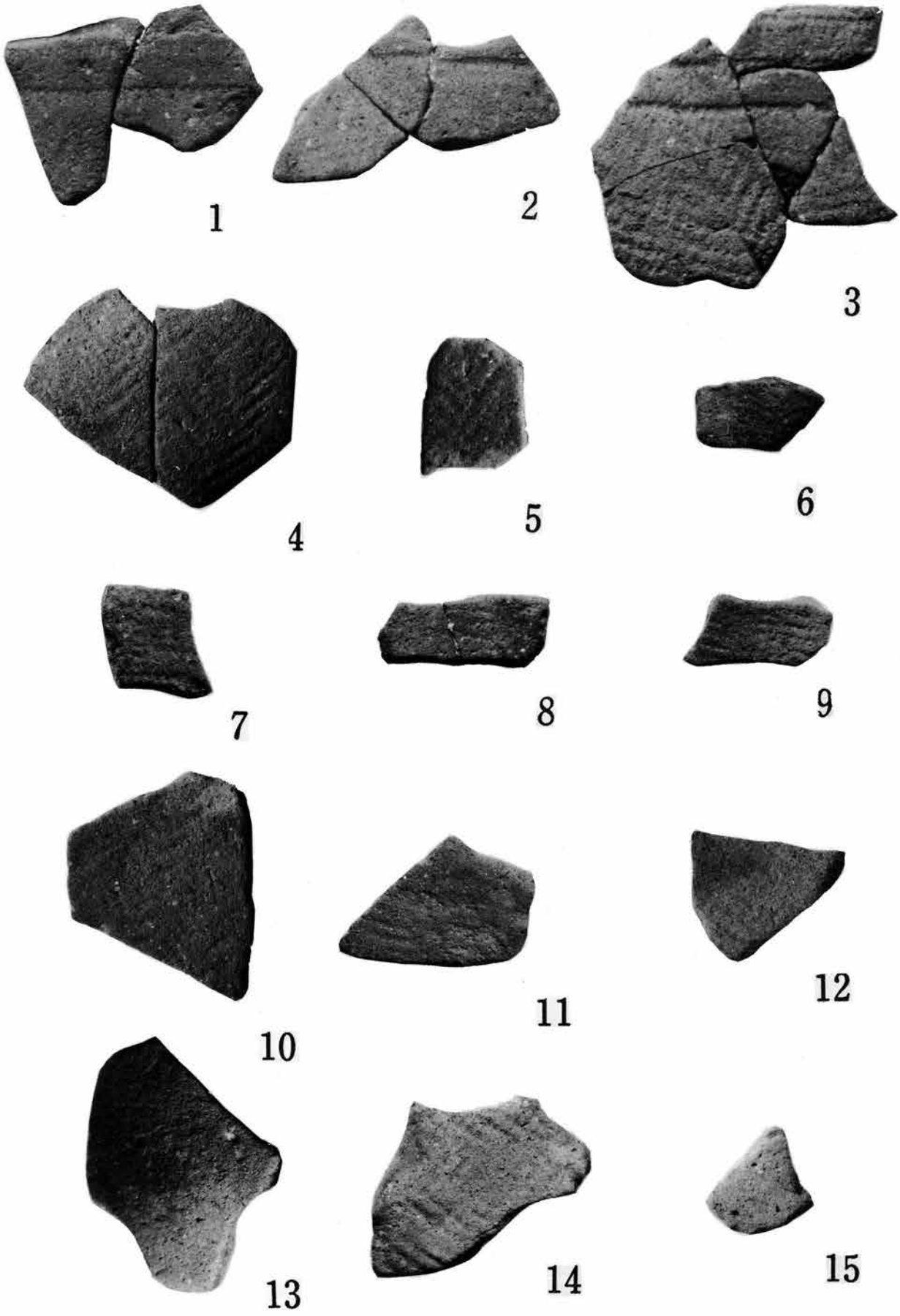
図版82



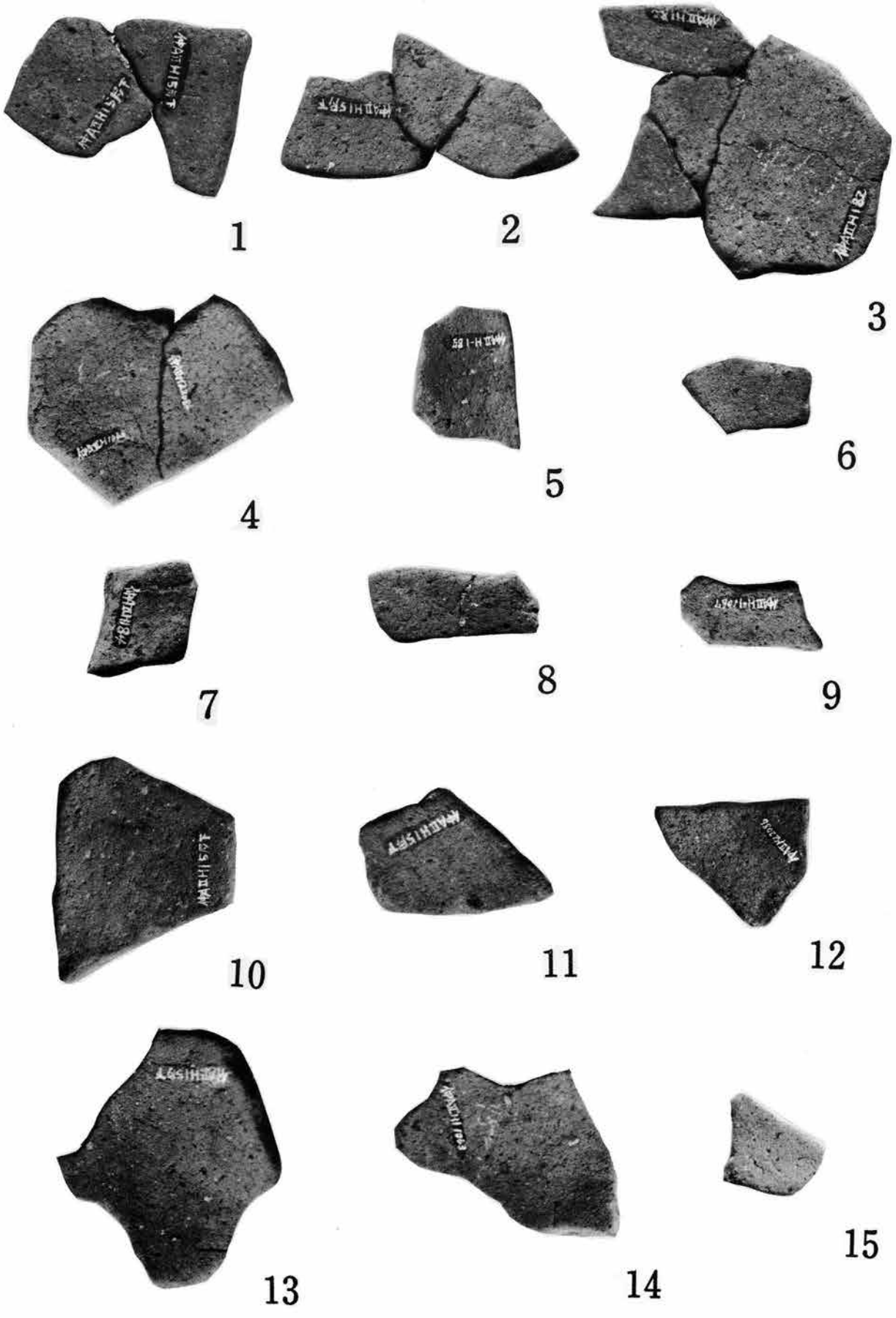
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（29）復元前の半置半転文土器――表



第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（30）復元前の半置半転文土器――裏



第II次調査出土の縄文時代草創期土器（31）復元前の半置半転文土器――表



第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（32）復元前の半置半転文土器――裏

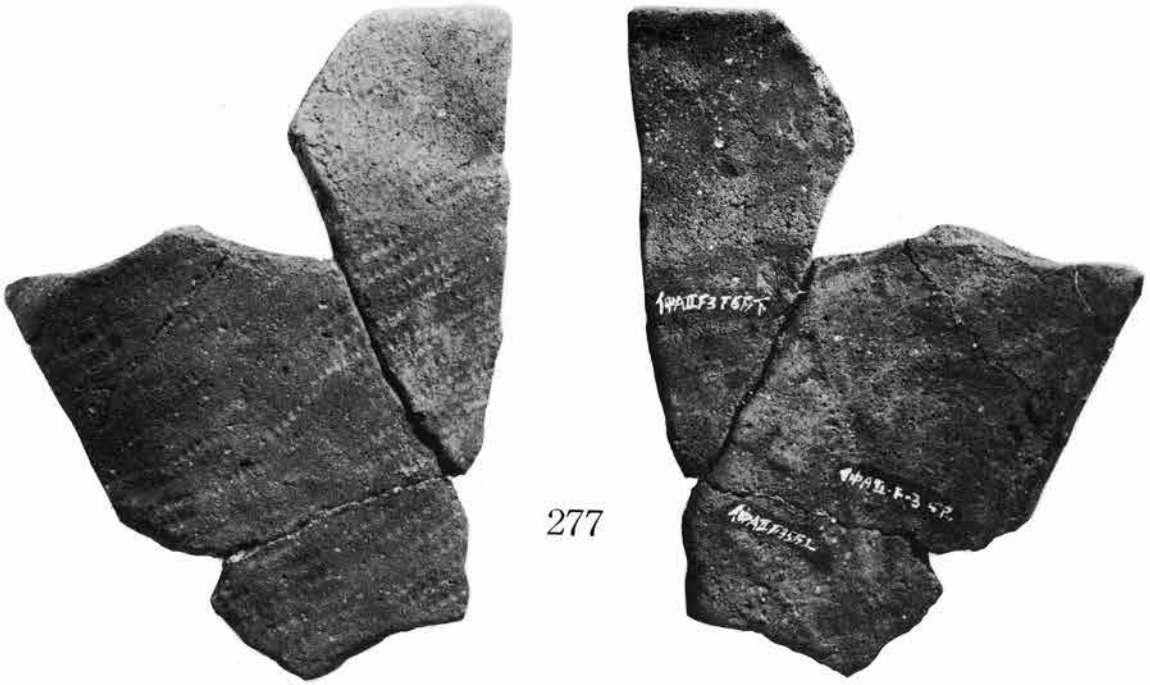
図版86

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（33）復元された半置半転文土器

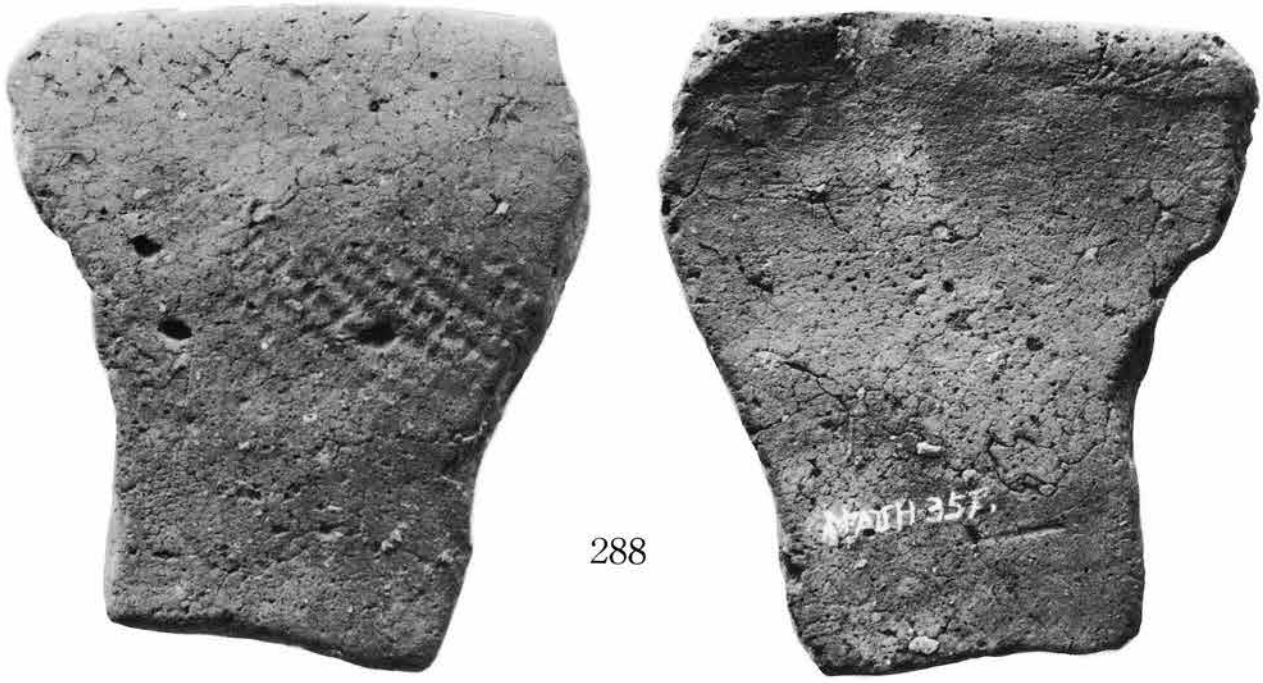
364

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（34）

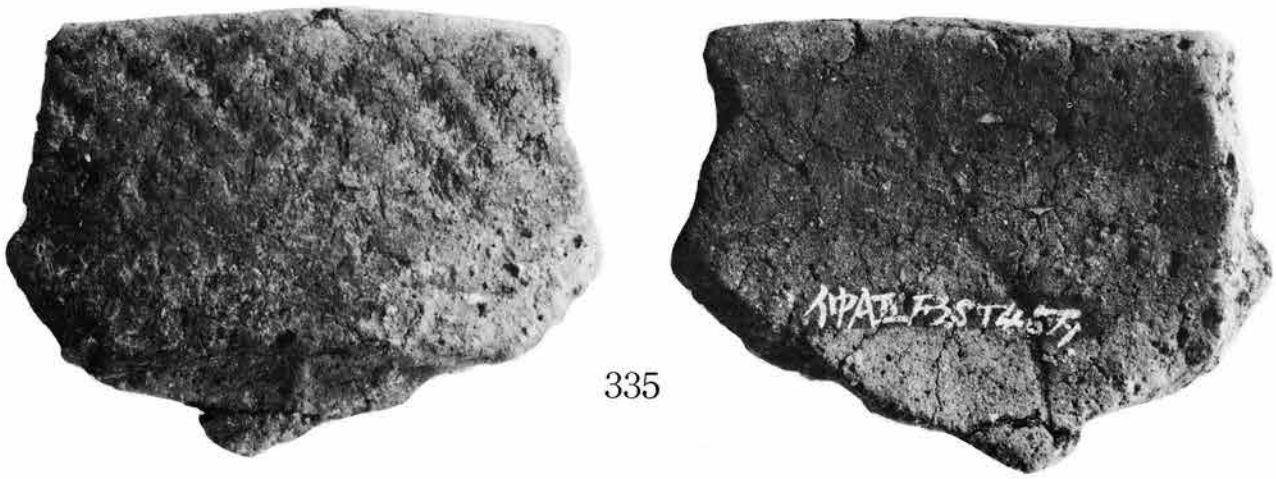
図版88



277

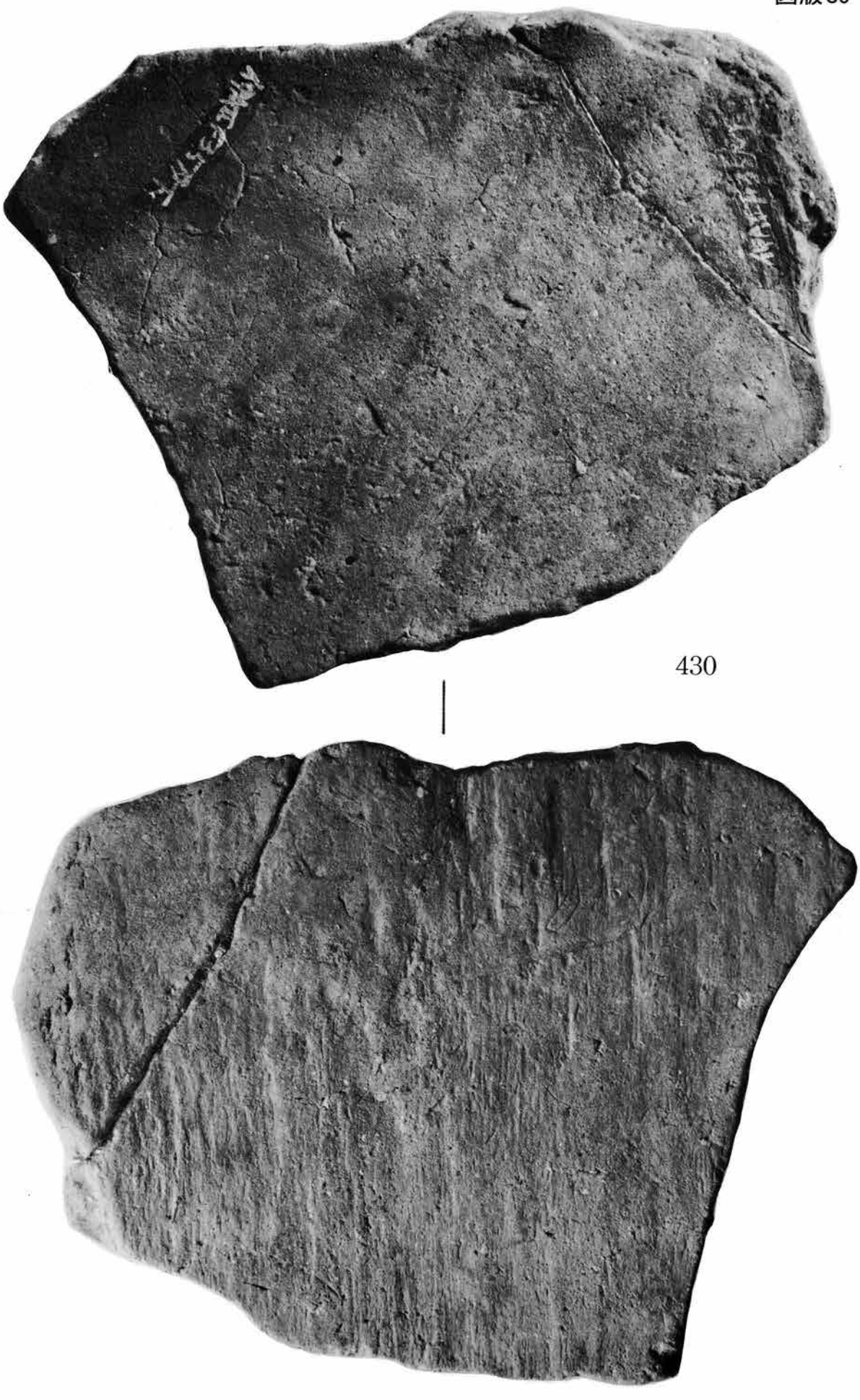


288



335

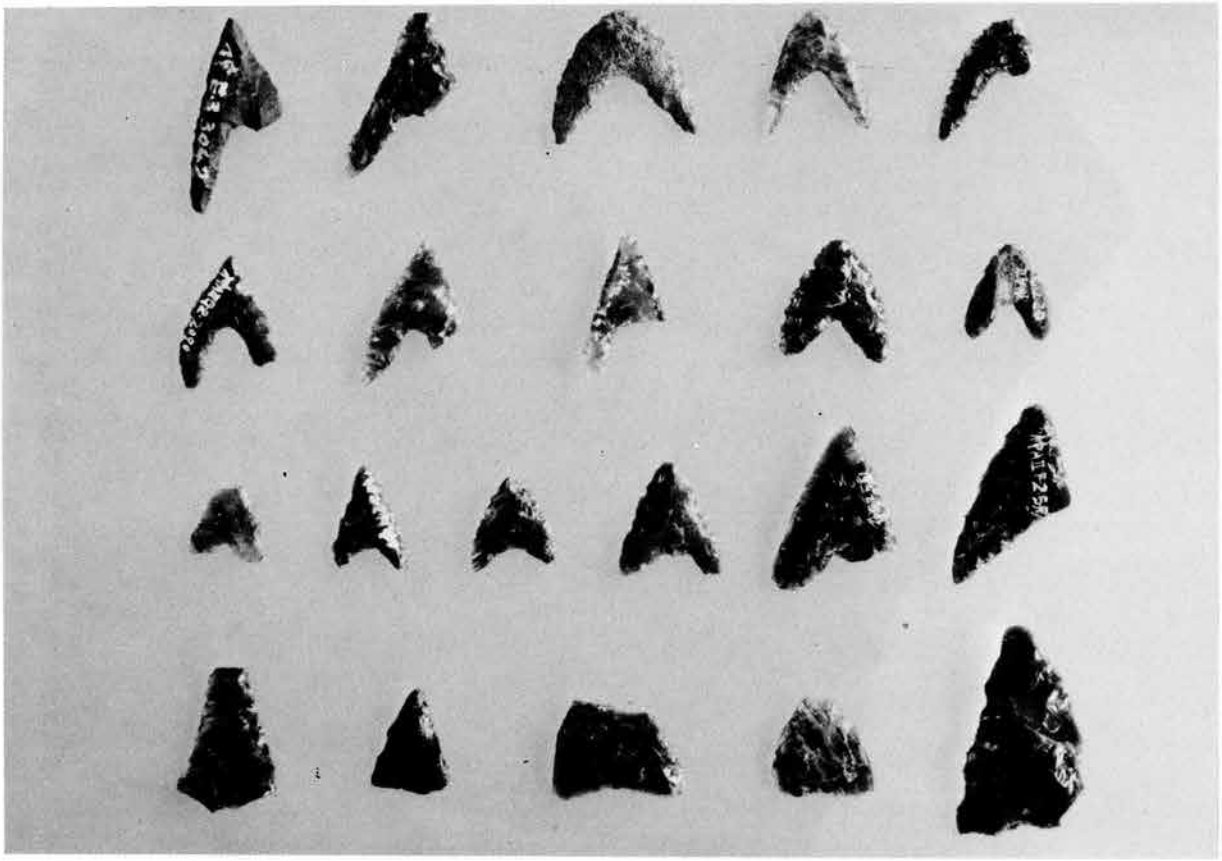
第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（35）



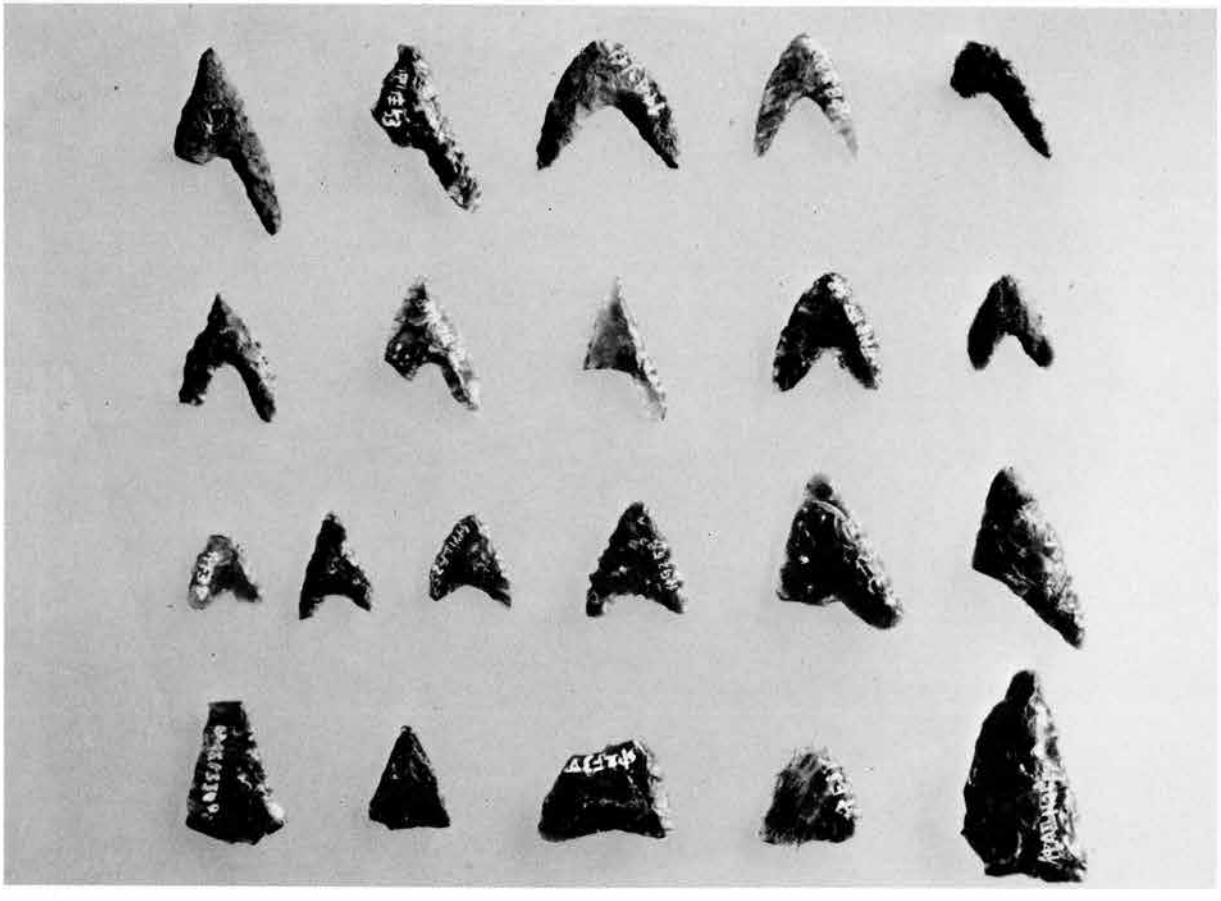
430

第Ⅱ次調査出土の縄文時代草創期土器（36）

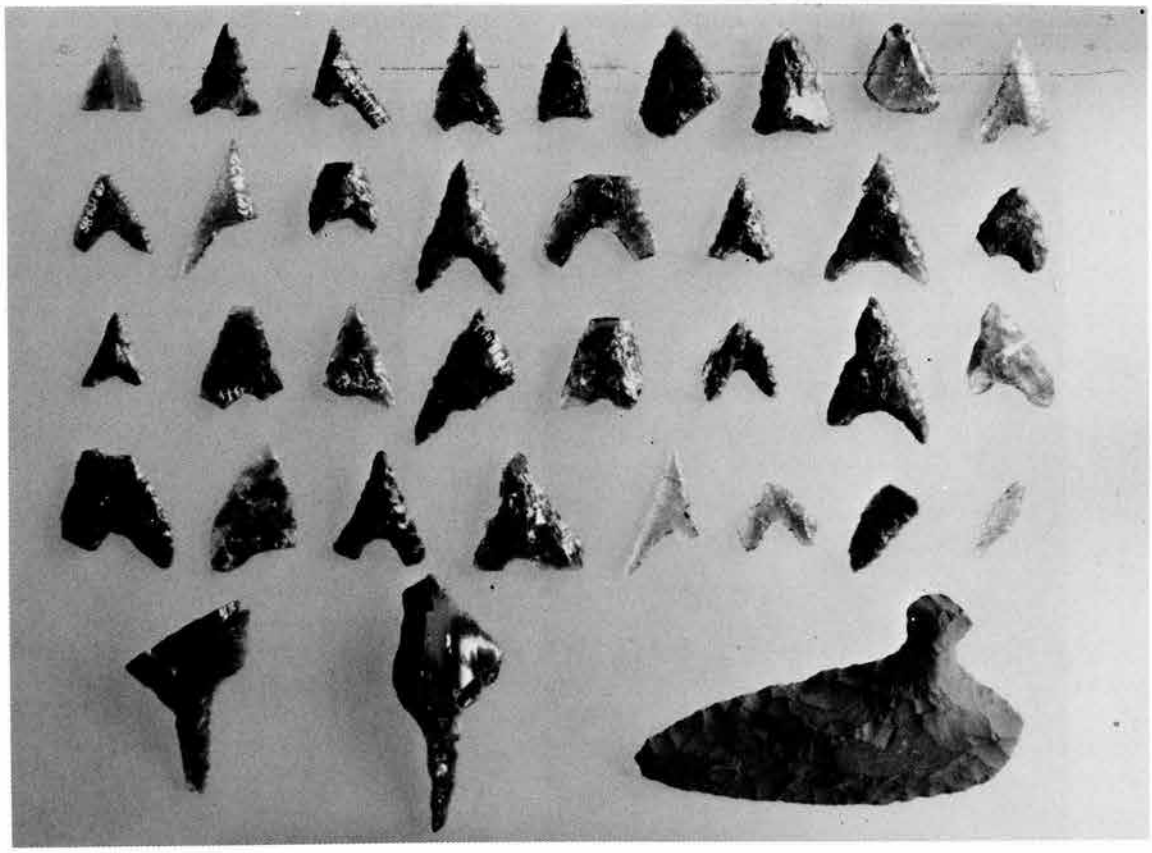
図版90



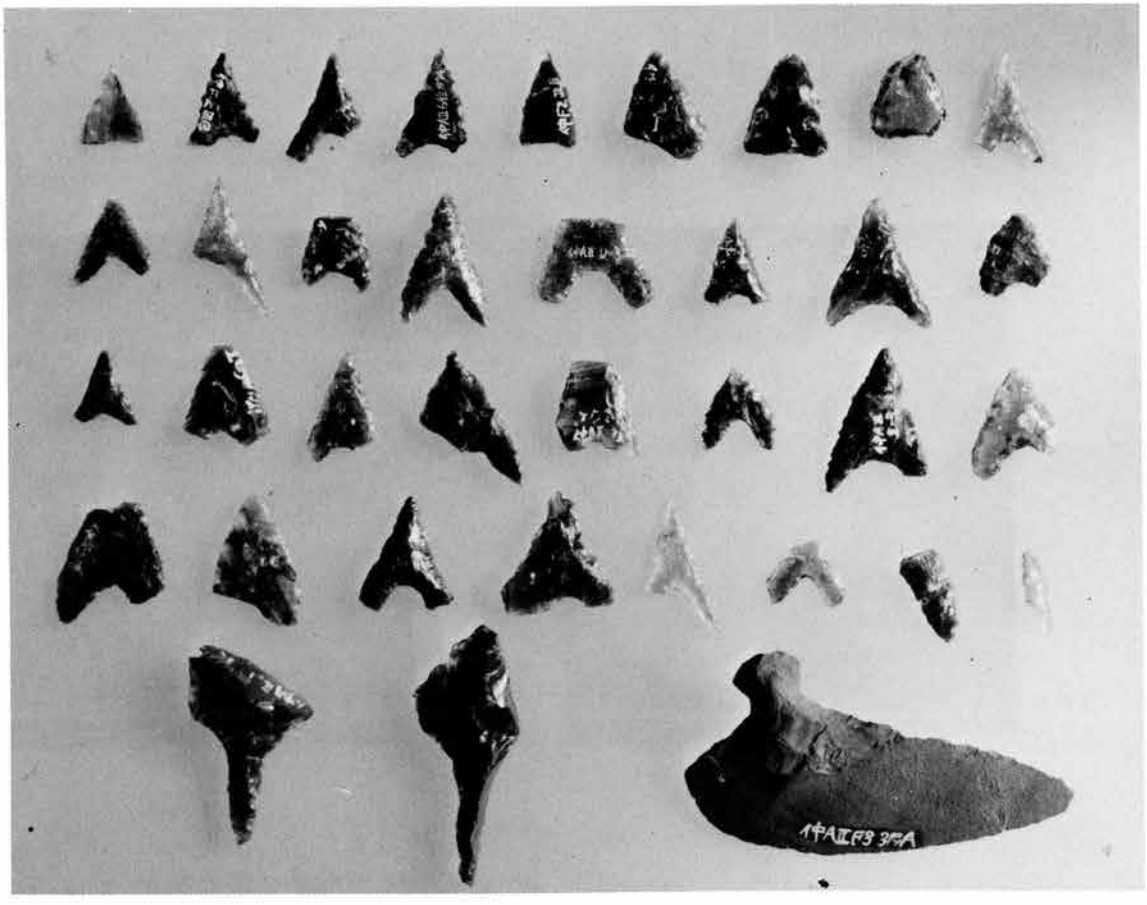
第Ⅱ次調査出土の石器（２）縄文時代草創期後半



同　　上



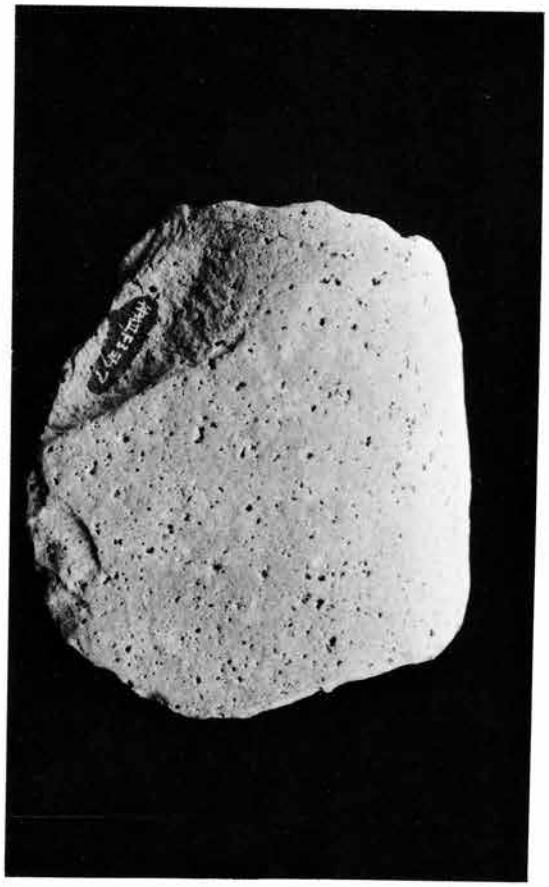
第Ⅱ次調査出土の石器（３）縄文時代早期～中期



同　　上

図版92

礫　　器

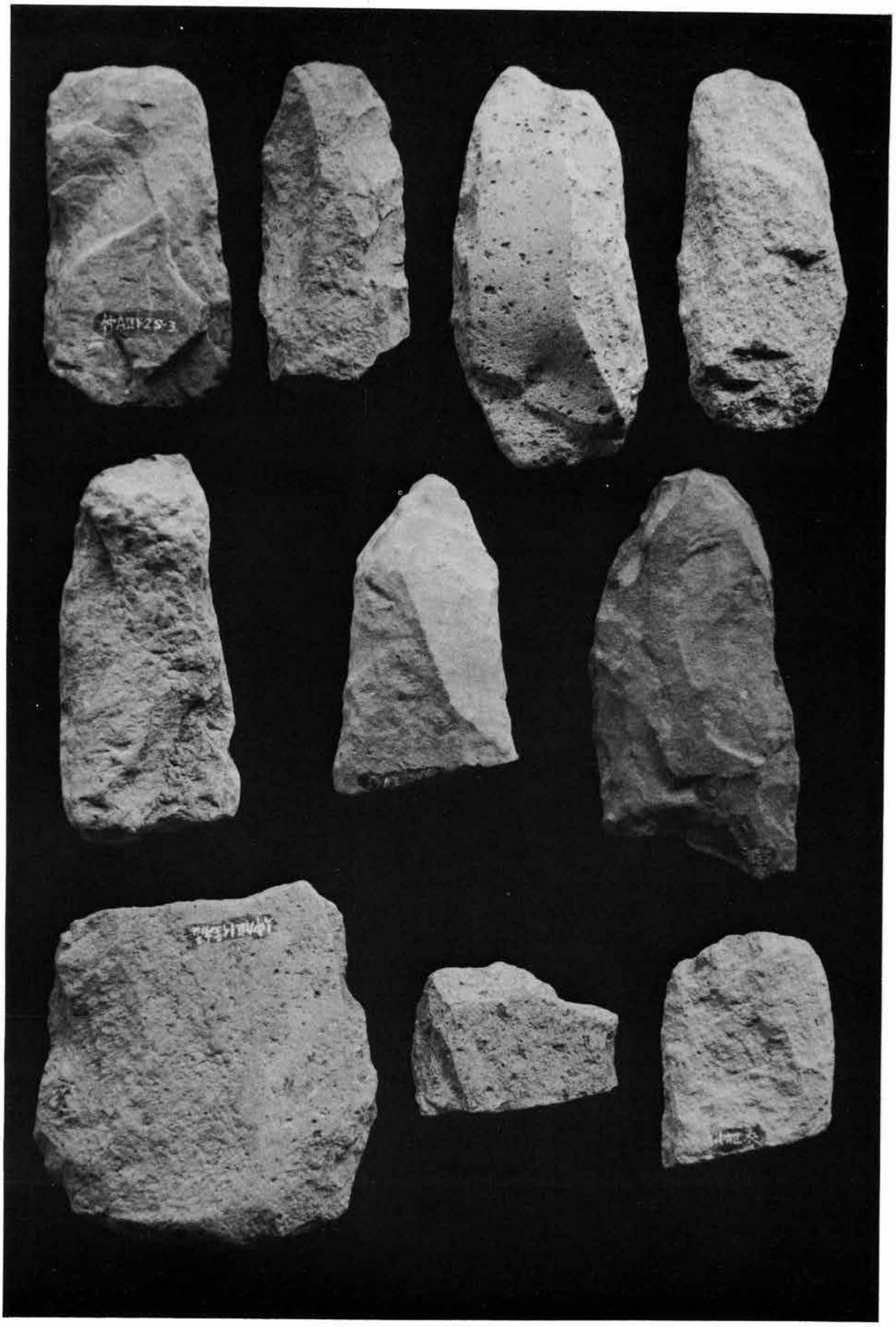


同　左

局部磨製石斧

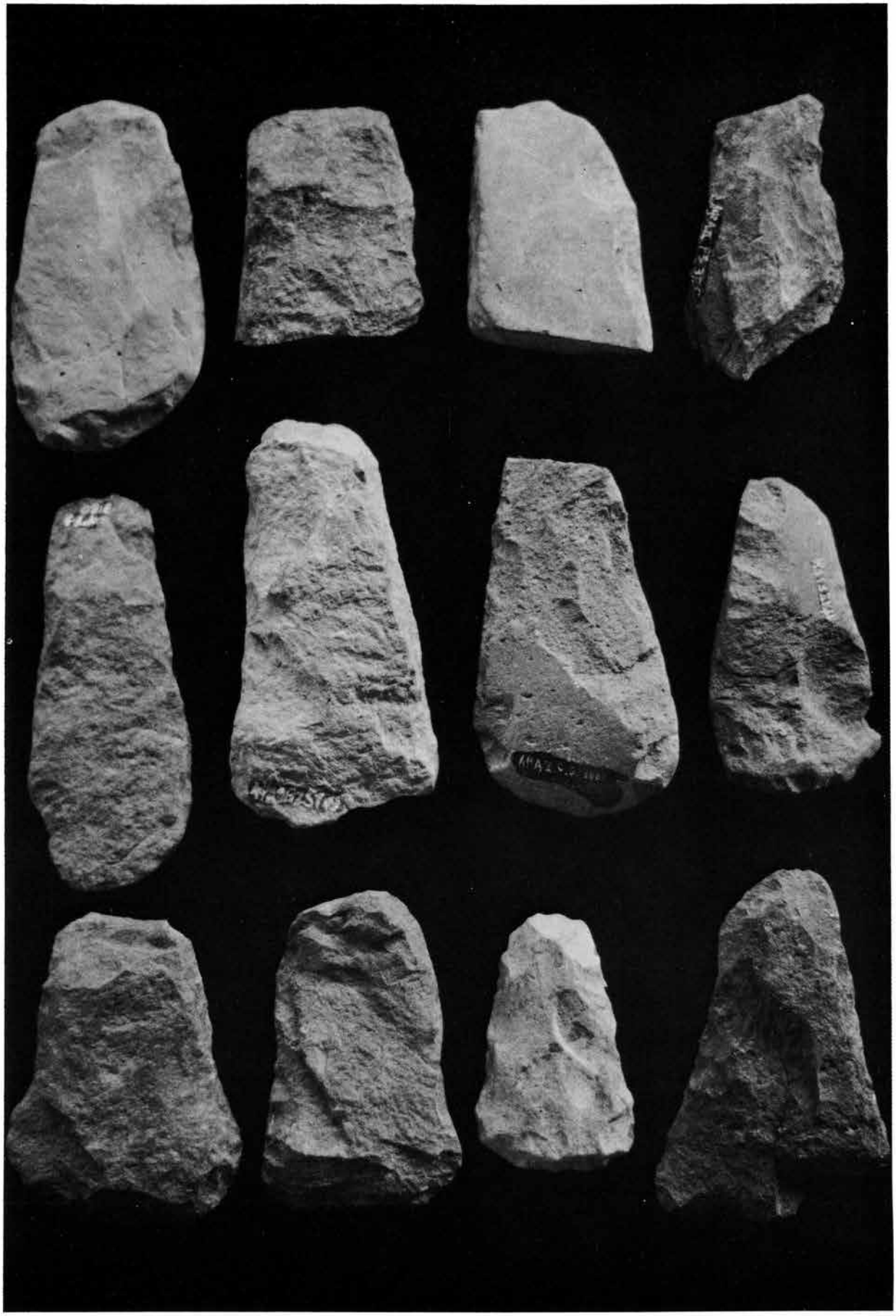
同　左

第Ⅱ次調査出土の石器（4）

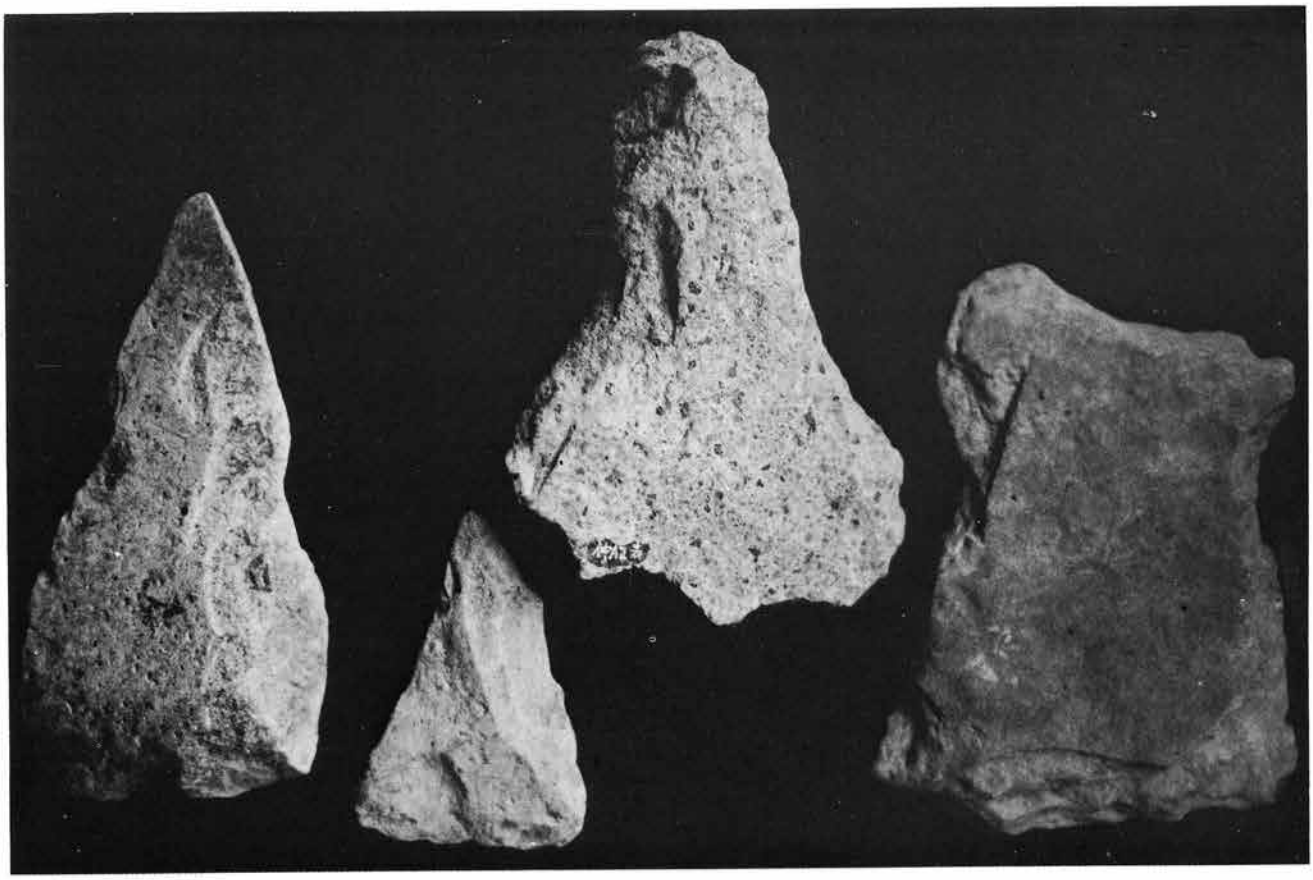


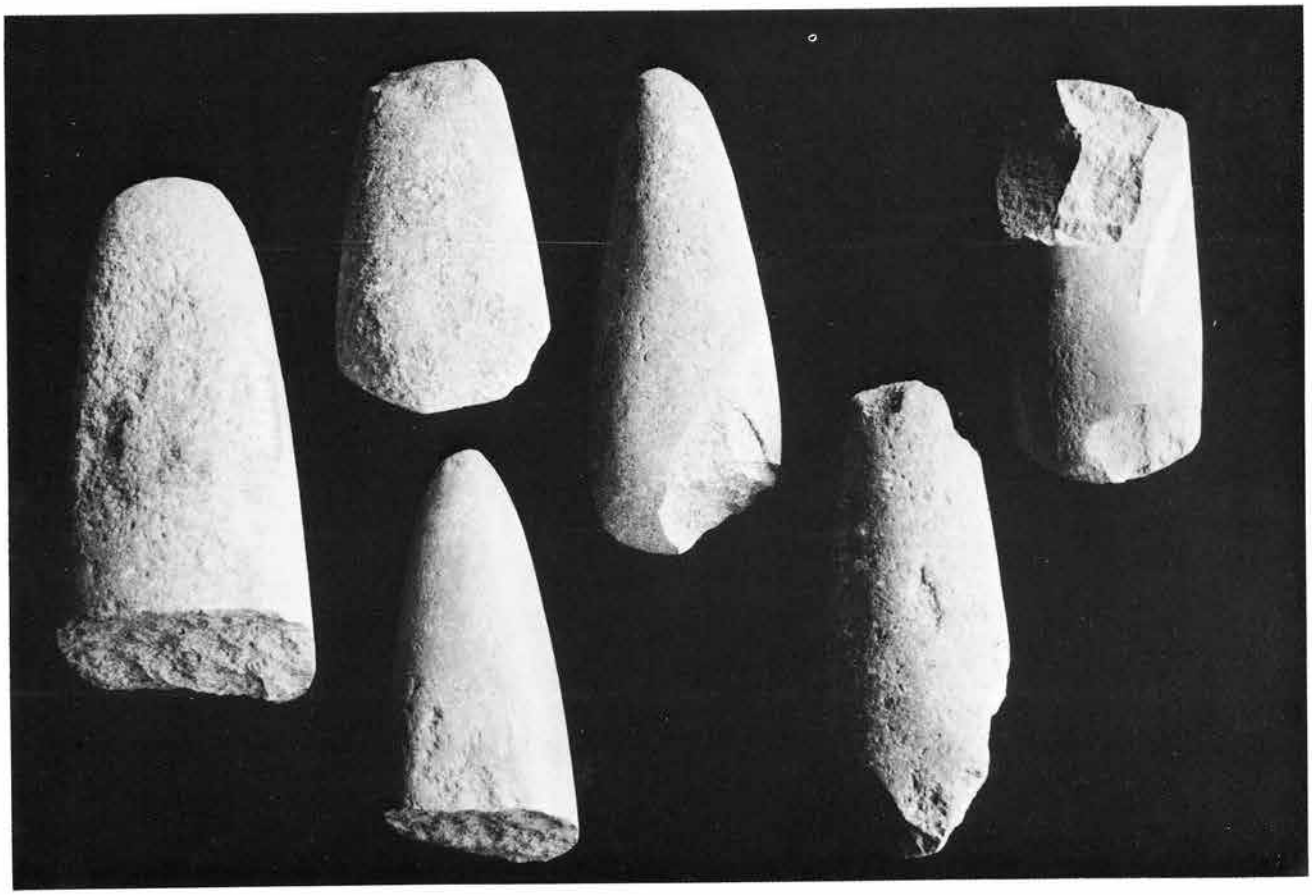
第Ⅱ次調査出土の石器（５）

図版94



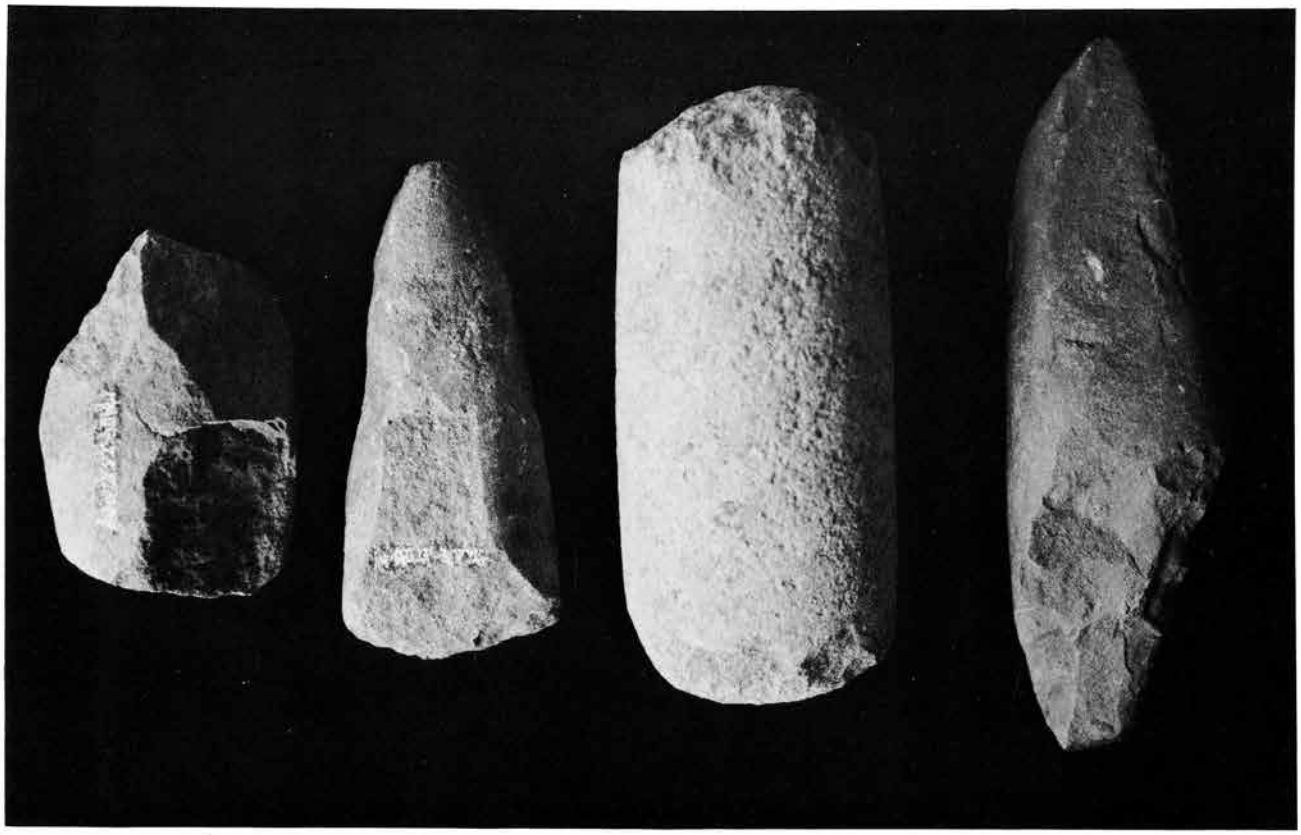
第Ⅱ次調査出土の石器（6）

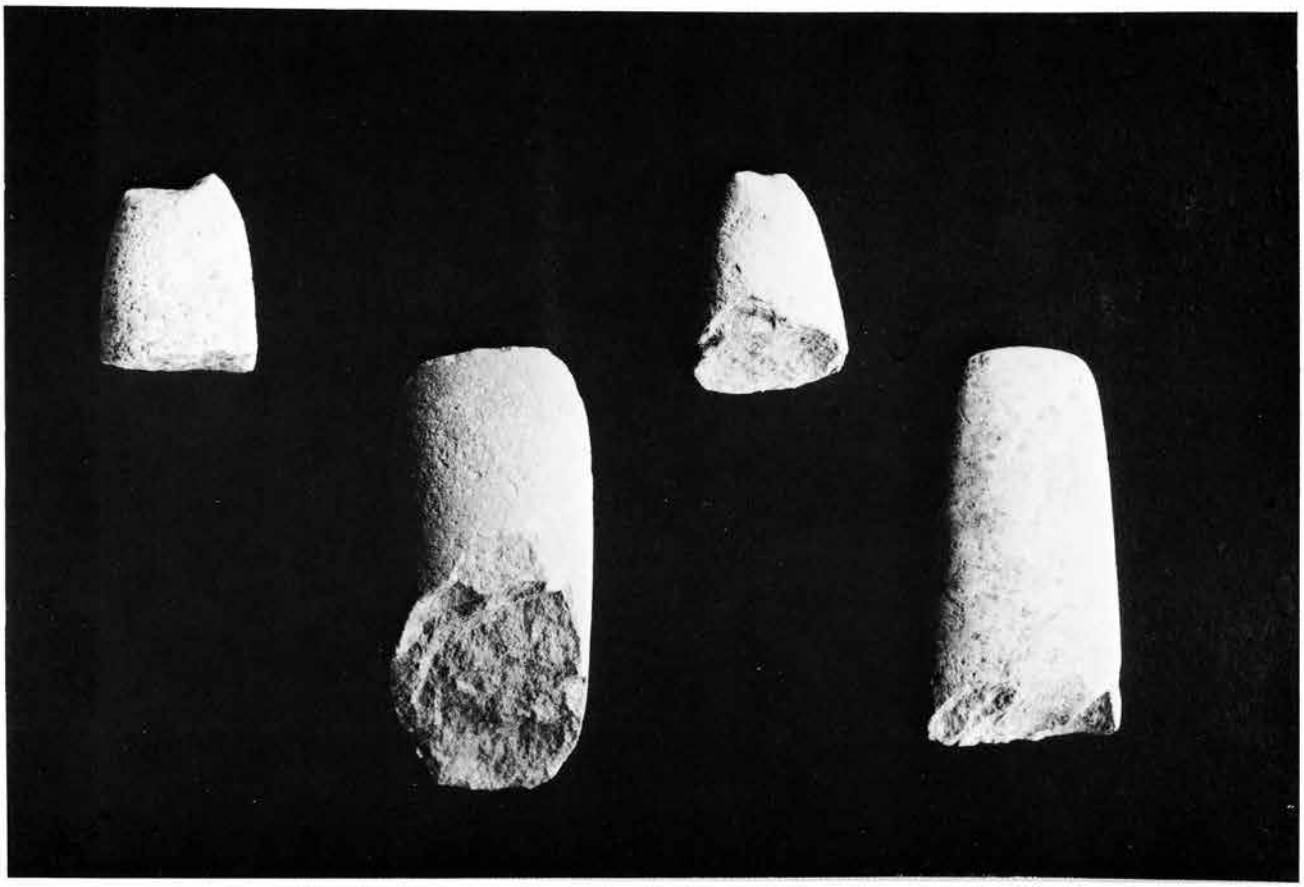




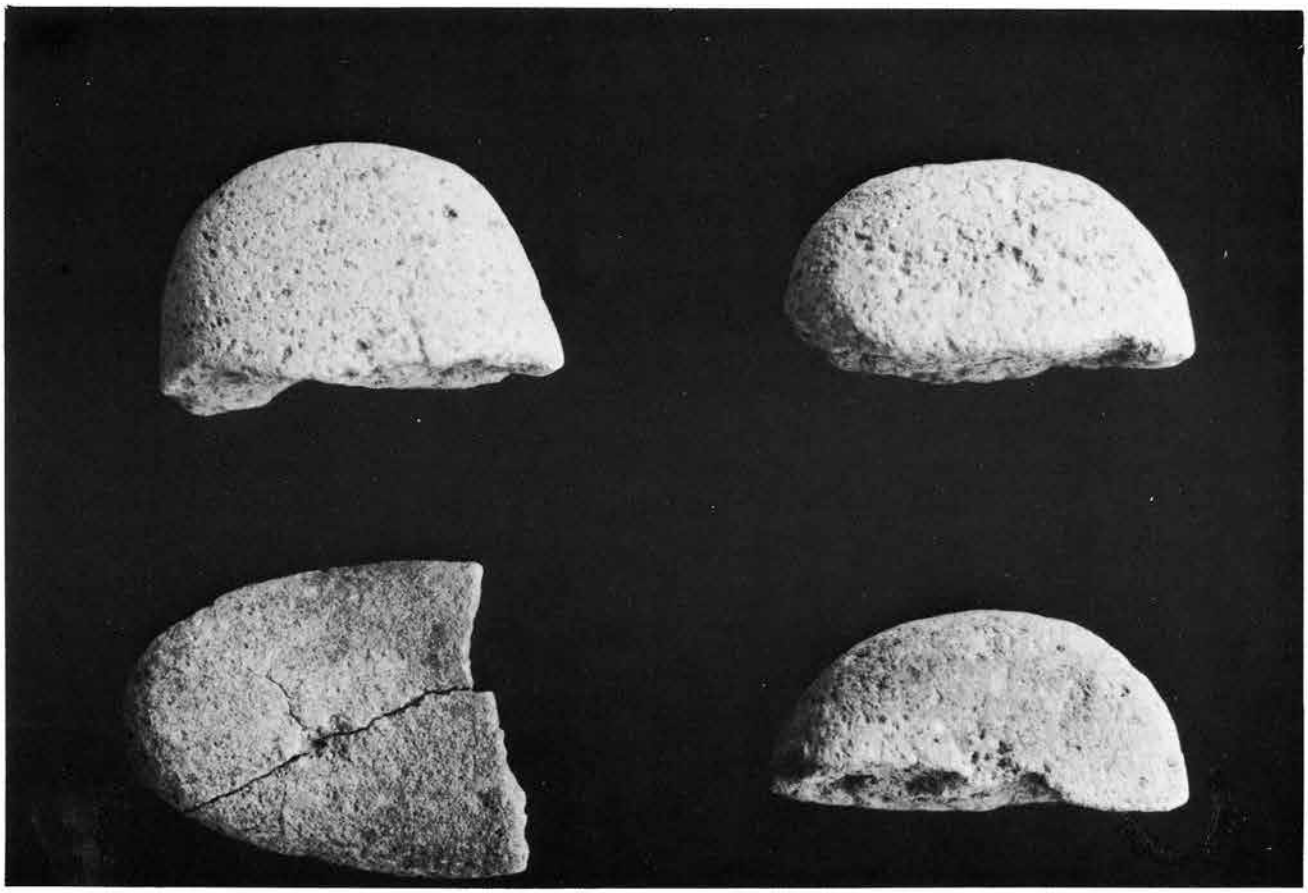
第Ⅱ次調査出土の石器（7）

図版96



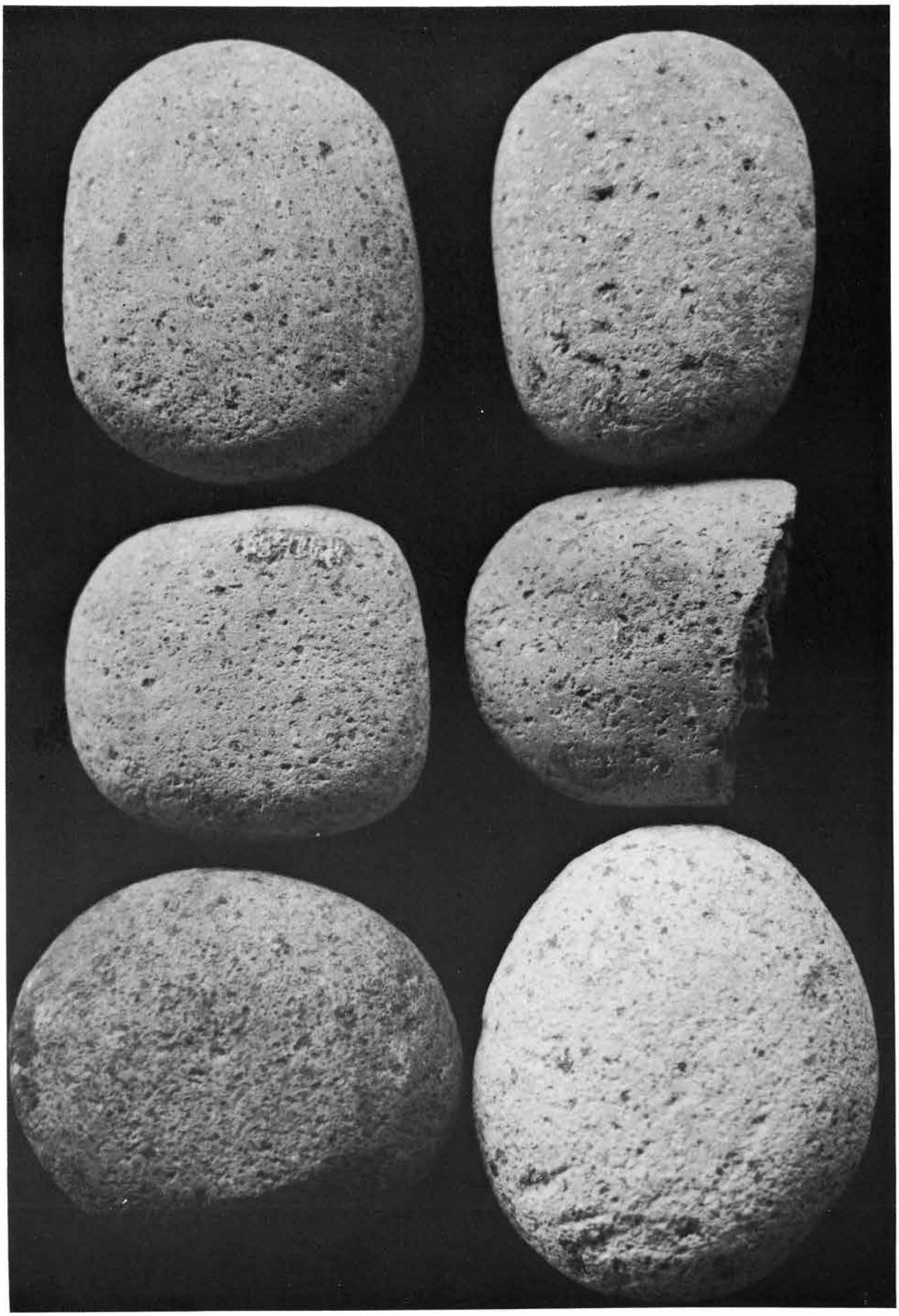


第Ⅱ次調査出土の石器（8）

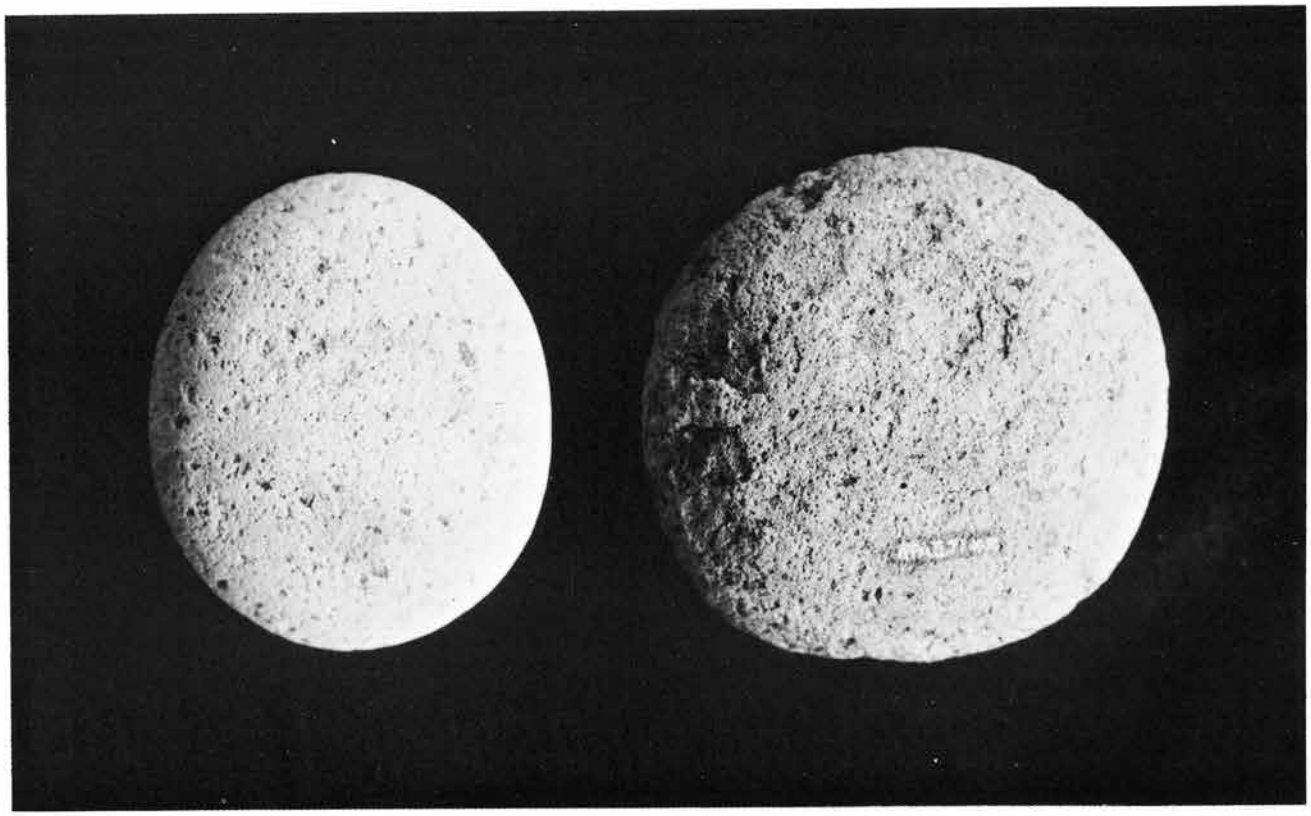


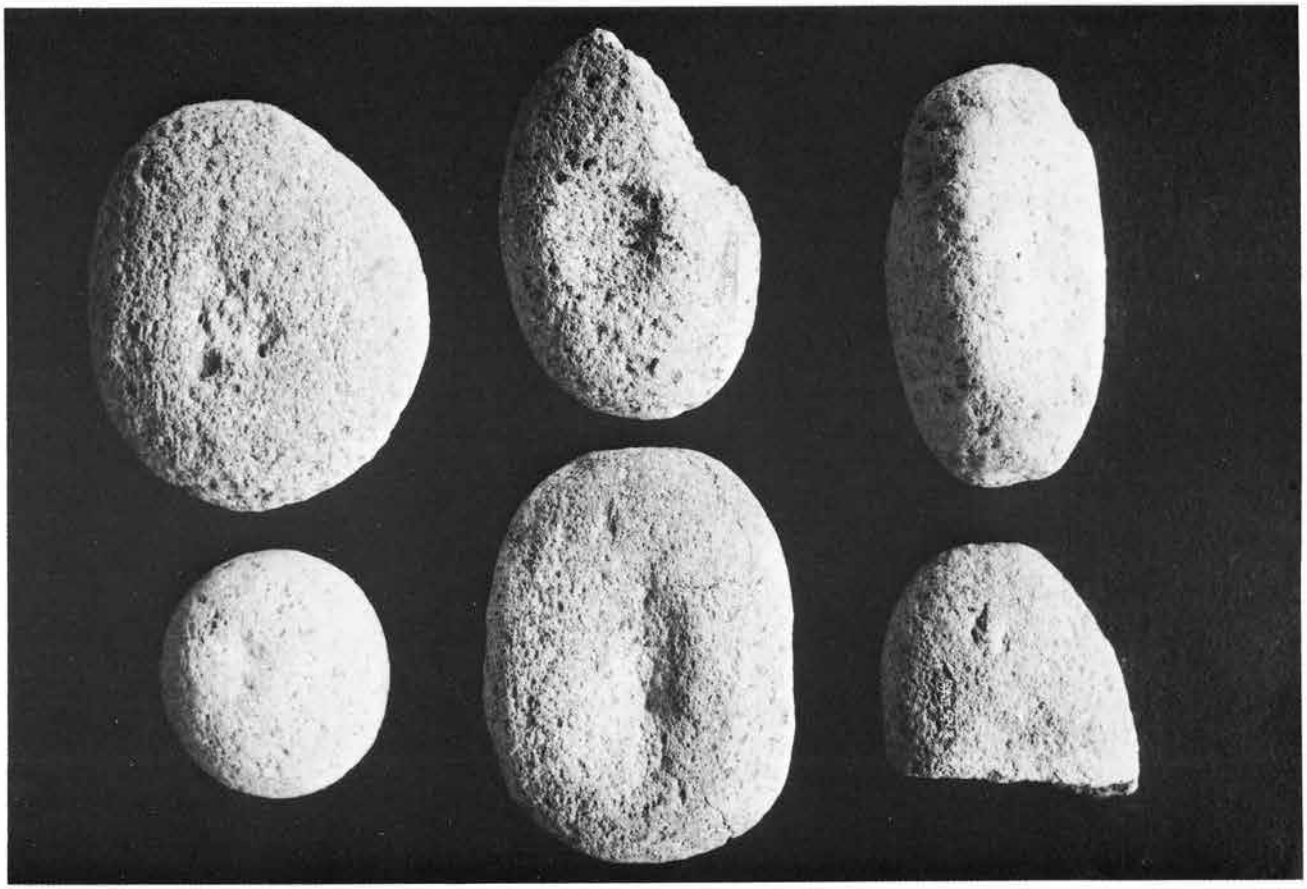
第Ⅱ次調査出土の石器（９）

図版98



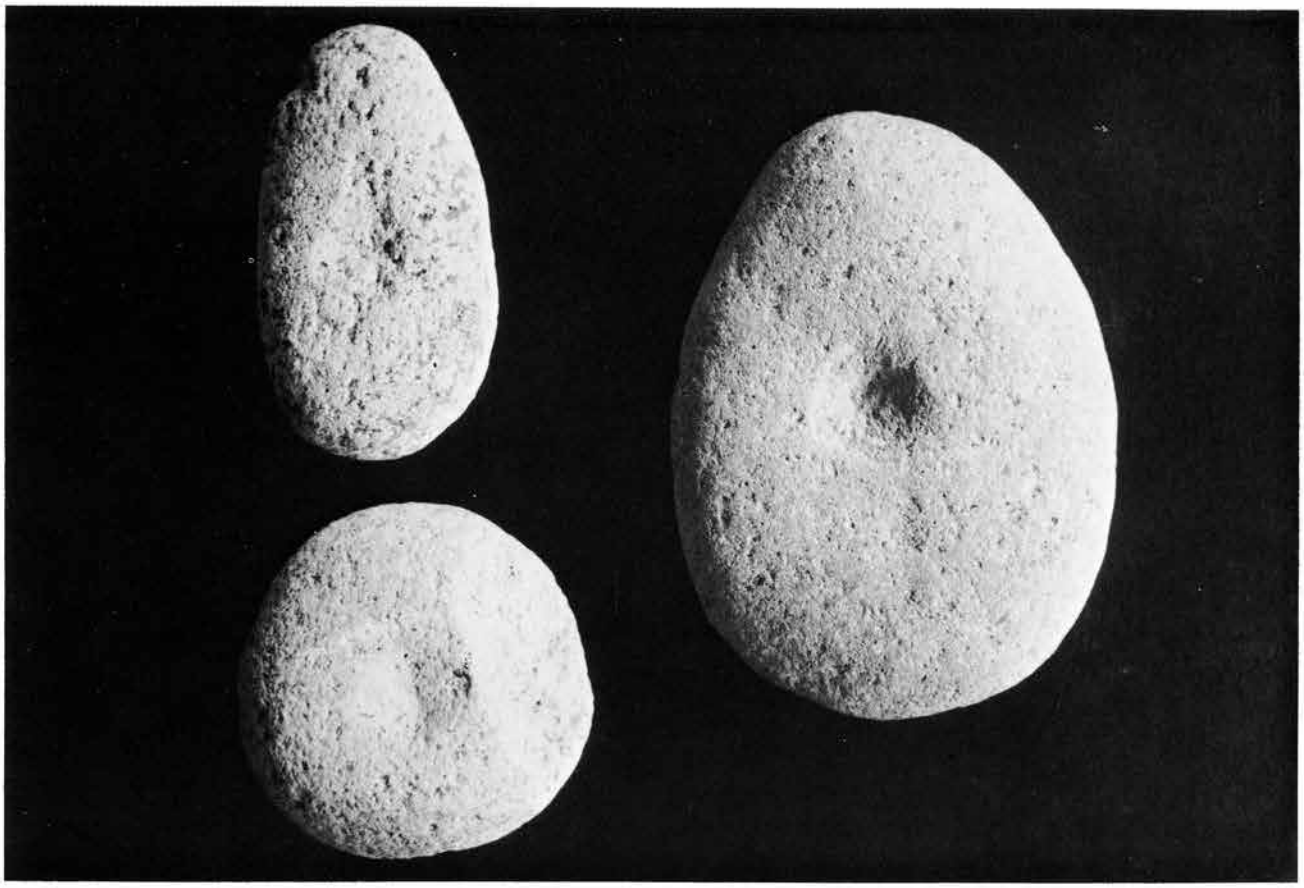
第II次調査出土の石器（10）

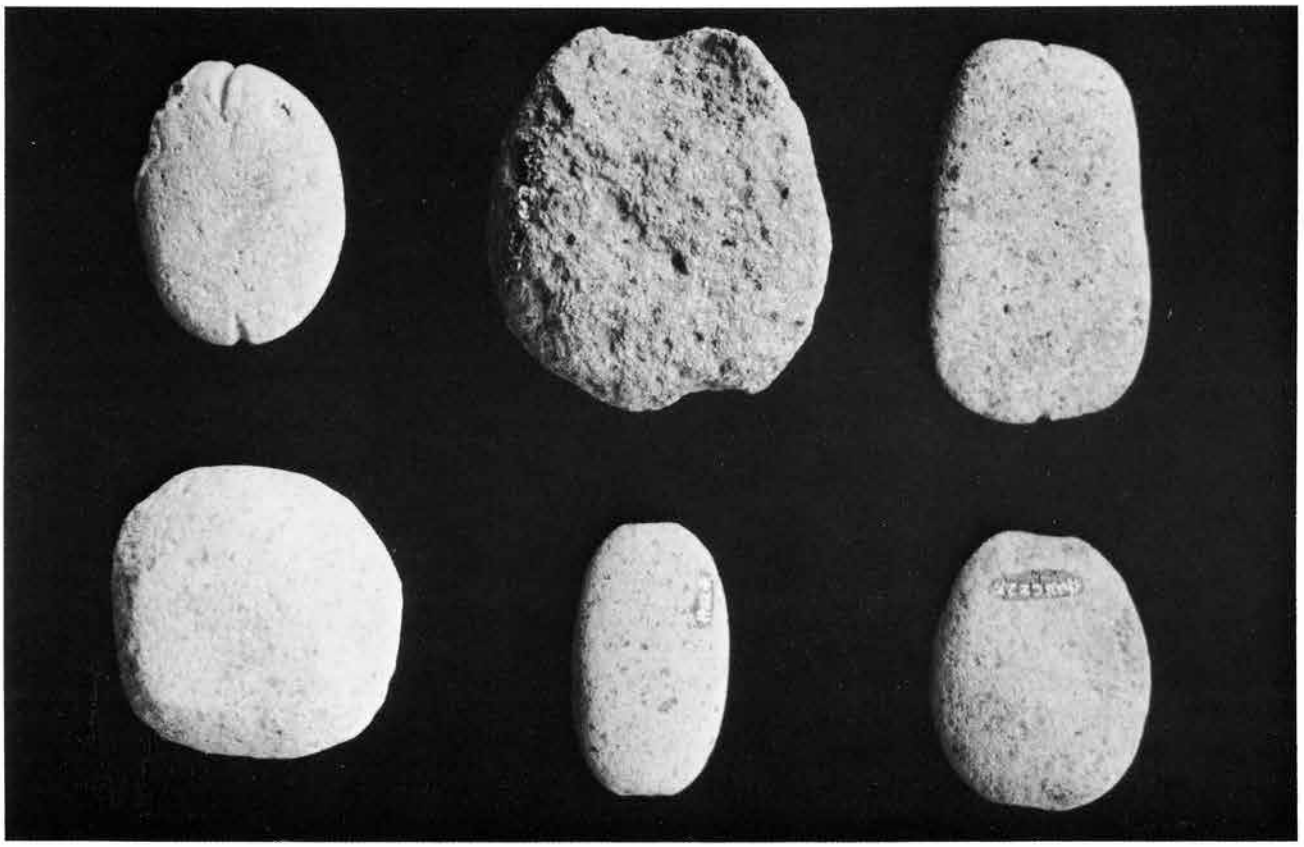




第II次調査出土の石器（11）

図版100





第Ⅱ次調査出土の石器（12）

1

2

3

4

第II次調査出土の縄文時代中期土器（37）

図版102

1

2

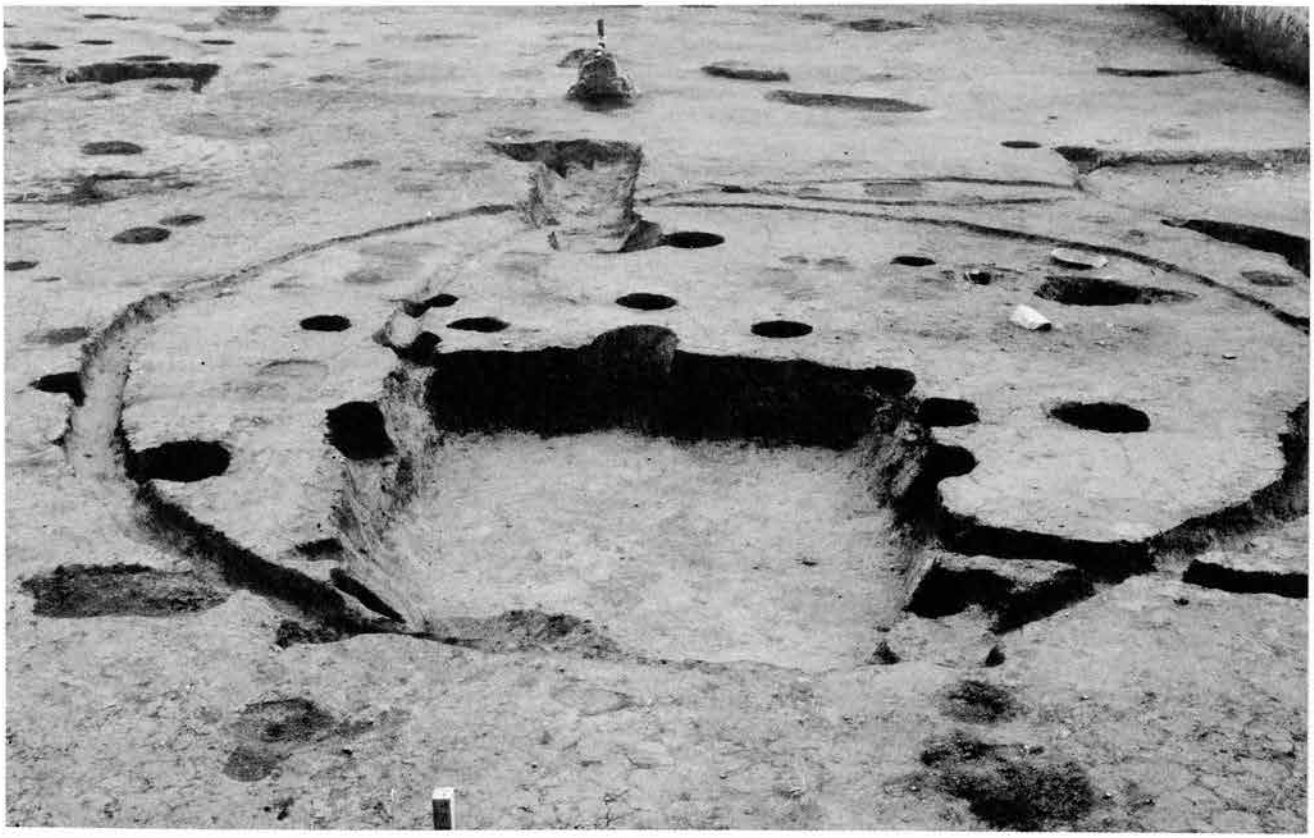
3

4

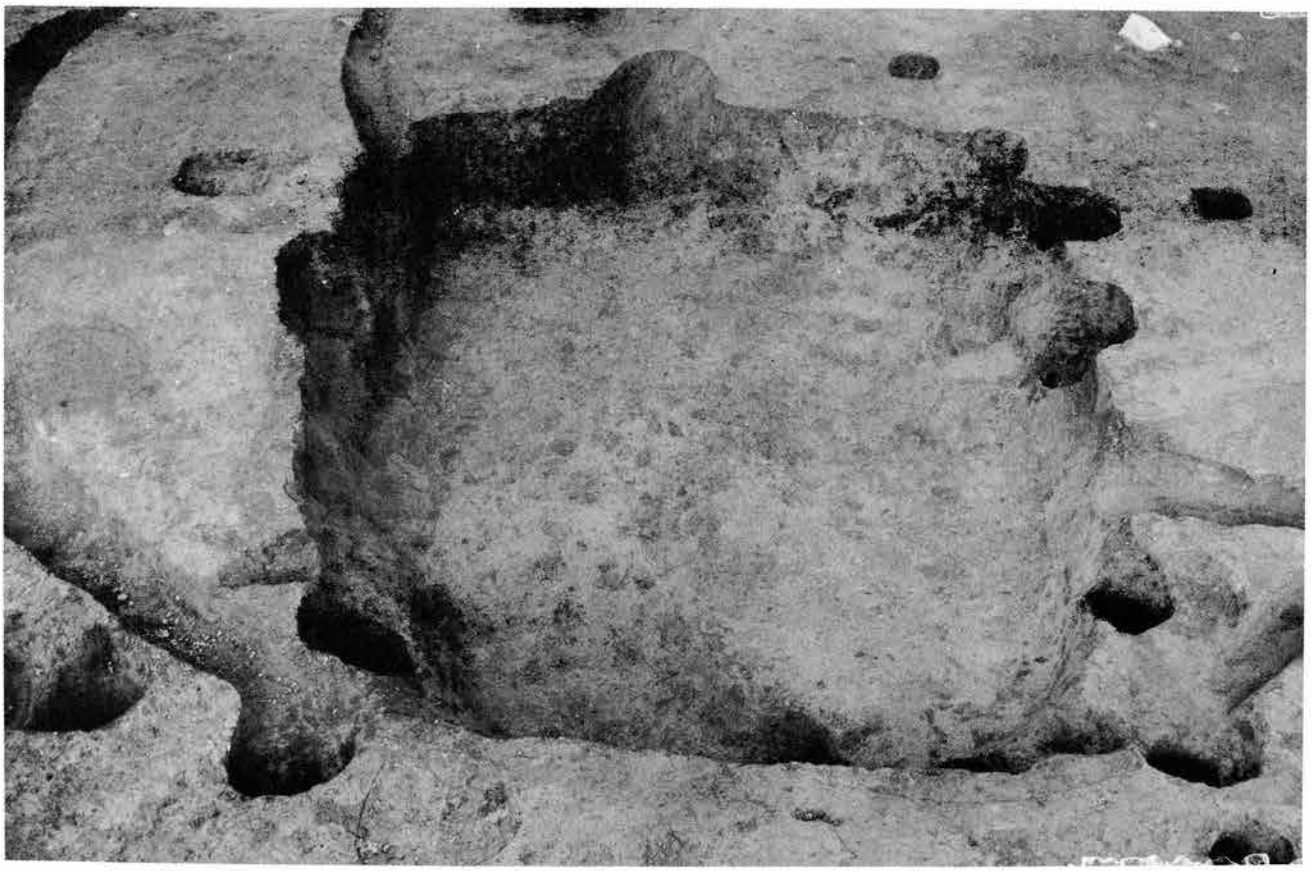
5

6

第Ⅱ次調査出土の縄文時代中期土器（38）

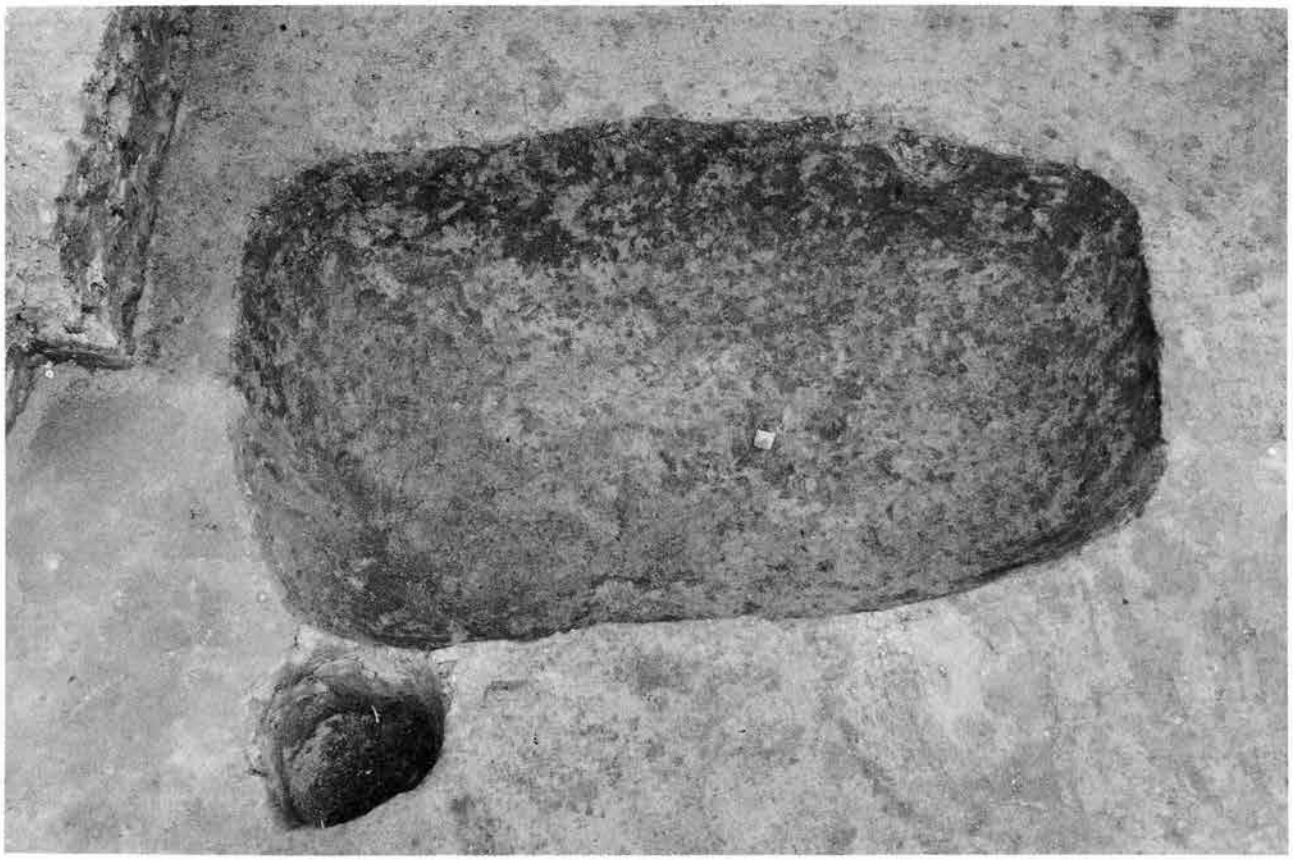


平安時代末期竪穴式住居跡（完掘した状態・西側より）— 1



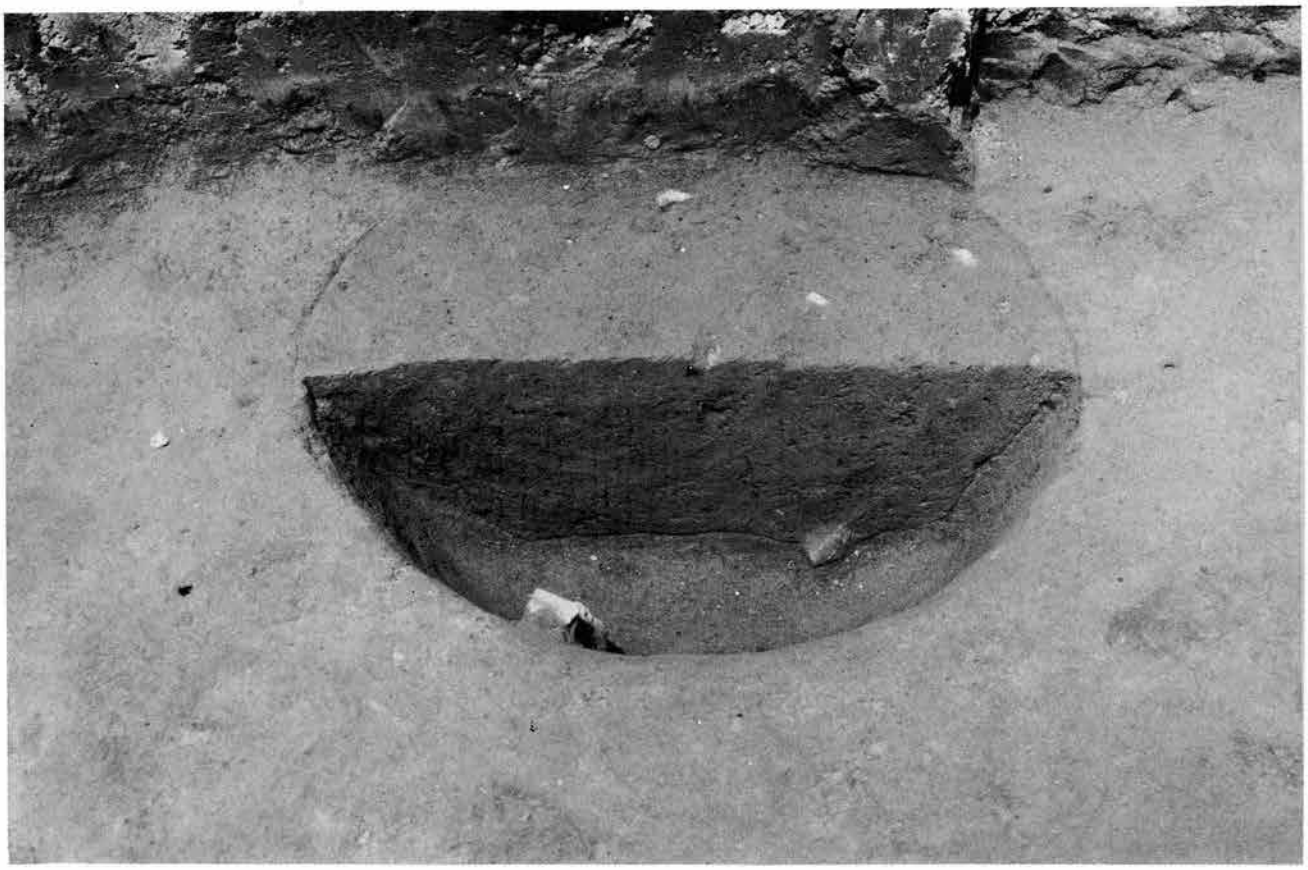
同　　上 — 2

図版104



方形土坑（完掘した状態・南側より）— 1

同　　上（東側より）— 2



第5号円形土坑（半截した状態・南側より）—1

第5号円形土坑（完掘した状態・南側より）—2

図版106

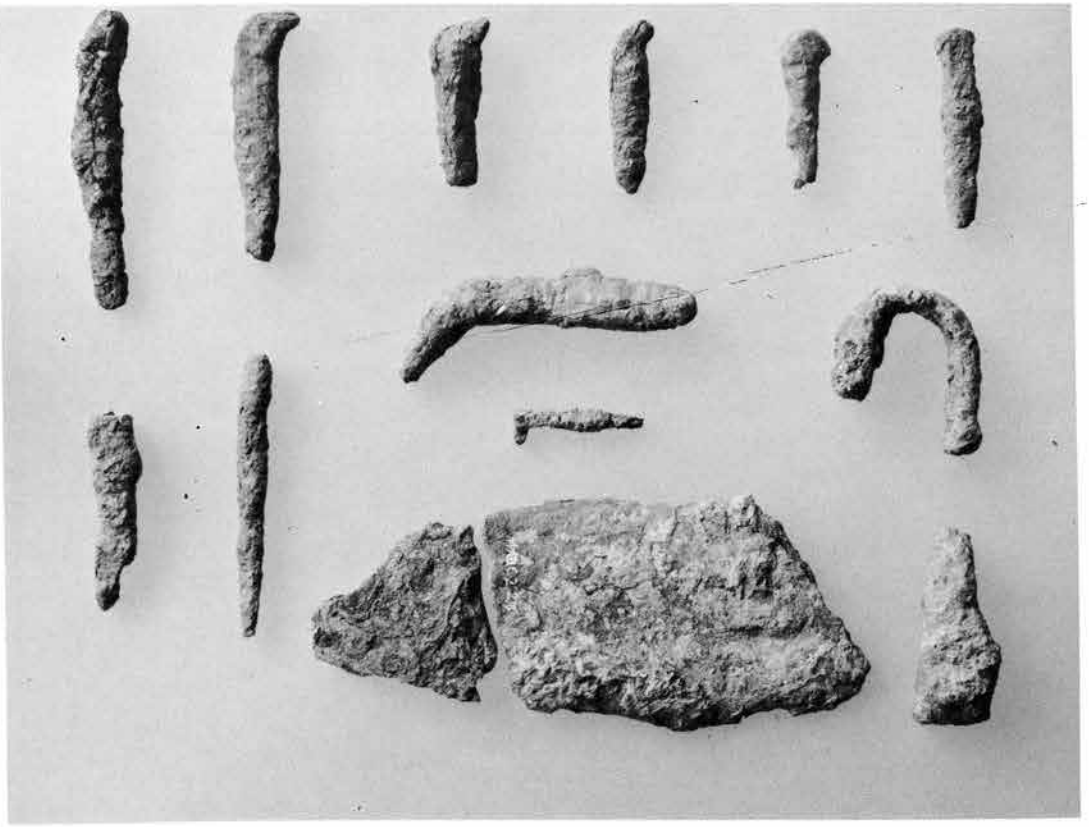
平安時代末期 河川跡（北西側より）— 1

同　　上（西側より）— 2

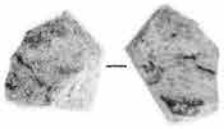
平安時代末期 河川跡から検出された木製品 （漆塗木椀）

同　　上（木　皿）

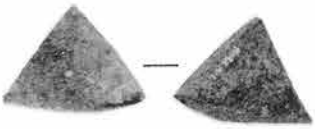
図版108

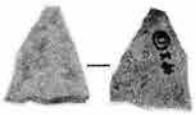


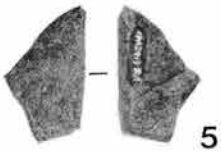
第Ⅱ次調査出土の鉄製品・砥石・桃の種子


1

2


3

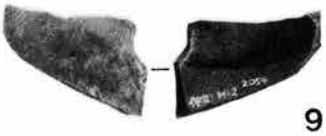

4


5

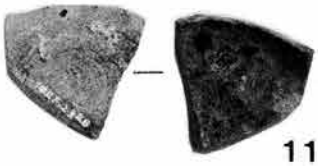
6

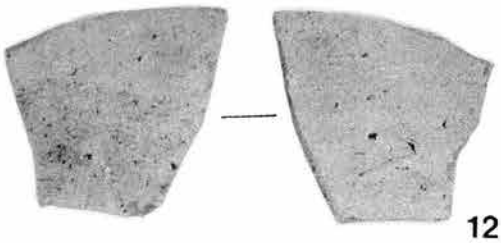
7

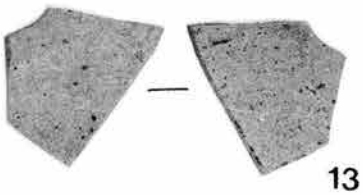
8

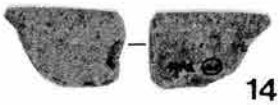

9

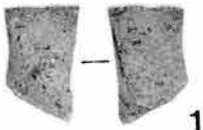
10


11

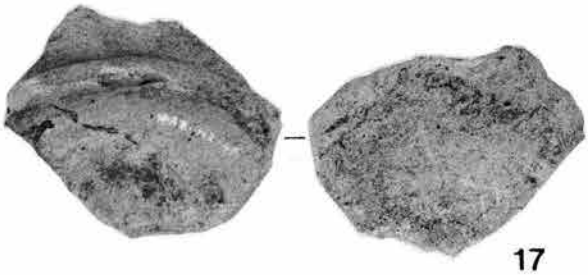

12

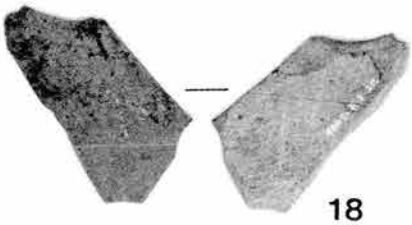

13

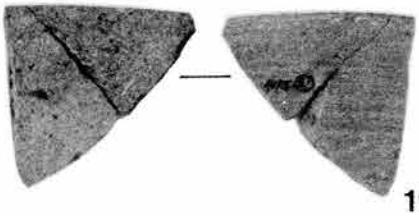

14


15

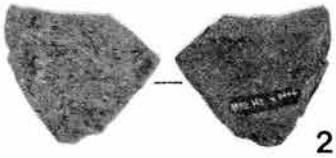
16

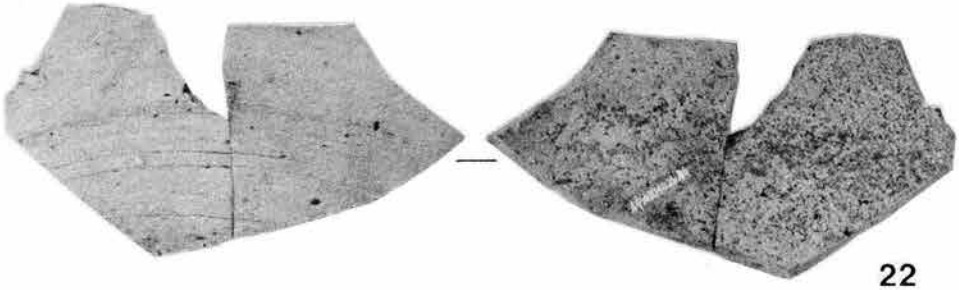

17


18


19

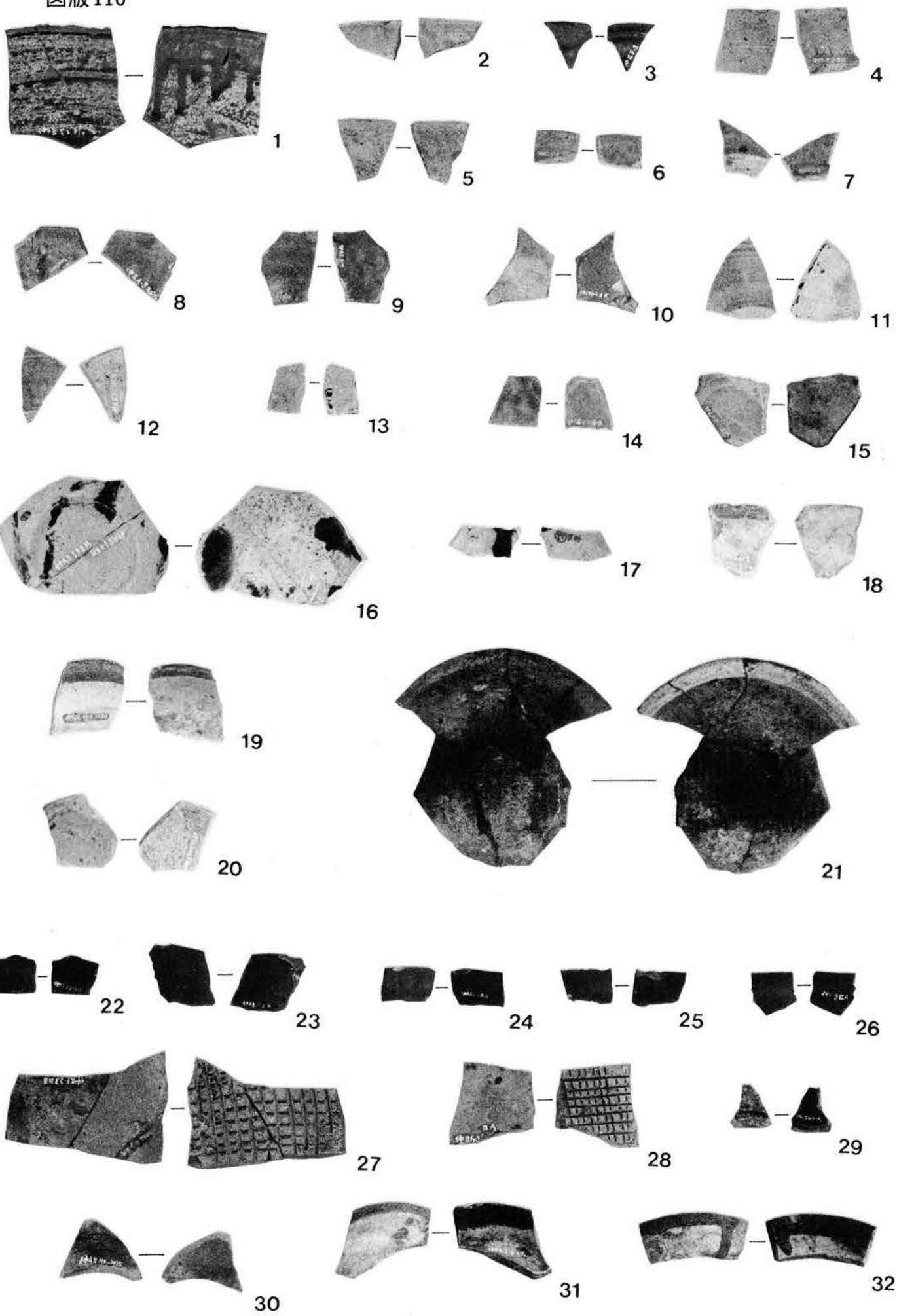
20


21


22

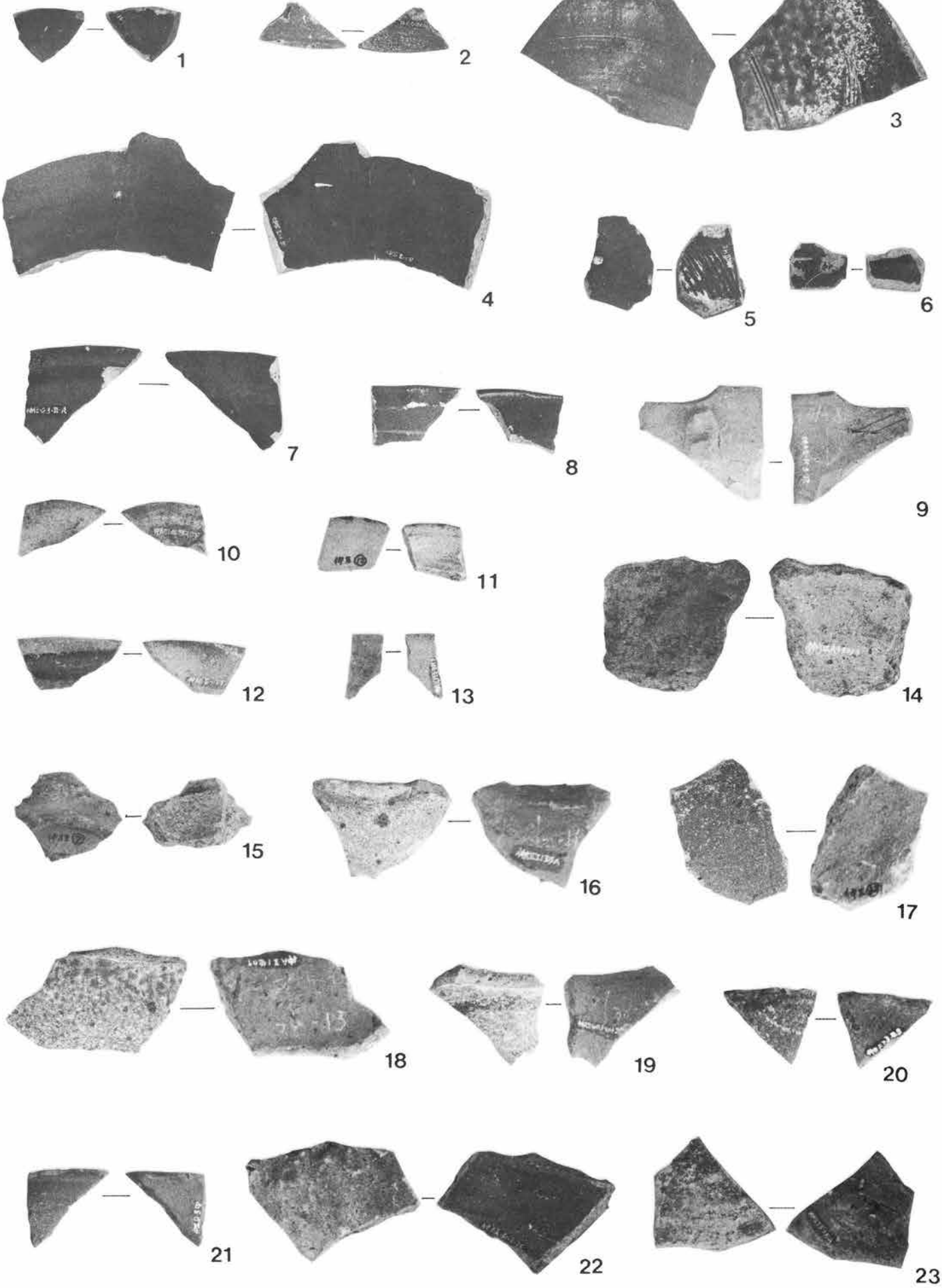
古瀬戸系陶器

図版110



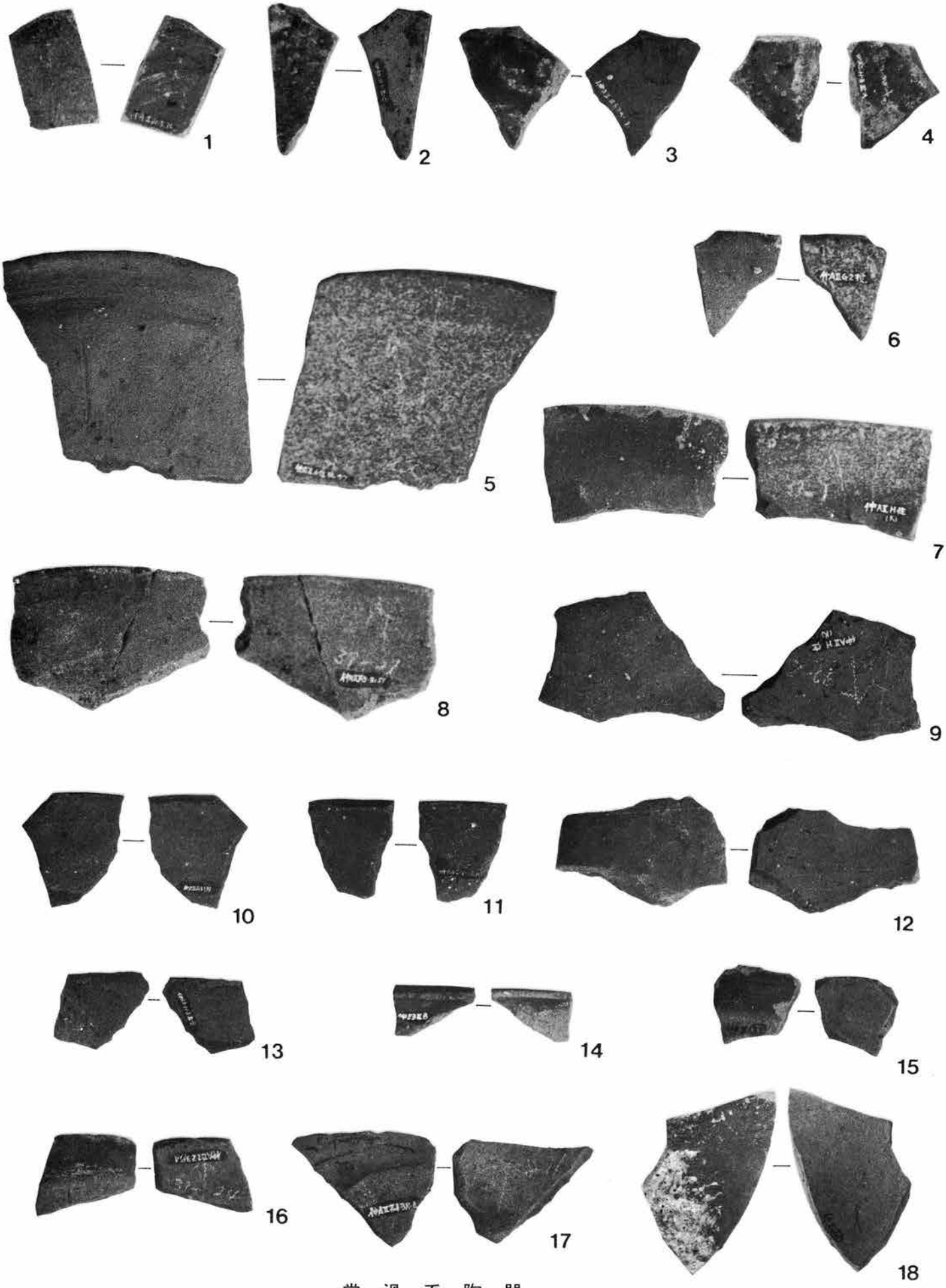
古瀬戸系陶器．美濃・瀬戸系陶器

図版111



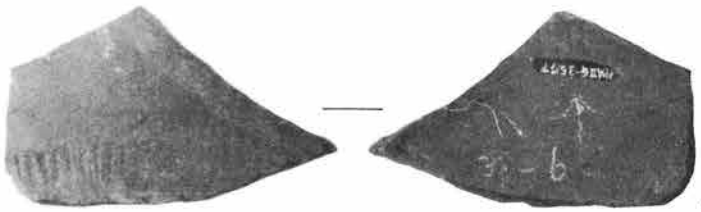
美濃・瀬戸系陶器．常滑系陶器

図版112

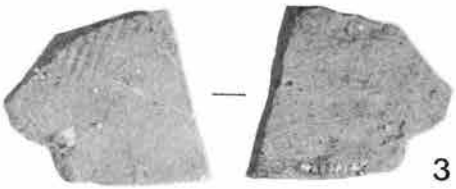


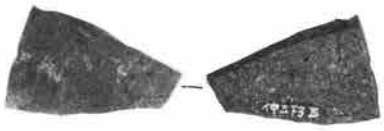
常 滑 系 陶 器

図版113


1

2


3


4

5

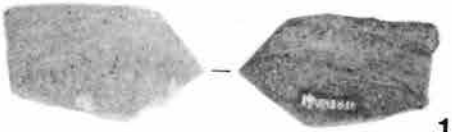
6

7

8

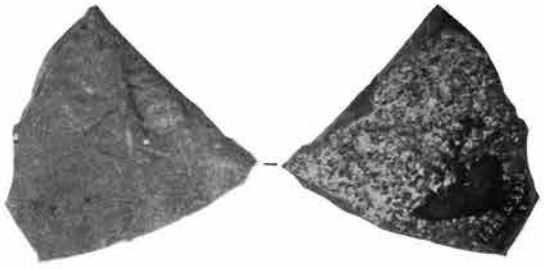
9

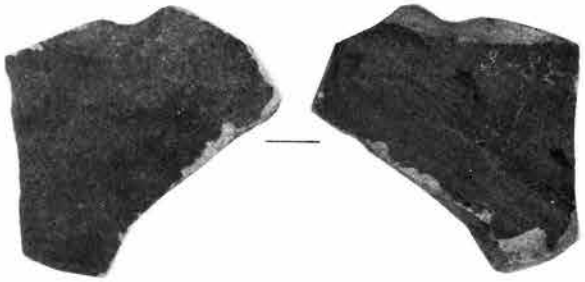
10


11

12

13

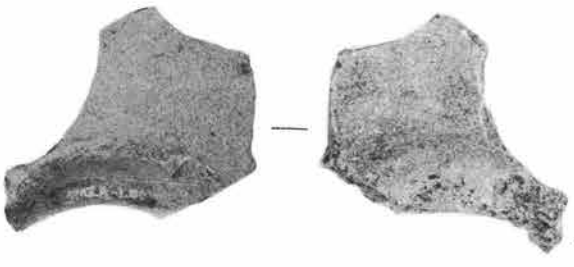

14

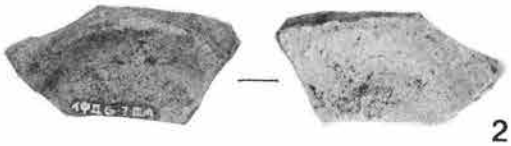

15

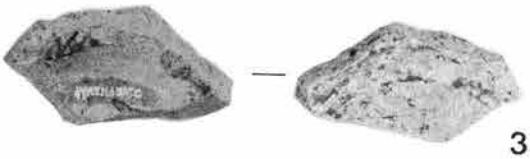
16

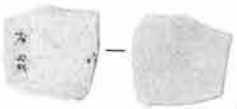
渥 美 系 陶 器

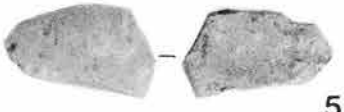
図版114


1

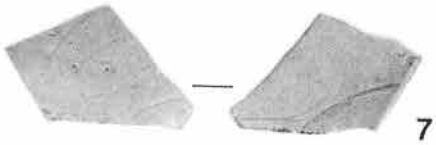

2

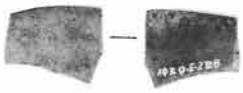

3

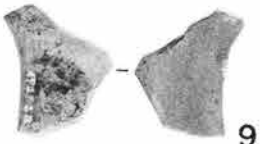

4

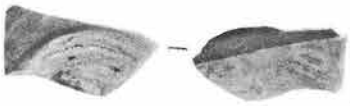

5

6


7

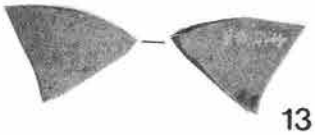

8


9

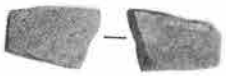

10

11

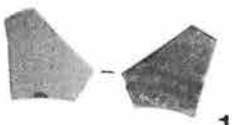
12

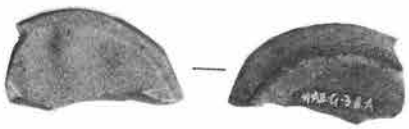

13

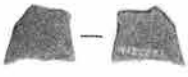
14

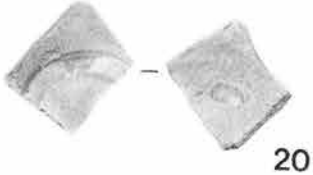

15

16

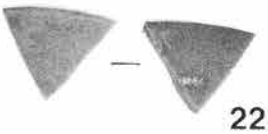

17

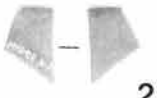

18

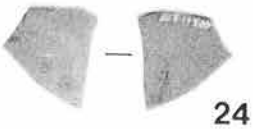

19

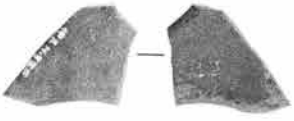

20

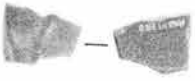
21


22

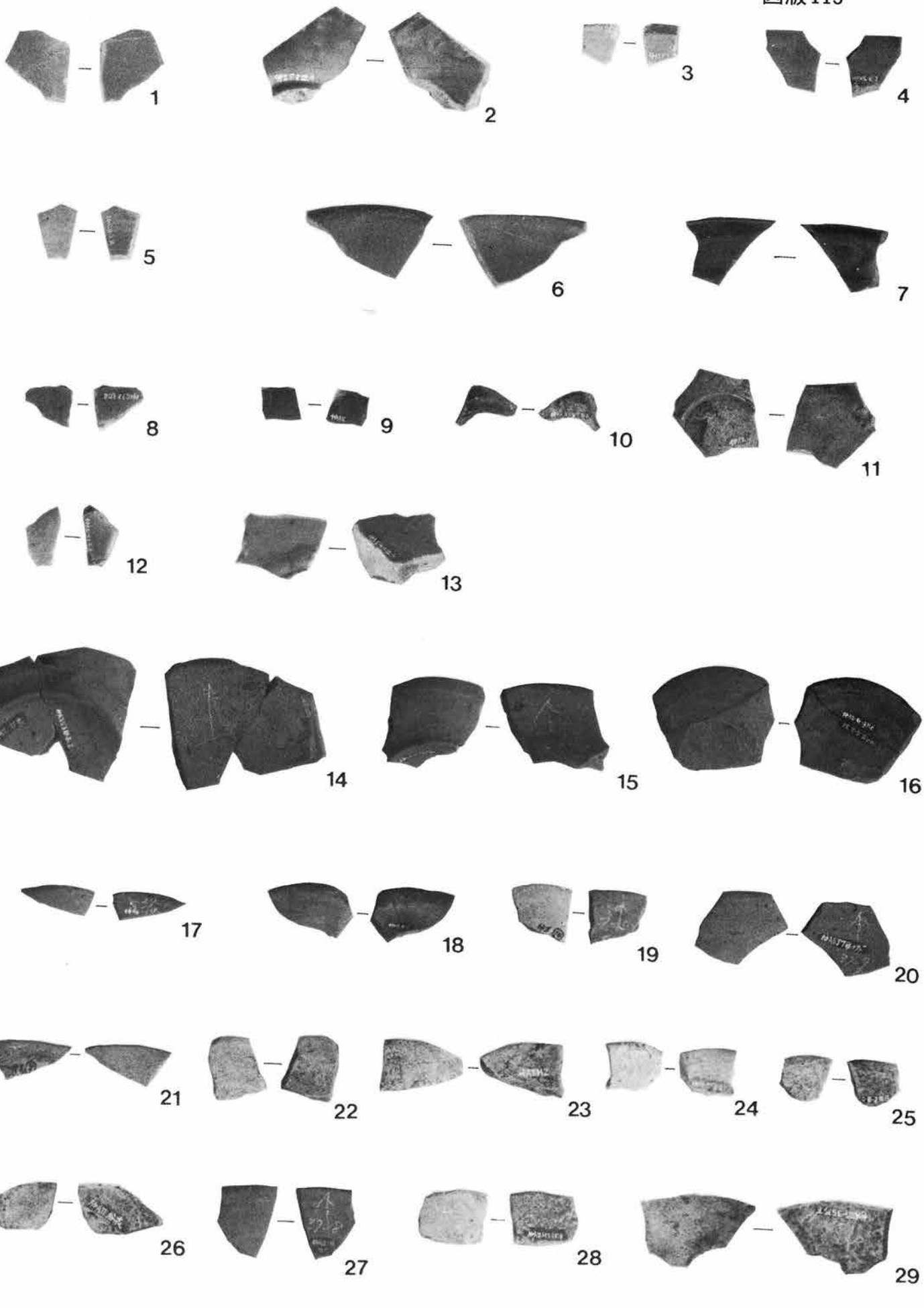

23


24


25

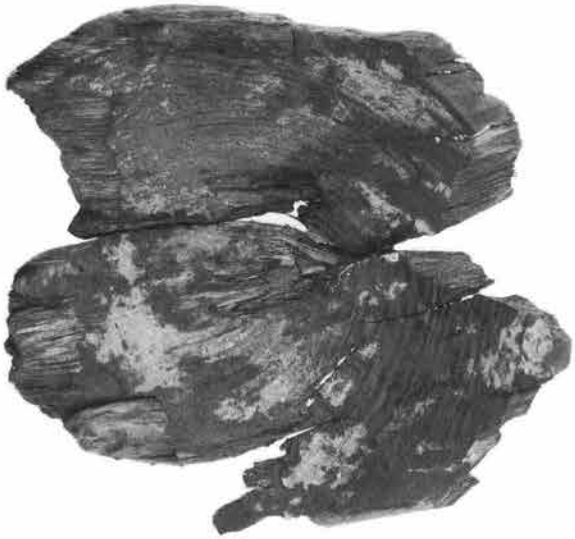

26

渥美系陶器．青・白磁器類



山茶碗類．青磁器類

図版116



漆　塗　木　椀

木　　皿

図版118

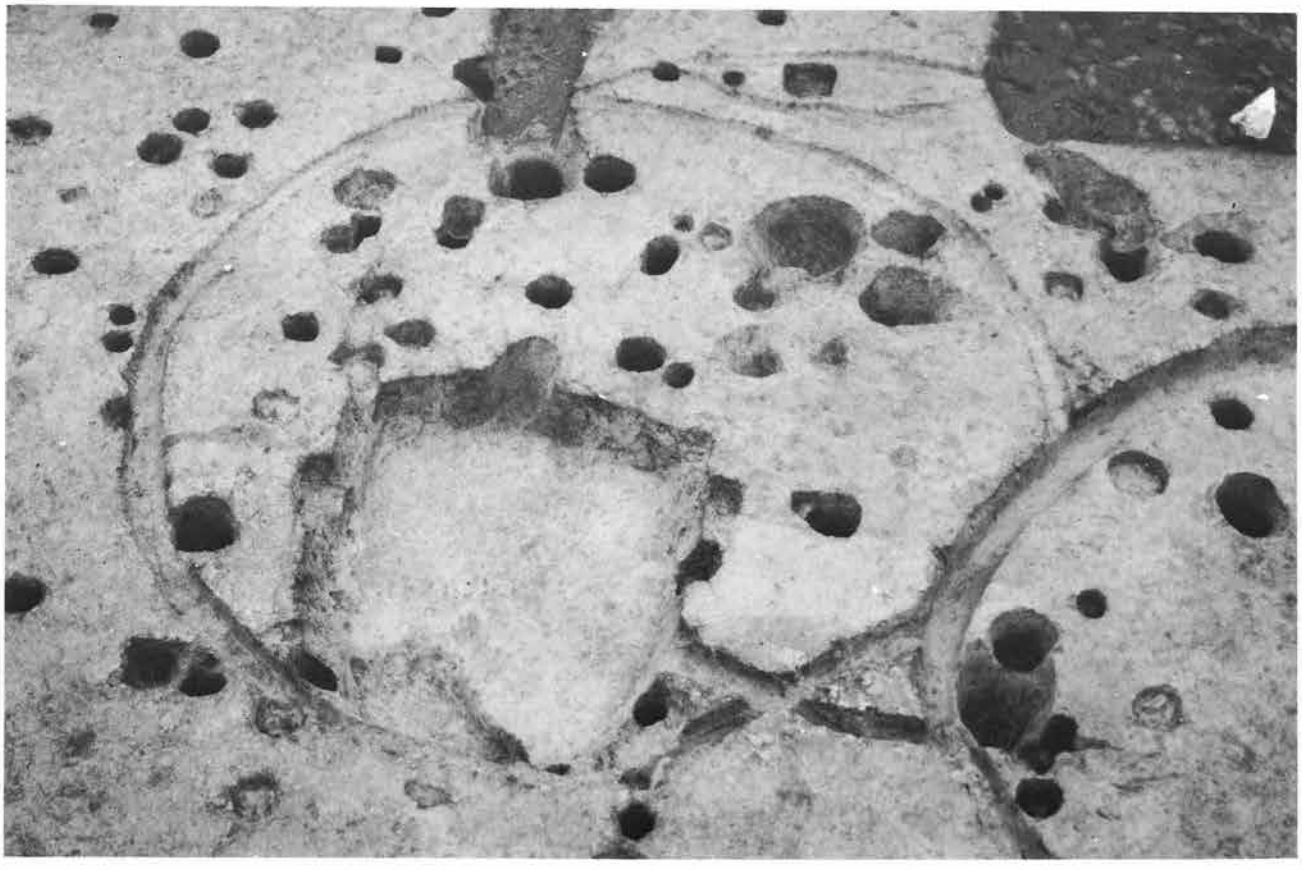
加工のある木片および箸

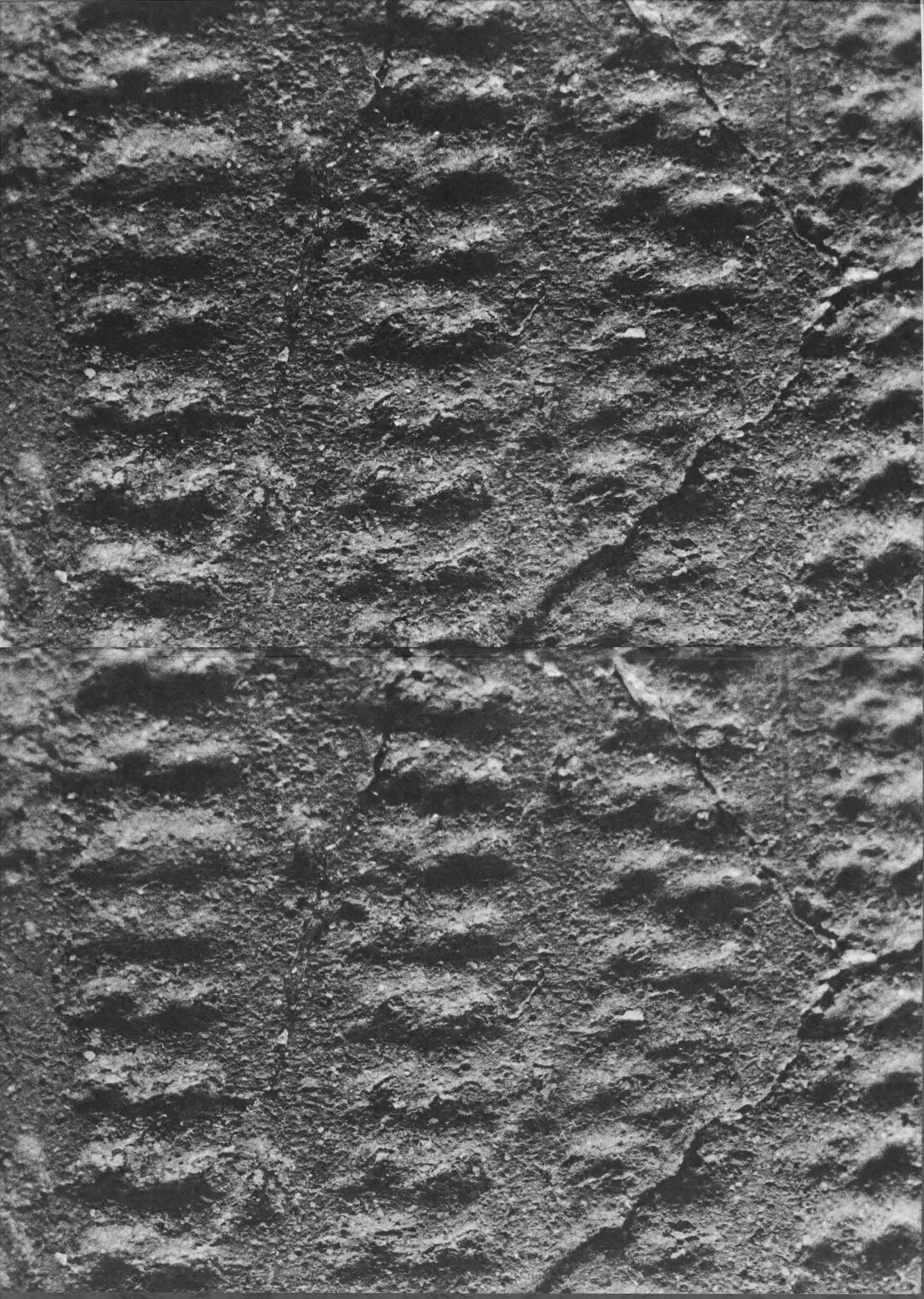
第Ⅱ次調査区精査風景（北東側より）－1

同　　上（東側より）－2

図版120

第1号・第2号・第3号住居跡および平安時代末期方形竪穴住居跡（西上方より）－1



同　　上（西上方より）－2

調査区の遺構全景（東上方より）